THE CENTRAL REVIEW

中央公論

秋季大附録號

第四十一年　第九號　第四百六十四號


東京 銀座

上巻十八版
下巻十版

慶應大學教授　戸川秋骨譯

エマーソン論文集

▼四六版　▼總布製　上巻定價參圓　下巻貳圓五拾錢　郵稅各十二錢

近代に於ける最も幽玄にして最も健全なる思想家はエマーソンである。加之其文辭最も簡潔にして又最も雄勁、句々みな座右の銘とするに足る。譯文亦精確、苟も思想界の事に留意するものは必ず一讀すべき名著である。

新刊●

獨逸ショーペンハウエル著、增富平藏譯

因果論

原名『充足根據の原理の四根について』

四六判總布製　定價貳圓參拾錢　郵稅十二錢

因果！吾人は此の二字を凝視してすら神秘の閃光に打たれる。宇宙の形成、生物の發生を初めとして一切の生滅と變化は因果の法則に依つてのみ可能となり、あらゆる思考と科學と經驗とは此の法則を條件として成立ち、法理も道德も、地上の凡ゆる理法と權能とは此の法則を太宗とし、生死も名利も、幸福も戀愛も、一擧手一投足も因果の概念に包攝せられる。吾人の知識生活と實行生活は此の絶大な理法を究めることに依つて眞實の明るみを得べきであるから、本書の如きは哲學書たる以外に實際的指針としても重要な意義を有するものである。

八版出來

獨逸ショーペンハウエル著　增富平藏譯

處世哲學

▼四六版總布　定價貳圓八拾錢　郵稅十二錢

偉大なる哲學者『人間を知れる者』としての著者が晩年に於ける深遠の觀察と老熟の思想とを擧げて人間處世の妙諦を說き、人生に於ける明暗、幸不幸、安危、得失等の根源を論じて一大秦鏡を懸くるが如く譯文亦明快を極む。

東京本郷西片町　玄黄社　電話小石川一三九番　振替東京七九九五番

諸君！此の中に最も切實な問題がある

◇楊貴妃の華麗とクレオパトラの妖婉
東西大女傑の比較…文學博士 笹川臨風

◇問題の新東京市長の面目躍如
伊澤多喜男傳……草澤學人

◇一髪の間を斯くして脱れた
性的危機を脱した實話（數篇）…

◇財界二巨頭の語る血と涙の物語
余が奮戰苦闘の思出（二篇）……

◇一讀戰慄を覺ゆる社會事實
文化の裏面に咲く闇の花……

◇今夏は斯くして丈夫になられよ
體力增進の秘訣……醫學博士 北 豊吉

◇世界婦道の龜鑑！
賢夫人列傳……新妻伊都子

◇財界通の説く深遠の豫斷
本當の景氣は何時來るか？……

◇倫敦市街を荒し廻る
神出鬼沒の妖盗團（事實奇譚）……

◇生死の境を見事切抜けた
朝吹英二氏……王子製紙社長 藤原銀二郎

◇世に知られざる偉人の眞面目！
山岡鐵舟逸傳……醫學博士 石津寛

◇愛兒五人を試驗臺に載せて
チブスの注射液を完成！！（醫學美談）…

◇劃時代的の幻奇大映畫説
白鳳は羽搏く……吉田百助

◇驚嘆すべき政界裏面の活寫
政界縱横記……獨石馬

（大附錄）世界文豪と其代表作
世界文學の精髓遺憾なく賞玩出來る空前の大附錄大家譯

どの一篇も得難き名篇
讀めば血となり肉となる修養讀本！！
成功處世の燈明台！見よ！
右の外何數十篇滿載！

現代九月號

◇現代に活躍せんとするの士必携の大寶典！

一定價壹圓 郵税三錢一

東京本郷駒込坂下 大日本雄辯會
（振替東京三九三〇）各地書店にあり！

婦人

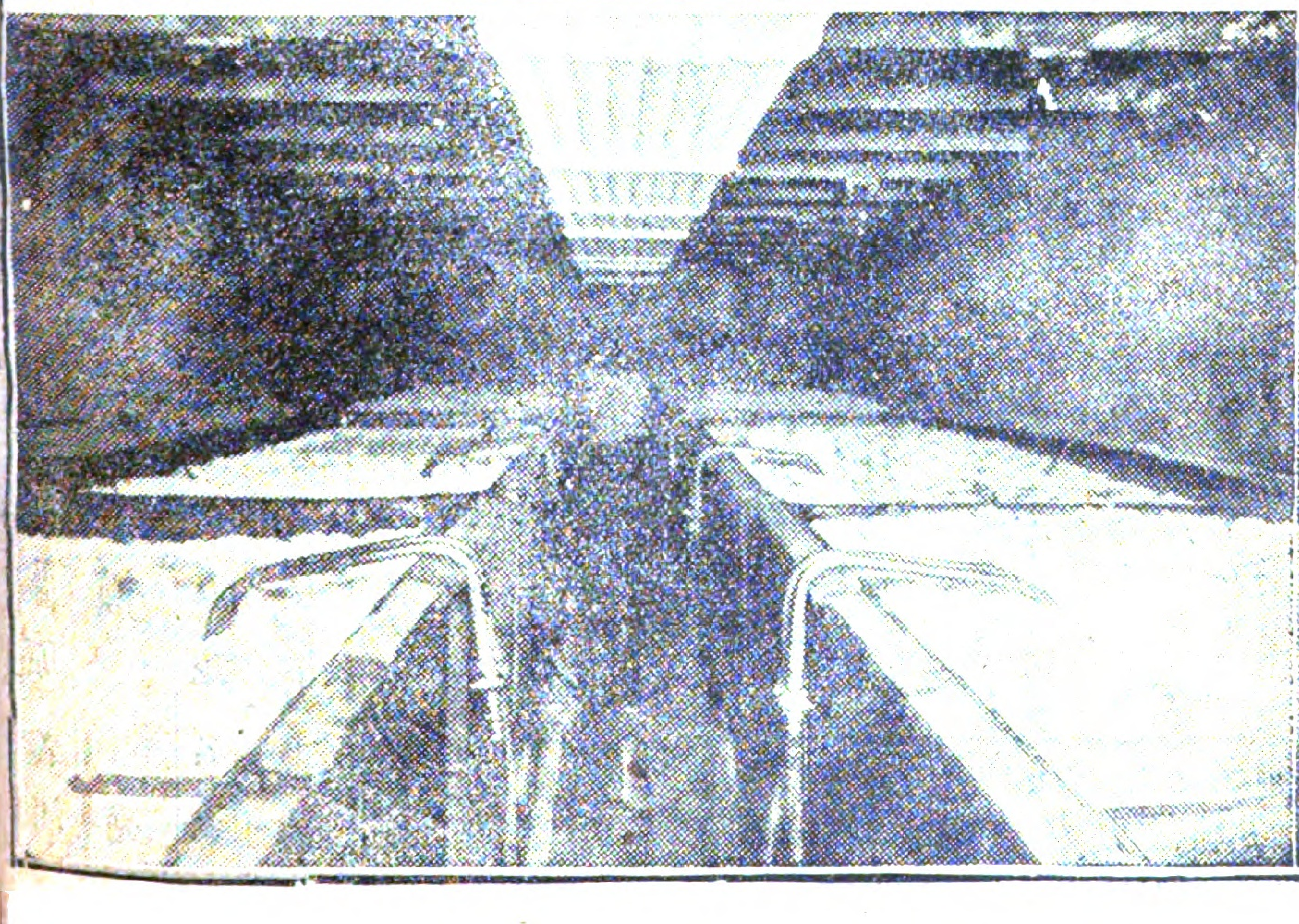
泣き笑ひの一幕

八月號

中央公論

◆定價七十錢◆送料二錢◆

（振替東京三四番）中央公論社



血壓低下劑

動脈硬化症
腦溢血
早老及老衰

治療及豫防內服藥

アニマザ

獨逸オスナブルク臟器治療藥會社製

血壓昂進を伴ふ諸症……………
に對し**アニマザ**の有効なることは近年多數の興味ある臨床報告幷びに批判の結果確定的とされり乃ち異常の血壓が久しく持續する時は

精神的及肉體的老衰…………
現象を呈し腎臟炎、腦溢血、狹心症を誘起し放置する時は生命の危機を招くに至るも**アニマザ**の內服は血壓を低位に保ち頭痛、眩暈、不眠、係哀等の自覺症狀を輕快し

病症の進行を阻止し……………
現時に於ける最も有効なる治療及豫防劑なりと考へらるゝに至れり幼若動物の血管內膜及中膜の成分にして臟田簡便、何等の有害作用を伴ふことなし

血壓昂進症及動脈硬化症に就て
と題する小冊子あり總代理店宛御申越次第送呈す

三〇錠入……二圓四十錢
一〇〇錠入……六圓八十錢

各地藥店に



日本總代理店……
株式會社田邊元三郎商店
東京日本橋區本町

A 53

原敬と天主教　法學博士　吉野作造　一二三


クラブ煉歯磨
衛生的文化生活の必需品
朝と食後のクラブ歯磨
CLUB
歯の爲に一番よい
クラブ歯刷子



水村秋意　　小杉未醒筆

大正十五年

中央公論

九月一日發行

秋季大附録號

第四十一年　第九號

第四百六十四號

發賣禁止問題

近頃出版物に對する發賣禁止の處分が頻々として起る。著者並に出版業者の一團からは既に内務大臣に向て抗議も持ち出されたとやら。一部の人の間には、官民合同の諮問機關を作り、以て官憲の獨擅專行を牽制すべしとの意見さへ見へる。孰れにしても、最近の出版物取締の苛酷は、啻に直接關係者の苦痛たるのみならず、又文化開發の一大障礙として心ある者をして大に憂慮せしめて居るやうだ。

× × × × ×

出版物を取締るがいゝか惡いかの根本論は姑く措く。今日の制度の下に於て多少の取締は已むを得ぬとしよう。さすれば問題はその取締が適當の度に留るや否やにあるわけだが、一般に民間では由來之を不當に苛酷だと主張して來て居る。が、官憲の側は恐らく容易にこの主張を承認はすまい。すると結局水掛論に終るの外はないが、併し冷靜に考へると、今日の役人には、實は此種の問題に關しては十分の理解を有ち得ざる根本的理由があるやうだ。私は單刀直入本問題の爭に入る前に、先づ之等の點を官界の人達に反省して貰ひたいと思ふ。

第一に今日官界に居る人々は、まだ十分に封建的民衆觀から脱け切つて居ない。彼等は概して一般民衆の智能は低いもの、容易に人に誑かされ易いもの、從て惡には訣もなく誘はれ勝のものと觀る。だから裸體畫も見せるな、映畫の此部分は切り取れ、この文字は不穩だなどと、丁度臆病な看護婦が大病人を取扱ふときの樣に、之もわるい彼もいけないと、無暗に墻壁を築きたがる。固より惡意はない、親切な動機から起つたことは萬々認むるが、老婆心も度に過ぐれば却て人を傷くるの結果になる。況んや現代の人心は、潑溂たる生命に躍動し、自己の發達の爲には、自ら惡をすて善に歸るの能力を現はすものなるをや。役人が自分以外の者を馬鹿ときめ、手を取て教へてやらねばならぬものなどと、不遜な考に陶醉して居る間は、所謂苛酷な取締は決して熄むものではない。役人が善意であればある程、却て之れが益々殖える傾向さへあるやうに思ふ。

第二に今日の役人は、固陋頑迷を極むる先輩政治家の影響を蒙ること亦頗る多い。我國政界の實際の組織は、未だ十分に民衆の輿論を中心たらしめて居ない所から、其間種々の變な團體が簇生して實際政界を左右して居る。而して之等の團體の核心を爲す先輩政治家は、また多く自己の修養を念とせざる無學の人たるが故に、

彼等の年と共に頑迷固陋に墮するも亦免れない。否、實際に勢力のある人程却て益々頑固になりまさるのだ。そして斯う云ふ人達の意向が實に政界に重きを爲すのだから堪らない。今日の役人が假りにモ少し開けた頭を有つたとしても、寛大な取締方針に出づることは事實なか〳〵困難なのである。

第三に今日の役人の教養を以てしては、駸々として熄まざる時代の進運と歩調を揃へしめることの殆んど不可能だといふことも考へなければならない。別言すれば、今日の官憲は概して時代の趨向に就ては盲目である。單なる盲目ならまだ可い。切支丹を禁じた徳川時代の眼を以て今日の耶蘇教に臨む程度の無鐵炮を、少くとも私は、思想界に文藝の取締に於て屢々之を見るのである。而して彼等がもと〳〵如何なる教養を受けたかを顧みるとき、我々はまた彼等の斯の如くなるを怪むわけにも行かぬのである。

× × × ×

斯く考へれば、本問題の由て起る所の極めて遠く、一朝一夕に解決せらるべき見込のないことは分らう。と云つて放任しても置けぬから、我々は機會ある毎に如上の警告を連發して、一には輿論を作興し、一には當局の反省を促すに努めなくてはならぬ。其外差當りの一時的應急策としては、また次の二事を特に要求して置きたいと思ふ。

一、民間專門家の意見を徴すべき何等かの機關を作ること。――組織權限の點につき私案もあるが、之は別の機會に述べる。要は之に由て先輩政客の固陋の見以外に、民間有識の内には斯んな意見もあるといふを明示し、以て當局の頭を開導するの用を爲せばいゝ。

二、當局に於て發賣禁止等を爲す場合には必ずその明白なる理由を天下に宣示すること。――前にも述べた如く、出版物の取締は病人の周圍に墻壁を設くるが如くであつてはならぬ。潑剌たる人間の活きた魂は、結局自ら菽麥の識別を誤るものに非るを信じ、寧ろその自由選擇にまかした方がいゝのである。可愛い子には旅をさせろ。寧ろ危險に曝すを厭はざる底の覺悟がなくてはならぬのだ。故によく〳〵惡いと折紙のついたものでない限り、漫りに禁令を發してはいけない。換言すれば、當局は斷じて禁止に勇であつてはならぬ、却て恐る〳〵禁止の處置に出づべきだ。從ていよ〳〵禁止に決定せる場合、その已むを得ざる所以を天下に表明すべきは當然の話である。併し理窟はどうでもいゝ。兎に角、禁止の度毎に明白なる理由の表明を必要とする慣行だけは、遠からず是非成立さしたいものである。

中央公論



第四十一年第九號
秋季大附錄號
第四百六十四號

科學の社會性

社會的進歩の促進力しての科學の本質に關する或る考察

大山郁夫

一　社會的傳統と社會的進歩

社會觀察の基底に傳統と進歩との相關々係を置くことは、模倣と發明の原理を强調するバジオットやタルドの徒を筆頭とする一群のブルジョア社會學者たちの慣用手段であつて、しかもさうした行方は、社會科學の分野の上では、既に

可なり新味の缺けた學說傾向となつて居るものでもある。けれども、私が本文の劈頭に態々それを持ち出したのは、後になつてから判るであらう通りに、私に取つては、別に或るジャスティフィケーションがある積りである。

それは兎に角、傳統と進歩とが、人類社會史の上に於て、常に或る複雑な關係に於て相互に角逐し交流して、それぞれに緩急の度合を異にする樣々の波紋を描いて來たものであり、また現に描きつつあるものだといふことだけは、何人にも拒めない一の顯著な事實である。ただそれを觀察する人々の間に於ては、それぞれに各自の心的傾向の異るに從つて、それらの何れかの一方に特に或る重要意義を持たせて、或ひは傳統を社會生活の通則だとするものもあれば、或ひはまたそれとは反對に、進歩をそれだと見るものもある。だが我々から見れば、これらの二つの見方は、決して兩立のできないものではなく、しかも或る一點に於て完全に融合し得るもの、若しくは融合せしめられ得るものである

といふと、一見恰かも我々が、何人にも一目瞭然と判別し得られる矛盾を平氣で認容しようとしてゐるもののやうにも見えよう。即ち傳統は或る意味に於て、明かに進歩と逆行するものであり、また進歩は或る意味に於て、明かに傳統と反撥するものだからである。それだのに、これらの二個の反對物の間に一の合致點を認めようとすることは、少くとも論理上許すべからざる逆說を冒して居るものだ。――と、先づかういつた論據から、我々に詰め寄せて來るものもあらう。

だが待ちたまへ！――と我々は言ふ。――さういふことは、ただ一片の形式論理の上からだけ言へることにすぎないのである。社會事象は常に形式論理を超越して進展する。それは社會事象の動的性質から來るものである。形式論理は、それの對象の靜的狀態の認識のためには完全にその効用を擧げることが出來るが、しかし、それの動的進展の前には全然無力である。で、社會事象の認識の論理が、常に正しき意味に於ける辯證法的のそれでなければならない。と言

中央公論



第四十一年第九號
秋季大附錄號
第四百六十四號

科學の社會性

社會的進步の促進力しての科學の本質に關する或る考察

大山郁夫

一　社會的傳統と社會的進步

社會觀察の基底に傳統と進步との相關々係を置くことは、模倣と發明の原理を强調するバジオットやタルドの徒を筆頭とする一群のブルジョア社會學者たちの慣用手段であつて、しかもさうした行方は、社會科學の分野の上では、既に

可なり新味の缺けた學說傾向となつて居るものでもある。けれども、私が本文の劈頭に態々それを持ち出したのは、後になつてから判るであらう通りに、私に取つては、別に或るジャスティフィケーションがある積りである。

それは兎に角、傳統と進歩とが、人類社會史の上に於て、常に或る複雜な關係に於て相互に角逐し交流して、それぞれに緩急の度合を異にする樣々の波紋を描いて來たものであり、また現に描きつつあるものだといふことだけは、何人にも拒めない一の顯著な事實である。ただそれを觀察する人々の間に於ては、それぞれに各自の心的傾向の異るに從つて、それらの何れかの一方に特に或る重要意義を持たせて、或ひは傳統を社會生活の通則だとするものもあれば、或ひはまたそれとは反對に、進歩をそれだと見るものもある。だが我々から見れば、これらの二つの見方は、決して兩立のできないものではなく、しかも或る一點に於て完全に融合し得るもの、若しくは融合せしめられ得るものであるといふと、一見恰かも我々が、何人にも一目瞭然と判別し得られる矛盾を平氣で認容しようとしてゐるもののやうにも見えよう。即ち傳統は或る意味に於て、明かに進歩と逆行するものであり、また進歩は或る意味に於て、明かに傳統と反撥するものだからである。それだのに、これらの二個の反對物の間に一の合致點を認めようとすることは、少くとも論理上許すべからざる逆說を冒して居るものだ。——と、先づかういつた論據から、我々に詰め寄せて來るものもあらう。

だが待ちたまへ！——と我々は言ふ。——さういふことは、ただ一片の形式論理の上からだけ言へることにすぎないのである。社會事象は常に形式論理を超越して進展する。それは社會事象の動的性質から來るものである。形式論理は、それの對象の靜的狀態の認識のためには完全にその効用を擧げることが出來るが、しかし、それの動的進展の前には全然無力である。で、社會事象の認識の論理が、常に正しき意味に於ける辯證法的のそれでなければならない、と言

はれるのは、畢竟そこから來てゐるものに外ならないのである。

けれども、我々が問題にしかけてゐた社會生活に於ける傳統と進歩との關係を論ずるためには、必ずしも、さうした社會事象の認識の論理にまで深く切り込んで行く必要はないかも知れない。最も簡單に――そして最も常識的に――言ふと、若し我々が人類社會の或る限られたる一部分の歷史の或る限られたる一時期を任意に擇んで觀察するならば、我我は多くの場合に於て、そこに傳統が社會秩序の維持力としての偉力を揮つてゐるのを、寧ろ驚嘆の眼を以て凝視しない譯には行かない。そしてそれは必ずしも、古代社會とか近代社會とかの別を問はないのである。社會學者たちは屢々、原始時代に溯るに從つて傳統・因襲の社會的支配が益々不可抗的になつて行くのが見らる、といふやうなことを說くが、しかしそれは決して最終的に證明された命題と見做し得られるものではなく、殊に普遍的妥當性を帶びた眞理として主張し得られるものではない。古石器時代から現代に至るまでの何れの社會に於ても、我々は例外なく、至るところで社會秩序の維持力としての傳統の强き作用の現はれを見る。けれども、今假りに我々が少しく我々の立場を替へて、人類社會の或る限られたる部分の或る限られたる時代の歷史の代はりに、一の全體としての人類社會史を對象として、時間的及び空間的に綜合的統一的觀察を試みるものとすると、我々は前とは反對に、そこに不斷の進歩の一線を跡づけることが出來るのである。疑ひもなく、それは一の直線ではなく、犬牙錯落の觀を呈する一の曲線ではある。のみならず、それは、ところどころのカーヴで、前進よりは寧ろ後退の痕跡を示して居るものでさへある。にも拘はらず、それはそれの首尾を繫いで通觀されるときには、明かに進歩の一線以外の何物でもないのである。

かうして見ると、そこには私が前に示唆しておいた傳統と進歩との間に於ける合致性よりは、寧ろそれらの間に於ける相反性が、何よりも先づ眼に附つて來る。もとより、この場合でも、それらの間の聯關性は隱くされてゐない。即ち

傳統の概念は進歩のそれに對比して構成が可能にされるものであり、またその逆も眞である。が、それにも拘らず、傳統は傳統であり、進歩は進歩である。そして、前者は動的なものであるに反して、後者は靜的なものである。少くとも、普通一般に行はれてゐる概念の上では、さうだとされてゐるのである。だが我々は、さうした通俗解釋とは全然別個の立場から、前者を單に靜的なものとしてだけではなく、同時にそれを動的なものとしても把握することができないであらうか？　私から見れば、それは出來ることである。否、それは單に出來ることだといへるばかりでなく、非常に大切なことだともいへるのである。少くとも人類史的立場から見れば、さうすることに依つて始めて、——そしてさうすることに依つてのみ、——傳統に深い意義が生じて來るのである。で、この立場から見れば、進歩こそ、人類の唯一の傳統である！

萬物は流傳する。——エンゲルスは、『自然は辯證法的に發展する』といふ意味深い言葉で、それを表現してゐる。——從つて、またその『自然』の間に於て一の位置を——或る見方からは最高位置を——占めて居る人類社會も、及びその上に浮現する一切の社會事象も、一つとして永遠性のものはなく、固定的存續性のものはない。といふやうなことは、人類社會史上の普遍的經驗事實からの最も不可避的な結論でもあり、またそれであることに依つて、今日の社會科學上の最も平凡な常識となつてゐるものでもある。傳統といふものにしたところで、決してそれの例外をなしてゐるものではない。今若し假りに傳統が固定的存續性を帶びた或る物でなければならないものだとすると、それは未だ曾て一度も人類社會に現はれたことのないものだ、といふことだけで、それの說明が濟む譯である。だが、更らに若し假りに、さうした性質の傳統が曾て人類社會の黎明時代にでも出て來たことのあつたものだとするならば、そしてそれが一たび社會生活全般の上に於ける秩序の維持力としての作用を開始したものだとするならば、人類社會は、縱し久しき以前に於

て既にアメーバの群れの生活狀態を脱して居たにしたところで、少くとも猿の群れの生活狀態からは餘りに遠く懸け離れない生活狀態の上に、永遠に彷徨しなければならないことになつてゐたであらう。

から見て來ると、傳統の存續性といふことも、畢竟それの相對的意味に於てのみ言ひ得られることである。所謂靜的狀態に於て把握される傳統は、進步の或る一段階から或る他の一段階へのギャップを橋渡しして居るに過ぎないものである。所謂傳統主義者たちが幾ら努力して、我々をして絕えず過去を振り返らせようとしても、我々の眼が前に附いて居ると同樣に、我々の足が前に向つてゐる事實を、彼等は終に如何ともすることが出來ないのである。で、若し永遠の傳統といふものがあるとすると、それはそれの動的狀態に於て把握されたものでなければならない。その場合には、傳統はそれの存續性に於てではなく、それの反復性に於て、それの全幅の姿を現はす。そして永遠に、反復されて已まない傳統はといへば、進步そのものを措いて外にないのである。それ故に我々はいふ、進步こそ人類の唯一の傳統だ、と。そしてこの一點で、これらの相反するやうに見える二つの概念は、双方から相互に進み寄つて渾然融合して、唯一無二のものとなるのである。

二　人類社會の特徵としての不斷の『進步』

事實上、不斷の進步は、人類社會を最も決定的に特徵づける一項目である。人類社會は屢々、組織や秩序の點で、蟻や蜂の社會と比較される。だが、この方面では、前者は後者に對して、遙に遜色があるものとされてゐる。いづれにしても組織や秩序は、ひとり人類社會だけに特有な附隨物だと言へないとだけは、たしかな事實である。けれども、蟻や蜂の社會は、如何に驚くべき整頓した組織や秩序を具備してゐるものとしても、そこには永劫に同一生活狀態の無際限

の循環が行はれてゐるばかりである。換言すれば、そこには不斷の進歩の徴象がない。これに反して、人類の社會は、蟻や蜂の社會に比較すると、より多くの散漫と混亂とによつて支配されてこそは居るが、しかしそこには進歩の表示がある。それはただ人類社會に就いてのみ見られる得る現象である。若し我々が玆に一瞬間立ち留まつて、たとへば青石器時代に於ける人類社會の生活狀態を、近代文明下に於ける人類社會のそれの前に置いて、如何に大雜把になりと兩者を對照比較してみると、他の諸點に關しては如何なることが言ひ得られるにもせよ、右の不斷の進歩といふ一點に關しては、我々はただ無條件的にそれを後者に認識する外はないであらう。いかにも、右の二つの目標的時代を繼ぐ非常に永い期間に於て、人類の或る多くの種族のうちには或ひは既に完全に絶滅したものもあり、或ひは既に絶滅への道程を辿りつつあるものもあり、また或る他の多くの種族のうちには、或ひは人口的に、或ひは文化的に、救ひようのない沈滯狀態の上にまでやつて來てゐるものも少からずあることは事實である。だが、それにも拘らず、人類社會を一の全體として觀察するとき、我々は、それは過去に於て不斷の進歩の一路を辿つて來たと同樣に、現在に於ても尙ほその同じ旅程をつづけつつあるものだ、と言ふことが出來るのである。

何故に人類社會の進歩だけが無際限に續いてゐる傍らに、他の諸動物の社會の進歩が一定の限界に至つて全然停止してしまつたのであるか？　この問題は、我々よりも寧ろ生物學者たちが解かなければならない謎である。で、今私はそれに關聯して、生物學的傾向を帶びた社會學者であつたウォードが、何故に猿人に對して他の諸種の動物が腦力競爭に堪へなかつたかの問題に對して、事柄の性質上ただ一つの優秀な種だけが決勝線内に入り得るものだといふ點を指摘してゐるのを想ひ出す。彼によれば、最初にその道程の上に乘り出した一つの種は、他の諸種がその蹤を追ふことを、樣々の方法で阻止するものである。その點を證明するために、彼は文明人と野蠻人との接觸の間から一の類例を求めてゐる。

そして彼はかういふ。――

『土人の諸種族も無干渉のまま放任されて居れば自然的に進歩する傾向のあるものだ、といふルトゥールノーの説明を承認した上で、試みに我々をして、現存の未開諸種族のうちのいづれかでもが、今日の支配的種族と競爭し得られるやうに、さういふ風に進歩しつゝあるものと想像せしめよ。その進歩の行程は甚だ遲々としたものであらうから、斯の如き種族は、これといふ程の眼立つた前進を遂げるまでに至らないうちに、文明の諸中心地から樣々の使命の下に到來してその轄地を占領する人々の群團によつて、確實に壓倒されてしまふであらう。かくてその土着の種族の殲滅もしくは吸收といふ歸結が、彼等がいくらかでも進歩的傾向の存立の徴候として見られるに足るほどのことをしでかし得る前に、不可避的になるであらう。』

(Ward, Lester F., *Pure Sociology*, 1921, p. 197)

かうした説明が、何人にも不充分なものと思はれさうなものであることは、拒めない事實である。にも拘らず、それは進歩といふことを目安として、人類社會と人類以外の如何なる諸動物でもの社會との間に横はる一の根本的なものに見える差異に對して、或る重要なる示唆を與へて居るものと見做し得られる點に於て、我々に向つて或る程度の參考價値のあるものだ、といふことが出來るのである。

三　社會的進歩の本質

だが、私は今玆で、私がこれまでに説明なしに用ひて來た『進歩』といふ言葉の意味に關して、些かでも私の解釋を與へておかなければならない。『進歩』といふ言葉は、それの普通一般の用例に從へば、それ自身のうちに價値の觀念を

包含してゐるものである。それ故に、我々が、社會觀察の場合に於て、價値の觀念を全然排除して、單に時間的及び空間的に社會全體の上に起る動的進展だけを概括的に指示しようとする場合には、我々は普通に『進化』といふ言葉を生物學から移し入れて、『社會進化』といふ言葉に組成して使用する。この造語は非常に便利なものに相違ないから、私自身も適當だと考へられる場合には、それを任意に使用することにしてゐる。けれども、それとは別に、我々が『進歩』といふ言葉を何等の斷りなしに用ふるときには、我々はそれをそれの慣行の意味に於て用ひてゐるのだとされても、有理に不服を言ひ立てることが出來ないのである。それは我々の社會的接觸に於ける『言葉』といふものの一般的機能から來る當然の歸結である。

ところで、若し『進歩』といふ言葉の用例に於て、それが價値の觀念を含んでゐるものだとすると、我々がそれを斷はり附きでなしに用ふるときには、我々は個々の場合に於て、それに附帶する價値判定の標準となるべきものを、明示的にか暗默的にか、我々の意中に具へてゐるものとしなければならぬ。だとすると、我々が『人類社會の進歩』に就いて語るときには、我々は一體何を價値判定の標準としてゐるものであるかゞ、直ちに次の問題となるのである。

この問題の提出は、表面上考へられ勝ちである以上に、或る主要なる意義を帶びてゐるものである。といふのは、近代社會を古代社會と比較するものの皆が皆までが、前者を後者よりも、より多く進歩したものと見るといふことは、期待し得られないことだからである。我々は屢々、『澆季』の世に對する咒ひや、『末世』の淺猿しさに對する憤りを聞く。昔から絶えず繰り返されて來たさうした樣々の嘆聲は、大抵の場合、ただ漫然と黄金時代を過去の夢と見るやうに習慣づけられた人人の厭世的心情の發露であるが、しかし時とすると、もつと具體的な根據から近代社會の進歩を否定しやうとするものもある。たとへば、或る一派の人々は、古代ギリシアの冥想哲學の優越への憧憬から、近代文明の無價値を罵倒する。

と、他の一派の人々は、それと競爭するつもりでもあるかのやうに、中世紀の宗教藝術に對する陶醉の餘りに、近代藝術の商品性を嘲笑する。我々は始終我々の眼前に於て、天平時代の美術とか、平安朝時代の文藝とか、源平時代若しくは元龜天正時代の武道とかが、無數の人々に向つて、各人各樣の現代呪詛の根據を供給してゐるのを見る。彼等はそれぞれに異つた動機から思ひ思ひの發言をして居るのであるが、しかしいづれも現代社會の進歩の否定に於て一致してゐるのであるのである。しかも彼等はそれぞれに、各自の價値判定の標準を提げて各自の對象に臨んでゐるものである。

けれども、ここで我々が注意しなければならないことは、右に揭げたやうな現代社會の進歩の否定の諸例に於て、個個の場合に用ひられて居る價値判定の標準は各種各樣であるが、しかしそれらは皆所謂精神生活の領域に屬するものだといふ點に於て一致して居るといふ一事である。精神生活の領域に屬する價値判定の標準から必然的に現代社會の進歩の否定の結論が產まれて來るものとは限らないが、しかし逆に現代社會の進歩の否定は、最も多くの場合に於て、精神生活の領域に屬する價値判定の標準から出て來て居るものだとは、少くとも先づ第一に我々の經驗事實から歸納して言ふことが出來るのである。が、これに反して、所謂物質生活の領域に屬する價値判定の標準からは、最も多くの場合に於て、現代社會の進歩の肯定——少くとも相對的意味に於ける——が生じて來るのである。我々はこのことをもまた、先づ第一に我々の經驗事實から歸納していふ。尤も、この場合に於てもまた、注意しておかなければならない一つの要點がある。我々が現代社會の進歩について語つて居るときには、我々は意識的にか無意識的にか、全人類社會の物質的生活資料の總量を基準として立言することが、殆んど慣例のやうになつてゐるといふ一事である。この點に於てそれは、精神生活の方面から同じことがなされる場合に比して、實際上著るしき對照を示してゐるのである。

私が右の最後の一點を特に指摘したことには、一つの重要なる意義が含まれてゐるのである。一と口に言ふと、我々

は全人類社會の物質的生活資料の總量に即してでなければ、決して概括的に現代社會の進歩について語ることが出來ないのである。今假りに我々が全人類社會の或る特定の一部分だけを考慮の中に置くときには、そこでの現在の物質的生活資料の總量が、過去の或る時代のそれよりも貧弱なものになつてゐるやうな場合があり得るし、また全人類社會の物質的生活資料の或る部門だけを見るときには、昔あつたものが今はなくなつてゐたり、以前に豐富だつたものが現在では稀少になつてゐたりするやうな場合があり得るのである。そこで、我々がただ全人類社會の物質的生活資料の總量を基點として出發するとき、我々は始めて現代社會の進歩について語ることも出來れば、更らにまた未來社會の、より大なる進歩について語ることも出來る、といふ譯になるのである。しかも、全人類社會の物質的生活資料の總量は、社會的勞働の生産物のうちに含まれるエネルギーへの換算に於て、量的測定の基礎を持つても居るのである。その點は、量的測定の許されない精神生活の方面に屬するものには、明かに缺けてゐるのである。それ故に、全社會の精神的生活資料の總量といふやうなことは、それ自身明かに矛盾である。のみならず、精神的生活資料といふやうな言葉からしてが、或ひはそれ自身無意義なものであるか、若しくはそれは究極に於て物質的生活資料そのものに外ならないものだと言ふことに依つて始めて或る現實的な意義を得て來るものか、だといはなければならないものである。

更らにまた、全人類社會の物質的生活資料の總量の增減は、所謂『社會の物質的諸生産力』の增減といふ原因によつて決定されるものである。古石器時代に於ける社會の物質的諸生産力を、近代社會のそれらと對照比較するものは、誰れにせよ、後者に歸屬する殆んど無限大倍ともいふべき優越を承認しない譯には行くまい。殊に近代社會に於ては、一般の社會的環境の進歩が『活ける勞働者』の勞働力の增進を非常に促進したと同時に、また科學の異常な發達が最も直接的に生産要具や生産技術やの上に眼ざましき進歩を惹き起したりなどした事實、及び他の幾多の類似の諸事實の働

きの綜合的成果として、社會の物質的諸生産力が過去のいづれの時代にも見られなかつた巨大な程度に於て、推進され擴充されて來たことは、別に事々しき説明を俟つまでもなく、一般に周知されてゐる一の歴史的事實である。——が、私は私の論述をここまで運んで來てゐたうちに、ふと氣が附いてみると、私は何時のまにか、本文の主題である『科學の社會性』の問題の一端に觸れてゐた。けれども、私がそれを更らに前方に論じ進めるに先立つて、私は尚ほ他の二三の要點に當つておかなければならない必要を感じる。

四　物質生活の社會的生産と社會的進歩との交渉

上來述べたところを綜合すると、人間社會の進歩といふやうなことは、先づ第一には、ただ物質生活の方面からだけ、疑ひやうのない精確さを以て言ひ得られるものである。次に第二には、それは全人類社會の物質的資料の總量に即してだけ、有理に言ひ得られるものである。

一定の時點に於ける全人類社會の物質的生活資料の總量は、その時點に於てそこでの物質生活の社會的生産の上に現實的に發動する諸生産力の全的能率によつて決定される。いふまでもなく、それらの諸生産力は、人類社會の直接的環境としての自然——そして同時に社會的勞働の對象としての自然——に向つて、現實的に能働的に發動するときに於て、始めて現實的な生産能働力としての効果を現實的に擧げるのである。諸生産力がまださういふ風に發動しないでゐて、一の沈靜狀態に在る間は、それは潜伏的な生産的可能力だとは言へても、まだ現實的な生産的能働力だとは言へない。若しくは、それはまだ『活ける』諸生産力にはなつてゐない。從つて、言葉の擴充された意味に於ける諸生産とは、自然に向つて現實的に發動してゐる瞬間に於て把握された諸生産力——即ち現實的な生産的能働力——若しく

『活ける』諸生産力――を指すものでなければならないのである。

諸生産力の發動は、しかし、人間の生産行動によつて促進され、實現されるものである。もとより、我々が『諸生産力が發動する』といつたやうな言ひ方をするのは、決して單に便宜上の考慮から簡單化された表現といふだけに止まるものではない。それは、諸生産力を、それの發動の方向に從つて、それの動的姿態に於て把握しての感覺的表現である。そしてそれはそれで、立派に獨立的の意味（少くとも語感）を持つものである。けれども、嚴密に――若しくは機械的に――いへば、諸生産力は自ら發動するものではなくて、人間の生産行動を通じて發動せしめられるものである。人間の生産行動は、最も直接的に人間の勞働力及び生産技術を現實的に發動させて、自然から剩餘エネルギーを獲得するために、自然に向つて能働的に、積極的に作用する現實的活動をいふのである。それは、人間と自然との間のエネルギーの遣り取りの――若しくはマルクスの用語に從へば『物質の遣り取り』もしくは『代謝作用』（Stoffwechsel の――深刻な、現實的な戰ひである。それは、人間と自然との最も直接的な接觸面をなすものである。そしてその生産行動の過程に於て、各種の形式で支出されるエネルギーの總量と、その生産行動の終點に於て各種の形式に於て收獲されるエネルギーの總量との差額を代表する物質的生産物が、その生産行動の究極の成果に外ならないものである。で、我々が全人類社會的見地から、そこでの全生産行動を綜合的に把握するとき、我々は、それの究極の成果として考へられる物質的生産物の現存の總量を、その時點に於ける全人類社會の物質的生活資料の總量として想定することが出來るのである。

前に言つた通りに、我々が物質生活の方面から人類社會の進步について語るとき、我々は意識的にか無意識的にか、右の意味に於て把握された全人類社會の物質的生活資料の總量を念頭に置いて語つて居るのである。で、人類社會に於

て、さうした物質的生活資料の總量が增加して來れば來るほど、——他の諸條件が同一である限り、——その社會の上に於ては、生活上の最少限度の必要的欲望以上の各種の欲望が益々多く充足されるやうになり、またそれに伴れて人間の社會的行動の形態が益々複雜に分岐して行くやうにもなり、更らにまたそれに伴れて、生活上の最少限度の必要的欲望の充足のための行動とは段々と隔りの出來て來る各種各樣の行動さへも、終に可能にされるやうにもなつて行くのである。そこへ來て始めて、精神生活の領域に屬する文化現象といふやうなものが、漸く問題に上るやうになつて來るのである。かうした根據からだけでも、我々は、人類社會の精神生活若しくは文化現象の進步をさへも、それの物質的基礎から引離して論ずることが出來ない、といふことが出來るのである。

（本節の或る個處に關しては、私はブハリンの『史的唯物論』——ドイツ譯 Bucharin, N., *Theorie des Historischen Materialismus*, 1922・邦譯は横田千之、富士辰馬の兩氏の共譯で『唯物史觀』の名で出されてゐる——の第五章から特に或る重要な示唆を得たことを附記しておく。）

五　社會的進步の尺度としての精神生活

所謂精神生活の領域内から持ち出して來た價値の標準を以てしては、人類社會の進步に關して、縱し問題が或る特殊の一社會内だけに限られた場合に於てにもせよ、そこに、普遍的妥當性が要求され得る客觀的測定が企て得られないといふことは、何よりも殊に、そこに對象に對する量的測定の方法が缺けてゐるといふことから來てゐるのである。が、たとへさうした量的測定の方法が缺けてゐるにしても、若し對象の評價に際して、一社會内の總員若しくはそれに近き人員によつて合意され得る一定の質的評價の尺度が存在してゐるものとするならば、精神生活の方面から會社の步を

測定することも尚ほ或る程度まで可能だとすべき理由があるとは言へるが、しかし現代社會の全面に亘つて見られる通りに、階級分裂若しくは階級對立が著るしく現實性を帶びて來てゐるところでは、對象の評價に際して一社會内の總員若しくはそれに近き人員に依つて合意され得る一定の質的評價の尺度を期待することは、全然不可能なことである。この點に關しては、我々はまづ第一に、一社會内に實存する精神生活上の質的評價の尺度の上に實存する多種多様の個人差を見る。もとより、さうした個人差は、社會生活の常態の下に於ては、漸次に均一化されて行く傾向があるといふとは事實である。殊に、階級差別に基礎づけられた社會に在つては、常態の下に於ては、さうした個人差の均一化が支配階級に依つて積極的に行はれるといふこともまた、人類史上の經驗事實から歸納して言ひ得られることである。マルクスも、一時代に於ける支配的思想は、支配階級の思想だ、と言つてゐる。けれども、刻々の變動を通則とする社會生活の上に於ては、一定の『常態』が無限に永く續き得るものではない。或る見方からいへば、刻々の變動こそ寧ろ社會生活上の『常態』だとも、有理にいへるのである。そして一社會内の變動がそこでの階級分裂もしくは階級對立を尖鋭化するやうになつて來ると、各階級の階級意識が段々と敏活に働き出して、それぞれに階級的イデオロギーを産み出し、かくてその社會内に行はれる精神生活上の質的評價の尺度を大なる混亂に導くやうになるのである。今日我々は、我々の眼前に於て、藝術、道德、宗教、教育、等、等に關して、幾多の價値の尺度がまんじ巴のやうに入り亂れて角逐しつつ、相互に自己の優越を主張しつつあるのを見る。ブルジョア文藝とかプロレタリア文藝とかが、紛々たる是非の評價の中に投げ入られてゐるやうなことなどは、その最も著るしき一例である。しかもそこには時とすると、この文藝に於ける階級鬪爭の渦卷の上に超越してゐるものと本心から思惟してゐながら、文藝の獨自存立性といつたやうなことをまことしやかに主張することなどに依つて、不知不識の間にそのプティ・ブルジョア式イデオロギーへの追從を丸出しに

する『神聖家族』の人々も見られる。かうした種類の社會事實を列擧してゐては際限がないことであるが、しかしこれ以上それを續ける必要はないであらう。

が、我々が更らに一歩を進めて今少し廣汎な見地の上に立て、たとへばブルジョア文化といつたやうなものの内容に包含され得る文化的諸要素の總體を把握して、それに對する實際上の評價が行はれゐる狀況を觀察しても、我々は矢張り、そこにも對象に對する種々雜多の質的評價の尺度が並び行はれてゐることに氣附くのである。殊に今日の我國に於て見られるやうに、舊時代から持越しの封建思想が政治家や敎育家たちの間に尙ほ活ける力となつて働らいてゐるところでは、支配階級内に於ても、ブルジョア文化に對する無條件的肯定の傾向だけが壓倒的優勢を示して居るものだとはいへないのである。更にまた、我々がすべてのブルジョア文化否定者たちを一團にまとめてそれを觀察の對照としてみても、そこにもまた、ブルジョア文化の否定といふ一點に於て合致してゐても、その否定の動機、及びその否定の態度を異にする多くのサブ・グループが區別されるのである。たとへば、封建的思想の立場からブルジョア文化を否定するものは、縱し時代の潮流の働らきに照應して幾分調節されたものであるにもせよ、本質的には封建文化に外ならない或る文化形態への復歸に向つて極度に努力するのである。彼等の態度は、それ故に、反動的である。從つて彼等から見れば、ブルジョア文化は、決して封建文化以上に、より進步した文化形態ではないのである。ところがそれに反して、無產階級意識の立場からブルジョア文化を否定するものは、ブルジョア文化が封建文化以上に、より進步した文化形態であること――それは恰度封建文化が、奴隷制度に基礎づけられてゐた社會の文化以上に、より進步した文化形態であつた通りに――までを否定し去らうとしてゐるものではない。彼等のブルジョア文化否定の態度は、それ故に、反動的とは正反對に、復古的でなくて革新的であり、保守的でなくて改造的である。彼等がブルジョア文化の否定を叫ぶときには、

彼等の眼前に無産階級の未來社會に値する新文化の想像された形態が彷彿として展開されてゐるのである。

かうした諸問題は、その核心に於て各階級の階級的イデオロギーに不可分的に密着してゐるものであるから、從つて我々がそれらを段々と掘り下げて行つて居ると、我々はその場合でもまた矢張り、結局は、各階級的イデオロギーの基底に横はる社會的諸關係とか、社會的勞働の生産性とかといつたやうな、人類社會の物質生活と引き離して考へられない諸問題に行き當らざるを得なくなるのである。

六　進化と進歩

右の點に關聯して、今一つ別に言つておきたいことがある。物質生活の方面から、人類社會の進化の過程を觀察すると、そこにはたしかに進歩の一線が走つてゐるのが見られる。けれども、進化は必ずしも常に進歩と同意語をなすものではない。即ち進化の或る段階は、或ひは進歩の形で現はれることもあれば、或ひは反對に退歩の形で現はれることもあり、更らに或ひはまた、解體若しくは崩壞の形で現はれることもある。我々が或る特殊の一社會、若しくは全社會の或る一特殊相の進化の過程を跡づけてゐると、進化のそれらの諸形態のすべてが、或ひは複合的に、或ひは個別的に、極めて複雑な關係に於て、出現してゐるのを見る。のみならず、或る特殊の一社會の、若しくは全社會の或る一特殊相の退歩とか、解體若しくは崩壞とかは、全社會の進化の上から見て、却て進歩の一段階を指標してゐるものであることさへ、決して稀れに見られることではない。たとへば、過去に於て起つた封建社會の崩壞や、將來に起ることが豫見される資本社會の崩壞やは、全社會の進化の上からは、明らかに進歩的一飛躍の實現をしるしづけてゐるものと見られることが出來るのである。

我々は既に、進化は必ずしもすべての場合に於て進歩と一致するものでない、といふことを見たが、しかし同時に、我我は、物質生活の方面から全人類社會の進化を觀察すると、そこでは究極に於て進化が進歩に歸着するものだ、といふことをも明かにした。我々が既にたびたび例に取つた石器時代に於ける人類社會の物質的生活資料の總量と、近代文明下に於ける人類社會のそれとの比較は、そのことを我々に誤りなく知らしめる。しかも、さういふ風に進歩を意味する社會進化が現に尚ほ引き續いて刻々進行の道程の上にあるといふこともまた、我々の眼前の社會事象に對する科學的觀察によつて、我々の意識の上に深く印象される。それ故に、量的測定が許される物質生活の方面から社會進化を見るものの眼は、常に前方に向つてゐる。彼等の立場からは、不斷の進歩こそ、過去から現在にかけてと同樣に、現在から將來にかけても、人類社會の唯一の傳統であらねばならないのである。彼等の生活態度は、だから革新的であり、改造的である譯である。

精神生活の方面から社會進化を見るもの結論は、必ずしも進歩の否定に歸着するに限つてゐるものとは、理論上言ひ得られないことであるが、しかし事實上進歩の否定が最も多く彼等の間から出て來てゐるといふことは、少くとも我々の經驗事實からの歸納に基いて言ひ得られることである。このことは精神生活を綜合的に把握して居るものの場合についても、或ひはまた精神生活の或る特殊的方面を特に强調して居るものの場合についても、共に適用し得られるのである。現代への呪詛及び過去への憧憬は、最も多くの場合、彼等の側から擧げられる。彼等の多くは、常に後方を振り返つて見てゐる。彼等の多くは、傳統を固定的に解釋することに依つて、進歩を縛り上げようとする。從つて彼等の多くは、その生活態度に於て反動的若しくは保守的である。即ち彼等の間の反動主義者等は、極力過去への復歸を主張し、彼等の間の保守主義者らは、必死になつて將來への進歩を喰ひ止めやうとする。我々は我々の日常の社會觀察から、反動思想や保守思想が如何に密着的に唯心的社會觀と結び附けられてゐるかを、熟知せしめられてゐる。

けだし量的測定を許さない精神生活を出發點とし歸着點とする唯心的社會觀こそは、あらゆる意味に於ての進步否定論者たちのためには、絕好の逃げ場所であり、隱れ家であらねばならぬ。

七　社會的生產に於ける科學の地位

人類以外の諸動物の社會生活が永劫に同一狀態の無際限の繰り返しであるやうに見えるに反して、人類の社會生活は不斷の進步に依つて特徵づけられてゐる。それ故に我々は、不斷の進步が人類の唯一の傳統だといふことを、何等の矛盾を感ずることなしに言ふことが出來るのである。もとより、我々がそれを言ふときには、我々は意識的にせよ、無意識的にせよ、人類社會に於ける物質生活の社會的生產を基點として語つてゐるといふことは事實である。それはしかし、事柄の性質上から來た當然の歸結である。卽ち我々は、量的測定が可能な物質生活の方面からでなければ、社會的進步について決定的に語ることが出來ないのである。かういふことは無論、我々が精神生活を無視するところから來てゐるものではない。ただ物質生活の基礎を離れた立場から精神生活を論ずるやうなることは、空中の樓閣について思惟するにも似たアヤフヤなことだといふことは、ここでも附け加へておかなければならない。

で、我々が物質生活の社會的生產を基點として我々の考察を進めるときには、我々はそこに不可抗的に、全人類社會的見地からいふ社會進化は、究極に於て社會的進步に歸着する必然性のあるものだ、といふ結論に導かれるのである。それ故に、この立場からいふと、我々が社會進化の動因を見究めたときには、それは同時に、我々が社會的進步の促進力を知り得たといふことに合致することになるのである。

物質生活の社會的生產を基點とした立場——それは我々の當面の問題の論究に際して當然取られなければならな立場

である——から見れば、社會進化の究極の動因は、諸生産力の發達そのものに外ならないのである。それは、我々が唯物史觀の理論から學び得る最も核心的な要點である。で、かういふ風に、社會進化の究極の動因は諸生産力の發達のうちに求められるべきものだとすると、その社會進化の過程によつて到達される人類社會生活の進歩そのものに對する促進的諸要素もまた、同じくそこに存するものとされなければならないのである。

この點へ來て、我々は始めて、社會的進歩の促進力としての科學の作用といふ我々の設題に觸れる準備が出來たことを感じる。それは、社會的生産に於ける諸生産力と、科學の本來の機能との關係を通してである。もしくは今少し精密にいふと、それは、社會的生産に於ける諸生産力の發達への科學の參加といふ一點を通してである。科學は本來社會生活の一産物であるが、しかしそれは同時に、諸生産力の發達へのそれ自身の參加を通して、社會的進歩の促進力として作用することに依つて、社會生活に貢獻する必然的傾向を持つてゐるものである。もし『科學の社會的生産性』といふやうな表現が我々に許されるならば、それはこの點からだと言はなければならないのである。更らにまた、私がこれからも屢々用ひようとする『科學の社會性』といふ言葉は、（一）科學は社會生活の一産物であるといふ事實の外に、（二）右の意味に於ける『科學の社會的生産性』をも包含してゐるものとして理解されるべきものである。

私は右の諸點を、まづ最初に自然科學の方面について述べ、それから漸次に私の論點を社會科學の方面へも延長して行かうと思ふ。

八　社會的産物としての科學

壯年時代のマルクス及びエンゲルスの遺稿である『ドイッチェ・イデオロギー』の中のフォイエルバッハを取り扱つてゐる

部分に於て、極めて示唆に富む次の言葉が見出される。

『フォイエルバッハは、特に自然科學の觀照といふことについて語る。彼は、物理學者や化學者の眼にのみ啓示される秘密を擧げる。けれども、産業や商業がなくて、何處に自然科學があり得ただらうか？　この「純粹」自然科學でさへも、それの目的並びにそれの材料を、産業及び商業を通じて、即ち人間の感覺的行動を通じて、始めて獲得するものである。（*Marx-Engel's Archiv*, Bd. I, p. 243.『我等』の本年五・六月號に、森戸辰男、櫛田民藏の兩氏による右の『フォイエルバッハ論』の全譯が掲載されてある。ここに引用した部分が見出されるところは、ページ附けが間違つてゐて、本來ならば第九十八ページの筈なのが、第九十五ページとなつてゐる。）

科學の歴史は、あらゆる科學上の發見及び發明が、人間生活上の必要若しくは欲求と不可分的に結び附けられてゐるものであることを敎へる。そのことは、科學の原理の場合とそれの應用の場合とを問はないのである。否、それどころでなく、科學上の原理とそれの應用との間には、一般人によつて極めて普通に考へられてゐるやうな截然たる限界がある譯ではないのである。それ故に、科學的洞見力のある科學者たちの或るものは、純粹科學（pure science）と應用科學（applied science）とを別つことは一つの贅澤だ、とさへ言つてゐる。（たとへば、Curtis Winsterton C., *Science and Human Affairs* の中の處々參照。）かういふとは、科學的知識（科學上の知識といふ意味での）そのものの本質を見れば、容易に把握し得られることである。即ち一切の科學的知識は、實證的、客觀的、若しくは現實的知識である。若しくは、ヴェブレンの適切な造語を借りていへば、それは matter-of-fact knowledge（Veblen, Thorstein, *the Place of Science in Modern Civilization*, 1919, p. 2）だといつても、決して不當ではないのである。更らに科學の方法論上の見地からいへば、それは、客觀的もしくは現實的存在の對象に對する現實的觀察から、歸納的推理の方法によつて

得られた實證的知識である。科學的知識は、それの獲得のために用ひられた方法によつて、他の種類の知識から區別せられるとになつてゐるが、その科學的知識の獲得のために用ひられる方法中に於ては、觀察、比較、實驗、分析、計量、歸納等の作用が、フランシス・ベーコン以來、最も根本的な構成要素だとされて來てゐる。が、そのうちでも殊に、對象の現實的觀察といふことが、その出發點とも中心點ともされてゐるものである。客觀的にもしくは現實的に存在する對象に對する現實的觀察を離れて、科學的知識はあり得ない。さうした對象に對するさうした觀察を離れて、單なる抽象的思辨から得られた知識は、他の何物であつても、しかもそれが如何に『深遠』な、『幽玄』な知識であつても、――多くの場合に於て『深遠』は『晦澁』に、『幽玄』は『空漠』に通ずるものだが、――それは斷じて科學的知識ではない。上掲の『ドイッチェ・イデオロギー』の著者たちが、『現實生活に於て、思辨が止まるところ、そこに現實的な、實證的な科學が即ち人類の實踐的活動の、實踐的發展諸過程の、記載が始まる』（*Marx-Engels Archiv*, Bd. I, p. 240）と言つてゐるのは、決して無意味な言葉の陳列ではないのである。

さうだ！　科學的知識に到達するための觀察そのものからしてが、既に著るしく現實的な行動である。それは、現實的對照に向つての現實的觀察である。しかも我々は、さうした現實的觀察が、究極に於ては、本質的に一の生產上の行動であるといふことを注意しなければならない。單純な好奇心とか嘆美的態度とかなどからは、科學的觀察が結果して來ない。たとへば蒼空を充たす無數の星の群れの美觀に見入つて天を仰いでゐても、それなりでは、そこから天文學上の知識が生じて來ない。古代のエジプト、アッシリア、バビロニアなどといつたやうな東方諸國に於て、天體の觀測――それはその時代に、若しくはその時代の生產方法に、相應した科學的觀察だつたのである――が早くから發達してゐたのは、先づ第一には產業上の必要からであつた。殊に最も多くの場合に於て、產業的交通の上に於て特に痛切に感じ

られた方位決定の必要が、人々をしてそのための目標探求の眼を、諸々の導きの星の上に向けしめたのであつた。古代支那に於ける指南車の發明の如きも、矢張り同じ動機から出たものだといはれてゐる。また遠き太古の時代から諸天體の觀測に依つて年中の季節を知ることを學んでゐたエジプト人は、殊に狼星の觀測に依つて、彼等の現實的物質生活に重大關係のあつたナイル河の年々の氾濫期の到來をトしてゐた。しかもその同じナイル河の氾濫はまた、その減水後に於ける河畔の土地の區劃再整理の必要を産み、更らにその區劃再整理の必要は、そこに三角法や幾何學を早くから發達せしめてゐた。古代フォニケ人の間に航海術に關する科學的知識が、また古代バビロニア人の間に天文學や數學が、それぞれに異常の發達の跡を示してゐたやうなことも、彼等の間に行はれてゐた産業及び商業を度外視しては理解し得られないことである。同樣のことは、醫術とか、土木とか、採鑛冶金とか、染織とか云つたやうな各種各樣の技術を始めとして、物質的生活の社會的生産に交渉する『人間の感覺的行動』のあらゆる方面について言ひ得られるのである。若し我々がこのことに關して、より多くの實例による證明を求めようと欲するならば、我々は科學の歴史がそれらを、文字通りに無限に供給してゐることを見出すであらう。科學の歴史に對する興味の一般化的傾向の徴候は、世界的に見て、近來に及んで益々著るしく眼に立つ來だして、しかもその方面に關する優ぐれた研究や著書も段々と多く出るやうになつて來た。これは我々の立場から見て、非常に歡迎すべき趨勢だとすべきものである。科學の歴史に對する正しき理解は、科學的知識が、個々の天才的科學者たちに向つて天惠的に啓示された秘密ではなくて、物質生活の社會的生産に於ける人間の現實的、客觀的、感覺的行動から結果するものであり、またこの意味に於て、それが徹頭徹尾社會生活の一産物であることを、誤りなく我々に傳へるであらう。この點に關しては殊に、『この「純粹」自然科學でさへも、それの目的丼にそれの材料を、産業及び商業を通じて、即ち人間の感覺的行動を通じて、始めて獲得するものである』

といふ、上に引用した言葉のうちに、非常に重要なる示唆が含まれてあることは、誰れにも氣がつくであらう。

もとより、我々は決して、個々の天才的科學者たちの、科學的理論の構成とか、科學の體系化とかの仕事に於ける貢獻の偉大性を無視しようとするものではない。けれども、科學的實踐がなくて、どこに科學的理論の構成の端緒があり得よう！　また科學的知識の集積がなくて、どこに科學の體系化の材料があり得よう！

しかも事實上に於て、人々は大抵の場合、科學が社會生活の一産物であることを忘れて、それを個々の天才的科學者たちの單獨的貢獻に歸せしめようとする傾向を示す。『自然科學の觀照』の假説を前提として、『物理學者や化學者の眼にのみ啓示される秘密を擧げ』たフォイエルバッハの迷ん込んで行つた道も、實にそこにあつたのである。けれども、かうした誤謬も、科學の歴史に對する正しき理解を以つてするときは、容易に訂正されることが出來るのである。たとへば、ニユートンの名で代表されてゐる天文學上及び物理學上の業績にしても、決してニユートンの單獨の力で完成されたものでないのである。即ち實際上に於ては、彼は彼の時代に於て及び彼以前の無限に永い時代に於て、無限に多數の共働者を持つたのである。まづ第一に彼と同時代に生きてゐた多數の學者たち――たとへばハレーイとか、フークとか、レンとか、ヒユイジヤンとか、ビユリオーとかの如き――を直接の共働者として持つた。更らにまた、彼の時代から上代へ溯れば、ケプラーとか、ガリレオとか、コペルニクースとかの如き天文學上の歴史的天才が算へられるが、これらの先驅者もしくは開拓者たちの業績から來た影響を無視しては、我々はニユートンの偉大さの完成について考へることが出來ないのである。中にもコペルニクースは、近代天文學の鼻祖としての地位を、科學の歴史の上に占めてゐる。が、彼の太陽系學説にしても、太古以來に於ける理論的及び實踐的天文學の發達なしには樹立し得られなかつたのである。彼は殊に、當時の古學復興の機運にめぐまれて、ギリシア及びアラビヤの天文學上の文獻を渉獵することが出來たのである。

のみならず、當時非常な速度を以て發達しつつあつた商業及び交通は、これらの方面に於ける實際家たちの活動を通じて、地球及びその他の諸天體に關する實踐的知識を著るしく豐富にした。殊にヴェニス及びジェノアの商人らの東方諸國との取引の膨脹が、陸路及び海路の交通區域を急激に擴大して以來、古來久しく疑問にされてゐた地球圓形説などの如き問題までが、隊商や遠洋航海者たちの經驗から段々と、次第に多くの確證を得るやうになつた。そして最後に、コロンバスのアメリカ發見、ヴァスコ・デ・ガマの喜望峰回航、及びマジエランの彼の名を帶びしめられたアメリカ南端の海峽の回航の如き冒險的事業の成功は、地球圓形説に向つて最終的證明を與へた。コペルニクースは、實にかうした時代の雰圍氣の中に於て、彼の學説を樹立したのである。

かういふ諸例によつても、我々は、科學が社會生活の一産物であることを拒むのは、科學の歴史を無視するものであるといふことを、無條件的に確説することが出來るのである。

（ここで本稿を打切らなければならなくなつたのは、筆者が大に遺憾とするところである。だが、この頃の——殊に本稿執筆中の——異常な炎暑は、筆者の精根を極度に疲らし、その能率を極度に減退して、遂に締切の日までに全部を脱稿することを出來なくしてしまつたのである。この點について私は、編輯者及び讀者諸君の諒解を得たいのである。私はこれからさき。社會的生活に於ける諸生産力と科學との關係を叙述し、この點に關する自然科學の機能から進んで、更らに社會科學のそれへまで入らうと企圖してゐたのである。初め私は、本稿を起す動機を、最近に於ける所謂社會科學壓迫問題から得たのであるから、特に本文の主題に對して社會科學が持つ關係を念入りに説かうと考へてゐたのだが、それがとう／＼出來ずにしまつた。私は機を見て、本稿の續篇を書かうと考へて居る。しかし、私は、私がこれからさき取扱はうと考へてゐた諸問題を、（「我等」）七月號に出た私の論文（「科學の自己促進性と支配階級の抑壓態度」）のうちに、極ざつとであるが若干は論述しておいたことを告げて、苦熱と戰ひながら喘ぎ喘ぎ書いた本稿を結ぶ——筆者。）

農業と社會主義

法學博士　河田嗣郎

一　社會主義者と農業問題

農業に對する社會主義者の態度は一八六四年に倫敦に設けられたる國際勞働協會 The International Labourers' Association に依て先づ大體決定せられたのだが、一八六七年ローザンヌに開かれたる國際協議會に於ては、土地所有制に關して甚しき意見の相違が暴露せられ、土地公有制を主張する者と小農地所有制を支持する者との間に論爭を見て、然かも決せず、翌年ブラッセルの國際協議會に於て漸く之に關する決議を見、公有制が是認せられることゝなつた。即ち當時マルキシストを主とする多數社會主義者の觀る所を以てすれば、土地は其の本來の性質からしても、又社會一般の公平なる利用といふ點からしても、更には又人が人として之に對して有する自然的なる權利から見ても、個人が之を獨占的に所有すべきものではなく、社會が一般の爲に之を所有し、社會的なる共有制とするのが本當だと考へられたのである。そして其所有制に關しては、農地と農地以外の土地とに就いて根本的に區別あるものにあらず、特に農地は其の生産上に於ける價値を十分に發揮せしむる爲めにも社會的公有制を可とすると見られたのである。

斯かる考が古くより社會主義者の間に存することは、絮說を要せざる所で、英國に在つては夙に十八世紀の後半以來、トーマス・スペンス Thomas Spence (1750-1814) やウイリアム・オージルヴイ William Ogilvie (1736—1814) やトーマス・ペーン Thomas Paine (1737—1809) やゼームス・ブロンテール・オーブライエン James Bronterre O'Brien やラッセル・ウオッレース Russell Wallace などに依て土地制度改革の議論が盛に行はれ、獨逸に於ても少し後れて同樣の論議を見、又之に伴ふ實際運動をも見たのである。そしてそれは一般社會主義運動とは別に一の獨立なる土地制度改革運動としても行はれたが、又社會主義運動中に於ても農業改革運動として段々に力點

を入れることゝなつたのである。(拙著『農業社會主義と組合社會主義』參照)

併し今此等の人々の個人的な意見や、あまり有力ならざる運動やについては論ずることなく、十九世紀の後半に至り、社會主義者の有力なる實際運動が行はれ、特に國際的なるその協議會も開かれるに至つてからの事情について見れば、上に示すが如く、ブラッセルの協議會に於ては、やはり古くからの考の如く、社會的公有制が是認せられ、個人的なる小農地所有制は、社會的にも經濟的にも宜しからざるもので、時代後れのものとして、到底現時の進歩せる狀態に適合するを得るものにあらずとせられたのである。

所が尙ほ農業に在つては、土地の所有といふこと以外に、農業々務の經營に關する方面があつて、その組織方法等のことは、前者に劣らず重要の意義を有する。然らばこの方面に關する社會主義者の態度はといふに、前掲十八世紀の後半に於ける英國の土地制度改革論者の中には、やはり此の方面に關しても、意見と改革案とを示した者があつたが、問題は其儘にのこり、終に十九世紀後半の社會運動に於ける協議會の問題として、此點が又大いなる論爭の種となつた。即ち既にローザンヌの國際協議會に於て自作農的なる小農經營の維持されざるべからざる主張を見たのだが、問題はブラッセル協議會に持越され、然かも此の協議會に於ては之を議決しないで、各分會の自由調査に一任することになつたのである。

然るにジュネーヴの分會は卒先して經營方面に於ても小規模なる農家的經營を排し、農業勞働者の共同組合に依て大規模に共同に經營を行ふべきものと爲し、その目的に向つて進むべき實行方策をも示す所があつた。されば社會主義者の多數の意見としては、農業に對しては土地を社會の公有に移すと同時に、經營は之を勞働者の自治組合に依て行はしめんとするのであつて、つまり一般に經濟改造意見として提示されて居る所の資本の公有と生產事業の公營又は勞働者の自治的經營を、農業についても實行せんとするものであつて、農業に於ては其の業務を國家や地方自治體の如きが直營として行ふわけには行かないから、之を勞働者の自治組合に依て共同的に經營せしめて、其の意味に於て之に公共的事業たる性質を附與せんとする次第である。

此の意見は、其後尙ほ獨乙の社會民主的勞働黨の第二回スツットガルト協議會 Stuttgarter Kongress 1870に於ても、アウグスト・ベーベルの報告に基いて採用せられ、農地を公有とすると同時に、之を農業生產組合に貸付けて、耕作經營せしむべ

きものとせられた。一八七五年のゴータ協議會 Gothaer Kongress も之と同樣の見地を持した。其後獨逸に在つては、社會主義鎭壓令が布かれ嚴重なる取締が行はれたものだから、社會民主黨の會合も行はれなかつたが鎭壓令の撤廢以後エルフルト・プログラム Erfurter Programm は再び又マルクス主義を以て社會民主黨の教義と認め、總べて小規模なる經營事業は、市民的社會の經濟的なる發達の必然の結果として亡滅に歸するものと考へ、小農業も此の一般的運命を辿るものなることが暗默の裡に考へられて居た。そして小農民は亡び行く中等階級に屬するものなることが示されたのである。(Ed David, Socialismus und Landwirtschaft, Berlin 1903, S. 21-38參照)

二　農業に對する意見の動搖と確立

一八九四年に開かれたるフランクフルトに於ける獨逸社會民主黨大會に當つては、初めて從來同黨が採つて居た所の對農業策が果して正當なものであるか否かに關する批評的な疑問が發せられた。又同會に於ては、公式に或種の大農業經營が當時破滅に瀕して居る事實が發表せられた。

斯かる事情であつた爲に、此の大會の決議は一種の折衷的なものであつた。即ち從來通り農業に於ても小經營は沒落する運命を避け得ざるものとは考へられたのであるが、それにも拘らず、自作農民の保護されざるべからざることが主張された。即ち自作農民の保護は彼等を納稅者として、負債者として、又農業者として種々の不利益から庇護し、彼等に合理的にして共同組合的なる經營を爲すを得せしむべく、國家の補助に依て之を容易ならしめねばならぬとせられたからである。

次に又農業勞働者の保護は、彼等に結社權を與へ、彼等を工業勞動者と同じ地位に上ぼし、又適當なる社會政策的立法即ち勞働時間、勞働條件、勞働監督等に關する法規の制定に依て、無制限なる搾取から保護しなければならぬとせられたのである。

斯くて此の大會に於ては、外見上よりすれば、小農民保護の道が、社會民主黨に依つても開かれたかのやうに見へる所があつた次第だが、併し眞實は決してさうでなかつた。此の大會の決議は實は十分なる討論を經て練り上げたのではなかつたのである。されば大會が終るや終らぬに、早くも意見の分裂を見、紙上に大いなる論爭の花を咲かせた。その論爭に於てはフリードリッヒ・エンゲルス Friedrich Engels は最も努力する所があつたが、彼は依然として從來の非小農主義的な社會主義見地を支持し、小經營と小農地所有とは、到底救ふことの出來ぬ沒落の運命に陷つて居るものとした。彼は謂ふやう、農民に對し

て、資本主義の繼續する限りは彼等の境遇の到底救濟し難きものなることを、繰返し繰返し明かにしてやるのは、吾々の義務である。即ち彼等は、其の小所有地を其儘に維持することは絕對に不可能であつて、資本主義的なる大生產は、彼等の時代後れとなつた小經營を蹂躙して進み行くこと、恰も汽車が一輪牛車を乘越して行くが如くなることとの、確實にして動かすべからざる所なる旨を明かにしてやることは、吾黨の任務である。吾々が之を爲せば、吾々は經濟的進化の意味に於て行動するわけであつて、然かも其事は小農民等をして、吾々の言葉に對して耳目を開かしめることになるのであると。

所が面白いことにはエンゲルスは斯くの如く絕對的に救濟の見込なしとするものに對して、尙ほ救濟の獻策をして居るのである。彼は小農民をば、資本主と大地主との掠奪と搾取とから、出來得る限り保護することが必要だと主張して居る。彼の謂ふ所によれば、彼等が無產者階級に眞實に沒落してしまうのを、吾々の力で遮り止めてやることの出來る自作農民の數が多ければ多いほど、そして夫等を自作農民たる儘に於て吾々の味方に加へることの出來る者の數が多ければ多いほど、愈々以て急速に又容易に、社會的革新は成就され得べきものであると。

斯くの如くにしてエンゲルスの所說は自作農民保護論者に對しても、同時に又反對論者に對しても、共に其の相背馳せる主張の根據を提供するものだと謂はれるやうになつたのである。

次にカール・カウツキー Karl Kautsky は、エルフルト綱領に於て同樣に又小農民の沒落の到底避くべからざる所なるを力說し、小農民と社會黨との關係に就いては、明白に次のやうに述べて居る。自作農民にして自らを無產者と意識せず、純粹なる自作農民と感ずる人々は、齊に我黨の味方として取入れることの出來ない人々たるばかりでなく、實は吾々の恐るべき敵方に屬する人々である。然るにたゞ玆に彼等の階級の持續に對して危懼を抱き、彼等の生存の根抵たる小經營形式は到底沒落の免れ難き運命に在るものだといふ信念に耳を閉さゞる部類の小農民があつて、彼等のみは實に社會主義の敎理を理解するとの出來る境地に居る者であると。(David a.a.O.s. 39-46に據る)

三　社會主義的見地とマルクスの學說

右に示すやうな對農業意見は、カウツキーあたりまで下つて來れば、殆んど傳統的になつてしまつたものと謂つてよいのであつて、獨逸に於ても早く既にウイルヘルム・リープクネヒト Wilhelm Liebknecht の如きも此の見地から農業改革意見を立てゝ居る。即ち土地は社會の公有と爲し、農業は公共的な大規

模經營として行はるべきものと考へたのである。(Zur Grund und Bodenfrage 1874)

然し近世社會主義に學問上の理論を與へ、社會主義運動に對して理論的根據を据ゑた者はカール・マルクス Karl Marx である所から、農業に關する問題に關しても、小自作農主義が現時の時勢に於て到底支持すべからざる沒落の運命に在り、私的土地所有制と私的農業個別經營とが、共に經濟進步の今後の步調と合致して進み得べきものにあらざるを理論的に斷定し、私的小農制に對して理論的なる死刑の宣告を與へたる者もマルクスである。嚢に(一八六七年)ブラッセルに於ける國際協議會の際、プルードン派の佛蘭西社會主義者の支持せる小農主義說を駁擊し、其の討論に於て花々しき働をしたエッカリウス J. G. Eccarius の著書 Eines Arbeiters Widerlegung der nationalökonomischen Lehren seit J. S. Mill の如きも、前以てマルクスの校閱を經たものだといはれる。上に示すウイルヘルム・リーブクネヒトも亦理論方面に於てはマルクスを師としたのである。

然し農業に關するマルクスの意見はあまり多くは世に公にされて居ない。資本論に於ては第一卷第十三章の終りに『大產業と農業』Grosse Industrie und Agrikultur といふ項があるのと、(第一版にはこんな項は別に設けられて居ない。たゞ第十三章の末尾に其意味の內容を有する部分が書續けてあるに過ぎぬ。Das Kapital Erster Band, Buch I. Hamburg 1867, S. 493-496)第三卷の二の地代論の終りに『分益農業と自作農的小所有制』Die Matairie wirtschaft und das bäuerliche Parzellen-Eigentum の項があつて、(Das Kapital, Dritter Band, Zweiter Theil, Hamburg1894, S. 336-348)其所で所見が明かにされて居るに過ぎない。即ち其所に表はれたる所によれば、從來のたゞ習慣に固着したる不合理的な經營は亡びて、科學の合理的なる技術上の應用に依る經營が行はれることゝならざるを得ざる旨が明かにせられてある。又分益農業が亡滅に歸せざるべからざることゝ其の理由とが明らかにせられてある。マルクスの見る所では、過小農地は本來の性質上よりして勞働の社會的生產力の發展と、勞働の社會的形式と、資本の社會的集中と、大規模なる牧畜と科學の累進的施用とを排斥するものであつて、高利貸と租稅とは、到る處で小所有を困窮に陷れ、資本が地價として支出せらるる結果、經營の爲めの資本をば奪ひ去ることゝなり、生產手段の無限なる小分は生產者の同様なる細分と並び進み、人間の勞働力は夥しく消費せられ、生產條件の累進的なる惡化と、生產手段の騰貴とは、實に小所有地制の必然的なる法則を爲す次第である。

此等の邊に關するマルクスの所論を今少しく詳かに說いてみやうならば、先づ資本論第一卷前掲の部分に表はれたる所は、大體次のやうである。即ちマルクスは、農業に在つても、大經營は小經營に對して優越の地位を占むるものと見るのであつて、大經營が自作農民を打亡ぼすことにより舊社會の根底たるものを覆へし、之に代ふるに賃傭勞働者を以てする限りに於て、そは最も革命的なる働を爲すものとした。そして大經營が行はるれば、たゞ習慣に捕はれたる不合理的なる經營の代りに、科學をば意識的に技術の方法に適へる道筋に於て利用する經營が行はれることになる。農業と製造工業との未だ發達せざる幼稚なる狀態に在つては、それ等は元來家庭生活と結合して居るものであるが、資本主義的なる生產方法が行はるゝに至れば、其の結合が終に完全に斷ち切られるに至る。そして同時に新たなるより高き狀態の造り出さるゝ物質的前提條件が造り成される。都會生活は人口をば段々に大いなる中心に集合せしむるに至り、都市人口の優越は段々に增加し、それと共に資本主義的生產は一方に於ては社會の歷史的なる運動能力を蓄積し、他方に於ては人間と土地との間に存する代謝作用を攪亂することになる。詳言すれば、人間が食料として又衣料として用ゐたる土地の要素を再び土地に返却して土地の永續的なる生產力を維持する永久的なる自然條件が攪亂されることになる。斯くて又資本主義的生產は都市勞働者の肉體的健康と、田舍勞働者の精神生活とを破壞してしまふのである。されば農業に在つても製造工業に在つても、資本主義的なる變遷は生產者の殉教史として現はれ勞働手段は勞働者の抑壓手段、搾取手段及び成貧手段として表はれ、勞働過程の社會的なる構成は、勞働者の個人的なる獨立生存の有機的なる壓倒として發現するのである。そして工業勞働者は集合して居るが故にその抵抗力を增加するに反して、農業勞働者は廣い地面の上に散在するが故に其の抵抗力は破壞されてしまう。要するに資本主義的なる農業の進步は、啻に勞働者を掠奪する技術に於ける進步たるばかりでなく、同時に土地を掠奪する技術に於ける進步たるに外ならぬ。即ち一定の期間に對する土地生產力の增加に於ける進步は、同時に其生產力の永續的なる泉源の破滅に於ける進步たるに外ならぬ。かるが故に資本主義的なる生產は社會的なる生產過程の技術と構成とを發展せしむれども、同時にそれは總べての富の泉源たる土地と勞働とを埋葬してしまふものである。(K. Marx. Das Kapital, I.Bd, S.433——436)

右に示すが如くなるが故にマルクスは、資本主義的生產が行はれるに至れば、農業に在つても大經營が小規模なる自作農業

の如きを打亡ぼすやうになり、段々に生産の社會的なる構成が行はれて、技術と經營とは進歩し、科學の應用に依る合理的なる經營が舊式な習慣に固着する生産に打勝つて、取つて代るやうになるものと見て居るのである。そしてその變遷の過程は農業に在つても手工的な製造工業に在つても大體同一樣であつて、資本主義的生産は勞働者の搾取と壓迫とを伴ひ、其の結果一時は大いに生産の隆盛を來すけれども、結局勞働及勞働手段を搾取して、其の永久的なる生産能力を減殺し、富の源泉を枯渇せしむることゝならざるを得ないと說いて居る次第である。斯くマルクスが農業に於けると工業に於けると大體同一樣なる資本主義的變遷が行はれ、資本的なる大經營が勞働本位的な小經營を亡ぼすに至ると見ることに對しては、後に修正派の人々其他の人々の反對が大いに起つて來た所であるが、兎も角マルクスは斯くの如く說いて居るのである。

四　私有制を基礎とする農業に對するマルクスの意見

マルクスは尙ほ分益農業と過小農地所有制とについて稍々詳しき意見を述べて居る。その見る所によれば、獨立なる自家經營を行ふ農民の自由なる小農地所有の形式は、普通の正常的形式として、一方にはクラシック時代に於ける社會の經濟的基礎を爲して居たと同時に、他方には近代諸民族の間に在つては、封建的な土地所有制の崩解の中から發はれ出でたる諸形態中の一形態として見出されるものである。そして此の自家經營的な農民の自由所有制は、明かに之れ小規模經營に對する土地所有制の最も普通なる形式である。詳言すれば、一の生産方法——その方法の中に在つては、土地の占有といふことが、勞働者が自己の勞働の生産物に對する所有の條件を爲し、又其の方法の中に在つては、農民が個別の勞働者として彼れの家族と共に常に其の生活必要品を生産しなければならぬ所の一の生産方法に對する、最も普通の土地所有形式である。

然るに小農地所有制は、その本來の性質からして、勞働の社會的生産力の發展と、勞働の社會的形式と、資本の社會的集中と、大規模なる牧畜と、科學の進歩的なる應用とを排斥除外するものである。之が爲に高利貸と租税とは到る所に於て小農地所有を困窮に陷れてしまふ。そして土地の代價として資本が固定せられる結果、土地の耕作使用の爲に用ゐらるべき資本は減ぜられる。又生産手段は無限に細分せられ、生産者自身も亦孤立無援のものとなつてしまふ。人間の力の著しき濫用と、生産條件の累進的なる劣惡化と生産手段の騰貴とは、小農地所有制

の必然的なる法則である。

小農業が土地の自由所有と結び付いて居る場合に生ずる多くの特殊なる弊害の一は、農民が土地の購入の爲に資本を固定するといふことから生ずる。此の場合には、土地は單なる商品として浮動的な性質を獲得するが爲に、土地所有の移轉は頻繁に行はれ、所有者の代の變はる毎に、相續の行はれる毎に、農民の立場から之を見れば、土地はその都度資本の投下を伴ひ、新所有者に依て買取られることになる。(註＝獨逸のやうな一子不分割相續制のある所では、長子は他の相續人の相續分を代價を拂つて買取らねばならぬのである。)斯くて玆では土地代金は、個人々々について見たる誤れる生産費中に在つて最も重要なる要素を形造ることになる。即ち個々の生産者に對するその生産物の生産費價格中の最も重要なる要素を形造ることになる。

尙又小農地所有制に在つては、土地はそれ自身價値を有するものなるが故に、資本として生産物の生産價格中に入り込むべきものなること、恰も機械や原料の如くならざるべからずとの謬想の伴ひ易いものである。併し乍ら土地の購入の爲に拂はれる貨幣資本の支出は、決して農業的なる資本の投下ではない。さうではなくて、それは却つて小農民がその生産業務内に於て用ゐ得べき資本を減少せしむるものである。即ち小農民等の用ゐる生産手段の範圍を縮小せしめ、從て再生産の經濟的基礎を狹小ならしめるものである。

果して然らば土地代金として支出の行はれることは、農業生産といふ立場から見れば、之に緣なき要素が這入るわけであつて、然かも場合に依てはその無緣の要素の爲めに餘りに多くの代金が拂はれたる結果、肝腎の農業生産の方に用ゐる資金がなくなつて、生産をして不可能に陷らしめることさへある。そして土地の代金が斯くの如き大なる役目を働き、土地の賣買即ち商品としての土地の移轉が盛に行はれるといふは、資本主義的なる生産方法の發展に伴ひ生ずる結果たるに外ならぬが、同時に又かゝる發展は、資本主義的なる生産方法がまだ限られた範圍內に於てしか發達しないで、それに固有なるあらゆる性能が表はれて居ない所に於てのみ可能のことである。即ち農業はまだ十分に資本主義的生産方法を用ゐるに至らないで、既に亡びてしまつた所の社會形態から取殘されて傳はつて居る所の生産方法を用ゐて居るから、右の如き變遷に遭遇するわけである。されば農業方面に在つては、生産者がその生産物の貨幣價格に從屬しなければならぬ資本主義生産方法の欠點が、資本主義的生産方法の未だ十分に發達しないことに伴ふ不利益と相携へて發はれる次第である。農民は彼れの生産物が商品として生産せら

れ得る諸々の條件を備へないで居て、然かも商人となり工業者となつたやうなわけである。

されば要するに小農業耕作に在つては、土地所有制の形式たり結果たる所の土地代金なるものが、生産自體の制限となつてしまうわけであるが、大農業と資本主義的生産方法を用ゐる所の大所有地制とに在つても亦所有制は同樣に生産の制限として表はれるのである。即ち大農地に在つては所有制が小作人の生産的なる資本投下を制限するからである。斯るが故に、この兩所有制の何れに於ても、土地をば共同的なる永久の所有として合理的に使用することの代りに、又人類生存の欠くべからざる條件として取扱ふ代りに、土地生産力の掠奪と濫用とが行はれる次第である。此事は小所有制に在つては生産手段の欠乏と勞働の社會的なる生産力を使用するに就いての學問の欠乏とから發生し、大所有制に在つては、小作人と地主とが共に出來得る限り早く富まんとして、生産手段たる土地を掠奪的に使用することから發生する。そして兩者共に市場價格への從屬といふ事實から弊害は生れるのである。

小所有地制に對するあらゆる批評は、結局は農業の制限を爲し妨礙を爲す所の私有制度の批評となつてしまうのである。大所有地に對する反對批評も亦同樣である。併し土地に對する總べての私有制が、農業的なる生産と、土地の合理的なる取扱、維持及び改良とに對して生ぜしめる制限と妨礙とは、此所彼所に於て種々相異なれる形に於て發展するものである。そして此の弊害の特殊なる諸形式に關する論爭は、とかくその根本原因を忘れる嫌がある。小所有地制は人口の大部分が田舍の住民なることを前提とし、又社會的な勞働ではなくて個別的な孤立勞働が主として行はれることを前提とする。從て又富とその再生産の發展と又その精神的並びに物質的條件とは、斯かる狀態の下に於ては全く除外されて居り、從て又一の合理的なる耕作經營の諸條件も除外されて居ることを前提とするものである。然るに他方大所有地制も亦農業人口をば常にその最少限にまで減少せしむるものであり、その代りに常に增加して然かも大都市に集中する工業人口をば生ぜしめ、之が爲めに、社會的にしてそして生存の自然法則に依て規定されたる物質の代謝關係に治癒すべからざる龜裂を生ぜしめ、その結果土地の生産力は消耗せられ、此の消耗は商的取引に依て自己の國土の領域を越へて行はれることになる。

されば小所有地制が半ば社會の埒外に生存する未開人の階級を構成し、その階級は幼稚なる社會形態のあらゆる粗野をば、文明國のあらゆる苦難とあらゆる悲慘と結合せしむるもの

であるならば、大所有地制は、勞働力をばその最後の避難場、そこに勞働力の自然的に發生する精力が逃避し、そこに勞働力が國家生存力の更新に對する準備基金として自らを蓄積する所の最後の避難場たる土地自身の中に埋葬してしまふのである。大工業と工業的に經營せられる大農業とは、共同に働くものである。前者は主として勞働力をば、從て人間の自然的能力をば、枯渇せしむるものであるのに、後者は寧ろ土地の自然力をば直接に破壞するものたる點に於て、兩者は本來相違せるものであらうとも、後には段々事情の進むにつれて握手することになる。即ち工業的體系は農村に於て更に勞働者をも活力無きものたらしめ、そして工業と商業とは農業に對して土地の生産力枯渇に要する手段をば調達することになるのである。（以上K. Marx.a. a. O. III,Bd. II,Teil,s.338-348）

すべて斯く如く見ることに依つてマルクスは、土地の私有[illegible]を一般的に否認し、それあるが爲めに小農地所有に於ても大農地所有に於ても、共に土地の力と人間の力とは掠奪せられ枯渇せしめられることゝなるとした。マルクスは小所有地制に據る自作的小農業を到底自存の力なきものとし、種々その弱點を指摘して居るが、それは小經營なるが故に力なきと同時に、土地私有制の基礎の上に立つが故に、到底存續の望なきものと見たのである。即ち私有制の下に在つては、土地は商品として賣買せられ、其爲に代金を要し、然かもその代金は農業には無關係であつて之に依て大事な經營資本が殺がれ、農業經營を不十分ならしめ、終には不可能に陥らしむると見たのである。そして又大農業地所有制に在つても、私有制の下に於ては地主は土地をばたゞ單純に所得源と見て出來得る限り多くの所得をそれから搾り取ることばかり考へ、同時に小作人は地主に地代を支拂つてやはり農業には無關係のことの爲にお金の支出をするが故に、農業經營にはとかく資金が足らず、然かも出來得る限り多くの利得を土地から絞り出さうとする結果、土地は掠奪的に使用せられざるを得ざると共に、小作人自身も段々に細つて疲び行く外はない。そこに大工業と商業とが發達して、人口と富力とは都會に集中せられ、土地は愈々商品扱せられ、又狼の如き高利貸と虎の如き租税とは來つて農村の小農民を喰ひ盡してしまはんとする。されば私有制の下に於ては、大農地制も小農地制も共に立行き得べきにあらず、資本主義の發展と共にその衰亡は免るべからざる運命なりと見るのである。

斯くてマルクスは農業と農民とを救ふ道は、土地私有制を廢し、その所有と農業生産とを共に社會化する外に存せずと爲す次第で、その所信は說明の裡より生れ、又說明はその所信に依

て基礎づけられて居るとも見るを得べき次第である。

五　マルクス派と修正派との意見の相違

農業に關するマルクスの議論は、前に一言したやうに其後多くの社會主義者の信條となり、獨乙社會民主黨の對農業方針はやはり之を根據として建てられた。社會主義者の間から表はれたる學問的な著述の如きも之に據るものが少くなかつた。

マルクス以後に表はれたる獨乙社會主義者の農業に關する著作の中では、カウツキーの『農業問題』K. Kautsuky, Agrarfrage は著名なものであるが、其の見地は依然としてエッカリウス流の考を脫せず、小農經營は大農經營に對して到底競爭者たる地位に立つを得るものにあらず、たゞ人間以上の勞働と、人間らしからざる消費不足との下に於てのみ小農民は僅かに其地位を保ち得るに過ぎずとして居る。

然るに同じ社會主義者の中に在つてもベルンシタイン及び其派の人々は、修正派といはるゝが如く、マルクス學說に對して修正的な見地を持するものであつて、農業に關する問題についても、マルクス及其祖述者の所論は、事實上の狀態と一致せざる所あるを指摘し、修正を要するものだと述べた。Ed. Bernstein, Die Voraussetzungen des Socialismus und die Aufgaben der Socialdemokratie, Stuttgart 即ちベルンシタインは社會主義的理論と社會主義的實行策との全般に渉つて評論を試み、農業問題に就いても亦行きかけの序ではあるが論評を爲して居る。氏は獨乙と和蘭と白耳義と佛蘭西と英吉利との農業統計を比較して、次の結論に達したのである。曰く西歐洲諸國に在つては、北米合衆國の東部諸州も同樣だが、農業方面では、到る所小經營と中經營とが增加して、大農業と巨大農業との減少して居ることは、爭ふべからざる所であると。

ヘルツ(Friedrich Hertz, Die Agrarischen Fragen im Verhältniss zum Socialismus, Wien 1899)も亦同樣の結論に達したのであつて、彼はカウツキーの所論に對して諸國の統計材料を示して駁擊を試み、農業の實狀に於ては、負債の結果土地所有が兼併せらるるといふ議論も、農民的自作經營が漸次に困窮に陷るといふ主張も、小規模經營形式の自立不能といふドグマも共に皆成立ち得ざるものだと述べた。

然るに獨乙の社會主義者の中に在つて、最も詳細に農業に關する問題を論究し、マルクス主義者の所論の必ずしも農業の本質と實狀とに一致せざることを指摘論證せるは、ダヴィッドである。(Ed. David, Socialismus und Landwirtschaft, I. Ed. Ine

Betriebsfrage Berlin 1903) 氏は先づマルクス學徒が自作的小農業に對して下したる判決の事實に當らざるを指摘し、十九世紀の最後の四半世紀に於て、歐洲の農民階級は衰へるよりも却つて榮へたるを示した。たゞ一八七〇年代の後半から米國農産物の競爭が盛んに行はれるやうになつてからは歐洲の農業は大打擊を受け、マルクス學派の所論は、實地に證據立てられたやうであつたが、然し事實に於ては其折沒落の運命に會したのは大地主であつて小農民は却つて土地を得て之を增加したことが、一八九五年の獨乙の統計に於ても表はれて居るとした。即ち同年六月十四日に行はれたる獨乙職業統計上の調査の結果によれば、一八八二年より一八八九年に至る期間に於て二ヘクタール以上二〇ヘクタール以下の小經營農地は增加して居るに反して、二〇ヘクタール以上一〇〇〇ヘクタール以下の大農地は減少を示して居る。詳言すれば自作農家が自家の勞働を以て之を經營し其一家の生活を支ふるに足る適當の地面よりも、大ならず小ならざる地面を經營する小農業は、增加して居るのである。そして二乃至二〇ヘクタールの地面を經營する者の經營に屬する農地の增加は、全獨乙內に於て六五九、二五九を下らなかつたのである。(a. a. O. s. 35-37; 49ff)

ダヴイツドの見る所によれば、農業上に於ける大經營と小經營との競爭能力に關する問題は、實際に於ては、あらゆる狀況に妥當するやうな型式で以て解決の出來る問題ではない。元來農業なるものは一の集合的な概念である。種々相違せる生産部門をば種々に結合して其概念は出來上るのみならず、農業は十分集約的に經營することも出來れば、又粗放的に經營することも出來る。又その自然的なる狀況や市場の狀況等も著しく相違して居る。問題はこの相違性あるが爲に、如何なる時期如何なる場合如何なる狀態にも妥當するやうな解答は到底出來得べきものでない。然し一定の土地面積から益々多大の價値を產出せしめなければならぬ必要の存するといふ事實は、出來得るだけ高き集約程度を要求するのであつて、自ら小規模經營に移り行く勢を醸成するものである。されば農民的自作經營といふ小形は、進化の流に逆航するものではなく、其流に沿ふて進むものと謂はねばならぬ。

之を實狀について見れば、マルクス主義の理論家は、自作農民に對して社會主義なるものを自己流の方法に於て明瞭なるものたらしめんとし、又味ひあるものたらしめんと試みた間に、農民の方では、社會主義なるものに對して、農民獨特の方法で通路を用意すべく熱心に其仕事を行つた感がある。農民等は、社會主義者から彼等に推奬したる農業生産共同組合を、組織しや

うとはしなかつた。けれども彼等は決して其孤立的狀態をば固執しやうとはしないで、其の狀態から遁れ出で、同樣の境涯に在る者同士で以て購買組合や信用組合や加工販賣組合やの如きを組織した。此の產業組合運動は非常な熱心を以て行はれ、其地盤は今日では最早確乎不動のものとなり、其生命は拔くべからざる勢を贏ち得たのである。そして其働に依つて自作的農民經濟の內部的合理化は現實に行はれて居る。

此の產業組合運動は、謂はゞ生產者組合 Produzentengenossenschaften であつて、社會主義者の推奬する生產組合 Produktivgenossenschaften とは立場と任務とを異にして居る。そしてそれは共同的經濟と個別的經濟との折衷に依て地盤を造り爲せるものであつて　その折衷といふことの上に此の組織の生命と經濟史的な意義とは橫はつて居るのである。從て此の生產者組合は、社會主義的な構造物ではなく、それとは大いに隔つたものであるが、同時に又農業的な生產組合は、資本主義への過渡的組織でもない。それは實に時代後れな孤立した小經營をば合理的なる又組織的なる小經營に改造する組織である。此の改造運動の中に農業に於ける社會化運動の力强き第一步は見出され得る次第である。そして其の農民的な生產者組合の發展こそは、實に小農民と工業勞働者との間の直接なる經濟的結合を齎すべき前提條件であつて、之と併行すべき他の前提條件は、勞働者の消費者としての組合的な結合即ち消費組合運動であらねばならぬ。然かるにこの後者も亦力强く發達の武步を進めつゝあるは現に目擊し得られる所である。斯くて玆に一の幅廣き橋は架せられるのであつて、其橋を通じてこそ都市と農村とに於ける働く人々の大衆が堅き結合に達すべく互に握手し得べきものである。

ダヴイッドは右の如く觀ることに依て、農業をば社會主義的に大規模なる共同經營に移すことの不適當なるを考へ、農業社會化の道は產業組合主義に依て開かれる外なしと觀たのである。

六　ダヴィッドの觀たる農業生產と工業生產との相違

右に示す諸見解の中に在つて、ダヴイッドの所說は詳細なる講究に依て論證されたるものであるだけ、特に考慮に値する多くの點を包含して居る。仍て今少しく詳かに、何故農業は多くの社會主義者の信ずるが如く大經營に適せざるか、特に何故マルクス學說が其儘農業に適用され得べからざるかに就いて、ダヴイッドの說いて居る所を窺つてみやう。

ダヴイッドの觀る所を以てすれば、農業生產過程と工業生產

過程との間には、根本的なる相違があつて、其爲に種々の重要なる結果が表はれる。氏は大體次のやうに說いて居るのである。

マルクス主義的進化學說に在つては、生産手段は頗る重要なる意義を有するものである。即ちマルクス派の唯物史觀に從へば、物質的生活の生産方法が、社會的なる政治的なる又精神的なる生活過程一般を條件づけるものである。換言すれば、物質的生活の進化があらゆる歷史の根抵である。然るに物財の生産は何であり又如何に行はれるかは、社會が生産を行ふについて用ゆることの出來る其の手段に依賴するものである。エンゲルスの言葉によれば、人々が如何にして生活の資料を獲、又如何にして其爲に必要なる財生産をするかは、彼等の道具及び彼等の原料の性能に依賴して定まる。一言にしていへば、人々が財の生産に當つて用ゐ得る手段たるもの即ち生産手段に依賴して定まる。(Kautsuky, Das Erfurter Programm, S. 3)

されば人若し歷史的發展は物質的生産の範圍内に於ける變化に依て定まると見るならば、そして此變化をば生産手段の變化に歸せしむるならば、そして更に又生産手段の中に在つては特に勞働手段(即ち勞働用具)が決定的な任務を負ふと見るならば、人は理論的に物財生産の技術に對して、經濟的研究上卓越の地位を與へなければならぬ。從てマルクスは財を生産する勞働過程の技術的手段と方法とに關して立入つた研究を試みたのである。そして其結果として、大規模なる經營は、それのみが能く十分に近代的な機械を使用することの出來る地位に在るお蔭で以て、小經營をば經濟的に壓倒してしまうものだといふ認識に達した。即ち大經營は小規模な手工的經營よりも、勞働力の比較的少き費を以て、從て比較的少き生産費を以て生産を行ふを得るものである。後者は最早之に對して競爭することが出來ないのであつて、沒落する外はない。此事は又後者が原料品の購入や生産物の販賣に就いて、大經營の之を享受する商用的便を欠くことの爲に益々然らざるを得ない。

そこでかういふ結論が出て來る。市民的社會の經濟的發達は、自然法則的必然性を以て小經營の沒落を齎らすといふこと之である。そして之が實にエルフルト綱領の如きに於ても其の理論的根抵を爲して居るのである。

然るに更に攷ふれば、財の生産の技術的手段と方法との間斷なき進步こそは、實に資本主義的なる生産方法をば、社會主義的なる生産方法に進化せしむる結果を齎さゞるを得ざるものである。段々巨大なものとなつて來る所の生産力は、生産の社會的なる組織を、益々大規模のものたらしむることの條件となる

のであるが、私的なる所有關係とは到底兩立することの出來ない撞着に陷つてしまうのである。然らば兩者の調和を圖るべき道は無きやといふに、生產形式と所有形式との間に於ける調和は、たゞ事物の社會主義的なる律序に依てのみ取返すことが出來る。斯るが故に社會主義的なる社會を必然的のものたらしむる所のものは、實に之れ大規模經營である。(Kautsuky, Erf. prog, s.150)

そこでダヴイツドは考へるに、以上の推論と結論とは、大體に於て工業生產方面には妥當する。然らば農業生產に就いてはどうであるか。之を知る爲には少しく農業生產に於ける特殊事情を考察してみなければならぬと。そして次の如くに議論を進めて居る。

勞働過程一般に關する理論的分析に於ても、又勞働過程が共同作業や分業や機械使用やの影響に依て被る所の形式變化に關する立入つた說明に於ても、マルクスは農業生產をば其特殊的性質に照し合せて研究することをしなかつた。彼は農業と工業とに於ける生產過程は、其の本質に於て同一樣のものなりとする默認的な豫定から出發して居る。從て工業生產に關する所謂的な研究に依て發見されたる進化の傾向として小工業が大工業に進み行く傾向は、やはり又農業にも存するものだとしたのである。彼の『大產業と農業』といふ資本論中の一節に表はれたる根本見地も亦經營技術的な進步は、農業に在つても工業に於けると同樣に行はるゝものなりと見ることであつた。即ち農業に於ても亦工業同樣に小經營は近代的なる機械其他資本的なる經營設備と補助手段との利用に依り、大經營の爲に壓倒されるものだといふことであつた。

マルクスに從へば、生產物の調達の爲には、次の三者が必要である。(一)勞働即ち人間の合目的的なる行動、(二)勞働の客體即ちそれから生產物の造り上げられる所の自然材料、(三)勞働材料即ちそれに依て勞働客體が勞働者の爲に加工せられる所のもの之である。そしてマルクスに從へば、勞働手段なる者は、勞働者が自己と勞働客體との中間に挿入する所の物又は物の結合體であつて、それは勞働者に對して、勞働の客體の上に行はれる彼れの働の傳導者として奉仕するものである。勞働者は他の物體に對する權力手段として、彼れの目的とする所に叶ひたる働を表はさしめん爲に、物體の器械的なる物理的なる又化學的なる性能をば利用するものである。(Das Kapital, I Bd. S. 141)そして農業に在つては、マルクスは土地をば生產手段として取扱つて居るのである。

所が農業の實狀について見れば、土地は決して勞働客體の上

に行はれる所の人間の働の傳導者としての用をなすのみのものでは無い。農業では勞働の客體としては種子を考へなければならぬが、土地は種子に對して行はれる勞働を傳導するだけの任を盡すに止まらない。土地は唇に媒介者として働くに止らずして、實に培養者としての働を爲すものである。土地は植物的なる生產物を作り出す爲に、自己の成分の一部分を提供する。されば土地は之に與へられる肥料と合體して、農作に在つては實に原料でもあり同時に又生產手段でもある。

次にマルクスの生產手段に關する定義は、農業用家畜についても不滿足なものである。農業用家畜が、生產過程に於て積極的に之れに與かり加はる限りに於ては、マルクスはやはりそれを生產手段の中に入れて居るのだが、(a. a. O. S. 142) 家畜が生產手段として働く所の役目は上に揭げた生產手段の定義とは一致しない。農家が挽馬を用ゐ、牛乳を搾り又は犢を産ます爲に牝牛を飼ひ、卵を獲る爲に鷄を養ふ場合には、決してたゞ單に此等の物をして動力手段として他の事物の上に合目的的に働かしめん爲に、此等の物の器械的なる物理的なる又化學的なる性能を利用せんとするものではない。さうでは無くて此等の物については、其の生理的なる性能が主眼とせらるるのである。即ちマルクスの定義は狹きに過ぐるのであつて、農業は實にそれ固有なる生活上の利害と獨立の機能とを有する所のものを生產手段として使用するのである。

次に種子は又原料として、それに固有なる性能を備へて居る。生產物を作り出すに就いて、それが爲す所の働は、マルクスが原料なるものゝ本性として考へて居る所のもの即ち生產物に對してその成素を與へるといふことを以て盡きない。種子の中に含有されたる養分成素は、種子が發芽して以後他から攝取する所のものに比較すれば、甚だ僅少である。種子をして種子たらしむる所のものは、その種子中に藏されたる生命的要素に存する。此事が實に種子をして農業に在つて特殊の意義を有せしめるのであつて、その意義はマルクスが原料に關して與へて居る所のものと一致しない。此の特殊性は種子が農業生產に於て爲す所の任務をば、種子が製粉業や釀造業の如き工業に於て爲す所の任務に比較して見れば、よく之を知ることが出來る。此等の工業に在つては種子は穀物として正にマルクスの謂ふ所の意味に於ける原料である。即ち器械的なる物理的なる又は化學的なる働に依て形狀を變化し、以て新たなる生產物となる所の死せる物質に過ぎない。然るに農業に在つては、それは生ける有機物として働き、そが爲し遂げる變化は生理的なる進化である。

斯くの如く見ることに依てダヴイッドは、農業生産に於けると工業生産に於けるとの根本的なる相違を見ることが出來るとした。農業に在つては生けるものゝ進化について取扱ひ、工業に於ては死せるものゝ加工を取扱ふ。一方に在つては生産の調達について必要なる要素の分化と結合とをば、たゞ無意識的に表はれて來る所の力の利用に依て行ふに反して、他方に在つては、その分離的なる又は結合的なる機能は、生ける自然物たるものゝ獨立なる働に委かす外はない。自然物のその生ける働が、直接なる生産者であつて、人間の勞働は第二次的の地位に立つて居る。後者は前者の法則に依賴し之に適合する外はない。換言すれば工業生産は器械的生産なるに反して、農業生産は有機的生産である。

然し農業に在つても器械的な方面がある。即ち收獲に伴ふ仕事は大抵之に屬し、收獲物の刈取、運搬、穗扱、脫殼の如きはそれであるが、此等の仕事は最早純粹な農業的な作業ではなく、半ば工業的な仕事たる性質を備へて居る。更に製粉、製麵、釀造、屠殺、製酪等のことになれば、却つて純粹に工業的な性質の作業であつて、之を農業といふは性質に合致せず、工業的副業といふが適當である。此等については勿論マルクスの說明が當つて居る。

普通の農業に在つては、其勞働はたゞ植物的な又は動物的な生命の發展に對して、準備的に行はれたり、又は之に隨伴して行はれたりするに過ぎないといふ事情からして、此の生産部門に對する種々の意義深き特殊性が生じて來る。そして其等の特殊性は價格の構成に關しても表はれ、又生産物構成に關しても表はれる。就中價格の構成に關する特殊性は、所有制の問題並びに地代理論と結びつけて研究すべきであるが、農業生産物の構成に關する特殊性について研究するには、先づ以て工業生産と農業生産との間に存する本質的な相違からして直接に表はれて來る所の種々の相違點について觀察する必要がある。

以上の如く論ずることに依てダヴイッドは(David, a. a. O. S. 63—66)工業生産の實狀より觀て造られたる理論を、直ちに農業生産に當篏めることの不當なるを思ひ、工業方面に在つては、大規模經營が小經營に對して優勢なりとも、農業方面に在つては、其の業務本來の性質からして同樣に又大經營が常に優勢なりと見ることは出來ぬと考へんとしたのである。

七　器械的工業生産と有機的農業生産との相違

尙ほダヴイッドは器械的なる生産と有機的なる生産との間に

存する相違點について論じ、農業生產の特性を明かにして、マルクス學說の共働農業に妥當し難き理由を述べて居る。玆に更に又その所說を引用することは、農業と社會主義との關係を共理論方面について討究するには、避くべからざる所である。

ダヴイツドの觀る所に從へば、有機的なる生產に任ずる勞働は、器械的なる製造を行ふ所の工業に於けるが如き間斷なき繼續をば全然欠いで居る。例へば上衣や机や機械やの生產は、何時からでも始めることが出來、又一度開始せらるれば、勞働は引續いて行はれ得る。即ち生產は之を中絕しやうと思へば中絕することも出來るが、中絕しなければならぬこともない。そして一個の生產が出來上れば、同種のものゝ新しき生產をば直ちに又開始するに就いて、何等內部的な障礙を爲すものはない。然るに例へば一廟の小麥を生產するに當つては、事情は甚しく之と趣を異にする。此の方面に在つては大自然が生產開始の時期を定めるのであつて、已に土地を耕鋤して生產の用意をすることからが、一流れに繼續した仕事としては行はれない。最初の鋤起しと次の鋤耕との間には、數日乃至數週間も間が置かれることがある。それは土地に於ける物理的な又化學的な又細菌的な變化の行はれる爲に、それに適當な時間が與へられねばならないからである。そして種子が播かれてからは、勞働は數週間も一二ケ月間も斷絕するのである。生產の過程は季節に依て決定されて居て、自由に之を動かすことが出來ない。

次に又農業に在つては勞働の時間的斷續と相並んで勞働の種類が常に變化せしめられる。即ち鋤起し、地ならし、播種、施肥、除草、刈入、運搬といふ風に、一々異つた勞働が必要とせられる。成程製造工業に於ても、勞働は生產の個々の過程の階段に於て相違して居る。けれども工業方面に在つては、其個々の勞働階段が時間的に限定されて居ない。それは連續した鎖の如く又は繼續した圓環の如く連續して行はれる。されば此方面では相異なれる生產階段が並び行はれ、從て種々の分業が可能となつて來る。器械的な生產に於ける技術上の分業の發達は、主として此事情に基くものであり、又專門的に教育されたる部分的勞働者を以て行はれる製造業の發達も此の事情に基くものである。尙又たゞ部分的な特殊製品の生產をのみ行ふ工業も亦此の事情に基いて可能となるのである。

然るに進步せる種類の農業經營は此の兩者の何れをも行ふことが出來ない。たゞ一種類の作物のみの生產例へば小麥のみを限り生產する農家ありとせば、その勞働は數週間も二三ケ月も引續いて中斷されざるを得ないのである。農業經營に於ける全體の勞働が常に間斷なき繼續の狀態に在らんとするならば、そ

れはたゞ生産に要する勞働時期が互に相補充して連續する所の多種多様の植物を栽培することに依てのみ實現され得る。然しそれでもやはり長短色々な中斷の生ずるを免れ難く、特に一年中の季節に依り勞働需要の伏起を見、終には眞冬に於ける完全なる中絶を見るを免れない。唯だ家畜の飼養が併せ行はれることに依てのみ、その飼養に要する勞働が繼續的なる爲に勞働需要は冬期に於ても僅かに持續され得る次第である。けれども其場合に於ても亦製造工業的な分業を行ふことは不可能である。一經營内に種々の異れる植物栽培と家畜飼養との併せ行はれる結果常に何等かの仕事は爲されねばならぬけれど、併しそれはいつも何程かづゝ異つた勞働である。即ち勞働の種類の多樣性は非常に増されるが、それ等の勞働の中の何れの種類も、そのもののみが繼續して一流れには行はれ得ない。

農業勞働が時間的にも種類的にも非繼續的であることゝ、其の場所的な不定性とは、密接な關係を有つてゐる。勞働の場所は絶へず變更せられるのである。即ち農家の勞働は野良で、庭内で、厩舍で、物置でといふ風に雜多に取交ぜてあちらこちらで行はれる。植物の成長する所は場所的に定まつて居て、人と勞働用具とは共に其方へ動いて行かねばならない。工業生産に在つては原則として勞働容器が移轉せしめられる。之に對して勞働と勞働手段とは一定の所で行はれ、一定の所で用ゐられる。從て此の方面では動力及仕事機械は一の定着的な組織を造り上げることが出來る。然るに農業用具は一般的に移動性を有して居り、農用仕事機械は大抵さうであるが、動力機械も亦耕地と牧草地とに於て働くものは移動しなければならぬ。此事情は自ら農用機械の大さを限定することにならざるを得ないのであつて、農業に用ゐられるモーターは工業用のものに比較すれば、何れも小さなものばかりである。そしてモーターが斯く移動的な性質を備へて居るといふことは、動物の力を器械的な動力と入替使用することの可能に關する問題に對して、非常なる意義を有するものである。然るに更には又大多數の農耕用機械は一年中たゞ數週間だけのみ使用せられ、殘れる多數の日子は全く不生産的に遊ばして過さねばならないといふ事情を考へるならば、何故に農業に於て定着的な機械を備付け又運搬の設備をすることが、工業に於けるよりも遙かに困難で、又多くの費用を要するかの理由は、自ら明かとなつて來る。又何故に移動的な個々の機械も一年中ぶつ通しで働く工業用の個々の機械に比して高くつくかの理由も、自ら明瞭となつて來る筈である。

大自然は農業生産の開始期と修了期とを決定すると同時に、又農業生産の行はれる速度を限定する。人間は夜を日に繼い

働くことも出來るけれど、植物や動物の成長の速度は大自然が之を許す以上に速めることも遅らすことも出來ない。勿論種子の選擇や速成栽培設備やに依て多少植物成育の時期を速めることが出來ないではないが、それとても工業生産が機械の速度の加減に依て其速度をかなり自由に動かすことの出來るのに比較すれば、とても比較になるものではない。其關係に於ては農業機械の如きは、全然無力である。

次に又農業に在つては、土地はたゞ單に生産の場所として用ゐられるのみならず、同時に生産の手段たり原料たるが故に、一定の集約程度に於て農業生産物の分量の増加に比例して經營の場所的な廣さが増すものである。然るに場所が廣くなつて隔つて來れば、大農經營者に取つては、勞働の監督が段々に行屆かなくなり多くの費用を要することゝなる。然かも其勞働の量と併せて質に就いて監督を行はんことは、工業に於けるよりも遙かに困難である。そして農業に於ける作業中例へば鋤起し其他の準備的な作業や播種などが好く平均的に行はれたか否かの成績は、其作業が修了した時に直ちに表はれて來るものでない。植物の成長する有様に照し見て甫めて其成績は確められるのである。分業の行はれる工業に在つては、出來上る製品は一人の勞働者の手から次の勞働者の手へと階段的に移つて行つて、順次に加工せられるのだから、一人の勞働者の仕事振りは直ちに次の勞働者が之を知り、その不出來なる場合には自分の仕事がよく行はれないから、彼は間接に前の勞働者を監督することになる。此の内部的な調節は農業には全然缺げて居る。此事の爲に農業に在つては勞働を行ふ人々の勞働に對する自己の利害感が必要欠ぐべからずと せられる次第であつて、工業に比し之を欠ぎ得ない事情が遙かに多い。

次に又農業は、工業の器械的生産が全然之に比較すべきものを有しない所の或一種の生産を知つて居る。即ち農家は其生産物の一部分を消費することとそれ自身をば同時に一の生産的な勞働として役立たしめる。彼れの消化作用は農地や厩舍からの生産物を破壞するけれども、それは更めて營養分として土地に返し與へられる。動物生活に伴ふ排泄物中には、植物生活の爲に必要なる養分が減じられないで包含せられて居り、それは地中には極めて僅かしか含まれて居ないから、それが土地に返し與へられることに依て、土地の營養力即ち沃度は繼續的に維持されるのである。之に反して工業經營は、一の死せる設備の器械的なる構成たるに過ぎず、その内部に於て人はたゞ精神的な若くは内體的な勞働者として働き得るに過ぎない。そして各人の消費は全然その生産過程と無關係に[illegible]行はれる。農業

經營は活けるものゝ小宇宙であつて、其中に人間の物質的生存も基礎を置いて居る。されば此小宇宙が緊密のものであればあるほど、又經營上結合されたる植物的並びに動物的生活過程の連鎖からして成るだけ僅かの生産物が取去られるほど、益々以て土地の生産狀態を繼續的に都合よく維持することが出來る。換言すれば、收獲により營養分を取去ることゝ、施肥に依て之を返し與ふることゝの間の平均を保ち行くことが出來る。現時の農業科學は土地の生産力をば、十分盛に生産を行ふ所の農業に於ても維持し、又よく增進するを得る手段と道筋とを啓示するに至つたのである。

一定の場所的な工業生産に在つては、生産速度の增加と、屢次生産過程を繰返すことゝに依て、生産物の分量をば、急速に又多額に增加することが出來る。之に要する原料が十分に供與さるゝものと假定すれば、生産增加の爲めには、改良されたる機械の使用により勞働過程の急速なる展開を必要とするに過ぎない。然かも生産物の分量の急速なる增加は、資本主義的なる經營をして、市場をたゞ自己の爲めにのみ略取するを得せしめ、又斯く爲さゞるを得ざらしめる。小規模で技術的に後れたる經營には市場が奪ひ去られ、從てその存在が奪はれることゝなる。然るに一定の場所的な大さを有つた農業經營は、たゞ徐徐に又たゞ比較的狹き範圍内に於てのみ其生産物の分量を增加し得るに過ぎない。一定の面積の上には同一種類の植物のたゞ一定數のみが育ち得るに過ぎない。加之同一種類の植物を相次で栽培することも亦季節的に限定されて居る。生産的なる有機的過程の速度を速められたる繰返しは、不可能事である。溫帶に屬する重要栽培植物の大部分のものは、たゞ年一回だけしか成熟しない。斯るが故に一定の面積單位の上に一定の時間單位内に可能なる生産過程の數は、嚴重に制限されて居るのであつて、それは植物の有機的なる生産過程に伴つて行はれる勞働の過程の比較的緩漫なる展開又は比較的急速なる展開とは無關係に、之に獨立して居る。從て勞働をば、機械の使用其他の方法に依り急速に行はれるものにした所で、それは生産物分量の何等の增加をも齎らさないのである。

一ヘクタールの農地から以前よりも多量の小麥を生産せんとするならば、それは生産過程を重複することに依ては行はれないで、專ら個々の植物的有機組織内部に於ける生産物構成過程のより高き展開に依て行はれ得るものたるに過ぎぬ。然しこの展開には、その栽培され若くは育成される植物若くは動物の、個別的なる又種屬的なる一定の成長能力即ちその天賦の性能に對して時間と分量とが定め與へられてある。そして其生理的な

る發育能力を量的に又質的に上ぼすべき手段に關しては、個別的な研究をしなければならぬのであつて、それは植物的な又は動物的な有機體の培養と栽種と撫育と保護とに關することであるが、それを爲すに依て農業的進歩の此の重要なる方面に在つては、小經營は大經營に對して決して劣れるものでなく、多くの場合には前者は却つて後者に優れたるものなることが明かにせらるる次第である。

併し動植物の内部的な生産展開を促進するあらゆる手段は、吾々が近代に於ける機械使用の結果として器械的な工業生産に於て見るが如き生産量の増加を齎すに足るものではない。これはとても及びもつかぬことである。生物の本性に於ける保守性は、人間の激勵促進する努力に對して、ねばり強い然かも段々其力を増す所の抵抗を續ける。成程總收益増加には何等絶對的な最高限界はないけれども、科學と技術との或時代に與へられたる狀態（進歩の程度）に於ては、各々の栽培種類に對して、一定の集約の限度がある。其限度を越へては、その以上投資施勢を爲すとも、其以前の投資施勢に對して表はれたやうな收益増加は表はれて來ない。それ以上に有機的な生産力を展開せしむることは、費用と收益との關係を段々惡くするに過ぎない。即ち生産力が低下するのである。この事實は有名なる、種々に誤解されたる、又論爭されたる、然かしそれも其考の中核に於ては正當なる收穫遞減の法則に依て示されて居るのである。

此法則の結果として、工業生産の發展と歩調を一にして進み得べき農業生産量の増加は、たゞ生産面積を十分に擴張することに依てのみ行はれ得る。其結果新らしきそしてより好き自然的なる又社會的なる生産條件の下に在る地方が、古きそして高き地代の課せられたる栽培地に於ける集約的なる經濟に對して競爭することになる。此事は實に大經營と小經營との間に於ける競爭關係に對して、更には又全般的なる農業生産の發達と分化と適應とに對して、甚だ重深なる意義を有するものである。

八　餘　論

以上グヴィッドは主として經營學上の立場から、農業生産と工業生産との間に存する根本的なる相違について論じ、マルクス及其學徒が、農業に在つても工業に於けるが如く、資本的なる大規模經營が、常に勞働本位的なる小規模經營に對して優勢を占め、其結果常に集中統一の傾向が表はれて、小規模なる勞働本位の生産を行ふ所の自作農業や分益農業の如きは存立の地を失ひ、漸次衰亡する外はないと見ることの、實際に當らず、かゝる見地は農業の本質を見[illegible]に於け

る觀察に依て得たる結論を、直ちに農業方面にも當篏めんとするが爲めに生じたる謬見たるに外ならずと見て居る。從てダヴイッドは、社會主義は宜ろしく農業に對して其の本性を尊重し之に適應するやうな指導方針を執つて臨まなければならぬと考ふる者であつて、たゞ簡單に農地を社會の公有と爲し、農業經營を社會的なる經營に移すといふやうな風であつては、實際的に農業の社會化の行はれ得るものでないと主張せんと欲するのである。

此の經營上の立場よりしたるダヴイッドの議論には固より多くの尊重すべきものあり、その論點は何れも肯綮に中つて居る。然しマルクス自身の資本論中に表はれたる意見は、たゞ單に經營學上の議論として大經營と小經營との優劣に關する議論でもなければ、大經營が小經營を亡ぼすことに關しての農業に伴ふその本來の性質からしての議論でもない。その所論は資本主義制の下に於ける小經營農業衰亡の避くべからざる運命についての議論である。同時に又マルクスは、小農業の立行き難きを論じて居ると共に、小作農業に依る大地主制の地位の困難なることをも論じて居るのである。マルクスの議論の中心は、大地主制といはず自作農的小所有制といはず、すべて私有財産制の下に於て農地が私有されて、その私有農地の上に農業が行はれて居るのでは、農業と農民とは現時の資本主義的傾向の續く限り、到底その存在を維持し又繁榮するを得るものにあらざることに存する。この意味からしてマルクスは、農業を社會主義化することの必要を見、之を社會主義化することに依てのみ農業は存立の地を見出し得べきものと見たわけである。

されぱダヴイッドの議論はマルクスの所說に對する駁論としては、何となく少し目標を外れて居る感がある。然しマルクス自身は之を說かなかつたにせよ、所謂マルクス學徒なるものや、又所謂マルクス學說に據て立てる獨乙社會民主黨及其他の國々に於ける同黨派の者等は、農地の所有制と併せて農業の經營組織其他の方法についても、所謂社會主義化の道筋を明かにして居ること、前に之を明かにした通りであるから、ダヴイッドの議論は、此の社會主義化の方略に對する批評として又駁論としては、大いに急所を衝いて居るものと見なければならぬ。

そしてダヴイッドも亦社會主義者であり乍ら、その農業に對する現狀打破の方針として表はれたる所は、彼の產業組合主義的な方針により、各農家が、自己獨立の小經營を維持し乍ら然かも多數者が團結して業務上の共同を行ふことを推奬するに在ること、ブラッセルの協議會以後公にされたる社會主義者の農業改造意見としての生產的共同組合の推奬と、少からず趣を

異にする所である。產業組合主義はいふ迄もなく農地の私有と農業の個別的經營とを基礎として、たゞ業務上一定の事項と範圍內とに於て、共同を行はんとするものたるに過ぎぬ。然るに社會主義者の農業改造方針としてエルフルト綱領其他に示されたる所は、農地を公有にし、農業は生產者の共同組合に依て一切共同的に經營し、農民はたゞ勞働者として從て眞實の生產者として働くのみであつて、農業々務の經營主體は共同組合そのものである。組合員たる各農民はその共同體に沒入して、たゞ共同體の一員としてのみ存立する、從て農業の個人的なる個別經營は廢められて、組合的なる共同經營が行はれることゝなる。即ち個人主義經濟の代りに共同主義經濟が行はれることゝなるのである。

されば同じ社會主義者であり乍ら、ダヴイツドの觀る所は、エルフルト、プログラムに表はれたるカウツキー其の他の人々の觀る所とは、少からず面目を異にする。その意味に於てダヴイツドの意見は、所謂マルクス主義に對する修正意見たると同時に、從來の社會主義的農業改造方針を根本的に批評改變せんとするものである。然かもその議論が農業に關する十分なる智識と理解と研究と同情とを以て爲されたるだけ、そこに大いなる强味の存するは、認めらるべき所たるを失はない。その見地は既にローザンヌの國際協議會に於て佛蘭西のブルードン派の社會主義者に依て主張されたる所と、根柢を一にして居るけれども、意見が學問的に理由づけられて居り、學問的研究に伴つて表はれて居るだけ、意見としては有力である。即ちエルフルト、プログラム其他に依て意見を公にせる多數の社會主義者を全體として向ふに廻はして、之に對立して論戰を交ゆるに足るだけの力を持つたものと見て大過ないであらう。

併し今私は此等の論戰について立入つた批評を試みんとする者ではない。玆にはたゞ農業に對する社會主義者の見地を明かにし、社會主義者の農業改造方針を窺ひ、その意味に於て農業社會化運動の傾向をたどり、農業と社會主義との關係を知ることを得れば足りる。そしてその目的の爲には、以上示す所で先づ大體の輪廓は描かれ論議の要點は明かにされたるものと見てよいであらう。同時に又社會主義者の農業に對する相異なれる見地と態度とは、今日に至るも尙ほ持續されて居ることを忘れてはならぬのであつて、結局問題の解決は、事實が之を爲す外はないのである。私共は問題を問題として常に觀察と研究を爲すことに怠る所なきを要するのである。(完)

新經濟革命の目標

經濟學博士　太田正孝

一

このあひだのイギリスの炭坑爭議にあたつて、首相ボールドウイン氏が、『常識の勝利』といふ言葉をつかつてゐた――ことを記憶する。あの世界を驚かした空前の騒ぎを解決した最後のものは、何であつたらうか。外でもない。それは、たゞさへ冷靜なイギリス國民の、常識による判斷である。その判斷にもとづく處置である。私は、いまさらのやうに、常識の力が、大衆の共存共榮に作用することの偉大さを知つた。同時に、お互の社會的生存における常識の意義が、あの爭議におけるときほど、はつきりと、見事に、あらはれた例はあるまいと信ずる。

とかく、いまの世のなかには、一切の出來事を、いやがうへに、むづかしく思ひつめる人が少なくない。そして、それが社會的に不徹底になつて來ると、知らず／＼不調和が生れる。不自然が湧く。その極は、破綻する外はない。私は、經濟上の出來事を觀察するにあたつても、やつぱり、常識による判斷が、社會的意義において、最も貴いと思ふ。私たちが、經濟學の民衆化を必要とし、これを主張するのも、こゝにある。

私たちは、この意味において、常識の勝利に向つての歩みを進み出すために、經濟上の諸問題を通俗的に解釋し説明することを怠りたくない。しかるに、私の見るところが、誤りないとすれば、いはゆる世間の學者たちは、これまで、あまりに、學問を學問として――あるひは單なる理屈として取り扱ひすぎて來た。學問を俗人の踏み込めない殿堂に祭り上げようとする傾きさへあつた。そして、自分よがりをしてゐた。けれども、それは學問の墮落する始めではなからうか。學問は、活かしてもらひたい。學問の存在には、意義をもたしてもらひたい。學問をして、人間頭腦のパンたらしめてもらひたい。白米たらしめてもらひたい。常食たらしめてもらひたい。日常不斷の攝取物たらしめてもらひたい。しかるに、これまで、多くの學者た

ちが採つた態度は、どうであらうか。彼等は、一たびペンを手にすれば、必らず學者を相手として書くならはしである。それには、片假名あるひは外國語そのまゝの姓名を多く連ねることが、必要であると心得てゐる。また、字義どほりの『アルバイト』としてのドイツ書あたりに載つてゐる脚註などから、いろ〳〵の本の名前や、ページなどを拔き書きして、得意になつてゐる。さういふ多讀博識を誇らうとする芝居氣が、必要であるとしてゐる。私は、これを學者の惡趣味と申したい。けれども、今日の世のなかでは、學問を必要とするものは、學者ばかりでない。しかも、世間の多くの人たちは、かういふ學者の博學多識を、それほどまでに有り難いとは思つてゐない。有體に申せば、世間一般の人たちは、パンとしての知識を得たいと思つてゐる。白米としての學問、常識としての學問を、呑みこみたいと望んでゐる。假りにも學者としての仕事にたづさはりつゝあるものは、この大衆の要求に氣付かねばならぬ。そして、眞實に學問を耕す農夫となる決心をもたねばならないと信ずる。それにしても、坊主同志が、わからぬお經を讀んでゐるやうな根性は、やめねばならないと思ふ。

私は、いまこゝに「新經濟革命の目標」といふ題を選び出して見る。――新經濟革命といふのは、平たく言も一つの經濟革命」といつてもよい。――しかし、これは、むづかしい主義や主張を解說するためではない。おそろしい改革運動の宣傳をするためでもない。經濟問題の常識的解說といふよりは、むしろ、その說明をするためであるといつた方がよいかも知れない。少くとも私は、自分のこゝに筆をとる態度と立場とを明らかにしておきたいと思つて、緖言のかはりにこれだけのことをいはしてもらつたのである。

二

まづ、ロシアの革命とイタリアの革命とをくらべて見たい。私は、そこに面白い對照を認める。それは、革命運動を指導するに、二つのちがつた型があるからである。その一つは、人間の鬪爭心を利用したものである。他の一つは、人間の義務心を高調したものである。人間の鬪爭心を利用するといふのは、人間が好戰的で、貪欲な敵愾心をもつものであることをねらつて、その反對者を葬り去らうとするものである。マルクス派の多くの人たちが利用したのが、この方法である。即ち、勞働者の權利を主張し、その虐げられてゐる事實をならべ立てゝ、資本家に對する憎惡をつのらせ、反感を抱かしめるのである。いま一つの型は、からした憎惡反感をそゝらしめずして、反つ

て、お互の社會的生活において、お互が社會に負つてゐるところの義務を説いて、その義務を行ふために勇ましく進まねばならぬことを説くのである。前者は、破壞的革命運動である。後者は、建設的革命運動である。前者は、見たところ積極的である。後者は、それに對して消極的に見える。この意味において、ロシアの革命は、前者の方法によつたものであり、イタリアの革命は後者の方法をとつたものである。

ロシアの革命には、階級意識といふものが强くはたらいてゐる。プロレタリアにとつて、ブルジョアは、不倶戴天の敵である。その背を、しやぶつても、なほかつ飽き足らないといふ恨みのかず〳〵が、骨身にしみわたるやうに、思ひならされてゐる。そこに、ロシア革命の殘忍性が見出される。また、ロシアの革命には、極端なる世界主義と、私有財産制度の否定とが含まれてゐる。ロシアの革命は、その色彩において、すべてが甚だはつきりとしてゐて、何等のあいまいな點を認めなかつた。それだけ革命の闘士に、戰闘の目的をはつきりと知らしめ、卒直にやつてのけさせることが出來たのである。けれども、同時にロシアの革命がうまく行かなかつたのも、またこの單純な點に原因してゐるのではないかと思ふ。

イタリアの革命は、いみじくもロシア革命の欠點を見てとつた人たちによつてなされた。陣頭に立つたムッソリーニは、その本來の社會主義的思想を、實行しなかつた。かしこくも、彼は、レーニンの失敗したすべての點を放棄してしまつた。彼は、第一にイタリア人は、ついに、イタリア人である——血は水よりも濃いといふ平凡な根據から出發した。そしてマルクス主義の主張する世界主義を放棄してしまつたのである。さらに彼は、プロレタリアとブルジョアとは、互ににらみあつて血の出るまで反目すべきものでないことを唱へた。双方は互に親和協調しなければならぬものであるとして、プロレタリアの闘爭的意識を否定したのである。さらに、彼は、私有財産權の制度も認めた。そして、レーニンなどの共産説に反對した。かやうにして、彼は、イタリア人のイタリアを建設し、イタリア人の幸福な社會を實現さすために、黒シャツ革命をやつたのである。すなはち、イタリア革命の基礎となるものは、一に民族國家主義である。二に協調主義である。三に財産私有權制度である。この三つが彼の革命の旗じるしとなつたのである。

かやうに、ロシアの革命と、イタリアの革命とは、革命の二方面を、はつきりと私たちの前に見せつけてくれた。革命といふ言葉にさへおびえる世界は、この二つの出來事によつて大に啓發されるところがあつたにちがひない。そして、問題は、か

らなる。——革命が必要であるとすれば、そのいづれを選ぶべきであらうか、革命が不必要であるとすれば、この二つから如何なる第三の方法を暗示せられる事であらうか——と。私たちは世界大戰後における、この二大革命をもつとながめ、その後における列國の狀勢をも見て世界はこゝに「新經濟革命」もしくは「も一つの經濟革命」を期待しつゝあるのではないかと思へる。その「も一つの經濟革命」とは、どんなものであらうか。

三

も一つの經濟革命の狀態は、最もいちじるしくアメリカにおいて現はれてゐる。しかも、その革命の本質をさぐつてみると、新らしいロシアなども、つまりは、アメリカと同じ落ちつくさきに落ちつくべく、その狀勢に進みつゝあるのではないかと思はれる。歷史をひもといてみると、これまでの革命たるものは、多くは政治的革命であつた。そして、さういふ政治的革命をやつた人たちは、これによつて新しい制度を生み出し、經濟的革命をも成しとげやうとし、また、成しとげられ得るものと信じてやつたのである。けれども、事實は、さう運ばない。政治革命なるものは、わづかに經濟革命を速めたり、または遲らせたりするにすぎないからである。それ以上には何も出來ないことが、わかつて來たからである。革命の眞髓は、經濟革命の徹底することにある。かるがゆゑに、經濟革命の伴はない政治的革命は、革命として、さほど有意義なものではない。

今日において、ロシアの革命は、多くの人たちから失敗したといはれてゐる。それは、ロシアの革命をやつた人たちが、政治の力を用ゐて、民衆のうへに新らしい經濟制度を強ひやうとしたが、如何に強く且つ亂暴な政治の力を用ゐても、經濟力そのものは、人爲によつて、さうたやすくは屈服せられないからである。そして、とどのつまりは、經濟的勢力の推移するがまゝにまかされ、ロシア革命の最初の目的を失つて行つたからである。たつた一つの例を引いても、わかる。はじめは小農が土地を利用することを認めなかつたにかゝはらず、やがて、これを認めなければならなくなつたではないか。この上は、最も手つとり早くみとめられることである。そして、いつも反對者から批難されたり笑はれたりする材料につかはれてゐる。でも、私のいはふとするところは、ロシアの革命の成績そのものについてではない。經濟革命は、政治革命よりも、一層深く根づよい原因からおこるものであるといふことである。そして、その進化發展は、常に徹底的なものであり、根抵的なものであるといふことである。故に人爲的な政治革命はよくこれを爲し得るとするも、經濟

革命が人爲的にたやすく出來ないのはこれがためである。また、經濟革命は、時に、必然的に起つて來ることもある。そして、社會民衆をその方へ、ずるずると引きづつて行くこともある。ロシアにおいて、新經濟政策を採つたのは、この意味において、經濟力に引きづられたものと見るべきであらう。

世界大戰後、ヨーロツパにおいては、いろいろの政治的變化を經驗し、また産業上のやりくちにおける變化もあつたが、すべてが政治的變動であつて、經濟的革命といふべきほどのものは一つもなかつた。

勞働問題の如きも、近世になつて産業革命が起つて以來問題とせられたところの、勞働者の奴隷的境遇から脱却すること、賃銀を値上げすること、ブルジョアを征服することといつたやうなこと以上には、出なかつた。ヨーロツパの勞働者たちは、百年一日の如くブルジョアをかたきのやうに思ひ、これをやつつけてプロレタリアの獨裁にまで漕ぎつけやうとあせり出して來てゐる。あくまでも鬪爭的意識を發展せしめて政治的支配の幕を描き出さうとして來たのが、ヨーロツパにおける勞働運動の發達の跡である。政治的の支配力を得るならば、それによつて、プロレタリアは救はれる。世界の平和も來る。生活文化も向上するにちがひないと考へたのである。すべての政治家は、自分が一たび政權を得るならば、萬民は安かるべしといふ理想を抱いて、國政に對してゐる。しかるに千年一日、如何なる大宰相が出て來ても、野に不平の聲は絶えない。それは、何のためであらうか。政治そのものが不可なのではなくて、政治家そのものが、内容の乏しい手細工の政治を以て萬民安護の最後の策であると過信してゐるからである。そして經濟的要件とその對策とが、政治とすつかり一體となるやうにしないからである。ロシアの革命が、あれまで極端に事を行ひながら、その結果の思はしくなかつたのは、口に經濟を說きながら、實際に經濟的の徹底的な諸條件を充たすことが出來なかつたからであらう。

四

眼を轉じて、アメリカにおける勞働運動の發達の跡をみるとヨーロツパにおけるそれとは、著しくその行き方を異にしてゐることが、眼につく。ヨーロツパにおいては、前にもいつた通り、階級鬪爭といふことを眼目として、その問題の解決を政治的に遂げようとすることにあつた。どこまでも政治的支配をしやうといふ幻影を逐つてゐる。その執着から離れることが出來ない。それが、ヨーロツパにおける勞働運動の趨勢である。しか

るに、アメリカの勞働者は、ヨーロッパの勞働者が資本力を容易に認めないに反して、これを認めやうとしてゐる。むしろ、ブルジョアの征服に先き立つて、みづからの資本力を築き上げやうとしてゐる。ヨーロッパの勞働者の目じるしが、政治的の支配にあるのに反して、アメリカ勞働者の目じるしは、經濟的恒久力と實力とを得るにある。ヨーロッパの勞働者がブルジョアと闘はうとするのに反して、アメリカの勞働者はブルジョアと協調しようとしてゐる。前者は資本力と爭はうとするのに、後者はこれを以てみづからの實力を養はうとしてゐる。一言にして申せば、ヨーロッパの勞働運動は戰闘的である。アメリカの勞働運動は、協調的になつて來てゐる。

世人の多くは、この現象を見て——それは、アメリカの勞働者は、富力の豐かな國に生活してゐるからであるとしてゐる。彼等の賃銀も、ヨーロッパの勞働者などゝは比較にならないほど高いから、自然ヨーロッパとは趣きの異つた發達を遂げて來たのであるといふのである。けれども私たちは、それほど簡單に、その問題を、片づけたくない。アメリカの勞働運動が、今日協調的な傾向があり、その發展が、勞働運動の資本主義化といふ、注目すべき經濟的革命に向はうとしつゝあることは、現下の狀勢として、まことに容易ならざる現象といはなければならない。もとより、そのことに到るまでには、アメリカの勞働者も決して單純な一とすぢの路をたどつて來たのではない。言葉をかへていへば、アメリカの勞働運動史においても、資本家との闘爭時代は、たしかにあつた。しかも、それが、ヨーロッパにおけるやうに、いちぢるしく私たちの眼にうつらないのは、アメリカの勞働運動が、全く政治的形式をとつて來たからである。アメリカ百五十年のデモクラシーの發達史は、要するに、アメリカにおける勞資戰の發達史に外ならないといつてよいと思ふ。

アメリカは、百五十年來勞資の闘爭をつゞけて來た結果、その闘爭の全く無意義であることを發見するに到つた。さうして、彼等は、この社會があらゆる階級のものゝ共同生存によつて成り立つものであるといふことを、しみじみと悟つた。そして、この共同生存をして、幸福な發達を遂げしめるために、これまで見なかつたところの一つの經濟革命を望んで來たのである。私の、いはゆる一つの經濟革命といふのは、このことを指すのに外ならない。すなはち、プロレタリアとブルジョアとの階級的差別をとりのぞき、ブルジョアをしてある種の勞働をなす勞働者たらしめると同時に、プロレタリアをして經濟生活における資本家たらしめやうとするのである。一と口にこれをいへば、勞働者も資本家たらしめ、資本家も勞働者たらしめることに

ある。とりもなほさず、このことは、勞働者の資本力の增加は、これまでの資本家が資本によつてのみ生活してゐたのが、これからは、それだけでは生活が出來なくなるといふことを意味するものである。これがアメリカにこれから來ようとしてゐる經濟革命の姿である。

五

少しく、アメリカの政治史をひもどく。——マサチユーセツツ州で、その州の憲法を制定した當時のことである。同州のバークシア郡の貧困な農民たちは、盛んに新憲法の制定を主張してゐた。これに反し、東部諸郡の富んだゆたかな階級の人たちは、獨立以前の政治組織を維持しようとしてゐた。これは、とりもなほさず、資本家階級と勞働者階級との爭ひのはじめである。この論爭は、一七八七年から一七八九年にかけての、聯邦憲法の制定當時においても現はれて來たのであつた。マサチユーセツツ州の憲法會議においては、貧困な農民たちが、富裕な牧師、法律家、裁判官等と爭つたのであるが、聯邦憲法會議においては、商人、金融業者、債券所有者、製造業者、海運業者、資本家、財閥及びその關係者と、貧困無識の小農、小商人、職工などとが相對時したのであつた。この間のいきさつについては、ターナー氏やビアード氏などが詳細に研究を進めてゐる。が、要するに、私たちは、アメリカの憲法制定にあたつて、早くもはげしい階級鬪爭が現はれて來たことを觀取するのである。

新憲法の制定に與かつた約十六萬の人たちの、動産や土地家屋や預金や、奴隷や海運製造業などへの投資額やなどについての狀態を調査した結果をながめて見ると、面白いことがある。當時、新憲法を實施することに贊成した者は、主として商人、金融業者その他前に擧げたやうな有産階級の人たちであつて、これに反對したものは、大部分債務者であるか、奴隷を持たない小農階級の人たちであつた。しかも、國父ワシントンが、當時、西部に土地をもつてゐた地主の一人であつたことも、如何にも面白い。西部地方にはインデアンが多數居住してゐたが、政府の方針がインデアンを思ひ切つて征服することを禁じてゐたので、土地を持つてゐても、これを充分に開發することが出來なかつた。それがために、地價が極めて安かつたのであるが、新憲法が實施されることになれば、西部地方の開發が自由になるから、從つて地價もあがつて來ることが眼に見えてゐたのである。

貧しく知識の乏しい人たち、すなはち、小農、小商人、職工等

どの代表者は、財産をもち知識のある人たち、すなはち、聯邦派（フエデラリスト）の立案した中央集權的な憲法法案に反對してゐた。そして、これらが後に反聯邦派（アンチフエデラリスト）として知られるやうになつたのである。この反聯邦派は、マサチユーセツツ州の憲法制定論者と結びついて、ジエツフアソン當時のレパブリカン黨となり、それが發達して、今日のデモクラツト黨となつたのである。また、聯邦派は、その後ホイツグ黨となり、さらに今日のレパブリカン黨となつたのである。その發達の經路においては、黨名、政綱等において數次の變化はあつたけれども、この二大政黨の根抵に横はつてゐるところの、經濟上、產業上の利害のわかれは、憲法制定の昔から、ずつと引つゞいて今日に到るまで、變つてゐない。その歴史を見ることなくしては、この二大政黨の本質を理解することは出來ない。この政黨的の反目が如何に根ぶかくあり且つ力强いものであつたかは、一七八七年の憲法大會の模樣を見てもわかる。すなはちこの大會に列席した五十五人の代表者中、新憲法を支持したものは四十三人であつた。その四十三人のうち、二十五人は聯邦派として踏みとゞまり、十二人はレパブリカン黨になつたけれども、新憲法に反對したものは全部反聯邦派として踏みとゞまり、一人の變節者も出さなかつたほどである。以て如何に無產派の戰鬪意識が强かつたかを想はしめる。その無產派の代表者はジエツフアソンであつて、その有產派の代表者はハミルトンであつた。

無產派の有產派に對する態度は、きはめて强かつた。ジエツフアソンは、小農の利益を代表して、『聯邦派は財閥の貴族主義を建設するものである』と難詰し、どこまでもこれを打ち破らうとした。一八二八年アダムスが東部の聯邦派を代表して起つたのに對し、ジヤクソンはジエツフアソンのレパブリカン黨を基礎として、西部の進步主義を提げて起ち、以て大統領選擧戰に臨んだのである。その結果は、ジヤクソンは、もの丶見事にアダムスを破つて、當選したのである。そしてジヤクソンはその就任と共に、ジエツフアソン以來の反聯邦派の精神を體して、有名なスポイルス・システムを用ゐた。彼は、極端に反對黨を壓迫し、ナショナルバンクを目して、『財閥の機關のみ』との駁擊を加え、政府の官吏役人の多くが、これまでヴアジニアや、ニウイングランドの貴族（彼らの用ひた攻擊の言葉である）によつて獨占せられてゐた事實を攻め立てた。そのうへ選擧法をはじめ民主々義の思想によつて政治の大刷新を行つたのである。この民主々義の運動は、さらに奴隸問題に注目し、盛んに奴隸反對を主張した。つひには、南北戰爭をひきおこすこととなり、奴隸解放を

實現することが出來た。この意味において、奴隷解放は、反聯邦派の永久に誇るべき榮冠である。

かやうに、アメリカに於ては、勞資の爭ひなるものが、民主主義發達の跡として、政治的形相を濃厚にしてゐる。むしろ勞働運動の發達の跡としては强く眼にうつらないけれども、その由來を本質的にたづねてみれば、アメリカの民主々義の發達そのものが、勞資鬪爭そのものゝ發達とも見られ得るのである。これがアメリカに於ける勞働運動や、社會主義運動がヨーロッパ諸國におけるのとはちがつた發達を遂げる事になつた以所であらう。かやうにして、アメリカの勞資鬪爭は、早くも賃銀値上げとか八時間勞働制とか、境遇改善とか、政權獲得とかさうした問題から一歩を先んじて勞資の協力に轉じ新たな經濟革命への傾向が著しくなつて來たのであると考へられるのである。

六

アメリカの二大政黨が、その出世の初めから經濟的利害の立場に立つてゐたといふことは、その發達のうへにいろ／＼の近代的意義を伴つてゐた。人も知るやうにこの二大政黨は、きはめて包容力に富んでゐる。近代の勞働運動も、社會主義運動もあらゆる新思想運動をも取り入れて反撥することなく、政治の社會化を唱へてゐる。が、その基くところをたづねてみれば、憲法制定の時からの鬪爭そのものが政治的思想的社會的訓練となつて、よく近代の新運動新思想を消化し得る素質をそなえてゐるからであらう。さうして、この政黨の政治を社會化する指導的位置に立つものが、勞働組合や社會事業家であるといふことも、つまりは、多年の政治的生活に於ける訓練から來た副生的の現象とも見られやう。これらが綜合的に稱せられてアメリカのデモクラシーといはれる。さらに近代化する意味において、アメリカの社會的デモクラシーなどゝいはれるのである。

このアメリカの社會的デモクラシーの將來の發達に向つての轉機的の傾向及び運動が、新しい現象としての、も一つの經濟革命である。それならば、このも一つの經濟革命なるものゝ思想的基礎は、何であるか。――曰く、『雇人と使用人とが、一緒になつて仲よく働く場合には、決して勞働問題なるものは起らない。なぜなれば、そこには何等の階級的差別がないからである。階級的意識の存しないところには、階級のあるべきはずがないからである。』といふのである。アメリカの理想は、その獨立宣言をみても明らかなやうに自由の國を創建することにある。お互の平等を得ることにある。すべてのことに對する機會均等を得ることにある。そこにお互の意思能力の自由なる表現を要求

する行動の自由を主張する。この理想を、どうしたならば最も現實に體現することが出來るであらうか。それがアメリカ國民の不斷の努力であつた。さうして、勞資いがみあつて爭ふことは利益のない敵討行動であることに眼ざめて、鬪爭から協調に轉じやうとする傾きをもつて來た次第である。

さきにも述べたやうに、從來の革命行動は、常に戰鬪的であつた。破壞的であつた。暴力的であつた。しかるに、も一つの經濟革命の行動は、きはめて平和的である。また從來の革命なるものは、革命を指導していく專門家によつてやられたものであるが、も一つの經濟革命は、革命を指導する專門家なるものゝ特別の影を見ない。も一つの經濟革命は、教育に從事する人たち、事業家各方面に働いてゐる人たち、明白に考へ且つ正しく投票する人たちによつて、眼に見えず、耳に聞えず、平和に、知らぬうちに、成し遂げられるところのものである。この革命は、高いところから號令されて動いて成し遂げられるものではなくて、國民各自が、みづからの義務を反省し、これを守つていくことにおいて成し遂げられるところのものである。これが、も一つの經濟革命の特色である。

そこで、も一つの經濟革命は、まづ第一に勞働者の富力を增進し、生活を向上し、人としての差別觀を除き去つて、階級的意識からのがれ出ることに努力する。第二には、資本家が資本をもつてゐることにのみよつて、みづからの生活の安泰を得ることを保障せず、ひとしく勞働者と共に勞働することによつて、階級の平衡を期しやうとすることをつとめる。つまりは、雇主と使用人とが、一緒にもつてゐるだけのものを出して、共に働くといふことになる。それに向つての努力が、すなはち、も一つの經濟革命の實行である。今日、アメリカの勞働界をおつと觀ると、たしかに、この一つの經濟革命が進行しつゝあることを認められる。アメリカの勞働者は、政治的支配へのまぼろしを逐はうとするヨーロッパ流の勞働運動には滿足しない。なぜなれば、彼等は、この運動を建國以來なしつゞけて來て、その目的は既に達し、その效果について多くを知つてゐるからである。彼等の今日求めようとするところのものは、恒久的の經濟的勢力を目じるしとしてゐる。この目的を達成しようとするために、資本の力を認めてゐる。そして、資本家と鬪はずして、資本を獲ることによつて、みづからの生活上の保障を確立しようとしてゐる。その努力の現はれとして、勞働者の加金が急に增加するやうになり、勞働者の會社株への投資も多くなり、さらにまた勞働銀行の發達が認められるやうになつたのである。さらに新農民運動におけるファム・ビューローの如きも

注目に値することである。

七

アメリカの組織的勞働運動は、最初のほどは、まづ以て勞働者の階級意識をよび起さしめて、その團結を強固にし、團體の力を以て賃銀の値上げ、勞働時間の制限、生活の改善などいふことに努力して來た。そして、この運動が擴がつて來るに從つて、全國的組織への道を考へ、團體の掛引きを以て、防禦的戰鬪に從ふ戰鬪時代がはじまつた。勞働問題を解決するには、力を得るより外に道はない。あくまでも戰鬪によつて、ブルジョアを葬らねばならない。——とするやうになつた。そこには、妥協もない。協調もない。たゞ戰鬪あるのみ——といふ考へでやつてゐるものは、今日でもなほ存在してゐる。さういふ主義の下にある勞働團體も少くない。けれども、進歩した勞働者は、さらに一歩を進めて、第三の活動期に入つて、私のいはゆる「もう一つの經濟革命」に向つて努力しつゝある。これは戰鬪を拋棄し、協調によつて、勞資相互の生活文化の向上を期したいとする人たちである。

これを事實についてみるに、さきにも一寸いつたやうに、アメリカの勞働者の預金の増加、會社株への投資、勞働銀行の發達など、みなこの第三期の勞働運動の進行を證明するに足るものである。一九一四年における勞働者の預金總額は、八、七二八、五三六、〇〇〇ドルであつて、一人平均の預金額は八十九ドルになつてゐる。その後十年たつて、一九二四年の預金總額をしらべてみると、二〇、八七三、五六二、〇〇〇ドルに上り、一人平均百八十六ドルの割合になつてゐる。十年前とくらべて、まさしく二倍以上である。なほ、その預金者の數について見ても、一九一四年には、一一、三八五、七三四人であつたものが、一九二四年には、三八、八六七、九九四人となつてゐて、これまた著しい發達の形を示してゐる。さらにその預金者の質を見ると、小額預金者が增加して來てゐるが、そこにも、預金心理ともいふべきものが勞働者の頭のなかに作用して來たことが認められる。つぎに、生命保險會社に投資されてゐる勞働者の資金についてのリチヤード・ベツケル氏の報告を見ると、一九二四年におけるアメリカの生命保險證券の三分の二以上は、勞動者によつて所有されてゐるとのことである。一九一二年に於る保險金の總額は、凡そ百十五億ドルであつたが、前大藏大臣ハウストン氏の見積りによると、一九二五年一月には約六百億ドルにのぼつてゐるとのことである。殆んど五倍の增加である。戰前におけるフランスの富よりも大きい。一八

〇年代のアメリカの富にも匹敵する。また、建物及び貸付組合の資産も、預金と略ぼ同一の割合で増加しつゝある。一九二三年の建物及貸付組合の資産は、三、九四〇、九三九、八八〇ドルにのぼつてゐるから、これに一九二四年の預金總額と、一九二一年から一九二五年一月に至る五ケ年間に生命保險會社に拂込まれた總額とを加へると、實に三百四十六億六千六百六十二萬九千五百七十三ドルに達するのである――驚く。

かやうにして、アメリカの勞働者は、着々とその富を蓄積することに歩みを進め、いろ／＼の大會社の株主となりつゝある。ユー、エス、スチール會社や、ゼネラル、エレクトリツク、コムパニーや、フオド自働車會社などをはじめ、その他多くの會社は、みな年功によつて、その使用人にその株を讓與してゐる。そればかりでなく、アメリカの諸會社は、いろ／＼な方法によつて、勞働者に株を持たせる方法を採り、勞働者も進んでその株を得ようとしてゐる。スヰフト、アンド、コムパニーの男女使用人總數の三分の一以上に當る二萬一千人は、二千一百萬ドルを超すほどの同會社の株を所有してゐる。また、アメリカ電信電話會社の使用人中九萬四千人は、同社の利潤分配案に基づいて月賦拂込みの方法で株を買入れつゝあるが、その中の四萬六千人は、すでに全部拂込みずみとなつてゐる。その他かういふ勞働者の所有となつた株の例を擧げて來れば、數へきれぬほどある。――最早や特殊の現象でないといはねばならぬ。

かやうに、アメリカの勞働者は、預金をしたり、會社株を買つたりするばかりでなく、さらに進んで勞働銀行を設けるやうになつて來たのである。勞働銀行として、最初アメリカに設けられたものは、一九二〇年ワシントンに設けられたものである。その後急速な發達を遂げて、一九二五年末までに七十五の銀行が設けられるやうになつた。一九二四年末における各勞働銀行の資産を合せると、一億五千萬ドルに達してゐる。ピーター・ブラデー氏によれば、アメリカの産業勞働者に支拂はれる賃銀總額は、年々二百五十億ドルであつて、そのうち六十億乃至七十億ドルは、いろ／＼な方法で貯蓄されるといふことである。勞働銀行は、この六七十億ドルの資金を管理しようとしてゐるから、これが、どういふやうに金融界に利用せられるかは、また注目に價する事柄であらう。

八

かやうにアメリカの勞働者が、資本的餘裕を示して來たこと、しかも、これを益々增大しようとしてゐることは、も一つの經濟的革命への前兆として擧げることが出來る。私は、いま

まで、アメリカについて、このも一つの經濟革命の傾向を例示して來たのであるが、このも一つの經濟革命なるものは、決してアメリカにばかりに特に現はれる現象でもなければ、傾向でもないと思ふ。世界は必らず、みな、このも一つの經濟革命に向つて進展するにちがひないと思ふ。勞働者の資本の蓄積は、ドイツにおいても著しく、その資本の運用においては、アメリカなどよりも進んでゐるものがある。いづれにしても、勞働者の資本蓄積は、その收入の增加とともに、全世界に共通にあらはれて來るべき事實である。か、かやうにして蓄積された資本が、如何にして運用せらるべきかといふことになると、一つの問題が生れて來る。勞働運動を從來のやうに、ヨーロッパ流に、勞資の爭鬪を目的として發達せしめやうとすれば、勞働者の資本は勞働者みづからの運用によつて、勞働階級の資本的勢力を確立しなければならないことになる。けれども、アメリカの勞働者のやうに、勞働運動を勞資の協調によつて發達せしめやうとすれば、こゝに產業發達の必然的の必要として、出來るだけすぐれた經營法を採つてやらなければならないことになる。そのすぐれた經營法なるものは、經驗あり訓練ある企業家に俟つ方が、手つ取り早い。そこで、勞働者は、みづからの勞働力と資本力とをこれに提供し、資本家はその資本と經營の才能とを提供し、こゝに相互の協調による產業の發達を期しようとする運動が生れて來るわけである。

アメリカの勞働者が、如何なる經營法によるべきかといふことに着目し、また、如何にこれまでの企業家の經營上の才能を尊重してゐるかは、その經營者に對する態度によつても明らかである。十年前、資本家側からも、勞働者側からも、誤解をうけ、惡罵を浴びせかけられ、もだえ〱て死んでしまつたフレデリック、ウインスロー、テーラーよ。――汝は、今日のアメリカにみるやうに、汝をほめちぎつてゐる聲を聞き、形を見たならば、どんな感じを抱くであらう。彼が三十五年間心をこめて研究した科學的經營法なるものが、今日資本家からも勞働者からも、深甚の敬意を拂はれて採用されんとしつゝあることは、抑もまた何を意味するであらうか。

一九二〇年三月ホレース・ビー・ドルリー氏は、つぎのやうな意見を發表してゐる。『勞働者が、まづ第一に努むべきことは、生產の增加であり、第二には生產增加のプログラムを編成する必要がある。それには、まづ以てストライキと勞働爭議の根絕することを期すべく、勞資協調の途を講ずべきであるが、同時に、失業の減少と就職の保障とを勞働者に與へる方法を研究しなければならぬ。つぎには、より良い仕事に、より多くの

らくことと、勞働組合が産業の技術と、作業の編成改善に貢献するより外に途はない』と。この意見に對しては、アメリカ勞働聯盟も暗默の中に同意を表してゐる。ゴムパース自身も晩年において、勞働者と經營者との間の諒解を保つて生産の增加に努めねばならぬことを說いたのである。

ゴムパースが死んで、その後をついだグリーン氏は、一九二五年のはじめ、ハーバート大學において、『從來しば／＼見た勞資間の不一致が、到底妥協しにくいものであるとする說は、全く採るに足らない。さればといつて、公正なる富の分配について、絕對に勞資鬪爭の跡を絕ち得べしといふのではないが、このデリケートな問題について、雇主と勞働者との間における直接協議（集團的協定）によつて、協約を結ぶことは決して不可能ではない。産業爭議の原因は、賃銀問題の不調よりも、むしろ勞働者の團結權と集團的協定權を認むるや否やに存する云々』と述べ、同年四月には、『産業上の無駄を省く必要について、米國勞働聯盟は、勞働者の權利の認めらるゝ限り、經營者との協力を排するものでない』といつて、勞資互にその權利を認め合ふことの必要であることを說いてゐる。そして、彼は、また、『雇主が事業を管理して、投資に對する正當の利潤を受ける權が承認され、支持せられるのと同じく、使用人が團結して集團的に協定し、代表者を選んで雇主と協議する權利も、充分に認められるべきである。この相互的承認こそ、すべての産業平和の基調であつて、かうして始めて、生産の增加と能率の增進とが並び達せられるのである。――勞働者は決して事業經營の成功に無關心ではあり得ない。何となれば、經營がよろしきを得て、能く節約が行はれ、能率を增して生産の增加を見ることになれば、これによつて、生産品が安くなり、しかも勞働者の生活標準の低下、または、賃銀の低落を見ずして行はれるからである』と述べてゐる。

グリーン氏の說くところは、テーラーの科學的經營法を認めたものであつて、しかも、明からかにその採用を望んでゐるのである。これは、ゴムパース時代にあつては、心のうちにこれを認めながらも、ゴムパースなどが反對して來たものであつた。いまさら說明するまでもなく、テーラーの科學的經營法なるものは、つまりは、勞働者と資本家との權利を相互に認め兩者の協調によることを基調としたものであつて、生産制限といふことにまで言及してゐるところは、いかにも合理的に案ぜられてゐる。それが一時は全く世間から誤解せられてゐたが（ことに勞働者側から）、今日となつて、勞資の双方から認められ、實踐せられるやうになつたことは、まことに著しい現象と

いはなければならない。この轉換は、とりもなほさず、も一つの經濟革命への道ゆきであるとも見られるのである。

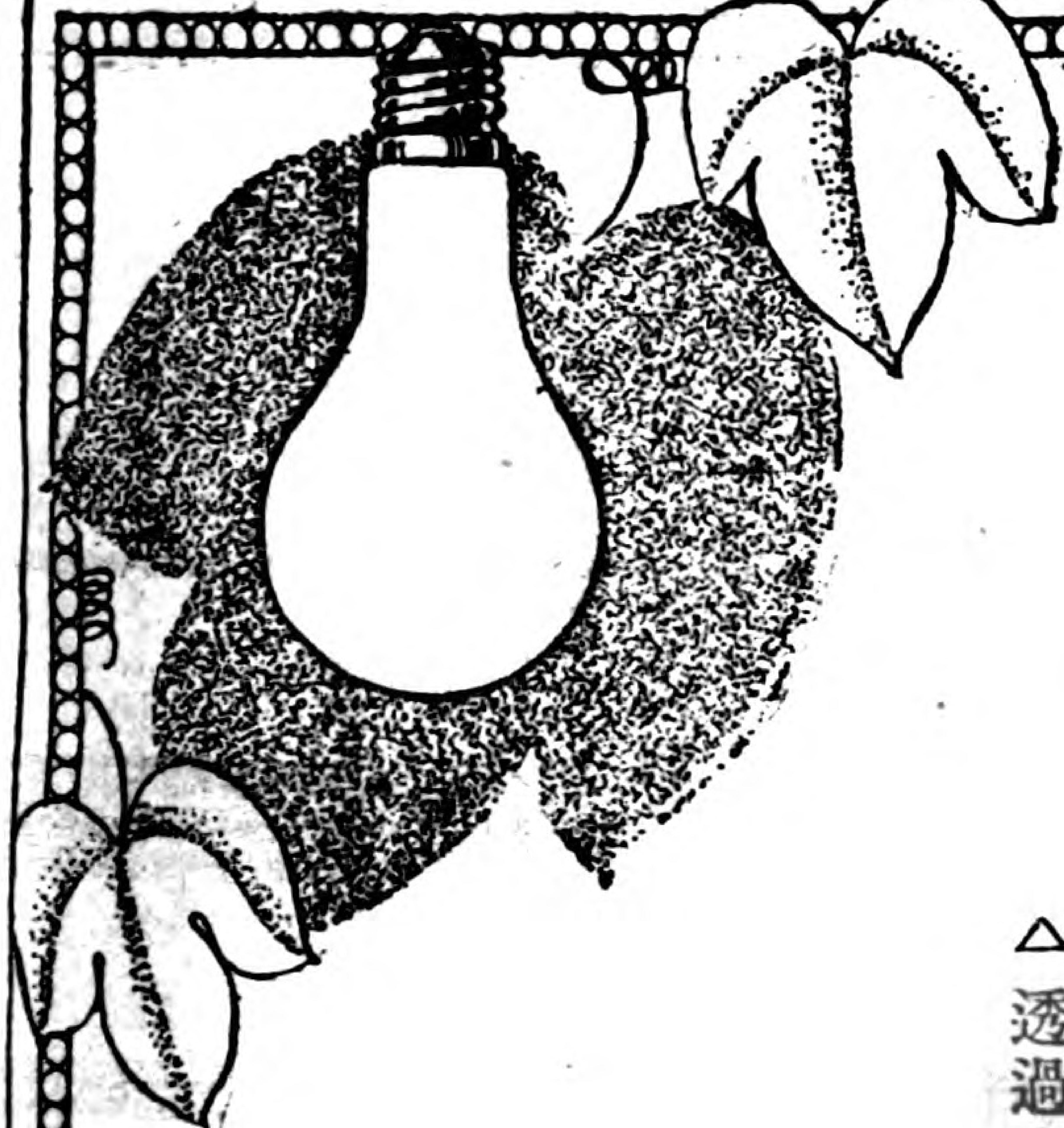
九

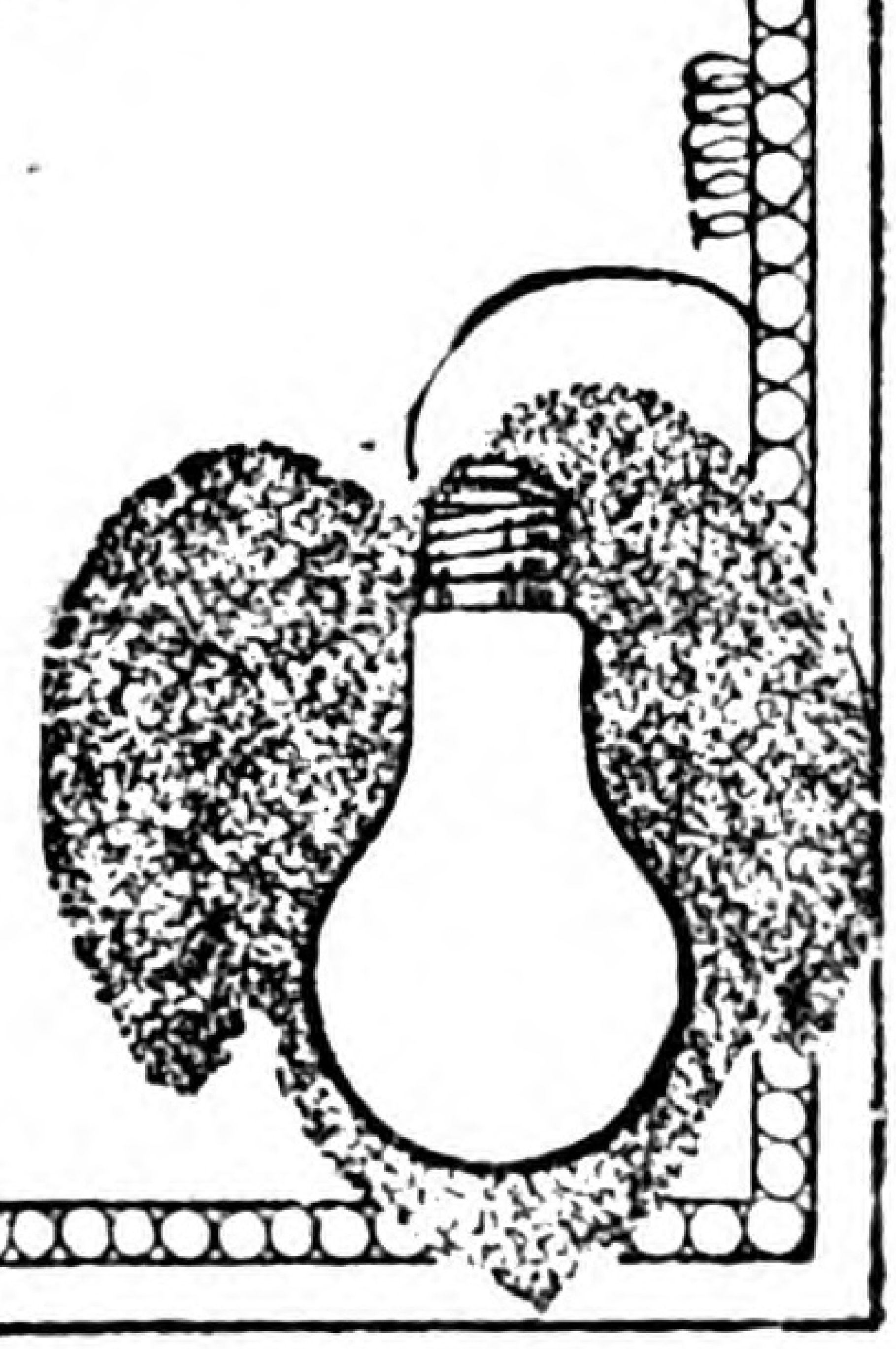
ロシアは、その極端な制度の改革するに當つて、いろ〳〵のことを經驗した。が、そのうちでも、資本家に對する徹底的な復讐的態度をとつたことが、決して合理的なものでなく、また、勞働者にとつても幸福なものでもないといふことをまざ〳〵と感じたにちがひない。生產機關を勞働者の手におさめても、その經營方法の無經驗であるため、產業を荒廢せしむればかりであることを體驗したにちがひない。こゝにおいてか勞農政府は、帝政時代における銀行家、商業家、企業家、資本家の經驗と手腕とを籍りて、經濟的復興に當るべく努力した。かの一九二一年に新經濟政策を施行するやうになつてからのロシヤは、多くの人たちから、全く資本主義に復歸したものであるといはれてゐるが、その政策進行の理想的見地からこれを見れば、勞働者と資本家とが相互の權利を承認しての、協調主義による產業改革であるといつても差支へないと思ふ。

とは申すものゝ、ロシアには、多年宣傳して來たところの、世界主義のまぼろしが、いまだに殘つてゐる。共產革命をして、どこまでも徹底せしめやうとする理想がある。新經濟政策も、やつぱり、共產革命の徹底に到るまでの、過渡的政策であるとしてゐる。けれども、人類界における經濟上の諸條件は、政治的理想よりも深刻であることは、すでに述べたところである。共產革命の理想は、そのまゝこれを存せしめるとしても、これからの經濟革命なるものが、階級意識を超脫しようとするための、勞資の協調に基づいた產業改革への道に向つて行はれるものなのではなからうか。これまでの勞働運動は、社會をおびやかすことを以て、その運動の本質的傾向であるやうに見えたのであるが、これは復讐といふ戰鬪意識が強く表明せられてゐたからのことである。けれども、つぎに來るべきも一つの經濟革命は、脅威なく、波瀾なく、動搖なく、大衆各自の社會意識の反省によつて、平和のうちに行はるべき性質のものである。まるで、これまでとは、ゆき方を異にしてゐる。

私は、アメリカの例を强調して、これだけのことを述べてみたのであるが、これは決してアメリカだけに行はるべき、特別の革命ではなくて、これからの勞働運動なるものが、いづれも、かうした經路をたどつて、も一つの經濟革命にまで進むものではあるまいか。大規模な鬪爭的勞働爭議も、このあひだのイギリスの炭坑爭議の結果が、何をもたらしたかを知つたであらう。いまや、勞働運動も一轉機を劃すべき時代となつてゐるのではあるまいか。『常識の勝利』は、つまるところ、世界の文明國のすべてをして「も一つの經濟革命」「新經濟革命」に導いて行くものではなからうか。

——一五・七・二三——





辯護士法改正の根本問題

高柳賢三

一　法治國家と辯護士業の重要性

法治主義は、それが行はれて居る國家の個人主義的であると、社會主義的であると、將又その中間的であるとを問はず、國家機關及び國家組成員の行動をば、豫め一定の規範に依て規律して置くことに存する。そして斯る國家に於る法律は、一面、此等の國家機關及び組成員の活動から、將來生じ得べき衝突を未然に防ぐ手段を、此等の豫め定まつた規範に基いて講じて置くこと〻、他面、現實に此等の衝突が惹起され、爭が發生した場合に、此等の規範に從て成るべく妥當な解決を講ずることに存する。

現代に於ける辯護士なる職業は、法律生活の此の二つの方面の有力な補助者として働いてゐる。勿論法治主義は、人民が此等の規範を知つて活動することを前提とする。從て、「法律ノ不知ハ之ヲ許サズ」と云ふ格言が法治國一般に認められる。乍然、此等の規範は、近代國家にあつては「法三章」と云ふが如く簡單なものでなく、極めて複雜である。法律學を法律學校で三年位研究しても、到底その百分の一をも知ることは出來ない。又法學の大家と雖到底法令の全部を了知してゐるものではない。日本の法律全體を記憶して居る人は、恐らく日本に一人もないと斷言しても決して過言ではない位である。從て、假令若槻首相の提唱する法文の通俗化が實現されるとしても、素人は決して法律の全體を知り得るに至るものでなく、又文句は如何に通俗に書かれたにしても、各場合の解釋は必然的に技術化するものであるが故に、素人が通俗的考で通俗的な法文の解釋を試みるとすれば、反つて誤に陷ることが頗る多いであらう。斯る事情の下に、素人は法律生活の二つの方面、即ち爭を未然に防ぐ手段を講ずるに就ても、又爭が生じた場合に之が解決を求むるに就ても、多くの場合法律專門家の補助を求むることを余儀なくせられるであらう。此の意味に於て法治主義が廢止せられさ

る限り、辯護士の職は――將來辯護士業の形式が如何に變化しようとも――その機能を法律生活の內に見出すであらう。

明治の初年、我國の辯護士の前身たる代言人制度が西洋の制度に基いて認めらるゝに至つた頃、斯る制度の輸入されたる事は、我國古來の美風を紊亂するものであると云ふ考方をする者があつた。その一例として、讃岐の老儒片山沖堂の作つた代言說なるものを擧げる事が出來る。その論旨は下の引照に示されて居る。

代言說

代言者如ニ不レ可レ不レ有者一矣。而其實未ニ必可一レ有レ之。昔在ニ王朝之盛一。民各得ニ其所一。尙何用ニ代言一之爲。降至ニ武門握一レ柄。雖ニ治忽不一レ一。當ニ其無レ事之日一。法省而訟簡。非三全無ニ寃枉一。而亦未レ有ニ代言者一也。維新以來。法令備矣。刑律密矣。然而穿鑿日多。獄訟月繁。於レ是乎有ニ代言者出一。亦時勢所レ使レ然。有ニ不レ得レ已者一耶。吾聽ニ其說一。曰。愚蒙之民。可レ免ニ寃枉一。負レ債者可ニ以相償一。違レ約者可ニ以相督一。使下有余不足者無上レ不レ得ニ其平一。天地之道固然也。然而察ニ其心術一。陽爲ニ義務一。陰爲ニ私便一。至ニ其大者一。則往ニ返三都一。與ニ上等裁判官一對理。理伸則得大捷。屈亦不レ損ニ于已一。方今士無ニ專業一。殆與ニ工商一相混。故其僅識レ字解レ事者。爭出ニ于此一。就ニ原告被告之際一。相爲詛伶。其心亦賤矣。蓋西洋之法。以レ利爲レ主。施及ニ我國一。風俗將レ頽。而朝廷不レ禁レ之。將何所ニ底止一乎。「夫民有ニ寃枉一。雖下則不レ識ニ丁字一乎有ニ親戚一焉。有ニ隣保一焉。必有ニ能辯明證據者一。以達ニ之上下裁判官一。何取ニ於代言者一哉。孔子曰。聽レ訟吾猶人乎。必也使レ無レ訟乎。是淸レ源之謂也。當ニ今之時一。雖レ不レ能レ無レ訟至ニ於代言者一。則斷然禁絕可矣。

乍然、此の頃から今日に至るまで、法治主義は我國に根强い力を張つたので、此の愛國的老儒の言も、今から見れば隨分時代錯誤的に見えないでもない。

勞農ロシアは、一時凡ての仲介業者を絕滅せしめんとする方針から、辯護士業をも廢止するに至つた。然しそれは到底實行不可能であると云ふことが分り、更にその復活を見るに至つた。勞農ロシヤの如き國家組織でも、苟もそれが革命的な專斷主義から法治主義に復歸する以上、辯護士制度が何等かの形で必要であることを示すものであると思ふ。勿論國家組織の變革と共に辯護士事務の範圍と內容とは著しく異つて來よう。然し右に述べた法律生活の二方面に辯護士の補助が必要である點に就ては、勞農ロシヤに就ても亦、他の國家に於ける場合と異る處はない。

最近我が國に於て、調停制度の範圍が益々擴大せられ、借地

借家調停、小作爭議調停、商事調停に關する法規が設けられた。それは法律生活に於ける一面たる「爭の解決」に就て、少くも此等の問題の關する範圍内に於ては、從來の司法機關——裁判所と辯護士——が妥當に働らかなかつた結果として生じたのだ。所謂裁判に伴ふ莫大な費用——辯護士への謝禮がその最大部分を占める——と時間の浪費——諸種の原因から生ずる——とは、此等の爭を解決するに、所謂「裁判」と云ふ方法では不適當であると感ぜしめた結果である。辯護士は之がために著しくその業務の範圍を縮少せられたものであると云はねばならぬ。乍然、私は此の點に就て、辯護士業に從事する方々の深い反省を促したい。斯る「法律によらざる裁判」が發生するに至る責の一半は、辯護士全體にあるのではないかと。私は裁判の歴史の教ふる處から、此の現象は一時的な、變態的な、反動的な現象ではないかを疑ふものである。乍然此の一時的變態を存續せしむる事を餘儀なくせしむる原因が存する以上、當然この變態の維持と擴張とが必要であらう。換言すれば、辯護士の介入を伴ふ現在の裁判制度を、一層有力に、一層妥當に、一層迅速に、一層安價に働かしむる責任の一半は、辯護士の双肩に懸るものと云はなければならない。

俗に「三百」と稱し、辯護士たるの資格なくして辯護士類似の行爲を爲す事を業とする者が、近來著しく増して來た。此等の者の間には隨分酷い事をする者がある事も事實である。從て、此等の階級の發生は社會的に見て望ましきものでない。然し府縣令で、三百取締に關する規定が置かれては居るが、斯る取締のみに依て之が増加を防止することは困難である。辯護士界の一部から、此等の非辯護士が辯護士の行ふべき職務を侵すことに對し、當局の嚴格なる取締を要求するのは之を理解する事が出來る。然し、われ／＼は退いて考へねばならない。何故かかる「三百」が跋扈するか。何故公衆は、有資格な辯護士が數多く居るに拘らず三百を使用するか。恐らく、それは一層簡便安價であるからではないか。少くとも一層簡便安價であると考へるからではないか。それは又反面に、辯護士に依頼することが簡便でなく安價でないからではないか。少くとも簡便でなく安價でないと考へるからではないか。此の問題は所謂「大家」には直接利害關係の少い問題で、問題は主として「小家」に利害關係が深い。そして「小家」の立場よりすれば、「三百」に依て此等の事件が奪はるゝことは困ることであり、又社會的立場よりするも、此等の事件が一定の資格なき「三百」よりは、寧ろ國家試驗に及第した「小家」に行く方が望ましいに違ひない。然し一般公衆が辯護士に近寄るのは、簡便でなく又安價でな

いと考へるのは、辯護士自身の從來の遣り方にも罪の半がないのではないか。又制度上、一般公衆を安心せしむるが如きある種の手段を講ぜしむることが、此等の「小家」の生活問題から云つても有利ではないか。單に一片の行政的取締丈では駄目なのではないか。此等も辯護士業の問題として、充分辯護士諸君、殊に「小家」の猛省を促したい點である。

斯くの如く辯護士業の存續理由に就ても、又其業務の範圍に就ても、或は思想的に或は實際的に攻撃が諸種の方面から加へられて來た。乍然法治主義が捨てられない限り、辯護士業は恐らく廢止せらるゝことはないものと見てよからう。又その業務の範圍に就ても左程憂ふるに足らぬであらう。

我司法當局は、現行辯護士法改正の目的を以て、委員會を設け熟議中であり、そして來る議會には改正案が提出せらるゝやに仄聞する。夫が如何なる改正形式を執つて現はれて來るかは之を知ることを得ないのであるが、從來幾度か辯護士側より議會に提出せられた法案はみな、「辯護士會の自治」と云ふ問題を基調として居つた。私は個人として此の運動の理想に共鳴するものゝ一人であるが、然しそれは畢竟司法省對辯護士間の內部關係の問題であつて、現代日本の辯護士法に對する重大緊切な要請であるとは認められない。むしろ現代の要求は、辯護士法の改正に依て、一面、裁判制度を一層有能なものにすることが出來るか、又一般公衆殊に依賴者――有產者及無產者――と辯護士との關係を、より妥當なものになし得るかである。勿論問題は「裁判所」「司法省」「辯護士」「一般公衆」との利益の調節を必要とし、畢竟、ある種の妥協的形式を採らねばならぬであるが、裁判の機能を一層妥當に滿たさしめ、且つ公衆の利益を保護することが少くも現代の辯護士制度そのものに對する要求である。そして又、同時に、それが辯護士業の將來に於ける健全なる發達に導く所以ではあるまいか。あらゆる辯護士法の改正案は、斯る立場から批判せられねばならぬ。然らざれば、辯護士法改正問題は、現代に於て殆と社會的意義を持たない改正であると云はねばならぬ。

二　我國辯護士制度の變遷

我國に於ても又西洋諸國と均しく、辯護士に對して世人が或種の反感を持つ。

西洋で法律家に對する世人の偏見の原因の一つは、中世紀に於ける教會との關係から來て居る。歐洲中世以來の裁判の歷史には、教會裁判所と世俗裁判所（國王裁判所）との權限爭が多く示されて居る。そして中世に於ては、宗教裁判所に於て、世

俗的な婚姻、離婚、遺言等諸般の人事問題に就ての裁判を行つたのであるが、殊に近世の初期から漸次世俗的事項は國家の裁判所の方に移つされるに至つた。從て教會側から云へば、所謂法律家は、或意味でその商賣敵であつて、之に反感を抱いて居つた。從て僧侶が教壇の上から、その說教の序に法律家に對する反感を示唆する樣うな言を弄することも稀でなかつた。從て世人の、法律家殊に辯護士に對する反感は、此の遠い歷史的淵源から生じて居ると云へる。西洋の辯護士、殊に英國のバリスターの如きは、立派な傳統を持つた極めて紳士的な職業であるにかゝはらず、尙夫れが法律家たるが故に世人からある種の反感を以て見られたのは、この教會裁判所と國家裁判所の對立から生じた僧侶の宣傳が、民衆の心に殘つて居るのではないかと云はれて居る。兎に角、各種の劇や小說等に現はれた「辯護士」、「法律家」は殆ど常に輕侮の目標とされて居る。

日本でも、支那の隨・唐の制度を採用して以來或種の法律學も發達し、「法曹家」なるものも出來、又「明法博士」と稱する官も設けられた。乍然辯護士の制度に當るものは全然發達しなかつた。德川時代になつても又同樣であつて、辯護士制度の發達がなかつた。訴訟を爲すのは本人に限り、本人單獨に爲すことが必要とせられ、且つ家主、名主、五人組等が「附添」或は「差添人」の名義で、本人に同伴した。そして原則としては代人を許さなかつたのであるが、只例外として、例へば本人病氣その他の事情ある時は代人を許したことがある丈である。而も此の例外的場合に、代人となり得る者に就ても、或は親族であるとか、或は「弟子」「召使」「掛りの者」であるとか、場合場合に依て一定の制限が置かれて居つて、職としての辯護士が、代人となることは全然認められて居らなかつたのであつた。只後に、原告又は被告から報酬を受け、其親屬、弟子、家來、手代などと稱し、代人として出廷する者が生じて來た。斯る者を、世人は「公事師」又は「出入師」と稱して蛇蝎視して居つた。公事師は德川幕府の綱紀亂れ、裁判所も「地獄の沙汰も金次第」と云ふ諺が生ずる位腐敗するに及んで、益々其數を增して來た。そして德川時代には、江戶の者と地方の者と訴訟する時は、江戶を以て裁判管轄地とする規則があつたので、地方の人が江戶の人から相手とられる時は、江戶に來て、所謂「公事宿」に泊つて應訴せねばならぬ慣習が生じた。公事宿の多くは日本橋馬喰町にあり、公事師は大抵同町に住んで居つた。公事師は、決して政府が認めた職業でも何でもないので、所謂「モグリ」であつた。そしてその素質も大體に於て不良で、世人が之を排斥するのも又故なきではなかつた樣うで

る。今日の辯護士制度の前身は、明治五年江藤新平の司法制度改革と共に、初めて認められたフランスの「アヴオカ」に倣つた「代言人」を以て嚆矢とするものであつて、それ以前には公認の辯護士なるものはなかつた。

我國に於て「辯護士」に對する世人の偏見の原因の一は、「公事師」に伴つた傳統的偏見が今尚世人の頭を支配して居ることに存するのではないかと思はれる。兎に角辯護士制度の關する範圍内に於て、遺憾乍ら我國の歴史の中にその光輝ある古い傳統を見出すことは出來ぬ。此點に於て、西洋では遠く、ギリシヤ、ローマ、近くは、英國等に就て光輝ある傳統を見出すのとは大いに趣を異にして居る。我國に於ける辯護士の前身たる代言人が初めて認めらるゝに至つたのは、明治五年八月三日太政官無號達で公布された、司法職務定制第十章中にある下の規定である。

第四十三條

代言人

第一各區代言人ヲ置キ自ラ訴フル能ハサル者ノ爲メニ之ニ代リ其訴ノ事情ヲ陳述シテ冤枉無カラシム、

代言人ヲ用フルト用ヒサルトハ其本人ノ請願ニ任ス

第二代言人ヲ用フル者ハ其世話料ヲ出サシム

證書人代書人代言人世話料ノ數目ハ後日ヲ待ツテ商量スヘシ

以上の規定に基いて代言人が公認せらるゝに至つたのであるが、代言人となるべき者に關する資格に關しても、又其監督的規定に就ても極めて不備であつたので諸種の弊害を生じ、遂に明治九年二月二十二日司法省甲第一號布達で代言人規則を作つて免許を得さる者に代言を依頼することを禁じた。その第一條及び第二條には下の如き規定がある。

第一條　凡ソ代言人タラントスル者ハ先ツ專ラ代言ヲ行ハントスル裁判所ヲ示シタル願書ヲ記シ所轄地方官ノ檢査ヲ乞フヘシ地方官之ヲ檢査スルノ後狀ヲ具シテ司法省ニ出ス然ル後其許スヘキ者ハ司法卿之ニ免許狀ヲ下附ス

第二條　代言人ヲ檢査スルハ左ノ條件ニ照ラスヘシ

一布告布達沿革ノ概略ニ通スル者

二刑律ノ概略ニ通スル者

三現今裁判上手續ノ概略ニ通スル者

四本人品行並ニ履歴如何

尙前の代言人規則では其職務執行につき、何れの裁判所に於ても自由に代言をなすことが出來たのを改めて、地域制限及裁判所の審級による制限を認むるに至つた。

右の規則制定後屢々部分的修正を加へたのであつたが、充分

その弊風を矯めることが出來なかつたので、明治十三年五月十三日司法省甲第一號布達で、更に代言人規則を發布し、從前の代言人規則を廢止した。

改正代言人規則の要點は、代言人を各地方の檢事の監督の下に置いた事、試驗は、司法省から問題を檢事に送附して之をなさしめた事、各地方に「組合」を設け、會則を定めて相互に名譽を保存せしめたこと、地域及審級制限を廢止したこと等である。そして試驗制度の統一や、辯護士會の前身たる「組合」のある程度の自治を認めたことや、地域及審級制限を撤廢したことは、辯護士の地位の向上につき大きな働きをなしたものと云へよう。

次で明治十五年一月一日から、刑事被告人に辯護人を附することが認められ、我古來の刑事裁判思想に大變革が來たさるゝと同時に、代言人の活動すべき新天地が開かれた。

明治二十三年帝國議會の開かるゝに至ると共に、裁判所構成法、民事訴訟法、刑事訴訟法の規定に合致する樣な辯護士法を作ることが必要となり、政府は十一月二十五日辯護士法案を提出した。法案中、地域及審級に基く職務制限を置きたる點、保證金制度を置きたる點とにつき猛烈なる反對を買ひ、遂に此等の點を削除して出來上つたのが明治二十六年制定せられた現行辯護士法である。

爾來幾度か辯護士側から、「辯護士會の自治」及び非辯護士たる三百退治に關する規定を包含する改正案を呈出した。しかし、何れも兩院を通過する程度には達しなかつた。

そして今日司法省は改正辯護士法案を作るため、辯護士、裁判官、學者等各方面に委員を求めて熟議せしめて居るのである。

我國の辯護士制度の歷史は以上の如く極めて短い。然し、その短い歷史は、大體に於て辯護士の地位向上の歷史であると云つて宜い。公事師時代よりは代言人時代、代言人時代よりは辯護士時代と、その地位は徐々向上して來た。辯護士の素質の上から見るも、又世間の信用から云つても、將た又在朝法曹に對する在野法曹としての威嚴に於ても、大體に於て漸次上騰して來てゐる。且つ我國の經濟狀態が躍進的に擴大すると共に、一件數萬圓の謝金を得る機會が決して稀でなくなつたと同時に、國民の權利思想の發達に依て訴訟の數も漸次增加して來た。從て一面、一流の人物で辯護士となり、所謂「大家」となるものも多くなつたと同時に、他面、「小家」の數をも著しく增加するに至つた。それ許りでなく、所謂「三百」の數も增加して來た。現に今民事訴訟の第一審丈でも年々二十萬件を超え、金額

から云ふても二億乃至三億萬圓に達するとのことであるから、經濟上から云ふても、其處に大きな「寶の山」がある譯で、辯護士志願者の増加するのも怪むに足らない。

現行辯護士法の基調をなすものは、その自由競爭主義であると云ふことが出來る。それは明治時代に於ける進歩思想の特色をなし、我民法その他の法律に內在する個人主義的精神と其軌を一にする。第一に、辯護士相互の間に於る自由競爭が極端に認められてゐる。地域制限乃至審級制限は全部撤廢せられて居るのであり、辯護士は全國的に、そして殖民地に於てまでもその職務を行ふのであるが故に、他國に見る樣うな地域制限及審級制限に基く自然的競爭制限はない。その結果として、大事件を少數の知名一流の大家の手に極端に集中せしむると同時に、「小家」は事件を得ることが困難となる結果を生み出し、辯護士內部の貧富の差を著しくし、其處に思想的にもブル派とプロ派を生ぜしむるのみならず、「小家」中には生活の困難から止むを得ず惡辣な手段を取る者が少からず生じ、辯護士全體の信用を傷くるに至つて居る。第二に、辯護士と依賴者との契約も、契約自由の原則に基いて居るものとせられ、歐洲諸國に於けるが如く、公定表による制限、國家の監督等に依る制限を殆ど認めて居らない。然るに依賴者は、その依賴する事件の難易等に就き判斷をなす能力なき素人であるのが常であるので、辯護士と依賴者との謝金契約は自由にして自由に非ず、爲に所謂「獅子契約」が締結される傾向が起る。從て一般公衆は、辯護士を近寄るべからざる者の如く思ひ、善良な、正直な、公平な幾多の辯護士に迷惑をかけることが多い。第三に、無產者は費用の要る辯護士を利用することが殆ど出來なくなり、辯護士はブルジヨワの寄食者たるかの外觀を呈せしめ、貧乏人弱者を扶けるといふ辯護士本來の機能は殆ど全部失はれるに至つた。

此等の點は現行法に伴ふ弊害であつて、辯護士の經濟的自由主義を極度に認めた現行法から生ずる、相當に重大な社會問題である。辯護士法の改正が現代に於て何等かの意義を有するものであるとせば、此等の點を妥當に解決した種類のものでなければならぬ。そしてそれは我國の辯護士制度が、必ず一度經過すべき修練であつて、一般公衆のみならず、辯護士制度の健全なる發達を祈る凡ての人の希望する處でなければならぬ

三　辯護士業の私的及公的觀點

辯護士は一面、依賴者の權利、利益を伸張防衛することを職責とすると同時に、他面、國家の司法機關の一部として公正なる裁判を可能ならしむる義務を負ふことは、何れの國に於ても均し

く認められる。乍然、實は此處に辯護士の職に伴ふデリケートな困難が存することを認めねばならぬ。

一八六四年の秋、フランスの有名な辯護士、且つ政治家であつたベリエ氏が渡英した。そして英國の法曹はミツドル、テンプル大食堂に於て、一夕彼の爲に歡迎の宴を開いた。出席者の一人であつたブルーアム卿は立つて、主賓ベリエ氏を英國法曹の明星アースキン卿と比較して下の如き挨拶をなした。

「私は、兩氏に於て、事件處理の完全なる熟練と無比の雄辯とを見出す。私は、此の兩氏に於て、依賴者の爲には、國王も、裁判所も、裁判官も恐れない不撓の勇氣を認める。兩氏に於て私は、總てを依賴者の利益の下に置くと云ふ辯護人の最も重要な資格を認める。英國の裁判制度は、主として裁判官の純潔の基礎の上に成立つものである。然し之に次いでは辯護人の思慮と分別と勇氣とに依て、それは維持されるのである。辯護士團體の獨立が蹂躙され、辯護人が勇氣を欠くに至る程、裁判制度の將來にとつて不幸なることはない。」

ブルーアム卿は、依賴者の利益に對する辯護士の忠誠の義務を特に高調したのであるが、それは稍々一面的の感なきを得なかつた。其處で、次の演說者として立つたコーバーン卿は、「われ〳〵の主賓が、英國法曹の理想に就て誤つた印象を懐いて佛國に歸られることを恐るゝが故に」と云ふ考からして、辯護士の義務に就て下の如く述べた。

「私はベリエ氏の卓越せる技能を感嘆する者である。然し私の考ふる所に依れば、氏の最も偉大な美點は、氏が辯護士としての經歷に於て、常に其事件を紳士的な名譽心を傷けずに取扱つた事に存する。辯護士が揮ふ武器は武士として之を使用すべきであつて、暗殺者として之を使用すべきではない。彼は依賴者の利益を正義に依て支持すべきで、不正に依て支持すべきではない。辯護士は依賴者の利益と、眞理及正義の永久的利益とを如何に調節すべきかを知らねばならぬ。」

コーバーン氏の以上の演說は、一八六四年十一月九日のロンドン・タイムスに報導せられたのであつたが、爾後辯護士の職務に關する最も重要な陳述として、英米法曹が好んで引照する所である。

辯護人の職務は、依賴者の求めに應じてその主張を法廷に於て爲すことに存する。そしてそれは原、被告兩造相對して、各各その法律上主張し得べき論點を裁判官の前に提出するとに依て、裁判官をして公平なる裁判を爲さしむるを目的とする。從て辯護士は、裁判官的態度を以て事件に對する必要はないが、裁判所が法律を正しく運用することをその主眼

とせねばならぬ。

此の點に就て逸話として傳へられて居るのは、後に米國大統領となつたエブラハム・リンコンが辯護士としての遣り方であつた。彼は何處までも正直であることに依て名聲を博し、且成功した辯護士の一人であるが、彼は初めてイリノイ州の最高裁判所に出廷した時に下の如き辯論を爲した。

「私が當裁判所で辯論するのはこの事件が最初であります。從て私は非常に綿密に此の事件を調べました。記錄の要領書を御覽になればお分りなるやうに、本件に於て唯一の問題は先例の問題であります。私は、私に有利な先例を一つも見出すことが出來ませんでした。然し相手方に有利な數個の判例を見出しました。私は此等の先例を只今裁判所に提出いたしますから、よろしく御判斷を願ひます。」

リンコンの此の態度が、辯護人としての職務を超越したものであるか否かに關しては議論があらう。しかし此の點に就て「辯護の七燈」（セヴン・ランプス・オヴ・アドヴォカシイ）の著者エドワード・パリー判事は、此のリンコンの遣り方は辯護士の正に爲すべきことであるのみならず、英國辯護士が實際行つて居るとこであるとして居る。そして、彼は云ふ、

「若しも辯護人がXが法律であると云ふことを知つて居る場合には、裁判所をしてYが法律であると信ぜしむることは正直ではない。辯護人が直接に法律を誤つて述べる場合であると、又其知つて居ることを故意に述べない場合たるとを問はず、それは均しく許すべからざることであつて、「正直」の燈を弱めるものである。蓋し辯護人は、依賴者の爲に働くのみでなく彼は裁判所の友人である。そして正直が眞の友情に缺く可からざると均しく、正直は又、正しき辯護に缺く可からざるが故である。」

翻つて我國に於ける辯護士と依賴者との關係を見る時に、われわれは右の如き二樣の方面中、特に依賴者に對する信任關係の方面のみが高調せられ、辯護士は依賴者の利益を保護することを以て足るとせられ、司法機關の一部として正しき裁判の成立を補助するといふ方面が余り高調せられないやうである。辯護士は依賴者の「味方」となり、依賴者の利益を保護するが爲には、裁判所を直接又は間接に誤るといふ弊風もなくはない。此の點は、單に辯護士界の「辯護士觀」に於て現はれて居るのみならず、又依賴人側の「辯護士觀」にも現はれて居る。そして此の種の「辯護士觀」が、裁判の結果に對して惡影響を及すものであることは明である。

勿論裁判法廷を傍聽して、辯護士が判事、檢事等と類似する職服を着用して居るのを目擊する時に、われわれは辯護士も亦

在野法曹として司法機關の一部を構成して居るものであると云ふ印象を得る。然し此の外面的印象は、辯護士の使用する所謂訴訟戰術、即ち攻撃、防禦、證據提出等の方法を熟視する時に、多くの場合直ちに裏切られるであらう。そして辯護士は、果して司法機關の一部として其機能を果して居るかに就て疑が起る。

辯護士と依賴者との契約は、我國の學說判例共に、私法上の契約として民法の適用を受くるのであると云ふ點に一致してゐる。然し私は疑ふ。此の見解は果してよく辯護士と依賴者との關係の正しき認識に基いて構成せられたものであるかと。

我國の通說に依ると、辯護士と依賴者との契約は、雇傭又は請負の性質を有するのではなく、委任又は準委任の性質を有するものであるとされて居る。民法に曰ふ雇傭は、「當事者の一方カ相手方ニ對シテ勞務ニ服スルコトヲ約シ相手方カ之ニ報酬ヲ與フルコトヲ約ス」契約であり、又請負は「當事者の一方カ或仕事ヲ完成スルコトヲ約シ相手方カ其仕事ノ結果ニ對シテ之ニ報酬ヲ與フルコトヲ約ス」契約である。之に反して委任は「當事者ノ一方カ法律行爲ヲナスコトヲ相手方ニ委任シ相手方カ之ヲ承諾スルコトニ依テ其効果ヲ生ス」る契約であり、事務の委任が「法律行爲ニ非ル事務ノ委任」の場合には、準委任として委任に關する規定が準用せらる〻。そして委任及準委任の雇傭及請負と異る最も顯著なる差異は、後者が報酬を契約の要件とするに反し、前者は之を要件とせず、「受任者ハ特約アルニ非レハ委任者ニ對シ報酬ヲ請求スルコトヲ得ス」とした點にある。委任契約を雇傭契約及請負契約と區別したのは、ローマ法以來の傳統的契約の分類に基くのである。然し辯護士が依賴人と締結する契約は、通常報酬を請求し得べき特約の附いた有償委任である。又判例に於ても、辯護士に事件を委任した以上は、特別の事情なき限り別段の約束がなくとも相當の報酬を支拂ふべきものとなつて居るので、實際に於ては委任の特色たる無償の原則は殆んど辯護士依賴者間の契約には適用なきものに至ると云つてよい。

辯護士依賴者間の契約を雇傭又は請負と見ず、之を委任と認るとしても、それは畢竟一個の私法上の契約と見ることに歸するので、辯護士の司法機關の一部として働く機能を輕視するものである。辯護士の職務は、屢々醫師の職務と同一に取扱はれる。辯護士が相談に應じ鑑定をなし、會社設立を助ける樣うな裁判外の法律事務に從事する場合に於ては、之を醫師の職務と比較することは恐らく妥當であらう。そして之を準委任契約として觀察するのも著しく不當なとでないかも知れない。乍然辯護士が所謂「訴訟委任」を受け、國家の裁判權に直接に關與す

る場合に於て、其依賴者との關係を單純なる私法上の契約關係と認めるのは、十九世紀に於て公法關係を私法的に說明せんと試みた渦卷の一ではあるまいか。

今私は此處に、辯護士と依賴者との關係を、公法上の契約とすることから生ずる諸種の法律的結果を構成する暇を持たぬ。只、私は辯護士依賴者間の關係の私的方面の高調が、學說と判例とにも及んで居ることを指摘し度いまでゝある。

四　辯護士の報酬と國家の監督

次に私は辯護士と依賴者間に於て、最も重要な問題なりとせらるゝ報酬の問題に就て幾分の考察を施さう。

我國に於ては代言人時代からして、辯護士と依賴人との間の謝金に關する契約は當事者間の自由契約とせられた。

之に對して國家は、依賴者保護の爲にする何等積極的な監督を試みて居らない。即ち辯護士及依賴者間の謝金契約が一個私法上の契約と見られて居る許りでなく、その契約の締結は、契約自由の原則に依て支配せられて居る。只民法第九十條に、所謂「公ノ秩序又ハ善良ノ風俗」に反するものと解せられるに於ては無効であらう。又各地の辯護士會に於て、一定の場合に於る最高額を定めて居ることは後に說くが如くである。然し此等の規定は、依賴者保護の規定として頗る不充分である。屢々指摘せられたるが如く、辯護士と依賴者との關係は決して平等者間の關係ではなくして、辯護士は多くの場合に於て優者の地位に立ち、依賴者は弱者の地位に立つ。謝金に關しても辯護士の申出る謝金額が果して事件の性質に照して妥當なものであるか否かは、依賴者に於て判斷することが出來ぬ場合が多い。從て辯護士の謝金が營利的となり、訴訟を高價ならしむる傾向を生ずる。此の點に就て、一部の辯護士諸君は極力かゝる傾向の生ずるのを否認するのであるが、公平に見て、之を否認することは無理である樣うに思はれる。既に物故された辯護士菊地武夫氏は、嘗て「辯護士の自省」と題する一文を草して同業者の反省を促したが、その中に下の如き所說を見る。

「辯護士に相談する人は不幸に遭遇せしのみならず救濟の途を知らぬのである醫師に病因病狀を說く患者の如くに或る法律に依て或る權利があり又は義務がないなど論ずる依賴人も偶にはあるけれども多くは西も東も分らぬ者である恰も山中で路を失つた人の樣うである其人を導いて里方の大道へ出すのが辯護士の職業である而して進ましむるも將た退かしむるも順路に由らしむるも將た迂路を回らしむるも唯案內者の胸一である斯かる信賴而かも祕密の信賴を擔い斯る權力を握る地位には重大なる

責任のある事は勿論であるが其裏面には誘惑の多いこと亦問はずして明かである方向の誤れるを知りながら倚途なき方に進ましめ順路のあるを詳知しながら故らに迂餘曲折の逕をたどらしめ又は始めは易きを說いて中頃より難きを示すが如きは固より言ふ迄も無いが恕すべからざる過誤失策に依て出路を失はしむるも亦受託の任を辱しむるものである此類の人の多數なると依賴人の境遇を察し自己の地位を知て之に相當する高潔の心術を懷く人の多數なるとは辯護士の品位の繋る所の第一の追分である。」

「山中で路を失つた人」と「案內者の胸一つ」との間には對等者と見られない或種の關係が發生するのではないか。「斯る信賴、而も秘密の信賴を擔ひ」「斯る權力を握る地位」には、謝金に就ても或種の誘惑が伴はないのであらうか。「獅子契約」の締結せらるゝの危險性は其處に包藏せられる。

辯護士と依賴者との報酬契約を當事者間の自由契約に委し、國家が之に對し何等の監督を爲さぬことから生ずる他の結果は、辯護士と依賴者との間に於ける謝金契約の內容を、契約當事者以外の何人にも知ることを得ざらしむるにある。辯護士と雖自ら締結したる謝金契約以外には、正確に之を知ることは不可能である。又學者が之を研究せんとしても、斷片的知識以外之を知る道がない。又國家と雖統計等に依て其概觀を示し得ない。從て此の方面は全然暗黑であると云つても差支ない。元來辯護士の報酬は、訴訟に要する費用の一大部分を爲すものであつて、此の點を明かにすることは、國家がその裁判制度の高價に過ぎるや否やを明かにするが爲の最も重要なる點であると云はねばならぬ。然るに現行制度の下に在つては、國家としても之を明かにすべき何等の方法がない。それは確に司法制度の一大欠陷であると云はねばならぬ。

以上の如き考察からして、諸外國に於ては、一面、依賴者の利益を保護すると同時に、他面、司法制度が如何に高價又は安價に運用せられて居るかを知るに便宜な規定が設けられて居る。

第一に注意すべきは、辯護士の報酬を公定する主義である。此の點に於て最も顯著なのは、ドイツ、スヰツツルの各州、オーストリヤ等であるが、尙英、佛、伊の諸國に於ても、部分的に公定主義が認められて居る。獨逸では一八七七年から、辯護士手數料規則なるものを設けて、辯護士の受くべき手數料を劃一的に規定したのであつた。其後幾度か改正せられ、殊に戰後マルクの價値が下落すると共に其率に就て屢々大改正が行はれた。一九二四年、改正された現行法の下に於ける民事々件に關する辯護士の手數料價格を示せば次の如くである。

訴訟物の價格（金貨マルク）	手數料及百分率（金貨マルク）
二〇マルク迄	二マルク
二〇マルク――六〇マルク迄	四マルク
六〇マルク――一〇〇マルク迄	六マルク
一〇〇マルク――一五〇マルク迄	八マルク
一五〇マルク――二〇〇マルク迄	一〇マルク
二〇〇マルク――五〇〇マルク迄	五分
一〇〇〇マルク迄	四分
五〇〇〇マルク迄	三分
一〇、〇〇〇マルク迄	二分
一〇〇、〇〇〇マルク迄	一分
一、〇〇〇、〇〇〇以上	五厘

辯護士が依頼人の訴訟代理を爲す場合には、調査其他職務上の行爲に對する訴訟手續手數料として右の手數料を受け、そして口頭辯論手數料として更に右の手數料を受け、又證據調べ料として其半額を依頼者より受けることゝなつて居る。從て依頼者は訴訟を爲す場合には、右の表に示されたる額の二倍半を支拂ふことが通常となつて居る。

辯護士は依頼者との特約に依て、右の表以上の契約をなすことを得るのではあるが、實際に於ては斯る特約は極めて稀に行はるゝやうである。

此の劃一的の報酬の公定は、或る意味で極めて機械的であつて、特定の事件を取て考へれば、辯護士の精神的勞力と相應しない場合が起らう。即ち辯護士の精神勞働は事件の金額に依て難易が決定せらるゝものでなくして、事件の難易煩簡に依て決定せられるのであるからである。然し又大體に於て觀察すれば、金額の少い事件に就て骨が折れることもあらうが、又同時に金額の多い事件で割合に樂な場合もある。從て辯護士が繼續的に共業務を營む場合には、平均が取れるのであるが故に甚しく不公平なものとはならない。又金額の少い事件で手數料も少い場合には、辯護士が努力しないであらうと云ふ心配もあるが、斯る辯護士は畢竟評判が惡くなるので辯護士は相當に此等に就ても努力を余儀なくさせられるため、大した不都合はない。又手數料が公定して居るといふことは、辯護士が一々報酬額を依頼人と交渉する面倒もなく、又依頼者の方でも費用に就て大體の見當がつくことになる。又一般公衆が辯護士に對して抱く暴利行爲の疑も無くなるわけである。

第二に「訟訴當事者の辯護人の費用をも敗訴當事者をして支拂はしむる主義」に關聯して、辯護士と依頼人の報酬が間接に國家の監督の下に立つて居る事が諸國に見られる。例へば英國

に就て見ても、法廷外辯護士、即ちソリシターに就ては、手數料が公定せられて居るのであり、法廷內辯護士、即ちバリスターに就ては、ソリシターとの話合ひで報酬額が定められるのであるが、敗訴の當事者が支拂はねばならぬ訴訟用費額はソリシターの手數料のみならず、バリスターの謝禮をも包含するのであるが故に、此等は一應裁判所の役人（マスター）の目を經ることになる。勿論當事者が事件不相應な人數のバリスターを使用したような場合には、其分に就ては、結局勝訴當事者の負擔に歸せしめるのであるが、兎に角一應は裁判所の役人の檢閲を經ることになる。序であるが、英國のバリスターの謝禮は、何等の拘束なく自由に之を定むることを得るのであるが、此の場合に於ては、その交渉の相手方は法律專門家たるソリシターであつて、素人たる依賴者ではない。從て優者と劣者との關係を導き出す我國の事情とは、頗る其趣を異にするものであると云はねばならぬ。

第三に、印度では英國に於ると等しく、法廷內辯護士と法廷外辯護士とを區別し、前者に於ては手數料の率が一定して居り、後者所謂ヴァキールは、依賴人と任意に報酬問題を契約し得ることになつて居る。然るにその契約に就ては、印度辯護士法第二十八條に依て下の如き制限が置かれて居る。

辯護士ノ爲セル又ハ爲スヘキ事務ニ關スル過去又ハ將來ノ勞務手數料諸掛リ支拂金の全部又ハ一部ニ對シテ支拂フ金額又ハ支拂方法ニ關シテ辯護士ト依賴者トノ間ニ締結セル契約ハ之ヲ文書ニ作製シ前記ノ人々之ニ署名シ且作成ノ日ヨリ十五日以內ニ地方裁判所又ハ契約ヲ結ベル事務ノアル部分ノ爲サレタル又ハ爲サルヘキ裁判所ニ屆ケ出ルニ非レバ無効トス

（第二十八條）

右の契約ニ基キ訴訟提起アリタル場合ニ於テ右ノ契約ガ公平相當ナルコトヲ立證セサル時ハ裁判所ハ契約金額ヲ減少スルカ、又ハ契約ヲ取消サシメ契約ナキ場合ト同一方法ニテ費用・手數料・諸掛リ・支拂金ヲ檢査スルコトヲ得（第二十九條）

右の規定の特色は、辯護士と依賴者の契約を裁判所に屆け出てしめるといふ條件の下に、契約の自由が認められて居る點にある。之に依て辯護士が、依賴者の無知に乘じて暴利的なる報酬契約を爲すことを間接に防止して居る。

國家が依賴者保護の爲に取つて居る手段は以上の如く諸種であるが、此の點に就て斯る規定のないのは我國と北米合衆國と丈である。契約の自由が眞に妥當に運用せられて居るとすれば、或は國家は之に干涉する必要はないであらう。然し此の點に就て輿論が幾分でも疑を持つに至る時、國家は此の暗黑なる

領域に對して光明を放つ手段を取る責任がある。我國に於て公定主義の程度迄行くべきか、或は又間接に國家をして報酬契約の内容を知り得る程度の間接の監督を爲すべきやは實際問題として考究に値ひしよう。乍然、此の點に就て何等かの手段を取る必要があるやうに見える。

五　辯護士報酬の最高額規程

辯護士の報酬額が一體何の位であるかに就て正當なる回答を與へることは、以上の如き理由からして我國では不可能である。辯護士中の或人達は此の問題に就て時々起る外部からの批評に對し、斯る批評は辯護士社會の實情に通ぜざる故に、當つて居らないと云ふのである。然しその辯護士は、自己の關係した事件に就ての報酬額は熟知して居らう。又友人等の報酬額に就ても幾分之を知ることを得よう。然しそれ以外に就て一般的に我國に於る報酬額の實情を知つて居る如く裝ひ、或は手數料と謝金とを合して一割が通常なりと云ひ、或は又謝金のみで一割だと斷言するのは何等正確なる研究に基くものでない。畢竟一個のブラッフに外ならない。事實は、批評者も辯護士自身も又は之を監督する國家機關も、此の點に就て正確な回答を與へ得ぬのである。そして夫れは報酬契約を、當事者間の自由契約に委し、何等國家の積極的監督規定を持たない現行法から生ずる當然の歸結である。

如何なる金額が辯護士の勞務に對して妥當であるかは、他の精神的勞務に從事するものゝ勞務評價と均しく、頗る困難である。私の友人の一人は、「辯護士の業務中依頼者と謝金を取決める時程嫌やなものはない」と私に云ふた。我國の如く、法律上辯護士勞務評價に就て何等の規定を置かず、當事者の自由契約として居る場合には、此の自由を如何に行使すべきやに就て、辯護士がデリケートな地位に置かれるのは尤もである。

斯る評價は勞務の難易を標準とすべきか、事件の金額を標準とすべきか。英國ではバリスターの謝禮もソリシターの手數料も徹底的に前の標準に依て居り、係爭物金額を眼中に置かない。之に反し、獨逸・スキッツル等では、大體に於て係爭物金額を標準として、事件の難易等を眼中に置かず劃一的に規定して居る。又所謂契約の自由の行はるゝ國に於ては、此等の二點、其他の事情を參酌して報酬額が定められることゝなつて居る。勞務の難易又は事件の金額の何れかを標準とする時は、具體的の個々の場合を取つて考へれば公平ではない場合が生ずるが、辯護士の職務を全體として考へれば、結局公正な勞務に對する報酬を得るに至るのである。契約自由の原則によつて報酬

が定めらるゝ場合には、具體的の場合に妥當な額が定めらるゝ外觀を呈するが、同時に又諸種の弊害が之に伴ふ。

元來辯護士の受くべき報酬は、一面、煙草を吹かし乍ら數十萬金を獲得する所謂「大實業家」と比較して論ぜらるべきでないと同時に、他面、辯護士業は高級な學識と技術的熟練とを要するのであるが故に、例へば之を代書人、執達吏、公證人等の所得と同一に論ずることは出來ぬ。それは又或程度の地位の保障ある官吏の報給より幾分高率であるべきことも認めねばならぬ。乍然辯護士の報酬、殊に訴訟委任を受けた場合の報酬額は、國家の裁判費用政策に直接に影響するものであり、民衆を裁判所に近づけしむるか、或は遠ざけしむるか、或は又、裁判所の利用を高價ならしめて、畢竟法律の規定を空文にするかの大問題に影響するものである。從て辯護士の報酬額は、民衆をして裁判所を利用することを躊躇せしむる程度でないことを要するのは、之れ又辯護士の職務の性質自體より由來する當然の制限である。

我國に於ては、或程度まで辯護士の取つてはならぬ報酬額を定める主旨の報酬最高額の規程が、各地の辯護士會に依て定められて居る。そして、此の最高額に就ての規定の變遷を一瞥することは幾分参考となろう。

明治九年制定に關る代言人規則には、「代言人ノ謝金ニ代言人其訴訟本人トノ協議ヲ以テ其高ヲ豫定スルモノトス」（第十三條）とあり、契約自由の原則を認め、第十四條に「謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪ル者」は「其輕重ヲ計リ裁判官直チニ之ヲ罰スルコトヲ得」る旨を規定して居る丈である。然るに明治十三年に制定された、改正代言人規則では、所謂組合（辯護士會の前身）を認め、「相當謝金の額ヲ定ムベキコト」（第十四條）を組合の定むべき規定事項の一として居る。此の條文に基いて、東京代言人組合會は、東京代言人組合規則を設け、その中に左の如き謝金に關する規定を置いた。

第三十七條　代言謝金ハ詞訟ノ主件單ニ金額ナルニ於テハ左ニ掲グル謝金表最高ノ定限ヲ標準トナシ各其輕重難易ヲ計較シテ之ヲ依頼人ニ告ゲ其異議ナキ點ニ取リ極ムベシ

謝金表

主件ノ金額	謝金最高ノ數
五百圓未滿	百分ノ二十五
一千圓未滿	百分ノ二十
五千圓未滿	百分ノ十五
五千圓以上	百分ノ十

但シ五十圓未滿ハ其事柄ニ依リ協議ノ上別段ニ謝金ヲ定ムルモ妨ゲナシ

第三十八條　詞訟ノ主件金額ニアラザルモノハ其難易ヲ斟酌シ依頼人ノ異議ナキ點ニ取リ極ムベシ

第三十九條　第三十七條第三十八條ニ掲クル所ノ謝金ハ初審控訴上告各一場ノ代言ニ用フルモノトス但シ二場以上ヲ引續クトキハ臨時依頼人ト協議ノ上謝金最高ノ額ヨリ幾分ヲ減スベシ

第四十條　判決以前原被本人ニ於テ解訟スルカ又ハ依頼人ヨリ解約スルトキハ約定ノ謝金ヲ領收スルコトヲ得

第四十一條　謝金授受ノ方法ハ依頼人ト協議ノ上便宜之ヲ定ムベシ

東京の謝金最高額は以上の如くであるが、之と比較して仙臺は更に低いものであつた。即ち仙臺代言人組合規則には、謝金に關し下の如き規定を置いて居る。

第三十條　謝金ハ詞訟ノ難易繁簡ニ由ルモノナレバ豫メ一定シ難シ故に繁雜ナル者ニ付キ高額ノ極ヲ掲ケテ之ヲ起エルヲ得サラシメ其簡易ナルモノハ適宜ニ減殺スルモノトス貸借等皆其爭フ所ノ金額に積算シ其額ニ由リ之ヲ定ムル左ノ如シ

一　金五十圓以下ハ百分ノ二十
一　金五十圓以上百圓以下ハ百分ノ十五
一　金百圓以上五百圓以下ハ百分ノ十
一　金五百圓以上千圓以下ハ百分ノ七
一　金千圓以上ハ百分ノ五

但經界離緣入會秣場海面捕魚水論等ノ如キ積算シ難キハ最モ繁雜ナルモノト雖モ一件三百圓ヲ超過セサルモノトス

然るに大阪に於ける謝金最高額は、仙臺は勿論東京に比し高率であつたやうである。即ち大坂組合代言人規則には、謝金に關し下の如き規定が置かれて居る。

第五十八條　金錢ニ關スル通常事件ハ其請求高十分ノ一ヲ以テ謝金トナスヘシ但事件ノ難易金額ノ多少に依り増減アルヲ得ヘシト雖モ十分ノ五ヲ過クルヲ得ス

第五十九條　金錢ニ關セサル事件ト雖モ金錢ヲ以テ計算シ得ヘキトキハ前條ノ如クスヘシ但書前條ノ但書ニ同シ

第六十條　金錢ヲ以テ計算シ得ヘカラサル事件ハ其大小難易ニ因テ相當謝金ノ額ヲ定ムヘシ

第六十一條　始審終審上告等ノ代言依頼ヲ併セ受クルトキハ前條ノ割合ニ從ヒ謝金ヲ増加スルコトヲ得ヘシ

明治十八年に東京代言組合會は、東京組合代言人會と改稱せられたのであるが、其際出來た東京組合代言人申合規則の第六條の規定は謝金に關するものであつて、大體前掲明治十三

年の規程と其内容を同うして居るので、此處には之を掲ぐることを止める。

次に明治二十六年の制定に掲る現行辯護士法第二十六條に、「辯護士會々則ニハ會長副會長常議員ノ選擧及其職務、總會、常議員會及其議事ニ關スル規程、辯護士の法規ヲ保持スル規程並ニ謝金及手數料ニ關スル規程其他ノ會務ノ處理ニ必要ナル規程ヲ設クヘシ」とあるに基き、東京辯護士會々則で下の如き規程を置いた。

第二十九條　職務ニ關スル手數料ハ依頼者トノ契約ニ任ス

第三十條　職務ニ關スル謝金ハ左ノ制限ヲ超ユルヲ得ス但事件ノ難易金額ノ多少ヲ論セス金百圓以下ノ謝金ヲ受クルハ依頼者トノ契約ニ任ス

主件ノ金額	謝金最高ノ數
五百圓未滿	百分ノ二十五
一千圓未滿	百分ノ二十
五千圓未滿	百分ノ十五
五千圓以上	百分ノ十

第三十一條　刑事辯護及ヒ金額ニ見積リ難キ事件ノ謝金額ハ依頼者トノ契約ニ任ス

第三十二條　金額物件ヲ混入スト雖モ大體ニ於テ見積リ難キトキハ前條ニ據ル

第三十三條　謝金ノ定率ハ一審二審上告審等各審毎ニ適用ス

第三十四條　判決以前依頼者ニ於テ和解解任取下等ヲナシタルトキト雖モ約定ノ謝金ヲ領收スルコトヲ得

右の規程は「手數料」(着手金)と「謝金」(成功謝金)とを區別して設けられて居る。此の以前に於る規程では、「謝金」といふ名稱は用ひて居るが、恐らく廣義の謝禮の意味で「手數料」と區別した意味の、所謂謝金(成功謝金)ではないのであらう。

右の新規程は謝金(成功謝金)最高の數に就ては、従前の「謝金」表を其儘繼承して居る。然し只「手數料」なるものを別にして、依頼者との契約に任せて居るのであるからその範圍に於て、從來より率が上つたものと見られるかも知れない。

明治三十五年に、東京辯護士會々則が改正せられた。其會則の手數料及謝金に關する規程は左の如くである。

第三十五條　財產權上ニ關スル事件ノ手數料ハ依頼者トノ契約ニ任ス

謝金ハ係爭物價格ノ十分ノ五ヲ超ユルコトヲ得ス但シ百圓未滿ノ事件ニ就テハ此ノ制限ヲ用ヰス

第三十六條　前條ノ規程ハ各審毎ニ適用ス

第三十七條　刑事ノ辯護及財產權上ニ非サル事件ノ手數料及

謝金並に顧問料鑑定料ハ依頼者トノ契約ニ任ス

第三十八條　手數料及謝金ハ裁判以前依頼者ニ於テ和解・取下・拋棄・解任ヲナシタルトキト雖モ之ヲ領收スルコトヲ得

右の規定に依れば從來認められて來た最高額を十分の五まで騰げたのである。從來の率に依る五百圓未滿に就ては百分の廿五、一千圓未滿に就ては百分の二十、五千圓未滿に就ては百分の十五、千圓以上に就ては百分の十と云ふ段階を廢止した許りでなく、百圓以上の事件に就ては、從來東京では例のない「百分の五十」に迄引揚げられて居る。如何なる理由で斯る改正が爲されたのであるかは之を詳にすることを得ないのであるが、之に依て從來辯護士の謝金契約に就て置かれた制限を、假成り廣い範圍迄撤廢したのであつた。

右の規定は、現在に於る東京辯護士會々則及之と對立する第一東京辯護士會々則の規程として行はれて居る。（日本全國各地辯護士會が定めた謝金最高限度、及無制限範圍の表に就ては拙著「新法學の基調」三三四――三三七頁參照）

右の如き此の問題に關する短い歴史的變遷を一瞥して、われわれは次の二つの點に注意すべきである。

第一に、辯護士の報酬の問題は明治十三年の改正代言人規則に依るも、又明治二十六年の辯護方法に依るも、組合乃至辯護士の定むべき事項として居る。即ち辯護士會の自治の範圍に任せて居るのである。そして辯護士會に委任した規程事項は單に、「相當謝金ノ額ヲ定ムヘキコト」（改正代言人規則第十四條）及び「謝金及手數料ニ關スル規程」（辯護士法第二十六條）と云ふ極めて概括的な文句で云ひ表はされて居る。此の概括的な委任を實現するに就て、辯護士會は詳細に謝金の問題を規定することも勿論その自由の範圍内に屬するのであらう。然るに代言人時代に於ても、又辯護士時代に於ても、此等の規程は單に謝金最高額を定めるに止り、標準價格を示すべき公定表作制等には及ばなかつた。而も代言人時代及辯護士時代の初期に於ては、最高額に就て相當低率を保障する如き、稍々詳しき最高額を示したるに反し、明治三十五年以來の會則は、百圓以上の事件に就ては、一率に百分の五十と云ふ制限を置くに止め、かくして辯護士の依頼者と締結し得べき契約自由の範圍を著しく擴大した。此の點に於て私は、辯護士會の自治權が果して依頼者を保護する方面から充分行使せられたるや否やを疑ふのである。

第二に、現行法に於ては、謝金の問題を辯護士會の會則に任せて居るが、此の點は果して正當なる方法であらうか。若しも一定の事項が辯護士相互間の問題に止るならば、之を辯護士

會の自治に委するとが適當であらう。辯護士會が、此の方面からその自治を主張するのは當然であらう。乍然謝金の問題は、辯護士相互の問題ではなくして、辯護士對依頼者、辯護士對司法の問題である。此の種の問題に就て、之を辯護士會の會則に委するのは穩當を缺くものであつて、寧ろ國家が直接に其法律又は命令に依て規定すべきではないか。殊に辯護士會に委せられた此等の規定事項が、辯護士會に依て如何に取扱はれたかに關する歴史を眺めて私は益々其感を深うするのである。

六　所謂成功謝金問題

辯護士の報酬問題に關聯して問題になるのは、我國に於て「大家」と「小家」とを問はず、廣く行はれて居る成功謝金の慣習である。

先に論じたるが如く、我國の辯護士と依頼者の關係は著しくその私的方面が高調せられて居り、司法機關の一部をなし、正しき裁判が成さるゝことを補助すると云ふ公的方面が輕視せられて居る。依頼者の利益を何處迄も主張、防衛せんとするの餘り、その公の職務たることを忘れ、或は訴訟遲延を計り、或は時に紳士らしからざる手段に訴へる等、裁判の公平迅速に行はれることを妨げる弊がある。そして所謂成功謝金なるものは、此の傾向を益々助長するものである。蓋し辯護士は裁判の結果に對し、「直接」の金錢的利害關係を持つに至るのであるが故に、自然依頼者の「味方」となり、勝訴のみを目標とする傾向が發するのは見易き理であらうと思ふ。

成功謝金の慣習は、一見依頼者に都合のよき制度である外觀を呈する。蓋し商事々件等に就ては、純私的觀察よりすれば訴訟當事者が負けた上に通常の費用を支拂ふのは一見頗る酷であるやうである。從て震災前、私が東京朝日新聞紙上に於て成功謝金を問題とした際、法曹界に相當の波紋を畫き出し、遂に中央法律新報は成功謝金に關する特別號を出すに至つたのであつたが、其中に現れた辯護士諸君は、殆ど一致して、成功謝金を以て維持すべき制度なりとして論じられた。夫れ等の論者中には、私の平素尊敬する一流辯護士をも包含して居つたのであるが、當時私は夫れ等の議論を熟讀して見た。然し私は成功謝金謳歌論に改宗することが出來ぬことを遺憾とする。忌憚なく云へば、此等の議論は、皆我國に行はれて居る此の慣習のみを見るに止り、世界的眼光を以て此の問題の是非得失を觀察して居らない。此等の議論は、成功謝金契約といふ我國の明治時代に起つた慣習が唯一の合理的制度であるかの如く取扱ひ、歐米、印度等の辯護士が、全然之とは異つた方法で報酬を受けて

辯護士業を行つて居るといふ事實を見て居らない。そして彼等が擧を揃へて成功謝金を非議して居る顯著なる事實を默殺する。從て又、此の特種な成功謝金が特殊な我國の事情に基くものである理由を證明して居らぬ。「存在するものは凡て合理的なり」と云ふが如き、ヘーゲル擬ひの論法で此の問題を取扱つて居る。然し歐米諸國・インド等に於る經濟及社會事情と、我國との經濟及社會事情との差異は、此の慣習の可否に就て、異つた結論を生み出さしむるものであることを證明するのは恐らく不可能であらう。第二に、此等の議論は、凡て問題の私的方面にのみに着眼して、公的方面を閑却して居る。辯護士と依頼者との關係のみに着眼して立論し、辯護士が裁判機關の一部をなして居るので、其方面に此の慣習が如何に影響するかを充分に考へてない。此の點は成功謝金謳歌論の致命傷である。

成功謝金の習慣が望ましからざる習慣であるといふことは、主として辯護士の公的性質から由來するものであつて私的方面より論ずる時は、或場合に於て此の慣習が依頼者に都合の好き場合もある。然し又他の場合に於ては、成功の見込み少きときは、手數料を多くして成功謝金を小額にするといふやうな色々な絡繰が行はれて、必しも依頼者に有利となるものではない。（此の點の詳細に就ては拙著「新法學の基調」三一四頁「成功謝金の慣習」三二二頁「成功謝金問題再論」參照）。然し假令或る場合に於て幾分依頼者に都合よしとするも、それは裁判の改善を圖ると云ふ公の利益の前に譲歩すべきである。

今私は所謂成功謝金契約なるものが如何なる形式で結ばれるかといふことを示す爲に、民事及刑事の訴訟委任の契約書の雛形を二通左に掲げる。

契約書

一

右貴殿ニ委任候ニ付テハ左ノ條項ヲ契約致候

一本件手數料ハ即時金　　圓差上申候
　但委任契約終了ノ如何ナル理由ニ因ルヲ問ハス返金ヲ請求不致候

一成功謝金ハ判決言渡ノ即日　　差上可申候
　但一部成功ノ場合ハ其ノ割合ニ依リテ差上可申候

一貴殿ノ責ニ歸ス可カラサル事由ニ因リ御盡力ノ中途ニ於テ委任終了致候トモ謝金ハ全額差上可申候

一印紙其他訴訟手續ノ進行上生スル必要ノ實費及旅費等臨時ノ費用ハ總テ御請求次第直ニ差上可申候

一謝金其他立替等ノ支拂遲延致候節ハ訴訟書類御留置相成候トモ不苦候

右契約書依テ如件

大正　年　月　日

殿

契約書

一

右貴殿ヘ委任候ニ付左ノ如ク契約致候

一本件手數料ハ金　圓ト定メ即時差上可申候

但事件結了前委任契約終了スルコトアルモ其理由ノ如何ヲ問ハス手數料返金請求不致候

一本件成功謝金ハ左ノ如ク相定メ判決言渡ノ即日差上可申候

一無罪免訴又ハ免刑ノ時金　圓

一刑ノ執行猶豫ノ時金　圓

一刑期罰金以下ノ時金　圓

一上告審ニ於テ破毀ノ時金　圓

但事件終了前貴殿ノ責ニ歸スヘカラサル事由ニヨリ委任消滅シタル時ハ成功ト看做シ前記謝金全額差上可申候

一本訴訟ニ付キ必要ナル費用ハ御請求次第直ニ差上可申候

一本契約ハ第　審迄ノ契約ニ有之候

一本契約ヨリ生スルコトアルヘキ一切の爭訟ハ裁判所ヲ管轄裁判所トナスコトニ合意致候

右契約書如件

大正　年　月　日

辯護士　殿

以上の雛形は其一例に過ぎないが、之と大同小異の形式が相當に廣く行はれて居ると見ても大過なきものであらう。此の形式に盛らるべき具體的內容は、辯護士に依て異るのであり、又同一の辯護士にしても、場合に依て異るであらう。そして凡てが依賴者との自由契約に依て定るのであるから之を正確に知ることは何人にも出來ないのである。民事々件の場合に於ては、「係爭事件の買取」に近き契約も締結せられ、又刑事々件に就ては、起訴、不起訴を條件として成功謝金が取決められるが如き極端な場合もあるやうである。乍然其何れの場合たるとを問はず、辯護士の報酬を所謂「成功」と否とに關らしめて居ることは一である。そして此點が辯護士をして依賴者の「味方」をするといふ色彩を強くし、司法機關の一部であると云ふ色彩を弱くする傾向を持つのである。

成功謝金契約が斯る弊害を生じて不都合であるといふことは、辯護士制度に就て舊い經驗を嘗めた歐洲辯護士界の定論で

ある。私は近頃歐洲に再遊し・英・佛・伊・獨・スキッツル等に於て、それ等の國の辯護士と此の問題を諸種の方面から議論する機會を得たのであるが、何れも皆此の制度を不都合とすることに一致して居つた。

嘗てベルギーのリエージュで辯護士國際會議の第二回總會(Congres internationals des avocats, 2e-Session, Septembre 1905) が開かれた際、「外國の辯護士をして、自國法廷に於て辯護士の職務を取らしむるの可否」と云ふ問題が論じられた。其議事錄によるとベルギーの代表は、「成功謝金」を取るとを認めるやうな國の辯護士が、わがベルギーの法廷で辯論するのは、ベルギーとしては困る。斯る辯護士は依賴者の「味方」となつて法廷に現れ、眞に裁判所を助ける意味で法廷に出て來ない。從て、斯る辯護士の出廷を許すことは、我國の裁判の神聖を傷けるものであつて、ベルギーとしては、各國に於て成功謝金制度が禁止されて居らぬ限りは、外國辯護士の出廷を許すことは出來ない」と述べた。議題に對するベルギー委員の結論が、正當なりや否やは之を別とし、その理由として說明された成功謝金に關する議論は、ベルギー法曹の輿論を代表する許りでなく、又同時に歐洲全體の法曹界の意見を代表するものである。米國に於ては、或種の辯護士の間には、成功謝金契約を結ぶ慣習が存するが、然し米國に於る法律家の意見は大體それが惡慣習であるといふことに一致して居る。

十七年間辯護士としての經驗を有する社會法學の泰斗、ハーバード大學法學部長ロスコー・パウンド氏は、此の問題に就て、私に下の如き意見を述べて寄越した。

"As to the matter of contingent fees, I think you could make no greater mistake than to introduce that system into Japan, or if you have it there, to allow it to gain a foothold. I think all thoughtful American lawyers agree that it has been productive here of nothing but evil. The moment you give a lawyer an immediate pecuniary interest in the event of a lawsuit, you invite him to cease to be in any sense an officer of the court, or an agent of justice, and turn him into a mercenary employed by one of the parties to fight fair or foul with an eye simply to the result."

事理は極めて明白である。敢て泰西碩學の意見を待つ迄もない。成功謝金の慣習は、我國司法を、より純潔ならしむるが爲に廢棄せられねばならぬ。

七　地域制限問題と大審院辯護士問題

現行法は、他の明治時代に於るが如く、個人主義的色彩が强い。自由競爭及契約の自由がその根抵を爲して居る。それが依賴者との關係に於て如何なる形式を取つて現れて來たかは、此れ迄論じたところで分るであらうが、同時に又それは辯護士相互間の關係としても現れて居る。現行制度の下に於て、辯護士はその職務を執行する地域及裁判所に就て何等の制限が置かれて居らない。東京の辯護士は、或は大阪、或は長崎、或は又台灣に於てもその職務を執行することが出來る。又裁判所に就ても、區裁判所、地方裁判所、控訴院、大審院等各審の裁判所に於て、自由に其職務を執行することを得る。

此點に關する明治時代に於る沿革を見るに、明治九年に至る迄は、地域制限なるものが無かつたのであるが、同年に制定された代言人規則に依て、職務執行に就き地域制限が認めらるゝに至つた。即ち代言人の職務執行の地域は府縣裁判所に限られ、只上等裁判所で免許狀を受けた者は、その上等裁判所で代言を爲すことを得、又、大審院に就ては、免許狀を要せず、全國の代言人をして自由にその職務を行ふことを得しめたのであつた。明治十三年の代言人規則では、此の地域制限を撤廢して「免許ヲ受ケシ代言人ハ大審院及諸裁判所ニ於テ代言ヲ爲スヲ得」（第三條）る旨に變更された。更に現行辯護士法が制定せらるゝ際司法省案として提出せられた辯護士法案に於て、左の如き規定が置かれむとした。

第十一條　地方裁判所ノ名簿ニ登錄セラレタル辯護士ハソノ裁判所及ソノ管內ノ區裁判所ニ於テ職ヲ行フコトヲ得控訴院ノ名簿ニ登錄セラレタルモノハ其院及其管內ノ下級裁判所ニ於テ職ヲ行フコトヲ得

大審院ノ名簿ニ登錄セラレタル者ハ各裁判所ニ於テ職ヲ行フコトヲ得

第十二條　各辯護士ハ所屬裁判所所在ノ市・町・村內ニ住居ヲ定メ又ハ事務所ヲ設クヘシ

各辯護士ハ其住居又ハ事務所ヲ所屬裁判所及所屬ノ辯護士會ニ屆ケ出ツヘシ

第十三條　所屬裁判所ノ管轄外ニ在ル裁判所ニ於テ職ヲ行ハントスルトキハ辯護士ハ其事由ヲ表示シテ所屬裁判所ノ長及職ヲ行フヘキ裁判所ノ長又ハ監督判事若シクハ一人ノ判事ノ認許ヲ受ク可シ

地方裁判所ノ所屬辯護士ニシテ控訴院ニ出廷スルノ認許ヲ

得タル者ハ事實ノ陳述ヲ爲スコトヲ得ト雖モ辯論ヲ爲シ及書類ヲ作ルコトヲ得ス

地方裁判所若シクハ控訴院ノ所屬辯護士ハ如何ナル場合ニ於テモ大審院ニ於テ職ヲ行フコトヲ得ス

右の法案は地域及び審級に依つて、辯護士の職務執行の範圍を限定せんとしたのであるが、辯護士に階級を設けるのは不都合であると云ふ議論と、辯護士の職業の自由を制限するのは不都合であると云ふ議論とが勝を制し、現行制度に於るが如き無制限の職務執行の自由が認めらるゝに至つたのである。それは當時の時代思潮たる自由民權の潮流に合致したものであつて、決して怪しむに足りない。

此の自由競爭のレジームは、辯護士相互の間に於る貧富の懸隔を益々擴大し、大事件の多數は極めて少數の一流大家の手に集中し、それ等の大家は東奔西走、全國に亘つてその職務を行つた。同時に又衣食に窮する幾多の辯護士を生じ、此等の人達はパンを得るが爲に卑劣なる手段を弄するの已むを得ざるに至つた。之は無制限な辯護士相互の間に於る自由競爭のレジームが生み出す當然の結果である。

自由競爭といふことは、各人の努力勤勉心を鼓舞すると云ふ效果があるのであつて、全然之を無くすことは、反つて辯護士の向上心を衰頽せしむる傾向があらう。從て此の問題を解決するが爲に、「辯護士會が事件を受付けて之を適當なる辯護士に配付する」といふフオイヒトワンガーの提案（Sigfried Feuchtwanger, Die freien Berufe, im besonderen: die Anwaltschaft, 1922, SS. 318 seq.）の如きは、或は少しく極端に走るのではないかと思はれる。全然何等かの方法を以て、此の現象を緩和する方策を講ぜざる以上、辯護士の司法機關の一部たる色彩は益々薄らいでゆくのではないかと思はれる。

自由競爭のレジームを幾分緩和せしむる方法として、地域制限の問題と、審級に依る職務制限の問題とは、新なる立脚地――明治時代に司法省が考へて居つた處とは全然異つた――より研究せられねばならぬ。

司法省は辯護士法改正に關聯して、嘗て各地辯護士會に「辯護士ノ所屬ヲ本トシ職務ヲ執行スルコトヲ得ベキ裁判所ヲ限定スヘキヤソノ限定ノ標準如何」「大審院所屬ノ辯護士ヲ定ムヘキヤ」を諮問した。之に對する東京辯護士會と横濱辯護士會とは全然反對の立場を取つて居る。其答申は下の如くである。

東京辯護士會の答申

其必要ナシ

理由

(一) 國民カ自己ノ信頼スル辯護士ヲ自由ニ選擇スルノ途ヲ塞キ人權ノ伸張ニ不當ナル制限ヲ加フルモノナリ

(二) 辯護士ノ職務ノ自由ニ對シ濫リニ制限ヲ加ルモノナリ

(三) 交通機關完備シ且劃一的法規ノ行ハルルノ我國ノ現狀ニ於テハ地域制限を設クルノ必要ヲ見ス

(四) 辯護士カ各地ニ於テ自由に其職務ヲ行フハ朝野法曹ニ刺激ヲ與ヘ全體的ニ圓滿ナル向上發達ヲ助成スルノ利益アリ

横濱辯護士會の答申

地方裁判所管内ヲ限リ職務ヲ執行スルコトヲ得ヘキヲ原則トシ例外トシテ他ノ裁判所ニ繋屬スル事件ノ訴訟當事者トナリタル場合ハ其事件ヲ取扱フコトヲ得ヘキモノトス

控訴審ハ控訴院管内ノ事件ヲ取扱フコトヲ得ヘキヲ原則トシ例外ノ場合ハ前項ニ同シ

上告審ハ定ムルノ要ナシ

理由

辯護士ノ都市集中ヲ避ケ分布ノ均衡ヲ得ル便アリ且事件ノ澁滯ヲ免カレシム

又、長崎及熊本の辯護士會は、各控訴院管内を限度とする地域制限が必要である旨を答申して居る。

私は若しも地域制限の範圍が控訴院管内を基準として行はるるならば、辯護士の職務の自由を不當に制限するものではないと思ふ。此の主義を取る時は、東京・大阪・名古屋・廣島・長崎・宮城・札幌の七個の區域に分れる。そしてそれ等の地方の裁判所に於ても相當な重大な事件が起り、件數に於ても相當多數の事件が起つて居るのであるが故に、現在に於て東京に集中した約二千に亘る辯護士を、地方に分布する結果に立到ることは明かである。そして、辯護士相互に於ける事件の分布が今日程集中的でなくなつて來る。勿論控訴院管内に於ては、依然として集中的傾向が起るのであるが、これを全國的の大事件が、極めて少數な一流大家の手に集中するに比しては、著しく自由競爭のレジームは緩和されて來る。

地域制限の他の理由は、横濱辯護士會の答申が指摘したるが如く、事件の澁滯を防止する効果である。現在に於ては、辯護士は全國到る處の裁判所に出張し、當事者の訴訟代理人として辯論を爲すことが出來る。之は訴訟の進行を遲延せしむる一原因となつて居る。兩當事者の辯護人が同一地方に居住して居る場合には、辯論期日を定めるに就ても、その辯護人の都合を斟酌して一ケ月も二ケ月も先の期日を指定し、第二回、第三回の續行

明日に就ても同様のことが行はれる爲に、事件の終結は自然遅れがちとなり、一年で片附くものが、一年半も二年も要ることになる。地域制限を用ひれば此の點を緩和することが幾分出來る。

地域制限に反對するものは、當事者との信頼關係を高調するのであつて、長崎の依頼者が東京の醫者にかゝれないことが不都合であると同じく、長崎の依頼者が、其親任する東京の辯護士を依頼することが出來ぬとすることは不都合だと論ずるのであるが、地域制限が實行せられた後に於ては、充分信頼するに足る辯護士は地方に散布するであらうから左程心配するとはない。又此の論法を以てすれば、長崎の人が東京の裁判官に裁判して貰へぬことも不都合だと云はねばならぬ。然し裁判所の構成配分と均しく、辯護士の制度も公の設備である。單に私人相互の都合上から定まるのではない。所謂依頼者の都合なるものも、此點から或程度の制限を受けるのは當然である。況んや辯護士の地方的散布に依て、充分信頼し得る一流の大家を依頼出來ることになるのであるから、大した不都合を來たすものでない。

勿論地域制限を採用したとしても、相接する地域に就ては特別の便法を設けることは極めて容易であり、又顧問・鑑定等に就ては別に制限を置かんとするのではないので、只國家裁判權の發動に直接關與する場合に就てだけ制限が置かるべしとするに止るのである。

勿論地域制限は全國の事件を引受けて居る一流大家並に將來一流大家たらむとする人達のうちから、猛烈な反對のあるのは見易き理である。然し私は、眼前の利害問題を離れて、靜に我國辯護士全體の健全なる發達と、司法改善の見地から此の問題を熟思せられんことを、此等の人に向つて希望するのである。

次に審級に依る職務制限、例へば大審院辯護士制度の如きも、此の事件分配の觀點を中心として考へられねばならぬ。從來此の制度を提唱し、又は非難する論者も此の觀察點より之を見て居らない。即ち之に贊成せんとする人は、辯護士中殊に優勝なる者を選んで、之に名譽ある大審院辯護士といふ地位を與へんとするのであり、之を非難する人は、辯護士界に斯る階級を認むることは時代に逆行すると説くのである。前者は稍々封建的思想に傾き、後者は個人主義的な自由平等思想に捉はれて居る。若しも大審院辯護士たるものを設け、全國の事件を引受くるの自由を認むると同時に、大審院に於て辯論をなすのモノポリーを與へんとするにあるならば、それは時代に逆行するものと云へよう。乍然大審院に於る上告事件のみを引受け、それ以外の事件には一切關與することを得ざるものとする時は、事件の分布の方面から見て、充分な社會的意義を持つ提案となる

のである。即ち、大審院辯護士には充分の名聲が與へられる。然しその仕事の範圍は單に上告事件に限らるゝので、金錢的方面から見れば著しく制限を受けるのである。花も實も與へるといふのではなくして花を與へて實を奪ふのである。そして相當に資産の出來た人で殊に學者肌の辯護士などの中には、實を捨てゝ花を選ぶ人が少くないであらう。之に依て其捨てた實は、大審院辯護士以外の辯護士の間に分配せらるゝことゝなる。此の問題は、依頼者の費用の問題と關聯せしめても考察することを必要とするのであるが、經濟的打算を捨てゝ名譽ある地位を選ぶ人達であるから、恐らく此の問題は容易に片附くであらう。

地域制限及階級に依る制限は、英・米・佛・獨・スキッツル・伊の諸國に於て、沿革と形式と範圍とはそれ〴〵異るにせよ、何れも此れを認めて居る。そして辯護士間の事件の分布に就てそれが有力に働いて居る。又裁判の遲延を防止するに就ても役立つて居る。

事件の分布を一層公平にして、辯護士團體の間に於る貧富の懸隔を緩和し、ブル派とプロ派の極端な對立を防止することは、司法機關の一部としての辯護士業の將來の健全なる發達に對し、尤も重要なる事項の一つである。私は地域制限と大階級制限とが、之を解決する唯一の手段であるとは思はぬ。更によき案が考へ出されなければならぬ。然し此の兩制度が、間接ではあるが、極端な自由競爭のレジームを緩和するに役立つものであるといふことを指摘する丈である。

八　無産者と辯護士

無産者と裁判との問題、即ち無産者が均しく日本臣民として法律の前に平等であるべきに拘らず、費用が拂へない爲に實際上司法機關を利用することを得ざる問題は、司法社會問題として近き將來に於て何等かの解決を求めねばならぬことは明かである。そして費用の大部分は、辯護士への謝禮にあるのであるからして、問題は辯護士法と密接な關係に立つ。

元來辯護士の職は、「貧乏人」又は「弱者」を扶けると云ふ意味で起つたのである。ローマの辯護士所謂パトローヌスは弱者保護を主たる仕事として居つたのであつて、その辯護に對して報酬を求むるとは法律に依て禁止せられて居つた。勿論或る場合に於て、依頼者は感謝の意を表する爲に謝禮を與へたことはあるが、多數の依頼者はパトローヌスの御慈悲にすがつて辯護して貰つたのである。英國に於ても又、バリスターの起源は、權力者の不當なる壓迫に對して弱者を保護する意味で發達したのである。そして此の古い傳統は今尚辯護士道の理想として掲げられて居る。

然し時勢は變つた。辯護士が一箇の職業として成立し、その

引受くる事件も自然有産者の事件が多くなつて來た。そして少くも之に依て衣食をなす辯護士としては、無料の事件に多大の時間を割くことは頗る困難である。斯くして無産者の裁判に於る地位は、益々惡化する傾向になつて居る。

辯護士中、貧困なる友人知己の爲に一肌ぬぐ者は勿論ある。乍然無産者と裁判との問題が、斯くの如き個々の辯護士の仁俠的行爲に依て解決出來ないことは、途上の乞食に金錢を惠與するとに依て「貧困問題」の解決がつかないのと均しい。無産者が、若しも一流大家の門を叩けば、紹介なきの故を以て門前拂ひを喰ふ。去つて又仁俠を標榜する小家辯護士を訪ふも、或は拒絶せられ、或は極端な形式の成功謝金契約に依て、其回復したる金額の大部分は其辯護士の食ひ物になつて仕舞ふ。それが我國の實情ではないか。

辯護士は弱者を扶けるものであるといふ傳統的美徳を現代に於て保存せんとするならば、之を目標とする何等かの「組織」を必要とする。そして各地の辯護士會は團體として斯る「組織」を設けることが、**辯護士古來の傳統に忠なる所以ではなからうか**。かゝる組織を設けることを各地辯護士會の義務として辯護士法に規定するも辯護士の本質に反するものでなく、且つ現代の社會的需要を滿さしむる所以となるのであらう。

此の問題は、獨り日本のみの問題ではなくして、世界各國の問題である。そしてそれ等の國に於る辯護士會には斯る「組織」が發達して來て居る。我國に於ても之を辯護士會の當然の義務として認むることは、時勢の要求に適合するものであると云はねばならぬ。

此の問題に就ては他の場所に於て割合に詳細に述べたのであるから、此處に之を繰返すとは止める。（新法學の基調一八七—二八一「裁判と無産者」、本年一月中央公論に發表した「無産者に對する法律扶助の國際的形相」參照）只此處には此の問題も亦辯護士法改正に就ての重要問題であるとを指摘するに止める。

九　結　論

辯護士法改正の問題は以上述べた諸點以外の諸問題を含むのであるが、以上の諸問題は社會的見地よりするも、又司法改善的見地よりするも、最も重大なる點であると思惟するが故に、少しく卑見を開陳して識者の叱正を俟つのである。

一言にして云へば、個人主義と自由競爭に基礎を置く現行**辯護士法は、社會化せられねばならぬ。斯くして初めて私道に彷徨**はんとする辯護士業を其正道に引戻し、辯護士をして眞に司法の補助機關となし、眞に公衆への奉仕に役立たしむることが出來る。斯くして初めて辯護士業に將來一縷の光明が認められる。此等の點を適當に解決せさる辯護士法改正は社會的に何等の重大な意義を有せさるものである。（大正一五・八・一〇）

社會學的方法論の諸問題

片上伸

1

三ケ月前のこの誌上で、私は文學の方法論に就いて二三の考察を試みた。あの論では、文學の社會學的方法論の重要な根本的な問題として、社會の生存狀態と、社會の意識と、この二つのものについて、それぞれの性質と、その二つの間の關係交渉とが了解せられなければならないことを説き、そのうちの一方の、社會の生存狀態を、社會の構成要素の問題として考へ、更にそれを階級的心理及び階級的觀念形態の問題として、専らそれ等の形成樹立にあづかつてゐる知識階級の性質を説明することにとゞめなければならなかつたのである。從つて、文學の社會學的方法論としては、その組み立てのほんの一部分に說き及んだばかりであるのだから、こゝでは何よりも先づ前論で説き殘したところを主として取り扱つて行くべき順序であるのだが、その前に少しばかり言つて置きたいことがある。それは、前出の方法論上の考察に對して加へられた一二の批評についてである。尤も、それ等の批評は、その論の據りどころを示さないで、行きなり、言ひ放したやうなものばかりであるから、實は本氣になつて一々取り上げて行くのも氣がすゝまないのだが、しかしまた、一面から見ると、さういふ無造作な放言の形を取つてゐればゐるほど、一般的に是認せられやすいといふある程度までの保證をもつてゐるとも見られるわけである。言ふものは一二の人に過ぎないが、前に言ふやうな意味である程度まで文壇一方の代表的な考へかたとして見られる理由がある。文學の方法論上の考察は、もともと今の文壇の文學觀に對する不滿に由來するところが少なくないのであるから、さういふ事情から考へると、たとひそれ等の批評そのものの價値はどうであるにしても、それ等のあるものに對して、多少の釋明を試みて置くことは、文學の方法論の意味を一層明らかにするために、何程か役立つものとして考へられる。私は主としてこの意味から、

一二の批評らしいものの中について、恐らくは最も多く一般的に考へられさうな、誤解もしくは立ち場の相違から來る考へかたを取り出だして、これをかりて、前論に端折つたところを補ひながら、自分の考へを一層明らかにすることを試みよう。

2

文學の社會學的方法論に對する一般的な批評の一つは、文學研究のための方法論の必要は認めるが、社會學的方法がその「最良」なものではなく、それればかりでは「純正な文學研究にならないおそれがある」から、「まづ文學鑑賞の方法」が説かれなければならないといふのである。尤もかういふ論者の言ふことは可なり曖昧であつて明確に解しがたい點もあるのだが、とにかく、文學の社會學的方法と、文學の鑑賞法といふものとを、全く別々の二つの方法として考へてゐるらしいところに、そのどちらに對しても正しい了解をもつてゐないことが察せられる。文學の社會學的方法が、文學の鑑賞的方面の過程を全く抜きにして完成するものでないことは、前の私の文章を正しく理解するかぎりに於いて、明白でなければならない。文學の社會學的方法は、これまで用ひふるされて來た鑑賞一點張りの方法に對する不滿から、文學現象に對して、さらにそれ以上の統一ある秩序ある理解を求めるところから提唱せられるものである。いはゆる鑑賞法による文學の考察が、個々の文學現象（作品、作者など）を一つ一つ引き離して、「味ふ」といふことに終始して、文學現象の變遷發達の意義過程について科學的な説明を與へるやうなところまでは進まず、専ら文學現象に對する個別的な味得解釋にとゞまつてゐたことは、これまでの事實である。本來十分の意味での文學の鑑賞といふことが、それでよいのであるかどうかは別として、とにかく、これまでの鑑賞といはれる事實は、文學現象の個々の解釋享受といふ點に中心的意義を見出してゐたのである。個々の文學現象を解釋享受する過程なしに、それの歴史的意義を考へることの出來ないのは、もとより言ふまでもない。難ずるものもまた、「文學研究の方法は、まづ文學鑑賞の方法でなければならない」と言つてゐて、鑑賞の方法だけで文學現象に對する考察が完結するものとは思つてゐないやうにも見えるが、それではその鑑賞の後に來たる方法が何であるかは明示するところがない。勿論鑑賞法と社會學的方法と、この二つの方法の間の關係に就いては一向考へてゐないらしく見える。文學の社會學的方法も必ずしも惡くはないが、それだけでは（實はそれだけではと思ふことが既に間違ひのもとであるのだが）——とにかくそれだけは「純正な文學研

究にならないおそれがある」といふのがこの批評の中心であらう。而してそれは、在來の文學研究法に據らうとする人々の社會學的方法論に對する共通の不安であるであらう。

社會學的方法論は、文學の特質とそれの發達と——要するに文學現象の一切に對して立てられるところの、最初の科學的な方法論であると言つてよい。鑑賞法とはいふものゝ、文學現象に對する鑑賞の過程については、十分な意味での方法といふべきものが成り立つてゐたとは言へないのである。個々の文學現象に對して、個々の鑑賞者が、自己の生活の經驗內容を提げて、主觀的な味得をすることが、これまでに謂はゆる文學の鑑賞であつた。文學の鑑賞法として、多少の注意や手引きくらゐは列擧することが出來たにしても、十分な意味で「方法」といふべきものが成り立つてゐたとは言へない。文學の鑑賞法は、わづかに個々の文學現象と鑑賞者の主觀との間に、出來るだけ邪魔の介在しないやうにするための一般的な消極的な注意を與へるくらゐにとゞまるものである。これを一つの方法として、即ち「一般的な見地」を示すものとして見る場合に、それ以上のことを求めることは困難である。それ等の一般的な消極的な注意の後に、鑑賞の經過の上に重要な役目を演ずるものは鑑賞者の主觀である。而して文學の本質に對する解釋である。鑑賞者は、主觀を提げて、對象となつた文學現象のうちから出來るだけ文學の本質と認めるものを取り出して來ようとする。而してそれを取り出して來たと思ふところに、鑑賞のよろこびを味ふのである。

この鑑賞の經過は、文學現象の個々の味ひをある程度まで主觀的に受け入れさせることにはなるが、一定の特質を帶びたその個々の文學現象が、文學の變遷發達の經過の中でどういふ位地を占め、どういふ意味をもつてゐるか、またその一定の特質を帶びた文學現象が何故に一定の時期に現はれて來たか、——たとへばかういふ種類の疑問に對しては、到底答へる力をもつてゐない。從つて、その、文學現象のもつ一定の特質そのものについても、いはゆる鑑賞によるだけでは、實は不充分な理解しか得てゐないといふことになつて來るのである。

鑑賞法による文學現象の考察が、おのづからその文學現象を固定的な孤立的な事實として見る傾きをもつてゐるのに反して、社會學的方法は、文學現象を過程的に見て、それの歷史的位地乃至意義、それの一定の時代に於ける出現の理由などについて、一定の理法によつてこれを說明しようとするものである。またそれによつて、鑑賞法によるだけでは說明も解釋も出來なかつたところの、一定の文學現象のもつ一定の特質に

て說明を加へようとするものである。社會學的方法論は、文學現象に對して正しい意味での科學的說明を加へようとする最初の方法論である。文學の研究考察の上で、方法論が問題にせられないで來たのは、鑑賞といふことで間にあはせてゐたからだとも言へるのであるが、それと同時に文學現象を科學的に研究考察する必要を感じなかつたからだと言はなければならない。文學現象は、もとより言ふまでもなく味得鑑賞すべき對象であるのだが、それと同時に、その味得するところに基いて、更にこれを科學的に研究考察すべき對象でもあり得るのである。また實はそこまで行くのでなければ、文學現象を一つの味得し理解すべき對象として、十分に遺憾なく取り扱ひ得たとは言へないのである。一體方法論とは、文學現象を考察する上に必要な一般的見地を立てるためのものである。一般的の理法である。その理法に「純正な文學研究にならないおそれ」があるかないかは、その理法の正否を檢べて後に言ふべきことである。尤もその理法の個々の場合に於ける適用は、おのづから別であつて適用せられた結果としての批評の見あやまりは、必ずしもその批評の一般的見地となつた科學的研究法の誤謬を意味するものとは限らない。

3

自然の現象について見ても、人間社會の事實について見ても、必ず個々の現象と現象との間には、一定の法則的な關係がある。科學の第一の仕事は、この現象と現象との間に存立するところの一定の法則を發見することであらねばならぬ。勿論、この法則は、それについて人々が意識してゐるか否かはその問ふところでない。それ等の法則は、人々の意識すると否とに頓着なく客觀的に存立してゐるものである。一つの現象があれば、それに伴つてまた必ず他の現象が生ずるといふことは、——夜が日に次ぎ、日が夜に次ぐといふことや、生產力が增加すれば文化の程度も高まり、資本主義が發達すれば、勞働運動が盛んになるといふやうなことは、即ち現象と現象との間に見出だされるところの客觀的な法則である。それ等の法則は、われわれがそれを知つてゐると否とにかゝはらず、またそれを欲すると否とにかゝはらず、そこに原因結果の關係を以て働いてゐるのである。即ち一定の現象があれば、必ずそれに應ずる他の現象が在る——これは否應なしに、たえず到るところで見出だされるところの現象と現象との關係である。それだから、一つの現象の原因を見出だすといふことは、その現象が依つてゐる

ところの他の現象を見出だすことである。それがその現象を說明することであり、またそれ等の二つの現象の因果的關係を明らかにすることでもある。この關係が見出だされ、それが正確で、いつでもその二つの現象の間には同一の關係が存立するといふことが確かめられると、そこで現象の科學的說明が成り立つことになる。自然乃至社會の現象についての科學的說明といふものは、これ以外にはあり得ない。

文學の社會學的方法は、やはりこの意味での科學的方法である。文學現象を一つの社會的現象と見て、これに對して、上に述べた意味での因果的說明即ち科學的說明を加へようとするものである。いはゆる鑑賞法は、ある作品がある印象を與へるといふその結果を語るものに過ぎないのであるが、ある作品がある印象を與へるといふ結果は、つまりある作品の特質は、何故に生じて來たか、これの原因となつてゐる事實は何であるか、その原因とその結果との間に、一定の正確な因果的關係を見出さうとするのが、文學の科學的方法である。或ひはまた、ある作品がある讀者に對してある印象を與へるといふ場合には、その作品と讀者（即ち社會）との間に、一定の因果關係があるものと見なければならない。この關係を說明するものが、文學の科學的方法である。即ち文學を一つの社會的現象と見る立ち場から、これを科學的に說明するのが文學の社會學的方法である。

文學の鑑賞法といはれるものが、一つの方法として一般的な見地を與へてくれるものでないことは前に言つた通りである。しかし、それをも强ひて一つの「方法」だとして、そこに踏みとゞまるといふなら、踏みとゞまらせるほかはない。けれども、そこに踏みとゞまるものが、これがために、眞の「方法」を求めるものを思ひ止まらせようとするわけには行かない。そこに踏みとゞまつてゐるかぎり、文學の科學的說明について彼れこれ言ふには及ばない筈だからである。

4

社會學的方法論に對する批評の今一つは、社會學的方法論の脚場を、辨證法的唯物觀に置いたことを以て、その根據が薄弱だとする考へである。もし「プレハノフ程度の考へかたが既にわが國の文壇で常識になつてゐ」て、敢て私の如きものの祖述を俟つまでもない」のであるのなら、もし社會學的方法が「もう常識となつてゐる」のであるとするなら、私としては寧ろいろいろの小うるさい說明をしないですむだけでも助かるわけであるが、しかし私の見る限りでは、事實はなかなかそこまで行つてゐないやうである。一體、そんなことはもう常識になつ

てゐると言つてゐる口の下から、その常識になつてゐる筈の知識に對して、理解の不足してゐることを見せるといふ事實は、矛盾とは言へないであらうか。もし私の說くところが、本當に常識になつてゐるものなら、も少し私の言ふことが分り過ぎるくらゐに分つてもらへさうなものではなからうか。文壇の識者が「プレハノフ程度の考へかた」を常識として持ちあはせてゐるといふのは、或ひは一二の人の場合に於いて事實であるでもあらう。私は決してそれを一概に否定しようとはしない。しかしながら、私の知るかぎりに於いて、そのいはゆる「プレハノフ程度の考へかた」を常識とする程度の理解を提げて、文學の社會學的方法について、われわれを敎へてくれた人のあつたのを聞かない。一體文學の社會學的方法の問題の如きは、ひとりわが國に於いてばかりでなく、一般的に見てもまだまだ極めて不十分な程度に於いてしか考察せられてゐないものである。「プレハノフ程度の考へかた」を常識とするまでには、まだまだ相當の骨折りを必要とする程度に在る。私のこの方面での考察の如きは、もとよりプレハノフに負ふところも少なくないのであるが、しかも必ずしもひとへにプレハノフの「祖述」にのみ終始してゐるものではない。たとひ少數の先覺にとつては、或ひは必ずしも一々悉く新奇の說ではないにしても、文學の社會學的方法論の如きは、その根本の趣旨精神からも、その精細な解釋からも、決して今日に無用の辯であるとは考へない。殊に況んや、それが今日の日本の文壇にとつて、常識であるなどとは、どこから見ても考へられやうがないのである。このことは、文壇に於ける眼前の事實が明示してゐる。この事實を看取らないで、何もかもを常識呼ばはりするといふことは、或ひは意識せられざる、一つの反動的滑稽である。

「プレハノフ程度の考へかた」が、まだ常識になつてゐないとすれば、文學の社會學的方法論の脚場乃至出立點としての辯證法的唯物論の意義が疑はれ、それに據つて社會學的方法論を樹てゝ行くことの理由が容易に受け入れられないのも、またやむを得ないところであらう。

文學の社會學的方法論とそれの脚場乃至出立點としての辯證法的唯物論との關係は、文學の研究と社會學との關係、從つて社會學の基礎としての辯證法的唯物論と文學の社會學的方法論との關係として考へられる。文學が一つの社會的現象であることは、今さら言ふまでもない。文學の創造が、たとひ作者の心の中では、全くその社會的性質について無頓着に行はれる場合にも、作者は全く藝術のために藝術を創造すると考へてゐる場合にも、一旦それが作られた以上は、作者の意志の如何にかゝ

はらず、それは一つの客觀的價値となる。即ち文學は作者の欲すると欲せざるとを問はず、社會的現象とならざるを得ない。文學の享受といふ事實があるかぎり、それは文學の社會性を決定する。從つて、文學の發達變遷は、社會一般の發達變遷の一部を構成する。文學を社會的現象として見るかぎり、文學の研究の上に社會生活の法則を研究する社會學が密接重要な關係を持つことは明らかである。そこで文學の研究が社會學的に行はれるためには、文學の研究者は何等かの社會學にその據りどころを見出ださなければならない。自家の研究方法のために最も適當な出立點を求めなければならない。今日の社會學は、多元論と一元論と、この二つの學派に大別せられる。多元論の立ち場からは、社會現象をいろいろの要因の働きかけるものとして見、その要因を平等に並列して考へ、一元論の立ち場からは、その要因を一つの主要なものと主要ならざるものとに分けるか、或ひは結局單一の要因に歸着させて考へる。多元論は本實の原因を多くの方面に見るのであるから、智力の綜合的要求は滿足させられない。一元論的社會學のうちにもいろいろの流派があるが私は中んづく辨證法的唯物論に立脚するところの社會學に據るものであることは、前にも斷つて置いた通りである。而して、文學の社會學的方法論の、據りどころとして、辨證法的唯物論が、批判考察の上に一つの綜合を與へ、最も一般的な根本的の原則として役立つとする私の考へが、決して根據の薄弱なものではなく、決して「事實を無視する」やうなたぐひのものでないことを明らかにすることは、それこそ實に私の試みて來た方法論上の考察の、おのづから果たして行くべき一つの任務であつたと言つてよい。この根據なり出立點から出て、文學の社會學的方法を考察して行く間に、「嚴然たる事實を無視」したりすることもなく、事實の正しい認識に基いて、文學現象の特質とそれの發達とを説明して行くことさへ出來たなら、——文學現象の特質なりそれの發達なりの事實について、せめてその重要な點だけをでも説明することさへ出來たなら、文學の社會學的方法論の據りどころとして、辨證法的唯物論の選ばれた理由は認められなければなるまい。辨證法的唯物論が、文學の社會學的方法論に一元的綜合統一を與へ得るものであるか否かは、この事實が明らかに示してくれるであらう。もし、その立ち場から文學の社會學的方法論をすゝめて行つて、文學現象の特質やそれの發達の事實を説明するにあたつて、そこに何等かの躓きが生じたなら、そのときこそはじめてその方法論の據りところ乃至出立點に立ち戻つて見る必要がある。その出立點となつてゐる辨證法的唯物論について十分に檢討し批評して見

る必要がある。しかしその場合といへども、それは直ちに、辨證法的唯物論そのものが、方法論の據りどころ乃至出立點として役に立たないものだといふとこにはならない。それは或ひは、方法論をすゝめて行くうちに、文學現象の說明を試みるうちに、據りどころ乃至出立點であるところの辨證法的唯物論から片足を踏みはづしてゐたといふやうなことも決してないことだとは言へないからである。從つて、文學の方法論をすゝめて行くうちに、文學現象の科學的說明を試みて行くうちに、氣をつけなければならないことは、その方法の據りどころ乃至出立點を忘れないといふことである。そこから片足を踏みはづすやうなことのないやうにすることである。それによつて、その方法論の據りどころ乃至出立點としての辨證法的唯物論は結局是認せられることになり得るであらう。

繰り返して言ふ。文學の社會學的方法論の據りどころ乃至出立點としての辨證法的唯物論が、批判考察の上に一つの綜合を與へ、最も一般的な根本的の原則として役立つとする私の考へが、決して根據の薄弱なものではなく、決して「事實を無視する」やうなたぐひのものでもないことを明らかにすることは、それこそこの社會學的方法論上の考察が、その過程の間におのづから果たして行くべき仕事である。社會學的方法論の考察の過程のすべてに亘つて、辨證法的唯物論の、方法論の據りどころとしての價値は、おのづから明らかにせられなければならない。文學の社會學的方法論の據りどころ乃至出立點としての辨證法的唯物論が是認せられるためには、それに立脚するところの方法論上の考察が、如何に他の立脚地をもつところの方法論的考察にもまさつて、文學現象の特質とそれの發達とを正しく說明し得るかを、事實について見るべきである。

5

私の立ち場を難ずるものは、多元論的な立ち場に立つてゐるらしく、多元論的な立ち場からでは、結局綜合を求める心に落ちつきが得られない、文學の批判考察に一つの綜合を豫期しがたいといふことは困るのであると私の言つてゐるのに對して、「いくら困つても事實は事實で仕方がないのではあるまいか」といひ、「困るからと言つて、つまり都合次第で嚴然たる事實を無視するといふことは、最も非科學的態度で」あると言つたりしてゐる。なるほど、「嚴然たる事實を無視する」などといふことは、非科學的な態度に相違なからう。たゞこの場合に於ける問題は、そのいはゆる「嚴然たる事實を無視」してゐるものが著者の意味する如く私であるか、それとも或ひは多元論的な

立ち場に立つてゐるらしい難者の側であるか、果たしてそのどちらであるかといふ點にある。而してこれを決定するためにはやはり事實について一應考へて見るよりほかはない。

前の論文で、私は、文學の特質とそれの發達とを決定する力として、かりに地理的環境と、天才と、外國文學の影響と、この三つのものを、一般に思ひ浮べられやすいものとしてあげ、極めて手短かにではあつたが、それぞれに對して、私の立ち場からの説明を加へ、それ等がいづれも、文學現象の特質とそれの發達とを決定する力としては、もとより全く無交渉無力などといふわけには行かないものではあるが、即ちそれぞれ重要な關係交渉をもつところのものではあるが、その關係交渉は、或ひは間接的であり、或ひは第二次的であつたりして、文學の特質とそれの發達とを決定し、その理法を説明するものとしては、いづれも最後究極のもの、即ち最後の原因ではあり得ないといふことを言つて置いたのである。辨證法的唯物論に立脚する方法論の立ち場からは、「文藝の特質（前の論文ではこの一とところだけ本質となつてゐたが、それは特質の誤植である）なりその發達の理法なりを説明するものは、地理的環境でもなく、天才でもなく、外國文學の影響でもなく、社會學的方法論によると、それは經濟力であらねばならぬ」と言つたのは、この意味にほかならない。またそれは、その前後の私の文章について見れば、明らかに了解せられなければならない。しかしながら或ひは、「文藝の特質なりその發達の理法なりを説明する究極最後のもの（原因）は、」とした方が、一層よく私の意を通じ得たであらう。そこから多少の誤解を招くに至つたのは遺憾である。とにかく、前の論文では、文學現象の特質とそれの發達とを説明する究極最後の原因としての經濟力の問題を中心として、そこから社會の生存狀態と社會の意識との關係に及び、その社會の生存狀態を社會の構成要素の問題として考へることに專らであつて、社會意識の問題や、天才その他の問題には説き及び得なかつたのである。これ等説き殘したところを補つて行くことによつて、「文藝の特質なりその發達の理法なりを説明する究極最後のもの（原因）は、地理的環境でもなく、天才でもなく、外國文學の影響でもなく」といふ私の意味も、一層明らかにならなければならない。而してそれはこれから後の仕事であるのだが、さしあたり、上に引いたところについて、難者に答へて置くのが便利である。それは一面文學の方法論が辨證法的唯物論をその據りどころとすることを是認してくれる一つの證據ともなるのであるから。

難者は上に引いたところの私の文章に訂正（？）を加へ、「文

藝の特質なりその發達の理法なりを說明するものは、地理的環境でもあり、天才でもあり、外國文藝の影響でもあり、なほそのほかに社會學的方法論に基いて、經濟力を加へることが出來る」と言つてゐる。この訂正せられた立言が、多元論的立ち場からのものであることは察せられるが、その文意には明白を缺いてゐるところがある。難者は社會學的方法論に基いて、經濟力を說明の原因として加へることが出來ると言つてゐるが、この場合、地理的環境や天才や、外國文學の影響や、それ等のものと經濟力との關係については、何等の說明を加へようともしてゐないのである。およそこれ等のさまざまの列擧せられた原因が、文學の特質やその發達を決定する場合に、それらの原因の相互と、更にそれ等と文學との間の關係は、どういふ風に說明せられるのであるか。文章の上から見て經濟力は自餘のものに比べて一段輕く見られるものと解すべきであるか。これ等の複合的原因は、あらゆる文學上の現象を說明する場合に、いつでもその悉くが列次的に考へられなければならないといふのであるか。その方法はおそらく[illegible]にあてはまらない。たとへば近松の戲曲といふ一つの文學現象の特質と、それの歷史的社會的意義を說明するためには、地理的環境も、天才も、經濟狀態も、その原因としての究極性の程度には差違があつても、ともかくも多かれ少なかれ取り入れて考へられなければなるまい。しかしその場合に、外國文學の影響といふ一項目は、恐らく取り入れやうがないであらう。この場合、それはその特定の文學現象に關して、外國文學の影響がなかつたからだと言ふでもあらう。それでは、外國文學の影響は、およそどういふ場合に於いて存在し、どういふ場合に於いて存在しないのであるか。まさか、交通のあるあらゆる外國との間には、文學上の影響が不斷に存在するとは事實が言はさないであらう。而かもその影響も、時を異にして行はれ、一國の文藝が數十年を隔てゝ他の國の文藝に刺戟と影響とを與へることも珍らしくはないではないか。この影響の上に時期の隔たりがあり得るといふのは何に原因するのであるか。

かりに難者が列擧した原因は、必ずしもいつでも悉くこれを取り入れて考へなければならないといふわけではないとしよう。ある種の文學上の現象については、たとへば天才とか外國文學の影響とかいふ原因を拔きにして考へてもよいといふやうなことがあるとして見よう。その場合、さういふ風に、說明の原則の取りあはせ方が、場合によつて變つて來るといふのは何故であるか。それはその方法を用ひるものの考へによつて自由に取捨してよいのであるか。それでもその「方法」は「方法」

として成り立つと言へるであらうか。私はかやうな多元論的な、曖昧な在來の「方法」にあいそをつかしたればこそ、——在來の文學史が、殆ど皆さういふ要領を得ない立ち場から、あれもこれも取り入れて、少しづゝその原則のわがまゝな使ひわけをして見せてゐるのに滿足してゐられなくなつたからこそ、綜合的な方法論を求めるに至つたのである。いやしくも方法論として、文學の特質なりそれの發達なりを說明しようとするかぎり、その說明の原則には、究極最後の原因となるべきものがなくてはならぬ。第二次的の原因こそは、時として著しく働きかけ、また時としては殆ど全く働きかけないやうなこともあり得るのであるが、そこにはそれ等の第二次的な多くの原因のさまざまの結合交渉を支配し統一して、それ等の異動變遷をまでも說明することの出來るだけの究極最後の原因がなければならない。——文學の社會學的方法とは、つまり文學の科學的研究法にほかならない。而して文學の科學的研究法は、文學現象についてその原因結果の關係を究明しようとするものにほかならないからである。それでもなほ難者は多元論的方法が一つの科學的方法として成立すると信ずるであらうか。またそのいはゆる「方法」が、文學現象の事實に觸れるに至つて、難者をして困迷せしめないと言ひ張るであらうか。その場合になつてまで、「いくら困つても事實は事實で仕方がない」とも言つてはゐられまい。難者が「嚴然たる事實を無視する」といふ「非科學的態度」をとらないかぎり、自家の方法の、文學上の事實を說明する上に甚だ不便な不合理なものであることを發見するであらう。

6

難者が上に列擧したさまざまの原因（文學の特質とその發達とを決定しそれを說明する原因）について、いかに事實の認識を誤つてゐるかといふことは、そのうちの一項目である地理的環境に對する理解について見ても明らかである。

地理的環境の問題は、ひろく言へば環境の問題であるのだが、今さしあたりこれを地理的環境の意味に限つて考へて見ると、今まで普通には、人間をとり圍む自然の條件の直接の影響といふやうに思ひがちであつた。陰暗な北歐の詩人の歌は、その鄕土の山野を以て說明し、單調哀切なロシヤの民謠は、はてしない原野と結びつけて考へられた。文藝復興期のイタリの藝術は、南歐の自然の美しさによつて說明せられ、スペイン人の迷信は、その地方の頻繁な地震と關係させて解釋せられた。る國民の藝術に、自然の背景が、その形の上に多少の特色を

色彩を加へるといふことは、全く否認するわけには行かない。しかも、その場合でさへも、さういふ地方的風土的特色が、經濟生活の發達するにつれて、たとへば今日の資本主義國家の藝術のやうに、だんだんうすれて行く傾向のあるといふことは、また到底否定することの出來ない事實である。しかしながら、かりにその風土的色彩がまだまだ形の上には殘つてゐるとしても、その風土的色彩と藝術の發達との間にはどういふ關係が成り立つであらうか。藝術の發達變遷といふ事實を説明するものとして、その風土的色彩はどういふ意味をもつであらうか。イプセンのスカンディネギヤも、トルストイのロシヤも、風土的色彩といふ意味では今日と變りはない。しかしながら、その同じ風土の上に生れる文學は、決して昨日と今日と同じ特質をもつものではあり得ない。テーヌの言つてゐるやうに、人間はこの世界に在つて孤獨ではない、その周圍には自然があり人類同胞がある。生理的社會的の事情がいろいろに働きかけて來る。「氣候も往々にしてその影響を及ぼす。」ゼルマン民族とギリシャ民族との間にあるところの區別は、大抵はそれぞれの民族の居住した國土の相異から來てゐるのであるかも知れない。しかしそのいはゆる「國土の相異」なるものは、それが直接にそれ等の民族の上に働きかけたといふよりも、生産の關係を通じてゞあると見るのが正しい。およそ人間の社會に對する「環境」が、外界の自然であることは言ふまでもない。人間の社會は地球をほかにして考へられない。自然は人間の社會を育てゝくれる。しかしながら、自然は必ずしも人間の社會のために都合のよい目的をもつて存在するものだとばかりは考へられない。自然はしばしば人間の社會を脅かし破壞する。しかも人間は自然の間に住み、その中からむやみに飛び出すことも出來なければ、自然を征服し得たと思つてゐるときにも、實際は自然の法則が人間の目的のために利用せられてゐるのに過ぎない。かやうな自然が、人間社會の發達の上に、どれほど重大な交渉をもつてゐるかは言ふまでもあるまい。自然と人間との關係を考へるためには、自然が人間の生活に接觸する方面について觀察する必要がある。自然は人間の勞力の直接の對象として存在し、そこから人間は自然の法則を利用して生産を行ふ。それだから一定の時と場所とに於ける自然の狀態は、人間の社會に働きかけて來ずにはゐない。濕氣や風や氣溫によるところの氣候、山野の高低、水脈の分布、礦山森林河川の性質とそれ等の配置、海岸線の多少と屈折、海と陸との關係、動植物の種類と數量――かういふものが人間の社會に重大な影響を與へる。而して社會の發達は、人間の社會が自然の中から多くの生活力

を取り出して來るところに實現せられて行く。即ち自然と人間との對立に於いて、この二つのものの接觸する形が、人間の勞働の經過であつて、人間が自然に對して最も直接に接觸するのは、この勞働――生産の過程に於いてゞある。この過程は自動的であつて、それの結果と社會の發達とは重大な關係をもつ。社會が何等かの理由で勞働の時間を減少させて、而かも尙以前と同じ生産の結果を得ることが出來るやうになると、社會はその時間のあまりを他の方面の生産へふりむけることが出來る。精神文化の發達はこの場合に於いて見ることが出來る。即ち精神文化の發達と生産力の發達とは、密接な重要な關係をもつてゐるのである。この解説から考へて見ると、「國土の相異」が、生産を通して民族の精神文化の上にあらはれて來たといふことは、自然の成り行きであらねばならぬ。

地理的環境の文學への影響といふことが言はれるにつけて、いつもまづ想ひ出されるところのテーヌの環境説について見ても、テーヌ自身の言ふところはかなり不明確であつて、その「國土の相違」と精神文化との關係は、上に説いたやうに考へて行くのが正しい。テーヌ自身地理的環境が必ず直接に文學へ影響を及ぼすといふやうには言つてゐない。地理的環境が文學に加へる色彩といふやうなものが絶無だと言ふのでないことは、――即ち外形の上に多少の影響のあらはれることは、前にも言ふ通り否定するのではない。ギリシャの彫刻が多く裸體を表現してゐることとギリシャの氣候との間には多少の關係があるといふやうな意味で、自然と藝術との交渉はベリンスキーの書いたものの中にも説いてあつたと記憶するが、それはその藝術の特質とそれの發達とを説明するものとしては、極めて輕い交渉をしか持つてゐない。とにかく、地理的環境が文藝の上に直接に影響するといふ事實を殆ど重く視るに足りないといふ意味で、しかし全く否定するといふのでもない意味で、「地理的環境が文藝の上に直接に影響するといふ事實が、目に見えてあらはれてゐるといふやうなことはあまりあるまい。」と言つて置いたのである。こゝで「目に見えて」といふのは、難者が解したらしいやうに、肉眼に見えるとか見えないとかいふ直接の意味ではなく、「特に著しく」といふほどの意味である。前にも言つたやうに、地理的環境が文藝の特質とその發達との上に及ぼす影響は、間接的なものである。文藝に直接の影響を及ぼすものは社會的關係であるが、それはその社會に於ける生産力の狀態を土臺として成り立つものである。而してその生産力の狀態こそ、はじめてその社會の存在する國土の地理的環境からの直接の支配影響を受けるのである。文藝に及ぼす地理的環境の影響は

かやうにして間接的であること點は前に説いたところを繰り返すに過ぎない。

難者はこの點についての私の所説を「妄斷」であるとして、地理的環境が文藝の上に直接に影響するといふ事實については、「一々實例をあげて示すの煩にたへない」ほどであるとさへ言つてゐる。果たしてさうであらうか。それほどに言はれるものなら、せめて一二の實例について、私どもの「妄」をひらいてもらひたいものである。そしてその序でに、地理的環境の文藝に及ぼす影響を、專ら間接的であるとし、地理的環境の直接に影響を及ぼすところのものが生産力の狀態であるとする私どもの解釋については、難者はどういふ考へをもつてゐるかといふことを——或ひはそれをまでも否定するのであるか、但しはそれはそれで是認するのであるか、その邊のところについて明確に考へを述べて見てもらひたいものである。難者は私の考へを「妄斷」だとか「何かの間違ひであらう」とか言つてゐるばかりであつて、その私の立言に伴ふところの私の説明（かういふ立言では、その説明こそ大切な部分であらねばならぬ）については、是非を言ふにさへ及ばなかつたからである。地理的環境は直接に生産力の狀態に影響し、生産力の狀態は社會關係の上に影響し、それは更に社會の心理狀態に影響する。文藝はこの社會の心理狀態と直接の交渉をもち、それによつてその特質なり發達を決定せられるのであるから、この意味で、地理的環境の文藝に及ぼす影響は專ら間接的であるといふのである。この説明が否定せられないかぎり、少なくともこの部面に關する社會學的方法は正しい。從つてまたその方法論の據りどころとする辨證法的唯物論は是認せられなければならない。

しかし最後に今一と言附け加へて置く。難者が、文學に及ぼす地理的環境の直接の影響を主張するのは、或ひは文藝にあらはれた地方色といふやうなものを考へてゐるためかも知れない。或ひはまた、都會文學とか田園自然の文學とかいふやうなことを考へてゐるためかも知れない。さういふ事例については、風景畫の場合のやうに、地理的環境と文藝との間に密接な關係があると思ふのも決して無理ではない。しかし、これを實際の文藝上の作品について見ると、それ等の場合に於いてすら、その種の文藝の發達とその特質とを説明するものは、その種の文藝の生み出された社會の心理狀態であつて、文藝がそこから直接に影響せられてゐることの最も重大であるのを見出だすであらう。即ちその種の文藝の特質とその發達を決定するものが、專ら社會の心理狀態であることを知るであらう。

7

文學の創造が社會的意識の一つの形態として、社會的生存狀態によつて決定せられ、條件づけられると、從つて、この二つのものの間の原因結果的關係を說明することが、文學の社會學的方法論の中心問題であると、——これ等は前論に於いてすでに說いた。前の論では、この社會的生存狀態といふ決定的原因を、社會の構成要素の問題として考へ、即ち文學の方法論の問題としては、この場合階級的心理乃至階級的觀念形態の問題として考へるために、文學と最も密接な關係にあるところの知識階級の性質の解說を試み、またそれにつれて、その一要素として、殊に文學と直接の關係に在るところの文學者の階級性についても述べて置いた。そこで、それに次いでは、社會的生存狀態といふ決定的原因について、それの動的な機能の方面の解說を試みなければならない。即ち文學に對して社會心理のさまざまの方面から働きかける姿について解說を試みなければならない。

社會的過程の中では、さま〳〵の機能がそれ〳〵の間で互ひに働きかけながら、更に全體としての社會的過程に影響を及ぼしつゝある。科學や哲學や宗教が、それ〳〵何れも社會的過程のうちに働きかけてゐる機能であるやうに、文學もまたこの社會的過程のうちの一つの機能である。それだから、こゝではその文學に對する他の諸機能の關係、それ等が文學に對しても

つところの、原因としての意義を知ることが必要である。それがためには、まづそれ〳〵の機能の特性と、それ等が他の機能に對する關係とが知られなければならない。從つてまた、次ぎには、文學の特性が知られなければならない。しかしながら、社會生活の過程は、一つの綜合的な全き存在であつて、これ等のさま〳〵の機能は、その根底に於いて單一であるところの社會の發達變遷の過程のいろ〳〵の方面を示すものに過ぎない。これ等の機能は、それの土臺となつてゐるところの生產といふとから遠ざかり、複雜になり、だん〳〵その特色が細かく分れて行くにつれて、宗教とか藝術とか科學とかいふ形をとつてあらはれ、社會組織の法則に從ふことになる。即ちそこには單一な歷史的發達の過程があつて、そこから必要な機關乃至機能が出て來るわけである。

政治とか宗教とか藝術とかいふものが、それぞれ別々の原因として、獨立した力として、社會人の上に働きかけるといふやうなことは、——獨立の原因のいくつもが、それぞれ最後究極の原因としての役目を主張するといふやうなことは、辯證法的唯物論の立ち場からは認められないところである。たとへば經濟生活の方面で、生產、分配、交換、需要といふやうな事實——一つの經濟生活のさまざまな方面は、互ひに影響する過程

に在るところのそれぞれ獨立の原因として見らるべきものではなく、それ等は一つの全きものの部分を成するものであり、その中の生産といふ事實が、經濟生活の他のいろいろの過程とそれ等の間の影響とを條件づけて行くのであると考へられてゐる。勿論生産といふことそれ自身が、またおのづから經濟生活の他の部面からの影響を經驗するといふ事實はあるけれども。即ち生産は究極最後に於いて決定的な力をもつものであるが、それから引いて商業といふ事實があらはれてくると、それは一般的には生産によつて支配せられるけれど、その部分部分、もしくは生産による一般的支配が行はれてゐるその内部に於ては、商業はそれの本來の性質によるところの自己の法則に從つて行はれて行く。即ち商業には獨特の方面があつて、それがまた生産の行動の上に影響することは否みがたい。政治、法律、哲學、宗教、文學藝術などの發達は、前にもすでに說いたやうに經濟の發達の上に成り立つ。然し、それ等のものもまた、その相互に對し、更に經濟的基礎に對して何等かの影響を與へる。それ等のものの發達が經濟の發達を基礎として成り立つといふのは經濟狀態といふものが社會生活の唯一の自動的原因であつてそれ以外のさまざまの他のものは、悉く受け身であるといふやうな意味ではない。相互の影響といふものも、やはり經濟上の必然の上に立つてゐて、結局はその決定的な力があらはれて來るといふのである。要するに、一方では社會生活過程に於けるさまざまの機能が互ひに影響しあつてゐる事實を認めるとともに、究極の原因から結果したところのものを以て、その因果の關係を忘れて、獨立の力として見ることは間違つてゐるといふことになる。一元論的の立ち場からは、人間の社會生活は法律の歴史とか、道德の歴史とか、哲學の歴史とかいふやうに、一つ一つ全く別々の、いくつかの歴史を作り上げて行くわけのものではなく、ある一定の時代に於ける生産力の狀態によつて條件づけられてゐるところの社會關係の歴史をただ一つだけ作り上げて行く。いはゆる觀念形態は、このただ一つの、ばらばらに分けることの出來ない人間の歴史が、人間の智力の上にいろいろの形をとつて反映したものに過ぎないとも言ひ得るであらう。

そこで、社會生活の過程の中で、それぞれの間で互ひに働きかけながら、更に全體としての社會的過程に影響を及ぼしつつあるところの、さまざまの機能について、それを列擧的に並べて見るだけではすまされないとすれば、一般社會生活の過程に於けるそれ等の諸機能の重要さの關係はどうなるであらうか。

文學　これもまた社會過程の一つの機能であるところの文學

に對して、働きかけるそれ等の諸機能の因果的決定的な役目はどういふところに在るのであらうか。

複雑な相互の影響の交錯の中から、一定の秩序を見出ださうとして、どれが支配的な力をもち、どれが一層重要であるかを決定することは容易でない。それの重要さの程度によつて、或ひは經濟力を、或ひは政治を、科學を區別せうとすることは間ちがつてゐる。事實に於いては、どれはなくてはならないし、どれはなくてもよいといふものは存在しないからである。社會生活の一定の發達のためには、一つがあつて一つがなくてもよいといふわけには行かないからである。社會生活の過程に於けるさまざまの機能について、その重要さの點でいろいろの差別があるやうに考へることは正しくない。社會生活の過程に於ける現象のそれぞれの部面が、その全體との關係に於いて、一定の機能を果たしてゐるのである。それぞれの機能の特質がいろいろに違つてゐるのである。物質的生産と觀念形態的乃至一切の上部構造的勤勞との關係は、後のものが派生的な結果的なものでありながら、而かもそれと同時に統一整理する力をもつといふ點に見られる。その機能は異なつてゐるが、社會生活過程に對してはいづれも缺くべからざるものであつて、互ひに影響する關係に立つてゐる。社會生活の全體に對する關係の違ひは、機能を異にするといふことに在る。上部構造は、經濟關係と生産力とによつて築き上げられたものであつて、しかも常に多かれ少なかれ經濟基礎や生産力の狀態の上に影響を及ぼしてゐる。即ちさまざまの社會現象の間には不斷の相互影響が行はれてゐるのである。原因が結果となり、結果が原因となるといふ事實が行はれてゐるのである。

8

原因が結果となり、結果が原因となるといふ事實、相互の間に働きかけ、影響を及ぼしあつてゐるといふ事實、——この紛糾した事實を正しく理解するとともに、それ等の社會現象の機能を解説して、全體の社會過程に於けるそれ等の役目を明らかにし、それ等の相互の關係を確かめるといふことが、さしあたり必要である。

人間は自然の一部である。自然の法則に從ふところの、自然の所産である。自然の間に生物が現はれて來るまでには、多くの年月が必要とせられ、それが生物として存在するやうになつてから、物を考へるやうになるまでには、更にまた驚くべき多くの年月が經過した。最初に考へることの出來ない物質があり、それが後に考へることの出來るものとなつた。精神が物質

から發生した。而して精神が物質から發生するためには、その物質は一定の組織をもたなければならなかつた。人間の生理的組織が發達するにつれて、考へる力もまた發達して來たのである。物質は考へる力をもつ人間のあらはれる以前から存在してゐたのであるが、精神は物質なくしては存在しなかつたのである。物質は精神なしに存在し得るが、精神は物質なくしては存在し得ない。即ち精神現象乃至意識現象は、一定の組織を有する物質の特質で、即ち物質の機能である。人間といふ複雜な物質的組織について、もしその組織が解體せられ、ばらばらになつてしまへば、人間の精神は存在しなくなる。もし、人間が時計の部分部分を組み立てて一つの組織とするやうに、人間の生理的組織が再び部分部分をあつめて組み立てられるものであつたなら、そこに人間の意識は再びよみがへつて來るであらう。精神の狀態はこの組織の狀態に依存する。意識は物質に依存し、思想は生存の狀態に依存する。從つて、唯物論に從へば、第一の基礎的なものは物質であり、精神は物質の所産であるといふことに言ひつくめられるのである。

そこで辯證法的唯物論の立場からは第一次的乃至基礎的なものと第二次的乃至派生的なものとの區別を立てることが必要である。

機能についても、必づ先づこの第一次的乃至基礎的なものと、第二次的乃至派生的なものとの區別を立てなければならない。第一次的乃至基礎的なものは、現象に對して究極最後の說明を加へ得るところのもの、第二次的乃至派生的な原因を生み出だすところのもの、即ち根本究極の原因である。自然、生産力、經濟、これ等は社會的生存の第一次的基礎であつて、あらゆる種類の社會意識はそれによつて條件づけられてゐる。第一次的原因が基礎となり、第二次的原因が上部構造となる。これ等のさまざまの原因が、社會生活の發展のさまざまの時期に於いて、またさまざまの場所（國土）に於て、さまざまに交錯してゐるところの狀態は、到底一々列擧するにたへない。

しかしながら、それ等さまざまの原因が、複雜な交錯の形で互ひに働きかけ影響しあつてゐるといふだけでは足りない。ある時代に於て、社會生活の過程の上に政治上の原因が影響を與へるとすれば、それは生産の社會的過程に於ける人間相互の關係が、政治といふ一つの第二次的原因乃至機能を經て、最も著しくあらはれてゐるといふことを意味する。この說明は宗教なり哲學なりの場合にあてはめても、同じことである。即ちそれ等の機能が社會に影響を及ぼすといふことは、生産の社會的過程に於ける人間相互の關係が、宗教なり哲學なりを經て、最も

著しくあらはれてゐるといふことである。歴史の上で精神力の働きを認めるといふ場合にも、その力の傾向は、究極の意味では、いつの時代に於いても、經濟の發達の具合によつて決定せられるのである。しかし本來は經濟そのものが第一の原因であるとは言へない。それは生産力の結果であり、それの機能である。生産力の狀態が變れば、それにつれて經濟組織も變る。それは丁度生産力の狀態の變るにつれて、社會心理の狀態も變り、新らしい時代の精神といはれるものがあらはれるのと同じである。

あらゆる社會的生活の過程は――社會のうちに在つて働いてゐるさまざまの數限りない力や要素の互ひの影響や衝突や交錯や、すべてそれ等のものは、自然と社會との關係といふひろい一般的な舞臺の上で行はれるのである。從つて、自然と社會（人間）との交渉關係といふところに立ち返つて考へて見ればすべての現象についての考察は、生産力といふ點に落ち、そこから出立して行かなければならない。社會のさまざまの部面と部面との間には、無限の相互影響が行はれてゐても、それ等一切の社會現象が、根本的に、最も深く、究極の意味で、生産力の發達から支配せられてゐるといふ事實を動かすわけには行かない。社會生活の過程の中で働いてゐる原因はいろいろあるにしても、社會生活の發達を說明するところのたゞ一つの法則が存在するといふことは、それと少しも矛盾はしないのである。

歴史の過程に於いて、究極最後の決定的原因は生産であるのだが、それだからと言つて、もしその生産が、唯一の決定的原因であると考へるなら、それは甚だしい誤りである。それは基礎的の原因ではあるが、歴史の實際の過程の間に於いては、それの上に影響を及ぼし、多くの場合に於いて、專らそれの形式を決定する力が働いてゐる。それはさまざまの上部構造である。即ちそこに前から言つて來た相互影響が行はれてゐる。而かもその相互影響のうちにあつて、限りなく夥しい偶然の交錯する間をくゞつて、道を拓いて働き貫いてゐると見るべきものは、結局經濟力である。こゝで偶然とは言つたが、いはゆる偶然は、事物なり事件なりの間に一定の相互の關係が實際は存在してゐるのであるけれども、その關係が或ひはあきりに遠く隔たつてゐたり、或ひはあまりに見定めにくいやうなものであるところから、その關係の存在してゐることを忘れて、全くそれがないかのやうに、即ち偶然としてしか考へられないでゐるところのものである。

およそ社會生活の過程を實際に檢討する場合には、その過程のうちにあつて相互に影響しつゝある原因のすべてを取り出し

て來ると同時に、その場合に於ける原因と結果とが、一旦定まつたまゝの關係で、動かないで對立してゐるもののやうに考へてはならない。前にも言つたやうに、それ等の原因は別々に並列してゐるやうなものではなく、原因が結果となり、結果が原因となつて、互ひにその場所を取りかへてゐるといふことを忘れてはならない。社會生活の過程のさまざまな部面では、いろいろの原因がさまざさの形で結合し、その質の上からも量の上からも、めいめいそれぞれの組み合せかたをしてゐるのである。同じ質の原因でも、それが働きかける場合によつて、さまざまの役目を演じてゐるのが事實である。また、社會生活の過程の一定の部面の發達の程度によつて、そこに働きかけてゐるところの原因の意味が、その重要さが、全く見ちがへるほどに違つて來る。ある時期に於いて殆ど決定的とも見えるばかりの力を示してゐた原因が、それよりも更に進んだ時期に於いてはその意味を殆ど失ふといふやうな場合がある。たとへば中世紀と今日とでは、宗教の重要さは甚だしく違つてゐると言はなければならない。

9

文藝に働きかける原因として、經濟力とそれ以外の機能とが、およそどういふ風に交渉するかといふことは、方法論にとつて直接の問題である。さまざまの機能のうち、何が最も近く直接に文藝の上に働きかけるかといふ問題に對しては、一般的な答へを提出することは不可能である。この場合に於いても、社會生活の過程のその部面の發達の程度によつて、そこに働きかけてゐるところの原因の意味と重要さとが、全く見ちがへるほどに違つて來る。ある時期に於いて殆ど決定的とも見えるばかりの力を示してゐた原因が、それよりも更に進んだ時期に於いては、その意味を殆ど失ふやうなことがあるといふ、前に述べたところを繰りかへして言ふことが出來る。文藝史上の事實は、ある時代に於いて直接の原因となつてゐたところのものが、他の時代に於いては最後究極の原因としてのみ認められるやうになつてゐることを示してゐる。原始時代の藝術が、舞踊にしても歌謠にしても直接經濟力からの影響を強く受けてゐたといふことは一般に知られてゐる。而かも文明の社會に於いては、經濟力は藝術を決定する最後の最も間接な原因として見られてゐるのである。原始時代の社會では、人間の生産的活動が直接にその世界觀や趣味の上に影響を與へた。その時代の裝飾はそれの意匠をその時代の幼稚な工業から取り、その時代の藝術の中で最も重要な位地を占めてゐるところの舞踊は、多くの

場合生產的活動の單純な模倣であつた。しかし階級に分れてのちの文明社會では、生產的活動が直接に觀念形態（從つて文藝）の上にあらはれて來るといふことは、だんだん見られなくなつて行つたのである。そこで、經濟力の文藝に對する直接の影響は、文藝の發達の程度と反比例するものであると言へる。勿論これは、文藝が發達して行けば、結局經濟力の影響がなくなつてしまふといふ意味ではない。現代の極めて複雜な、經濟力の影響などとは遠く遠くかけ離れてゐるやうに見える文藝でも、これに社會學的方法による說明を加へることは不可能ではないのである。

しかしながら、前にも言つたやうに、社會的意識の發達が、經濟的原因ばかりに影響せられて行はれるといふやうに考へることは、辨證法的唯物論を正しく解釋する所以ではない。辨證法的唯物論によると、文學や藝術や哲學の上には社會心理が表現せられる。社會心理の特質は、その社會を組織してゐる人間同士の相互の關係の特質如何によつて決定せられる。而してこの人間關係の特質は、つゞまるところ、社會の生產力の發達の程度に依るのである。この社會の生產力に、著しい發達成長があらはれるたびに、必ずそれに次いで人間の社會的關係に變化が生じて來る。從つてまたそれに次いで社會心理に變化が行はれて來る。この社會心理の變化は、その著しさの程度にこそ相異があるにしても、ともかくまた必ず文學や藝術や哲學その他の觀念形態の上にあらはれて來ずにはゐない。しかしながら、その場合に於いて、人間の社會的關係の變化は、最も多くのさまざまな原因に異動を生ぜしめる。而して、それ等の中の如何なる原因が、その場合の文學や藝術に最も強く影響を及ぼすかといふことは、經濟生活とは直接の關係をもつてゐないところの、第二次的乃至第三次的ないろいろの原因に依つて定められるのである。要するに經濟力が文藝の上に直接に影響するといふやうなことは極めて稀に見られるのであつて、多くは政治とか宗教とか哲學とかの影響が著しく目に立つ。而かもそれにも時によつていろいろに勢力の消長がある。

法律とか國家組織とか道德とかは、一定の時代に特有な經濟上の關係によつて直接に決定せられると言ひ得るであらうが、文藝や哲學は、それによつて間接に決定せられる。それだからある國に於けるある時代の文藝を了解するためには、その國の經濟關係を知り得ただけでは不十分である。經濟關係からすゝんで是非とも社會心理を理解することにつとめなければならない。それの研究と理解とがなくては、觀念形態の發達を說明することは困難である。即ちある國のある時代に於ける、ある社

會階級を支配するところの思想感情の傾向を理解しなければならない。而してこの思想感情の傾向は人間の社會關係が作り出たすところの結果である。およそ歷史上の事實であつて、その由來するところを社會經濟と結びつけてゐないものもないであらうが、一定の社會意識の狀態によつて先立たれ、伴はれ、從はれてゐないところの歷史上の事實といふものもあり得ない。即ち社會心理の觀察が甚だ重要である所以である。法律や政治の歷史に於いて、この社會心理が理解せられなければならないとすれば、文藝の發達は、それを知ることなしには到底了解せられないであらう。

10

尤も生產力の狀態を知ることは、一般的の基礎として、文藝の歷史に役立てられる。經濟生活に於ける一つの時代といふやうなものの特質が知られる場合に於いて、殊にさうである。文藝の發達を知らうとするものは、この場合社會の發達を知るものの力を利用するのである。即ち文學上の現象があらはれるところの環境を知るために、時代の經濟上社會上の組織が知られなければならない。時代の基礎的色調と、その中に在つて、一定の文學現象がどの點に立脚地をもつてゐたかといふことが知られなければならない。而して更にその立脚地の―その文學現象が時代と結びついてゐた點の、社會上觀念形態上の關係が知らなければならない。しかしながら、文藝の發達を知るためには、直接經濟上の發達を知ることよりも、究極に於いてはその經濟力によつて決定せられてゐるところのものとしての、一般文化の發達を理解することが一層直接に必要である。社會生活の全過程から見れば、經濟力以外の原因は、元來第二次的なものではあるのだが、文藝の場合では、これに直接に働きかけるものとして、その經濟力以外の原因が重要な意味をもつ。但し文學の發達の考察は、どこまでも文化史、社會思想史、哲學史乃至宗教史となつてはならない。それ等の方面の現象について、十分な敘述を試みることは文學の發達の考察の當面の問題ではないのである。文學の考察にはこの點についての取捨の判別が殊に必要であつて、出來るだけ文學と直接の交渉をもつところの事實をその考察のうちに取り入れなければならない。而して、その直接の交渉を有する現象が、ある場合に於ては社會學上乃至社會上の思想であり、またある場合には政治思想であり、而して更にまた他の場合に於いては哲學上乃至宗教上の思想であることは、勿論個々の事實についてあり得るところでなければならぬ。

文學の社會學的方法による考察が、一旦すでに社會經濟上の基礎を了解しての上に行はれるかぎり、その上に成り立つところの觀念形態は土臺を確かめられたわけであるのだから、經濟力以外の原因即ち社會心理について、これをある時代の思想力として說くことは、必ずしも憚るに及ばない。而してこの思想力の中心が、個々の社會現象に共通である場合には、而して更にそれが一定の社會經濟上の背景の上に正しく置かれる場合には、社會生活に對する綜合的見解が形づくられることになる。而してそれは社會過程の間に發生した文化的環境である。文學の發達の上に働きかけるところの直接の原因機能はこの文化の環境であるのだが、ひろく言へばそれは社會心理である。この文化の環境は、社會生活の一集團流派といふやうに狹く限つて考へることも出來るし、またひろくある一時代の文化を包含するものとしても考へられる。何れにしても、社會生活の過程の間に行はれてゐるさまざまの原因機能の相互影響の結果は、たゞそれをいくらか取り集めて機械的に組み合はせたといふやうなものではなく、社會の坩堝の中で一に煉り上げられたやうなものであるのだからそれ等の複雜な相互影響の結果からは、何等かの中心思想ともいふべき單一な支配的な要點が見出だされなければならない。文學の考察に於いては、殊にこの事が重要である。一つの時代には一般的な思想上道德上の傾向がある。そこに「最後の說明」が包藏せられ、そこに「自餘の一切を決定する第一次的原因」がひそんでゐるとも言はれてゐる。生理的の氣溫がその昇降によつて植物の萠芽を決定するやうに、その高低の變化によつて、藝術の出現を決定するところの精神的氣溫があるとさへ考へられてゐる。これを要するに、時代の社會心理的支配力としての文化的環境が、文學に對する直接の影響を與へる力として、それの著しい表現を決定する力として認められなければならない。

かやうにして社會の生存狀態は意識を決定する。かやうな決定的な勢力の下に在つて、「意識」の仕事は如何にして行はれるか。それ等の勢力から全く免かれるといふことは、「意識」が社會的に存在しなくなることを意味する。文學の場合では、即ち時處に超越することであつて、文學の本來の社會性と矛盾する。文學の創造は、この決定的勢力の下に在つて、如何にして行はれるか。社會の生存狀態に對する意識の問題、個性乃至天才の問題の解決が、これに對する答へにならなければならないのであるが、それは更に次ぎの機會へ殘して置く。（一五・八）

宗教法案の法理的批評

小野清一郎

はしがき

明治三十二年政府が第十四議會に提出した宗教法案が貴族院に於て否決された後、約三十年の間政府は再び同様の試みを繰返すことなくして今日に及んだ。然るに最近文部省は新に一の宗教法案を公にして世の批評を求めると同時に、宗教制度調査會なるものを組織して、該法案に付き更に審議を重ねつゝある。察するに該法案は多少の修正を施して次の議會に提出されることであらう。しからば、此の機會に於て該法案に對し法理的乃至法律政策的立場より若干の批評を加へて置くこと、必ずしも無用の業ではなからうと思ふ。

國家及び法律と宗教及び教會との關係は、特に西洋に於て古來重大にして、しかも困難なる問題として取扱はれてゐる。之に關する學問的文獻も亦少くない。然るに我が邦に於ては從來此の問題は西洋に於けるが如くに重要視されてゐない。其は恐らく西洋に於けるが如き國家と教會との劇しい爭闘の歴史を有せざるためであらう。從て此の點に關する學問的文獻も亦極めて少い（僅かに穗積八束「國家と宗教との關係」明治三十三年、論文集四八三頁以下。有賀長雄「神道國教論」哲學雜誌第二五卷、明治四十三年。安藤正純「政治と宗教との關係」大正十二年など）。然しながら、法律と宗教とは國民の生活に於ける二つの重要なる文化要素であり、しかも兩者の間にデリケートな交渉關係を有することは、其の歴史的形態を異にこそすれ、東西を通じて否認すべからざる事實である。今政府が一の統一的な「宗教法」を制定して、國家の宗教に對する法律的立場を明確にしようとしてゐるに對して、世人がともかく之を輕々に看過せざらんことを希望して止まぬのである。

此の論文に於て宗教法案を批評する私の態度について一言せんに、私は全然法理的及び法律政策的立場に立たんと欲するものであつて、宗教的乃至神學的立場よりするものではない。而し

て私は此の立場を以て宗教法案の批評に於ける唯一の正しき立場たることを信ずるものである。蓋し、宗教的信仰乃至は神學に於て法律と宗教との關係に付ての思索を存し得ること、また現に存在することは勿論であるが、斯の如き思想を以て宗教法案を批評するならば、宗派を異にし、教會を異にするに從て其の見解を異にすべく、事實上到底一般國民の承認を要求し難きのみならず、純理上よりいふも、問題たる宗教法案が、一の「法律案」、即ち「法律たらんと欲するもの」である以上、之が批評は一に法律及び正義の問題であつて、宗教そのものゝ問題ではないからである。法律の世界と宗教の世界との哲學的關係は、興味ある問題であるけれども、之を論ずることは、此の論文の目的とする範圍を脱するから、今之を取扱はない。

宗教法案の發表後、二三世上に現はれた批評を見るに、殆どすべて宗教家の立場よりするものであり、殊に既成宗教團體の利害の立場よりするものが多く、法律家の立場より原則的に批評したものに至つては一も見當らぬ。是れ私が、未熟の研究ではあるが、ともかく法律家としての立場より、宗教法の原則的思惟を基礎として、與へられたる宗教法案に對する批評の筆を採らんとするに至つた所以である。私は先づ宗教法の原則的思惟の參考として、西洋に於ける國家と教會との歴史的關係を考へ(一)、次に我が邦に於ける國家、法律及び宗教の歴史的關係と、現在に於ける宗教法制の狀態とを明かにしたい(二)。以上の歴史的及び現行法制の考察を基礎として、私は「宗教法」の制定に當り採るべき態度を原則的に反省して見る(三)。然る後、右の原則的立場より、宗教法案の規定につき、其の意味及び價値を吟味したいと思ふ(四)。尤も立法上の細かい技術的部分にまで立ち入ることは、却つて宗教法案全體に對する評價を困難ならしむる嫌があるから、唯其の大綱に止めて置くつもりである。

一

西洋に於て國家と宗教との關係が困難な問題となつたのは、基督教がローマに傳播した時代に始まつてゐる。其の以前に於て國家・宗教の問題が無かつたのではない。ローマ帝國の擴大された版圖に於て、多くの民族がそれぞれの民族的信仰と祭祀とを有つてゐたことは、既にそれ自身ローマ帝國の統治に於ける精神的障害であつた。皇帝を以て同時に最高司祭(Pontifex maximus)と爲し、或ひは皇帝そのものを崇拜の對象とする皇帝禮拜(Kaiserkultus)の風俗を創始するなどの、ローマ爲政者の苦心はつひに其の效を奏さなかつたのである。だが、基督教が

何時の間にかローマの下層社會に不思議な力を以て擴がつて行つたとき、ローマの爲政者は、始めて帝國の統治に對する眞劍な危機を見出したのであつた。爲政者は本能的に基督教を禁じた。さうして基督教を奉ずるものは、ローマ帝國に對する反逆者として之を處罰したのである。

併しながら、それにも拘らず擴がつて行く基督教の勢力は帝國の力を以てしても、之を如何ともすることが出來なかつた。三一三年には既に基督教は寛容され、全く異教と平等の取扱を受くるに至つた（コンスタンチン帝のミラノ勅令）。三八〇年に至ると、更に急轉して基督教は實にローマ帝國の國教と認めらるるに至つた（テオドシウス帝）。當時の思想に於ては、基督教會は帝國の教會であつた。即ち帝國は直接に教會を管理し、支配するものであつたのである。是れ正に國教主義（國家教會主義 Staatskirchentum）である。此のローマに於ける國教主義は、ローマ帝國の分裂後、東ローマ帝國に於ける宗教政策として繼續され（ビザンチン主義）、革命前のロシアに及んでゐる。

然るに西ローマ帝國及び其の沒落後の西方ヨーロッパに於ては、國家と教會との關係は全然反對の方向に進展した。即ち西ローマ帝國の沒落（四七六年）後、ローマ教會はローマ文化の儀式を維持するものとして、精神的[illegible]の地位を占めたのみならず、また政治的にも國家組織の薄弱なるに乘じて國家以上の勢力を占むるに至つた。此の教會優越の思想を養つたものは、アウグスチン及びトマス・アクイナスの神學であるが、その以前から有名なイシドル僞書といふ僞作の文書などを利用して、教會をしてつひに國家の上に位する宗教的國家たるの觀を呈するに至らしめたのである。此の教會至上主義的社會觀に對して、ゲルマンの國家觀は固より直ちに之を承認しなかつた。殊にカルル大王、オットー一世、ハインリッヒ三世の如き、有力なる君主が教會の權力伸張の障害であつたことは明かである。しかし、結局王權は教權に勝つことが出來なかつた。法王グレゴリオ七世がハインリッヒ四世の破門を宣言した頃より（一〇七六年）、ローマ教會の世界統治の理想は實現され、法王インノケント三世に至つて教權は其の絕頂に達し（第十三世紀）謂ゆる教國主義（教會國家主義 Kirchenstaatstum）が行はるるに至つた。此の時に當つてローマ法王は正に最高の權力を有し、ドイツ、イギリス、アラゴンなどの國王は、法王の前にひさまづいて其の王冠を受けなければならなかつた。教會はまた自ら法律を作り、自ら裁判を行つた。特に注意すべきはローマ教會の信條を強制するための宗教裁判（Inquisition, Ketzer-[illegible]の制度である。異端者を處罰し、殊に死刑にさへも處す

みことはローマ帝國の下に於て既に行はれたが、法王グレゴリオ四世が宗教裁判の制を設けたる以後（一二二九年）、異端者の裁判は教會の權力の下に行はれ、國家は教會の言渡した刑罰を執行するの任に當つた。宗教裁判に依る異端者の迫害は時代により興廢があつたけれど、ヨーロツパ諸國に於て近世に至るまで行はれた制度で、其の全く廢されたのは第十九世紀に入つてからのことである。

教會の世界的統治はヨーロツパの中世に於て一般に承認されたところであつたが、しかし第十四世紀頃から、其の堪へがたいことが漸次感ぜられて來た。殊にルネサンス及び古代ローマ法の復活は、中世の宗教的政治に對する大なる打撃であつた。宗教改革が起るに及んで（一五一七年）、ローマ教會は其の宗教的獨占の地位を失つたのみならず、近世的國家の勃興と相俟つて、其の政治的權威を失墜するに至つた。ローマ・カトリツク教會は、今日に至るまで其の思想的立場として教會の國家に對する優越の主張を捨てない。しかし、事實は最早や其の主張の貫徹を許さなくなつた。宗教改革後、國家と教會とは再び其の地位を換へて、國家が教會を支配することになつた。此の傾向は第十八世紀啓蒙時代に至つて其の絶頂に達してゐる。當時の思想によれば、教會は國家の支配の下に善良なる國民を養成する國家的權威に外ならなかつた。國家は其の好むところに從て舊教又は新教のいづれかを採つて、之を一般に行はしむる權あると共に、教會の行政は國家の行政の一部として國王の支配の下に行はるべきものであつた。即ち近世に至つて再び國教主義が復活されたのである。

此の近世の國教主義が、第十八世紀の末葉から第十九世紀に入つて、すみやかに崩壞し、信教の自由が現代に於ける立憲國の一原則として一般に認められるやうになつたのは、主としてフランス革命以後、政治上に於ける自由主義の思想が宗教に對しても其の適用を見るに至つた結果である。だが實際的事情として、次第に多くなつた宗派の分裂が、最早或る一宗一派のみを國教として強制することを事實上不可能ならしめ、宗教に對する平等の取扱を必要とするに至つたことが亦其の一原因である。しかのみならず、之を西歐の文化一般より觀察するに、中世に於ては全文化の基調が基督教にあつて、いはゞ一の宗教的文化の時代であつたのであるが、ルネサンス、啓蒙時代を經て、世間的文化が社會生活の基調を爲すに至り、從つて此の世間的文化を保護し、促進する組織としての國家が、一の超宗派的文化國家として其の地歩を占むるに至つたといふ、近世の社會文化狀態に於て其の根本原因を存するのである（以上の叙述につ

いて特に參考したるは、R.Sohm, Kirchengeschichte, 1889. W. Kahl, Staat und Kirche, in Handbuch der Politik1.Band 3. Aufl.1920. E. Ruck, Kirchenrecht, 1:2; U. Stutz,Kirchenrecht, in Holtzendorff-Kohlers Enzyklopädie derRechtswissenschaft, 5.Band 7.Aufl. 1914)。

信教自由の原則を認め、一定の宗教を國教として强制せざることは、現代立憲國に於ける一般的現象であるが、しかし國家が既成の宗教に對して如何なる態度を採るべきかについては、未だ必ずしも一定してゐない。大體二つの主義がある。其の一は、國内に於て歴史的關係上特に有力なる教會（必ずしも一種に限らず）に對して、特別の保護を與ふると共に、之に對して特別の監督を行ふものである。特別の保護とは、例へば財政上の補助を與へ、また教會に公法人たる地位を認め、公法的特權（例へば徴税權）を認むるが如き是である。特別の監督とは、單に公益上必要なる警察的取締を行ふに止まらず、教會の行政に關し、外部より宗教的統治權（Kirchenhoheit）を行ふをいふ。之を公認教主義と稱す。イギリスの如きその著しき一例である。一九〇九年以前のフランスの如き、革命前のドイツの如きも、いづれも公認教主義であつた。一九一九年のドイツ憲法は、教會に對する國家の財政的補助を廢したけれども、尚教會の公法人たる地位を認めてゐる（其の第百三十七、八條）。

其の二は、國家と教會、政治と宗教とを徹底的に分離せんとするものであつて、教會はすべて之を私法的結社と認め、從つて其の管理に對して國家は特別の監督を行はない。國家は唯公の秩序及び善良の風俗を維持するに必要なる警察的取締を行ふに止める。之を政教分離主義（國家と教會との分離 Trennung von Staat und Kirche）と稱す。アメリカに於ては多くの宗派が併存し、到底或る一二の宗派のみを公認する能はざる事情があつたために夙に此の政教分離主義を採用してゐる。フランス一九〇五年の政教分離に關する法律は此の主義を行はんとしたもので、カトリック教徒の反抗により其の實行に困難を感じたのであるが、ともかく之に依つて或る程度までの政教分離を現實するに至つたのである（M. Hauriou, Principes de la loi du 9 décembre 1905 sur la séparation des églises et de l'état, 1906. Kahl a.a.O.）。

二

翻て我が邦に於ける國家・宗教の歴史的關係を觀るに、西洋に於けるが如き國家と教會との勢力抗爭の歴史は無い。是れ惟ふに、一面に於て宗教的に寛容（tolerant）なる東洋人の心理に

基くものであり、他の一面に於て我が邦宗教史の中心的地位を占むる佛教が、基督教の如く自らの教會組織によつて、政治的に社會を支配せんと志すことなく、社會の統治は始めより之を世間の國王と其の國家組織とに任せ、唯之を精神的に指導し、擔保することを自らの任務と爲したるに因るものである。併しながら我が邦に於ても國家と宗教との問題が全然存在しなかつたのではない。私は次に其の要點を述べて置かなければならぬ。

我が邦が、未だ多く大陸の文化の影響を受けざる以前に於て、民族固有の宗教思想があり、しかもそれが國家的體制の精神的基礎を爲してゐたことは疑ふことが出來ぬ。建國時代に於ては神祇の祭祀と國家の統治とは離るべからざる關係を有して居り、祭祀權を有するものは、即ち統治權を有するものであつた（祭政一致）。神祇に對する宗教的信仰は、皇室の統治者としての地位を安固ならしむるに役立つた。古事記、日本書紀に現はれた神々の物語は悉く皇室が神々の後裔であること、又は皇室の統治權が正統なるものであることを證明するための物語であつて、要するに統治者としての皇室の地位を宗教的・形而上的に基礎づけようとするものに外ならぬやうに見える（津田左右吉「神代史の研究」大正十三年、五二四頁）。されば、征服民族の神祇思想と被征服民族の宗教觀念との間には何程かの衝突があつたことが推測されるのであるが、征服民族の神話が如何にして一般の宗教觀念と調和するに至つたかは、未だ充分明かにされて居らぬやうである（加藤咄堂「民間信仰史」大正十四年、三）

我が邦に於て國家・宗教の問題が明かに意識されるに至つたのは、大陸文化の輸入、殊に佛教傳來の時代である。歴史に傳はつてゐる蘇我、物部兩氏を中心とする崇佛派と排佛派との鬪爭は、我が邦固有の宗教意識と、傳來せる佛教信仰との矛盾衝突を其の思想的原因とすることは勿論であるが、同時に國家として、新なる宗教に對して如何なる態度を採るべきかの問題が含まれてゐた。其は初め百濟王が經論佛像を獻じたとき（欽明天皇十三年、西暦五五二年）、欽明天皇は歡喜踊躍して「朕昔より未だ曾て是の如き微妙の法を聞くことを得ざりき」といつたに拘らず、其の佛を拜すべきや否やに付て「朕自ら決する能はず」として群臣に歴問せるに依ても明かである（日本書紀、國史大系本三三一頁）。

崇佛主義と排佛主義との鬪爭は、事實上崇佛主義の勝利に歸し、奈良朝、平安朝の佛教隆盛時代を齎らしたことは、明かな事實である。しかし、佛教は決して日本固有の神祇祭祀を滅ぼしてしまはなかつた。此の點、西洋に於て基督教の流布に依

り。基督教以前の民族的神話及び宗教が滅ぼされ、基督教が唯一の宗教として行はるるに至つたのと趣を異にしてゐる。然らば、佛教興隆以後神祇祭祀と佛教とが政治上如何なる關係を有したかといふに、其は大體に於て相並んで稍國教に近き程度の公認教であつたと考へてよいやうに思はれる。

神祇祭祀は朝廷の事務として未だ嘗て廢されたことがない。王朝時代の法制を見るに、神祇官の官制があつて、しかも太政官の上に位してゐる（職員令）。また神祇祭祀に關する法令がある（神祇令）。併しながら一面に於て佛教が當時の支配階級によつて信仰され、莊嚴なる佛舍殿堂の相ついで建立されたのは、實に朝廷の厚い保護があつたからのことである。聖徳太子十七憲法に「篤く三寶を敬へ」とあることは、更めていふまでもないことであるが、奈良朝、平安朝に至つて朝廷は自ら神祇の祭祀を怠らざりしに拘らず、一般國民に對しては必ずしも神祇の信仰を強ひようとはせず、寧ろ佛教を以て其の精神生活を指導せんとした觀がある。元來王朝時代の佛教は一般に現實主義的傾向を有し、あらゆる現實的希求に對する加持祈禱を許したが、殊に平安朝の二大宗教たる天台、眞言の如き、いづれも「鎭護國家」を説き、國家的統制を安泰ならしめようとする動機に満ちてゐたので、當時の支配階級は殊更佛教を重んじたのであらう。されば、法令の上に於ては僧尼の監督を嚴にしてゐるが（僧尼令）、佛教の社會的勢力の加はると共に寺院及び僧侶の横暴跋扈し、つひに白河法皇をして「天下朕の意の如くならざるもの、鴨河の水と雙六の賽と山僧とのみ」と歎ぜしめたことは有名な話である。

王朝時代の佛教は、ともかく朝廷の保護の下に興隆した。然るに中世に入り朝廷の威令行はれざるに至り、佛教は却て民衆いものとして、其の宗教的生命を新にした。中世の精神生活を支持し、指導したるは實に佛教であつたのである（平泉澄「中世に於ける精神生活」大正十五年）。同時に中世の佛教は國家の政治とは關係のないものとなつた。禪といひ、淨土といひ、いづれも個人的色彩の著しき宗教であつて、國家及び法律は少くとも其の直接に關係せんとするところではなかつたのである。中世の佛教は必ずしも爲政者の保護によらず、當時の社會における精神的要求に應ずるものとして、それ自身の力によつて其の範圍を擴張したのである。それだけ政治と宗教との關係は密接でなく、時として頗る緊張した關係に在つた。殊に本願寺が政治的色彩を帶びた一個の教團として勢力を振ふに至つたことは見のがすことの出來ぬ現象である。

耶蘇教の傳來は我が邦に新なる國家・宗教の問題を提供し

た。織田信長は本願寺、比叡山等佛教教團の勢力を抑制せんとする動機から、耶蘇教の傳道を許し且つ之に保護を與へたが（永祿十一年、西暦一五六八年）、其の頃大友義鎭、大村純忠等をはじめ、諸國の大名にして耶蘇教（カトリック教）に歸依し、之を其の領内に行はしめたものが少くなかつた。然るに豐臣秀吉に至り耶蘇教を禁じ、徳川家康も亦秀吉の政策を繼續した。爾後切支丹禁制は明治初年に至るまで一貫せる宗教政策となり、幾多の殉教者を出したことは、近時新に世人の興味を惹いてゐる點である（姉崎正治「切支丹宗門の迫害と潜伏」大正十四年）。切支丹を禁制せる當初の動機は、第一に切支丹を奉じた大名の領内に於て神社佛閣の破壊運動が極端に行はれたこと、第二に耶蘇教の勢力を利用する西洋人の政治的侵略が危惧されたことであつた。從て其は神道又は佛教を國教として維持せんがための宗教的非寛容(intolerance)に出づる迫害ではなかつた。しかし徳川幕府は切支丹禁制を嚴重に維持せんがために、宗門改の制度を設けて、一般人民をして必ず或る寺院の檀徒たらしめ、同時に寺院に對し御朱印を以て其の寺領を保障し、其の財政的基礎を强固ならしめた。徳川幕府が佛教に特別の保護を與へたことは、切支丹禁制の目的以外に、尚公家及び外樣大名の勢力を制するの目的もあつたが、ともかく之に依て佛教は殆ど國教といつて差支ない狀態であつた。だが、佛教は斯の如く政治的に利用せらるることに依て、却て宗教そのものとしての沈滯を招ぐに至つたのである。

神道は、既に南北朝の頃より體系的宗教たらんとする傾向を有したが（高畠穆「神皇正統記」）、後佛教の影響を受けつつも、之より獨立なる宗教としての成立を主張するもの輩出し、徳川時代に至つて復古神道の思想的體系を生んだ（本居宣長、平田篤胤）。其の餘流として今日行はるる神習教、禊教、黒住教などの教派神道を生じたのである。徳川幕府は復古神道及び教派神道に別段の壓迫を加へずして、其の布教を許したのであるが、復古神道は後に徳川幕府崩壊の思想的一原因となつたのである（以上我が邦の歴史について、土屋詮教「日本宗教史」大正十四年。比屋根安定「日本宗教史」大正十四年。山本秀煌「日本基督教史」大正十四年など。尚特に徳川時代の宗教法制について、文部省宗教局編「江戸時代宗教法令集」及び「徳川幕府宗教法令概說」參照）。

明治維新當時の爲政者は、國學者、復古神道家の思想に基き、王政復古と共に祭政一致の再現を試みた。即ち神祇官を設けて之を太政官の上に位せしめ、神佛判然の令を下して、神社より佛教的色彩を驅逐せしめた。其の餘勢が廢佛毀釋の運動と

なつて行はれたのである。明治三年「大教宣布の勅」を發し、宣教使を派遣して惟神の道を天下に布教せしめたが、此の勅語を見ると、其の神道國教主義を實現せんとするつもりであつたこと明かである。だが外國と交通を開いた結果切支丹禁制の高札を撤去せねばならぬことになり（明治六年）、後政府は教導職なるものを設け、神官及び僧侶を採用して、一定の教則に基いて宗教的教導を行はんとしたが、今度は佛教徒より神佛分離を要求されて、佛教に獨立の布教を許さねばならぬことになつた。玆に神道國教主義は全く失敗に終つたのである。明治十七年太政官布達を以つて教導職を廢し、神道各派及び佛教各宗は各一名の管長を置くべきことを命じ、宗派の行政はすべて之を管長に委任することとした。其の後は神道（教派）、佛教及び基督教はいづれも事實上自由に布教を行ふことを得たが、明治二十二年憲法第二十八條は更に明文を以つて信教の自由を保障するに至つたのである（村上、辻、鷲尾「明治維新神佛分離史料」大正十五年）。

今我が國に於ける宗教法制の現狀に就て考へて見るに、信教自由の原則は憲法上の根本原則であつて、神道國教主義は既に過去のことに屬すること、勿論である。併しながら、神社は現に國費又は府縣市町村の支出に依つて經營され（明治三十九年法律第二十四號、同年勅令第九十六號）、官國幣社の宮司、權宮司等が內閣に於て任命せらるるのみならず、府縣社以下の神社の神職の如きも地方長官が之を補職するとになつてゐる（明治三十五年勅令第二十七號、明治二十七年勅令第二十二號）。神社に於ける祭式は亦國家の定むるところに從つてゐる（大正三年內務省訓令第四號）。されば神社は今日の法律狀態を事實として觀察する限り公法人なりといふの外なく（此は亦我が邦公法學者の通說である。筧「皇國行政法」大正九年、四四〇頁。織田萬「神社の國法上の性質」法學志林第九卷六九一頁。美濃部達吉「日本行政法」第二卷明治四十三年、六二一頁）、從て神社神道（教派神道に非ず！）は公認教たる性質を有するものと謂はねばならぬ（神社が宗教なりやは、後に之を論ずるが、私は其の宗教たること疑がないと思ふ）。

之に對して教派神道及び佛教は、國家より財政上の補助を受けず、また其の管長の就職が文部大臣の認可を要する外、宗派內の行政について少くとも原則として宗派の自治に「委任」され、殊に佛教各宗は、それぞれ宗制寺法を有し、管長は一般に集會の協贊を經て宗派の行政を行つてゐるやうである。寺院は其の所得税を免ぜられる等（所得税法第十七條）多少の保護がある。即ち神道各派及び佛教各宗は從來の歷史的事情に基き今日

も尚幾分公認教的色彩を有してゐるのである。

基督教に至つては、現在の法制の下に於ては、國家より特別の保護を受けざる代り、また佛教の如き窮屈なる監督を受けずして　極めて自由に其の教勢を擴張することが出來る狀態に置かれてゐるのである。要するに神社の祭祀を除けば、我が邦に於ては政教分離主義が既に可成り徹底的に行はれ、唯佛教及び教派神道が從來の慣習上、政府の監督に服し、幾分公認教的色彩を帶びてゐるといふのが、現在の狀態である。

三

私は以上西洋に於ける國家・宗教の歷史的關係を考へ、また我が邦に於ける國家・宗教の歷史的關係を前提として、今我が邦に於ける「宗教法」が如何にあるべきかを原則的に考察して見たいと思ふ。抑もすべての法律的思惟及び行動に於て一貫せる根本原理は正義そのものでなければならぬ。正義は即ち法律の世界に於ける窮極の理念である。併しながら、此の絕對的な正義の理念が具體的問題に對して如何なる原則の妥當を要求するかについては、單なる抽象的思索を以て之を決することは出來ぬ。歷史的に與へられた現實の文化狀態を基礎としてのみ之を決し得べきである。是れ私が稍煩はしきを忍んで以上の歷史的考察を行つた所以である。

宗教法の原則を考ふるについて、まづ第一に法律及び國家と宗教及び教會（教團）との體系的關係を考へなければならぬ。蓋し、今制定せられんとする「宗教法」は、言ふまでもなく一の國家的法律としての宗教法であるが、元來宗教法又は教會法なるものは、其の概念上必ずしも國家の宗教法（Staatskirchenrecht）に限られざるのみならず、國家の宗教法と教會の宗教法との妥當の根據及び限界について理論上極めて困難なる問題を包含してゐるからである。

宗教法又は教會法は、宗教又は教會に關する法律體系である。だが、其は必ずしも國家の立法に依て生ずるものと限らぬ。法律とは普通には國家の法律のみを指すけれども、其の本質上國家を前提として成立するものと考へることは、近時の法理學者の採らざるところであつて、國家の存在せざるところにも法律は存在し得る。また國家の存在する場合に於ても、すべての法律が國家の意志に依て生ずるものと見ることは出來ぬ。國家の組織に依らざる社會法則にして法律現象と認むべきものが少くない。其の著しきものは慣習法であるが、慣習法以外にも、團體規約の如き一種の法律現象と見るべき場合がある。就中宗教團體たる教會宗派の内部に行はるる團體的統制の法則は、概念上

之を法律と稱し得べく、唯狹義に於て國家の法律と稱すること能はざる場合あるに過ぎぬ。西洋に於て新教の教會法は國家の立法を基礎とする點多きも、舊教の教會法はカトリック教會に於ける古來の立法及び傳統を以て其の主要なる部分と爲すのである。我が邦に於ける佛教各宗の宗制寺法の如きも、又國家の法律には非ざる一種の宗教法なること、疑を容れぬ。

併しながら一國の內部に於て矛盾する幾多の法律體系の存在することは、堪へ得べきでない。何故なれば、法律は其の本質上、無條件的妥當を要求するものであるからである。玆に於てか法律秩序に關して最終の決定を與ふる權威がなければならぬ。而して近世の歷史的事情は、國家を以て法律に關する最終的權威と認むるに一致してゐる。「主權」の觀念は玆に其の根據を有する。國內に於ける一切の法律秩序は悉く國家制定の法律に依て創造されるものではないが、少くとも其は國家の法律と矛盾することは出來ぬ。國家的法律の承認し又は寬容する範圍に於てのみ法律秩序の一部を爲すことが出來るのである。されば教會の立法乃至宗派の規定する宗制寺法の如きも、國家の立法に反することは出來ぬといふのが、近世の法律觀であり、また我が邦に於ける法律原則でなければならぬ（R. Stammler, Recht und Kirche, Rechtsphilosophische Abhandlungen und Vorträge II. Band, 1925 bes. S. 174ff.)。

然るに此の國家主權の法律原則に反對なる思想が、しかも宗教界に於て存在する。其はいふまでもなくカトリック教會の傳統的思想である。舊教の傳統的思想に依れば、ローマ・カトリック教會は基督の意志に依て設立され、其の代表者たる法王（日本の教徒は「教皇」と呼んでゐる）の下に司教、司祭等の階級的機關によつて統治せらるる基督教徒の可見的團體である。即ち其は宗教的團體であると共に、また政治的、法律的團體である。しかも國家の如く一定の地域に限定せらるることなく、全世界の統治を以て其の理想とするのである（W. Köhler, Staat und Kirche, 1903, —, Katholizismus und moderner Staat, 1908)。從て舊教の教義に於ては少くとも事のカトリック教會に關する限り、國家の主權を否認する。學者は國家と教會との間には「原則的平和といふことはあり得ぬ。唯單なる休戰狀態のみが可能である」とさへいつてゐるのである（Hinschius, Kirchenrecht, in Holtzendorff-Kohlers Enzyklopädie der Rechtswissenschaft, 1912, S. 1497)。唯、現在に於て固より舊教思想の貫徹を許さぬから、カトリック教會に於ても實際上妥協的政策を採り、國家の側に於ても深く原則的思想を問はずして政策的に或る點までの妥協を認めてゐるに過ぎぬので

ある。

國家とカトリック教會とを政策的に妥協せしむる實際的理論として舊教の側から對等說（Koordinationstheorie）なるものが唱へられてゐる。此は國家とカトリック教會とを、共に主權を有する對等の團體なりとし、兩者の關係を宗教條約（Konkordate）によりて決すべきものとするのである。併しながら宗教條約の効力及び解釋に關して理論上の困難あるのみならず、宗教條約に依り、國內に於けるカトリック教徒に對して宗教的統治權を拋棄すべきかは、國家として頗る愼重なる考慮を要すべき問題であらう。

さはあれ、純眞なる正義に於て法律觀は其の窮極の統一を見出さねばならぬ。惟ふに法律と宗教とは其の文化的本質を異にする。一は現實的社會統制を志すものであり、他は專ら精神的指導の原理たるべきものである。されば、其の本質的方向の差異を明かにし、法律と宗教との妥當すべき領域を分つに於ては、兩者の間に必ずしも矛盾を生ぜず、國家は法律的に主權を有し、しかも宗教が精神的に絕對獨立なる權威を有するものと考へ得るではなからうか。是れ政教分離主義の根本的立場である。唯耶蘇舊教に於けるが如く、教會がひとり精神的權威を主張するに止まらず、國家に伍して、否國家の上に位して、法律的主權を主張するに於て、國家と教會との間には永久に解くべからざる矛盾衝突を生ずるを免れぬのである。此の點に於て新教が教會の本質を見えざる精神的結合に求め、見ゆる現實の教會に對しては、國家の法律的主權を承認するは、遙かに現代の文化に對して正當なりと謂はざるを得ない。而して佛教思想が古來「世間」の生活統制を「王法」に任せ、自らは之を精神的に指導し、保障するを任としたるは、期せずして近代的正義に合するものなのである。

私は右の如き正義觀を基礎として、我が國家に「宗教法」制定の權あることを疑はない。勿論今直ちに一個の「宗教法」を制定する必要ありや否やは別問題で、私は必ずしも急を要する立法事業ではないと思ふが、ともかく國家が宗教に關する立法權を有することは今日の正義の原則であらねばならぬ（カトリック教徒が如何に考へようとも）。併しながら國家は其の立法に於て正義の原則に從はねばならぬ。國家の主權は決して氣紛れの立法を許す萬能ではない。然らば宗教法に於ける正義の原則は如何、私は現在に於ける文化を條件として、三つの原則を考へることが出來る。

（一）其の最も重要なるは信教自由（Bekenntnis-freiheit）の原則であらう。更に之を分つて二と爲すことが出來る。即ち個

人的信仰の自由及び宗教的集會及び結社の自由である。

元來個人の純粹に內面的な信仰そのものを法律的に支配することは、事實上殆ど不可能なことである。しかし古代及び中世の法律は屢々刑罰を以て或る宗教を信奉せしめ、又は禁制することを試みた。西洋に於ける異端者の裁判、我が邦に於ける切支丹の禁制は、いづれも其の適例である。だが今日の正義觀は最早純粹なる內面的信仰の領域に對して法律的に命令しようとはしない。國民は少くとも其の信仰そのものに於ける自由を有せねばならぬ。しかし。謂ゆる信教の自由は單に斯の如き純粹內面的の自由のみに限局せらるゝものではない。國民は其の信ずるところの宗教的信仰の要求する儀式を行ひ、其の教義を宣布する等、宗教的行動の自由を享有せねばならぬ。特に其の目的のための集會及び結社の自由を認むることは、亦宗教的文化の獨立を認め、其の發達を保護せんとする近代的正義の要求するところである。我が憲法第二十八條の如きも此の意味に於ける信教自由を保障するものなりと解さねばならぬ（美濃部達吉「憲法提要」大正十三年、一七九頁）。

勿論右の意味に於ける信教の自由は絕對的なることを得ぬ。其は現在の一般法律秩序と調和する程度に於てのみ承認せらるべきである。我が憲法の謂ゆる「安寧秩序を妨げず、及臣民たるの義務に背かざる限に於て」信教の自由を有するに過ぎぬ。殊に宗教的結社たる教會、宗派、寺院の如き、社會生活のあらゆる方面に影響を及ぼすこと頗る重大なるものがあるから、之に對して國家が或る統制的行動に出づることは認めなければならぬ。唯此の場合に於ても、苟くも個人的信仰の自由を妨ぐるが如きことは、絕對に之を避くべきである。

（二）次に認めらるべきは宗教的平等（Parität）の原則である。元來自由及び平等は近代的正義の根本的原則であるのであるが、宗教のことに關しても、自由と同時に平等の原則が行はれなければならぬ。宗教的平等は亦其の內容を二つに分つことが出來る。其の一は個人に對する國法上の平等、其の二は教會又は宗派の平等である。

個人に對する國法上の平等とは、凡そ國民たる者は其の如何なる宗教を信仰するも、法律上の地位に於て平等なるべく、或る宗教的信仰又は或る宗派所屬のために私法上、公法上不利益なる地位に置かるることなきをいふ。ドイツ新憲法の如きは明文を以つて、民事上の權利及び國民としての權利が信教自由の行使によつて制限せられず、また公職に就くことは宗教的信仰の如何に無關係なるべきことを規定してゐる（其の第百三十六條）。我が國には斯かる明文の法規なきも、斯の如きは當然のこ

とと認められ、事實上に於ても此の意味に於ける宗教的平等は、西洋に於けるよりも遙かに徹底的に行はれてゐるのである。

教會又は宗派の平等とは、既成宗教に於ける教會又は宗派に對して立法上及び行政上出來る限り平等の待遇を與ふることをいふ。此は國内に多くの教會、宗派が併び存する場合に於て到底避け難いことであるのみならず、元來法律と宗教とが其の本質を異にするものである限り、國家の法律は既成宗教に對して根本的選擇を施し得るものではない。すべての既成宗教に對して平等的態度を採るべき理由は玆に存する。從てまた玆に平等といふは必ずしも機械的平等、即ちあらゆる既成宗教を全然一律に取扱ふことを意味するのではない。寧ろ歴史的事情に應じ、各教會又は宗派の事實上の勢力を顧慮しつゝ之に相當なる待遇を與ふることが、實質的に平等の原則を實現する所以であらう（Kahl, aaO S. 137. Stutz, aaO. S. 40）。

（三）最後に困難なる問題は、國家が既成の教團に對して如何なる程度の保護及び監督を爲すべきかである。此の點に關して從來或る宗教を公認し、之に公法人たる地位を認め、又は財政的補助を給する等の方法により、特別の保護を與ふると共に、其其の教團の行政に關して特別の監督を行ふ公認教主義と、宗教に對して特別の保護監督を與ふることなく、宗教を全くの私事と認め、其の教團を私法的團體と認むる政教分離主義とあることとは、既に之を述べた。而して私は宗教法の將來は政教分離主義に在ることを信ずるものであるが、今直ちに之を極端まで徹底せしむることは、到底不可能のことであつて、國家が既成の宗教に對して或る保護を與ふると同時に相當の監督を爲すことは、少くとも差當り廢し得ざるところであらうと思ふ。西洋に於ても、政教分離の理想的に行はれてゐる國は一も存在せぬと謂つてよいのである（Kahl, aaO. S.142.）。

我が邦に於て政教分離主義を行ふ障害となるは、神社の存在である。神社が現在國費又は府縣費の支出によつて維持せらるる祭祀の施設であり、其の法律上の性質が公法人なることは、到底之を拒むことが出來ぬ。明治初年の神道國教主義が崩壞したる後、政府は「神社は宗教に非ず」といふ定説を案出して、神社の有する特殊の地位を蔽はんとしてゐる。しかし神社の祭祀が一の宗教行動たることは、政府自ら定めてゐる祭祀の方法、就中祝詞の内容などを見ると、全く疑ふ餘地がない（大正三年内務省訓令官國幣社以下神社祭式）。法律上に於て之を神社に非ずといふは、神道公認教主義の外觀を避けんがための擬制に外ならぬ。今少しく事實に即して虚心に考ふるときは、神社は現在少くとも一の公認教に外ならぬのである。而して今宗教法の制定に依

りて一擧にして此の法律狀態を變更することは到底不可能である。蓋し國民全體として觀察するとき、神社に對する無意識的信仰の現に存在することは疑ふべからざる事實であつて、殊に神宮に對する信仰が我が國家的統制と微妙なる關係を有することは、たとへ個人的に神道に對する意識的信仰（例へば筧克彥「神ながらの道」大正十五年、に於けるが如き）を有せざる者と雖も、到底之を否認することは出來ぬ。從て、法律的制度としては、差當り神道公認主義を以て一の正當なる原則と認めざるを得ないのである。

敎派神道（神社とは全然別物である）及び佛敎に對しては政敎分離主義を採るとは可能であるのみならず、今日すでに或る程度まで此の主義が實現されてゐるのである。佛敎は我が邦の歷史に於て久しく公認敎的取扱を受け、殊に德川時代に於て殆ど一の國敎たる觀があつたのであるが、明治維新後の政情に依りて國家との特別の關係を失ひ、僅かに舊慣を基礎とする政府の監督あるに依て、幾分公認敎的色彩を有するに過ぎない。しかも佛敎各宗は財政上其の他に於て政府より殆ど何等の保護を受けぬのであるから、或ひは新なる寺院の建立を許さず、或ひは宗派に屬せさる敎會の設立を許さざる如き政府の監督は、徒らに佛敎の自由なる發達を妨ぐる不當の干渉といふの外なき現狀である。此の點については宜しく政敎分離主義を明かにし、一政府の佛敎に對する無用なる干渉を全廢して、其の自由なる發達（又は消滅）に任すべきである。

基督敎に對しては政敎分離主義が明かに行はれてゐるといふことが出來る。基督敎は國家より公認されず、從て保護監督を受けてゐない。それだけ極めて自由なる活動が許されてゐる。今宗敎法を制定するにしても、此の點は何等變更すべき必要がないのである。

四

さて、右の原則的考察を基礎として、愈々文部省の宗敎法案を具體的に批評すべき段取りとなつた。

（一）まづ第一に信敎の自由は、上に屢々論じた如く近代の正義觀に於ける根本原則であり、また我が憲法第二十八條の保障するところであつて、宗敎法案も此の原則を前提としてゐることは勿論であらう。殊に個人的信仰に對して寛容（tolerant）なることは東洋の文化に於ける傳統的特色であつて、現在に於てすでに信敎の自由は可成り理想的に實現されてゐるといつてよいと思ふ。唯個人的信仰の自由を妨ぐる觀あるは、小學校の兒童をして神社に參拜せしむる習慣あることである。此は必ず

しも法律的强制とまでいふことが出來ぬかも知れぬが、ともかく信仰の自由の觀念上幾分問題となるべき習慣である。私は必ずしも法律を以て此の習慣を禁止すべきものとまでは思はない。我が國民の大多數が現に神社に對する信仰を有してゐる以上は、小學校に於て教員が兒童を引率參拜すること必ずしも差支ないであらう。(學校に於ける宗教的禮拜は、西洋に於て必ずしも珍しくはない)。唯宗教法は、父兄に對し其の子弟を斯かる參拜より脫退せしむる權利を保障すべきではあるまいか。法案が神社に對する關係を全く顧慮せざりしは、一の重大なる缺點である。

次に宗教的結社の自由に對して、宗教法案の規定するところは甚しく不當である。後に論ずる如く、法案は宗教の「指定」といふ一種の制度を設けて既成の宗教に對する或る程度の保護監督を行はんとするものであるが(第一條)「指定」せられざる宗教に付ては、其の教義の宣布又は儀式の執行を目的とする結社を組織せんがためには、地方長官の許可を必要としてゐる(第二十六條)。此は必ずしも全然新なる宗教を禁止するの趣旨でないことは勿論であらうが、しかし少くとも新なる宗教の成立を著しく困難ならしむるものである。殊に既成宗教に於て異說を唱ふる者(Dissident)が困難なる地位に陷るべきことは想像するに難くない。此の點に於て見逃すことの出來ぬことは、從來政府が其の佛教に對する監督權の行使に當り、既成の宗派以外に新義を唱へ、新宗派の起ることを禁止した明治維新前の宗教政策を其のまゝ繼承し、既成宗派以外の佛教といふものを認めざる態度をとつてゐることである(文部省宗教局宗教制度調査資料第十九輯「歷史に現はれたる新宗派認可の事情」)。此は徳川時代の如く佛教が殆ど國教に近き公認教であつた時代に於てはともかく、今日に於ては全然不當なる政策であつて、此の政策のために佛教の自由なる發達がどれだけ妨害されてゐるか分らない。而して、宗教法案の起草者は此の點につき明文上何等の規定を設けざるも、當局が將來に於ても依然として從來の政策を維持せんとしてゐることは、例へば宗教制度調査會特別委員會に於ける當局の答辯に依て窺はれる。曰く「基督教には教團に屬せざる獨立の教會が多數にあるから之を認めるが、神道及び佛教には統制的體系があつて、教宗派に屬せざる寺院、教會所は認められぬ」(東京日日新聞大正十五年七月十一日)と。だが、一個基督教に既成教團以外の教會が多數あるのは、從來政府が之を全然自由にして置いたからである。之に反して佛教に對しては政府は前述の如く自由に教會を設立することを認めぬのであるから、其の存在せざるは當然のことである。此の既成

宗派に於ける「統制的體系」を保護するといふ名目の下に政府の採つてゐる佛教に於ける新義、新宗派の制限政策の全然不當なことは餘りに明白である。

(二) 次に宗教的平等の原則が宗教法案に於て如何に認められてゐるかを考ふるに、個人が其の信仰如何により法律上の地位を異にせざることは、我が邦に於ては頗る徹底的に行はれてゐる。從て法案に於てドイツ新憲法第百三十六條の如き規定なきことは、必ずしも不備と爲すことは出來ぬ。

之に反して教會及び宗派の平等に關して、宗教法案は頗る機械的な平等を實現せんとしてゐるやうに見える。しかし此は唯外觀たるに止まり、神社は宗教に非ずといふ擬制の下に現在神社に與へらるる法律上の優越なる地位には、法案は少しも觸れて居らぬのであるから、實質的には少くとも神社と他の宗教とを平等に取扱はんとするものに非ざること勿論である。惟ふに神社が一の宗教である以上、寧ろ其の事實をありのままに承認し、神社は宗教に非ずといふ如き擬制を用ふることなく、神社を一の公認教として規定すべきではあるまいか。宗教的平等が到底機械的平等であり得ざることは、上に論じたところである。日本の歷史的事情及び現在の社會的事情の下に於て、少くとも倘當分は神社に對して公認教たる地位を拒むことは出來ぬと信ずる。神社は一の宗教であるが故に、之を他の宗教と全然同一に取扱ふべしといふが如きは、何等現前の事實に基かざる机上の空論にすぎぬ。それは正義の要求する平等ではない。

宗教法案が佛教、神道(教派としての)及び基督教に對して或る程度まで並行的な法規を制定せんとしてゐることは、正當であると思ふ。但し法案が「基督教」なる語を避けて、「神道又は佛教にあらざる宗教」といふ言ひ現はし方をしてゐるのは、たとへ基督教以外の宗教を包含せしむる意味であるとはいへ、ともかく既に我が邦に於て社會上其の地位を認められてゐる基督教の教徒に不滿あるは尤もなことであらう。實質的には關係のないことであるが、此は「基督教及び其の他の宗教」と改むべきである。同時に、法案は神道の「教派」、佛教の「宗派」、基督教及び其の他の「教團」の三つを別々に規定してゐるが、「教派、宗派に關する規定は別段の規定ある場合を除く外之を教團に準用す」(第五十八條)とあつて、僅々一二點を除き、全然同一に取扱はれるわけである。然らば此は立法技術として頗る拙劣なやり方であると謂はざるを得ぬ。教派、宗派、教團の三者が大體同一の法規に依て取扱はるる以上は、寧ろ宗教團體について唯一度規定をなし、個々の差異の點のみを特に規定する方が遙

かに合理的である。

佛教と基督教とを全然平等に取扱ふことについて、佛教の既成宗派に屬する人々の間に幾分不滿の存することは、諒解の出來ぬことではない。蓋し佛教は德川時代に至るまで殆ど國教に近い公認教であつたことは既に屢々述べたる如くで、現在に於ても佛教徒は國民の大半を占めてゐる。だが既に明治維新以來佛教は國家政治の圏外に放逐されてゐるのであつて、現在尙多少公認教的色彩を有するとはいへ、實際に於て全くの私的宗教と認められてゐるのである。されば之を神道各派及び基督教と同一に取扱ふことは早晩來るべき運命である。而して私は其の佛教のためにも寧ろ利益なるべきことを信ずるものである。

宗教法案は附則に於て、現在國有地となつてゐる寺院境內地を一定の條件の下に當該寺院に讓與することを規定してゐる（第百十九條）。此は一見佛教に對する特別の恩惠の如くにも見えるが、事實は必ずしもさうではない。元來寺院の境內地は其の私法上の性質に於て寧ろ寺院に其の所有權ありしものと見るべき場合多きことは、法制史的研究に依り爭ひ難きところである（中田薫「御朱印寺社領の性質」國家學會雜誌第二十一卷、明治四十年。三上、辻、芝「社寺領性質の研究」大正三年。中田薫「社寺境內の私法的性質」國家學會雜誌第三十卷、大正五年）。して見れば、明治初年「上地處分」と稱して之を國有に編入したことに少くとも可成りの無理があるのであつて、是れ佛教各宗が多年其の還附を主張して止まざりし所以であり、また現に國有財產法第二十四條によつて無償にて當該寺院の使用を許してゐる所以であらう。從つて法案に於ける無償讓與は其の法律關係を確定するものとして、異議がない。

（三） 次に宗教法案の一般宗教政策的立場については、文部省當局は、法案に於ける「指定」の制度が公認教制度に非ざることを明言し（東京朝日新聞大正十五年七月一日）、また宗教法人は「いづれかといへば私法的なものと思ふ」（同六月二十五日）とて政教分離主義を理想としたることを標榜してゐる。しかし文部大臣に於て宗教の「指定」と云ふことを行ひ、之に對して宗教法其の他宗教に關する法令を適用することを定めたるは（第一條）何といつても公認教主義の色彩あることを否認することは出來ぬ。尤も私は之を以て直ちに不當なりと爲すものではない。政教分離主義を絕對に徹底せしむることは困難であり、また今日の場合必ずしも正當でない。或る既成の宗教を「指定」して之に相當の保護を與へ、監督を行ふことは、蓋し已むを得さるところであらう。

問題は寧ろ其の保護監督の內容如何である。今宗教法案に於ける指定宗教に對する保護の方面を見るに、第一に指定された宗教團體に對して地租及び所得税の免除があり（第五、六條）、第二に指定された宗教團體の建物、敷地、寶物等の差押を禁じてゐる（第八條）。保護はまづ此の位のものである。從つて保護の方面に於ては、可成りに政教分離主義の理想に近いものがあるのである。

併しながら之に反して、法案に於ける指定宗教團體に對する國家の監督の何と嚴重であることよ。元來保護と監督とは相互に比例すべきものであつて、保護の厚きところ、監督も亦嚴なることは已むを得ない。然るに宗教法案に於ては、保護薄くして、監督のひとり嚴重なる、全く其の權衡を失してゐるのである。

就中私が絶對に不當なりと信ずるは法案第十條の「文部大臣は宗教團體及び第二十六條の結社の成規及び秩序を維持する爲必要なる處分を爲すことを得」といふ規定である。凡そ政教分離主義の根本理想は、宗教團體の組識及び活動を國家の政治より引離し、國家は唯其の「公の秩序」を維持するがために必要なる警察的取締をなすに止むるにある。しかのみならず、明かに公認教制度を採る法制の下に於ても、教會內部の事項に關しては全然教會の自治に任せ、國家は教會內部の秩序に立入りて干渉せざるを今日一般の原則となすのである（Kahl, a.a.O.S 138）。然るに法案は明文を以て宗教的結社の成規及び秩序、即ち純粋に內部的事項に關して文部大臣に「必要なる處分」の權を認めようとするのである。此は明治三十二年の宗教法案などにもない亂暴なる干渉主義である。此は既成の宗教團體に對する不正義であるのみならず、宗教の本質的價値に對する冒瀆である。なる程佛教各宗に對しては從來も慣習上可成りの干渉を行つて來た事實があり、佛教各宗に於ても此のことを以て公認教たる地位に伴ふものなるかの如く考へ、又は然らざるも一時の紛議解決の便宜等のために、寧ろ之を歡迎するものがあつたやうである。しかし此は宗教團體の自治を害し、政教分離の理想より遠かること甚しきものであると謂はねばならぬ。私は文部省が宗教法案に於て此の時代錯誤的な干渉主義の原則を明文を以て認めんとする勇氣に驚かざるを得ぬ。

次に不當なるは管長の就職に文部大臣の認可を必要とせる點である（第三十九條）。此は神道各派及び佛教各宗に對しては從來既に認めらるる制度ではあるが（明治十七年太政官布達）、政教分離を理想とし、又は少くとも宗教團體の自治を原則として認むる以上、管長認可の制度そのものがすでに無用なる干渉を意味

するものである。國家の認可がなければ一宗の管長となることが出來ぬ。今若し認可が取消さるるときは、管長は其の地位を去らねばならぬ。是れ國家の行政によつて宗教團體を支配するものに外ならずして、殆ど國教主義に近き考へである。殊に注意すべきは、管長認可制度が基督教の教團（指定せられたる）にも適用されることである（第五十八條）。基督教は新なる宗教法の下に於て「指定」を受くることによつて、佛教及び神道と同じく公認教的色彩を有することとなり、全然同一の保護を受けることになる。同時にしかし乍ら、其の教團は佛教及び神道と同じ監督を受け、其の教團管理者は國家の意志に左右されることになる。此は或る意味に於ては當然で、若し保護のみを受けて監督は受けざるものとするならば、甚しき不公平なことになるのである。併しながら特にカトリツク教會の如き、其の傳統的思想よりして、果して法案第十條又は第三十九條、第五十八條の如き監督を國家より受くることを甘受するであらうか。若しまた基督教殊にカトリツク教會に對しては單に形式的認可にすぎずとするならば、是れ他の宗教に對してのみ不當なる干渉を行ふこととなる。いづれにしても管長認可制度は不當である。

尚其の他にも宗教教師の資格を制限したる如き（第十八條）、教規宗制又は教團規則に關しても文部大臣の認可を必要としたる如き（第三十三條、第五十四條）、宗教上の爭議に關し管長の決定に對して文部大臣に救濟を求むることを得しめたる如き（第四十一條）、分離主義より見て無用の監督と思はるる點なきに非ざるも、右に述べた二點に比すれば、其の重要に於て劣るから、今一々之を論じない。

併しながら玆に見逃すべからざるは、寺院に對する國家の監督が、亦一層の深刻を極めてゐる點である。元來政府は新寺の建立を制限したる徳川時代の宗教政策を踏襲し、內地に於ては明治以後殆ど絕對に新寺を建立することを許さなかつたのである。斯の如きは、既に存在する寺院に對して幾分保護になつたかも知れないが、實はそれよりも佛教に對する極めて專斷なる壓迫であつたのである。宗教法案は、文部大臣の許可を經て寺院を設立することを認めてゐるが（第六十一條）、文部當局が從來の如き監督思想を繼續する限り、此の條文も殆ど無意味なものに終るであらう。私は一定の條件の下に必ず許可を與ふべきものと爲す必要ありと信ずる。しかのみならず、既に存在する寺院に對する監督は亦實に苛酷である。例へば寺院に於て負債を爲すこと、寺院財產を處分し又は擔保に供すること、境內建物の新築、改築、大修繕、を爲すこと等について一々地方長官の許可を必要とする（第七十三條）。勿論寺院は從來も可成りの監督を受

けたのであるが、若し此の宗教法案が法律となつた曉には、寺院の受くる監督は實に煩はしきものとなるであらう。而して此は大體に於て基督教の教會にも適用されるので（第九十八條）、基督教の教會は全く從來知らざりし監督を受けることになる。此は宗教的平等の原則からいへば當然のことであるが、基督教徒が其の「指定」を受くる代償として之を忍ぶであらうかは、一の疑問である。

尚宗教法案は、法人たる教派、宗派及び寺院、教會に對して民法第四十一條以下の法人に關する規定の或るものを準用してゐるが（第五十條、第八十九條）、其の中には法律技術的に頗る疑はしきものがあると思ふ。例へば民法第四十一條及第四十二條の適用の如き、其の著しきものである。其の他法律技術的疑問を擧げるならば、寺院の法律行爲に付て必要なる檀徒總代の同意又は地方長官の許可無かりし場合の效力に關する第七十五條及び第七十六條（取引の安全との關係に於て）、寺院の合併、廢止、解散に關する第八十四條以下の規定（特に合併及び破產の場合に於ける財產的法律關係に於て）など、尚愼重なる研究を要すべき點多々ありと信ずる。

要するに、私の見るところに依れば、今回の文部省の宗教法案は原則的に疑問とすべき點多きのみならず、尚法律技術的に再考の餘地ある點が少くない。其の明かなる長所は唯佛教と神道（教派）と基督教とを平等に取扱はんとしたる點にあり、其の最大の缺點は惟ふに宗教團體に對する時代錯誤的な干涉主義を採りたるに在る。元來「宗教法」は、事柄の性質上決して一日の急を要する立法ではなく、之に反して若し一度其の立法を誤るに於ては何百年の後までも其の影響を遺す虞があるのであるから、當局は其の功を急ぐことなく、更に充分の研究考慮を重ぬべきである。

機械の社會理論

杉森孝次郎

一　機械の自動的位置

機械は道具から發生した。社會に於ける道具の位置が自然に成長して機械となつた。

機械は、しかしながら、いく多の重要な點に於て道具から識別される。

その一は、道具が機械との比較に於て他動的であることだ。いひかへるならば、機械が道具との比較に於て自動的であることだ。

道具の一例として畫家用の刷毛を取ることは、機械と道具の差點の一を擴大鏡にかけて見る効果を持つ。

刷毛は畫家の目的にとつて有用だ。刷毛がなかつたなら表現を多少いちじるしく制限されるほかないかれの藝術的自己が、刷毛があるために機會を享樂することができる。善い刷毛とわるい刷毛とがあるが、善い刷毛とは、畫家の目的を標準として判斷される刷毛の能率の比較的に高いものにほかならない。そして畫家の目的は、一藝術家としてのかれの自己をできるだけ完全に表現することにある。

刷毛は無いよりは有る方がよく、それが善い刷毛であるほどますますよい。刷毛が改良され、完成されることが人間から見て望ましい。

しかし、刷毛は、それが畫家の自己表現の目的に飽くまで忠實なものに改作されるかたちに於て、進歩を與へられることが望ましいが、畫家の手を廢用にすることは絶對的に許されない。

刷毛が畫家の手を全然廢用にしたかたちは、版畫生産機械が發明され、そして世を擧げて畫家に生存無用を宣告した場合だ。

刷毛は、改良の餘地を常に多少持つと見られるが、その改良は、畫家の手の運動を全然廢用にすることをば意味しない。それは藝術力ある、いやが上にもそれある手の運動をいよ〳〵有用にすることを意味する。

畫家用の刷毛としての道具の場合にあつては、それの自動的位置は、それの他動的位置との比較に於て、明白に從位を形成するものであることが、いはばそれの存在理由に屬する一要件だ。

畫家用の刷毛の代はりに筆を置いて考へて見ることは、機械と道具の差點を、前よりは綜合的に認識させる効果を持つ。

筆が單なる事務用を意味する場合がある。その場合が關する限り、タイプライターが發明され、採用され、そして筆が廢用にされることは、筆に内在する、くはしくは勿論人間によつて創作され、支持されるかたちに於てさうする存在理由的目的からいつて、いくらかの成功だ。タイプライターは、この場合、筆との比較に於ていちじるしく自動的であること、そして、それは一とつの機械であることに要點を置いて例用された。

筆には、しかしながら、多少藝術的に筆者の個性内容を表現する目的が與へられる場合がある。この場合が關する限り、筆の進化は、それがタイプライターに移ることを意味することはできない。それは、いはゆる書が意味する本質的能力に自由を考へ、他の要素に闖入や竄入を許さない性質に於ての增加を意味する。そして、その本質的能力は手の運動を條件とする範圍内のものだ。

單なる事務用が關する限り、タイプライターが出來て人間はどれほどか助かる。機械の價値としての位置は、一般的にここにそれの暗示と例證を持つ。

駕籠に比された人力車、人力車に比された自動車は、それぞれに、他動用品に比された自動用品だ。そして、自動車に至つては、立派に一とつの機械と見られる。船に比された發動機船も一とつの道具に比された一とつの機械だ。そして、その二たつのもののあひだには、目的に於ての同一と、能率に於ての小大別がある。

もしも、一とつの道具が手を廢用にすることができない場合に、その事情が目的を意味するものでなく、能力に於ける不足としての制限を意味するものであるならば、それが手の藝術を目的とする一とつの手段物でないことは自明的だ。そして、そ

の場合に於ける道具の進化的可能は機械の發明にある。

機械自身には、勿論、本能も、衝動も、意思もない。しかし、人間の或目的が機械の存在理由だ。機械は、人間のその目的意識に對しては從屬的な或位置を構成するものにほかならないが、人間の單なる手、足といふが如き部分に對する關係に於ては、決して從屬位をば構成しない。人間の單なる筋勞や體働に對する關係に於ては、機械はかへつてそれの主本位にある。機械の單なる運轉に從事する筋肉勞働者は、それとしてだけの資格に於ては、機械の補佐、助手、警護、給仕、隨侍、被使用者たる特徴によつて代表される。

なぜか。その答へは容易に、そして明確に與へられる。機械は、そも／＼、道具が自動化したものにほかならない。道具がいはば改良され、それの能率に於て或程度以上に增進を與へられれば、その新形式は自動的特徴に於て最も顯著なものとなる。汽車はその一例だ。乘用物及び運搬具としての汽車は、大體に於て、一とつの巨大なる自動體だ。現に疾走しつつある一とつの汽車と、現にそれの運轉に從事しつゝある筋勞者のすべてとを比較せよ。汽車は自動的主體であり、筋勞者は部分的補營者である位置は顯著ではないか。勿論、この場合、その筋勞的操業者は、空間的に汽車といふ物體を、身體の全部あるひは或部分によつて直接に觸れ動かす位置にある人々のみを意味する。

機械が進步することは、それがいよ／＼自動化することだ。自動率に於て極大限へ進み、他動率に於て極小限へ進むことがその機械が進步することだ。汽車についていふならば、それが現在だけの能率をあげるために、現在よりもすくない操業的人力を充分なる必要とする狀態へ移ることは、汽車のそれだけの進步だ。

機械は人間を原因とする、且つ目的とする一とつの人爲物にほかならない。人間が進化することが自然である限り、機械が進化することは自然だ。機械が進化することは、然るに、それがいよ／＼自動化することだ、それゆゑに、例へば汽車に於ける直接操業者の位置は、進化といふ自然的條件が自己を實現するにしたがつていよ／＼退化する。

機械は筋勞を廢用するためにこそ生まれ、その方途に於てます／＼完全成績をあげるところにこそ自身の發達を持つものであるがゆゑに、任意に選んだ一とつの場合が、たとひどんなに多大の筋勞を必要として運轉しつつある機械であつてさへも、その位置は消極的のものだ。發明と改良が加へられるにしたがつてその筋勞は多大を去つて少小へ進む。そして、この位置

は、機械がまだ道具であつた時代に於てすでにその道具の存在理由を構成するものであつた。例へば畫家用の刷毛のやうな、身體の或運動を本質的に、積極的に必要とする、目的そのものの一部とする種類の道具以外のすべての道具が關する限りに於てだ。かくして、例へば汽車に於ける火夫、運轉手等は、汽車を使用する位置に於てよりも、汽車の機械的能力の現在に於ける不完全、未發達を應急的、當座のまにあはせ的に補給する位置に於て顯著だが、道具使用者の場合に於て、不顯著ながらこの位置的關係はすでにあつたのだ。道具そのものが、また實に、及びすでに實に、筋勞廢用を目的とする人間の發明にほかならなかつたのだ。ただその目的が、機械の到來によつて明確さを累増した。

最小勞力乃至無勞力を條件とする最大生産、機械の存在理由はここにある。そして、機械の運轉から、それに費やされる、その運轉を現實にするために要する、勞力を抽象的に除き去れば、殘餘全體は機械の自動だ。勞力は最小乃至無を條件とするがゆゑに、機械の場合にあつては、積極的要素は自動だ。勿論、これは、機械があらゆる意味に於て自動を目的とするといふのではない。人間の意思に對しては完全に從屬し、人間の勞力、筋勞的作業に對してはできるだけ完全に獨立する、これはこれだけのことを意味する。

機械が人間の勞力から獨立すること、即ち人間の勞力を廢用にすること、これをまたずして自動することとは、機械が人間の意思に從事する、操作することにほかならない。なぜか。勞力は人間の意思に反する事柄だからだ。勞力、勞働、これらはすべて多少の苦役によつて代表されるものにほかならない。これは例へば遊戯または競技としての運動の如きとは意味に於て全く別だ。勞力、勞働、これらのものは、目的をそれ自身には有しない。それを通ほして始めてえられる或結果にのみ有する。もしもその結果がそれを通ほさずに、それなしに、ただでえられる事情が與へられるならば、人間の性情としては悦んでそれを廢用する位置にそれはある。

機械は、人間のために、人間としては一應は誰れでもいやがるほか、つらがるほかない勞力を自分に引き受け、人間が愛欲する結果だけを人間に與へる、そのかたちに於て自動することをそれの存在理由とするものであるのだ。

機械は、人から見られる限り、個人的及び社會的全人から見られる限り、他動的位置に於て最も顯著なものであり、人の一部、個人的及び社會的全人中の勞力的部分のみから見られる限り、自動的位置に於て完全に自己を表現するものであること

を、それの社會的、人生的存在理由に屬する第一要件とする。

機械の存在理由は社會のために勞働を解放するにある。現代の事實としては、然るに、機械は社會内に勞働階級を發達させつつある。

二　機械の發達と勞働失業の必然

機械が發達すれば、すくなくとも同額生產を條件とする限り、勞働世界に於ける失業者が必ず生ずる。なぜか。勞働は機械から見て或他動だ。機械の發達は機械の自動化だ。機械が自動化するにしたがつて勞働がそれだけ不用にされる。機械の自治力が增大するに比例して、勞働者といふ附き添人はいらなくなる。

現代の一大事實として、失業を恐れるがゆゑに、また恐るべき當然の理由もあつて、機械は、すでに發明されたものでさへも、必ずしも工場に採用されない。それ位だから、現在以上に機械の發明を環境づけることに於て、現代は極めて不熱心だ。機械の發明を、現代は、社會的規模に於ては決して希求してゐない。大體の事實としては、現代は、すでに發明されて現に存在する機械をすらも持てあぐんでゐる。失業者が生ずることは、その當人からいふて忌避をあたひすることはいふまでもないが、社會からいうても困ることだからだ。けれども、機械の發達と勞働失業との間には本質的、必然的因果關係がある。ただ、現代の多くの國家は、それの政治に於て、この因果關係に盲目をむけてゐる。恐らくはすべての國家がと、標準を或高さに取ればいひえられる。

失業救濟は、すくなくとも勞働失業が關する限り、失業の社會的原因を見きはめた上に可能だが、多くの國家の場合に於てはその手續きがすんでゐない。產業の目的は社會的消費に落ちつくほかない。もしも產業の目的が勞働としての仕事を供給し、失業者を、即ち勞働失業者を、有業者にすることに、たとひ部分的にでもあるならば、それは一時の變態と見ることを必要とする性質の場合だ。現代はその變態に屬する。手工業時代、即ち要するに道具工業時代の制度的現實が、機械工業時代の今日に習性としてなほ生存してゐることを內容とする變態でその現代的變態はある。產業は社會を有產化することをこそ目的とすべきものであつて、社會を有業、勞働的有業化することをば目的とすることのできない、かへつてその正反對を目的とするほかないもので、その產業が機械を條件とするものである場合には、明確にある。

三　生産の機械主義化と經濟の消費主義化

經濟的生産の方法が手でなく、道具でなく、機械によつて代表される時代が發達するにしたがつて、經濟は藝術から純粹に獨立する。

經濟が藝術から純粹に獨立するとはいふても、それは生産過程が關する限りに於てだ。

藝術は、行動の目的がその行動自身に完全に內在する場合の總稱名だ。そして、藝術は、作品の消費される過程にも成り立つが、創作過程にも成り立つ。

藝術的生産には、その過程そのものには、すくなくとも藝術的自己表現の悅びがある。經濟的生産の方法が主として手及び道具であつた時代に於ては、その生産過程には、必然、多少の自己表現的滿足があつた。工匠は或程度まで藝術家であつた。

經濟的生産の方法が機械によつて代表される時代となつてからは、經濟的生産過程には、技術、科學、經營、組織、企業を除いた殘餘としての勞働が關する限り、なんらの藝術的價値もなくなつた。自明的自然現象にこれは屬する。なぜか。機械は自動物だ。あるひは自動化的傾向によつて代表されるものだ。勞働は機械に於ける自動化の餘地を不完全ながら人力によつて當分的に經營することにほかならない。それゆゑに、勞働は意味に於て非人格的、非人性的、非個性的だ。それは意味に於て物質的だ。

藝術はそれの生産過程にも、それの消費過程にも、價値があるが、經濟は、機械産業時代に入つては、それの消費過程のみに價値がある。富を消費することさへできれば、われら人類は、富を生産することをばすこしも必要としないのみならず、その勞を、それが勞である限り、避けることを必要とする。富は、それらの消費過程にこそ快樂、幸福、愉悅があるが、それの生産過程には、それが純粹に富即ち經濟價値物である限り、その反對の心的經驗が成り立つ。勞働がこれを例證する。

經濟的生産の方法が手、道具であつたあひだ、經濟は消費のみをば目的とせず、生産をも多少目的としたのだが、それが機械となつてからは、經濟は生産をば目的とせず、消費のみを目的とするほかない。それが社會的、人生的に有意義なものであるためにはだ。

現代に於ては、しかしながら、生産方法の機械主義化は完全に近い程度に發達したが、經濟生活を、富の消費を目的とする立ち場からして改認し、改作する創造的努力はほとんど始ま

らない。勞働階級の發達的、增大的存在がこれを證據立てる。どうしてかといふに、勞働階級は生産にはたしかに從事する。しかし、勞働階級は消費には比較的に極めてすくなくあづかる。勞働階級は富を生産する。勞働階級は、しかし、富を消費はしない。勞働階級が關する限り、現代の經濟生活は生產主義だ。それは消費主義ではない。けれども、勞働階級は機械を方法とする生産に從事する人々にほかならない。それゆゑに、かれらが生產主義者であること、そして消費主義者でないことは、社會的に、及び人性的に、極めて不安定な位置だ。それは即ち不自然だ。いひかへるならば不合理だ。

四　機械主義生産の功勞者としての個人の無資格と社會の有資格

手工業時代にあつては、生產の功勞者は個々の工匠であつた。これは當時の制度及び慣習としてもさうであつたが、合理的にもさうであらねばならなんだ。

機械主義產業の初發地は英國であつた。それに先だつた手工業時代の最も代表的なものは英國及びそれよりも早くは歐洲大陸內の南、中、西部に位置した國々のあたりに於てであつた。伊、南獨、及び今日の和、白地方にあたるあたりがそれだ。機械主義產業の初發の歷史的時位は、選擇的には、十八世紀後半中だ。なかんづくその六十年代だ。そして、手工業全盛時代はそれに先きだつた五百年前後期間だ。その期間內の、國々によつて多少異なる或期間だ。

その手工業全盛時代は、生產の功勞者は個々の工匠者であつたことをあらゆる方面から明確に示す。

その時代の初期にあつては、道具及び設備一切も至つて簡單なものであつた。それを造り、それを調へることは全く個人的努力以內のことであつた。必要の技術、熟練、知識も、徒弟奉公、被使用職人としての閲歷間におのづから獲得しえられる程度のものであつた。その徒弟奉公時代、被使用職人時代に於てさへ、その多少未成品的な年わかき職人は、全然主人のおかげになつたわけではない。かれらは教はりながら、學びながら、一人前の完全職人になるための準備を主人職人の手もとで積みながら、相當に主人の仕事に貢獻した。かれらが一人前の職人となつてからのかれらの生活も、徹頭徹尾、自治主義的なものであつた。かれらは、かれら自身の腕一本を恃みにして、たよりにして渡世した。かれらの成功、不成功は、精確にかれら自身の個人的能力、努力の現はれにほかならなかつた。いはんや、かれらは、かれらの從事に於て、完全なる生產單位であつた。

かれらはかれらに手頃の道具を持ち、材料にむかひ、かれら個々の判斷と意思と熟練と腕力とのみによつて、かれらが目的とする物品に形成を與へた。かれらは製作品の生産される過程を、それの第一歩から終末歩までみづから直接に、完全にあゆんだ。かれらは、實にかれらの生活に於て、完全なる個人主義の實現者、個人主義そのものであつた。思想史上、學説史上に於ける個人主義そのものがまた深くかれらの生活に負ふたほどにもそれは個人主義の具體形そのものであつた。

機械産業の發達と共に、しかしながら、この事情は根本的にあらたまつた。個人主義は手工業時代と共に、大體の時期關係に於て、始まり、進んだ如くに、それと共に、同じく大體の時期關係に於ては、逝くべき運命物だ。勿論、この場合、その個人主義は、社會主義以前的形式の、比較的に原始的な、單純なかたちの個人主義として理解された。

機械は、それ自身、おの／＼、複雜にして巨大な一物だが、その機械が機械として用をなすためには、遙かに複雜な、そして巨大な人間力の組織的從事を必要とする。機械を機械として、即ち生産方法として價値づけるため、はたらかせるためには、分業的及び同職的協力人員の、ほとんど無數が必要だ。實に機械時代に入つてからは、したがつて現代に於ては、産業界そのもの、生産世界そのものが、そのまゝ、單一の複雜な、そして巨大な機械にほかならないとさへいふことができる。

機械時代に於ける富の生産過程を見よ。それの始點が精確にどこにあるか、またそれの終點がどこかさへも單純に認識しえられる事實ではないが、殊にその終點以前の全部分の構成要素と組織關係に於て、それは實に複雜だ。日常の食、衣、住でさへもが、必ずしも最も複雜な生産過程を持たないそれらのものでさへもが、手工業時代に於けるそれらのものとの比較に於ては、現代に於けるそれらのものはいちじるしく複雜な生活過程を、通則的に、經由して、然るのちに始めて消費されうる最後の完成形を與へられる。例へば食料品にしても、それが鐵道や海運を條件とする場合は極めてしば／＼だが、その場合には、それの生産過程內には鐵道も、海運も含まる。けれども、鐵道だけでも、複雜にして巨大な一機械組織ではないか。

機械時代の生産が、原料、工場、機械、交通及び運搬機關、勞働者、技術家、科學者、經營者、企業家、廣義投資家等に分析されることはいふまでもない。その內から原料を除き、それから多少人爲的な物的要件を除いて、純粹に、そして直接に人的な要件だけを見ても、それは種類に於て單純どころではない。簡單に、一言に勞働者といひ去つたが、それのなかにも熟

練、不熟練の差があるばかりでなしに、ほとんど無數の分業別もある。技術家、科學者、いづれも同樣の事情を持つ。

されば、機械時代に入つて以來、富の生産に人力が貢獻する限り、その人力は決して個人力ではない。それは集團力だ。それは組織された多數個人の力だ。要領よくいへばそれは社會力だ。

例へば鐵道を見よ。運搬は富の一種だが、いかなる一人または少數個人の力が鐵道運搬を生産することができやう。勿論、この場合、火夫や運轉手だけを人員として見る立ち場は採用されてゐない。鐵道が意味する、それの原因として意味する勞働、技術、科學、經營、組織、企業、資本等のすべてによつて代表されるすべての人を人員として見たのだ。機械時代に於ける富は、それの位置に於て、すべて鐵道の類だ。

機械時代に入つて以來、富の生産に人力があづかる限り、その人力は集團力むしろ社會力であるといふ事實と結合して、機械そのものは、他面に於て、道具との比較に於ては、いちじるしく自動物だといふ事實がある。

この兩事實を評價するならば、結論は、現代即ち機械主義生産時代に於ける經濟的生産は、いかなる個人またはそれに近い少數人もの功績に歸すべき關係及び性質のものではないといふことだ。そして、これは、道具主義生産時代に於ては決して成り立つことのできなかつた主張、判斷、立ち場だ。

機械は傾向的にはいよ〱ます〱完全に、そして現實としても大體的には、自動する。自動物としての機械が生産する富を、社會内の或個人や少數人がわがものとして認め、あつかふ理由は極めて薄弱だ。ただ、道具主義生産時代に發達した個人主義的所有制度が、反省と批判をまぬかれて現代に、機械主義生産の現代に生殘してゐればこそ、その薄弱な理由が、事實上、成り立たせられてゐるのだ。

道具主義生産時代に於て、個人主義的所有制は、個人主義的自由競爭制と共に、それの最も自然的な、そして同時に合理的な機會を享樂した。

しかし、道具主義生産時代が發達して、したがつて同時にそれの末期に近づくにしたがつて、資本主義と商業主義が發達を始めた。

師匠職人自身が、段々と、自分は製作的筋勞にはすこしも從事せずに、道具や設備を所有して他の職人らに使用させること、したがつて、さうして出來た品物をわが所有として認め、そしてそれを賣ることに主として從事する慣習がそこには發達した。師匠職人階級は、或程度まで不勞得利階級化して來た。

かれらはまた商人化して來た。他面に於て、道具そのもの、設備そのものが、個々の職人の財力や能力で買ひ揃へたり、造り調へたりすることのできる程度を超越した、複雑なものになつて來た。ここに於てか、單に財力あるがゆゑに、それらのものを買ひ、造らせ、そして所有し、それらのものを職人に使用させ、製品をわがものとして認め、賣ることを最初から專業とする階級も社會内に發達を始めた。職人階級は、道具に對する所有權を持たないがゆゑに、財力ある個人及び階級の雇傭者となり、その個人及び階級の金錢的利益目的のために生産するといふ關係が發達して來た。同時にそこに金錢的評價組織が發達して、次第に、物や事への社會的實質價が金錢によつて精確に、正直に代表されるよりも、金錢さへあればそこに社會的評價が來、金錢がなければそこに社會的評價が來ないといふ慣習及び制度が蓄積されて來た。

手工業がギルド組織を條件としたあひだ、ギルド内の關係が關する限り、個人主義は制限または調節されたが、手工業時代のいはば爛熟期に入るにしたがつて、個人主義的要素が次第に無責任化し、そして資本主義そのものを生むに至つた。

機械主義生産時代は、それに先きだつて發達した道具主義生産時代の遺産を多くのかたちと項目に於て受け取つたが、そのうちの最も巨大なる一は資本主義だ。

資本主義は決して機械主義生産と共に始まつたものではない。しかし、それは、道具主義生産時代の末期に近づくにしたがつていちじるしく發達し、そして、機械主義生産時代に入つてさらに飛躍的、絶大飛躍的に新たに發達した。

現代資本主義を分析すれば、それは、生産方法に於ける集團力主義が、所有方法に於ける個人主義と結びついてゐるものとして再認される。

手工業時代に發達を始めた資本主義が、どうして機械工業時代に入つて著甚なる新發達をなしたかといふに、それは、機械ゆゑに、富の生産能率が著増したからだ。富の生産能率は著増し、所有方法は依然として個人主義的基礎の上に許されてゐるならば、富の集中、獨占がしたがつて著甚化されることは自然だ。

けれども、機械主義生産時代は、つひに資本主義の無限發達が許される場處ではない。正反對に、機械主義生産時代は、資本主義を否定する必然理由を固有する。勿論、それは、資本主義に於ける所有制的部分を否定するのであつて、生産方法的部分をば否定しない。生産方法が取つた新形式を標準として、所有方法が改作されるのだ。所有方法の生産方法への適應だ。

五　機械の社會有化の結果

機械は社會有化される必然があることはすでに見た。機械が社會有化されるにしたがつて、いかなる新現象が期待されるか。

機械が制度的に社會有化されるならば、したがつて、單なる機械力によつて生産される種類の富は社會有化される。單なる機械力によつて生産される種類の富は實用物のすべてだと概呼することができる。

機械が制度的、慣習的に社會有化することが發達すれば、社會は機械を無制限的に愛する立ち場を與へられる。發明が機會を與へられる。

科學の新發達がそこにおのづから意味されることも注意されるが、社會の有産化及び有閑化が最も直接に注意される。

機械は、道具または手に比して、十倍乃至千倍の生産能率を示しうると通算されるともいはれる。精確にいかなる數字が事實に忠であるかは別の問題として、とにかく、機械の生産能力が道具や手のそれに比して全く桁ちがひの優越差を示すことは容易に考斷される。

機械の、いはば無限的生産能力に、それの完全自動化的發達可能を結びつけて考へるならば、第一の性質からして社會の有産化が暗示され、第二の性質からして社會の有閑化が暗示される。ただ、勿論、機械の所有關係を個人主義的基礎の上に保存せず、それを社會有化することを條件としてだ。

社會の有産化とは、勿論、單なる機械力によつて生産される種類の富をば、また便利一般をば、社會全衆が充分に、自由に、必要以下でない程度に、消費することができる狀態に、現在の狀態が移り變はることだ。そして、社會の有閑化とは、勿論社會の怠惰化及び無聊化をば意味しない。それは、ただ、勞働階級の消滅即ち廢用を意味する。機械では生産される可能が本質的に、絕對的にない物及び仕事または狀態にして、人間にとつて價値あるすべての物及び仕事または狀態を生産する方向に、人間の生産的能力はすべて使用されることが、有閑化の意味だ。

最廣義及び本質的意義に於ての藝術が、機械から識別された人間の從事となり、單なる、もしくは純粹の、經濟的生産そのものは、人間から識別された機械に全部的に負擔させることが社會の有閑化だ。

人類は、古來、人類中の比較的弱者を奴隷化することによつて比較的强者たる自己の閑を造つた。そして、その閑の積極的特徵として文化を造つた。古代ギリシャは、及びローマも、その大きな或例だ。

しかしながら、人類が、人類中の或部分が、他の或部分を奴隷化することは、さうすることによつて文化即ち閑を造ることは、機械以前の時代に屬する現象だと、究竟、斷ぜられる。機械時代の發達は、奴隷を、すくなくとも經濟生産的奴隷を、人間から完全に奪ひ取つて機械に、無感覺の機械に移すことを一とつの必然として約束する。

有産と、それを條件とする有閑とは、手工業時代の爛熟に端を發し、機械生産時代に入つて、個々人の、したがつて個々團の、最も深烈な榮譽心的目的物となつた。しかしながら、産と閑とは、機械力の産物である位置が明確に認識されたならば、その心理は成り立たなくなる。また、機械は、全體として、社會的集團力の功勞だと見られる位置が發達すれば、その點からしても、産と閑とに個人的榮譽心や優越本能を目的づける心理は成り立たなくなる。現代に於ては、しかしながら、産と閑とは、いかに單なる機械力の功績であるか、またいかに社會的集團力の功績であるかが一般認識化してゐない。

機械を社會有化することは、單なる自然資源や、原料のすでに多少久しく發見されたものの如きをば、なほさら社會有化することだ。機械をさへも社會有化する位だから、いはんや機械よりも一層非人力的なそれらのものをば、勿論社會有化するわけだ。

自然資源や原料は土地によつて代表される。土地といへども、探檢、開拓を條件とする場合には、相當に人力を意味する。しかし、すでに發見されて多少久しい土地の如きは、したがつて世襲的、相續的特權による所有地の如きは、社會有化されべき理由を相當に持つ。

機械の社會有化は、要するに物的生産要件、即ち生産に要する物的條件一般の社會有化を誘致する自然的傾向を持つ。そして、その結果は富の社會有化だ。さらにそして、富が社會有化されれば、その富の位置は安全さと確實さに於て發達する。

歐洲大陸の南、中、西部に於ける、十五世紀前後あたりからの手工業の著甚なる發達は、社會に於ける富の增加、産業の進歩を相當に意味する現象で勿論あつたが、十八世紀前の或時點に於て、多少相異なる時點に於て、相踵いで破産した。その破産の原因は種々であつたが、政治、宗教方面の運動に富または産業の位置が利用されるかたちに於て專制されたことがそのうちの主なるものであつた（ヹヴレン氏著『ジ、インスチンクト、オヴ、ワークマンシツプ』想起）。産業が、外在、産業から見ての外在勢力のために專制されるかたちに於て利用され、そして破壞されるが如き現象は、産業が、それの所有關係に於て

充分に社會化されてゐないからだ。歐洲大陸の手工業的產業破滅の場合はこれを例證する。當時、富または產業は、それの所有關係に於て、少數個人の手に集中、獨占、實は隔離の狀態を形成してゐた。それゆゑに、それら個人の失敗は、個人的破產を意味すると同時にその社會、その時代の產業の破滅を意味した。

產業は社會の幸福を構成するための基礎的一必要件だ。それの位置が不安全であることは社會の幸福の位置が相應に不安全であることだ。その位置を充分に安全化する効果を、然るに、機械の社會有化は持つ。

機械の社會有化の最大効果は、しかしながら、產業の位置、したがつて富の位置が、生活の完成要件たる他の文化要素の手段位に安定させられることだ。機械の社會有化は、富は消費を目的とすること、產業はその富に存在を與へることを目的とすること、その消費は何人をも除外しない、即ち社會によつての消費であること、そして、富の消費は、それ自身に內在する目的によつてよりも、一層精神的な價値を生產するための位置によつてそれの目的が代表される關係を確認されること、かうした方向に社會の行動、反省、理想を發達させる効果を持つ。

六　文化及び生活一般を社會化する必然力としての機械の位置

機械は自身一とつの組織物だ。それの運轉には、使用には、一層組織された人力を必要とする。機械は、しかしながら、人間群を社會化する力、社會を一層組織された全體化する力に於てさらに遙かに社會的だ。機械は、實に、生活及び文化一般を社會化する、あらゆる意味に於て社會化する主力そのものだ。

汽車、汽船、電信、電話、一言にして交通及び運輸機關、これらも機械だ。しかもこれらのものが、いかに人間群を社會化する必然力をすでに示したことか。國家としての社會も、國際的社會も、それらのものが出來たゆゑにこそ出來た。

勿論、國家も、國際社會も、機械發達以前にすでに發達の緒についた。歐洲大陸に於て、手工業發達時代は、ほぼ同時に國家構成時代であつた。しかし、その場合に、その手工業は、機械產業の孵化以前の狀態を意味するものであつた。產業革命以前の五百年前後の長期間に、國家が發達した能率は、產業革命以來今日に及ぶ百年前後の短期間に、國家が發達した能率と比して、同時代に於ける手工業の發達と機械產業の發達との能率に於ける差に酷似の差を示すでないか。民族主義的社會組織と

しての近代國家は、先づ歐洲に於て、十五世紀前後あたりから、手工業の發達を條件として發達を始めた。そして、十八世紀末に先づ英國に現はれ、まもなく歐、米、その他の地上部分に普及的に發達した機械産業を條件として、それの發達を條件として、國家は、大飛躍的にさらに新たに發達した。

手工業の發達は、製作地に於ける製品の過剩を生んだ。それを賣り散らすために道路及び交通機關殊に船舶の發達が生みいだされた。ここにすでに國家的及び國際的社會發達の事情が造られた。これが歐洲の近世史に現はれた一事實であつた。

機械時代に入つて以來は、すくなくとも國家內の一地方と他地方との間、殊に中央都市または政府所在地と各地方との間には、交通機關ゆゑに、形影響應的敏速協力が可能にされた。民族主義的中央集權制もかくして機會をえた。國際的にも、電報によつて駐外國使と本國政府との間に打ち合はせができ、直ちに派兵することもできるやうになつた。帝國主義的國際社會關係もここにそれの機會を與へられた。

産業は社會を擴げる。それはまた社會を分業に導く。協力が範圍に於て擴張され、內容に於て分化されることは、取りもなほさず社會の發達だ。それは社會化過程そのものだ。然るに、産業は、その社會化を最も確實に誘導する。及び强制する。手工業的産業、道具産業に於てさへさうであつたが、機械産業に於てこの關係はいよいよ顯著だ。

近世の初期及びその後に於てすでに、手工業發達の結果、製品の過剩は旅商人の發達をうながした。そして、それと關聯して蓄積された金錢は、その旅商への單なる投資、營利目的の投資をも發達させた。勿論、その手工業そのものの發達にむかつても同樣の投資が發達した。生產そのものから分配即ち商業が獨立して發達し、金融がさらにまたこの兩者から獨立して發達するの端がここにすでにいちぢるしく開けた。これが社會の擴大と分化または分業化を自身意味し且つ別に原因づけたことは大きく注意される。そして、同樣の作用、社會化的作用が、機械産業の發達と共にただ遙かにそれ以上の大規模に於て行はれた。

投資、貿易のかたちに於ける國際資本主義、むしろ資本主義の國際的發達、そのあとを追うて發達しつつある國際社會主義、むしろ社會主義の國際的發達、いな、これらのすべてよりも遙かに代表的な現象として、社會主義的反省、行動、思想の一般的發達、實に、生活及び文化の全部面にわたつていちじるしいそれ、**これらは皆な機械を樞軸として發展し來たり、發展し行きつつある現象にほかならない。**機械は、いや應なしに、時代を、時代の形式及びしたがつて內容を分析的及び綜合的兩局位からして、社會化する。

道具工業時代と個人主義とが形影的、響應的因果物であつた如くに、機械時代と社會主義とは精確にそれだ。資本主義は機械時代のただの初期に於ける、即ち道具時代からの過渡期に於

ける半々物にほかならない。そこでは、生産の方法だけは機械時代であり、所有の方法は道具時代だ。

勞働運動そのもの、勞働者の組合運動そのものが、機械の産物にほかならなかつたではないか。それは廣義工場を條件とするものであるのに、その工場は機械を原因とする。勞働者の組合運動は、然るに、現代に於て、生活及び文化一般を社會化する酵母力、强制力、暗示力、誘導力、觸發力、催助力、促進力、剌戟力、感化力そのものとして一とつの顯著な位置を占める。

七　機械時代の人間性

農業時代に於ては、また農業社會に於ては、感情は平和的だ。狩獵、遊牧の生活が掠奪的、戰鬪的、進取的であると對比されて識別される現象だ。農業的習性はまた勿論保守的だ。農業的習性は、それの知性に於ける發現としては、神秘主義ばなれがしないことを一特徴とする。農業は、殊に科學以前のそれは、天氣に支配される程度に於ていちじるしいからだ。しかも、天氣は、また氣候は、人力の支配を超越したものとして經驗されたからだ。また農業は生物の成長をあつかふ。生命そのものに屬する不可說明的要素が自然にまた農業者を感化する。

道具主義生産時代に於ては、またその社會部分に於ては、因果關係を創造的、意思的態度に於て理解する習性が發達する。農業が、漁業がまた或しかたに於て、運命主義的習性を助長させることとこれは對比される。道具を方法とする生産生活に於ては、個人的意思及び能力が、物的性質及び法則を理解して支配する特徴が顯著だ。その物的性質及び法則に對する理解が關する限り、道具的習性は極めて散文的だが、數量的だが、その個人的意思及び能力の自由享樂が關する限りそれは詩的だ。藝術主義、神秘主義、善惡兩様の形式と種類に於ての神秘主義がそこにはある。個人主義、個性主義、獨創主義、個人的形式及び規模に於ての優越主義、功業主義、虚榮主義等がまたそこに機會を與へられることば多少すでに注意された。

機械時代の人間性は、その時代の發達的位置が異なるにしたがつて種々だが、社會が完全に機械を使用せず、社會内の大部分が機械に使用されつゝある現代の如きにあつては、徹底的に機械に屈從して自覺を失なつたかたちの機械的事物觀の習性も發達する。これには、勿論、機械を個人的及び團體的營利主義の目的にむかつて私有し、そしてその結果を確實に享樂しつつある社會部分の自然的機械謳歌主義も加勢してゐる。

この習性部分が關する限り、そこには個性、個人、藝術、詩、獨創、想像、卓越性質といふが如き種類の要素はほとんど機會を持たない。透徹的及び綜合的識力に於て多少不足な種類の唯物史觀論、環境萬能論、制度、組織崇拜論の如きものもここにそれの機會を與へられる。そこに舊式迷信からの獨立は見えるが、人間性に於ける最も根本的な生命要素に對する自覺の發達

がない。かくして、休課、旅行、温泉、競技、觀劇、繪畫、音樂、社交、孤獨、健康そのもの、知識、戀愛、文學、彫刻、建築、園藝及び植物いぢり、舞踊の類が、生活體系に於ける適當に認識された位置を享樂しないながらに現代人によつてなほ事實上評價されつゝある。現代は、機械主義を告白しつつ、折がな、隙がなそれから逃げたがる。

機械を完全に自動化する方針と、機械を社會有化する方針とが確實に成り立たせられれば、社會は有產、有閑化し、そして、機械は、人間性に對する忠僕たる位置に於て發達し、人間性を不便にする位置に於ては退化する。機械を完全に自動化する方針とは、機械を發達させる方針のことだ。

八　機械時代としての現代

現代は機械時代だ。それは科學時代ではない。なぜか。科學時代は十五世紀以來のいはゆる近世を特徴づける名詞としてこそ妥當だ。現代が資本主義時代でもなく、社會主義時代でもないことは、全く相反する兩主義が現代に存することによつて明示されてゐる。現代は機械時代でこそあるのだ。

九　機械時代の發達と產業の一社會機能的獨立

機械時代としての現代が發達すれば、產業は社會的一機能としての位置に於て發達する。

現代に於ては、個人的營利業としての產業が、產業の位置を代表する。しかし、これは將來久しく保存される可能のない位置だ

政治の場合にあつては、それが社會的一機能としての位置を公認された歷史は極めて古るい。政治は、それの消費に強制が條件をなしてゐるから、政治の消費者たる社會部分が、政治を私事として放任せず、公事として主張したとは極めて自然であつた。

產業は、あるひは經濟は、政治に比して、それの消費に強制が伴はない。生產者は賣りつけたく、買はせたく思うても、買ふ、買はんは當方の自由だといふ關係が、富の場合には比較的にある。藝術、學問、現代なら義務教育以外の教育、これらの文化要素に、みなさうした關係が多少とも、そして政治に於てよりは多く、ある。政治は、それの生產者がそれを押し賣りするが、政治以外の要素は事情を多少異にする。

經濟は、しかしながら、それの生產方法が機械によつて代表される時代となつてからは、道具時代にそれが保ちえた事情を失つた。機械主義生產の時代と社會にあつては、產業は、公的必要としての立ち場から營まるべき理由に於て發達し、私的利益のために、それの全位置が決定されつゝ保存されることは不自然ゆゑの不成立を證據立てて來る。

產業が一社會機能としての位置に於て發達するにしたがつて、產業は社會のために有益な、必要なものとなる。機械は、產業をそれに導く必然力だ。

時評

吉野作造

新設さるべき思想課の使命

新聞の傳ふる所に依れば、司法省では來年度に於て思想課なるものを新設し、專ら次の三項目を取扱はしむべしとのことである。

一、共産主義思想の取締に關する件

二、無政府主義思想の取締に關する件

三、階級思想から發したる一部の社會運動に關する取締に關する件

新に思想課を設くるに至つたのは、從來の儘では十分適切なる取締を爲し得ないと認めたからであらう。思想課の新設必ずしもわるくはない。が、併し從來「十分適切なるを得ざりし」とせらるる「取締」の意味の取りやう如何に依つては、その利害失得、俄に斷じ得ざるものあるが如くにも思はれる。而して「從來の儘では十分適切なる取締を爲し得ない」と云ふことの意味に付ては、次の二樣の解釋があり得る、又現に這の二種の見解が存するとも云ひ得る。

（一）取締るべき思想行動が澤山あるのだけれとも、普通裁判所ではなか〱手が屆かない、從つて許す可からざる多くのものを不問に附するといふことも往々ある。取締を一層適切ならしむる爲には之を專門の任務とする特別の一部局を新設するの必要があるとする者。

（二）眞に取締るを要する思想行動の何たるやに就き、普通の裁判官には之を正しく判斷すべき十分の素養がない、從て往々外形の類似にあやまられて、取締る可らざるものまでを取締ることもある。取締を一層適切ならしむる爲には、特に近代の思想問題に精通する者を擧げ、此種の取締は一切その專屬的任務とするの必要があるとする者。

更に別の言葉を以て云へば、前者は思想問題に關する從來有來りの俗説を金科玉條とし、之を楯として社會の實狀に臨み、その論理的結論をビシ／＼勵行せんとするもので、又之を誤つた一種の規範に隨て無理に社會の自然的實狀を矯め直さんとするものと謂てもいゝ。之に反して後者は、取締の基本となる見解そのものに批判を加へ、その謬を正し、少くとも其態度に於ては、正當なる論據に基いて玉石を分ち、社會をその當然の途に指導せんとするものである。此二つの考の何れを執るかで其結論は丸で違ふ。吾々は先づ此事を念頭におく必要がある。

斯くいへば、新設さるべき思想課の本來の使命の何であるべきやは、多言を待たずして明であらう。

× × × ×

私共が始めて法律を學んだ頃の經驗を回想すると、當時は謂所分析法律學全盛の時代とて、一にも二にも成文の法規が金科玉條であり、この法規の趣旨を演繹しその論理的結論を求むることが、最も主要な仕事とされて居たようである。それが社會の實狀や生活の便宜に合するか否かは固より問ふ所ではない。否、法律學の結論に合する樣に無理に社會を導き、又無理に生活を律するのが、道徳的だとさへ考へられたのであつたと思ふ。加之、時として我々は云々の條文の當然の歸結が、我々の常識の到底想像だもなし得ぬ樣の奇怪な議論に落ちつくを發見すると、其條文の不當を鳴らすよりも、寧ろ一大新發見をなしたかの如く却て得意に之を吹聽するといふ風であつた。從て又時には、論理を惡用して強て偏奇な結論を出し、以て世間を驚かすを喜ぶといふ人もあつた。而して之等の人々に對して我々は、丁度明治の初年我々の祖先が幼稚な理化學の實驗に驚嘆の目を見張つたと同じ樣な態度で、之を喜び迎へたものであつた。要するに此時代は、與へられたる條文をば犯す可からざる不動の典據と妄信し、その結論として命ぜらるゝ所には一も二もなく從ふべきものと一般に考へてゐたのであつた。

然るに近頃は如何。既成の法條に對しては與へられたる社會的規則として固より之に服從はする。併し之が眞に我々の生活を正當に指導する善良適切なる規則なりやは別問題だと考ふる樣になつて來た。我々は先づその根據に就て自由の批判を加へる。之に依て根本の見解が定まると、其根本の見解に合する限りに於て、それぞれの法條に我々は始めて心服するといふことになる。心服を捧げ得ないものに付ては、則ち改善の要求をする。少くとも法文の解釋上這般の正しい見解は須らく大に參酌せらるべきことを要求する。所謂自由法學の主張の如き一つにはこゝからも起る。孰れにしても今日に在ては、我々の生活が

基本で、法文の如きは之に適合するものでなければならぬとされて居る。故に法文をひねくり、之から意外な結論を導き出すことに依て頭の冴えを誇示した昔流の秀才は、今日となつては最早、井底の蛙同様、偏狹固陋な學界のひねくれ者とされてしまふの外はない。今日の法律學は最早形式論理の遊戯ではない。人生に關する廣き理解と厚き同情とを背景とする思想的活動の一部門だ。而して今日の法學教育が法律學に關する這般の見解と正に相應するものなりやは、亦大なる疑問である。

× × × × ×

以上は單に一つの例に過ぎない。只之に依て現代の法律運用が如何の用意を以て爲さるべきものかの一端を示し得れば足りる。而して這般の用意が、ことに思想問題に關する場合に於て、最も深く顧慮せられねばならぬことは、言ふまでもあるまい。

これ丈のことを述べて、さて今度の思想課新設の問題を考へて見る。この思想課は一體如何なる使命を有つべきものであるか。形式的にいへば、從來の取締の缺陷に應ずるものでなくてはならぬといへる。然らば從來の缺陷は何かといふ段になつて、前述の二種の異つた見解が現れて來る。最近この種の問題が頻々として起るの實狀に鑑み、一層嚴しく之を取締るの必要あるは、私も之を認める。併し單に罪を犯して刑を免るる者なからしめんとの目的だけなら、實は今の儘でも澤山である。特別專門の部局を設くるまでもなく、現在の機關を振肅すればいい。現に相當洩れなく檢擧拘留に努めても居るではないか。そこで新に思想課の新設を見る必要ありとせば、それはどうしても、問題となつた出來事の根本動機に遡り、基礎的思想の正邪を判ぜしめ、以て時代に適應する新活動を期するものと解せなければなるまい。換言すれば、思想課の新設は、斯う云ふ目的を有するものとしてのみ、始めてその存在の理由を有するものである。

私は元來斯う云ふ考を有つて居る、一つは現今司法官の教養の概して極めて偏狹なるの事實と、又一つには昨今の世相の變遷窮りなく、而も其の由て來る所一朝一夕の事に非るの道理とに鑑み、所謂思想問題に關する判斷は、特別專門家の鑑定を要する事柄だと。犯人の精神に異狀ありと見れば、其の鑑定を專門の醫者に賴む。理化學上の技術に關する事項の如きに至ては、常に一々專門家を煩して居る。然るに獨り思想問題について、裁判官が自ら正邪を判別する能力を有すと考ふるのは、實は大なる錯覺であり又甚しき僭越ではあるまいか。尤も私はすべての裁判官にこの能力なしと云ふのではない。概して之を缺く

は事實疑ひなく、又一般の道理から云ても、之が無いのが當然なのである。そこで私は從來屢々色々な機會に於て、思想問題の裁定に當ては、須らく專門家の鑑定に待つべしとの説を主張して來たのであつた。

× × × ×

裁判所が從來思想問題をも平氣でどん／＼片付けたに就ては、また出て來る所もあると思ふ。即ち彼等は從來法律學をば形式論理的遊戲として敎へられて來たからである。物の判斷は與へられた定義に合するか否かの外に出でないとする。共產主義といへば皆わるいときめてかゝる。無政府主義といへば一も二もなく怪しからぬとして一向差支ない。專門家の鑑定も何も入らぬのである。據る所は昭々乎として法條に明だ。併し乍ら今や時勢は段々進んで來た。共產主義といふ中にも色々ある。無政府主義といつても下は昔露西亞にあつた虛無黨から、上は所謂堯舜の治まで、其種類一にして足らぬ。例へばかの「階級思想に發源する社會運動」といふても、その內に盛らるべき內容に至ては千種萬樣である。而して之等を判別することは、近世の歷史に通じ、哲學宗教に關する深邃の思潮を解し、且相當に現實の社會生活上の體驗を積む者でなければ、能くし得ぬ所、而して是當よく現時の裁判官に期し得る所であらうか。私が多年此點に關し專門家の鑑定を必要なりと主張するは、實は之が爲である。

× × × ×

そこで本問題にかへる。新設さるべき思想課は、何を措いても、この「專門家の鑑定を必要とする要求」に應ずるものでなくてはならぬ。この以外にこの新設を是認すべき理由は見出せないのである。私は從來專門家を外部に採るべきを主張しただけれども、之を內部に養成する方が制度の上では都合がいゝのかも知れぬ。只內部に之を作ると、それが動もすれば內部通行の變な思想の影響を受くることなしとも限らない。故に內部に作る以上は、つとめて此點を警戒する必要があらう。之れには（一）初めより思想課新設の意義如何を明確にしておくの必要がある。是れ思想課の「判斷の自由」を保障するに缺くべからざる條件であらう。次には（二）思想課に職を執る人々に一切先入の見に捉へられず、常に謙虛なる態度を以て思想問題を研究せられんことを望まざるを得ない。どんなに頭のいゝ人でも、ある種の思想關係問題を擔當し、俄にその研究を始めたのでは、肝腎の所で大きな穴が出來るものだ。是れは私が此種の判決文などを讀んで毎に感ずる所である。思想課專屬ときまつた以上は、モ少し餘裕のある眞研究に從ふことも出來やう。

之を期待しつゝ、私は特に慎重なる研究態度を切に彼等に希望するものである。

要するに、思想問題は今後の日本に重大の關係がある。徒らに取締を苛察にするは却て弊害を滋くするにとどまるだらう。此時に當て思想課の新設をきく。やり様に依ては、一層弊害を増すことにもなれば、又この反對に著しく之を少くすることにもならう。私は思想課の新設に對し、今日の社會が一體何を之に要求して居るかを考へ、豫めとゝに政府當局並に新に其任に當る人々に一片の苦言を呈しておく。

鐵道次官の進退

仙石鐵道大臣の辭任と共に、其下に事務次官であつた青木周三氏の進退が昨今政界の重大問題になつて居る。この論文の公表さるる頃には、もう問題が片づいて居るかも知れぬが、之に付ては政界多年の弊習が可なり濃厚に附き纏うて居るとも思ふので、筆のついでに所見の一端を洩しておく。

單純なる理窟からいへば、事務次官は大臣の更迭と共に故なくやめないのが本筋だ。假令重大な政變の結果大臣の變つた場合でも、事務次官だけは留任させることにしたいといふのが、制度の眼目である。大臣が仙石から井上に代つたからとて、すぐ次官をやめさせろといふのは、少くとも局外の我々から觀れば驚くべき亂暴の沙汰である。

政變の度毎に事務次官をやめさせないことにする制度そのものの是否得失は、別問題とする。兎に角折角設けたこの制度も、同一内閣に於ける一大臣だけの更迭に際してすら斯う動揺を感ずる樣では、重大な政變に伴ふ全内閣の更迭の場合が思ひ遣られる。事によると、政務次官と事務次官の區別なく、一樣に更迭さるる樣なことにならぬだらうか。若しそんな事があつたら、折角の制度は何の役にも立たず、たゞ徒らに政務次官といふ一冗官を設け、所謂屋上屋を架するの一場の惡戯に過ぎぬことにならう。斯う云ふ下らぬ制度だからといふので、之が廢止を主張するのは構はない。が、苟くもこの制度を存置する以上、その本來の精神を斯うも輕々しく枉げられては困る。この點に於て私は、青木次官の退職は何時如何なる形式に於て爲さるるとも、それは斷じて制度の不當なる蹂躙だと明言するを憚ら

ない。

×　×　×　×　×

更に根本に遡つて、この制度のいゝか悪いかを論ずるに、理想的に行はるる限り、それは誠に結構な制度だと私は信ずる。第一に之に由て公けの事務に恒久的連續性が保障される。第二に政變に因て事務に當る者が不安を感ずることから免れる。第三に事務が政務の都合に因る干渉から免れ得る。この第三點がことに肝要な點だ。新鐵道大臣井に新政務次官が事務次官の更迭を希望するのも、事に依つたら思ふ通りに干渉が出來ぬからかも知れない。そんなら猶更、青木次官にやめて貰ては國家の爲に甚だ困るのである。

憲政會方面では頻りに青木次官の後援に骨折つて居る樣である。是は理論上から來るのか實際の利害の打算から來るのか、多少疑ふべき餘地がないでない。假りに現內閣が事務次官制創定の際自派に都合のいゝ者のみを之に擧げたとすると、之等の次官を後援するのが憲政會の利便とする所たるは怪むに足らぬ。假りにさうだとすれば、次に政友會內閣にでもなつた場合、之が動かされずに留れるか甚だ覺束ない。斯くして政友會にもこの制度を遵奉して貰ひたいと希望するなら、現內閣は本來現事務次官をして斷じて黨臭なからしむることに努めなければならぬ筈であつた。從てまた他日政友會內閣に代て自派が再び天下を取たときも、政友會內閣の殘した事務次官は其儘承認するとの趣旨を、豫め時に應じて聲明するの必要もあるとさへ考へられる。而して今日の憲政會に果して之れ丈けの誠意があるかどうか。

制度の上でどんなに其の超黨派的地位が要求されて居ても、新設の當初事務次官が自らその內閣に好意を有つべきは勢ひ免れない。だからとて次の內閣が（今度のような大臣更迭の場合も亦同じ）無雜作に次官を替へる樣では、結局政變の度毎に交代を餘儀なくされることになるだらう。制度の趣旨を貫き、結局理想的に運用さるる樣之を導く爲には、何としても故なく之を替へぬことが必要だ。憲政會內閣の時事務次官になつたものが、政友會內閣になつても引續き勤められるんだとなつて、始めて彼等は公平なる事務官となれる。斯くして數年の慣行を經れば、事務は完全に政務から獨立し、その不當なる干渉を免れて、立派に國民福利の增進に專念するを得よう。此意味に於て私共は、特に重大なる理由のない限り、事務次官の更迭は絕對に差控へらるべきものたることを要求する。

×　×　×　×　×

世間では、井上鐵道大臣就任の際、若槻首相は事務次官の更

逃を約束したと傳へる。そして事の是否善惡に拘らず、一旦約束したことを守らないのは首相に誠意のない證據だと、研究會邊では云ふそうだ。井上鐵道大臣の就任を、個人の資格だと云ひ僞らした研究會が、今更首相に約束の遵守を責めるのは可笑しいといふ世評もあるが、假令約束したからとて、國家の爲にたらぬことと知りつゝ之を首相に迫るのは、果して國士の爲すべきことであらうか。若槻首相程の智者が、そんな馬鹿な約束をしたとは、私共の到底信じ得ぬ所だけれど、若し約束したとすれば、それは飛んでもない失態に相違ない。研究會としては、この失態を彼に責むるは構はない。以後を愼めと十分譴戒を促してやる必要もあると思ふが、之を失態と識つてその履行を迫る筋は毛頭ないと考へる。惡いと識つて而も强て之を求むるは、取も直さず同罪ではないか。國家の爲め之が宜しくないと悟つたら、若槻首相の失態を責むる所か、先に平氣で之を彼に約せしめた自家の不明を耻ぢなくてはなるまい。之を棚に上げてひとり相手方の誠意を云々するのは、以ての外の曲事だと私は考へる。

一體日本には、自分の曲を棚にあげて、他人の誠意ばかりを云々することが流行る。私の知てゐる田舍の金持は、妾に金を持逃げされてから、頻りに當世婦人の無節操を慨歎してゐる。

勞働爭議の調停なる美名の下に飛び出した某反動團は、無鐵砲極まる自家の調停案を聽容せぬとて、勞働者側の無誠意を呼號し、一轉して資本家の味方となつてしまつた。政本提携の場合でも、又憲本提携の場合でも、誠意ありや否やの目標を術に、如何に一方がその無理を相手方に押しつけたかは、讀者の既に熟知せらるる所であらう。自信のない奴は、よく無理難題を持ちかけては相手方の性根をためさうとする。惚れた相手に心底を見せうとて小指を切るなどは、馬鹿げたことだが、自發的にするのだから先づいゝ。本當に惚れたのなら小指を切て見せろなどと迫られては、全く以て興もさめざるを得ぬ。無理難題で相手の誠意をためすのは、個人の間の事ならまだ我慢も出來る。政黨政派の掛引にまで此のやり方が濫用されるに至ては、到底私共の忍び得る所ではない。誠意の表示の名義の下に、下らぬ一黨派の面目を立てんとて、如何に屢々國家の利益が犧牲に供せられたかは、最近の政界に其例頗る乏しくない。國家社會の利益の爲には自家の面目などはどうでもいゝとする樣でなければ、本當の公黨とはいへまいではないか。公黨の間に在ては、誠意は專ら國家社會全體に對する關係に於て糺すべく、銘銘相互の關係に於て深く之を苦慮すべきものではない。

× × × × ×

以上の所説に依て、本問題に關する理論上の判斷は決したと觀てよからう。實際上の問題として、青木次官が適任かどうか、又之れまでに何等かの失態なかりしや否やは、私の與り知らざる所である。只新聞の所報に依りて私かに察するに、今度の問題は、新任佐竹政務次官の我儘から起つたものらしく見へる。人は曰ふ、佐竹氏は政務次官を以て實は省内の事務を一手に宰配したい野心があるのだと。彼の性質として是れ或は事實かも知れぬ。而して彼の敏腕はまた優に青木氏以上の成績を擧げるだらうとも思はれる。併し佐竹氏にして此の期望あらば彼は須らく事務次官たるべく運動して、徐かに其の成功の曉を待つがいゝ。偶々政務次官になつたのを好機として、陰にこの希望の達成を圖るのは、假令之に依て己れを利しその屬する黨派を利するの考なしとするも、少くとも憲政運用の合理的機能を紊亂するの譏を免れまい。佐竹氏如何に有用の俊才であつても、憲政の機能は彼一人用て紛更さるべく餘りに重大である。分を辨へざる小策士の不當なる跳梁を抑へる意味からしても、此際鐵道次官の更迭は容易に許すべきものでないと考ふるのである。

斯くいへばとて私は、事務次官の更迭は絶對に許せぬと主張するのではない。普通の官吏法規に牴觸する場合は云ふまでもないが、之を外にしては、唯一つ彼が事務次官としての本來の任務を守らなかつた場合には、之を更迭するも已むを得ないとされる。蓋し事務次官の地位は前述の如く黨爭の渦卷から安全に保障されて居る。從て彼は進んでこの渦の中に投ぜざるの義務を負ふものである。之を信認するの故を以て始めて事務次官としての恒久的地位が保障されるわけなのである。であるから、若し彼れが少しでもこの期待に背くことあらんか、彼れは自ら好んで其地位を抛棄するものと謂つていゝ。故に若しこの事が證明さるれば、玆に始めて彼れの更迭は理由あるものとなる。而して之に付ては更迭を要求する者に擧證の責任あることは亦言ふを待たないのである。

西園寺公の元老無用論

御下問奉答機關に關する西園寺公の意見

八月上旬の某新聞は報じて曰ふ、四月半ばから百日あまり滯京した西

園寺公は、其間數回牧野内大臣、一木宮内大臣と會談し、政變時に於ける後繼内閣奏薦の問題につき次の様な意見を述べたと。

一、從來元老に御下問を賜はるの例になつて居るが、之は本來は内大臣が御下問を蒙つて奉答すべき筈のものである。

二、從來の慣例を尊重せんと欲する者は、自分の外に山本伯とか淸浦子とかを新に准元老に奏薦し、以て御下問奉答の重責に當らしめよと說くが、自分は其の必要を認めない。

三、御下問範圍を擴張し、内大臣、宮内大臣、樞密院議長、貴衆兩院議長を加へんとの說もあるが、之もその必要を見ない。

四、たゞ御下問奉答の結果の重大なるに鑑み、之を一内大臣の全責任に歸するの穩當ならざるを憂ふる者あらんも、政黨の發達も段々健全になり、超然内閣の出現を必要とする理由も薄らいだ今日、内閣組織の推移は今後自ら歸着する所ありて、所謂御下問の奉答も形式にとゞまり、恐らく其の實質に觸るることはなくなるだらう。然らば内大臣の責任として置いても十分であらう。

五、自分は從來右の如く信じて居たから、加藤高明内閣の出來る時も、御下問に對しては平田内大臣に御下問あらせられたいと申上げ、第二次加藤内閣及若槻内閣の成立の場合にも、大體同様の態度を執つた。今日は最早元老が内閣組織の實質に干涉すべき時節ではない。内大臣が自ら理の歸着する所を稽へて決定するに面倒はなく、又さうすることに格別の故障もない筈である。

西園寺公の談として新聞に出たものは必しも右様の文字にはなつてゐない。分り易からしめんが爲に私の言葉に直したのだが、意味は毫末も違はぬ積りだ。而してこの西園寺公の言明なり態度なりは、我國の政界に取て頗る重大の意義あるものたるは言ふを待たない。

人或は曰ふ、一人の元老が御下問に奉答するも一人の内大臣が之に代るも同じ事ではないかと。然らず。抑も誰が内閣を作るかといふが如き重大の責任は、到底尋常人の負ひ切れる所ではない。そこで（一）今新に之を内大臣一人の責務にするといへば、そは這の重大な責任を此の一人に負はさうとの意味と觀べきではなく、必ずや今後は内閣組織の事をば或特定の慣行又は原則に據らしめよう、實質的に或る個人の責任にしないといふ趣意だと解さねばならぬ。詳しく云へば、政界には政黨内閣主義といふ原則並に慣行がある。從來之は日本憲法の精神に反すなどと反對されて居つた。それでも大勢は漸次之を認めざる可

らざるものたらしめて居る。強て之を排斥せんとするとき則ち政界は紛擾するを常とする。そこで寧ろ之を認むるに若かずと西園寺公は認められたのであらう。之を認むるとすれば、更に面倒はない。形式上内大臣が奉答の任に當るとしても一向差支ない。況んや内大臣は制度上常侍輔弼の重任に在る者なるに於てをや。之に反して（二）内大臣を差措き元老をして御下問奉答の重責に當らしめた從來慣行の由來をたづぬるに、それは實に政界通行の原則並に慣行に反し、所謂政黨内閣主義の確立を阻止せんとの目的に出でたものである。即ち之を日本憲法の精神に悖ると爲し、所謂大權内閣主義を何處までも押し通さうとなら、内大臣の外にもツと權威のある特別の奉答機關は是非とも必要といふことになる。西園寺公一人で威望に足らぬ所あるなら、外にも二三之をこさえて兼ねて又その後繼に備へておくも可い。若し夫れ彼れ程の威望ある人物が外にないといふなら、内大臣、宮相、樞相に兩院議長を加へた堂々たる一團を作るの外に妙案はないのかも知れない。所が西園寺公は一切之を必要とせぬといふ。山縣松方を經て彼に渡されたこの重任を、こゝで此儘消滅さして仕舞はうといふのである。茲に私は重大なる意義を考ふるの必要があると思ふのである。

成る程西園寺公は法律に依て設けられたる何等の官職に居るのではない。併し乍ら何人が内閣に据るかの天下の大事が實に彼の方寸に依て決するのだとすれば、國政に關する彼の素論が如何に重大なる意義を有するかは、問はずして明であらう。而して今や彼は内閣組織の重大問題に關し、多年通用せる原則を一掃し、事實に於て別に新らしい原則を宣明したのである。それは外でもない、政黨内閣主義の推奬即ち是れ。加之之に附隨の結果として來る元老又は少數貴族政治の凋落といふことも亦見逃すことの出來ぬ現象である。

以上の點を政界門外の士に能く理解して貰ふ爲めに、私は次に少しくこの事に關する沿革をも述べておきたいと思ふ。

政變の際に於ける後繼内閣の決定

一體政變の結果今までの内閣が總辭職をした時、次の内閣はどんなにして生れて來るものか。例へば若槻内閣が總辭職をする。その場合後繼内閣は如何にしてきまるのか。若槻が退けば、憲政會に次ぐ大政黨たる政友會の田中總裁が之に代るべきだとか、又は政友會と政友本黨とを左右兩翼に率ゐて下院の過半數を制し得べき人物が假りにあつたとすれば、其の人にやらせるも面白いといふのは、皆是れ民間の下馬評に過ぎず、その評判が如何に盛であつても、之れで後繼内閣がきまるのではない。下院の形勢に基き、その多數を制し得べき者がお召に預つて、陛下より新内閣

組織の大命を賜るといふ慣例は、まだ定まつてゐないからである。尤も段々斯ういふ傾向になりつゝあることは明白だ。併し之が一個の政治的慣例と認められるには、今後なほ數回之が繰返されることを必要とするだらう。今日の所はまだ、何人に組織の内命が降るやは、いよいよ其時になつて見なければ分らぬといふ狀態である。

陛下が全然御自分の發意に基き何某に組閣の大命を賜るといふ場合は問題がない。併し今日までの例に依ると、斯の場合陛下は必ず何人かに御下問になるのである、決して獨斷で御決定をなし給はぬ。そこで何人かに御下問になるといふことだけは、既に不動の慣行になつたと謂てい〻。然らば何人に御下問になるか。この點になると、昔と今と慣行が變つて來て居るやうだ。即ち昔は、辭職する所の首相が後任者を奏薦するの例であつたのに、最近は、元老と稱する一團の勳臣が相談の上で意見を上ることになつたのである。尤も昔でも、特別の場合に元勳會議で相談したこともないではない。併し概して前任者が後任者をきめて退くのを常としたが 其後政黨内閣が現れる樣になつてからは、この例は守られなくなつた。現に大隈内閣辭職の時、首相はその後繼者を奏薦したけれども、御聽容を得なかつたと傳へられて居る。斯くして最近は、後繼内閣の決定に關しては、前任首相は全然之に與らず、御下問を受くるものは徹頭徹尾元老の一團のみといふことになつた。從てまた元老とは、その本來の意味を離れて、今では首相奏薦權を有するものといふことになつたやうでもある。山本伯や清浦子を元老又は准元老にするのしないといふは、畢竟右の義に解して始めて意味を爲す問題である。而して此意味に於て今日元老といへば、實に西園寺公一人となつたことも亦申すまでもない。

元老奏薦權の政治的意義

もと前任者が奏薦したものを何故元老の手に奪ふことにしたか。之が全く政治上の理由に出づるものなるは前述ぶる所でも明であらう。憲法創定の當初から、政黨を以て國家の公敵となし、自ら皇室の藩屏を以て任じた官僚の一團が、大事な内閣組織の實權を、生命に換えても自家の掌中に獨占せんとせるは怪しむに足らぬ。故に一の内閣が行詰ると、自派の他の者をして代て内閣を作らしめて來た當初の十數年間は、前任者が奏薦するの例で一向差支がなかつたのである。所が政黨の異常な發達は、やがてその政權慾を無下に斥け得ぬ形勢を馴致する。時にはその内閣組織をも認めてやらぬ譯には行かぬ。そこで一度位は内閣を作らしてやろといふことになるが、併し其の次ぎの内閣を誰にやらせるかまで、彼等に容喙される樣になつては困る。そこから元老といふも

出て來て、段々重大な政治的意義を帶ぶる樣になるのである。而して內閣組織に關する元老の實權が、山縣公に於て最も花々しき活躍を見たことは、既に讀者の知らるる所であらう。

して見れば、前首相の奏薦が元老の奏薦と變つたのは、實際政界の形勢の變化に伴ふものであつて、之に依て達せんとする根本目的に至ては、前後を通じて異る所あるのではない。即ち政界に於ける最終の發言權を先輩官僚の間に獨占し、斷じて之を政黨者流に許さざらんとするに在るのである。而して之を粉飾する爲には、大權の擁護だの、非國家思想の排斥だのと、尤もらしい議論も唱へられるのだが、虛心平氣に其實際政界に現はれる結果を觀れば、それは明白に貴族政治の擁護であり、又從て民衆政治の抑壓であつた。何となれば、(一)政黨は如何に政黨としての本來の任務を盡しても、之に由て必ず內閣に立てると限らず、內閣に立て天下に經綸を行はんと欲せば、先づ奏薦權を有する元老の機嫌を取らねばならず、斯くして元老といふ二三者の一團が不當に尨大な威權を有することになるのが一つ、(二)更にモ一つは、その爲め政黨は元老二三者の意を迎ふるに忙殺され、眞に輿論の大勢に從て方針を決定するに勇なるを得ず。其結果彼は民衆に聽くよりも、寧ろ民衆を籠絡して自家の非合理的行動に盲從せしむるの策に出でざるを得なくなるからである。是れ進歩せる政界論客が多年口を揃へて元老の攻擊に熱中せし所以ではないか。元老其人に甚しき過誤なしとしても、單に其の存在だけで政界の進歩が斯くも妨げられるを思ふと、元老制度の將來は事實上決して小さい問題ではない。

元老としての西園寺公の立場並に其意見

今日は元老といへば最早西園寺公一人のみとなつた。今にも政變が起れば、西園寺公一人の方寸で政權の歸着がきまるのである。そこで政界の有象無象は、所謂西園寺詣に浮身をやつして、平常から彼の機嫌を取らんとする。併し時勢は段々變つて來た。天下はいつまでも元老だからと云つて一々其の指圖に盲從しようとはせぬ。幸にして西園寺公は、今日までの所あまり無理な處置はしてゐないので、民間の評判も惡くない。彼がもと政友會の總裁であり乍ら、最近その內密の運動を斥けて、公平な態度を一貫した點などは、寧ろ賞讚に値する。彼にして若し屢々山縣公の如く無理な横車を推さん乎、恐らく彼は今まで通りの信望を保ち續け得なかつたらう。斯くして彼の公平は、今猶ほ元老の威望を內外に重からしめて居るけれども、それでも彼れはこの重き責任を一人で負ふことを昨今餘程堪へ難しと感じて居るらしい。孰れにしても、彼が今日までこの重要な地位を大體國家の利益と牴觸せぬ樣に善用して來たことは、何人も認める

所であるやうだ。

併し今日の西園寺公の立場として最も重大な問題は、此地位を如何に運用すべきかでなくして、寧ろこの制度を將來に繼續すべきか如何の點であらう。元老は彼れ一人となつた。且彼は高齡である。そこで若し元老といふ制度を國家に必要なるものと考ふるなら、彼は一日も早く之を受け繼くべきものを新に作つておくべき義務がある。それを彼は作らないのである。しも作らうにも人がないぢやないかといふ者もある。所謂元老としてあれ丈の權力を振つても世間に文句を云はせないといふには、尋常一樣の人間を持つて往つたのでは駄目だ。故に人物の有無といふ點からいへば、否でも應でも西園寺公を以て終りとせねばならぬのかも知れない。併し人物がないといふ丈の理由なら、元老を作らなくても、他に之に代る機關は如何樣にも工夫され得ると考へる。現に内大臣以下貴衆兩院議長を以て特別機關を作れといふ說もあるではないか。それをも作らないとすれば、西園寺公の腹中には、疾くに元老なる制度を不必要とする確信が出來たものと觀なければならぬ。不必要と信ぜざる限り、ともかくも重大なる此地位を彼れ一人で終らす筈はないからである。故に公の這回の言明なり態度なりは、はツきりと口にこそ出さゞれ、最も雄辯に、自ら元老無用論を唱へられたものと觀ることが出來る。

西園寺公のやうな地位に在る人は、一體に腹に思ふことを其儘露骨に口には出さぬものらしい。それでも彼は現に、「元老の存在も必要でなくなつた」と云ひ切つて居る。新聞傳ふる所により、彼の思想の筋道を辿ると斯うなる。

一、御下問奉答機關としての元老は、超然内閣の出現を餘儀なからしめた時代の必要に應ずるものであつた。

二、政變の推移は本來自然にして圓滑に運ぶを要し、政權の歸着は自ら政局を安定せしむるものでなくてはならぬ。而して政黨が健全に發達して居れば、政黨をして政權を爭はしめて此目的は十分に達せられる。

三、然るに從來不幸にして政黨は十分健全に發達して居たかつた。爲に政黨内閣の成立が却て政局を不安定ならしめると觀るべき場合も隨分多かつた。そこで已むなく超然内閣の出現を必要としたのである。從て元老の存在も過去に在ては決して無意義ではなかつたのである。

四、今日は如何といふに、まだ政黨の發達十分滿足なりと謂ふことは出來ぬが、併し之を助長隆援することに依て徐々その健全なる發達を促し得べき程度には達して得る。

斯くて公は、現在政界の批判に於て又近き將來に於ける其發

達傾向の觀測に於て、まがう方なき政黨内閣論者なることは明白である。日本國民全般の政治思想の發達の上に、固より公一人の態度如何は何の係はりもないことだが、政局の實際的推移の點からいへば、之は決して小さい問題ではない。現實政局の變遷に關心する者に取り、大に注意を要する問題として、特に一言を費す所以である。

追記 以上の小篇を草し終つた後、八月十三日の東京日日新聞を見ると、次の樣な記事が載つて居つた。曰く、内閣並に宮内省が上奏して御裁可を仰ぐ各般の事項に就ては、從來その都度直接又は侍從等から内容を御說明申し上げてゐたが、今回宮内省側の意向として、内大臣秘書官長をして上奏事項說明の任に當らしむるの新慣例を開くことに決定し、近く其旨を正式に内閣に交渉することになつて居る云々と。此事果して眞か。後報を待て確むるの外ないが、事實とすれば、前記西園寺公の意見なるものと、何等かの關係がないともいへぬ。而して私共の考としては、(一)西園寺公の元老無用論は、内大臣をして之に代らしむるの意ではあるまじく、(二)從つて内大臣府に事實上國務輔弼の任を集中するの必要はなく、(三)この報道の傳ふる如く、内大臣秘書官長をして右等重要の職に當らしむるときは、國務大臣の輔弼はどうなるのか分らなくなり、(四)殊に國務大臣の輔弼と内大臣の掌侍輔弼との關係は甚だ明瞭を缺くことになると思ふ。元老を無用とすれば、内大臣といふものの重要さが鮮かになるが、併し國務の實質にまで彼に關係させるといふ性質のものではあるまい。此點制度の形式に於ても又政治の實際に取つても極めて重大の關係がある。後報を待て更に評論を試みたいと思ふ。

長野騷擾事件の側面觀

長野騷擾事件を當代の社會的一問題として觀ると色々の事が考へさせられる。その起因、經過、結末、殊にその司法處分の如き、我々の看過を許さぬ問題も多々あるが、之等はすべて新聞の記事乃至評論にゆづる。茲にはモ少し根本の處に於て此事件の有つ社會的意義を考へ、併せてまたその善後策に付ての私見を述べて見たいと思ふ。

× × ×

第一に私共の注意に上るのは、民衆が餘りに團體的示威運動の訓練を缺くことである。傳ふる所に依れば　長野縣各町村の民衆は、縣廳側今次の措置に憤慨し、矯激の文字を書いた旗を押し立てなどして、大々的示威運動を企てたのださうだ。警察官憲は豫め之を知つては居たが、併し敢て格段の對策も講じなかつたといふ。之を官憲の怠慢と說く人もあるが、私は當初は遽に格段の對策を講ぜねばならぬ程に不穩を豫想すべきものではなかつたと聞いて居る。(東京のメーデーの時の樣に警察に豫め對策を備ふるものあらん乎、知事や警察部長の官邸は襲擊を免れ得たらんも、其外に於てどんな動亂を起したか分らない。長野警察官憲が豫め之に備へなかつたといふ事に就ては、必しも之を咎むべからざるものがあるやうに私には思はれる)。果して然らば、あの騷擾は豫め計畫されたものでないことは明である。人に依ては、陰に政黨があるの、水平社若くは思想團體の操縱があるのと說くが、之等は皆爲にする所の宣傳で、眉に唾して聽くべきものと云はれて居る。斯くてあの騷擾は、豫め計畫されたるに非ず、又他の煽動に誘はれたるに非ずとすれば　私共はどうしても、民衆が未だ團體行動に慣れず、平素訓練を欠く所から忽ち無節制の狀態に陷つたものと斷定せざるを得ぬ。長野縣は全國中最も教育の普及し且つ盛なる所、而も其の縣民の訓練狀態が斯の如しとせば　他は推して知るべきであり　今後同じ樣な團體運動が廣く一般に大に流行すべきを思ひ合しつゝ、私は心ひそかに日本の前途に大なる危惧を感ぜずには居られない。斯んな所から私は、今度の事件を長野縣だけの問題として對岸の火災視することは出來ぬ樣な氣もするのである。

最も教育の高き長野縣民があゝであつたといふことは、日本の民衆はまだ〳〵團體行動には訓練されて居ないことを語るものである。從つて今後でも、此種の團體行動の計畫には一寸安心の出來ぬといふ懸念がある。この點に於て、警察官憲が事每に此種の運動に神經を尖らすのも强ち無理とは云へぬと思ふ。併しさう云へばとて私は、今日の官憲の取締に見る樣なあの干涉壓迫には大反對である。それは團體行動そのものに挑戰するものだからである。團體行動そのものが惡いのではない(之は寧ろ時に必要なこともある)、團體行動を爲すに當て必要な訓練の缺如する所に、取締を要するものがあるのである。故に官憲の取締は、その訓練の欠缺を補整するものでなくてはならぬ。否、補整にとゞまるものでなくてはならぬ。之を補整せんとして其極遂に團體行動そのものまでを抑止するの結果になるは、所謂

角を矯めんとして牛を殺すの愚に等しい。否、そればかりではない、本來阻止し得ざるものを阻止せんとする所から、往々にして不確なる紛擾をも來すことになるのである。故に團體行動に對する取締は必要ではあるが、其の方法に付ては、最も愼重なる工夫を凝さなくてはならぬのである。

長野縣の警察官憲が、東京警視廳の樣な積極的行動に出でなかつた點はうれしい。併し彼には訓練欠缺を補整すべき手段の工夫を怠つた嫌がある。啻に之を怠つたばかりでない、事後の始末に付ても適當と敏活とを欠きはしなかつたか。之等の點は猶ほ詳報を待つて評論するの外はないが、假りに私が其局に居つたとしたら、豫め各町村の重立つた者を召集し、團體運動は無論之を許すが、其代り其運動の秩序維持の全責任は諸君に於て負うて貰ひたいと懇談したであらう。澤山の幹部を作り、之等が銘々示威行列の一部の指揮を分擔し、事に激して常規を逸することなき樣十分其管轄の取締に任ずるといふ組織にでもしたら、**立派な成績を擧げ得たに相違ない。嘗て私は獨逸伯林**に於て、示威運動中警官に斬殺された一社會主義者の葬儀を見たことがある。葬式それ自身がまた一つの大示威運動なのであるが、主催者は千人長、百人長、十人長と云つた風の指揮者を配置し、之を標知せしむる色布を腕に捲いた者が到る處に監視の眼を光らしたので、彼れ立つた行列でありながら、長い示威的葬式も無事に而も有効に終つたのであつた。是れ豫め社會黨幹部と警察官憲とが懇談的に協議した結果だとは、後で知つた所であつた。之れだけの面倒を見てやつて而して十分に民衆の運動を許すやうでなくては駄目だ。斯の如きは警察としては固より當然の措置(之れ以上に突き進むのは斷じて無用の干渉である)だが、民衆に取つては又是れ最も適當に指導訓練さるる所以でもある。只無暗に干渉壓迫の手を伸ばすのでは、啻に實効の擧らぬばかりでなく、又民衆からは全く訓練の機會を奪ふ結果になるのである。天下に之れ程の愚策はない。

× × ×

第二に私共の注意を惹くのは、知事の措置の無鐵砲極まることである。警察本分署廢止といふ事の是否得失は暫く措いて縣會議場では近く之に手を附ける考は毛頭ないと明言し乍ら且民間には可なり強烈な反對意向あるを萬々承知して居りながら、**耳に水の大改正を突然發表するとは、餘りといへば人民**を無視した横暴の沙汰である。狂人でない限り、斯んな無鐵砲な事を敢行するとは、常識を以て到底考へられぬことではないか。然るに彼れ程敏腕有能の聞えある梅谷知事は平氣で之をやつてのけたのだ。而も彼自身は之をやつて特に異常の失態を演

じたとも考へて居ぬらしい（事の結果の意外に大なるを見て、心中少しく遣り損つたとは思つて居るらしいが）。して見れば、我々から觀て無鐵砲とする斯種の事も、今日の官界に在ては別に不思議の事とも認められぬのかも知れない。果して然らば、私共は今日の官界の如何に我々の常識と縁遠いものであるかを、先づ念頭におく必要がある。

そこで私は、今日の知事がどうしてあんな無鐵砲な事を平氣でやる樣になつたのかを考へて見る。考へて見ると、之には成程と首肯さるる理由もある樣だ。此點に關する私の考を一言にして云へば、是れ實に黨弊の結果に外ならぬのである。次に少しく其故を說かう。

知事の任務は元來縣下民衆の福利の增進に在る。然るに最近十數年この方、政黨は地盤開拓の爲とて一部の民衆に不正な利權を提供した。眞に縣民全體の福利を念とする者は固よりこの方針に盲從するを得ざるが故に、所謂地盤開拓が時の政府の隱然の方針たる限り、良心に忠なる知事は永く其職に留り得ぬ。否知事が自らその進退を決する前に、政府が自家の便宜を謀らざるものとして斯かる知事をどしどし更迭する。斯くして知事は、永く其職に留るを欲する限り、政府のこの方針に盲從せなければならぬことになる。是れ即ち今日所謂知事の黨臭といふことが傳唱さるる所以である。政友會全盛の時代などには、全國の知事悉くが政府と共に政友會の黨利を圖るものであつた。政友會凋落後この關係は少しく變つたけれども、知事の黨臭を帶ぶるは依然たり、而して人民には何と思はれても中央政府の覺さへ目出度ければいゝとする態度は、惰性的に今日の知事にもまだまだ濃厚に殘つて居る。之が實に梅谷知事の樣なタイプの者の案外に多い所以ではあるまいか。

知事として立身出世するのは、縣治上に擧げた、治績に依るのではない。眞の意味に於ての「成績」を擧げて立身した者、今日果して幾人あるか。立身出世も固より「成績」に由るといふ。併しその時の「成績」は、もう意味は變つて居る。即ち何れ丈け中央の意向に迎合したかと云ふことに依てきまるのである。地方民の爲になるかならぬかはどうでもいゝ。中央政府の無理を十二分に通せば、それで立派な良二千石なのである。彼等は名は地方官といふも、實は中央政府の出張員に過ぎぬ。中央の爲にする氣はあつても地方の爲に圖る氣はない。故に地方人民の氣に入らぬからとて罷めらるる氣遣は先づないのである。地方長官の地位が今日の樣である限り、梅谷知事の如き者の輩出するのは元々怪むに足らぬのである。

知事が地方人民の意向に依てやめらるる場合は唯一つあつ

なる。そは與黨たる大政黨の當該地方支部の機嫌を損じた時であらう。不正の黨略に對抗して國利の擁護につとめた良二千石にして、この爲に罷められたものも今日まで頗る多い。併し之とても、地方的地盤を大事にするといふ中央の希望に迎合せぬから罷められるもので、單純に地方人民から斥けられる場合とは違ふ。斯くて今日までの所、知事に取つて地方人民の意向を尊重するはさ程必要ではなかつた。一番大事なことは、中央政府の意を迎へることとである。従て中央政府の覺めでたき人程、地方人民に對しては傲然たる態度を執つたものである。

知事の斯うした態度は、政黨内閣を豫想しなくとも考へられるのであるが、政黨の地盤開拓策と作つて一層甚しくなつたことは疑ない。だから梅谷知事のやうな事件は、外にも澤山あるのである。時機がわるかつたか、場合がわるかつたか、梅谷知事に於て獨りあの爆發を見たのは氣の毒だが、兎に角之に懲りて後の始末を立派につけようとなら、知事の地位に付てもツと根本的に考ふる所なくてはなるまい。地方分權の主張をも容れるとてどんなに地方官廳の權限を增大しても、知事が斯んな風では、そは中央政府の出張員としての知事の權限擴張にとゞまり、地方の權限は却て增々縮まるばかりではないか。

終りに善後措置に關する卑見の一端をも述べて置きたい。

善後措置として考慮すべきものに二つの方面がある。一は被檢擧者の處分如何の點で、一は警察本分署廢止處分の勵行如何の問題である。

被檢擧者の處分に付ては、情に於て恕すべき點あるも、今日の立憲國民としては慥に十二分の責任を免る可らざる事態である。この點に情狀酌量の餘地はない。量刑の問題としてはまさに嚴刑に値すると思ふ。但之に服役せしむるの必要ありや否やは亦自ら別問題だ。裁判の結果に付ては他日また評論を試みる機會もあらう。

警察本分署廢止處分の勵行に就ては、(一)一部の人の間には、暴動したからとて一々其の言ふ事を聽いては、將來いつも此手段に出づるの弊害を生じ易い。懲しめの爲めにも縣民の希望は許さぬ方がいゝと云ふ論がある。(二)併し縣民としては意地にも警察本分署を全部舊態に恢復させたいと希望するは言を待たぬ。政府はこの點に關し如何の態度を執らんとするか。形式上は新知事の方針に在ることだらうが、事態の重大に鑑み、中央でも之に就ては全然無關心ではあるまい。

私の考を率直に述ぶることを許さるるなら、縣民が意地になつて原狀回復を主張するは間違つて居ると思ふ。縣民が意地を

張れば、官憲も意地を張る。斯くては水掛論となりて、適當な解決を見る望みはない。之と同樣に此種の暴動を二度とさせぬ爲に縣民の希望を絶對に聽くなといふのも、甚しき暴論だと思ふ。無理押を聽容してはいかぬといふ理窟が正しいなら、縣民の無理押も聽くべからず、知事の無理押も聽いてはならぬ。事は一體知事の無識硬から起つたのだ。喧嘩を賣つたのは寧ろ知事側に在る。知事の無理は通してよし、民衆の無理は通してならぬといふのは、是れ取りも直さず官僚萬能主義に中毒せる議論ではないか。官僚なるが故に過誤なしといふことは出來ぬ。民衆だつて今日知見は頗る進んでゐる。少くとも現代的の考方としては、知事と民衆とを同列に置くものでなくてはならぬ。從て一方を立てゝ一方を抑へる樣な議論をするのは、適當な善後措置を見出さんとする今日、ことに愼むの必要があると考へる。

斯く考へれば、善後措置を講ずるに當り何よりも大事なことは、先づ白紙の狀態に復へることでなければならぬ。即ち出發點に歸つて、改めて如何にすることが縣民の利益であるかを愼重に攻究し直すべきである。地方の事情を知らぬ私共局外の者には、固より具體的の案は立たぬ。が、如何にすれば最も正しき具體的解決案を得べきやに付ては、多少の確信を以て發言し得ぬこともない。斯う云ふ見地から私は、此際當局並に縣民に對ひ特に次の三事を提言したいと思ふ。（一）本問題を何處までも地方的利害の問題と爲し、斷じて政爭の具に利用せしめざること（理に於て政治問題たらしむべきものでないことはまた極めて明白だ）、（二）本事件を何處までも超黨派問題と爲し、各派共同一致して解決の任に當ること（斯種の問題で政黨が互に爭ふ樣なら、それ丈けで既に政黨の越權專恣を咎むるに値する）、（三）解決の途を發見するためには先づ官民合同の協議會を開き、民間よりは各黨派の幹部を洩なく網羅すること。併しこの第三點は地方の事情に依て大に斟酌せらるべきは論を待たない。要は一ト先白紙狀態にかへり、各方面の腹藏なき意見を聞いて後、愼重に適當なる解決案を得ればいゝ）。以上三事のうち特に肝要なるは、言ふまでもなく第一第二の點だ。此點を明にする爲には、わけても賢明なる縣民諸君の監視に待たざるを得ない。而して長野縣が今次の事件に善處し得ん乎、それは決してひとり長野縣だけの幸福ではない。此際長野縣が巧妙なる解決に成功して將來に美しき先蹤をのこすことは、また禍を轉じて福となす所以でもある。

メキシコ宗教紛爭の教訓

メキシコ宗教紛爭　メキシコの宗教紛爭は、謂はゞ政府と天主教會との爭である。天主教會は今日日本にも相當の信者を有つて居るが、それが將來どんなに盛にならうと、メキシコの樣な紛爭を釀す恐れは先づ無いと思ふ。そは天主教發達の歷史が丸で違ふからである。併し過去に於ては我國も之と似た經驗を嘗めたことはある。謂ふまでもなく島原の亂が其一例だ。かの天草騷動の起因等に就ては、外に幾多の理由もあるのであるが、其邊の事は他日の研究に讓るとして、孰れにしても今日我國の天主教は、維新前後から特に國家に遠慮しつゝ發達したので、今日現に政府に對抗する社會的獨立勢力となつて居ない。所が西洋に在ては丸で事情が違ふ。天主教會は、昔から天地を主宰する神の名代、從て帝王中の帝王として發達して來た所から、其の歷史的惰力に依り、今日でも民間の之に捧ぐる信奉は實に非常なるものだ。それ程信徒と教會との精神的連絡の密切なる所へ、教會は又之に乘じて信徒の生活の各方面に向つて頻りに統制干涉を加へんとする。天主教會が信徒の生活に對し餘計な事まで氣にして世話を燒きたがるのは、丁度現代日本の政府の樣だと思へばよい。良い事にしろ惡い事にしろ、民間の爲すが儘には放任して置けぬのである。そしてそれが又よく國家の施設と衝突する。少くとも事每に國家の權限を侵掠するの結果になる。近代國家が遂に奮然として教會の干涉を排し以て完全なる國家的統制を保持せんとするに至るは當然である。斯くして天主教會發達の長き歷史を有する諸國は、何處でも今度のメキシコと同じ樣な經驗を嘗めたのである。獨逸帝國の所謂文化鬪爭は云はずもがな、近くは一九〇六年の政敎分離法制定に基く佛國の宗教紛爭の如き、その最も著名なるものである。就中この佛國の例は最もよく今度のメキシコと似たものがあるやうだ。

宗教紛爭の起るに就ては、私は先づ主として教會側に責任あることを認める。只この點に付て日本が全く特別の發達をなして居ることは前述の通りである。故に宗教紛爭のことなどは、我國に於ては餘り意に介するの必要はない。併し宗教紛爭に於

て、國家の彈壓其度に過ぐると、却て教會の反抗を不當に過激ならしむるの事實は、我々に於ても大に反省するの必要はあらう。我國の政府が昨今宗教に對して不當に干渉の手を伸べんとして居ることは、今度の宗教法案に依ても分るが、概して思想問題に付ての政府在來の態度は、無用に教會を激昂させた西洋諸國の政府によく似た所がある。此點に於て彼方の宗教紛爭には、我に於て亦多少學ぶ所がないでない。詳細は猶今後の報道を待たなければならぬが、今はたゞ新聞傳ふる所に基き、大體メキシコ事件から我々の注意すべき點二三を述べて見やうと思ふのである。

其前に、今日文明國一般に通ずる宗教政策上の根本原則を述べておくの必要がある。メキシコ政府も要するにこの根本原則に基いて天主教會に挑戰したものに外ならぬからである。

宗教政策上の根本原則

今日文明國の宗教政策は、信仰自由といふことを根本原則とするといふ。我國の憲法も亦此原則を執るとは誰も説く所であるが、一體信仰自由といふことは如何なる意味を有するものか。之に就て私は次の如く考へる。

(一)凡ゆる宗教につき、原則として、之を布教宣傳することも又之を信仰禮拜することも、自由とする。從て國家は或る特定の宗教の信奉を强制してはならぬ。この原則からまた次の如き規則が當然生れなければならない。

甲、國教を設けてはいかぬ。この點から我國に於ては神社が宗教なりや否やが矢釜しい問題になる。政府は今日現に神社參拜を强制してゐるからである。此の事實に基いて、神社は宗教でないと政府は主張する。神社は宗教でないのなら、今日の神社參拜から、宗教的分子を一切除去せよと、他の宗教家は迫る。神社參拜とこの原則との關係は、將來に於ける大問題であらう。

乙、特に此原則に對する例外を設くる必要ある場合には法律を以て之を規定する。法律を以て規定するにも自ら二つのやり方がある。(イ)特殊の宗教につき或る條件の下に之を禁ずると決める方法もある。曾て獨逸はヂエスイト派に付て斯の方法を取つたことがある。モルモン宗を禁ずるといふの類も亦之に屬する。(ロ)一般に或る條件を具備する者はひろく之を禁ずと規定し、その認定を内務大臣の權限とする方法もある。その認定に關し、今度の宗教法案にもある様な宗教會議といふ類の諮詢を條件とするもよからうと思ふ。

(二)、凡ての宗教は、禁令に觸れざる限り、一樣に之を保護する。其間偏頗の沙汰があつてはならぬ。此點に於て、今度の宗教法案が宗教指定の制度を取つたのは、飛んでもない間違であると思ふ。許すか許さないかは別に法律できめる。許すときまつた以上、更に指定の手續を取る必要はあるまい。一樣に均一の保護を加へて差支へない筈である。而してその所謂保護の

式と實質とに付て亦重要な注意が要る。

甲、保護は積極的であつてはならぬ。宗教を實質的に發達せしめようとするは固より國家の能くし得る分ではない。宗教は權力よりの助長を以て進歩すべき性質のものではないからである。此點に付ても今度の法案は夥しき無用煩瑣の干渉規定を設けてゐる。

乙、保護は全然消極的でなければならぬ。之は趣旨に於ては(甲)と同じ事になるけれども、主としては宗教の發達を阻害する原因の除去といふ方面を着眼して云ふのである。中にも財産保全の方法を講じてやることなどは最も急務とする所だらうと考へる。

猶この原則に對しては、歴史的理由に依り、多少の例外を認めねばならぬ場合あることを考慮せなければならぬ。或る宗教が多年格別の恩惠に浴し來り、俄に之を取り去るの困難なる場合の如き是である。現に問題になつて居る寺院境内地域拂下の一件の如き、這の見地から論ぜらるべきものであらう。但し之は出來るだけ寺院側で遠慮すべき事項たるは言を待たない。西洋の宗教紛爭は、實に天主教會が從來の歴史的恩惠に慣れ、その不當に惠まれたる地位を其儘維持せんとした所から起つたものである。

(三)國家の宗教政策を樹つるにつき最も戒心すべきは、宗教の私的性質を徹底することである。この點に關し、近代の國家は往々にして幾多の過誤を重ねてゐる。その最も著しきは公認保護政策と指導政策とである。國教制度をとる國は流行に無くなつたが、其の反對に宗教をして國家の用を爲さしめんとする思想が段々多くなつた樣である。而して之は天主教の政治的侵掠を排し、之と勇敢に戰つた國に特に著しいことは、亦注意すべき現象である。

公認保護政策は戰前の獨逸の例が最も著しいものとせられてゐる。我國でも、政府の强辯に拘泥せず虚心に評すれば、神社に對しては正にこの方策を取つて居ると謂て差支はあるまい。

今度の宗教法案に現はれた政府の方針が、私の所謂指導政策なることは一點の疑を容れない。一から十まで、教へ導き、干渉し又監督し、凡ゆる宗教團體が政府の欲するが儘に出來上る樣に仕組まれてあるからである。恐らく世界に斯れ程用意周到な、從てまたこれ程宗教を馬鹿にした方策はあるまい。是れ明白に誤つたる國家主義の弊であらう。教育に就てすら、民間の自由に任すべきを説かるる今日(新潟縣農民學校の禁止の如き亦この點からも大に其是否が論ぜらるべきである)、宗教までに國家の御用をつとめさせ樣とするのは、餘りに盲目的な國家主義の中毒といふべきである。

西洋に於ける文化鬪爭の起因　西洋に於ける文化鬪爭(宗教と國家との爭を一般に文化鬪爭といふ)は、國家の立場より云へば右の原則を一般宗教の上に加へんとする所から

起る。我國などでは、土台宗教は國家に對して甚だ意氣地が無いから、國家の欲する原則は何の障碍もなしに毎々スラ〳〵と行はれる。所が西洋に在てさうは行かぬとすれば、そこには此原則の行はれるに對し大なる障碍の存在することを想像せなければならぬ。而してその障碍は概して天主教會から來るものなるは前にも述べた通りである。十年ばかり前に、私は或る雜誌で天主教會の政治界に於て有する勢力を論じたことがある。之を近日公刊する私の著書の中に收むる積りだから、詳しいことは之に讓るが、根本の點だけを簡單に申せば、教會では神が人類一般を支配する權利を有し、教會が神の名代として、此世に於ける其支配權を預つて居るのであるが、便宜上俗權は之を國王君主に托した、けれども元々人類の生活の規律は、自分の方が第一に支配し得べきものだから、信者に對する教會の命令は、國家と雖も之を尊重せなくてはならぬと主張するのだ。是れ當に近代の國家主義と眞ともに衝突するものではないか。況んや教會の發する命令は、現實に國家の方策と衝突することも稀ならざるに於てをや。所が斯れは、教會の立場からいへば當然の事で、固より無理でも僭越でもない。而して國家からいへば明白に不法の侵害になるのだが、我々局外の者は、教會の方に寧ろ讓歩すべき餘地はあると觀る。だから從來餘りに惠まれ過ぎた其地位を飽くまで維持せんとするのは、甚だ無理だと考へるのである。けれども當事者双方各々其立場を道理と信じて讓らないとすれば、茲に爭鬪の起るは免れない。

斯くいへばとて、教會をば徹頭徹尾無理ばかり通さうとするものだと考へてはいけない。外にいろ〳〵良いところもあればこそ、一方にあれ丈けの無理を云ひ張り乍ら、他方、あれ丈の勢力を押しても行けるのだ。兎に角信徒の教會に對する執着力は、今日に於ても素晴しいものである。それ丈け又反對派から觀れば、教會が憎くて〳〵堪らぬのである。西洋の社會主義者が、教會に對して異常の反感を有するのは之が爲めだ。而して彼等は如何にかして民衆を誘ひ教會から離れしめんとあせる。之が爲め遂に彼等は議論を宗教無用論といふ所まで進めて行つた。之をその儘翻譯して、我が日本にも宗教と社會主義との不兩立を説くものあるが、そは西洋の教會(殊に頑迷なる極端を以て俗衆の精神を縛る所の)に依て代表せらるる宗教を排するのであつて、宗教の本質を否認するのではないのである。故に西洋でも社會主義者はよく宗教の私的性質の尊重(直接間接の國家的保護誘掖の否認)を主張するが、皆が皆まで宗教そのものの否認を叫んで居るのではない。

教會が我儘をいふ。信徒は盲目的に教會の側に立つ。於是文化戰爭の起るは天主教の盛な國に於て免れ難い。今度のメキシコの樣な事件は、二十年來實は佛蘭西でも經驗した所なのである。一九〇六年の政教分離法は、其内容に於てメキシコの新制と根本義に大差がない樣だが、今日に至るも仍完全に行はれて

居ないといはれて居る。發布の當初は、今度のメキシコと同じく、矢張り民衆が教令の周圍に集つて官憲の法律執行を拒んだのだ。警官では制し切れずとて、やがて軍隊を派遣する。所が軍隊の兵士はまた、教令の神聖を擁護せんとて狂奔する同胞を傷くるに忍びずとて、上官の命あるやみな空中に向けて發砲した。更に政府がその指揮官に向つて命令の遂行を督勵すると、良心の命と稱して續々辭表を提出する。丁度戰爭前の英國政府が、愛蘭問題の處置に關し、アルスター討伐軍差遣に手古摺つたと同じ困難に遭遇したのである。困り切つて法律遂行の手を弛めると、今度は議會で怠慢の責任を問はれる。現に政教分離法を勵行せぬとて、政府が更迭を餘儀なくされたこともあつたと記憶する。之等の例を以て見れば、今度のメキシコの紛亂の如きは、獨り同國に特有な現象ではないのである。

從て私のこゝに一つ遺憾に思ふのは、メキシコの當局者は何故佛蘭西の先蹤を省慮し、その經驗を參考しなかつたかといふ點である。或は參考にしたのかも知れぬ。それにしては餘りに佛蘭西の嘗めたと同じ苦痛を繰り返し過ぎて居る。教會の不當を論ずるはいゝ。併し之に處するに自ら道がある。細節に拘泥し徒らに神經を過敏ならしめてはいけないのである。メキシコの役人は餘程日本の役人と似てゐる所があるらしい。

以上論ずる所でも明だと思ふが、私はメキシコ今次の宗教紛亂から我々の學ぶべき二三の點をモ一度次に列擧しておく

一、信仰自由の原則は世界の大勢であつて、且現に我が國憲法の明白に規定する所でもある。是れ斯くすることの理の當然だからであらう。我々もこの原則の文化發達上極めて重要なることを忘れてはならぬ。

二、或る一宗一派に特惠的地位を認めてはならぬ。是れ右の根本原則に背反するのみならず、他日之を矯正するために無用の大苦痛を嘗めねばならぬからである。是れ佛蘭西メキシコの前例に依りて極めて明白な所である。

三、既成宗教が西洋に於て屢々國家の煩累たりしの事實から推して、我國に於ても宗教の取締りを嚴重にすることが必要だと考ふるのは早計である。西洋ではその特異なる歷史に基き、宗教は大に取締るべきものとされて居る。それと全く事情を異にする我國が、皮相的にこの西洋の例に倣ふのは滑稽だ。宗教家に各種の公權を剝奪する制の如きも其の一例であらう。

四、西洋に於ける既成宗教が國民文化の發達に逆行するの事實を目して、宗教その者の無用を說くも亦大なる輕率である。社會主義者の或る一派は、昔は宗教の支配した時代、その次に軍國主義の支配した時代が來た、今は即ち科學の支配する時代だなどといふ。一寸尤もらしくも聞へるが、それは宗教を其の本質に於て見ず、幼稚なる迷信としての形に於てのみ觀るものたるは言ふまでもない。斯かる皮相的形式論に誤られぬ反省心することも亦必要である。

小題雜感

支那と露西亞と日本

支那の國民軍は露西亞の援助を受けて居る。同じく露の援助の下に優勢を謳はるる廣東の一味は、昨今北上して遠く國民軍と連絡せんとするものの如くである。國民軍は奉張聯合軍に追ひ詰められて遠く西北の一隅に屏息して居る形にはなつて居るが、全く之を剿滅するの不可能な事は云ふまでもなく、早晩勢を盛り返して却て主客顚倒の形勢に變らぬとも限らない。而して支那の青年の大多數が擧つて奉張以下軍閥の專恣横暴を憎むこと甚しく、心中切に國民軍の頽勢挽回を禱り、更に進んでその大に成功するあらんことを冀望しつゝあるは明白なる事實である。之は我國將來の利害に取て如何の關係を有するか。孰れにしても、我々の之を好むと好まざるとに拘らず、支那の事變は今日正に右述ぶる如き實狀を呈して居るのである。

國民軍が援助を背後の露西亞に求むるの事實を見て、その赤化を憤る人がある。先づ赤化を求めて後ち援助を得ることになつたのか、援助を得た結果自然と赤化するやうになつたのか、其邊はまだよく分らぬが、一方にはまた、援助は受けたが赤化はしないといふ說もある。此說も實は一應疑つて見るの必要はあると思ふ。強て支那の赤化を掩うてやる必要はないが、事態を正しく理解する爲に、一應斯く疑つて見るのは、我々に必要な筈だ。何となれば我々も過去に於て同じ樣な關係を支那と有つたことがあるからである。

× × × × ×

日本も昔し支那の革命黨を大に助けたことがある。助けた人達の腹を割つて見れば、眞に革命に同情せるもあり、面白半分なるもあり、爲にする所あつての上のもあり、また實は日本そのものの爲に圖らんとするものもあつたらう。併し支那側の人達は、唯單に自分達を援けるといふ仁俠的同情の外何物もないと信じて、快く各種の援助を受けたのであつた。斯くして日本と支那の革命青年との關係は段々深くなつて行く。支那の青年が第一革命に成功したのも、一に日本の援助があつたからではないか。之れ程深い關係あつたに拘らず、其後の日本の態度が少しく變になると、彼等はすぐ自分達を利用するんだと疑ひ出

し、翻然としてその態度を一變した。以來彼等は日本の一擧一動に極度の猜疑を寄せ、昔日あれ程の厚情を受けたに拘らず、今は忘恩と罵らるるまでの反抗的態度を我々に示す樣になつた。於是私は思ふ、彼等は餘りに自國本位的である、どんな援助を他に受けても、結局自家の立場は毫末も讓らぬといふが彼等の眞面目であると。此點に於て日本は寧ろまんまと彼等に利用せられたわけになる。今日彼等の露國より受くる援助の程度は、到底昔日日本より得た大援助とは比較になるまい。我に對してすら遂に自國の立場を失はなかつた彼等が、今日少し許の援助を得たのに喜んで一から十まで露西亞のいふことを聽くとは、どうしても考へられない。斯うした關係に基いて露西亞が新に種々の便宜を獲得することはあらう。が、之に由て露西亞が支那を完全に自家藥籠中のものたらしめ得べしと考ふるは、支那を知らざるの甚しきものである。昨今の露支關係を論ずるものが、過去に於て我々の嘗めたあの苦い經驗を少しも反省しないのは、**如何したものだらうか。**

×　×　×　×　×

支那の青年が昨今露西亞に同情を寄するの事實も亦蔽ひ難い。併し之を以て彼等が自國の露西亞の如くならんことを欲し、少くとも一にも二にもその指導を蒙らんと欲するものと爲すは早計であらう。恐らく今日彼等はまだ十分に露西亞を解しても居まい。而も之に同情を感ずるのは、畢竟國民軍の後援者なるが爲めであらう。つまり坊主が好きだから袈裟まで好きなのである。事程左樣に國民軍は多數青年の輿望を負うて居ることを看過してはならぬ。而してそれは又何故かといふに、一に軍閥討滅の使命を帶びて起つたと信ぜられて居るからに外ならぬ。事程左樣に吳張以下の軍閥は蛇蝎の如く憎み嫌はれて居ることに注意せなくてはならぬ。若し眞に軍閥の討滅を圖るものなら、それは無條件に國民多數の信望を得る。國民軍たると否とに拘はらないのである。又其事に當る者を現實に援助する者あらん乎、それはまた直に國民の同情を買ひ得る。露西亞たると否とを問はぬのである。故に支那の青年が露西亞に同情を表はすのは、寧ろ軍閥憎惡の反映と觀るべきであつて、之が爲に支那の赤化を苦慮するは、甚だ失當の見解でないかと考へる。若し夫れ支那の赤化を救はんとの口實の下に、國民軍討伐を標傍する**吳張一派に左袒するが如きことあらん乎、それが餘りに支那青**年の熱望を無視するものたるは、多言を要せずして明である。

×　×　×　×　×

國民軍が特に露西亞の援助を甘受して居るの事實から、兩者間に於ける思想的連絡を推測するのも、我々の經驗に徴して

た容易に肯はれぬ。昔支那の革命運動は、徹頭徹尾日本から援助を仰いだばかりでなく、多數の日本人を聘して其の指揮官とさへした。外國人の眼から見たら、支那人を雇兵とした日本人の仕事と思つたかも知れない。併し之に依て支那の人はどれ丈け我々の希望を容れて呉れたか。一つには日本人側の淺慮の爲めもあつたらうが、要するにあれ迄に打込んだ援助も、結局は砂上の樓閣に過ぎなかつたではないか。國民軍の露西亞に對する關係は、果して之とどれ丈け違ふだらうか。

加之強て同情を以て考へれば、國民軍が露西亞の好意にすがつたのにも、若干諒とすべき事情がないでもない。云ふまでもなく、赤手空拳では軍閥は倒せぬ。何處からでも可い、先づ金と武器との豐富なる供給を得なければならぬ。之を得る爲めには、少し位の利權の讓與は固より已むを得ぬのである。この點は清末の革命青年に在ても全然同一であつた。而して昔の青年は、この要求の滿足を日本に於て充したのだが、今日の日本は、不幸にして支那青年の多數の希望に反し、何れかといへば寧ろ軍閥に好意を表する樣に見ゆる（少くとも支那の人々は斯く信じて居るのである）。日本以外を探して見ても何處の國も容易に相談に乘つて呉れぬ。加之國民軍の場合に在ては、其の居る處の地位が遠く海港を離れて居る爲め、縦令外國より物資を買つたとしても、途中で反對派から奪取される心配がある（現に馮玉祥は屢々斯の經驗を嘗めたと聞く）。さればどうしても背後の露西亞に秋波を送るの外に途はないのである。此點に於て彼等は、軍資武器の供給を求むるについて、選擇の自由が與へられて居ないものと謂はなければならぬ。その反面に於て、彼等の一派が西北の邊境にあゝして活躍を續けて居る以上、何と云つても、露西亞から相當の援助を得て居るの事實は、到底隱すことは出來ぬ。

× × × × ×

斯く考へれば、我々が國民軍と露西亞との連繋に過當の掛念を感ずるのは、少しく輕卒だと云はなければならぬ。之を怖るべきものとなして呉張一派の軍閥に好意を表するが如きに至つては、啻に無用の業たるのみならず、支那民衆一般の輿望を無視するの甚しきものたるは申すまでもない。無論彼方を助けたり此方に邪魔したり、少しでも干渉の嫌ある行動は此際嚴しく愼まなくてはならないが、彼國民衆多數の期する所に對しては、隣國の誼として我々大に尊敬を拂ふべき義務がある。わが對支政策は、その重要な一素因としてこの基本に立つべきことを忘れてはならぬ。支那の希望を尊敬し、露西亞とも好誼を進めつゝ、東洋に於けるわが日本の立場をも十分に伸ばし得べき方策は、

一體立ち得ないものであらうか。

團體運動に於ける首領と大衆

最近或る人の書いた英國炭礦爭議批判の論文中に、「英吉利ほど訓練のある立派な勞働者のマッスを有してゐる國は外にないが、又英吉利ほど質のわるい勞働運動の首領を戴いてゐる國も外にない。而して質がわるくとも一度親分に推されると、彼はいつ迄でも其地位を去らないで居れる。之は同國の美點でもあり又缺點でもある。云々」の一句を讀んだ。更に彼はこの點は政治界でも同樣で、露西亞や佛蘭西とは餘程趣が違ふと云つて居る。この觀察は實によく英國の社會を言ひ當てゝ居ると思ふ。但しその解釋に至ては、私は必しも筆者と同一ではあり得ないやうだ。

英國に於ける勞働運動の首領は（政治界に付ても同じ事が云へるが）、筆者の言の如く質が惡いと云ていゝかどうか分らぬが、必ずしも自分の背後に在る多數の輿論に盲從せぬことだけは確實だ。現に筆者は、今度の爭議で勞働者側が負けたのも、主としては首領連の弱腰の爲めだと說いて居る。所謂「指導者の裏切行爲」は從來でも勞働者側の敗因を爲して居るのださうだが、果して然らば、あれ程訓練の行屆いた英國の勞働者が、何故斯うした不都合な首領連の統制に甘んじて居るのかが分らなくなる。露西亞や佛蘭西の樣に、「主義主張の違ふ首領は弊履の如く捨てゝ、首のすげ換へ」を何故斷行せぬのだらうか。之を筆者は、英國人の「血の廻りの惡い素質」に歸して居るが、この解釋は、私の見る所では、全然間違ではないにしても、どうも十分な說明とは云へぬやうに思ふ。

どんなに血の廻りの惡い勞働者でも、あれ程の苦痛を忍び、あれ程の大事件を敢行した程の者が、自分達の生死に係る大問題の處理に關し、自分達に裏切つた者をば、平氣でいつまでも自分達の首領に仰ぐ譯はない。然るに事實現に首領に仰いで居るとすれば、之には何か外に相當の理由がなくてならぬ。單に血の廻りのよしあしを以て片付けるには、こは餘りに重大な問題である。

×　×　×　×　×

私は斯う考へる。

（一）英國の勞働者は、自家の利益の判斷につき、又は之に關する行動の方針につき、概して各自相當の見識を有つて居る。此點に於て彼等は他に其類例を見ざる程高度の發達を示して居る。

（二）けれども團體的行動を爲しその爲に指導者を立つる場合

に於ては、彼等は間接に自家の見識を以て指導者の進退を監督はするも、直接には其指導者の才能品格を信頼して彼れに完全なる自由を認める。縦令その結果がかねての豫期に反しても、信頼を與へた人の誠意には疑を挿まずして、一旦は兎も角も承認する。人格的信頼を外にして、單に主義主張の相違位の理由で輕々しく首領を取り換へることはしない。

（三）斯かる風習の自然に生育したといふ反面には、首領に擧げらるる程の者は、如何なる場合にもその信認に背かず、縦令所見の相違に因り多數の希望に反することとあつても、その誠意の疑はれる樣のことは絶對にせぬといふ繼續的事實の存在を暗示する。首領が時々平氣で大衆の輿望に反する行動に出つるのも、畢竟確信を枉げて周圍に阿らず、一に其の信ずる所に忠ならんとするの結果なのであらう。

要するに、英國の勞働者は個々の意見としては隨分八釜しい議論をする。併し或る人を賴んで指導者に戴くといふ場合には、その人の主義主張よりも、先づ信認に値すべき人格なりや否やを見る。主義主張も固より大切だが、もツと不變的な人格に着眼するので、英國の團體運動には底力があるのである。主義主張ばかり八釜しく云つて從つて首領が猫の眼の樣に變るのでは、有力な團體の出來るものではない。同じ事は勿論政治上の事に就てもいへる。

×　×　×　×　×

附言　私は甞て我國には大政黨は發達しないと云つたことがある。大政黨の發達には、領袖と黨員との間に意見と利害との有機的關係が存するのみならず、又相互信頼の微妙なる人格的連鎖が無ければならず、而して殊に此後者が全然我國に缺けて居ると考へたからである。人或は我國にも現に大政黨があるではないかと反問せんも、併しそれは金で縛り固めて出來た政黨で、自然に發育したものではない。故に民衆の覺醒に伴つて段々政界の腐敗が淨めらるれば――即ち今日の政治家を縛つて居る金の威力が切れれば――政界は忽ち神經過敏な感情と時に應じて轉變する主義主張との支配する所となり、遂に四分五裂を免れぬことになるだらう。小黨分立の弊より免れんと欲せば、この點に就て今より大いに戒心する所なくてはなるまい。

小黨分立の形勢

前項末段に論ずる所にして誤なくんば、日本政界の將來の運命は殘念ながら小黨分立である。所が最近我國の政論界には、佛國の近狀などを引いて、頻りに小黨分立の怖るべきを說くものがある。小黨分立になるのが怖いからとて、譯もなく政本合同に

賛成する氣には無論なれぬが、我國に於て眞に小黨分立の弊を避けんと欲せば、實は前項述ぶるが如き特殊なる根本的省慮を必要とするの外に於て、なほ分立するを許さざるべき小政派が衆議院の外にも澤山あるといふ事實をも、何とかしなくてはなるまい。之を放任しておいては、衆議院だけが二大政黨の對立となつたとしても、我國の政界は決して所謂大政黨主義の効果を擧げ得ぬからである。

一般の立憲國に在ては、重要なる政治問題の解決は大抵議會の內部できまる。之を外にして重大な影響を政界に及ぼす勢力はない。そこで其の圏內に於ての「問題の解決」を單純ならしめようとて、二大政黨論が起るのである。故に若し問題の解決が議院內できまらず、他に之に影響を與ふる大勢力があるとすれば、之をも包含した大きな圏內で、二大政黨云々の問題が論ぜられなければならぬ。所で我國の政界を見ると、議院が問題解決の一大要因たるは疑ないけれども、其外に樞密院もあれば軍閥もある。貴族院も亦其一に數へて差支あるまい。之等の勢力は、他國に於けるが如く單なる牽制作用を爲すに留らずして、往々にして問題の決定を現實に左右し、時としては亦獨立の國家的行動を敢てすることさへある。故に此儘では、衆議院の政黨が假りに厖大な唯一黨派となつたとしても、事實に於てはまだ完全に小黨分立の域を脱せぬものと謂はなければたらぬ。

故に私は曰ふ、日本の政界を小黨分立の弊より免れしめんとせば、樞密院貴族院及軍閥等の實際に有する政治的勢力を如何に處理するかも亦、先決問題の一たるを失はぬと。而して次手を以て更に一言の警告を附け加へておきたいのは、最近の大政黨促進論の中には、其結果却て下院以外の政治的勢力の振張を促すものもあること是である。

愚劣なる政黨員の好標本

八月十日頃の新聞に、憲政會に屬する長野市の市會議員某々をはじめ二十數名の黨員は、連署して脫黨屆を出したとある。その理由は、過般の騷擾事件に對する本部の態度が氣に入らぬのと、多大の損害を被つた何某に對して何等慰藉の方法を講ぜざるのみか見舞の言葉すら述べぬ、その冷淡に憤慨したのに在るといふ。マサカそんな馬鹿な話ではあるまいと思ふけれど、若し事實さうだとすれば、天下に凡そ之れ程愚劣な政黨員はない。

彼等の脫黨騷ぎが假令モ少し筋の通うつた理由から來たのだとしても、それが要するに我國政黨の如何につまらぬものなる

かを示すに止るは言をまたぬ。何故かといふに、

第一、之に依て我々は、今日の政黨員の出所進退が如何に下らぬことに因て決せらるるかを見せ付けられるからである。彼等の脱黨理由は、どんなに高く買つてやつても、畢竟地方問題に過ぎぬではないか。之に付いて格別自分達の利便が顧みられないとて、それは天下の大勢に何の關係がある。思ふに彼等は、政治上もと何の識見あるに非ず、將來に於ける何かの利便を期待して政黨員となつたものであらう。而して今次の事件に關し、交換的に來る筈の利便が來なかつたのに憤慨し、扨てこそ冷淡呼ばはりするに至つたのであらう。之で腹を立てる奴も怪しからぬが、一體斯んなものを驅り集めて政黨で御座ると濟まし込む憲政會の氣が知れぬ。

第二には、之等の事情よりして我々は、今日の所謂大政黨が地方的利害の問題で過當に惱まされて居るべきを想像することが出來る。一體本當の政黨は、地方在住の有象無象などを相手にすべきものではない。然るに日本の政黨は、地盤などと稱して、之を虎の子の樣に守り立てるといふ基礎の上に不健全な發達を遂げて來た。そこで時々地方の有象無象に脅かされては、心にもなき方策を餘儀なくされるのである。甚しきは、之が爲に國家全般の利益をさへ犠牲にさせられることもあるといふ。而してこの馬鹿げた威嚇から免れんが爲に、また各種利權の提供を以て豫め田舍政客を釣つておくといふ事實もあるのだから堪らない。だから結局は、無事であつては暗密の腐敗が想像され、波瀾があれば露骨に愚論が跋扈するといふことになる。何の道政界健全の進歩を阻害するものたるに間違はない。

第三には、所謂主義主張の重大問題を以てすら英國邊の政黨は容易に動搖せぬのに比して、一片の感情一片の虚榮の爲に出るの退くのと騷ぐ我國黨界の、如何に低劣愚昧なるかに今更ながら驚かされるのである。此點に就いて前二項に論ずる所と對照して讀者の切に省量を加へられんことを希望する。

最後に一言しておく。私が愚劣の一言を以て罵倒を浴せるのは、單に長野市の憲政會員だけを目指すのではない。偶ょ彼等が代表して現れた我が日本今日の政黨員全部を目指すのであることは勿論である。

公設質屋の奬勵

内務省社會局の最近の施設のうち、特に私共の大に意を強うするものは、公設質屋の奬勵である。何となれば眞に下層階級の低利融通を受くる途は、之を措いて外にあたりないからである。

民間から零細な金を集めて出來た貯金部邊の資金が飛んでもない方面に使はれてゐた事實は、先年來世上の物議を釀して居た。之からはあんな放漫な貸出はやまることと思ふが、併しそれが其本來の趣意に從て本當に下層階級の利用に提供さるるやは、未だ〳〵心元ないのである。放漫な貸出は廢めても、結局之を利用するのが都鄙の中産以上の者だとあつては、甚だ面白くない。尤も之等の金の向けらるる方面は多種多樣であり、而して下層階級も固より其結果として恩惠に均霑はするだらうが、併し最も多くそのお蔭を蒙るものは、何と云つても中産以上の階級だ。殊に低利資金の融通の如きに至ては、中産どころか、可なり上の方に屬すべき階級にさへ蠶食されて居ると聞く。そこで若し低利資金の社會的效用を大に發揮し、眞に下層階級も事實その恩澤に十分浴する樣にせんには、別に下層階級のみが之を利用し得る底の特殊な設備をすることが必要だと思ふ。蓋し「下の者」も來い「少し上の者」も拒まないといふのでは、やがて皆其の「少し上の者」に獨占されてしまう。之等の者の來れぬやうにして置いてこそ、始めて下の者は救はれるのである。此意味に於て私は公設質屋の發達を大によろこぶものである。況んや此設備を外にして下層階級の金融の途は殆んどないと謂ふに於てをや。

但だ内務省の奬勵に拘らず、今日まで此制度の發達の頗る遲遲たるは遺憾の次第である。大正元年この制度の出來てから今日まで、創設せられたもの僅々四五十にとゞまり、内務省が之に融通した資金も百十餘萬に過ぎぬとやら。當局の奬勵が熱心でなかつたのか、地方團體が其必要に目醒めなかつたのか、孰れにしても甚だ怠慢の嫌なきを得ぬ。眞に下層階級の生活向上の爲めを思ふなら、之などは住宅補助よりも公設市場よりも否何事にも增して必要な施設だと思ふ。今や内務省は更に大に此方面に努力すべしとの報道に接する。喜んでその實現を期待すると共に、施設の上にも十分の注意を拂ひ、監督を確實ならしめ、以て一層の美果を擧げらるるやう切にお頼みする。

永年難治の習慣も忽ち改まる

簡易な禁煙方法

驚くべき「カロット」の効力

昨年三月五日の讀賣新聞はポー型の天才富ノ澤麟太郎氏の死を報じてゐるが、その後に『彼の生命を奪つたものはバットではないかと思はれる。彼は一日に十三箱も吸つてゐたからだ』とある。バットの十三箱とは聞くだに物凄い。兎に角、煙草の害は過度に用ふるに依つて起ることは事實だが、吸つてゐる中に段々多量に吸ふ樣になるので、不知不識の間に身體を惡くしてゆくものである。煙草を止めると云ふ言葉はよく聞くが、絶對に禁煙したと云ふ人は餘り多くない。それは如何に禁煙が困難であるかを物語つてゐるもので永年の習慣は容易に改まるものでない所が、茲に面白い一つの禁煙方法がある。「カロット」を一度口にすれば煙草を用ゆるに少しも異ならないから手持無沙汰でないばかりでなく適量の朝鮮人蔘の精氣を含んでゐるから根氣をよくすると同時に温雅な香氣と忘れ難き清凉な甘味は、輕い刺戟と快感を長く口中に殘して、一度之を口にすれば煙草に對する永年の嗜好を忘れて斷じて二度と吸ふ氣になれない。殊に口中の惡臭、又は食後や夜中口の中がねばる時に用ゆれば忽ち爽快になり、暫く常用すれば永年のニコチン中毒も完治する効力がある。但し、これは眞劍に煙草をやめようとするのでなければお勸め出來ない。何故なら再び煙草がまずくて吸へなくなるからである。是は實業之日本社あたりでも實驗して此効力に驚いてゐるのでわかる。煙草の害を知りつゝ永年禁煙出來なかつた人、神經衰弱、慢性胃腸病消化不良その他禁煙したら乾度肥つて身體を改造し得るだらうと感じてゐる方は是非一度カロットを試みられるが良い。大倉男爵の大阪朝日の村山社長との禁煙の約束なども面白い一例である。



讀書放浪

魯庵生

（1）西行芭蕉の行脚生活

私は曾て西行や芭蕉の行脚生活を憧憬した事があつた。今でも時折、出來るなら小さな書架と机と寢臺を設備する自動車を移動書齋として、往く所へ往き駐まる所へ駐まる贅澤な鴨長明を空想する事がある。

が、私は握飯を腰につけて草鞋で山河に行吟する脚力も體力も持たない。且安逸に馴れた都會人だから樹下石上は扨置いて、屋根の下でも蚤虱馬の尿する枕もとの宿りには一夜でも堪へられない。西行や芭蕉の風雅な旅を興がるのは空想だけで、實行には躊躇する。矢張疊の上で名所圖會と首ツ引きして室内行脚をする方が草鞋の豆を作るよりは自分の性に合つてる。

だが、放浪の興味は持つてをる。芭蕉や西行がドレほどエライかエラタないかは措いて、行衞定めぬ旅の空に昨日は東けふは西と流浪した斗擻行脚を面白く思ふ。同じ放浪の旅でも、紛失したお家の重寶を探す爲めとか、親の仇にめぐり會う爲めとか、乃至は武者修行とか靈場巡拜とかいふなら富山の藥賣と五十歩百歩であつて、何の目あても慾得もなく、行き當りバッタリに出會つた山川の勝を眺め歴史の跡を弔ひ、道草を喰ひ〳〵旅から旅と經めぐる處に西行や芭蕉の行脚の興味はある。功利的に見たなら西行や芭蕉の旅は地理學上の探檢をしたでも歴史上の發見をしたでも無い無益の閑潰しであつたが、何の目的も無く行脚其物を樂んだ處に西行や芭蕉の風流がある。

（2）讀書放浪

脚力も健康も無い上に無精で横着な私は行脚の代りに夙くか

ら讀書に放浪した。マダ五ツ六ツのイロハも碌すつぽ讀めない時分から繪本を片時も離さず手にしたり懷ろにしたりしてゐた。夫から以來何十年書籍の間に埋もれてゐるが必ずしも讀むのでは無い。勉强するのでは無い。特急の汽車で晝夜兼行する飛脚屋のやうな讀書は餘り好きで無いので、晴行雨留、折々は迂回したり岐路に入つたりして道草を喰ひ〱日程も目的地も定めずに轉蓬する西行や芭蕉の行脚のやうな讀書を私は樂んでをる。

讀書が勤學であるやうに解されたのは昔の道學先生の學究觀で、讀書は實は享樂である。少くも私の讀書はソンナ窮屈な肩の張るものでは無くて、怠け者の怠け仕事である。私が青年時代から讀書に浸つたのは學問をする爲めでも立身出世をする爲めでも無かつた。「好き」であつたからだ。上戸が酒を、下戸が餅を欲する如くに、「好き」といふ外には理由もヘチマも無かつた。今でも矢張「好き」であるから相變らず讀書に浸つてるんで、讀書々々と押廻すのは勉强家振り學者がるやうで恥かしいが、私のは芝居へ行つたりラジオを聽いたりすると同じ道樂で、勉强でも學問でも無い。隨つて讀書の內容を平たくブチマケルと功利派からは譏面され經世家からは輕蔑され道學先生からは顰蹙されるものが大部分を占めてをる。私は

（3）讀書の享樂兒

であつて、錐を股に刺したり圓木を枕としたりして睡魔と鬪うといふやうなソンナ苦しいものとは讀書を思つてゐない。眠たくなるやうな讀書ならしなくてもイヽので、功利的に見ても、睡たいのを我慢して居眠りをしい〱書物に噛りついたつて頭の肥しになるもんぢやア無い。興去れば止め、興來れば復た披卷し、區々方則に俘はれず、杓子定規の日程に縛られないで隨興隨讀、十日一冊五日一篇も可、興熱する時は一日數篇數冊も亦可ならん。正座、横臥、音讀、默讀、遍讀、抄讀、細讀、濫讀、時に應じて宜しきに從ひ、一々繩墨に規矩されず、欲するまゝに亂抽亂讀する。私は

（4）書齋のヴワガボンド

であつて、朴々たる好學の君子でも又焚膏繼晷の勤學の書生でも無い。私のは唯の濫讀である。喰へども味を知らさるくせに鱈腹頰張る牛飲馬食の讀書生である。

目私は書籍を必ず讀むものと定めてゐない。入手即時一氣に通讀して了うものもあるが、多くは先づ鑑賞愛撫するに數日乃至十數日を空過する。表紙や裝幀を眺めたり、插畫や印刷面を

反覆して味はつたり、そこはかとなく披いて隨所に數行づつを漁つて拾ひ讀みする。其間の樂しさは丁度眞綿に包んだ寶石を上からソツと撫でるやうな快よい焦燥とヤンワリした輕い緊張を感ずる。

且、名著なれば名著なるほど一氣に讀んで了うのは惜しいやうな氣がする。毎日ボツ〳〵と數日以上に渉つて出來るだけ長く樂みを續け、漸く讀畢つて吻と息する時の輕い勞れの快よさは云ふべからざるものがある。丁度兒供が菓子を喰べるに一番ウマさうなものを最後の樂しみに後廻しとしてチビリ〳〵と少しづつ味はうやうなものだ。上戸が酒を賞味するに五斗兵衛のやうに一氣に大杯を傾けるも小氣味いゝが、ホントウの酒の味ひは小さな猪口をチビ〳〵と嘗める處にある。讀書の興味も亦恰も之に類してをる。

書籍に由ては絕えず繙展して隨所を拾ひ讀みしながら終に一回も全部を通して讀まないものがある。中には一と月も二タ月も座右に置きながら一行をだも覗かないものがある。且即時に通讀する興味を沸湧したものでも讀畢つた後は素然として棚の隅へ抛り込んで了うものもあるし、一回だも通讀する興味が湧かないものでも容易に座右を離しかねてイツマデも身邊に置くものもある。書籍に對する私の興味は時と場合で區々であつて必ずしも一定してゐない。

（5）我が一家の讀書法

一體私は書籍を架上に列べたり堆かく積んだりして瞻めるよりも身邊前後に狼籍さして置くが好きだ。殊に新刊書を机邊三尺の間に雜陳し、新らしいインキや紙の臭ひを齅ぎつゝ、鮮かな裝釘の美くしい色彩を瞻めつゝ、行當りバツタリに亂抽濫讀するを快とする。好著と信ずるものを必しも即讀するのでは無い。愚書と思ふものも亦必ずしも放擲し去るのでは無い。偶然に寄贈された無名の著者の著述で接手即時に讀むものもあれば久しく待草臥れた名士の名著で、飛付くやうに買つて來たものでも本屋の包みのまゝにイツマデも放たらかして置くものもある。

恁ういふ放縱なダラシの無い讀書は著者としては迷惑でもあらうし、腹立だしくもあらう。書店で求めたものなら左も右くも、特に寄贈されたものを二タ月も三月も放たらかして置くは著者に對して申譯が無いと思ひつゝも放たらかして置く事がある。

だが、私は書籍を讀む以上に鑑賞するが好きである。新刊舊刊に限らず新收の書は常に座右に置いて暫らくも離さず、日夕愛

撫し或は抄讀して著者を知ると否と、寄贈されたと否との別なく我が愛書趣味を飽滿せしめたを著者及び發行者に感謝する。西行や芭蕉の行脚生活に同感する私は行雲流水を追ふ代りに書齋の中を彷徨して、手に任して隨興隨讀するを快とする讀書のヴワガボンドである。

（6）出版界近年の大豐作

去年から今年へ掛けて出版界は近年の大豐作である。單に數量ばかりでなく、名著大著といふべき努力の勞作が續々發行されたは明治大正年間の一レコードである。

私の書齋――書齋といふやうな風雅な名稱よりは書物部屋、書物部屋といふよりは建具屋や指物師の鉋屑の代りに原稿紙の書き損じが年から年中散らばつてるホコリだらけの狹苦しい仕事部屋も名著大著に溢れてゐる。多くは知己の著者や發行者から惠まれたものであるが、乏しい財嚢の底を掃いて求めたものも亦少なくない。ドレも之も名什好著で容易に座右を離しかねるので、左らぬだに群籍を積んでる座邊は愈々狹隘となつて、僅に膝を容るゝの餘地を剩す外は手足の伸ばし場も無くなつて了つてる。

だが　私の貧弱の書齋はお庇で名著大著で光つて　窮乏老書生の生活を忘れて讀書子の幸福を恢はしむるものがある。單に書名を列ぬるだに猶ほ數十行を要するが、殊に其の重なるものを二つ三つ學ぐれば、例へば沼田氏の『日本紋章學』、古賀氏の『長崎市史風俗篇』高野氏の『日本歌謠史』等、何れも數年乃至十數年の苦辛慘憺の結晶である。序述の組織的にして綱目の整然たる、資料の豐富にして巧みに按排整理されたる、考證の細緻的確なる、考察の犀利鋭敏なる、何れも先人未着手の題目を捉へて周匝洽博到らざるなき厖然たる大著を完成してをる。此の如きは數年乃至十數年に一出する劃期的大著述であつて、其中の一篇が發行されても出版界の偉觀であるに、之を首として各各相對角下らざる雄篇大著が續々刊行されるといふは明治大正六十年間を通じて曾て見ざる文獻の大豐作である。

私の小さな書齋には是等の近刊名什のホンの僅かしか集まつてゐない。夫でも豫約叢書と若干の新刊西書とを加ふれば數十冊が背中を列べて座傍を埋めてをる。其間に踞して前後左右を顧る時は恰も名著のオリンピック競技を見る心地がする。恁ういふ見立ては篤學なる著者の鞭撻する處であらうが、座右の近刊のドレを見ても内容の豐富なるは厖大なる冊子に盛り切れないほど充實し、著者の精悍と緊張とは一行一句の末にだも充溢して丁度競技に臨む瞬間の選手を憶はしむるものがある。且著

者の多くは相識であるから、個々思ひ〳〵の裝釘をした著書と相對する時は恰も熟面の選手の武者振勇ましい出場を目送する感がある。

『相撲取ならぶや秋の唐錦』 堂々たる學界の名士の心血を注いだ名著を運動選手や相撲に喩へるのは非禮であるが、厖然たる大冊がドッシリした背中を列べて林立す狀は「ならぶや秋のからにしき」の句を懐ひ出さしめる偉觀である。

恁ういふ好什名著が一時に頻出したといふのは畢竟するに學者の研究題目が公衆の知識的興味と相接近し膠着する機運に向いたからである。學者の研究が如何に學術的に貴重であつても公衆の興味と相容れないものは容易に印刷される機會を持たないので、此の如く名著大著が學會の報告としてゞなく尋常書肆の出版物として發行されるといふは、取も直さず日本の公衆の平均知識線の向上を證明するものである。

實を云ふと日本の文化百般はマダ知識的に研究されてゐない。有らゆる方面を通じて文獻の備はらざる題目は數多くある。現に我々の周邊に學者がマダ少しも手を着けてゐない問題が擇りどり見どりに轉がつてをる。學者が廣く資料を採集し、組織的に整理し細究して文獻の缺けたるを補足し、或は先哲未言の新見を拓いて學術上の紀元を劃すべきは之からである。且之までは讀書界が狹隘であつて學者の苦辛した大著は尋常書肆の算盤からは往々出版を難んじたが、讀書界近年の膨脹と、讀書趣味最近の昂上とは此種の特殊の大著をも容易に市場へ送るやうになつた。上記の沼田氏以下の大著述が普通の書肆に由て出版されて、シカモ各々相當の成果を擧げたといふ如きは出版界近時の消息を語るもので、名著大著が之から以後續々市場へ送り出されるのは豫期し得られる。我々は日本の文化の爲め深く之を慶祝せざるを得ない。

（7） 十數年前の讀書界

十數年前の春、私は或る新聞社から讀書界の趨勢なる問題を課せられた事があつた。劈頭第一に先づ喝破したのは、日本に讀書界なるものがありやといふ疑問であつた。成程、日本には小説好きがある、雜誌好きがある。雜誌屋の店頭に安價な文藝雜誌や婦人雜誌が山と積まれ、毎日の新聞には流行の人氣小説や家庭の讀物の新刊がシツキリなく廣告されてゐる。が、是等のお客さんは主として青年士女であつて、當時の所謂讀書界といふは運動競技と同じく專ら青年の領分に屬してゐた。隨つて書肆の目標とするは青年であつて、青年向きならざるものは日常實務の參考、或は厚生利用を資するものでなければ出版を躊

踏した。讀書と大人とは殆んど沒交涉で、書肆や圖書館は青年で埋めても老壯讀者の隻影をだも見られなかつた。尤も古書を喜ぶ所謂愛書家の多くは大人であるが、愛書家は古版の骨董的趣味家であつて讀書とは交涉しないのである。

日本に讀書界が有りやと私が反問したのは此理由からで、安價な私小說や心境小說や、低劣な探偵小說や冒險小說や、學術的にも藝術的にも思想的にも箸にも棒にも掛らぬ駄文藝を喚呼する野球のフワンに等しい小說好きや雜誌好きの青年男女の集團を稱して讀書界と呼ぶことが出來るだらう乎。低級愚劣な婦人雜誌や所謂大衆文藝物（其頃には然ういふ名稱は無かつたが）が何十萬の讀者を持つてゐやうとも讀書界の存在を主張するには小說雜誌以外の讀物が餘りに劣弱過ぎてゐた。所謂小說好きも雜誌好きも讀書家の一部には違ひないが、單なる小說好きや雜誌好きの青年に代表せしむる讀書界は餘りに微弱で心細さを感ぜざるを得ない。

話は少し支道に走るが、爰で些か說明を要するのは

（8）　讀書とは何ぞや

の問題である。一體讀書といふは必要以外の興味のための涉獵を云ふので裁判官や辯護士が六法全書や判決例を、學校の先生が教師用の參考書を、醫者が臨床必携や診斷學を商賈人が會社要錄や株式高低表を反覆するのは讀書では無い。之と同樣に數學家が數學書を、電氣技師が電氣書を、教會の牧師が聖書を讀むのは讀書では無い。又一家の主婦が婦人雜誌の兒供の育て方や病氣の手當や家事裁縫手工や、洗濯や、シミ拔きや、漬物の祕傳を讀んだり、學校の兒供が教科書の復習をしたりするのは讀書ではない。

總て何に由らず自分の業務に交涉するものを讀むのは必要に餘儀なくされるので讀書其物を樂むのでは無い。然ういふ讀書は朝から晩まで書籍と首つ引きをしてゐても、（業務に熱心な勤勉家とは云はれるが）讀書家とは云はれない。本と〳〵が讀書に對する興味が無いのだから、必要が無くなれば直ぐ止めて了う。

讀書といふのは兒供がお伽噺を、小說好きが新聞の續き物を貪るが如くに何を措いても、三度の食事を二度に減らしても、食膳に向ふ束の間も書籍を離すのが惜まれるほど興味に牽かれる欲望を云ふ。書籍を嗜む色慾口慾の如くして初めて讀書家であるといふ事が出來る。

然るに日本では、（所謂小說好きが小說に對する場合を除き、）讀書を學校の課目の如くに考へて、學校を離れたら最期、大き

り書籍とは終切りになつて了ふ。新聞や雜誌で能く各方面の名士に徴して愛讀書や良書を質問する事があるが、名士の答案の大多數は學校時代に餘儀なく讀まされたり聞嚙つたりした書物を擧げるのが紋切形である。渠等名士は新聞雜誌社から讀書家の檢定試驗をされて首尾よく落第してをる。恐らく渠等は學校を離れた後は業務に交渉するもの丶外は書籍らしい書籍に手を觸れる事が殆んど無いだらう。中には業務と交渉するものすらも見ないものが有らう。電話の番號か汽車の發着時間でも調べる時の外は滅多に頁をメクル事の無いのが日本の所謂名士である。

夫も書物に緣の遠い事務員や商賣人なら是非も無いが、讀書を仕事の一つとすべき筈の學者階級が存外知識的欲求に缺けてをる。所謂篤學といふは古書に沒頭する謂で、渠等の中には二六時中古書を離さず章句を摘んで暮すものがあるが、新著となると頭から蔑視し手に執らうともしない。渠等の多くはクラシックの妄信者で新らしい著述や研究には殆んど風馬牛である。渠等は書齋の木乃伊であつて、渠等の讀書は坊主がお經を誦むと同じで章句を諳んじてゐても死んでをる。古典の妄信者ではあるが新著の追究者では無い。讀書家であるにしても渠等は讀書界の影法師のやうなものだ。

恐らく日本人ぐらゐ非讀書國民は無からう。勢ひ出版人は其中の讀書族たる學生を目標として渠等に喜ばれる安價な低級文藝や學校向き家庭向きを專らとするは當然である。田舍女の惡どいお化粧を見るやうな婦人雜誌や娛樂雜誌が書肆の店頭に山をなす恰も緣日の草花の市を見るやうでも、庭に移して觀賞しやうと思ふものは一本をだも見出し難いのである。

（9）今の讀書界

夫から以後もう十四五年經つた。當時の若い小說フワンや雜誌フワンは立派な一人前の讀書人に成育し、空虛な小說や斷片的な雜誌の寄稿では喰足らなくて實質的な實のある讀物を欲求するやうになる。小說が最も喜ばれるのはローマンチックの空想や情熱の盛んに燃える年ごろであつて、實際現實に面して每日生活に喘いでゐると、碌々世間苦も人間苦も嚙みしめない机の上の空想から產れた上滑りの人生記錄では容易に頭にピンと來なくなる。況んやナマハンジヤクの青い作家の身邊小說や告白小說ではお伽噺ほどにも聞かれないで馬鹿々々しくなる。十何年前の小說フワンや雜誌フワンが成長した今日の讀書界はモウ青年の領分でなくなつてゐる。

昔から貸本屋學問は隨筆に入つて卒業すると云はれたもんだ

が、讀書の享樂の究竟地は昔も今も東も西も随筆的雜著である。随筆にも高卑險夷があつて、學術的報告よりも肩の凝るものもあるし大衆文藝よりも一層卑俗なもののもあつて一概に律する事は出來ないが、所謂小說好きが小說に飽いて趨ふ所は大抵随筆であつて、随筆が讀書の享樂の最後の行留りとなつてゐる。近年随筆が流行して讀者の人氣の中心となり、往々小說以上に嘖々されるものがあるのは取も直さず我が讀書界が最早靑年王國で無くなつたのを語つてをる。

加之ならず、同じ事を反復するやうだが、去年から今年へ掛けては啻に随筆ばかりでなく、多年の勞苦を捧げた不朽の大著が多く出版されてをる。例へば石塚龍學氏の英文『法然傳』の如き、實に二十年の費心勞思を積んだ勞作で、其間の苦辛を語つた卷頭言は涙ぐましいものがある。又例へば沼田氏の『日本紋章學』の如き、着手以來十五星霜を費やしてをる。著者の識見の高邁と造詣の博大とは敢て云はずもがな、飽かず倦まず矻矻として十五年の研究を積んだ著者の不退轉の精力は我々の鑑みるべき教訓である。古賀氏の『長崎風俗篇』や高野氏の『日本歌謠史』は各々着手の時を明記しないが亦恐らく之に下らさる歳月を要したであらう。佐々木氏の『校本萬葉集』に到つては震災當時印刷裝釘まで完成した全部と其の原稿本及び貴重なる考勘編纂資料までを併せて烏有に歸したので罹災文献の一に數へ上げられたので讀書社會知らざるものは無い畢世の大事業であつて、卷帙の浩瀚なるは鹿持の『古義』を後へに瞠若せしむる大著述である。其他和田氏のモンタナスの飜譯や、姉崎氏の切支丹秘史の研究や、石橋氏の『イスラエル宗教文化史』や、東洋文庫の諸論叢や皆各々相當の歳月を捧げて勞苦した著作の論著が續々刊行された。著述では無いが、辻鷲尾兩氏纂輯の『神佛分離史料』の如き亦着手以來十五年を費やした三千餘頁の厖然たる大冊である。（全三冊にてマダ第一冊しか出版されてゐない。）絕版暴騰のレコードを作つたので著名な太田氏の『随筆索引』は其增訂に四年間を費やし、其內容を殆んど二倍して重刊された。此の如き並大抵で無い努力が費やされた勞作が各所から競爭的に一時に發行されるといふは明治大正六十年間を通じての盛觀である。

更に目を全集、叢書、或は古典の複刻等の大部物の豫約續出に轉ずれば讀書熱の熾烈益々驚くべきものがある。アトからアトからアトからと毎月代る／＼に廣告される大部の全集又は叢書は一々記憶するに遑あらさるほど目眩るしく續出する。尤も是等の大部物は讀む爲めよりは寧ろ飾る爲めであるといふ說もあつて、其說必ずしも當らざるに非ざるが如けれども、ドテラ

にしても書籍に對する一般興味が洽く增進したのは首肯し得られる。

更に又讀書熱（或は古書熱）の熾烈を徵すべき證例と見做すべきは書籍に關する雜誌及び古書肆の目錄の簇出である。從來とても書籍に關する雜誌が丸きり無かつたのでは無い。が、多くは書肆の營業機關として發行されたもので、夫すらも永續したものは殆んど無かつた。特に古書研究或は讀書鼓吹を標榜した獨立の書籍雜誌が二三種發行された事があつたが、矢張當の目的は一書肆の機關でこそ無けれ各書肆の新刊の廣告取であつた。全く營利を離れて古書研究のマジメな目的で發刊したのは古書保存會の『典籍』であつたが、船頭多くして舟山に登るで、會其物がマダ存在を認められない中に內輪割れがして、雜誌も會もイツとなく消滅して了つた。石川氏の『稀書珍籍』も多少編輯者の好みに偏した嫌ひはあつても內容も豐かな體裁も整つたイヽ雜誌であつたが、之も亦所謂三號雜誌の運命を餘儀なくされた。書籍の雜誌では唯僅に『圖書館雜誌』が創刊以來十數年を經て數十號を繼續してゐるが、數百名の會員を有する圖書館協會の機關であるが故に辛うじて維持されるので、所詮書籍の雜誌は維持出來るだけの有料讀者を獲るのが困難と見做されてゐた。然るに此の幾多の人の嘗めさせられた苦い經驗に懲りもしないで、昨年來各所から十種近くの書籍雜誌が競爭的に發行された。尤も大抵が書肆の半道樂の機關雜誌で、多くは基礎が薄弱で初めから永續を危ぶまれるやうなものばかりで、中には既に創刊早々消滅したものもある。が、左に右く十種に近い書籍雜誌が一時に各所から發行されるといふは、書店の營業方略の進步にもせよ、又書籍に對する一般興味の增進を語るものでは無い乎。

古書肆の目錄も亦同じく、從來とても著名の書肆からは折々發行されてゐたが、昨年來俄に著るしく增加した。且舊來の書肆目錄の多くは惡紙惡刷の實用一點張なるに反して、此頃のは印刷も用紙も精選し、中には圖版を加へて全く面目を一新した。例へば昨秋刊行した神田の一誠堂の大目錄の如き、有體に云へば內容は貧弱で、分類其他編纂の方式も杜撰であるし、印刷組方の體裁も整つてゐないが、二十餘面の圖版入りで着彩版まで挿入したクロース裝の八百頁の大冊で、內容から云ふと勿體無いくらゐのもんだ。恁ういふ古書肆の目錄が發行されるといふは破天荒で、讀書慾、愛書熱の普及熾烈が尋常で無いのを以て證明するに足るだらう。

（10）　多忙なる讀書と批評の困難

だが、恁う名著大著が續出しては讀書家の生活は極めて忙がしくなる。讀書は閑人の業といふが、名著大著が恁う矢繼早に頻出しては讀書家は頗る多忙の閑人と云はなければならない。私の許へ集まるのは知己の著者或は發行者から惠まれたものと、私の貧しい懐ろから支拂つたものとホンの新刊の一部にしか過ぎないのだが、夫すらも全部を通讀するのは容易で無い。況してや此の以上に雜誌も拾ひ讀みし、豫約の叢書も購入し、折々は西書も漁り唐本も覗くとなれば毎日朝から晩まで机に向つて五行並び下るで一日二三百頁を缺かさず讀んでも讀み切れるものでは無い。勢ひ好書家は如何に速讀家でも或る程度に於てのツンドク先生たらざるを得ないだらう。だが、ツンドクの趣味を理解しないものは愛書家で無いのは勿論、眞の讀書家でも亦無いのを信じて私は常にツンドク先生に敬意を表してをる。

平たく告白すると然ういふ私自身がツンドク先生と五十歩百歩の書齋のヴワガボンドである。亂抽濫讀して時としては數百頁のものを一氣に卒業する事もあるが、時としては百頁かソコラの雜誌をも鼠の物を囓るやうにポツ／＼拾ひ讀みして五日も十日も費やす事がある。一氣に讀畢るものが必ずしも會心の著で無くて樂み讀みにポツ／＼味はうもの〻中に名著の折紙をつけたいものがある。讀書は氣分である。少くも書齋のヴワガボンドたる私に取つては讀書は其時の氣分次第である。

私が著者或は發行者から惠まれた著書中には批評の義務を伴ふものがある。尤も書齋のヴワガボンドたる私の氣分本位の行當りバツタリ評が著者の爲めの何の參考の足しにも又書籍の賣れ行の爲めの有力なる提灯持ともなる筈が無いから大いに期待されるわけで無いのは云ふだけ野暮だ。且讀書は何の目的も義務も無く、氣分次第でヴワガボンド流に貪る處に興味があるので、批評をするつもりの讀書は却てお荷物になる。加之ならず、博覽の學者が夫々專門的に苦心勞思した名著を草率讀過して矮人觀場の無責を挿むは著者に對する禮でも無いし、又決して肯綮に中るものでも無いから私は批評をするツモリは無い。ホントウの批評は著者の刻苦に比例する相當の努力を要するので、十年掛つた著述なら少くも三年や五年は同じ題目を研究した後でなければ出來るもんでは無い。各々數年の苦辛を費やしたものを一括して十把一とからげ的に批評する如きは著者に對する禮を缺くばかりでなく自ら憫んじて侮どるの甚だしいものである。私は批評をするツモリは無い。批評は私の任では無い。唯私は先輩知友から著書を惠まれた厚意を感謝する旁々、書齋の一ヴワガボンドとして展場巡拜をするつもりで名著大著に對した感想を同好に頒たうとする。但し私が選した名著大著

といふは必ずしも御利生記や案内記を受けお札を授かつたものばかりで無くて、身錢を切つて道草に參詣したものもある。講中の信徒となつて太鼓を叩いて御利やくを振れ廻るんぢや無い。

尤も之から巡拜記を書かうとするは私が振れ廻るまでも無い靈驗灼ちこな名著大著ばかりだから、時としては信心肝に銘じた歡喜が溢れて禮讃となる事もあらう。が、講元の著者や發行者から頼まれて講中を殖やす爲めの提灯持ちをするんぢや無い。且私のは批評では無くて名著や大著こ拜借して自分の勝手な與太を飛ばすので批評にも提灯持にもなら無い。著者や發行者の身になつたら恰も店の鼻さきへ露店を張られたやうな迷惑此上も無いものであらう。

(11)　石塚氏の英文『法然傳』

先づ第一に私は石塚龍學氏の英文『法然傳』を禮讃せずにはゐられない。本書に就ては發行當時、東日紙上に簡略なる紹介をしたが、去年から今年へ掛けての名著を擧ぐるに方つては再び先づ第一に推讃せざるを得ない。本書は華頂山寶林の聖傳の翻譯であるから歴史的法然の傳記としては批評を容るゝの餘地が有うが、本書の目的は法然の史的考證でも又教祖傳の高等批評でも無い。淨土の一學匠として教祖に對する報恩の一端として精進努力した敬虔の勞作で、教祖の法の光りを世界に布く爲めの信仰の溢れだから、單なる法然傳として議するは正鵠を失してをる。本書に對して感嘆禁ずる能はざるは教祖と教理との爲め二十年の勞苦を捧げて惜まざる著者の敬虔の信仰である。

且又本書の英文を修辭上から檢覈して評する如きも亦無用の穿議である。譯者は英文の鍛錬に相當の苦辛をし、一英國人の援助をさへ借りて文法修辭の完整に於て少しもヌカリの無い用意を盡してゐるが、譯者の志は英文を見せる爲めでは無いので、英文の能否巧拙の如きは譯者に取つて枝葉の穿鑿である。

若しそれ譯者の編纂の勞の大なるものを求むれば殆んど本文と相若く毎章末尾の語彙である。本書を單なる繪傳の翻譯にのみ留めないで、東方佛教及び歴史に全く無知なる歐米人をして略ぼ大要を會得せしめる爲めの註疏を施こした處に著者の苦辛がある。佛教科語は邦人も亦理解し難いものが多いから、此の語彙に教へられるのは歐米人のみでは無い。其中には多くの梵語をも包含し、往々アイテルの遺漏を補ふものがある。

夫よりも私は厖然たる一千頁の大冊としての法然傳を見、土佐吉光の敬虔なる信仰に成る宗教畫を反覆展開しつゝ宗祖の傳記を英文にて讀む感激を禁ずる能はざるものがある。有體に云ふと私は宗教心の稀薄な人間である。如何なる教祖をも偉人以

上に見たいから、信仰から作られた宗教的幻影の濃厚な祖師傳を除り感服したいものだ。

且私は教祖としては火花を散らして宗敵を折伏するやうな英雄僧よりは護法能化の聖僧が好きであるが、英雄僧にしろ聖僧にしろ、矢鱈に紫雲が棚曳いたり、圓光が輝いたり、天人が天降つて音樂を奏したり、諸天諸菩薩が來迎したりする祖師傳の型に陥つた教祖臭い教祖を喜ばない。法然の生涯は念佛の信仰で終始し、慈悲忍辱を一串して他の祖師傳に於けるやうな奇蹟的要素が少ないから、此點に於て私は他の祖師傳よりも同感出來るが、宗教の醍醐味には充ちてるが容易に感激せしめる熱烈な宗教的魅惑に缺けてをる。？

だが、爰では法然を論じ、榆傳の宗教的或は歴史的乃至文藝的價値を檢討し評定するつもりは無い。唯だ淨土の一學匠として教祖の法徳を世界に宣揚する爲に二十年間の精進勤苦を捧げた著者の敬虔なる信仰に對して厚く敬意を表すれば足りる。法然を評する如きは私の任でも無いし、又今は其の機會でも無い。

且私は信仰は稀薄であるが、宗籍は淨土に屬してゐる。法然に對しても多少の（といつては相濟まぬが多少の）歸依を持つてゐる。石塚氏の著者に對して單たる勞作以外に感激措く能はざるものがある。

(12) 沼田氏の『日本紋章學』

名著大著の何れも宏偉たらざるは無い中にも恰も素袍大紋の魁偉の武士が控ゆる如く堂々の威容を示すは沼田氏の『日本紋章學』である。本書は既に學士院賞の折紙が附いてゐるので、生中の讃辭は却て佛頭糞であるが、著者を知る我々は著者滿幅の精悍なる傲氣が全部に溢れてゐるのを見て壯快禁ずる能はざるものがある。

沼田氏の紋章研究は知友間に隠れも無い十數年來の題目にて、沼田氏と紋章とは牡丹に唐獅子竹に虎といふやうな離れぬ關係であつた。沼田氏と云へば直ぐ紋章が聯想され、紋章を論すれば必ず沼田氏が引合に出され、沼田氏の在る席上常に紋章が話題となつた。沼田氏の紋章を語るや博引旁捜滔々盡きる處を知らず、苟くも紋章に關する疑問は之を叩けば言下に答ふる響の聲に應ずるが如くである。且其研究は些の危なツかしげが無く、ドンナ問題に對しても快刀亂麻を斷る如き明快なる答辯を與へて聊かでも曖昧模糊に言葉を濁すやうな事は無かつた。

沼田氏は精力絶倫を以て交友間に聞えてゐるが、殊に精力絶倫で苟くも一事を究めんとするや全精力を一題に集中して徹底的に究めねば止まざる精力を持つてを

る。紋章學は實に此の異常の精力集中の結晶で、氏は其の職務とする土佐藩史の編纂外の時間は盡く紋章の研究に捧げ、資料の採集に熱心なるや曾て一婦人の羽織の紋の較や異形なるを見て精しく之を究めんとして追躡して怪まれたといふ如き先哲叢談か畸人傳にありさうな逸事をさへ殘した。夫程資料を集めるに熱心で、啻に文獻のみならず古くは秦漢の遺物や出土品や近くは日常凡近の百般工藝物、小兒の玩具や土俗品までを究め、紋章に就ては第六感を有してゐるかと怪まれるほど異常の緻感を働かして道に落ちたるものまでも決して見逸さなかつた。

厖大なる一千五百頁の『日本紋章學』を繙いて先づ驚かれるは此の資料の豫期以上の豐富である。開卷第一に妙法院所傳の著名なる印度副王の書翰やケンペルの日本史のタイトル・ページを口繪としたは些か鬼面小兒を威嚇する嫌ひが無いでは無いが、左も右く著者の採擇資料が尋常家紋の圏内に跼蹐しないのを證するに足る。更に本文に入れば、文獻としては記紀以下の正史野史、戰記日記、記錄文書、繪卷、小說野乘、小唄川柳落首等までを涉獵し、器物としては正倉院の御物、武器、佛器、文房諸什より遠く印度、バビロン、西域、支那、朝鮮等の遺物、支那や印度や日本の瓦や磚、又は手匣や鏡背の模樣、小兒の玩具や骨牌のやうなものまでも盡く自家藥籠中の物としてをる。但し『明和伎鑑』や『傾城[illegible]』のやうな戯作まで引用して役者や遊女の紋、小兒の泥面子や一文菓子屋の當て物の紋づけまでも引張り出したのは聊か過ぎたるは猶ほ及ばざるが如き盛澤山に過ぎる感があるが、博搜の範圍の廣大なるは、啻に紋章と云はず從來諸家の如何なる研究も恐らく之に匹儔するものが無からう。

著者が最も力を入れたるは巴紋、龍膽、木瓜等である。就中巴紋は最も精を盡し著者の創見を伺ふに足るものがある。が、著者が自ら任じもし、他も亦著者に獨創の名譽を許すものは久留子紋の研究であらう。殊に祇園守や島津の轡と久留子との關係は恐らく著者の最も會心とする研究であらう。左に右く此の巴紋、久留子を首として引兩、菊、葵等の研究は本書中の最も興味ある部分である。

本書に於て解釋されたる紋章は概算凡そ五六百種であらう。引用の文獻は和漢を主として數四の西人の著書をも加へ、紋章を中心としての氏族關係、法制、習慣、民俗、信仰等百般に涉りて殆んど紋章百科全書の觀がある。が、紋章の變化多種なるや、其の基礎紋とすべきものは大抵網羅されてるが、所謂換紋に到つては猶ほ洩れたるものもある。尤も換紋の中には使用者が勝手に作爲した憑據も傳來も無いものがあるから、歷史家と

しての立場からは一顧を値ひしないだらう。が、歷史的に一顧を値ひしないでも他の社會的又は文化的關係から見て多少の研究を値ひするものが必ず其中に有らうと思ふ。

著者は啻に日本の資料にのみ滿足しないで、屢々源流を尋ねて外國にまで溯る。支那や印度や、更に一層遠きはバビロンの古代遺物までも引張り出してる。著者の研究心の徹底するは誠に敬服するに堪へない。が、若し我等の望蜀の慾望を許されるなら遠いバビロンまで引合に出されてると比較して一衣帶水の支那の紋樣との交渉が比較的簡略されてる憾みがある。支那は千年の交通ある先進國であつて、文物百般を負ふてゐるから、紋章も亦起源を支那に求むべきものが多くあるのは類推するに難くない。例へば斗牛の星象、七寶、寶鏈、分銅、龍紋等支那固有の紋樣との交渉に就き著者は丸きり觸れないでは無いが、說いて未だ精ならざる多少の憾みがある。印度やバビロンに比べて一層密接の深い關係にある支那の紋樣に就て今少しく精細なる研究を聽かんと欲するは我等の望蜀の慾望である。

紋章が氏族の徽章であつて其の形似變化の類推が系譜を明かにするは著者の說く通りである。此方面に於ける著者の研究は殆んど餘蘊なく盡されてをる。が、紋章は氏族の徽章であると同時に信仰、尙武、崇文、其他の思想のシムボルである。此方面に於て古くはケーラスの著名な卍字考等があるが、近時西人間の此研究は漸く盛んで、フレーザア、チヤーチウツド、フロベニアス等の大著がある。紋章の研究は單なる歷史の補助科目では無い。更に一步を進めて此方面に突入する時は民族心理の重要なる解鍵とする事が出來る。

慾を云へば限りが無いので、如何なる劃期的大著述に對しても各人個々の注文を列べれば際限が無い。が、各自の註文に陷ると否とは毫も著書の價値を增減するに足りないので、左に右く從來我が考證家に閑却されてゐた紋章を此の如く細さに究めて剩す所なく檢討した此の一千五百頁の大冊を完成した著者の功績の大なるは永く我が文獻史に朽ちざるものであらう。

私は此の厖大なる大著を手にすると先づ索引に出て自分の家紋を檢索した。(恐らく本書を手にするものは何人も先づ第一に自分の家紋を檢索せずにはゐられないだらう。)私の家紋は庵木瓜或は横木瓜が本紋であるが、俗に「內田轡」(沼田氏の著には內田久留子とあり)と稱する轡の圓の外周に四ツ星を配する變り轡を用ゆるが普通で、舊小見川藩主を初め內田姓のものは大抵此の「內田轡」を家紋とする。隨つて「內田轡」の紋付きを着るは苗字を廣告して歩くやうなものだから面白からず思ひ、私は家を相續すると同時に家紋の變更を思ひ立つた。が、本紋

の庇木瓜は餘りに封建臭く、且工藤祐經が聯想されて敵役臭く、横木瓜は大抵な人に間に合うと貸衣裳屋に重寶されるほど餘り有觸れ過ぎてドチラも使用する氣にならず、全く縁の無い紋を勝手に工風した創作もと思案に餘つた末が偶然或る紋帳で見付けた變り木瓜を用ひ初めてからモウ三十何年になる。沼田氏の著書を繙いて見ると、內田姓の使用する紋は十二種あつて、貴姓の用ゆる菊でも葵でも藤でも橘でも鷹羽でも揚羽蝶でも何でも擇りどり見どりで、三十年前に本書が著はされてゐたなら、何も木瓜や梅を餅について苦ますとも宜かつたのだ。

私は祖先崇拜國の國民としては甚だ不心得千萬な男で、自分の祖先なぞに就てはトンと考へた事が無かつた。唯國史に現れた最始の內田姓が巴御前と組討して首を捻り切られた遠州の住人內田家吉であるを少年の頃『日本外史』で讀んで甚だ肩身の狹い思ひをした。爾來內田を名乘る者に碌な奴は無いと、自分の姓ながら內田姓に愛想を盡かした。近年內田姓にも大臣や成金が出來て大分箔が附いて來たが、女に首をモギ取られた田舍武士が先入主となつて自分の姓ながら餘り感服出來なかつた。處が沼田氏の著を見ると內田姓は藤原の支流で、高貴な氏族と同じ紋章を用ゆるを知つて內田姓も萬更で無いと多少肩身を廣くした氣持がした。且最始の久留子族の一人であるを教へられて、昔なら邪宗門の末裔であるのを憚らねばならないが、今では恰も切支丹流行の折から西歐文化の最始の接觸者であるのを知つて萬更惡い氣持もしなかつた。

歐羅巴ではヘラルドリーは既くの昔亡びて今では歷史の夢となつてゐるが、日本ではまだ封建が亡びて日が淺いから、家紋は氏族に附帶して誰にも共通の興味となつてゐる。『君の家の紋は何、俺の家のは何』といふは決して紋章學者の專有の問題では無い。學者の畢世の努力を捧げた大著を輕く扱つては甚だ相濟まぬが、此の厖然たる大册を反覆して自家或は近親の家紋を精究するは亦銷夏の一興であつて、凉風熱汗を洗ふの爽快味ある。少くも私は此大册を隨讀隨抄してきのふけふの九十度の炎熱を忘れたことを深く著者に感謝する。

(13)『長崎市史風俗篇』

此の炎熱熾くが如き時に方りて銷暑第一の讀物とすべきは古賀十二郎氏の『長崎市史風俗篇』である。長崎は西陲の一地方であるが最も早く歐洲人を引接した大村有馬の故地であつて、世界的には江戸よりも大阪よりも早くから知られてゐた。日本が開國以來僅に數十年間で一足飛びに二三世紀を躍り超えて世界の文明國の仲間入りしたのを驚かれてゐるし、自ら誇つても

ゐるが、實は日本は鎖國したといふ條長崎を通じて蘭人の手から些かではあるが絶えず西歐文化を移入してゐたので、米人に手引きされて初めて世界の文明に當面したのでは無い。切支丹時代から鎖國の時代までも長崎には唐船や蘭船がシツキリなく來船し、蘭館あり唐館ありて絶えず西貨を輸入し西俗を播植し、日支蘭の風俗や言語や貨物が交錯して内地の風俗とは全く特異な別天地を作つてゐた。曾ては切支丹の根據地であつて悲しい美しい幾多の殉教者のローマンスを殘し、後には蘭學の發祥地であつて日本の文化の先驅者が若い輝かしい夢を載せて負笈來聚した全國一のエキゾチツクの都であつた。

ナガサキ！　鎖國時代の好學有爲の進取的青年に取つて之ほど懷かしい憬がれの響きは無かつた。漢學專攻の儒生は來船清客と詩文の交を訂し或は唐音研究に、西學に潜思する醫生は親しく蘭人に就て教へを受くべく皆長崎を憫悦した。當時の長崎は世界の文化の唯一の出張所であつて、書生の長崎に行くは恰も今の歐米へ留學すると同一であつた。且其の風俗のエキゾチツクなると珍奇な異國の貨物に富むを聞いて好奇心を誘られる遊歷者の跡を絶たず、一と度長崎を踏んだものは醫者は本より學者も畫流も皆紅毛南蠻の洗禮を受けざるは無かつた。幕末から明治の初頭へ掛けて文化の先鋒となつて新文明に貢献した朝野の功勞者は大抵長崎の洗禮を受けた者であつた。所謂長崎渡りの貨物が高價を賭けて珍重された如くに、人間も亦長崎渡りが幅を利かしたもんだ。

京の女郎に江戸の張を持たせて長崎の衣裳を着せたいといふは情界に公認された八文字屋以來の遊冶郎の憫悦であつた。遊里は封建時代の社交の本舞臺であつたので、丸山の夜るの女王の豪奢の粧ひに野郎自大の江戸ツ子も京の着倒れの衣裳道樂も一目置いてゐたといふは、取りも直さず阿蘭陀渡りの寶貨珍玩が當時の驕奢の標的であつたのを丸山の太夫の衣裳に代表させたやうなものだ。呉絽や羅紗板が贅澤の骨頂でありギヤマンやビードロが趣味の驚異であつた時代、異國の百貨肆場たる長崎は美と幻しの夢の世界であつた。

盂蘭盆の精靈船、諏訪の祭典、三月の紙鳶揚げは長崎の三名物として全國に鳴響いてゐたが、其以外に繪踏みやペーロンや來舶外人にも興味を與へて外人の紀行にまで載つた特異の風俗は少くない。外人の眼から見れば内地の風俗と餘り違はないだらうが、日本人から見れば上記の特殊の年中行事を初め日常些事の風俗や遊戯や衣食住一切に異國の情趣や色彩を混入してをる。長崎の生活は總てが日本と外國との交錯から生れたハイブリツドで、一として眼を峙らせる驚奇の景物たらざるは無い。

長崎に關する文獻は可成に多い。內務省の『地誌目録』に載つてゐるだけでも三十五六種に上つてる。他の各地方の地誌と比較して決して貧しい方では無い。が、多くの名所圖會的地誌の常套で、社寺や名勝に精しいが風俗に關すると多くは疎略である。近頃稀書複製會から複刻された延寶の『長崎土産』が丸山遊里の消息、殊に來舶外人と遊女との極めて情味あるローマンスを描いてゐるを除いては其の以後の『長崎夜話草』にしろ『長崎聞見録』にしろ貿易や物産等には精しいが風俗に關する記事には乏しい、磯野信春の延寶のと同じ題名の『長崎土産』には多少の興味ある風俗上の挿畫や記事が載つてるが、極めて薄ツぺらな小冊子で、勢ひ內容は貧弱である。其の以外に長崎市役所や松浦伯爵家等に主要な資料が若干あると聞いてるが、多くは傳寫の少ないもので、坊間には殆んど獲られない。明治になつてから出版された長崎縣廳の『幕府時代の長崎』や福地櫻痴の『長崎三百年間』は何れも相當に豐富で、可成の興味ある記事にも富んでるが、蘭館や唐館に關する貿易や切支丹の取締や總て公邊に關する記事に詳密で、民俗や習慣に關する市井雜事に到つては矢張疎略で、我々の興味を滿足させる事が出來ない。凡そ民俗資料は文化史研究の貴重な材料であるが、殊に長崎のやうな絕えず外人と接觸して自然的に風俗に浸染した地方の風俗志は民俗進化の主要な資料である。が、(長崎に限らず、ドコの地方誌でもだが、)社寺、名勝、產業等の文獻は乏しくないが、風俗志となると隨所に零細な記事を發見するが組織的に纏めたものは極めて稀れである。

『長崎市史風俗篇』は恰も此の遺漏を補ふて遺憾なき近時の大著である。近年各市各地方廳は競つて地方史を編纂し、從來閑却された民族及び一般文化にも涉つて相當精細なる討究を盡して詳述されてるが、私の知れる限りでは此の『長崎市史風俗篇』ぐらゐ周洽博綜を極めてるのはない。著者古賀十二郎氏は長崎の舊家ださうで、家に傳へた記錄文書にも富み、愛鄕の精神とエキゾチックの興味から市史編纂に從ふ遙か以前から長崎に關する有らゆる文籍を博搜してゐたやうに聞いてゐる。本書卷頭の十六頁に涉る參考史料の目錄を見ても著者の博搜の範圍の如何に廣大なるかを一瞥して直ちに首肯ける。啻に日本の資料ばかりで無く、エズイット僧侶の本國への布教通信を首として來舶人の記行等英佛獨蘭西等に涉つて百數十冊に及んでをる。加之ならず著者は謙虛して故老篤學は愚か後輩の青年或は婦人にまでも聽いて零細の談柄をも洩らさず參考に供してをる。宜なる哉、單なる風俗篇にだも此の厖然たる一千何百頁の大冊完成したるや。

且此の一千何百頁は總て確實なる記錄文書或は遺存の實物に據る乎、或は現在の事實なら著者の目睹を經たものであつて、議論や批評や咏嘆や回顧を少しも交へない正味の記實である。一行たりとも餘計な空虛な文字は無い。且著者の想像や臆斷を少しも挾さまないで一々根據を明かにし單なる邦人の記錄以外屢々外人の著をまで旁證としてをる。シカモ著者の博引旁搜は剪裁宜しきを得て巧みに要點を把握し、無用の長たらしい引證に讀者を勞殺する博涉家の兎角に陷り易い通有病弊を脫してをる。其上に著者の文は坦々として平明で、衒氣や誇張が微塵もないから仰々しい形容や空虛な美辭麗句の行列に躓づく事無しにスラ〳〵と讀める。

殊に過去の長崎に對する我々の憧憬は今猶ほ百年乃至百五十年前の蘭學書生に少しも減ぜざるものがあるから、本書を前にして繙かざるに先づ遠い憬がれの異鄉のおとづれを聽く歡喜に胸を躍らせる。六十何面の本書の挿畫を一々點檢して行く中に畫中の景象を眼底に彷彿して昔の長崎のエキゾチツク的雰圍氣に包まれる心地がする。電車や自動車や鐵道コンクリートやアスッアルト道や、トンカツや電氣ブランやドツチヤダンネ饅頭の雜音濁彩汚臭を忘れて、唐人屋敷や阿蘭陀屋敷の夢の世界に快よく陶醉躊躇するを得るは本書の賜物である。

本書中の最も興味に富み、且最も讀みごたへのあるのは綸踏と衣食住と遊女との三章である。尤も著者の努力に萬遍なく全篇に渡つて章に由りての一張一弛が無く、各章個々の興味がああるから何れを何れと甲乙すべきでは無いが、長崎特有のエキゾチツク的地方色以外に人間の本能と生存欲の中心たる戀と信仰と日常衣食住とに東西文化の交綏や混錯が現れ來る特異の變態現象は恐らく世界に餘り例の少ないものであらう。其間に育まれる幾多のローマンスのエンブリオは本書の記事中に孕姙されて、尋常劇以上、小說以上の悲喜劇の幻影が平板なる本書の序述中のそここゝに隱顯してをる。

が、一千何百頁の大冊は通讀一遍するだけでも容易で無い。接手以來數日、平たく云つて私はマダ全部を通讀してゐない。恐らくマダ全部絕えず座右に置いて小閑ある毎に飜讀したが、多くの市史や地方史が根本の三分の二を越えないだらう。が、多くの市史や地方史が根本の資料の貧弱なるに加へて嚼蠟無味を官廳記錄の誇りとする風あるに反して、之は市其物が三百年來のローマンチツクの歷史の連續とエキゾチツクの花やかな色彩で包んだやうな土地柄である上に、有餘る豐富な材料を積重ねたのだから單なる風俗篇一冊にだも一千餘頁を捧げても猶ほ足らざる如き餘力を殘してをる。多くの厖大なる著書が兎角に簡約すれば簡約出來ないで

も無い無用の記事や冗漫の文字あるに反して、之は全部がハチ切れるほど含蓄に富んでるから、中には數遍繰返しても飽くを知らず、讀む度毎に新らしさを覺え、噛占めて愈々甘味の滴たる個處がある。全部を卒業したのでは無いが、處に由ては既に數遍繰返してをる。

卷後の（と云つても三百頁を越ゆる）『長崎方言集覽』は本書中最も實のある、恐らく著者が最も努力を要したらうと思はれる部分である。單なる語彙であるが、長崎の方言中には外國語から轉訛して全國的に傳播流通したものがあるから、單なる方言として扱ふべきものでなく、一つ〳〵に吼嚼すれば文明移入の跡を辿るの感がある。此の外來語の研究は從來多くの學者が手を着けたもので、零細的には頗る詳密なる考證もあり、殆んど確定した斷案もあるが、之だけ多數を集めた纒まつたものは無い。且此種の研究は廣博なる語學の造詣と言語進化上の鋭敏なる判斷力を要するので、此の特異の方言の鄕土に人となつて該博なる語學に造詣する著者は恰も此の研究に當る最適任者である。著者の解說中にはマダ攻究すべき餘地のあるものも多いだらうが、從來の研究から一歩を進めた新見に富んでるのは爭ふ事は出來ない。

此の一千何百頁を涉獵するは大博物館に入つたやうなものだから、仔細に一つ〳〵を點檢してゐたら永い夏の日も暮れて了う。左に右く近時の著述界の最大收穫の一つで、日本の文化史の最も興味ある側面史である。丁度切子のギヤマンに盛つた南洋の香氣の高い水氣の垂れる果物を見るやうなもので、見たばかりでも唾を生じ、一臠を喫する每に香氣口腔に溢れて淸風一過する如き感がある。

（本書の副產物たる『長崎と海外文化』はマダ接手しないが必ずや多くの新資料を滿載する外來文化史の貴重の貢獻であるを信じて、首を長くして長崎の書肆からの郵着を待ちつゝある。）

長崎に關したものでは本山桂川氏の近著に『長崎丸山噺』というのがある。前記の『風俗篇』に比べるとデパートメント・ストアの隣りの小さなカフエを覗くやうなものだが、遊里の瞥見に限られたのと、興味本位で著はされたものだから肩が張らずに面白く讀める。卷頭の貞秀の五枚續きの錦繪は丸山遊廓の鳥瞰圖とも云ふべきもので、蘭人や唐人のゾメキや醉舞が維新前後の横濱畫とは違つた別趣のエキゾチツクの氣分を漂はしてゐる。『風俗篇』が南洋の果物を滿盛した切子のギヤマンなら、之はメロンの一と切れを載せた白磁の皿である。僅か一と切れでも高い香氣に胃の腑を誘られずにはゐられない。

(14) モンタヌスの『日本誌』

先づ法然に賽し、武家の馬印や紋章を見物し、長崎の異國町を彷徨した戻りは必然的に蘭人の蝎舌を聴かねばならない。

和田曼翁の譯文『モンタヌス日本誌』の發行されたのは一年半前で、新刊よりはモウ店晒しである。が、『モンタヌス』は店晒しとなつて愈々本價を騰貴するので、原本が年々益々貴くなると同様、曼翁の『モンタヌス』も亦恐らく一年毎に本價を倍蓰するだらう。有體に云つてモンタヌスは資料としてケンペルやシーボルトほどに貴いものでは無い。が、二者よりも凡そ百年前の印行で、カロンに次ぐ最古の日本誌である。且資料としての正確さはカロンに譲る處があるが、内容はカロンに數倍し、殊に挿畫の豐富は前記の二大著にすらも勝つてをる。

且其の挿畫たるや譯者のオギルビーの手に成る如けれど果して何に據りたるか不明であるが、畫工は何人にせよ、其の荒唐不稽なるは想像以上といふよりは滑稽以上である。天然も樓閣も人物も風俗も日本人だか支那人だか判断が付かないが、恐らく當時の（或は今のでも）歐洲人の眼には支那人も日本人も家屋や風俗は本より景色でさへも殆んど同じに映つたのであらう。が、其突拍子も無い荒唐不稽が興味を惹いたので、日本人は恰も波面の凸凹鏡に映る精緻のやうな自分の畸形姿を見せられるやうな氣がして微苦笑せずにはゐられなかつた。が、歐州人には此キヤリケチュア然たる風俗繪が漂流記の挿畫の如く思へれば其頃餘程の大評判となつたと見えて、其後六十年、千七百三十年ライデンの一書肆から出版された『世界名勝圖會』（ラ・ガレリ・アグレアブル・ドユ・モンド）の日本の部には主として此のモンタヌスの挿繪が収められた。近くは二三年前に出版されたオツトオ・ペルカの『十八世紀の工藝美術書に現れた極東風俗畫』の中にも亦モンタヌスの挿繪が收められてるのを見ても此書が今でも公衆の興味を惹くに足るのを證してをる。

元來モンタヌスは日本に來た事は無かつたのだ。恐らく東印度あたりに駐留して日本の事を聞いて好奇心を燃やし、蘭使の記行や渡日の蘭人の見聞を基礎として本書を著はしたのであらう。身親ら其地を踏んで親しく日本人と往來交語したカロンや、較や遅れて渡日したケンペルやシーボルトの著と比較して多少漂流奇談じみてるのは據ろないが、他人の著書や見聞を基礎としたものとしては、挿畫の荒唐不稽なるほど内容の本文は出鱈目では無い。外人通有の見當違ひや無理解を別にしては大程馬鹿馬鹿しい間違ひは無いので、セコンドハンドの嫌ひがあるにせよ存外正確な事實を紹介してをる。モンタヌスが興味を惹く

のは荒唐不稽の挿畫であるが、此の挿畫の爲めに禍されて眞價が疑はれ一小說扱ひされてゐた。

が、實は挿畫にしても亦、一見して支那人か日本人か解らぬといふもの丶、熟視すれば支那人でも印度人でも無くして矢張り日本人である。龍宮の乙姫さまのやうな長柄の繡扇を背ろから翳した貴婦人は變挺であるが、矢張日本畫の十二單や搔取りの上臈姿が外人の網膜を濾過して此の如く映つたのであらう。中には明かに初期の浮世繪の丸袖伊達模様の女風俗を感違ひして描寫したと思はれるのもあつて、萬更出鱈目の想像で無いのは確實に認められる。景色にしても建築にしても家居にしても部分的には支那臭い個所もあるが、全體的に見れば矢張り支那でなくして日本である。例へば大阪城の圖の如き岳陽樓とか雁塔とか云ひたいやうな感じがするが、矢張想像で無くて實見の見取圖に據つたのであらう。出島の圖となると東印度會社の正確の實測圖を臨寫したのであらうから、細部は好い加減であつても大體の輪廓は餘り間違つてゐない。夫から推しても一見奇怪な滑稽極まる風俗圖も亦夫々據り處があるので、決して出鱈目に描いたので無いのは類推するに難くない。

モンタヌスよりも遙か後に永く日本に滯留して日本の衣食住に能く熟したケンペルやチ、ングの著書の挿畫にさへ隨分如何はしい變挺な畫がある。今日ですらも東洋に來た事の無い畫家の日本の風俗畫や風景畫には一見噴飯に堪へざる馬鹿々々しい想像圖があるのだから、今から二百五十年前、交通が隔絶して國情がマダ十分解らない時代の、一度も日本の土を踏んだ事の無い著者の日本誌の風俗畫や風景畫が殆んど出鱈目の想像畫であるのは少しも不思議は無い。同じ時代の日本人が著はした外國事情の挿畫がモンタヌス以上に出鱈目で、中には『山海經』の挿圖が紛れ込んだのでは無いかと怪まれるものさへあるのを見ても國情の通じない時代に異國の情景を想像するのが容易でないのが解る。

だが、前記した通り、挿畫は荒唐不稽であつても本文はマルコポロの著名なジパングの噂ほどに荒唐不稽では無い。其頃蘭人は絶へず往來してゐたし、天正時代からの伴天連の通信もあつて日本の國情は既に十分研究され相當に理解されてゐた。殊に日本人の極端なる宗門迫害は歐洲人を震惕せしめて益々日本に對する研究を刺戟した。隨つてバタビヤあたりの外人には日本の事情が割合に能く知られてゐた。恐らくペリー渡來前後よりも却て精しく眞相が理解されてゐた。此點に於てモンタヌスは總ての外國人に書かれた歷史が兎角に最高權力者の都合で按排され勝ちな本國人の歷史よりも却て正確である通りに、日

本の歴史に省略されたり或は書直されたりした遺漏や改刪を補ふに足るものがある。殊に日本の歴史では全く知る事の出來ない切支丹迫害始末が可成詳しく精叙されてをる。是等の點に就ては二三の批評家が既に詳しく紹介したから今更吹々する必要も無からう。

殊に本書の正確なるを裏書をするは正保四年の江戸の大地震と、明暦三年の江戸の大火の記事である。前者は僅に數行であるが、後者は（譯文にて）三頁を捧げてをる。明暦三年は正月早々火災が續いたが、三月二日といふは暦の相違にして多分正月十八日の著名な本郷丸山の本妙寺火事を指すのであらう。此の丸山火事は數ある江戸の大火中でも殊に著名で『武藏鐙』の單行本もあり、八百屋お七のローマンスをも伴ふて諸書にも載つてるが、恰も滯府中の蘭使一行が此の火災に遭ふてアチコチを逃げ延びた實見記たる本書の記事は此の大慘事の有力なる資料である。

江戸大地震の記事に就ては別に譯述中の一挿話がある。曼翁が本書の飜譯に着手したのは十二年の大震前數年、マダ帝大圖書館長在任中からである。丁度此の正保の大地震の記事に及んだ時が即ちアノ大震災で、曼翁が個人の書齋に等しい小さな圖書室から世界の何番目といふ大圖書館に育て上げた大文庫は何十萬といふ藏書を擧げて烏有に歸した。が、モンタヌスの原本も譯本も幸ひ私宅に在つて無事に免がれ、震後數年終に發行されて讀書界を騒がしたが、蘭人の日本の舊誌を譯して偶々大地震の記事に及んだ時實際の地震に遭逢して災禍の飛沫を浴びたといふは何等の奇しき因縁であらう。

凡そクラシックの飜譯ぐらゐ人知れぬ苦辛を要するものは無い。殊に日本に關する其頃の外國人の著述は漫然讀下する時は興味に惹かれて輕々看過するが、卒ざ精究し或は飜譯しやうとなると地名や人名や物名や其他に疑問を生じて餘計な縁の下の力持を脊負はせられる。殊に人名は一時的の役名もあり、地名は度々變更されるから當時の通稱が今では通じないものがある上に、シカモ外國人の訛音で綴られたのがあるし、物名に到つては往々今日では摸捉し難い名稱がある。係ういふ困難は實際經驗したものでなければ想像出來ないので、國史や地誌の造詣あるものでも屢々弱らせられる。近刊のルイス・フロイスの邦本日本歴史の新譯には書中の地名と今の現用地名との對照が附載されてゐるが、外國人のみでなく、日本人も亦其頃の外國人の日本に關する著述には不可解の地名や人名が餘り多きに煩はされる。是等の疑問を解決するには一と通りの研究を要するので、其頃の外國人の著書の飜譯は飜譯よりは寧ろ考證であ

る。近刊外國人の觀光記を譯するやうな容易なものでは無い。曼翁の飜譯は手許に原本が無いから對照する事は出來ないが、對照の手數をするまでもなく曼翁が此種の飜譯者として最適任者の一人であるは十目の視る處何ら喋々する必要は無いのである。

殊に本書の內容に最も似つかはしく、二百五十年前の蘭人の氣分を彷彿せしむるは曼翁の簡淨雅淡の譯筆である。言文一致が殆んど文章の大勢を制して、國漢文の大家までが在來筆癖の文調を碌々脫し切れないくせに結尾だけを言文一致として新らしがるのが滔々今の風であるに反して、曼翁が毅然として一家の風格を守つて毫も時流を追はなかつたは曼翁の見識である。シカモ此の現代文でも古體文でも無い俗談平話的近體文が不思議に此種のクラシックの飜譯に適合して恰もお誂へ向きである。

ケンペルの一部は曩に衞藤利夫氏に飜譯出版されたが全部の完譯は某々氏等に企てられてるといふ噂ばかりでマダ完成されないやうだ。モンタヌスの大業を完成された曼翁は進んでケンペル、シーボルト、チ、ング等に餘勇を奮はれん事を囑望する。

(因に云ふ。市價の事を筆にするは極めて賤しいが、モンタヌスは曼翁の譯書の序にいふ如き稀本とも思はないが本場に出づれば百圓前後を値ひする。モンタヌスの挿畫を主態をする千七百三十年版の"Description du Japon"はモンタヌスよりも却て稀覯で、價は略ぼ同格或はヨリ以上であらう。近刊のオットオ・ベルカの『極東古畫集』は曼翁の譯書の挿畫と略ぼ同じ位に縮圖したのであるが、夫にも拘らず、モンタヌス以外の若干圖を加へてゐるといふ條、直段はタシカ四十何圓かであつた。モンタヌスの價値の一半は何と云つても挿畫に有るので、其の殆んど全部——少くとも三分の二を縮圖挿入した曼翁の譯書は上記と比較して極めて低廉である。絕版の曉き恐らくは稀覯として扱はれるであらう。出版書肆たる我が友高嶋米峰翁の爲め、頼まれたのでは無いが些か提灯を持つて置く。)

(15) 姉崎氏の切支丹祕史二種

南蠻紅毛と明治文化とは此頃の最も人氣ある二大項目である。兎角に中央讀書界に閑却され易い一地方の出版物たる『長崎市史風俗篇』が極めて僅かな部數しか頒布しないに拘はらず帝都の讀書界で評判され、從來餘り顧みられなかつた古い蘭人の著書が出版され、剩つさへ盛んに嘖々されるといふは南蠻紅毛熱の人氣である。

話は少し脫線するが、此頃野州龍江院のカテキ樣が上野の博

物館へ移送され、追て國寶に登錄されるといふ評判で、誰が發見者であるといふやうな自己吹聽者の功名爭ひが新聞にまで書立てられてるが、之も矢張南蠻紅毛の流行のお庇である。カテキ様が其道の人々の間に知られたのはモウ七八年も、或はモット前であつた。格別調べるまでもなく切支丹時代の遺物であるのは一見して誰にも首肯けるので、其頃から草深い田舍の寺などに埋もらして置くべきものでなく、東京へ移して國寶にでも登錄したらといふ其道の人々の意見もあつた。が、藤原とか鎌倉とかいふホトケさままでなければ所謂美術鑑賞家や歷史家には對手にされなかつた。切支丹を毛嫌ひするほどの無知者でなくとも、出所不明な切支丹臭いものを國寶ナドとは持つての外だつた。之が今頃漸とこさと中央學界へ持出され、國寶登錄などと騷がれ、發見者の功名爭ひをするやうになつたのは矢張南蠻紅毛の流行のお庇である。

ツイ地震前までは三十五錢で賣られ、夜肆にでも轉がつてれば五錢か十錢で買はれた『鮮血遺書』が十圓の十五圓のと跳上り、二三ケ所から一時に複刻されるといふは流行ぐらゐ不思議なものは無い。此流行に乘じて（といふと如何にも際物めくが）數年前からの夙望でボツ〳〵材料を集められてゐた姉崎博士の『切支丹宗門の迫害と潛伏』が發刊され、續いて其の後篇とも云ふべき『切支丹禁制の終末』が近刊されたのは恰も能く機會を捉へたのである。十年前ならば如何に人氣のある姉崎君の著述でも少數篤志家以外には餘り喜ばれさうもないのが忽ち數版を重ねて更に一層切支丹研究熱を高めたといふは、姉崎君の著書の卓越に由るが、一つは切支丹流行の好機に際會したからである。

『切支丹宗門の迫害と潛伏』は糺問の記錄と殉教の信仰を訓へた切支丹文書に對する著者の解釋と註疏であつて、其の半ばを占むるは『宗門改記錄』と『マルチリオの鑑』と『勸め』とである。糺問に關する記錄の斷片や抄錄は之までも發表された事はあるが、之だけ纏まつたものは初めて紹介されたので、仔細に點檢する時は歷史的興味が津々として湧く。就中、宗門穿鑿の心持（八六頁）糺問の論點、三右衞門の白狀（九二頁／九七頁）等に糺問者の難詰や被糺問者の答辯以外の相互の心事、言外の憎惡や痛恨までが汲取られる。『マルチリヨの勸め』は誰が筆者であるか不明であるが、全幅に張り切つた強い信仰が溢れてゐて、成程斯ういふ強い信仰を吹込まれてゐればこそ、鼎鑊を蜜よりも甘しとして火にも飛込み十字架にも上つたのであらうと想はれる熱烈な訓言である。

姉崎君は學者の立場から冷靜着實な解釋を下すだけで、シカ

も爰に擧げられたのは平讀乾枯の記錄であるから『鮮血遺書』や『公教會の復活』のやうな感激を與へないが、事實をして事實を語らしめる紀聞始末はカトリックの信者で無い未信仰者の我々の胸をも打たずには措かない。

寛文年中の大召捕以下明治初年に到る具體的の迫害記事は記錄の殘存と散亡とに由て詳疎一樣で無いのは據ろないが、單なる記述よりは一見明白に迫害の全的概念を與ふるは著者の作つた迫害地圖と殉教者の血族一覽表とである。係うした地圖や表を見ると、迫害が全國的に行はれて三族までも夷げられてるのが一目瞭然で、切支丹剿滅が徹底的に峻嚴であつたのを戰慄せしむる。日本の歷史は戰爭の連續で、殺戮行刑は殆んど常事となつてゐたが、武士の情は敵に向つても注がれてゐたので、陣亡の敵は厚葬し、降將は優遇し俘虜は保護し、主將の首を刎ねても三族の罪を問はなかつたもんだ。齊だ獨り宗門に對しては寸毫も假借せず、啻に死に處するばかりでなく、及ぶだけ苦痛を與ふる爲め有らん限りの殘酷なる刑罰を工風し、且三族までも絶やして遺孽なからしめた。本書の殉教者血族一覽表を見ると、一族代る〲に磔殺され□殺され炙殺され烹殺され坑殺された當時の慘刑を思起して膚へに粟を生ずる。

が、此の日本の歷史あつて以來の最極の慘事を報告する著者の態度は學者の沈着を少しも失はないで、丁度裁判官が判決理由書を書くやうに冷靜なる事實の說明を與へるだけで少しも熱しない。卷末附載の『迫害の心理』は畫龍點睛で、著者の滔々の雄辯は此の一篇を借つて忽ち積水を一時に決したやうに滾々として横流する。學者の沈着を守るに極めて愼重な著者は如何に横流奔騰しても留まる處で留まつて決して矩を越えないが、著者が本書所揭の材料を論證して歸納した決論の本旨は巧みに奔流で蔽ふても隨所に隱見して糢糊として認められる。

『切支丹禁制の終末』は前者の殘篇ともいふべきもので、慶應及び明治初期の浦上鄕を中心としての迫害から續いて禁教撤廢の顚末に及んでる。寛永以來三百年間の迫害に堪えて來た彼等の殉教精神は決して衰へてはゐなかつたが、其頃のは殘火のプス〲と燃ゑる餘熱であつて青い火花を散らす烈火では無かつた。迫害も亦禁教前後のは激しい憎惡と呪咀に燃ゑてゐたが、德川末期のは法の峻嚴なる勵行に過ぎなかつた。隨つて初期の殉教者のサンタ瑪利亞と叫んで勇んで死に就いた壯烈の劇的光景を示したに反して、末期の殉教者は群羊の猛犬に追はれるやうな哀れさを見せたゞけである。且資料の缺乏は初期も末期も同一であるが、僅に殘存してゐるものでも初期のは內容の豐かな記錄や傳奇的興味に富んでる文獻があるが、末期のは地方の

役人の留め書や農民等の日牌だけでシカモ極めて貧弱である。前者に比べて後者が殘つてゐるのは據ろないのである。

明治の初期の迫害に就ては當時の關係者の手錄が傳寫されて折々坊間にも見え、押收されたコンタスやメダルの類が好事家に秘ばれてをる。當時の官憲や受難者の中にはマダ生存してゐるものもあるし、然らざるものもマダ子か孫の代だから記憶が新らしいので眞相が解つてゐる。此の生存者や或は其子孫から聞いた話が集められてボツ／＼公教青年會の機關『カトリツク』にツイ二三ケ月前まで連載されてゐた。多分此秋に出版される豫定の『公教會の復活』の後編の一部であらう。

姉崎君が自ら序文にことはる如く、遭難の一々の物語は『公教會の復活』に讓つて本書は公けの方面だけを書いたのだらう、自然前者に於ける如き傳奇的興味に缺けてをる。其の代りには公邊の資料に富み、從來餘り知られなかつた機密の材料を多く提供してをる。例へば禁教撤廢が外國公使の抗議に起因してゐるは誰も知つてゐるが、是等の對外交渉や、廟堂の大官の意見や討議や、僧侶や神官や民間學者の迷信や種々の異論が百出して愈々邪宗門禁制の高札を撤去するまでには幾多の曲折を經てをる。最後が岩倉大使の歐米巡遊に各國の政府及び國民から勸告や難問を受け、結局信教自由を許すに非らざれば到底圓滿なる國際關係を維持する事の困難なるを知つて終に邪宗門禁制の高札を撤去するに到るまでの經過が可成委しく詳述されてをる。

此問題は日本の開國史の重要事件で、姉崎君も說く如く、鎖國したのが外教途絶の爲めであるなら開國した以上は禁制を解くのが必然の結果である。宗教が國家と衝突するは本質上當然であるが、同時に國家と同化する妥協性をも持つてるのは歷史的に證明される。エズイツトが果して宗教を國土簒奪の道具とした乎ドウ乎は姑らく措いて、基督教も亦國家に貢獻しつゝあるは切支丹禁制撤去以來五十年を經たる今日立派に證明されてをる。切支丹迫害は今では過去のローマンスとなつてるが、幕府の徹底的な撲滅策は見事に効を奏したので、何等の理由なしに外教を蛇蝎の如く毛嫌をする偏見は今でも猶ほ民心に浸潤してゐる。維新の當初にあつて廟堂の大官を初め世界的に目覺めた相當理解のある進取的政治家が、切支丹問題となると邪宗の偏見に捉へられて、結局解禁の餘儀なきを知りつゝも愈々の最後まで斷乎として禁制を撤廢する事が出來なかつた迂餘曲折の經過を讀むのは極めて興味がある。啻に獨り切支丹問題のみならず政治上にも社會上にも明治の文化の發達は皆同じ經路を踏んでゐる。新らしい文化を遮斷し若しくは入るゝに躊躇し或は狐疑する保守思想家は顧みて深く考へなければなるまい。

姉崎君の序文の末尾に、『此問題に對する興味が現代の人々(著者自らをも含めて)に存外多いのは何故だらう。此處にも亦面白い問題があらうと思ふ』とあるは頗る味ふべき節がある。著者が若し學者の默德を破つて百尺竿頭一歩を進むるの大雄辯を揮つたなら、百萬の援兵を得たるよりも力強く思ふて感謝するものが其處此處に有らう。但し今日の切支丹研究熱の流行は必ずしも姉崎君が序言に匂はすやうな理由からばかりでは無い。寧ろ然ういふ全く無交渉な方面に切支丹研究の興味が專ら沸湧してをる。

一體史傳は文藝に次いでの讀書の興味の中心であつて、ローマンチックな史話が所謂大衆文藝と同樣に喜ばれるは勿論、極めて專門的な史學的考證すらが意外に廣く讀まれてゐる。殊に正史のブランク・ページたる秘史となると、"Hidden treature" に對する如き好奇心を誘られて往々小說以上の興味を湧かす事がある。平家の殘黨や義經再興の物語がイツデモ新らしい興味を以て迎へられて、ドンナ愚書でも相當に廣く讀まれる。切支丹研究の流行も亦此の秘史に對する興味に外ならんので、三百年來全く秘密に包まれてゐたのが段々明るみへ持出されると意外な大きな足跡を殘してゐたのが解つたから、俄に興味を沸騰したのである。丁度古墳が發掘されて珍らしい遺物が發見されたのが解ると、考古に興味も知識も無い權兵衛太郎兵衛までが遺物のカケラを拾ひに集まるやうなものだ。さらぬだに秘史中の秘史と云ひ、東西文化接觸の管鍵と云ひ、國史中の最も悲壯な最も深酷な頁を作る資料であるから、秘密の幕が暗黑から黎明へと段々明るくなるほど愈々興味を沸熱して來たのである。

東西文明の接觸劇は家康の鎖國で一と先づ幕となつたが、其の中休みの長い幕間も長崎を通じて細々ながら繼續してゐたので、暫らくして黑船渡來の二番目の幕明きとなつた。が、此の二タ幕目も舞臺が幾度も代つて切支丹禁制の撤去で幕となつたが、此の接觸劇は之で終つたのでは無い。今でも猶ほ續いて進行しつゝあるので、其の過程は大きくても小さくても同じ波長を作つてるのだから、何百年前の受難劇が現代の我々にも共感する。切支丹研究は恁ういふ理由から流行するので、之から先きも時に由て冷熱はあらうが絶えず新らしい興味を刺戟するだらう

(16)『吉利支丹文學抄』

村岡典嗣氏の『吉利支丹文學抄』は題名が示す如く耶蘇會士の傳道文書の抄本である。是等の耶蘇會版は傳存が極めて少なく、日本に存在しないものが多いから、今日では宋元或は平安鎌倉時代の冊子本や古抄本よりも貴いのである。且所在さへ明

かでなく、多少見當のつくものでも准國寶的に扱はれてゐるから勿論複刻されやうもなく、今日では何かの機會の折に硝子越しに見る外は無いのだから、村岡氏が世界一本と稱する英佛圖書館の藏儲から謄寫し來つた本書を刊行寄與されたは學界の喜びであつて、學術の爲めに稀珍を私くしゝない氏の學者的志氣を深く多とする。

本書の卷頭を飾る序說は所謂耶蘇會版の書史と解題ど、邦文傳道書の代表としての著名なる『妙貞問答』の解說とで百頁に涉つてゐる。所謂切支丹文學の大綱は略ぼ之に由て窺へるので、書史學に關する最近の最も有力なる且最も興味の豐かな論文である。必ずしも切支丹研究と云はず、日本の文化史又は中古文獻に沈潛するものは日本の文學の進化の重要なる過程としての切支丹文學の位置を認め、村岡氏の序說の大概なりとも通讀し置くべき必要あらん。

本書の本文は四種の耶蘇會版の傳道文書の抄錄である。其中の一種が漢字假名交りの當時の時文である外は羅馬字綴りを國字に改めたのであつて、日本の文章の進化上見免せない特異の文型である。卷末には附錄として三種の語彙と引用聖句の索引を附載する。耶蘇會士の文は一種特異の文型がある上に、獨特の用語があり、教會慣用の歐語を交ゆるゆゑ讀馴れないものは頗る讀辛く、往々理解しにくい章句がある。語彙三種は此の難解の語句を集めた切支丹文學研究の栞で、著者の苦辛と親切とは感謝を値ひする。

抄錄の中殊に興味の深いのは中世紀の基督教國を通じて信仰されてゐたといふ佛陀傳說の『聖ばるらあんと聖じよさはつの御作業』である。聖じよさはつといふは印度の太子悉達で、夙くから人間の無常を觀じて切支丹に歸依したるを、切支丹を好まざる父王が憂ひ悲みて、太子の爲めに新たに宮殿を營み、美人を侍かせて歌舞音樂の歡樂に興じさしたが、榮華に飽かせれば飽かせるほど益々人間を厭離して切支丹の信仰を深くしたといふ物語の筋である。聖ばるらあんといふは阿羅邏仙か阿陀羅仙に當る伴天連である。果して佛陀傳說かドウかは研究する餘地があらうが、佛陀らしい物語である。伴天連阿羅邏仙は黃表紙にもありさうで微笑される。

之に就て憶浮べるは佛耶同祖說である。西藏には夙くから佛在世の日、遠く西天から如來の法德を慕ふて來竺せる沙門があつて、隨身して如來の獅子座に侍する數年、成道して再び西天に歸つたといふ傳說があるさうだ。基督傳とソックリ其儘の何とか尊者だか何とか菩薩だかの傳記があるさうだ。佛と基督とは五百年の時代の差があつて隣家同士に生れたからつて遭う筈

は無いが、古代の年暦で五百年ぐらゐの差は實は歴史家の匙加減で伸びも縮みもするのだから、基督が釋迦の弟子であつたり、釋迦が伴天連阿羅邏仙からばうちいずもを受けた切支丹であつたりするはK氏の日本古代史ほどに荒唐不稽では無い。佛耶同祖説はマダ研究すべき餘地があるので、必ずしも小説と斷定すべきでは無い。が、宗教起源説は問題外だから省略するとして、佛教國の日本へ切支丹を弘めやうとするに方つて佛陀を切支丹とする傳説を傳道のトラクトとしたは伴天連も中々隅へ置けない商賣上手であつた。

上記に次いで興味深く讀んだのは『さんふらんしすこの御作業』であつた。ふらんしすこの傳記は最近に著譯されたものも數種あつて一向珍しくないが、最近に寧ろ基督教外の士女に渇仰されて聖賢崇拜の中心となつたアッシジの聖人の傳記が三百年前既に讀まれてゐたといふは極めて興味が深い。其中に、はたごやの亭主が此の街道を如何なる侍大名が通るかと問はれて、左様なる人幾人通るか數を知らぬが誰なるか分ち難しと答ふるといふ比喩に、せいざるもあれしあんでれも秦の始皇も延喜聖帝も通り給ふが通り給はぬかも見わけぬ體也とあるは如何にも當時の邦人の布教師の筆らしくして頗る興味がある。

『こんてむすむんぢ』は若樹文庫の著名な國字本耶穌會版で好書家間に知られてをる。トーマス・アケンピスの名著の飜譯で、エソップに次いでの最始の國譯歐文學である。爰に收められたのは林氏の藏本からで無くてボドレイアン文庫の羅馬字本から拔萃したのである。羅馬字本は一五九二年版で、國字本は之より十四年遲れた一六一〇年版である。林氏が私刊して頒つた玻璃版標本の目錄一頁と本文一葉とを併せ視るに大體は同じであるが聊か字句の相違する個處がある。國字本が羅馬字本を書改めたに過ぎないのは想像されるが、多少でも字句に相違あるを以て推すと若干改訂を加へたのでは無いかと思はれる。尤も此の二三頁の字句の相違は修正する必要の無い無用の修正で、或は國字本に改める際の粗漏か誤記では無いかと思はれるが、左に右く全部を對校考勘する必要がある。夫に就けても林氏の國字本『こんてむつすむんぢ』の一日も早く複製されん事を切支丹文學研究者を代表して深く切望する。

日本に現存する切支丹文學の最大貴重書として知られる天草刊行の一五九二年版の『ドチリナ・キリシタン』の複製は既に印刷成つて今秋某氏の研究を添えて發行される豫定となつてをる。久しく絶版中のサトウの『耶穌會版書史』も著者の校訂手入本の複製が某氏の追加書目を附載して今秋發行されやうとしてをる。長崎から發行される長崎叢書中にも村上氏和譯の作

連の布教通信を初め切支丹物が加へられるさうだし、絶版中の『公教會の復活』の前篇も今秋は未刊の後篇と一緒に發行されるさうだ。此の以外アジュタで發見されたルイス・フロイス藁本日本史の獨譯本は三冊の中の第一冊が二三ケ月前新著して其の紹介や一部の抄譯が二三の雜誌に見えたが、某々氏等が既に飜譯に着手してゐるといふ噂もある。切支丹が人氣問題であるは最近の『新小說』の南蠻紅毛號が同誌としてはやゝ硬過ぎたに拘らず相當の成果を收めたといふのでも明かで、切支丹の秘史及び切支丹文學の研究は之から先きが益々盛んになるだらう。

私の讀書放浪は一つ名著に餘り低徊し過ぎた。私が此の夏の炎熱を忘れるべく書齋巡禮を思ひ立つて案頭几邊に集めた新刊近刊は三十三番は愚か八十八ケ所も有らう。之だけ一巡するには餘程駈足で、マラソン競爭でもするツモリで取掛らねばならないが、坊主がお勤めの經を誦むやうな日課念佛的の讀書は私には出來ない。日和番匠（ひよりばんじやう）で一日に二三冊片附ける事もあるが二三日掛つてヤツトコサと一冊卒業する事もある。捻り鉢卷で油汗をタラ／＼垂らしつゝ馬力を掛けても一千何百頁といふやうな大冊を一と通り目を通すには四日や五日は掛る。讀書は決して樂なものでは無い。だが、何十年振とかいふきのふけふの無風熱氣の九十何度をも氷を噛みつゝも忘れる事が出來るのは亦讀書のお庇である。

私の座傍には披讀を誘る近刊がマダ二三十冊控へてゐる。之だけを卒るには夏の長さを二倍しても追付かない。讀書を閑人の仕事のやうに冷笑するものがあるが、讀書家ぐらゐ恐らく多忙な生活を送るものは無からう。一冊を讀終る遑も無い中に復た一冊が現れるので、殊に此頃のやうに名著大著が續出してゐ毎日新刊と追駈けツこをして息をつく暇も無い。加之ならず、新著を追駈けるばかりで無く、無盡藏の古い書物の中からも丁度金掘りが廢坑から新らしい鑛脈を見付けやうとする如くに蟲に閉ぢられた黴臭い頁をもめくらねばならない。讀書家となるのは岡目で見るやうに氣樂なものでは無い。

だが、恁ういふと左も精勵な讀書家を任ずるやうで些か赤面するが、私は實は大の怠け者だ。讀書すると云つても日和番匠の遊戯半分で肩の張るやうなものは一向讀まない。夫でも相應に忙がしい思ひをする。學校を離れてからは何十年一日の如く書物らしい書物を手にした事も無くて、讀書は閑人の業などと利口振つて、賄賂を取る事と待合に遊ぶ事の外は芋の煮えたも御存じない不讀書階級は誠に後生樂な幸福人である。（鳥渡茲で一服息休めをする。）

山を思ふ

石川欣一

山に登る理由

山の旅から歸つて來ると、どうもあとがよくない。いろ〳〵なことが詰らなくなる。何をしていゝのか判らない。「ワーッ！」と騒ぎでもしないと、やり切れないやうな氣がする。仕事が手につかぬ。――つまり急激な變化が生活に起つた後だからであらう。心とからだとのエクイリブリウムが打ちこわされるからであらう。

まつたくこれ位、急激な變化はあるまい。山の道具をつめたスーツケースを梅田の驛にあづけておいて、自分は會社に出る。所謂五分の隙もない夏服、ネクタイ、靴下、白い靴、その晩は二等の寢臺にねて、翌朝はもう山の麓である。宿屋なり、友人の家なりに着くとスーツケースをあけて、登山の仕度をする。夏帽子は古いフエルトに變る。瀟洒な夏服は、千年着古したホームスパンに變る。やはらかい、薄いシャツは、ゴバ〳〵したカーキのシャツになる。クロックスの入つた絹の靴下は脱いで、あつぽつたい、不細工な、ウールの靴下を三足もはく。白い、どうかするとダンスでも踊りさうな靴のかはりに、大きな鋲をベタ一面に打つた登山靴をはく。一年中ペンと箸とナイフ位しか持つたことのない右手は、アイスアックスの頭を握る。かくて山へ！

すでに一歩山に入ると、その前日までコクテール グラスの外側に浮く露を吸つてゐた唇は、直接に雪解の溪流に觸れる。大阪ホテルのシャトウブリヤンを鹽からいと思つてゐた舌は、半煮えの飯を食道へ押し込み、固い干鮭の一片を奥齒の方へ押してやる。更に夜となれば、前夜寢臺車のバースがでこぼこで眠れなかつたといふ背中が、あるひは小屋のアンペラに、又は礫まじりの砂の上に、平氣で横たわつて平氣でねる。

夜があける。顔を洗ふでもなければ、齒をみがくでもない。一つには水がつめたくて手を入れたり、口にふくんだり出來ないからもあるが、それよりも「こゝは山だ。顔なんぞ洗はなくつてもいゝんだ！」といふ氣がするからである。髯は勿論剃らぬ。これが自宅にゐると、顎の下に三本殘つても氣にする性質の男なのである。

今度私は山に行つて、つく〴〵と考へて見た。自分は一體何をしに登山するのだらうかと。

勿論六根淸淨を唱へる宗敎的のものではない。岩石や植物を研究するには素養が足りぬ。遊覽を目的とするにしては、勞働が激し過ぎる。「征服する」べく、北アルプスの山々はあまりに親し過ぎる。高い所に登ることが、別に精神修養になるとも思はぬ。三十を越した私に取つては、深夜酒に醉つて尾崎放哉の句を讀む方が、よほど精神修養になる。もとより山岳通にならんが爲ではない。ローカルカラーを得る爲でもない。

要するに何の目的もないのに私は登山する。常に登山がしたい。絶えず山を思つてゐる。

山、山、といふと大きいが、實を云へば私の登つてゐる山の數は至つてすくなく、また地方的にもかぎられてゐる、即ち、藏王、磐梯、赤城、筑波、八ケ岳その他若干の低い山を除いては、信州大町から針ノ木峠、五色ケ原、立山溫泉と線を引いた、その線の北の方ばかりである。これには原因がある。即ち白馬は私が最初に登つた高山であり、從つて、自然、あの方面に引きつけられるのと、十數年前、最初に白馬に登つた時以來のよき友、百瀨愼太郎が大町に住んでゐるとの二つである。

かくの如く私の知つてゐる山はすくないが、山を愛する心は人一倍深い。何故であらうか。

私は第一に私自身が、完全なる休息を樂まんが爲に山に登るのであることに氣がついた。即ち、ありとあらゆる苦しみをして山を登つて行く。平素運動をすこしもしてゐないのだから、ひどく疲れる。日光と風と雪の反射だけでも疲れる。汗水を流して登つて行くと、咽喉は乾く、ルックサックが肩に喰ひ入る。かかる時、例へば針ノ木峠のてつぺんに着いてあのボコボコした赤土の上に、ルックサックを投げ出し、横手に生えた偃松に、ドサリと大の字になつた氣持。あれこそは完全な休息、Complete rest である。

もつとも疲れて休むことを望むのならば何もわざ〳〵山に登る必要はない。庭で草をむしつてから、緣側に腰をかけてもいいし、須田町から尾張町まで電車と競走してから、カフェー

タイガアに入つてもいゝ。いゝ譯だが違ふ。まるで違ふ。Complete rest は自宅の緣側や、カフエーの椅子では得られない。

その理由は、私が思ひついた第一の目的に關係してゐる。私は考へた。私が山に登り度いのには、野蠻な眞似、換言すれば原始的な行爲を行ひたい希望が、私の心の中にひそんでゐるからであらうと。

都會に於る私は一個の文明人である。衣食住すべて、現代の日本が許すかぎり、また私の收入に於て可能なる丈、文明的にやつてゐる。また衣食住以外の不必要品――而も一個の文明人にあつては必要品である所のものに就ても、かなりな程度のディスクリミネーションを持つてゐる。ワイン　グラスで酒を飲まず、リキユール　グラスにコクテールを注がぬ等の知識は、生活には不必要にして而も必要なことなのである。

所が一度山に入ると、先づ第一にかくの如き「文明人なるが故に必要な條件」が、ことごとく不必要になる。單純に生きること丈を營めばよいのである。都會にあつては、銀のシエーカアを振る指も、山では岩角につかまる。つかまらなければ下の雪溪に墜ちて死ぬからである。かなり洗錬された、うるさい口も、山では半煮飯を平氣で喰ふ。喰はなければ腹が空つて、死んで了ふからである。寢臺車のバースを固いといふ身體が、小屋の板の上で安眠する。その日の運動につかれた身體は、また次の日の勞働を豫期して、文明人のディスクリミネーション以上に睡眠を强ひるからである。タクシイはスプリングが惡いから、ハイヤに限ると云つてゐる脚も、山では無理に歩かせられる。どうでもかうでも、野營地まで着かなくては仕方がないからである。（かう書いて來ると如何にも私が贅澤な、豪奢な生活をしてゐるやうだが、實はさうでない、こゝには只「文明人」としての私の半面を高調したにとゞまる。）

萬事かくの如くである以上、山に入る服裝は極端に「人としての必要品だけ」を標準として行はれる。文明人としての必要品は、一際不用なのである。帽子は、日光や雨や風をよける爲にかぶるので、文明人だからかぶるのではない。靴は、素足では痛いからはくのである。登山服は、普通の背廣よりも丈夫で、且つ便利だから着るのである。アイスアックスは手が淋しいから持つのではなく、急な雪溪にステツプを切る必要があるから持つのである。

服裝は人の心を支配する。都會にゐる時には、椅子に腰をかけるにもヅボンの折目を氣にする人も、山に入れば古ヅボンをはいてゐるのだから、平氣で土の上に膝を折る。また、如何に

新しい登山服を着てゐても、「この岩の横裂面は、四つ匐ひにならなくては通れぬ」とすれば、ヅボンなどは構つてゐられなくなる。命にかゝわるからである。

服裝、準備、その他がすべて必要品だけであるから、登山者も、必要品だけを使用して必要なこと丈を行ひ、必要なこと丈を考へる。六ケ敷く云へば原始的になる。瀬戸引のコップ一つが水飲みになり、汁椀になり、茶椀になり、ある時は傷を洗ふ盤になる。一本のナイフが肉を切り、枝を切り、獨活の根を掘り、爪を切る。一着の衣服が寢間着になり、晝着になる。山中で人に逢へば即ち訪問服となる。これ等はみな人類の先祖がやつてゐたことである。

更に、疲れたらどこでも構はず腰を下し、小便がしたかつたらどこへでもジャー／＼やる自由さ――人間としては當然のことであるが、文明人としてはゆるされてゐない。――殊に星空の下、火をたいて身體をあたゝめる快樂に至つては、いづれも我等の先祖が經驗した處のものである。

私がゐた頃、米國では盛に Back to nature――自然にかへる――といふことが流行した。何をしたかといふど、きたない着物を着て、野原や林へ出て行く丈である。つまり野蠻な眞似がしたいのである。又、ボーイスカウトなんてものも、やつてゐる連中はいろ／＼と七面倒な規則や理屈をつけるかも知れぬが、要するに、路をさがしたり、焚火をしたり、つまり子供の持つてゐる野蠻生活へのあこがれを、巧に利用したい企なのである。

米國ついでに、もう一つ米國の話を持ち出すと、私のゐた大學、プリンストンの寄宿舍には、全部ではないが、オープンファイヤプレースを持つ部屋が澤山あつた。大きな薪を燃やす爐である。寄宿舍には勿論完全なスティームが通つてゐるのであるから、何も顏ばかりほてつて背中の寒い爐を置く必要はないやうだが、それでも、態々スティームを閉め切つて、薪を燃す連中が澤山ゐた。何故薪の方がいいのか判らぬ。どうも人間、あまり文明的になると、反對に野蠻な生活が戀しくなるものらしい。すくなくとも私はさうである。そして、最も野蠻に近い生活が許されるが故に、私は山に登るのである。

可愛いゝ山

岩と土とから成る非情の山に、憎いとか可愛いとかいふ人間の情をかけるのは、いさゝか變であるが、私は可愛くてならぬ山を一つもつてゐる。もう十數年間、可愛いゝ、可愛いゝと思

つてゐるのだから、男女の間ならばとつくに心中してゐるか、夫婦になつてゐるかであらう。いつも登り度いと思ひながら、まだその機會を得ぬ。今年の秋あたりには、或は行くことが出來るかも知れぬ。もつとも山には、登つて見て初めて好きになるのと、麓から見た方がいゝのとある。私が可愛いゝと思つてゐる山も、登つて見たら存外いやになるかも知れぬ。登つて見て、詰らなかつたら、下りて來て麓から見ればよい。

この山、その名を雨飾山といひ、標高一九六三米。信州の北境、北小谷、中土の兩村が越後の根知村に接するところに存在する。元より大して高い山ではないし、また所謂日本アルプスの主脈とは離れてゐるので、知つてゐる人はすくなからう。あまり人の知らぬ山を持つて來て喋々するのは、すこしいやみだが、私としてはこの山が妙に好きなので、而もその好きになりやうが、英語で云へば Love at first sight であり、日本語で云へば一目ぼれなのである。

たしか高等學校から大學へうつる途中の夏休であつたと思ふ。あたり前ならば大學生になれた悦しさに角帽をかぶつて歩いてもいゝ時であるが、私は何んだか世の中が面白くなくつて困つた。あの頃の青年に有勝ちの妙な神經衰弱的厭世觀に捕はれてゐたのであらう。その前の年までは盛に山を歩いてゐたのだが、この夏休には、とても山に登る元氣がない。それでもとにかく大町まで出かけた。氣持が進んだら、鹿島槍にでも行つて見る氣であつた。

大町では何をしてゐたか、はつきり覺えてゐない。大方、ゴロ〱してゐたのであらう。木崎湖あたりへ遊びに行つたやうな氣もするが、たしかではない。

ある日――もう八月もなかばを過ぎてゐたと覺えてゐる――愼太郎さんと東京のM呉服店のMさんと私とは、どこをどうしたものか、小林區署のお役人と四人で白馬を登つてゐた。如何にも妙な話だが、そこ迄の時の經過を忘れて了つたのである。Mさんは最初の登山といふので元氣がよかつた。お役人は中老で、おまけに職を帶びて登山するのだから、大して元氣がよくもなかつた。愼太郎さんと私とは、もうそれ迄に白馬には登つてゐたばかりでなく、何だか悄氣てゐた。少くとも私は悄氣てゐた。愼太郎さんはお嫁さんを貰つたばかりだから、家に歸り度かつたのかも知れぬ。

一行四人に人夫や案内を加へて、何人になつたか、とにかく四谷から入つて、ボコ〱と歩いた。そして白馬尻で雪溪の水

を徒渉する時、私のすぐ前にゐた役人が、足をすべらしてスポンと水に落ちた。流が急なので、岩の下は深い。ガブツ！と水を飲んだであらう。クルクルと廻つて流れて行く。私は夢中になつてこつち岸の岩を三つ四つ、横つ飛びに、下流の方へ走つた。手をのばして、流れて行く人の手だか足だかをつかまへた。

流石は山に住む人だけあつて、渓流に落ちたことを苦笑はしてゐたが、その爲に引きかへすこともなく、この善人らしい老人は、直ちにまた徒渉して、白馬尻の小屋に着いた。こゝで焚火をして、濡れた衣類を乾かす。私はシャツを貸した。

一夜をこゝで明かして、翌日は朝から大變な雨であつた。とても出られない。一日中、傾斜した岩の下で、小さくなつてゐた。雨が屋根裏――即ちこの岩――を傳つて、ポタポタ落ちて來る。氣持が惡くて仕方がない。色々と考へたあげく、蠟燭で岩に線を引いて見た。傳つて來た雫が、こゝまで來て蠟にぶつかり、その線に添ふて横にそれるだらうとの案であつた。しばらくはこれも成功したが、間もなく役に立たなくなる。我々は窮屈な思をしながら、一日中むだ話をして暮した。

次の朝は奇麗に霽れた。雨に洗はれた山の空氣は、まことに清淨それ自身であつた。Mさんはよろこんで、早速草鞋をはいた。然し一日の雨ごもりで、すつかり氣を腐らした私には、もう山に登る氣が起らない。勿論大町へ歸つても、東京へ歸つても仕方がないのだが、同樣に、山に登つても仕方がないやうな氣がする。

それに糧食も、一日分の範圍で、少し豫定に狂ひが來てゐる筈である。私は歸ると云ひ出した。愼太郎さんもすぐ贊成した。何でも、同じ白馬に十四度登つても仕方がないといふ樣な、大町を立つ前から判り切つてゐた理屈を申し述べた事を覺えてゐる。かくて我々二人は一行に別れて下山の途についたのである。

私は、いさゝか恥しかつた。といふより、自分自身が腹立たしかつた。前年、友人二人と約十日にわたる大登山をやり、大町に歸るなりまた愼太郎さんと林藏と三人で爺から鹿島槍に出かけたのに比して、たつた一年間に、何といふ弱りやうをしたものだらうと思つたからである。だが、朝の山路はいゝ。殊に雨に洗はれた濶葉樹林の路を下るのはいゝ。二人はいつの間にか元氣になつて、ストンストンと速足で歩いた。

この下山の途中である。ふと北の方を眺めた私は、桔梗色に澄んだ空に、ポッカリ浮ぶ優しい山に心を引かれた。何といふいゝ山だらう。何といふ可愛らしい山だらう！雨飾山といふ名は、その時愼太郎さんに教はつた。愼太郎さんもあの山は大好きだといつた。

この、未完成の白馬登山を最後として、私は長いこと山に登らなかつた。間もなく私の外國生活が初つたからである。一度日本に歸つた時には、今つとめてゐる社に入つたばかりなので、夏休をとる譯にも行かなかつた。翌年の二月には、再び太平洋を渡つてゐた。

だが雨飾山ばかりは、不思議に印象に殘つてゐた。時々夢にも見た。秋の花を咲かせてゐる高原に立つて、遙か遠くを見ると、そこに美しい山が、ポカリと浮いてゐる。空も桔梗色で、山も桔梗色である。空には横に永い雲がたなびいてゐる

まつたく雨飾山は、ポカリと浮いたやうな山である。物凄いところもなければ、偉大なところもない。怪奇なところなぞはいさゝかもない。只優しく、桔梗色に、可愛らしい山である。

大正十二年の二月に歸つて來て、その時の四月から、また私は日本の山と交渉を持つやうになつた。十三年には久しぶりで、大澤の水を飲み、針ノ木の雪を踏んだ。十四年の夏から秋へかけては、むやみに仕事が重なつて大阪を離れることが出來なかつた。だが今年はとうとう山に登つた。

六月のはじめ、愼太郎さんと木崎湖へ遊びに行つた。ビールを飲んで晝眠をして、さて歸らうか、まだ歸つても早いし、といふ時、私はこゝ迄來た序に、せめて神城村の方まで行つて見やうと思ひついた。一つには新聞社の用もあつたのである。北アルプスの各登山口に就て、今年の山に於る新設備を聞く必要があつた。そこで自動車をやとつて出かけることにした。

木崎湖を離れてしばらく行くと、小さな阪がある。登り切ると、ヒヨイと中綱湖が顏を出す。續いてスコツトランドの湖水を思はせるやうな青木湖、その岸を走つてゐる時、向ふにつき出した半島の、黒く繁つた森の上に、ポカリと浮んだ小さな山。「あゝ、雨飾山が見える！」と愼太郎さんが叫んだ。「見える、見える！」と私も叫んだ。

左手はるかには白馬の山々が、恐ろしい程の雪をかぶつてゐる。だが私どもは、雪も何も持たぬ、小さな、如何にも雲か霞が凝つて出來上つたやうな、雨飾山ばかりを見てゐた。

青木湖を離れると佐野坂、右は白樺の林、右手は急に傾斜して小さな盆地をなしてゐる。佐野坂は高瀨川と姬川との分水嶺である。この盆地に湛へる水は、即ち日本海に流れ入るのであるが、とうてい流れてゐるものとは見えぬ位靜かである。

再び云ふ。雨飾山は可愛いゝ山である。實際登つたら、あるひは藪がひどいか、水が無いかして、仕方のない山かも知れぬ。だが私は、一度登つて見たいと思つてゐる。信越の空が桔梗色に澄み渡る秋の日に、登つて見たいと思つてゐる。若し、案に相違していやな山だつたら、下りて來る迄の話である。山には登つて面白い山と、見て美しい山とがあるのだから……

平の二夜

信川から越中へ

こゝろみに地圖を開いて見る。信州と越中との國境は、南は標高二八四一米のレンゲ岳（三ツ又）に始り、うね／＼と屈曲してゐはするものゝ大體に於て眞北を指し、野口五郞、烏帽子、蓮華、針ノ木、爺、鹿島槍、土龍、唐松等を經て北、三千米に近い白馬岳に至る約二十里の山脈の上を走つてゐる。故に信州から直接越中へ出るには、どうしてもどこかで山を越さねばならぬ。大黑(二四〇五)を越して祖母谷、猿飛へ出るのもよい。中房から東澤乘越を經て高瀨川の上流へと下り烏帽子へとついて南澤から黑部川へ出ることも出來る。籠川入をして扇澤から爺（二六六九）の西南に當る棒小屋乘越を越し、棒小屋澤を下つて黑部川に落ち合ふのも一つの路である。だがこれ等のルートは、いづれも長く、且つ困難であるから、單に登山の目的で採用するのならとにかく、實用としては適してゐない。もつとも實用といへば、汽車のある今日、長野から直江津を經由して富山へ出れば一日で樂々と行けるが、比較的興味があり、深山幽谷の氣分が充分味へ、而も大した勞力なしに信州から越中へぬける路は、やはり昔ながらの針ノ木越しによることである。

松本から北へ、信濃鐵道の高速度電車で約一時間行くと、大町へ出る。大町のすこし手前で、レールは長い橋を渡つてゐるが、この橋の下を流れてゐる水は、鹿島川、籠川、高瀨川の三流が合したものである。くはしくいふと、鹿島、籠の二川は高瀨川の支流であるが、そんなことはどうでもいゝ。要するに川が三つ。從つて谷が三つ、鹿島入り、籠川入り、高瀨入りと呼んで、この三つが大町から北アルプスへ入る、自然の道路をなしてゐるのである。

針ノ木峠へ行くには、籠川入りをしなくてはならぬ。籠川は

加賀川から來たものであるといふ。この川を遡つて行くと加賀の國へ出ると云ふので、加賀川と呼んでゐたのが、いつの間にか籠川になつたのであらう。石ころの多い磧をゴロ〳〵と歩いて、足を痛くしたのは昔のことで、今は立派な道が左岸を走つてゐる。白澤、黑澤、扇澤、丸石澤などといふ激流が、左右から白い泡を吹いて落ちこんでゐるのを見ながら行くと、一日で大澤の小屋まで行くことが出來る。女でも樂に行ける。

大澤の小屋は標高約二千米のところにあるから、夏でも寒い。こゝに一泊して翌朝はすぐ針の木峠へかゝる。たいてい雪が小屋のすぐ上まで來てゐる。所謂針の木の雪溪で、上の方は中々急である。何しろ直線を引けば僅か二十町位のところを、二三時間かゝつて七八百米登つて行くのだから。

針ノ木峠は蓮華岳(二七九八)と針ノ木岳(二八二〇)との中間の鞍部にある。峠といつても二千五六百米の高さを持つてゐるのだから、下手な山よりは遙かに高い。峠の茶屋とか、「雲雀より上に」の俳句なんぞを考へて來る人は吃驚して了ふ。偃松と赤土と岩ばかりである。だから大抵の人はこゝで辨當をつかはず、鎗(三一七九)や穗高の大觀を眺めた後、すぐ峠を下りはじめる。一歩下りかければそこは越中で、所謂針ノ木谷が、つんのめるやうに黑部川へ落ちてゐる。辨當は紫丁場でつかふがよい。雪解けの水が小さな瀧をなしてゐる。

針ノ木谷を流れる水は、南澤を合して勢を増し、飛ぶやうにして黑部の本流へ流れ込む。その合流點にさゝやかな、而も黑部の溪谷では唯一の平地があり、こゝが平なのである。標高約千四百米。人々はこゝで一泊して、翌日は溫谷をさかのぼり、右手にスカイラインをなす刈安峠を越して更にザラ峠を越し、湯川の谷を下つて立山溫泉に一泊、常願寺川に添つて芳峅、千垣から汽車で富山へ出る。

この針ノ木越えの歷史は古いものである。戰國時代の勇者、佐々成政が軍勢をひきひて、冬十二月にこのルートを通過して以來(もつともこれは歷史的に證明はされてゐない)明治になつても十何年代までは物資を積んだ牛が、夏には列をなして針ノ木越えをやつた。現にその時代の道路の一部が殘つてゐるし、また牛小屋の遺物もある。

大町から富山まで、大澤、平、立山溫泉と三泊であるが、三ケ所ともに立派な小屋があり、食料、寢具は勿論、すべての物資がふんだんにあるから、大した苦勞をしないで旅行することが出來る。刈安、ザラの二峠で參つた人や、山の好きな人は、ザラ峠を下るかはりに五色ケ原に出ればよい。こゝにも小屋(大阪每日新聞が寄附したもの)がある。一泊して翌日は雄山

（立山神社がある。二九九二米）に登ると面白からう。

以上長々と針ノ木越えの說明をした。これ位のことは山岳好の人ならば誰でも知つてゐるであらうが、まるで山のことを知らぬ人や、山に登つて見たいが、どこがよからう等と考へてゐる人もあることゝ思つて、すこしくどい位くはしく書きしるした。

この平で、今年の六月のはじめ、大町の百瀬愼太郎君と、案內者の北澤淸志氏と、それから私と、三人が二夜とまつた記錄を、以下數枚にわたつて書かうと思ふ。針ノ木越えは十數年前に一度と、今回と、都合二回で、大して珍らしくもないが、平の泊りにはいろ／＼と面白いことがあつたから……

第一夜

大澤小屋から平までは、樂な一日行程であるが、朝出發するのが遲かつたのと、途中で――殊に針ノ木谷を下りる途中――氣持のいゝ所がある度ごとに長いこと休んで駄辯つたのと、只でさへ步きにくひ路の所々に殘雪がかゝつて徑を閉鎖してゐる爲に、つまらぬ迂回を屢々行つたのとで、黑部の本流に出たのはもう七時に近かつた。今迄步いて來た溪谷に比べると、こゝは流石にあかるい。すばらしい水量で激しく流れて行く川の向ふ岸には、消えかけた雪の中に板づくりの家が二軒見える。上手の小さいのは每日新聞が縣に寄附した小屋で、下手の大きいのは日本電力の出張所である。あすこには人がゐる筈なので、こちら側にある東信電氣の小屋の前を素通りして、急な絕壁へ取りかゝつた。

平で黑部川を越す方法は從來二つ。一つは有名な籠渡しによるので、もう一つは籠渡しの少し上流を徒涉するのである。籠渡しは太い針金に滑車をかけ、滑車から繩でぶら下げた板に乘つて、ブランブランと向ふ岸へ渡るのである。徒涉とはいふ迄もなく、ザブザブと水の中を步いて渡ることである。夏向きでよかろうなどと思ふ人はやつて見るがいゝ。深い所は腰の上まで、川底はゴロ／＼な石で、流れは疾い。ともすれば足をすくはれる。すくはれたら最後、手足がそろつて日本海へ出られゝば幸福である。もう十何年か前になるが、私は朝九時頃にこゝを徒涉した。盛夏で、水の量はすくなかつたが、それでも一行八人、向ふ岸へ着いた時は唇を紫色にしてゐた。今は水の多い最中で、おまけに水溫も氣溫も低い。とうてい徒涉は出來ぬ。籠渡しもこはれてゐる。だが幸、昨年の秋、二町ばかりの下流に吊り橋がかけられた。我々はこの吊り橋を渡るべく、細い路に足を踏み入れたのであつた。

二町下流といひ、川添の路といふと、黒部を知らぬ人は五六分にして吊橋に達し得ると思ふであらう。だが黒部川は「その水源地より愛本に至り、山地を離るゝまで蜿々約二十里の間は、本邦稀に見る絶壑を成し、滔々として奔流の兩涯に激越せるを見る。其の立山・白馬兩山脈の間は、地域狹隘にして支流の發育極めて短く、直ちに本流に注ぐを以て、至る處に懸谷がある。」――（吉澤庄作氏著「立山」）――ので、この路も絶壑をからみ、懸谷を横切つてゐる。而も幅は僅か一尺か二尺、ある場所は露出した岩石に、足跡をつけた程度である。我々は先づ小さな殘雪を越した。木の生ひ茂つた崖にとつついた。北澤、百瀬、私の順序で行く。もう薄暗くなつて來て足もとがあぶない。疲れてもゐる。朝から午後四時頃まで、絶えず雪の上を歩いてゐたので、輕度の日射病にでもかゝつたらしく、頭が痛む。唇がカサ／＼になる。默々として一歩一歩、注意しながら進むと、小さな谷にでくわした。吉澤氏の所謂懸谷で、いづれ路はついてゐるのであらうが雪が殘つてゐるので判らぬ。愼太郎さんが先に立つて、ステップを切りながら越した。雪を渡り切ると一間ばかり砂土が露出してゐる、足がかゝると共にザザラ！と音がして、砂ごと身體が下へ落ちる。その身體に落ちるだけの時間を與へず、ヒョイと二の足を踏み出して、續いてヒョイヒョイと下へ引つぱる力に敢て抵抗するでもなく、半は落ちながら身體は前に進めて、無事に土砂の斜面を渡り切る。

雪溪のこちら側に立つて、バットに火につけてこれを見てゐた私は、いやな路だなと思はざるを得なかつた。雪のグラデイエントは、素人の目には六十度近くに見える。とても上り下りは出來ぬ位急である。然しステップが切つてある以上、又夕暮と共に雪が幾分固くなつてゐる以上横切るとは大して苦にならぬ。よしんば辷つても、ピッケルの使用法をあやまらなければ、自分一人の身體位はとめることが出來る。雪は平氣だが、あんな風に露出した土砂は、實にいやである。一度すべつたら手も足もピッケルも用をなさぬ。下を見ると、水が狼の牙のやうな白い泡を噴き上げてゐる。落ちた日には、助かりつこない……と考へはしたものゝ、そこが矢張山を知る者の强味で、別に恐怖を感じるでもなく雪溪にさしかゝる。グン、グンと靴さきをステップに打ち込んで渡り切る。片足を砂にかける。ザラッ！と落ちる。ザザザザと通過して了ふ。しつかりした路についた時には、やれ／＼と思つた。

路は崖のかたちそのまゝに、急に右へ入つてゐる。こゝにも谷が切れ込んでゐるのである。Vの字を水平に置いたやうな深

いきれ込みである。こちらには路があるが、向ふ側は一面の砂土で――一體が風化しやすい岩石なのであらう。それが雪をかぶつて更にもろくなつた所へ、上から雪崩が落ちて來たので、ザラザラになつてゐる――その灰色の斷崖には、いくら見ても、どう考へても、路らしいものが見えぬ。

Vの字の底には固い雪が殘つてゐる。北澤は荷を下して、雪の所まで様子を見に行つた。私と愼太郎さんとは、立つた儘、リユツクサツクを唐檜の根にもたせかけて、休んだ。非常に傾斜の急なところに路をつくつたので、こんなことが出來るのであらう。

「おい。その邊に下へおりてる路はねえかい。」

私は二三間引きかへして見た。

「ないよ。」

「上へ行つてる路もあるめえな。」

「ない。」

「向ふにや路がねえだな。」

「雪崩で崩れちまつたんだらう。」

「どうするかね。」

「どうしませうね？」――これは愼太郎さんが私に聞いたのである。

「さあ。」

北澤が歸つて來た。日電の小屋には人がゐないのぢやあるまいかといふ。なる程あかりが見えない。一度怒鳴つて見やうといので北澤がオーイ、オーイと大きな聲を出したが、返事もなければ燈火も見えない。

再び、どうしやうといふ相談が起つた時に私は云つた――

「歸りませう。こんな所でウロ〳〵してゐても仕方がない。大部つかれて來たし、足もとが惡いから、若し辷りでもしやうものなら莫迦げてゐる。今晩は東信の小屋で泊つて、あしたゆつくり路をさがしませう。日電の小屋が面白かつたら、あした一日遊んでもいゝし、若しいよ〳〵路が分らなければ大町へ引きかへしてもいゝんだから……」

籠渡しの二三丁下に、吊り橋の出來てゐることは知つてゐる。路があるにせよ無いにせよ、とにかく右岸を傳つて、吊り橋に出られることは知つてゐる。現に五日の日、富山から大町にぬけて來た法政と商大との學生は、日電の小屋から吊り橋を渡つて、針ノ木谷、針ノ木峠、大澤と、我等の路を逆に來たのである。對山館で泊り合はしたのだから、あの二人、ことに芦峅から案内して來た光次郎に、もつとよく聞けばよかつたのだ

が、こちら三人、殊に愼太郎さんと北澤とは、平の附近をよく知つてゐるので、行けば判るだらう、で出て來たのであつた。勿論行けば判るのだが、かう暗くなつて來ては如何な山男でも猫か梟でない限り、視力が利かなくなる。

「さうですか。それぢや歸りませう。別に急いでもなし……」と愼太郎さんは私の提議に同意した。三人は引きかへした。

東信の小屋は東西に長く、十何疊位は敷けるであらう。西、即ち黑部の本流に面した方が入口になつてゐて、さし出した屋根の下には四角な風呂桶、燃料等が置いてある。ガタピシヤな戶を明けると、中は鼻をつまゝれても判らぬ程のくらやみで、キキキと鼠が鳴く。とりあへずリユツクサツクを投げ出した私は、日と雪でピリピリする顏の筋肉を收縮させてニヤリとした。私の知人で鼠を非常に嫌ふ人が二人ゐる。往來を步いてゐて鼠の死骸でも落ちてゐると、橫丁へ曲つて了ふ位嫌なのである。私がニヤリとしたのは、この二人を思ひ出したからである。「愼太郎さんと俺でなくて、MさんとBちやんとがこゝに立つたら、二人はどうするだらう。入らないで、熊笹の上に寢るかしら。」と、語らぬことを考へたからである。

とりあへず蠟燭に火をつけて、まつくらな小屋の內に入ると中央が土間兼爐裏で、左右がアンペラ敷きになつてゐる。その土間に足を置いたまゝ、アーンとアンペラの上にねころがる。今宵の宿もきまつたといふ安心に、急につかれが出て、靴をぬぐのも億劫になる。

「御免よ！」と北澤が焚木をかゝへて入つて來た。火をつける、勢よく燃える。「ゆんべとちがつて乾いてゐるで、よく燃えるだ。」と云つたのは、前晩泊つた大澤小屋が雪に埋れてゐた爲にしめつぽく、火を燃しつけるのに三十分ばかりかゝつたからである。

燃え上る焰に照らされて、小屋の內部がハツキリする。奥の方には夜具やら米俵やらが屋根に屆くまで積み上げられ、上から大きなキヤンヴアスがかけてある。

ふと天井からつるしたランプに氣がつく。どうやら石油が入つてゐるらしい。急いで靴をぬぎ、濡れた靴下三足をむりに取つて、ランプを見に行く。果して石油が入つてゐるので、こいつは豪勇！と、學生になつたやうな氣持で火をつけた。

小屋の隅から鍋をさがし出して、それを洗ひに行つた北澤が歸つて來た。山獨活と、獨活諸と稱するすこぶる香の高い草

を手に持つてゐる。このくらやみで、どうしてこんなものを發見して來たのか我々には見當もつかぬ。

前夜泊つた大澤の小屋は、雪のために水に不自由したが、こゝはすぐ前を雪解の水が流れてゐるので、至つて便利である。愼太郎さんのと私のと、二人の飯盒に半分以上も入つてゐる晝飯の殘りを鍋で煮て、ミンチビーフの罐詰をあけ、うまいのだか不味いのだか、一寸判斷に苦しむやうなオヂヤをこしらへた。これと、獨活及び獨活蕗の味噌汁と、干鱈の燒いた奴とで晩飯にする。

飯が濟むとすることが無い。濡れた靴下を爐の上につるし、長々とアンペラに横たわつて寢る。北澤はどこからか目覺時計をみつけて來て、しきりにいぢくり廻してゐたが、「四時半に鳴るやうにしてくれねえか」と云ふから、焚火ごしに手をのばして、アラームを調節する。あしたは四時半に起きて路をさがしに行くところであつた。

焚火が消えかけると足が寒い。新しい薪をくべると、やけどしさうになる。夜中に何度も目が覺めた。風が騷ぐ。柱からつるした私の上衣の、襟の裏についてゐるひつかけが切れてドサンと顏の上に落ちて來た。風の音、黑部の瀨の音。

第二日

目をさますと、向ふ側にねてゐた北澤がゐない。ランプの光に、目覺時計だけが光つてゐる。眼鏡をかけて見ると五時一寸前。圍爐裏のとろ火には味噌汁とお茶とがかけてある。

まだ早いから、もう一度ねやうかと思つたが、目が覺めて了ふと小屋の中の煙つぽくて埃つぽい空氣がたまらなくなる。お茶を一杯と、横にころがつた瀨戸引きの水飲みを取り上ると、中には灰が澤山入つてゐる。ヅボンのポケットから、前二日間の汗と水つぱなとでヨレヨレになつたハンケチを出し、それで拭つて茶を飲む。きたないことが平氣になるから山は不思議といはねばならぬ。

愼太郎さんはよく眠てゐる。この人も私同樣、宵つぱりで朝寢坊だから、いかに山でも六時や七時には目をさまさぬ。私が早く起きたのも、實はお腹がいたかつたからである。

晝間のまゝの服裝で寢るのだから、起きるにしても手がかゝらない。上衣をひつかけ、素足に靴をはいて小屋を出る。小屋の前の、幅一尺位の流れで顏を洗ふ。口をゆすぐ。……と、誰でもやることを不思議さうにいふのには理由がある。我々は山に入ると、めつたに顏を洗はないからである。

愚圖々々してゐると寒くなつて來た。いそいで小屋にもぐり込み、白樺の太い枝を爐にくべる。ねころがつて、さてすることがない。靴下を外して見ると乾いてゐる。さるをがせのやうな油煙がついてゐる。それを丁寧に拂ひ落してはく。スウエツタアを着て、また戶外へ出る。

ふと見ると黑部川の向ふ岸に、人が二人立つてゐる。一人は北澤で、もう一人は羽織を着た人である。二人は話をしながら上の方へ行く。繩渡しの所で立ちどまつた。こちら岸の繩渡しまで行くには、大部廣い雪を步かねばならぬ。私は急いで靴の紐を結び直した。小屋の入口の、風呂桶の上においたピツケルを取りに戾つた。

「山では一番安全なところが一番危險だ。」――これは私が持つてゐる、自家製の金言である。經驗から來たものである。大正十三年の夏以來、私は固くこれを信じてゐる。平な路を步く時に、私は絕壁を橫切る時以上の注意を拂ふ。

一昨年の夏、私は大澤――マヤクボ――爺――鹿島槍といふ登山をした。最後の露營地冷ノ池に着いたのがお晝頃で、こゝに荷を下し、天幕を張つておいて、空身で鹿島槍の頂上まで行くことにした。

かうなると氣が樂である。私どもは先づ藥罐に湯をわかして、ゆつくりと晝飯を食つた。晝飯が濟んで、休んでゐる時、ふと私は越中側に生えてゐる白樺の若木に心を引かれて、何の氣もなくゆるい傾斜面を二三尺下つた。

冷ノ池は爺と鹿島槍との鞍部にある。鹿島槍自身がさうだが、冷ノ池の附近も信州側は切り立つてゐて、越中側はなだらかである。私が見に行つた白樺の若木も、このなだらかな斜面の、草地に生えてゐたのである。で、勿論杖も持たず、いはゞ鼻歌まじりで下りて行つた私は、突然足をすくわれてドサン！と倒れた。直徑一尺五寸位の唐檜の切り株――こゝに小屋を建てたことがある。その時、板をつくつたものであらう。――が下にあつた。あつと思ふ間もなく、私は氣絕して了つた。

我にかへつたのは、それから間もなくであらう。起きやうと思ふのだが、右の橫つぱらが痛くて、とても起きられぬ。左手で痛い場所をきつく押へた儘、しばらくは身體を「く」の字に曲げて、へたばつてゐた。

三人のゐる所は、小さな窪地である。私の倒れた場所は見えぬ。何の相談もないやうな話し聲が聞える。私は苦痛をこらへて「誰か來て吳れ！」と、きれ〳〵に叫んだ。話し聲がパツタリやんで、同行の高川君と、案內者の黑岩直吉とが、顏を出した。

私は二人にかゝへられて、焚火のそば迄歸つた。シャツのボタンを外して見ると右の脇腹に半月形の傷がついてゐる。馬に蹴られたやうな傷である。皮膚が裂けて、血が滲み出してゐる。呼吸をしても痛い。額からは油汗が流れる。黑岩は五六間向ふの水溜りへ飛んで行つて、手拭をしぼつて來た。それで血をふいて、メンソレータムをベタ〳〵塗りつけ、新しい手拭に雪――これは大部遠くにあつた――を包んで傷をひやした。地面に莫蓙を敷いて横になる。カーツと日が照りつけるので、木の枝と私のレインコートとで日よけをつくつた。

長い午後であつた。高田君と人夫とは鹿島槍の頂上まで行き、黑岩と私とは冷ノ池でゴロ〳〵してゐた。痛みが去つたので、ノソ〳〵立ち上つて倒れた所へ行つて見た私は、思はずDamnation! と叫んだ。私は一本の草のために、横つぱらに傷をしたのである。即ち、唐檜の根が張つてゐる横に白樺の芽生へがあり、鉛筆位な枝が横に出てゐる。私は菅のやうな草を踏んだのである。すると草が白樺の枝に倒れかゝる。枝は靴の鋲に踏みつけられて、皮だけがスッポリと拔けた。眞つ白な木質が出てゐる。實に小さなことで怪我をしたものである。

なが〳〵と、自慢にもならぬ話を書いたが、これ以來私は安全（なところを注意するやうになつた。なかんづく宿營地の附近では、迷信的に用心するやうになつた。――）

・私がピッケルを取りに戻つてゐる間に、向ふ岸の二人は籠渡しの所まで來てゐた。籠渡しの針金に添ふて目を走らせた二人は、當然その針金の終りにゐる私に氣がつく。私は右手を上にあげて挨拶した。和服の人は腰をかゞめた。

見てゐると北澤が、籠渡しの板に乘つた。破損して用をなさぬと聞いてゐたが、これで見ると役に立つかも知れぬ。私は「占めたぞ！」と思つた。籠渡しが使用出來さへすれば、昨日のやうないやな路を通らなくても濟む。北澤はブランブランと針金を傳ひ始めた。長い針金が、重みにつれてさがる。板はスラスラと四五間河の中央へ近づく。和服の人は何か云ひながら、盛に繩を繰り出す。

そのうちに、パッタリ板がとまつて了つた。どうやら一寸も動かぬらしい。と、向ふ岸の人が繩を手ぐり込む。北澤は兩手で針金をあやつる。見てゐる内に向ふ岸の一人が二人になつて、何か話し合ひながら苦笑してゐる。大きく兩手を横に振つて見せる。右手をあげて、こちら岸の崖を指し、づゝつと下の方へ動かす。籠渡しは駄目だから、崖をへずつて下流の吊り橋を渡つて來いといふ信號なのであらう。二三度腰をかゞめたと思ふと北澤は狹い河原へ飛び下りた。そしてスタ〳〵と下つて

行く。和服の人は上の路を、小屋の方へ歩く。

小屋に歸つて、まだ眠てゐる愼太郎さんを起した。籠渡しの一件を話してゐる所へ北澤が歸つて來る。彼等山男は、七八貫の荷を背負つて我々と一緒に歩くのであるから、空身だと飛ぶやうに早い。「飛ぶやうに」ではなく、實際、石でも岩でも丸木橋でも、ヒョイヒョイと飛んで行くのである。

山としては遲い朝飯を食ひながら、北澤が向ふ岸の人の話をする。「大將みてえな人が一人と」――あの和服を着てゐた人か？と聞くと、ウン、あの人だと答へた。――「越中の衆が一人ゐただ」といふ。あんまり口を利かない、大人しい男だらう。と愼太郎さんが聞く。「あゝ、若え男だ。」「そんなら重吉だ。」「あれが重吉かね。」

北澤は四時半に起きて、飯の仕度をしてから小屋を出たのである。前夜引きかへした所まで行くと、前につき出した崖を廻つた所に、新しい吊橋が見えた。路が無いと思つた面には、果して路が無い。引きかへして、前晩ステップを切つた雪渓の横を登り、谷を一つ越して、急な藪をすべり落り、存外容易に吊り橋に出ることが出來た。日電の小屋へ着いたら大將みたいな人が、腹がへつたらうと云つて、麥飯を喰はして呉れたが……

「へえ、うまかつたでえ……。ええいゝ小屋だな。大きな熊の皮なんぞが敷いてあつてな、新聞屋と宿屋のむすこを連れて來たと云つたら、そりやあ面白い。早く來な、御馳走するぞつてた！」

愼太郎さんと私とは、この「新聞屋と宿屋のむすこ」に至つて、顏を見合はせて苦笑した。成程愼太郎さんは大町の對山館の長男であり、私は新聞やであるが、こんな山の中まで、かゝる商賣――それも一般からは、あまり柄がよくないやうに思はれてゐる――がつきまとふのであつては、いさゝかニヤリとせざるを得ない。

小屋の内外を奇麗に片づけて、出かけたのは九時半ごろであつた。前日に比較すると、身體が疲れてゐないだけ、惡い道も樂に歩けたが、それでもいやな場所が多かつた。雪解の水が流れてゐる狹い谷を登る時なぞは、袖口や襟から、泥と水とが流れ込んで、氣持が惡くて仕方がなかつた。づい分危險な所もあつた。が最後に、若い木と熊笹とが茂つた急斜面を、がむしやらに辿り降りて、大きな落葉松の林に、まだ誰の足跡もついて

ゐない雪田を踏んで立つた時には、うれしかつた。雪を渡り切ると五六尺の崖、すぐ下は川であるが、極めて淺い。砂利が出てゐる所もある。ストンと下りて、先づ一口、黒部川の水を飲む。

二三間歩いて岩の鼻を廻ると、吊り橋である。ユラユラと左右にゆれながら渡る。三人そろつて日本電力の出張所へ入り込んだ。

平の半日

向ふ岸からこつち側まで、二時間ばかりもかゝつたので、かなりつかれた。あてがはれた二階の部屋に通つて窓から見ると、すぐ目の前に大毎の小屋が、白い雪に對して殊に黒く、きたなく立つてゐる。私は何故か dilapidated といふ英語を思ひ出した。さつき崖を登る時、上から墜ちて來た岩で膝を打つた北澤が、メンソレータムを貰ひに入つて來る。

「あの小屋は俺の別莊だよ。」

「何故だね。ありや縣の小屋ぢやねえか。」

成程ね、大阪毎日が寄附した金で縣が建てたのだから、我々は大毎の小屋だと思ひ、縣の人達は自分の物だと思つてゐるらしい。然し、登山者の役に立ちさへすれば、どつちでもいゝ。

「打ち傷にはこの方がいゝだらう。」と宮本さんが入つて來られた。宮本さんは今朝和服を着てゐた人で、日本電力の出張員である。この山の中に住んで、黒部川の量、速度、溫度等を測定してをられるのである。

「どうです。もうお晝に近いしするから、今から溫泉までは一寸無理でせう。今日は遊んでいらつしやい。岩魚でも釣つたら半日位はすぐ立ちませう。」

私どもは大いによろこんで了つた。實はこちらから、今日一日遊ばせて下さいと云ひ度い所だつたのである。第一小屋が氣に入つた。第二に平で遊ぶといふことが、またと得られぬ快いことのやうな氣がしてゐた。

小屋――それも富山から十二哩汽車に乘り千垣で下車してから芦峅（あしくら）まで廿町。この芦峅から一里半で藤橋に出る。藤橋には人家が五六軒もあらうか。あとは常願寺川に添ふて登ること三里半、こゝが立山溫泉、ザラ峠を登つて下りて、又急な刈安峠を上下する都合四里。富山から平地としても十五里半の山の中にある小屋は、果してどんなものであるか、想像もつかぬ人が多いであらう。私はノートを出して、素人ながらこの小屋の部

屋の配置をうつしとつた。實は自分もこんな小屋を山の中に一軒持ちたいと思つたからである。「南北三間、東西五間。二階建。下は土間で、南側が炊事場。他は薪炭糧食置場。西北隅に階段。二階に通ず。外側の同じ位置にも階段があり、これはバルコンに達してゐる。板敷き、疊敷き、押入を中心に、西は大きな押入れと人夫室兼食堂。東は事務所と寢室とになる。二階の天井に戸がついてゐるのは、二階の窓まで雪に埋つた時の出入口。屋根及び東西面羽目(二階天井より高く)に出入口あり。」――私の手帳には二階のプランの横に、かう書いてある。

晝飯を濟ましてから愼太郎さんと二人で、すぐ向ふにある大毎の小屋を見に行つた。この小屋は雪の中に建つてゐる。南の方の入口から入る。ひどくなつてゐるが、人が來ればすぐ奇麗になるであらう。二階――と云つてもアティックだが――に酒の空瓶がゴロ〳〵してゐるには驚いた。

いくら「俺の別莊」でも、かうジメ〳〵してゐては長くゐる氣がしない。早速引き上げる。

日電の小屋に歸ると宮本さんが「今夜、岩魚を御馳走したいが、生憎昨日の殘りが二匹しかゐません。重君を案内に釣つて來られたらどうです。」と云はれる。岩魚釣とは面白い。品右衛門の話も思ひ出す。さア出かけやうと我々三人、重吉のあとをついて行く。もつとも釣竿は四人に對して二本である。

しばらくは若芽の美しい林の中を、雪を踏んで歩く。林がつきて岩になる。岩の下は黒部の水。……あの水の美しさは、只見た人のみがこれを知る……三人から、はるかに後れて、岩をいくつも〳〵越したり、一坪か二坪ばかりの白い砂地に靴のあとをつけたりして行くうちに、ふと、大きな、丸い岩にはらんばいになつて、しきりに下の水をのぞいてゐる北澤の姿を發見した。「つれたかい」といふと、左手を後に廻して、むやみに振りながら「靜かに！靜かに！」と小聲でいふ。足音を忍ばせて、私も岩に登る。はらんばいになつてのぞくと、下は水が物凄いたまりをなして、くる〳〵渦をまいてゐる。

「あすこにゐるだ。」

北澤は岩魚に聞かれると困ると思つたのであらう。むやみに小さな聲を出す。まなこを凝らして見てゐると、大きな渦が一つ、する〳〵と本流の方へ流れ出して、その後が油のやうにトロリとする瞬間、キラリと蒼黒い魚が二匹、底に近く姿を現はす。北澤は急いで竿を動かし、蚊針を魚のゐる方へ近づける。又、渦が來て、スイ〳〵と針を押し出す。

「駄目ぢやないか。」
「あゝ。岩魚を釣るなあ六つかしい。」
「君は今迄に釣つたことがあるのかい。」
「無いだ。」
「そんなとこへ針を下して釣れるのかい。」
「これでいゝずら。石川さん釣つて見るかね。」
「かして見な。」

今度は私が針を下したが、中々喰ひつかぬ。近くまで來たと思ふと、ひよいと逃げる。針が流されて了ふ。

考へて見るとどうも蚊針なるものを深淵に沈めて魚をつるとは變である。元來が蚊の形をしてゐる針だから水面をヒョイヒョイやつてゐる内に、これを蚊と間違へて魚が飛びつくのではあるまいか。私は立ち上つて、岩を下り、流れに近く立つた。ザブザブと白い水沫を飛ばしてゐる瀬に、フワリト針を投げる。面白いやうにピョンピョン跳るが、魚は一向飛びつかぬ。ふと思ひつく。二三週間前の「サンデー毎日」に、神戸の上田氏が岩魚釣りの話を書いてゐた。もつとよくあれを讀めばよかつたと思ふが、さてどうにもならぬ。

同じ釣れないのなら、魚の顔が見えた方がまだ面白い。私はもとの岩に歸つた。二三度岩魚をだましにかゝつたが、矢張り駄目なので、釣は斷念し、岩の上に長々と寢そべつて煙草を吸つた。目の上の唐檜に、恐ろしく長いサルヲガセがぶら下つてゐる。ブランブランと風にゆれる。河の音がする。私はねむくなつて來た。

突然頭の上で

「オーイ！」と聲がした。ねころがつた儘で「オーイ」と吐鳴ると「なんだそこにゐたんですか。」と愼太郎さんが姿を現はす。「どこへ行つちまつたのかと思つた。」といふ。まつたくこの黒部川は斷崖絶壁が多いので、一寸した岩の鼻の向ふにゐる人でも見えぬことがよくある。我々は二三間はなれた所で休んでゐたのであるが、お互にどこへ行つちまつたのかと思つてゐた。

流れに添つてすこし下ると、長い吊り橋がある。重吉と北澤とは各、釣竿を持つて、ドンドン橋を渡つて行く。向ふ岸（右岸）の路は、大部高い崖の中腹についてゐる。私どもは寫眞をうつしたり、話をしたりしながら、あとからついて行つた。

丸い石のゴロゴロした河原に坐つて、小さな石を河の中に投

り込んでゐると、世間を忘れて了ふ。何が何でもいゝやうな氣がする。誠に呑氣である。汗水を流して雪溪を登つてゐるより餘程いゝ。刈安峠なんぞを越えないで、三日も四日もこゝで遊んでゐたいなと思ふ。「かうやつてるといゝ氣持ですね。」「よござんすね。」なんて云つてゐる内に、針ノ木岳の方に當つて黒い雲が出て來た。見る見る空にひろがる。ボツン！と勢のいゝ奴が手の甲にあたる。河の水が黒くなる。こいつはいけない！と云ひはしたものゝ、急ぐでもなし、また急いだ所で岩や崖の路や吊り橋や雪では、すべつて轉ぶ位なものである。悠々として歸路につく。上衣、シャツ、ズボン、みな濡れる。濡れても小屋には火があるから平氣だ。小屋の近くの雪の林では、雪から盛に湯氣を出してゐた。あれは湯氣とは云はぬかも知れないが……

小屋に着いた時は、いくらか雨も小降りになつてゐた。早速二階に上り、はだかになつて衣類を乾かす。寒くて仕方がないから毛布を身體にまきつける。

「お風呂が沸いたからお入りなさい。」と云はれて、洋服に下駄、頭からレインコートをかぶつて戸外に出る。磧に近く据えた角風呂、雨が降るので白樺の枝を切り、天幕をかけて急造の屋根が出來てゐる。そこ迄行きはしたものゝ、さて上衣やシャツやズボン下を置く場所がない。もう一度小屋に戻つて、猿股一つになり、雨の中を走つて風呂場に行く。猿股を、なるべく雨のかゝらぬやうな、枝にひつかける。蓋を外して手をつつこむと熱い。恐ろしく熱い。そこで今度はスッ裸で、馬尻を持つて河まで水を汲みに行く。雨は中々つめたい。つめたい譯である。すぐ横にはまだ雪が殘つてゐるのだから……

首まで湯につかつて、いゝ氣持になつてゐると、雨がこやみになつて、雲が上り始めた。黒部の下流の方から、山が一つづつ現れる。もう夕闇がせまつてゐるので、すべての色は黒と白とである。濃淡の墨繪である。信じられぬ程、日本畫そのまゝである。

「日本畫によくこんな景色がある――」私は加減のいゝ湯で、身體中の筋肉が一つ一つやはらかくなるのを感じながら考へた。――「たいていの人は繪空事だと思ふ。そして、こまかい寫生や複雑な色彩を土台とした西洋畫の方が自然に忠實だと思ふ。だが山の中にはかくの如き景色がある。何百年か前に、すでに深山幽谷を歩き廻つてスケッチしてゐた日本畫家がゐたのであらう。」――どうでもいゝやうなことを考へてゐると、北澤

が

「風呂加減はどうだね？」と、雨の中を聞きに來て吳れた。

やがてランプがついて、男ばかり五人、飯の卓に向ふ。岩魚は重吉が二匹、北澤が二匹、都合四匹その日釣り上げたのと、前日のが二匹殘つてゐたのとで六匹。串にさして火にかざすと何とも云へぬいゝ香がする。

食卓の向ふ側では重吉が、大きな鍋からモヤモヤと湯氣の立つ物を皿に盛りわけてゐる。熊の肉である。岩魚と熊の肉と、いづれも私にとつては初物だから、百五十日生きのびたことになる。

さて岩魚は、何と云つてよいか判らぬ程うまかつた。鮎よりもうちつと油があつて、肉が多い。何、山の中で食つたのだから……といふ人があるかも知れぬが、同じ山の中で食つたのにしても、熊の肉だけは珍味ながら一片か二片で閉口して了つた。

もつとも岩魚は釣つたばかりである。熊は冬とつた奴の鹽漬である。かるが故に比較は出來ぬであらう。

この熊は大きなものであつたに相違ない。二階に敷いてある皮は、長さが六尺以上ある。雌で、子供を二匹連れてゐた。その二匹は宮本さんが犬のやうにして飼つてゐるが、翌朝までは出すことが出來なかつた。運動時間がきまつてゐるのである。

食事が濟むとすることがない。下の釜から山のやうに火を持つて來て爐に入れ、ゴロゴロとねそべつて話をする。狸の話に始つて怪談に終つた。

狸の話には我々三人、顏を見合はせて笑つた。即ち前晩八時近く、宮本さんと重吉とが一日の仕事を終へて一と休みと爐をかこんでゐた時、中ノ谷の方向に當つて「オーイ！」と呼ぶ聲が聞えた。これは變だ。今頃立山から人が來るとは、いさゝか遲いし、それに越中の衆が「オーイ」と呼ぶ譯がない。乾度誰か案內者を連れぬ登山者が、路に迷つてウロウロしてゐるに相違ない。見に行かうと小屋を出て、吐鳴つても返事がない。ヘルコニイにランプを置いて、この火を見たらどうにかかうにか歩いて來るだらうと、いつ迄持つても誰もやつて來ない。

オーイ！とやつたのは勿論我々である、これが黑部の對岸から聞えずに、反對側の中ノ谷の方から聞えたのは、山の反響であらう。越中の人夫がオーイと云はぬのならば、宮本さん達も

反響といふことに氣がついて、黒部川の方に注意しさうなものと思はれるが、宮本さんにして見れば、今ごろ信州からぬけて來る奴がゐるとは知る由もない。今年になつてから二組平を訪れたのだが、いづれも富山から來てゐる。

我々は我々で北澤が吐鳴つても燈が見えないので（ランプは小屋の向ふ側に置かれた）、ハテ、日電の人はゐないのかな、とも思ひ、そこで東信の小屋まで引き返した次第であるが、宮本さんと重吉とは氣味が惡くなつて來た。こんな山の中で人のゐる筈がないのに、妙な所から妙な聲がして、それつきりである。ふと重吉が「ありや狸だ。狸に違ひない！」と云ひ出した。そこで何時になく戸締をして寢たといふ話。

スヰスの山地やテイロールのある場所にはヨードル（Yodel）なる歌のうたひやうがある。はじめは普通に歌つてゐるのだが、突然調子が高くなる。音響學上から見たらどうか知らぬが、我々が聞くとオクターヴを二つ三つ飛び上つたやうな具合である。勿論あたり前の男に、そんな高い音が出る筈がない。裏聲とでもいふのか、すこぶる細く、そしてよく「通る」聲である。崖にひゞき、岩にぶつかり、遠くの方まで聞えて行く。

越中の山男は「オーイ！」とは云はぬ。「オーホホホオーイ！」と云つたやうな、妙な聲を出す。この「オー」が普通の聲で「ホ」以下がヨードルになる。

スヰスのヨードルも、いづれ越中の「オーホホホイ」みたいな呼び聲から發達したのであらう。山が深いと、どうしても遠くに響く呼び聲を考へ出す。洋の東西にかかはらず、周圍の狀態が似てゐると、人間は同じやうなことをやる。人間ばかりではない。植物でも、日本アルプス一萬尺の高峯に咲く花が、千島やカムチャツカでは海岸に咲いてゐるといふ。

怪談をしてゐる内に十時になつた。久しぶりに、あたゝかい布團に、輕い毛布をかけて安眠した。あらゆる意味に於て平の二夜が、まことに面白かつたことを愼太郎さんと話し合つてゐる内に、いつか眠て了つたのである。

慶州記錄

小杉放庵

○古鐘

千年前の新羅の音を聞かせませうか、と云つて一人の老人が、鐘閣の撞木の綱を引く、一人の男が、古い礎石に腰をかけて是を聞く、綱を引くは、慶州の博物館を預る渡理先生、腰をかけて耳をすますものは放庵、朝鮮梅雨前の晴れ切つた青空、撞木は軽く鐘にあたる、撞木のあたる、音の出る、其間に少しの時があつた、と思ふほどに大鐘の音はゆつたりと鳴り出でて耳に入り、大地にこたへ、空にひゞき、同じ音色でしばらく鳴る故、身はやはらかな鐘の聲の中に浮ぶが如くの思ひをなす、次第に弱くなり、かすかになり、わうと云ふ音、かう、と云ふ音、二段に分れて、揺れて來る、まだ聞える、物に紛れて消えたと思ふ、まだ聞える、新羅聖徳王の立願、次なる惠恭王に到つて鐘成す、十二萬斤の銅、めぐり二十三尺、大きさも大きい、音も宜い、浮彫の天人は雲に乗り、さながら に無邊際の天空を、はてをも知らず飛んで居る、此の線の見事さ、東洋藝術の線の巧みは、速度を現はし、方向を現はし、それを無限のあなたに導いて行く、新羅の工人には、えら物が居たな と思ふ。

朝鮮びとは、此の鐘の音は何と鳴る、母のため、母のためと鳴ると云ふ、鐘を鑄る時に銅足らず、國中に銅器を徴す、一人の寡婦あつて八人の子を抱へ、金氣のものもなき故、かはりに一人の子を上げませうと云つた、やがてその子が病死した、其の思ひ鐘に止まつて、さやうに鳴ると云ふ、江州三井寺の鐘、藤太の鐘でない方にも、似たやうな話があつたと覺えて居る、時經て李朝の末期となり、國用乏缺して、諸郡の梵鐘を錢に潰す事あり、役人此鐘にも手をかけたれど、百姓共是ばかりは云ふ事をきかず、つひに助かつたと云ふ、此鐘くさぐさの不思議あり、それで鑄錢の厄を免れた、迷信は鰯の頭にも留まるが、永くは行かず、永持ちするは其物に具はる徳ある故、すなはち此鐘にあつては、鐘としての質と姿に、凡品を放れたものある故であらう、さて又此の鐘閣の柱十八本、地上三尺ばかりの處少しづつ皆擦り減つて居るは、何をした痕かと問へば、慶州の死人

三途の川で奉德寺の鐘閣の柱は何本あると訊ねられる、返答のならぬものは地獄へ落される筈、そこで身老て死期遠からずと思ふ者、來ては此の鐘をまはつて柱を算へて行く、柱の數を覺え得て、それで後世に賴みをかけ、氣を樂にして立歸る、其人人の簡單な安定のさびしさおもしろさを思ふ、さびしきおもしろき連中、隨分多い事と見えて、此の柱かくの如くに撫で減らされた、又、重病者あつて、旦夕を計られぬ時、介抱に手の明いた眷族、隣人達を賴んで來て、此の鐘を旋り步く、旋り步いて居る間は、病苦も薄らぎ、いよいよ臨終となつても、安らかな往生を得ると心得て居る、されば朝まだ暗いうちに、此の博物館の門を叩いて、鐘を廻らしてくれと云ふ、いづれも思ひつめた信心、彼等にあつては人命に關する大事故、番の人も餘議なく開けてやる、鐘閣に走り入つて、旋る旋る、いつまでもはてなく旋る。

○異次頓

異次頓は人の名、ゐぢとんと訓めば、どうやら西洋人めけど、新羅二十三代法興王の寵愛の近侍、佛法大梁より渡り、信不信の論別れて決せず、王は信心したけれど、不信黨のおもはくをも考へる、異次頓はさだめし美しい青年であつたらう、法の爲王の爲に身を捨てた、私は佛法を信じます、非佛の論に傾かば私は刑せらるべきでありませう、只今私の首を刎ねて、若し多少の不思議をも現はさば、佛法の行はるべき證しとなされたい、と云つた、そこで切られた、博物館に今殘る、柏栗寺址より出でたる異次頓の石幢と云ふもの、花崗石六面に削つた柱形、五面にあるはおぼろげな刻字、一面に一人の人腰をかがめ、手を胸に組んで、首は足の前に落つ、姿體たをやかにして、思ひ切つていさぎよく頸をのべたおもむき、凡作ならざる浮彫りと思ふ、其頃の新羅上流の風俗、頭に折風を著け、大袖衫を被、大口袴を穿ち、素皮帶黃革履とあるもの、支那服裝の混入と思はれるが、此の浮彫りに一半を想像し得た、さて其の佛法の不思議はどうなつたか、見よ、切られた頸から、まつすぐに天をさして、人だけほども高く、はゝき星の尾のやうに迸るは、之を斬れば血白きこと乳の如かりき、と云はれた處の白血である。

○南山

慶州古都の正南、山あり南山と云ふ、昔は新羅の宮人の登高遠望の散步地であつたらう、今は大方はげ山となつて、岩石峨々と聳え、處々に寺の跡あり、石佛と石塔と殘つて居る、石佛石塔に例の迷信の附著せざる分は、其下に寶ありと云つて、かまはず推し倒して掘つて見る、倒されて其まゝ石片となつたもの多からう、原形の存せるを、總督府で引起して建てた、それら

を見やうと出掛ける、十三曲廻りこんで、水豊な岩山の署さ、谷について上り、谷水を掬つては呑む、小松と灌木とが、四十男のはげ殘りの毛の如くに、岩の間に縋りついて、あはれに生きて居る、ある一峯の頂上につく、佛あり、三層圓輪の臺上に坐して西に向ふ、おん首は今谷底の砂の中にでもあるであらう、寥廓たる岩山澄み切つた靑空に、首なき佛を仰ぐさびしさ、谷を隔てたあなたに、白き一點ありてやゝに動く、朝鮮びとであらうが、何をして居るやら、と思つてふと振りかへると、すぐうしろの岩の上に、長大な白衣の老人が、草根を手にして立つて我等を見る、山中に藥草を取る地仙めくが、その草根は桔梗の根で、ゆでて喰へば喰へると云ふ、此の岩山に食物を探さずとも、平地の畠を耕してよかりさうに思ふ、脊負つた籠に半枯れの小松の根こぎがある、松を取ると是だぞと、案内の人が、手錠の形をして見せる、いや拾つたのだと拔ける、一本の小松の根こぎが、幾日のオンドルの燃料にかならう、岩山を歩きまはる其の動力を、なぜに畠と田とに向けられぬだらう、むかひの山の白一點の人も、同じ仕事をなして居るにちがひない、何百年もかゝつて、此の、山の毛拔きを行つて、かくて今の滿目のはげ山に及んで居る、朝鮮びとの特長は何か、いにしへより農耕牧畜にすぐれたと云ふを聞かず、人の國からは攻められても、人の國を攻め取つたと云ふ武功も傳らず、あきなひは下手らしい、今の學校では數學理科の課程より、圖畫手工に身を入れる、いにしへより美術工藝に向いたであらう、造形美術は支那の弟子で日本の先生、今殘る新羅の遺物、ことごとくすばらしい文明人の藝術、田舍びた汚な細工でなく、半蠻の執拗な單簡でなく、用と體と具はり、美と純とを心得た仕事を留む、今の朝鮮には良き美術工藝學校の必要がある、政治を超越して、而も政治に効あるであらう、さるにても古き新羅人の野心も計畫も、或は名譽も歡樂も、今にして何も留らず、留まつたものは藝術ばかり、藝術不朽とは行かず、どうで命のあるものながら、比較的永持ちをして、今に及んで彼等の聰明と創造力とを語る、十人の王よりは、一人の工人がより多く新羅を顯揚した。

○石窟庵

わが友の太田博士と莊八君は、下り腹を抱えて、折ふしコレラ大流行の此地に入り、さまざま氣を使つたと、その紀行に見へる、虎の尾を踏む心地であつたらう、今はかゝる恐れもなく、同伴の朝鮮びとの繪師と、上着を佛國寺のホテルにあづけて、ゆる〳〵二十餘丁の坂を登る、寺の存する山の爲か、割合ひに草木多く、谷には泉の出づるあり、その泉の出口に、四五人の女あつて、よき「泉のほとり」の群像をなす、朝鮮の地乾燥にして水少なき故、湧き出づる水を大事なものにたし、地名に

泉の字をつくるも多い、泉は屢々藥泉と呼ばれて、いろ〳〵の病に利くとなす、病に利くものあるかも知れず、當面の効見えずとも、地中深き處より、滾々として湧き出づ泉に、何やらん神秘の感あり、之を呑まば彼のサイダー、ラムネのともがらに、勝る事萬々とは思はれる。

山鳩が鳴く、あちらの谷でも鳴き、こちらの尾上でもなく、群れて居ず、獨り鳴く、うつろなるものを叩く如き聲、たゝみかけては鳴きしきらぬ故、鳴くほど靜けさを加ふ、例の朝鮮びと達、是を以て、世にありし時、親なく妻なく子なかりし、寂びしかりし人の魂、化して山鳩となるとなす、故に一聲は親なくてさびしと云ふ、一聲は妻ほしやと云ふ、一聲は子なつかしと云ふ、曾て奥州平泉の古跡を訪ねた時、廢寺の礎と半ば涸れた池とを圍みて、松林あり、松の中に此の山鳩の聲を聞く、是亦寂莫として遠く物を思はしむる響、山鳩は何處にも居るが、古跡故殊にさびしく、殊にさびしき故に忘れず居るか。

右手に續く山々、うつすりと草あるもあり、いさゝか木立見ゆるもあり、寂然と日下に横はり、いくつも重なり横はり、此あたりの地方の山多く平地少なきを思はしめる、その向ふに鷄述嶺がある筈、嶺の上に望夫石がある筈、新羅十八世實聖王の臣朴提上、遣日使となつて渡り行く、さるべき仔細あつて、どうで生きて歸れぬ首途、家門を過ぎて寄らで行く、その妻之を戀ふて山に登り泣き望んで石となる、向ふ岸の九州には佐用姫の望夫石、支那にもこんな話があつた、此の對岸の二石は、一つ話が二つに分れたわけではなく、矢張り兩方で自然に出來たか、しかし乍ら餘り似て居るその鷄述嶺はどれだらうと聞いたが、分らなかつた、その方角の近い山の夏草が燒けて烟が立つが見える、夏の山火事、まさに人の故意に燒いてゐるものであらう、同行の話で、昔多かつた火田民と云ふやから、今も殘つて居て仕事をして居るかも知れぬと云ふ、山を燒いて、燒灰を肥料にして、穀類を蒔く、三年も過ぐれば肥料の力消ゆる故、また他の山を燒き移る、山中を渡り歩いて、それだけで部落をなす山民、是を火田民と呼んだ、又、一頃開城の人參の景氣のよかつた時、人參よりは山參が高價故、それを作るとて、裏朝鮮の、處女林の欝蒼たるに火をかけて、大木も良木もかまはず灰にする、そこへ山參を作つた、それら火田民山參作りの爲めにばかりも、大ていや大かた山の禿げた事ではあるまいと云ふ。

やがて峠となる、海拔千八百何十尺、此邊での高處、目の下の連山を越して直ぐには五里もあるかと思ふ處、日本海の碧色、雲の如く、水平線はかすんで見えず、山々から吹き上げる涼風、水のやうに肌を冷やす、少し下り坂となつて、山の界を二つほど廻れば石窟庵、谷へかけて草木多く、まだ若い綠葉の間に、石窟あり、二度の修理を經て、唐時の粋と稱する石佛、

洗ひ出されて生白くなつて窟中に坐し給ふ、修理せずばズンズン壊れてしまふもの故、修理は當然洗ふも亦當然、今三四十年も經なば、復舊色に歸つて、落ち付いて來るであらう、ともかく、よくもかゝる多數の群像が殘された事と、奇特な思を抱く、本尊の傑作たるに論ないが、大同の石佛などに比べて考ふるに、彼の如き隆盛雄偉なく、賢くしてちとの感傷味を持つ、北魏と中唐との差でもあり、又その頃の新羅人は、今の朝鮮びとの、優良を集めた如きであつたらうから、心敏くして惰いたみ易き風格と思はれる、此の佛のおん姿、それを詐らず現はして見える、李太白が曰く、既ニ長繩ノ白日ヲ繋グナシ、又大藥ノ朱顏ヲ駐ムルナシ、誰もかう感ずる、それを太白が面白い節をつけて唄つたものか、だからどしどし仕事をしやうと、勃興の北魏人は云ひ、さる故に此の世はかなしと、新羅の人は佛に歸したでもあらう、如來の左右に四菩薩あり、背後に諸大羅漢あり、四菩薩中の二菩薩、ことに嬌柔高尚の趣を持つ、此種女體美佛像中の優秀と思ふ、羅漢の中にも傑作少からず、やゝ窮屈なる約束の下に諸德圓滿の如來菩薩を作り終つて、尚別に現はし度き一種の怪奇美なからずや、羅漢の異様なればなるほど面白き面貌風格が、此の創造力の出口に適當であつたらう。

此の窟佛東面して日本海に向ふ、とかく日本は面倒な方角、失禮をすれば征伐され、間には海賊和冦の働きあり、そこで此の大石佛を以て東方を鎭厭した、と云ふ說もあり、新羅第一の明君文武王は、遺命して骨を東海に沈めしめ、今に到つて大王巖の名あり、變じて龍となつて國を守ると誓つた、と傳說にある、先刻峠の上で見たあたりの日本海であらう、論者又、その頃の日羅關係は、前後になき好調、大王の敵愾心發生の理なしとも說く、傳說も、傳說自身に根なくとも、傳說の左右に據りどころあれば、丸切り馬鹿にも出來ず。

此の石佛の臺下より、一條の淸泉湧き出づ、藥泉中の藥泉、飲むもの必ず子を得と云ふ、山登りをして汗の收まらぬ間にのむ水は、大てい味のよきものではあるが此泉の味は格別、淸冽にして軟みあり、あまみあり、所謂肉のある水とも云ふが、此の水の靈驗の爲めに、石佛は又若干日月、慾深き者共の倒壞の手を免れても居たであらう、此の外、子を授くると云ふ佛處々にあり、彼の最初に記した奉德寺の大鐘に到つては、反對に落胎の力を持つ、鐵錢石片などをかくし持つて、忍んで來て鐘を削つて飲んで、或は不義の始末をつける、其折人に知られては、其事効驗なしとも云ふ。

○掛陵

佛國寺驛より南へ、蔚山街道一里足らず、左へ切れて近道をして、小山と村落の間を行く、田は今苗代時、苗代に苗青くな

り、田には水を入れてある、水の中に草木の青葉が見える、木の小枝草の葉を刈つて、脊負ふて田に向ふものも見受ける故、是等つまり田の肥料となるであらう、是ですめばずゐ分と簡單な肥料、內地ならば、田園の今頃は、運動會でもあるかと思ふ程、田に出て居る人影たゞしいが、こゝらの苗代時の靜かさ、それで居て、あの狹まい家の中に、此の好天氣では引込んで居られぬと見え、村はづれなどの大柳の蔭、或は小山の松の下などには、三四人五六人、坐し踞し彳んで、南畫の人物、綠陰清談、或は松下小集を行つて居る、今日に限らず、毎日同じ事であらうから、話の種に何を持寄るものか、物かげに忍んで、若し能く半日の間彼等の無駄話をうかゞひ聞かうならば、官吏と政客との報告以外に、別箇の朝鮮民の持味を知り得るかも知れぬ、かと思ふと又、只一人廢墟の礎石などに腰をかけ、凝然として物を思ふて時をうつす姿をも見受ける、物を思ふ姿に見えるだけで實はなんにも考へては居ないであらう、スペイン國も亦、荒れた山野と、廢墟と、疎懶無爲の民とを持つ、此點甚だ相似て居る、異る處は、西人に一道の殺氣あり、えにしだの花の中に、ひるねする山民と雖も、懷には物を言ふ大ナイフがあり、鮮人はよくよく腹が立たうとも、先づ腰間を探つて、一條の長煙管の煙を吐くに過ぎまいか。

掛陵は大松林の間に、整つた大形の土饅頭を置く、石人四つ、文臣と武臣と、武臣の形は支那の陵墓のそれの如く眞直ぐに立たず、腰をひねつて首を傾けたる、頗る彼の四天王などのポーズを思はしめる、陵の腰をめぐる石板、二枚置きに十二支の神像を浮彫りす、正南に午の神あり、正北に子の神あり、左右各々五神、左なるは右向き、右なるは左向き、皆頭を南に向はしめて居る、制作均整、よき美術品と思はしめる、其内の卯の神の姿を選んで模寫して見る、しんしんと靜かな初夏の日盛り、松林の奧に當つて雉子が鳴く、しばらくして又、あなたの松の中に鳴く、高麗雉と稱する、殊に美しき羽毛あるものであらう、陵の主は文武王とも云ひ、確かならず、一說に、柩は水上に宙に懸つて居、上に穹隆を蓋ふてある、故に掛陵と云ふとある。曹操は墓を潭中に置いたとか、信玄は棺を湖心に沈めしめたとか、それらはうそでも、ともかく後代の變革を豫想し、墓を荒されぬ用心などあつた事、想像し得る。

ついて思ひ出す慶州の街路取擴げについて、誰れとも知らぬ陵墓に行當り、出土の飾り玉を、鮮人の土工が摑んで逃げる處を、捕へられた騷ぎから、其道の人々集まり、叮嚀に堀り出したる金冠金裝殘りなく揃つて、今慶州の博物館にある、所謂折風といふ冠の形は是かと思ふ、烏帽子を二つ並べたやうなもの、金の細網にて作り、それを圍んで、四本の金の板を立て、各々枝あり、枝ごとに又臺の金板にも、三分程の丸き金板と、綠

色の小ざき曲玉とを、金線にて繋ぐこと、數を知らず、風にあひ、或は歩む時、是等のもの一齊に動き、燦然としてきらめき輝く、耳には耳鐶、襟には色硝子の珠數玉、腰には金帶、それに十數條の金瓔珞をかく、衣裳は細金の線を經とし、色糸を緯として織つた錦とおぼしく、今その金線のみを殘す、沓にも金飾、何たる精巧なる裝飾、氣高き美しさ、いにしへの人、王を立て、一切の長とし、人間の代表とし、それ故に人間の光榮の爲めに、最良最美の裝飾を是に奉る、今の諸文明國の、大禮服金モールの類、もと立ては同じけれども、筋道此の如く直接ならず、さて又その意匠裝飾を見るに、恰んど美とは云はれず、人間必ずしもすべてに進歩しては居らず、いにしへに比して退化せるもの隨分と多きことに思はれる、たとへば忽然として連絡船、釜山港に上陸し、又忽然として汽車、慶州古都の間にさまよふ事、便利至極とは思ふ、釜山よりすぐに慶州なるが故に、甚だしき道程省略なるが故に、實は全き慶州を見たりと申されぬであらう、忙がしい結論の連續、交通機關が今の世界の大手柄には相違ないとし、交通機關にも無條件で降參は出來ぬ、むしろ彼の金冠をきる人ならずとも、それを見得る時に生れたかつたと思ふ事、必ずしも懷古癖のみとは云はれぬであらう。

○樹下怪談

昔脫解と云ふ王は、日本から渡つたと云ふ、夜、雞の聲を林中に聞いて、明けて行つて見れば、金の箱樹にかゝり、白雞其下に鳴く、箱の中には男の子、此の子の子孫後の新羅王となる、かゝれば朝鮮を雞林と稱する事、是に始まる、其雞林は今も樹木生ひ茂り、此程急に暑くなつたにつけ、林下の清風好もしく、屢々此處に腰を据えてもろもろの昔話を聞く。

むかしむかし、安康に强力のお婆々あり、裳に石臼をつゝんで行き、裳ほころびて臼は道のほとりに落つ、ほころびを縫ふとて家に歸つて、やがて頓死した、其臼を能く動かし得るものなく、今に及んで道傍にあると云ふ、ふと思ひ出す、昨日或る朝鮮びとの話に、どう云ふものか朝鮮の女は、年をとると丈夫になり、體格も能くなります、とあつたが、反對に男の方は、早婚の爲か早く老けて行くやうに思はれる、世の中は、はねつるべで、そこでお婆々が石臼を手玉にも取るか。

むかしむかし或る老人、或る日ひとり山を見る、見る見る山動く、毎日見る、毎日動く、遂に山開いて、一匹の龍馬と一人の少女と出づ、少女が曰ふには此の龍馬に乘する大將軍を探さうと、そこで井を掘つた、次第に下廣に掘つた、底に到つて水中に甲冑したる武人あり、武人の曰はく、まだ出る時ではなかつたに、汝過てりと、地上に出でて灰となる、龍馬も死んで、少女は行衞知らず、どうもちと飽氣なき話となつたが、此の山の動

くを見出したと云ふ處、即ち前に記した、ひとり凝然として思ふ事なく、半日でも石に腰かけて居る連中でなくば、出來ぬ話。

北川一に閼川と云ふ、神功皇后の時の、ありなれ川だとも云はれる川、雨さへあれば大水を出す川、一年酷く荒れて、兩方の村人總出で防ぐが力及ばず、南岸の村人は、芬皇寺の、みろく佛を賴む、北岸の村人は、憲徳王の陵に祈る、みろくも王陵も各々村人のひいきをして、水はあちらへ寄り、又こちらへ傾き　とゞみろくは負けて、南岸の田が潰れた　みろく佛は汗をかいて居、王陵では碑石が二つに裂けて居たと云ふ、此の南岸の村人にも增して、大損をした人がある、二十八代宣徳王、殂して嗣なし、群臣議して、武烈王の系、周元を位に即けやうと云ふ事になり、使をたてる、周元北川まで出て來て洪水が渡れず、とかくする間に、又云ふものあり、王は天命に依る、洪水で來られぬようでは覺束ないと、忽ち他の王族敬信を立てゝ王となす、洪水の引いた川の岸で、周元氏は嘸かし落膽した事であつたらう。

月城の南、仁旺里の畑の中に窪地あり、昔の氷屋の跡だと云ふ、いつの頃やらん每晩五つの火が出て踊る、始めは懼れて夜行するものなくなつたが、それでは切りがない、あれを退治してしまへと、日本ならば勇士劍を按ずる處を、新羅人に智者あり、村の若者共をして同じような火の姿とならしめ、酒を飲み大鼓を打つて、日暮れから踊り出し、夜もすがら踊り明くるまで踊り拔いた。まことの火の方で愛想をつかしたか、それ切りになつた。此話が尤も面白いと思ふ、かくの如き快活、かくの如き機略、かくの如き好笑、いにしへの新羅人は、或は今の朝鮮びとの如き、感傷癖のみではなかつた處あり、それが彼の半島一統の大業をも遂げしめたであらうか。

○金庾信陵

若き朝鮮びとを案内に賴んで、西岳の麓を歩く、武烈王陵に斷碑の臺石の龜を見、崔致遠の書院を見、轉じて金庾信の墓に行く、新羅の話になれば、金庾信の挿話出でざるを得ず、それほどに彼は新羅王朝の大立物、又東洋英雄列傳中に在て一地位をも占め得ると思はれる、あの頃の東洋は希有なる黃金時代、唐は太宗貞觀の治、日本は天智天皇、大化の革新、新羅は武烈文武の三國統一、前後百年ほどの間に、各民族有りたけの力を出して、人類の行く處まで行つて見たと云ふ處であらう、やがて盛唐の大文化生じ、奈良朝の大制作現はれ、新羅も佛教美術の精を作る、或は云ふ、グリーキの盛時、乃至ルネサンスの大收穫期は、また再び人類に現はるべきや覺束ないと、その如く此の全東洋の黃金時代も、またいつか我等の子孫を見舞つてくれるや否やと危ぶまれる。

庾信と鎌足と天智天皇と武烈王と遭遇の事跡甚だ相似て居る。物の片付けの早い人は、一傳說が分かれたものと云ふかも知れず、なるべく嘘もまこともそのまゝに取つて置きたい向きは、同じ人類故相似た事もあらうとなす、武烈王名は春秋、庾信と鞠を蹴る、庾信故意に春秋の裳を踏んでほころばせ、妹に縫はす、妹は國色、やがて妹の腹が大きくなる、父王の出獵の時をうかゞつて、庭前に薪を積んで火を擧ぐ王が何の故ぞと問はせると、不義の妹を焚き殺すと云ふ、と聞いて大きに困つた春秋の顏色を考へ、父王責めて妃となさしむ、庾信の機變驚くべきであるが、やがて春秋王となつて君臣相得て水魚の如く、次第に大業をなす、威權滿廷を壓するに及んで、だんだんと緊めて行つて、所謂權臣とならず、まことに全節の老臣、子孫をして、彼の鎌足の後の藤原氏の如くならしめざりし事、尤も史家を喜ばして居るやうす。

陵は松山の上にあり、左右は水田遥かに西川を隔て、慶州府を望む、諸陵中尤も堂々たる構へ、陵の腰をめぐる石板には、掛陵と同じく十二支神の彫刻あり、作風は少しく異り、彼の均整に比して、やゝ奔放の趣をなす、陵前に石卓あり、其上に小石あり、石卓は此の小石の摩擦によつて、表面砥の如くになつて居る、若き朝鮮びとの說明を聞けば、是も例の信心で、願を立てゝ、ひたすらに此小石を動かす、最後に到つて、此の願をかなはしめ給へ、かなはしめたまへ、かなふか、かなはぬか、かなふか、と云ひ切る時に、此の小石が留ればかなひ、そのまま滑つてしまへば、かなはぬ事だと云ふ。

慶州の大坂氏の話に、南山の麓にある三體佛は、多年土中に横臥したるを、つひ近い頃掘り起した、掘り起して、しばらくして行つて見ると、はや臺座の上に、朝鮮飴や餅などを供へてある、是で安心した、信仰さへつけば、倒される氣遣なし、そこで臺座の前に、平石を据えた、必ず例の石を擦るおまじなひが始まる、平石がなくば、佛さまの足の甲を擦り減らす。

かくの如き迷信、かくの如き傳說怪談、土地が古いとは云ひながら、よくも〳〵多い事である、今の此の單調と無爲の生活、衝動と刺戟とに遠き其日其日は、しかしながら其等の物で漸く節付けられ、色付けられて行くであらう、故に東京で、内閣の更迭と、火事と殺人とのニュースが必要である如く、彼等に取つて傳說と迷信とは、眞面目に必要のものでもあらう、

さるにても慶州は、方一里が間、何處を掘つても瓦が出る、陵墓は丸の内の多くのビルヂングよりも多く、到る處に散在する、今の慶州の人々は、此の陵墓の間にすみ、瓦の破片の上に活きて居る。大きな過去の上積みの小さな現代であらう、過去になきものは、自動車と汽車だけであつて、過去にあつて現在になきものを數えなば、その多きに苦むであらう。

亞米利加の女雛文化

佐々木指月

女は絹にくるまつて、男は襤褸にくるまつてゐるといふのが、このアメリカの文明だ。

ことに都會の女となると上はソサエテイの奥樣連から下は工場通ひの女工に至るまで、絹でなければ肌身につけるものではないとでも思つてゐるらしいありさまだ。

電車のなかで思ひがけなく言葉をかはしたあるユダヤ人が、往來をあるく絹づくめの女たちを眺めながら、私に斯ふいふことをいつた。

『日増にわれ〳〵はアメリカをシルクナイズして見せる。さうしてそのシルクから得た金を日本の陸海軍にインヴエストして、他日われ〳〵は其力によつて世界を征服して見せる。』と。

これは一ユダヤ人の晝間の夢に過ぎないけれど、さういふ睨み方でこのアメリカの現今の文化を眺めると、誰でもこのユダヤ人のいつた言葉を鼻のさきで笑ひとばしてしまふわけにはゆかないのである。

全くこのアメリカの文明の行きつく先は、——アメリカ人の目から見たのでは或はあまりはつきりとしては來ないか知らないが——われ〳〵外國人が、いはゆるその岡目八目をもつて見てゐると、少しはつきりしすぎるくらゐにはつきりして、思はず北叟笑みをさせられることである。

今は夏のさかりであるからして、この都會、ニウヨルクの、女たちは、薄いが上にもなほ薄くよそほつて、自分自身の肌の香に、ぽつと上氣して、建物の陰をあさつて往來を行き來してゐるが、その着てゐる絹物のありさまをざつと筆で描いて見れば、その姿は次のごとしだ。

これはニウヨルクの五十九丁目、これはマンハツタンを横切つて、ロングアイランドシテイへ通ずる大通であるからして、いつも混雜。東京でいへば本所へ通ずる兩國の大通りとでもいふべきところだ。今しも來かゝる一人の女。年の頃は、さア、女はいづれも化物でことに西洋の女はいづれもお河童さんで、年

なぞは御當人でさへ覺えてはゐないだらうが、先づ廿二三でもあらうか、天下の往來に男なぞは通らぬとばかり、男の顏には目もくれず、おすまして歩いてゐるところを見ると、近頃やつと男といふものを知りそめたばかりでがなあらうか?なぞとこちらも餘計な氣を揉んで見たくなる程の金髮美人、追ひかゝる空の雲の夕立模樣を氣づかつて、急ぎ足でやつて來た。ばら／＼と雨が降り出す。風が颯と道のほこりを卷き上げると、美人の長い白絹の靴下はもうぐつしより。短かい上にもなほ短かくきりあげた裳裾はぴつたりと身にはりついて、その裾一重の下にはなんにも着てはゐないと云ふことが、腰から膝に引き落した曲線の工合で、てつきりと見て取れる。胸のブケイは散るにまかせまだ。芙蓉に似たるその裾のひるがへるを如何せん。

これで思ひ出したことがある。或る日、私が、セントニコラステラースといふ丘の上の往來を歩いてゐると、丁度それは風の日だつたが、來かゝつた若い女がその帽子を風に取られて、驚く拍子に裾かばつと卷き上つてこれがどこかへひつかゝつて、どうもがいてもその裾がもとへもどらぬ。折しも巡査が馳けつけて自分の制服の上着を脱いで、その女の腰へ卷いて抱いてどこかへ連れて行つた。物騒なこと限りなし。ニウヨルクの往來では、眞中に太陽が落ちることもあるのかと私はまさに目をまはす所だつた。

しかし、たゞ斯う書いたばかりでは、なぜそんなに西洋の女の短いスカートが有り難いのか日本にゐる人たちにはわかるまいから、こゝで私は知つてゐる限りの蛇足をつけることにしやう。

私の最初の記憶に殘つた女異人といふものは、矮鷄がお尻をつき出したやうなスカートをはいて、馬に橫乘りしてゐたものだが、今からほゞ廿年も前のこと、私がはじめてアメリカへ渡つた折の女異人のいでたちは、そのスカートも昔のやうに地の上をひきずらず、餘程短くなつてゐて、歩くたびに足頸のちらちら見えるのが、おつだとか、いきだとか云はれたものだ。それが今ではスカートは、膝のところを上つたり下つたり、ちらちらと赤いガーターの見えるのが、おつだとか、なやましげだとかいはれてゐる。取り越し苦勞をするではないが、この順でもう廿年もたつたならどんなことになるだらう。

尤もそのスカートも足頸のところから膝のところまで來るのには、一吋づゝ上るにつれて、それには色々な問題がからまつたものである。女のスカートにからまる問題はいつも風教道德の問題で、世の中の事は大抵、地上に委するのを墮落と見、空中に上るのを向上と見てゐて間違ひなかつたものだが、このス

カート問題だけは大いに種類を別にしてゐて、スカートが地を離れるに從つて、それは人類墮落の兆と目された。しかしそれにもかゝはらず、スカートは年々に短かくなつて、それが膝頭の直ぐ下まで來たころは、風教問題も白熱に達し、ある雜馬教の僧正なぞは、惡魔は追々にその手を人類に向つてのばすなぞと痛嘆したものだ。のみならず所々の女學校あたりでも短かいスカートは嚴禁されて、女教師のスカートは地上六吋を離るべからずなぞと云ふ規則をさへこしらへたところもある。してそれに對して强硬な反對論も出たりして、女教師連は一向頓着せずに、そのスカートは地上一呎二三吋を突破して二呎以上に出やうとした。アメリカの長脛孃の脛の長さはこれでもわかる。ある田舍學校の上級生は校長に嘆願した。曰く、私どもは規定の年齡におくれて小學校に入學したのでありますけれど、机の下から女教師の膝小僧が出てゐるのを眺めますと、どうしても目がその方へ吸ひ取られて教課書を讀むことが出來ませんから、あの机の下で白い長脛を組み合はしてゆさぶることだけは御慈悲を持つてやめていたゞきたいものであると。それを校長がどうさばいたか知らないが、斯うした嘆聲を發するのは、田舍の小學校の大きな生徒には限らない。苦情は國内に蜂の巣をこはしたやうに起つたが、大勢の赴くところは如何ともなし難く、とうとう女のスカートは膝の眞上の一線を今や越さうとしてゐるところだ。

さて序をもつてアメリカの女はその短かいスカートの下にはどんなものを着けてゐるかと云ふことを少し話さう。何がために、そんな下着の噂までするかとならば、女のスカートの長短はこの國の風教のバロメータアであり、そのスカートの下につける下着はこの國の道德のセルモメータアであるからである。南北戰爭時代、ホツプスカートの大昔しは、この國の女はそのスカートの下にレースで緣取つた疊み襞の股引をはいてゐた。ホツプスカートが風を孕んでその股引のレースが見えるとその頃の女たちは、赤い顏をしたものであるさうな。それがあの矮雞の尾のやうなスカートとなり、續いてそれが孔雀の尾のやうにながながと地面を引摺るスカートと變つた頃は、女たちは、その長いスカートの下に下袴とでも云ふべきペテコートと云ふものをつけ、その下に白の木綿の下袴を着け、そのまた下に、これも白の木綿で出來た日本でいへば猿又の前の割れたのをはいてゐたものである。これは夏の仕度であつて、冬となれば腰のまはりは質屋の倉で、何枚の古着がぶらさがつたかそれは私にはわからない。

猿又の話が出たから、私はこゝへ、思ひ出した話を一寸書き

入れる。あの猿又と云ふものは元來西洋の女が肌にはいたもので、あれは男のはくものではなかつたのだ。ところで私が先年日本へ歸つた時に、あの猿又を買ひ込んで、それをはいてまたアメリカへ渡つたが、ある田舍の町へ立ち寄つた時、洗濯物を一とまとめにして、その町の洗濯屋へ頼んで、洗つた上で私の行く先きへ小包にして送つて貰ふやうにして立ち去つたが、程經て私のニウヨルクの住所へあてゝ、一通の手紙が屆いた。開いて見るとそれはその洗濯屋からの手紙で、ミスス、ヱタ、サスキイ、デヤ、レデイ、あなたの洗濯物のなかに男の着るシヤツが一着含まれてをりますが、あなたの御着用に違ひなければ他の品とともに早速郵送致します。取り急ぎ御返事をとの事である。そこで私は考へた。ミスス、ヱタ、サスキイ、デヤ、レデイとあるからには、あの洗濯屋は私をユダヤ人の娘かなにかと間違ひたにちがひない。なぜならば、ポーランドから來たユダヤ人にはよくさうした名があるからだ。で私はそのミスス、サスキイで返事を書いて、小包もそのミスス、サスキイで屆いたが、なかのものを明けて見ると、そこに來合はしてゐた女たちはころげて笑つた。メリヤスの猿又が五着ばかり出たのを皆は指さして、これは一體どこの女がはいたのだと云ふ話し。

ところで話を元へ戻して、その質屋の倉のやうに腰に幾重にも古着を襲ねた時代は遠く過ぎ去つて、たゞ一着のニカバカさへどうかすると略してしまう現代では、アメリカの女はどんなものをそのスカートの下へはくか？淫駄羅風が吹くにつれて道德のセルモメータアは膨れあがり、女は白の木綿の腰卷を踏み脫いで、ピンクの絹のスリツプインのなかにすべり込む。

スリツプインといふのは薄い絹のお猿襦袢、袖もなければ前も明いてはゐはしない。封筒の底をぬいて、その端を前へ一寸折り曲げて、それを一つのボタンへ掛ける。だからこれを一名エンヴエロープとも云ふのである。上には紐が二つ着いてゐて、それが兩方の肩でとまつて、着たあとで、お猿袢が下の方へずりおちないやうに出來てゐる。ほんの下に何か着てゐますといふ申し譯に着るのであつて、道德的にはハンケチを當てた程の効能もありはしない。

總じて近頃の女の着ものは、この國では裾から首を突き込んで、絲の子のやうに手足を四方へ出すものが多い。それは髮をお河童にしたことに出るところも少なくはないが、裾の方が切りつまつて來たので、スカートを別に着けるがものはないことになつたからである。上着と袴がワンピースで出來てゐる不斷着を昔はユニオンスーツと云つておもには娘が着ることにきまつてゐたが、今では酒甕のやうに肥りかへつたお婆アさんまで

がそのワンピースの着ものから手足をつき出して歩いてゐるので、往來へ出るたびに、私たちのやうな笑ひ上戸は腹の皮がたまらない。

女のはく靴下のたぐひには、色々と色彩こそはかはつても、形のかはつてゐるのは先づないと云つてもよからうか。大抵は蛇のぬけ殼のやうに白くぴか〳〵した薄い絹で出來たのが多く、これをヌードスタツキングといふのである。日本語に譯して云へば裸體靴下。裸體では脛に毛がはえてゐたりなにかして妙でないから、人工的の裸體を絹の美をもつて造り出したわけである。脛の形の細からず太からず、長からず短からず、頃合ひのふくらつぱみがこの光澤のある白い絹にくるまれて日の光をうけて輝やいてゐるところは、全く美しいものである。人間は乞食を三日すればその味が忘れられぬといふが、女は脛を三日出せば、それをもう一生涯かくす氣にはならぬと見える。

靴下のなかで思ひ切つた色彩は、全部血みどろ色に染めつけた靴下である。美形がこれを穿つて辿ると、往來は自動車迄止まるくらゐ。その色が豚の腸詰にてゐるので、これをバロニースタツキングと名づけたものだ。これこそ肉感の極みである。日本の感能派の詩人にでも見せたなら忽ちにして百篇の詩が出來るに違ひない。したが、バロニースタツキングとは色氣のない名をつけたものだ。その昔天竺の佛僧は女の不淨の滲みついた布を綴つてそれを身にかけ、これを月水衣と稱したものださうだが、このバロニースタツキングも、なんとかさうした名をつけたら却つて神聖な感じがするかも知れない。後來この色の靴下をはいてゐる女をバロニースと呼んだものだが、今日ではバロニースといへば、夜は舞踏場へでも出入りして浮かれあるく娘たちの總稱になつてゐる。

このバロニーたちは近頃では靴下を膝の下にまるめて置いて、靴下どめは用ひずに、膝頭を出して歩くことをはじめた。この連中は顏のお化粧をすますと髮の毛をちゞらせて、それから爪を磨くのであるが、その序に膝ツ子を磨く事を忘れない。罪もない膝ツ小僧こそは災難だ。毎朝毎晩磨かれるので、なかには皮は擦りむけて、血を吹かんばかりになつてゐるのなぞを、どうかすると電車のなかなどで向ひ合つて、拜見させられることもある。

すべて本能のしからしむるところとはいへ、どうしたら男性の目を自身の方へ引きよせることができるかと、女たちはそれにのみ慘憺たる工夫をこらす。木綿の着ものよりは絹のもの、絹よりは、持つてうまれた皮膚の美を現はして異性の魂を奪はうとする。何んのために異性の魂を奪はうとするかならば、異

性の魂の袋には黄金が隠されてゐるからである。この男性の持つてゐる黄金こそは女にとつては宗教だ、生命だ。美男の顔を見てあるくうちは女もまだ駄目で、自覺した女になると男に聲をかけるのは、その男の持つてゐるお金に聲をかけるのである。少なくともアメリカは女の國、ニウヨルクは女の都會だ。美男が欲しけりや女の方から金で買ふ。こゝの女の目ざすところは、上はソサエテイの奥樣連から、下はスウエツトショツプの女工たちに至る迄、黄金より外になにものもないのである。故にこゝの都會に住んでゐる女と云ふ女は、色のために着飾るのでもなければ、戀のために着飾るのでもない。ましてや襤褸にくるまつて汗とほこりにまみれてゐる自分たちの兄弟や、自分たちの亭主野郎のために誰がくそ、口紅脂一つさすものか。誰れに見しようとて紅脂類づけるだ、抱いて死にたや千兩箱とは、すぐこゝの女心にあてはめて、しつくりはまる歌である。

從つてこゝの都會に住んでゐる野郎はみじめだ。金のない野郎と來ると一生あがいても自分の女房のこしらへた出來たての熱いスープは夢にも味はつて見ることは出來ない。始終ランチカウンタアの片隅で、煮からしの骨でもしやぶつてゐるよりほかにしかたがないことになる。人情の國、日本は兎にもかくにも、弗と女のアメリカでは、自分の女房を養つて行くことの出來ないやうな亭主野郎は、それは女房から、こつぴどく取りあつかはれることとである。それでも女房のないよりはましだと思ひ、スープの出し殻でもすゝるに越したことはないと、観念してゐる横着者は、犬のやうな目に逢ひながら、まあ女の背中でも抱いて寢る夜もあらうけれど、少し淡白な根性を持つた男は、白眼であらゆる女の顔を睨めあげながら、生涯を自ら捨てゝ仙人の如く暮すよりほか仕方がない。世の中の女といふ女は悉く黄金の方に走つて、あつたら男が誠を捧げた戀愛も、赤ん坊が母親にお乳を一ぱいねだるやうなものだわよとばかりに、一寸したスマイルをなげかけられて、ぽんと向ふへ蹴飛ばされてしまふ。怒つたつて仕方がない。時勢が時勢で理は女の力にあるのだからかなはない。そこで十六七の小倅までが云はないことか、ヒヤ、アフタア、アイ、ネヴア、トラスト、エニー、ウーマン。この後、決して女の心を信ぜぬと。どうしたのだいと尋ねると、何にね、あの女が來いといふから、昨日の日暮れに行つたところが、ほかのガイが來てゐやがつて、おれは鼻柱へ入口の戸をたゝきつけられた。なぜそのガイの出て來るのを待つてゐて、入れ違ひに這入らなかつた。ラブメーキングでさえ、そんな風にのろまでは、ユーは、マネーメーキングには決して成功しなからう？なぞと、教える奴も教える奴だが、それ

を眞面目になつて考へ込むこの都會の小僧は不憫だ。『金が仇だ。』この一語こそその時に、善惡知らぬその小僧の腦髓に一生消えぬ烙印を燒きつける。

さて、絹にくるまつてゐる女の噂の方はこれくらゐにして置いて、今度は襤褸にくるまつてゐるこの都會の男たちの話をしやう。二弗の帽子に四弗の靴、朝の食事は、ロールスに、ワン、カップ、コーフイ。たつたテン仙で用をすます。さうした勞働者階級の話をこれからすることである。

妹はどこでどう算段をして來るか知らないが、冬はシールの毛皮にくるまり、夏は蜘蛛の巣のやうなうすものをひつかけて、いつもぞべ〳〵してゐるが、兄のジミ君は冬も夏もたつた一着のサンデイスーツ。その外に着るものはといへばウイーキデイの作業服。妹は小學校の成績も自分よりは惡かつたが、ダウンタウンのオヒスの勤をさせて見ると、なか〳〵どうしてスマートで一週間七十五弗の給金を取るやうになつた。自分は或るデパートメントストアのシッピングクラーク、出荷掛りをして朝から晩迄煙草一服吸ふ間もなく働いても、土曜日に得るところはたつた二十五弗なりで、日曜日のデンナーには、足腰たてぬ父親をテーブルの正面へ直して、それに相ひ向つて掛けるのが家内萬端を切り廻す、でつくり肥つた母親で自分と妹とはこれに對して十字に掛ける。最初に口をきゝだすのは妹ときまつてゐてそれに調子を合はせるのは母親の役。惡口を云ふのは自分の役で、父親はだんまり役。

もう一週間たつと妹の暑中休暇の日が來るので、妹はその二週間の休暇日をどこでどう暮らそうかとそれが心配。海へ行かうか山へ行かうか。海へ行けば船のなかゝら山を見る。山へ行けば岩の上から水を見る。山と水ばつかりで、男ツきれの一人もゐないところへ行つて淸淨な處女の日の夢でも見たいと云ふ心もち。

『そりや駄目だ。どこへ行つたつて、お前の主人は電話をかけるに違ひない。舟で寢れば雲のなかに御主人さまの禿が光つて見えてゐる。岩で寢れば草のなかに御主人さんの鼻毛がちやんとアレンヂされて數えられるのを待つてゐる。』ジミ君は日頃思つてゐたまゝをべら〳〵と喋つてしまつた。

『お前は丁度、あたいの別れた亭主のやうだ。あたいの行く先き行く先きを考へて、そこにはいつでも男がゐると邪推する。』妹は、またかと云はぬばかりな顔で、『それよりは自分がどこかで女の子でも拾ひあてたがいゝでしやう。』と、冷笑はミルタのやうにすべつこい。

『何もおまへに女の子をとり持つてくれろとは頼まない。それよりはおまへのゆく先々で骸骨にけつまづかないやうにしたがよからう！』と、ジミ君は負けてはゐない。

妹は顔色かへて立ち上り、そこにあつたグラスの水をジミ君のあたまへざぶり

『おゝチルドレンよ、サンデイに喧嘩するのはよしておくれ。』と、母親はおろ／＼する。

父親は、相も變らずだんまり役。

だんまりのデンナーがすむとジミ君は、ナプキンをテーブルへ叩きつけて立ち上り、パンツの兩のポケットへ手をはさんで、口笛を吹きながら外へ出て、いくつになつても、いつもの通り毬なげだ。近所の若い衆たちが家の前へ聚まつて、いづれもぼんやりと烟草でもふかしてゐると、一臺の自働車がそこへ來て止まる。家のなかゝらは妹が、いつもと違つたいでたちで貴婦人の如く立ちあらはれ、鳩を飛ばしたやうな目をしてながめてゐる近所の若い衆たちを尻り目にかけて、さし向けられたその自働車へ乘つて、ヴアニテイケースをぱつと、開いて、お鼻を鏡にうつしながら、あとにはギアスリンの白い烟を殘したまゝで行つてしまう。

若い衆はどれも同じく口笛を吹きながら空をながめる。ジミ君はそこにあつた毬をとつて、力一ぱいに家の壁へなげつけた。新聞小僧が夕刊を配つてゆく。その見出しには、イングランドのコールストライキ。プロシエービキ宣傳者のアレスト。ブラックメーラァの出現。少女キドナッパァの横行など〻、社會は革命の氣分にみちて、世界は無産者の壓迫された感情の上に置かれてゐる。廣告欄を見渡すと、女子供の着るもの〻廣告が大部分を占めてゐて、スリップイン、ステップイン、紗のニカバカは透きとほり、それをはいた裸體美人の寫眞まで添えてある。寫眞欄はと見渡すと、なんぼ夏のこと〻は云へ、そこに出てゐる程の寫眞はこと／″＼く女の足でない寫眞は一つもない。水泳服の美人の足は魚類の如くうよ／＼とそこいらに映し出され、高飛びの美人の足は空中に八字に打開かれてゐる。いかにスポーツにことよせても、若いもの〻實感をそゝらぬとはうけ合へまい。演藝欄を見渡すと、ブロードウエイはキッスの海。女優の秋波は、うなぎの如く、ぬらりくらりと波うつて、蹴上げダンスのその寫眞は見るもの〻胸に淫蕩の鍼をとろかす。

『ヘル！』と、ジミ君は叫びながら立ち上つてまた例の毬をとつて力一ぱいになげつけた。

女事務員を妹に持つたジミ君の不平はこのくらゐにして置いて、女賣り子を女房に持つたトム君の話をこゝで少ししやう。

『トムーゲタップ、エンド、ゲットアウト、エンド、フエッチ、ミイ、ペーパー、エンド、ミルク。エンド、メーク、コーヒー、フオア、ミー。ユー、アール、デヤ、ハスバンド！』

といふのが、トム君の御内儀の毎朝の命令であつたさうな。トムや！起きて、外へ出て、新聞と牛乳を買つて來なよ。それから珈琲をこしらへておくれよ。おまへは本當に可愛い宿六だからと、トム君の細君は寢床のなかからトム君に毎朝號令をかけたものであるさうな。

しかも御内儀はトム君のために晩の食事の仕度はしてくれはしなかつたさうである。二人は、きめたレストランで落ち合つて食事した。たゞしトム君が待ちぼけを食はされて一人淋みしくスペヤリブスの骨をしやぶる晩もあつた。食事の代價はトム君のポケットから出ることにきまつてゐた。どうもそれは亭主の威嚴をたもつため故仕方がない。だが夜毎に家に歸つたそのあとでも、亭主の威嚴を朝までたもたせられるので、これにはトム君降參した。亭主の威嚴をたもたなくともいゝ晩は、冬の雷神鳴の鳴るほどに、一年中にかぞへる夜ほどしかなかつた。

トム君は印刷屋の職工で、御内儀はデパートメンストアの女賣り子だつた。夫婦になつて三年、御内儀の方は自分の給金は殘らず貯蓄し、宿六の方は、一個の貯金どころか、御内儀から毎月いくらか借りる程の貧乏な目を見てゐた。とゞのつまりが別れ話しとなつてしまつて別れたあとでトム君は毎月百廿五弗づゝの離婚妻女保護料を拂はなければならなかつた。でも妻君と同棲してゐるよりは安上がりだといつてトム君は喜んだ。

トム君は、サアドアヴエニウの、チープなルーミングハウスの一室に寢起きして、毎月かせいだそのお金は、百廿五弗をそのうちから差し引かれて、殘りは皆活動寫眞を見てしまう。

ある時トム君はしみ〴〵と私に次のやうな話をした。これは無智なトム君の觀察ではあるけれどこの國の女雛文化といふものを體驗した男の話だけあつて、われ〳〵日本人もそれによつて考へさせられるところが無きにしもあらずだから、一寸、かいつまんで受け賣りをして見やう。

『日本では』と、トム君は眞面目で私に尋ねた。『家庭と仕事場とはユニオンになつてゐて、亭主は仕事しながら女房の顏が見られ、女房は家政をとりながら亭主の顏が見られるのだといふがそれは本當か？』

『本當にもなんにも、亭主は仕事しながら女房の愚痴をきゝ、女房は亭主の着物でも縫ひながら、おまけに彼の小言迄きかなければならないのだ。』と、これは私の答へだ。

『それはいゝ！して見ると、亭主は一日、女房が何をしてゐ

かと云ふことが分かり、女房は一日、亭主が何をしてゐるかと云ふことが分かるわけなんだな。』彼の問ひは念入りだ。

『その通り。臺所で女房が誰かと話す聲がすると、亭主は仕事をやめてのぞきに來て、見世で亭主が誰かと話す聲がすると女房は菜ッ切り庖丁をもつたまゝで、襷がけでやつてくる。』私は目を大きくして見せた。

『そいつは物騒だな！』彼は笑つた。『しかし、西洋の女房が自宅から仕事場の方へ一日に百萬遍の電話をかけてよこすのにくらべると、マッチベタアだ。のみならず電話料がどのくらゐセーヴ出來るか知れたものではない。』

『そのかはり、タイムはつぶれるな。電話ならば要領だけで事がすんでしまうのだが、顔と顔とを見合はせて話す段になると、物事はすべて面倒だ。晝の休みに夫婦喧嘩でもはじめて見給へ、その日の仕事はそれでおじゃんだ。』と、何も私は自分の經驗を話したわけでもなかつたが、彼は目尻りを下げながら、

『ザッツ、スヴイト！』と云ふではないか？私は不思議な思ひをして、

『何がスウイトなことがあるものか、夫婦喧嘩をしたときのことを云つてゐるのだぜ。』と駄目を押すと、

『アヽ、！アイ、ノー、ホワツ、チユーミイン！ザッツ、ホワツト、ウイ、ヲント、フオア、ゼ、セイク、オブ、ラヴ、オブ、マイキー！』彼は涎をたらさんばかりに恐悦しきつてゐる。

西洋人といふものは、いつもその點はゲッスがはやい。君の云ふ意味はよくわかつた。後生のためだから、われ／＼もさういふことをやつて暮したいと思つてゐるのだ、と、彼はいつたのである。

『さうか、そんならトム君のやうな人が新婚の曉に、しかも仕事場と家庭とユニオンの家を持つたとしたならば、見世はたちまち破産の悲運に傾かなければならないだらう。』と私は少し冷かしたが、トム君、面目を改めて、

『そのために見世の破産は何んでもない。夫婦の破綻をきたすよりいくらいゝか知れやしない。この西洋では夫婦といふものは、夜分、燈火がともつてから顔を見合はすものにきまつてゐて、太陽の照る下では日曜と病氣の時を除くの外は亭主は女房の顔を見ることが出來ず、女房は亭主の顔を見ることが出來ない。お互ひに人間だもの太陽の照る晝間だつて、ことに女は情のもの、どんなに亭主いとしやと思ひ焦れて恍惚となる瞬間がないとも限るまい、さういふ時に日本なら、女房は出刃庖丁でもさげて見世へ飛び出して來るなり、なんなり勝手なことが出來るのであるが、この西洋ではさうはいかない。今頃は亭主は何

をしてゐるだらうと思ふと、亭主は、若い、美しい、教育のある、オヒスガールスにとりかこまれて、そのうちでも一番美しいステノのミスなにがしと膝と膝とをつき合して、あゝ、じれつたいと思ふと、手は電話のレシイバアに自とかゝり、亭主のオヒスの番號を呼び上げると、きこえて來た聲の主は可愛や亭主の聲ではなくて、憎やステノのミスなにがしが、ミスターは今御不在で御座いますと、けんもほろろの御挨拶、氣にして見れば彼の女の息は少しはづんでゐたやうでもあつた。なぞと斯う思ひめぐらしては泥水を煮て呑む思ひ、もう居ても立つてもゐられず、ふとした出來心から、アイスメンなり、ミルクメンなり乃至はポリスメンなり、手近に立つてゐる男を引き込んで、ピストルでも放すことになつてしまふ。』と、聲を嗄して訴へる。

『さうだねエ、西洋の女は、あの瞬間をこらへる力は東洋の女ほどにたしかではないといふからなア。』と私は言葉を合はすより道はなかつた。

『女が金力によつて獨立すれば、男を尻の下に敷くのはあたり前だ。』とトム君は論鋒を轉じた『女に家庭以外の職業を與へれば、女は金力によつて獨立するにきまつてゐる。女に與えた自由と平等、その平等の見に立てば女は亭主はいらなくなる。產んだ子は誰れの子でも自分の子なら差しつかへないわけだ。その自由の上に立てば、女は一文無しでも、からださへ女であれば世界三界股にかけて歩くに何んの苦勞もない。ニウヨルクに女の乞食の若いのは見たくも無いのはそのせいだ。それでは人間の世界は亂脈になるより外に道はない。男を捨てるは女の自由。女を捨てた男は、かうして每月百廿五弗宛の罰金を納めなければならない。何んといふ馬鹿な法律があつたものだ。弱者保護と一概に云ふが、現代の女は弱者ではない。男性の弱點につけ込んでの戰ひを挑むごとに女は凱歌を奏してゐる。男性の目的は女性の愛で、女性の目的は男性の金なんだから、兩性戰へば男性は負けるにきまつてゐる。金には限りがあるが、愛には限りがないからね。それなら女の弱點と云ふのは、彼の女たちが金を得るためにその愛を切り賣りするところにあるのだ。これは女の自然に陷るべき道で、女を自由にして置けば女はいつでもそこへ落ちて行つてしまう。故に女を保護する道は、女に道德を敎へ、貞操を敎へ、父ある子の尊さを敎へることなんだ。男が女を保護する誠意があるならば、女が男を保護する誠意があるならば、お互ひに金力によつて獨立しやうと試みることとをやめることだ。聞くところによると、日本の家庭では、亭主は財布を女に渡して置くと云ふではないか。それは亭主は、女房に對して、男は金力によつて女の愛から獨立しないと

云ふことを明かにしたしるしなんだ。また、女は、いつでも自分の身を男にまかして置くと云ふではないか。それは女は愛情によつて亭主とは戰ひを交へないと云ふことを明かにしたしるしなんだ。これをこのアメリカでは、亭主は女房に財布を渡さず――たゞし渡せば毎日でも新しい帽子と靴を買はれてしまう。女房は亭主に身をまかさず――たゞし任かせば毎年でも新らしい赤ん坊を一人づゝ産まされる。故に亭主は財によつて獨立し、女房は愛によつて獨立するより外に致し方はなくなつて來る。亭主が女房の愛の欲しい時は新らしい帽子を買つてやり、女房が亭主の金の欲しい時は新らしい赤ん坊を産んでやる。民族的に泌み込んだ利己主義の然らしめたところではあるけれども、東洋人の夫婦の間の情愛にくらべると、われ〳〵西洋人のは何んと云ふ淺ましいことなんだらう。試みにニューヨルク界隈の女房が子を産む前に一生暮せるだけの金をやつて見給へ、子はおろして、金をもつて、別な男とどこかへ逃げて行つてしまう。私の女房も結婚當時、彼の女がまだ女賣り子をしなかつた前は、私にたよつてゐたものだが、女賣り子をはじめてから、序に自分の愛も賣り物になると云ふことをたしかめて、私を邪魔にしはじめた。私は彼の女に女賣り子は止めてくれと幾度云つたか知らないが、毎日家に居殘つて留守番ばかりさせられては、とても淋しくつてやりきれない。それよりは自働車でも買ふために小錢取りなどしようと云ふので、とう〳〵私の意にはしたがはなかつたが、自働車どころが、とんでもないものに乘り廻して、とう〳〵逃げて行つてしまつた。證據をおさへずに離婚訴訟を起したのが私の落度で、彼女の方から逆に訴訟を起されて、私の負けで一ヶ月百廿五弗のアレモニイを、彼女が再婚する迄拂はなければならないことに立ち至つた。彼女が女賣り子をやつてゐるので私の拂ふ保護料は安くてすんだが、彼女は現在別な男に食はして貰つて、別な男に家賃を拂はせ、賣り子をして給金とつて、私からはアレモニイを卷きあげる。所謂愛の獨立を彼女は實現したのである。私一人を不運な男と云ふ勿れ。このアメリカには、斯うした男はごろ〳〵してゐる。ことにこのニウヨルクは街衢にこんな男がうよ〳〵してゐる。みんな女難文化に祟られた亡者の群であるのだ。』

トム君が女房に愛の戰ひを挑まれて、三年の苦鬪一敗地にまみれた物語りを聞いて、

『それは何もアメリカに限りはしない、私の母國の日本でも祖の道は衰へて、今では男も女も家庭を中心とした生活は棄てゝ、金錢づくでも色づくでも、各獨立して、このニウヨルクのやうに、大バビロン、大ヨシワラを實現しやうとしてゐるが、

それは女性の解放といふことに自然ついてまはる結果なので、斯うなつてゆくことが、或は人類を、より以上幸福に導く所以であるかも知れない。大バビロン、大ヨシワラの生活も、それで一生過ごせるとしたら、却つて面白からうじやないか。たゞし金さへあればね！ どう暮したつて人間はたつた五十か六十年だ。何もトム君、哲學的に、逃げた女房の貞操を、論ずるがものはあるまいぜ。』

と、私は彼を慰めた。

これに因つて日本の社會の夫婦和睦のことを思ふと、日本の女は亭主から預けられた財布を後生大切に握つて、自分は豆腐の殼を食つても亭主には白米の飯を炊いて食べさせる。おまけに赤子は毎年双た子を産んでくれるし、昔は亭主が貧乏すれば、女房は身賣りまでして亭主の爲に盡してくれたものである。

それ故に日本の男がアメリカへ來て、うつかりこの土地の女とでも結婚しやうものなら、初めから度を失なつて、狂氣の沙汰になつてしまう。彼はいふ、女は日本の女に限るねいと。何も女は日本の女に限りはせぬが、家を傾ける迄子を産んで、國を傾けるまで民族を殖やす。さうした女は世界中、日本より外にはゐないであらう。日本萬歳だかなんだか知らないが、日本人は今のうちに滿蒙の方へでも移住して置かないと、あの島國は、黒潮のために太平洋の沿岸は船底のやうに浮いてゐるから、昔太平洋の眞ん中にあつたムウ大陸のやうに、いつ何時ひつくり返つて深海の底に沒するか知れないさうだぜ。あんまり子供ばかり産むと、その重みでもあの國は海のなかへ下るといふから氣をつけたらよからうぜ。日本の國は神代の昔から大の鳥船の國といつて、或は天の照船の國と云つて、海のなかに浮いてゐる島の上に築かれた國だから、板子一枚下は地獄の國なんだ。尤も日本といふのは、昔、佛教が傳來して來たときに涅槃の國と名づけたのにはじまつてゐるのださうだから、いづれ全滅はまぬかれ難い國なんだらう。

何んだか不吉なことを云つて、日本にゐてこんなことを云つたらなぐられるかも知れないが、こゝはアメリカの事なので、少々日本をけなしても其恐れは全くない。しかし日本人が、このアメリカに來て、私のやうにかれこれ廿年もたつて見ると、西洋の文化もこれで案外つまらないものだと云ふことがわかつて來る。油に電氣、高架、鐵道に地下鐵道に摩天閣、大仰脅組織の文明は人間の德性の尊嚴を破壞して、人間をしてたゞもう金力の前に跪づかしむる。祖先が何んだ！祖國が何んだ。父母が何んだ！夫婦が何んだ。忠孝と云ふ文字は辭典のうちにも見當らず、愛と云ふ語は同衾といふことに意味を變へ、貞操といふ事は、さア？お婆アさんや、貞操ツて何んのことね？と孫娘が訊ねると、お婆アさんが、それは何んでも、昔女が男から養つてゐて貰つた時代に、女が自分をプロテクトするためについた嘘の

ことだよと、御返答恐れ入るが全くそれに違ひない。では、貞操錠と云ふのはなんのことねゝそれはたしか與入らずのことだつたと思つたよなぞと。お婆アさん見だけは這入られても。金にならぬで、用心したものだと見える。これは未來の話だが、現在に於てもこのニウヨルクでは、チエステテイなぞといふことを女の前でいはうものなら時代おくれの素寒貧だと笑はれる。

上はソサイテイの奥様連から、下は汗と脂をしぼる工場の女工たちに至る迄、金銭ぬきの戀愛なぞと云ふものは、この邊では、昔の夢と過ぎ去つたと私は斷言つかまつる。なかにはソサイテイの奥様から愛されて、人間に未だ戀愛ありなぞと反り身になつてゐる詩人なぞがゐるかも知れないが、他の男から彼は犬だとうしろ指をさゝれてゐることには、お氣がつかれずゐると見える。この界隈で金銭いらぬ戀愛だつたら御用心、それはあとで、一命とつりがひのお高いものにつくのである。

この界隈の男女の仲の紛雜してゐることはスクランブルエグスの譬も數ならぬ有様だ。私の知つてゐた一人の淑女は天女も及ばぬ清浄無垢の女だと思つてゐたが、ある時、急に精神病の病院へ送られた。

ある日の事にこの淑女は、彼の女の住んでゐたホテルのルームへ理髪師を電話で招いで、長い髪をぶつツり切つてお河童さんになりたいと注文した。理髪師は道具を抱へて早速參上仕つたところが、どうしたことだか、その理髪師は、急にホテルのルームから逃げ出したが、その理由はエレヴエタアのベルボーイさへ知つてはゐなかつた。理髪師がホテルの外へ一足出ると、上の窓から大きな牛乳の壜が飛んで來て、理髪師には當らずに、そこで南京豆を賣つてゐたペドラーのカートの上へ落ち込んで南京豆は散亂した。

街角に立つてゐた巡査は驚いて、誰のしたことであるかをたしかめるために、ホテルの七階へ上つて來たが、とあるルームから金髪を亂した女が顔を出して、おいで〳〵をしてゐるので、そのルームへ立ち入らうとすると、その女は驚くべし、寸糸かけざる裸形のまゝで、大手をひろげて、いきなり巡査に抱きついた。巡査は狼狽、どうしたことかとルームの外へ飛び出して、あとから續いて上つて來たホテルの主人に尋ねると、これはしかるべき淑女とあつて捨てても置けず。先づ醫者を呼べといふので、ホテルでは醫者に電話をかける騷ぎ。

電話は二三、淑女の友人のところへもかゝつたが、皆馳けつけたそのうちに、私もまさつてゐたのである。

淑女は私の顔を見ると、頓狂な聲で高笑ひして、

『おゝ、エタや、この三四日、あたしは、數限りなく、逢つたベッドに寢て見たが、そのうちに私のベットは一つもなかつたよ。』と、何たるそれは悲痛な告白であつたらう。

私たちは皆赤面して、顔を上げるものもなかつた。

堪へ堪へてゐた本能の悩みに狂つて馳け出した女。それは金の力では獨立した女であつたが、男の愛を獨占する機會は全くなかつた女であつたのだ。——完——

家庭文學の變遷及價値

——明治煽情文藝概論の結語——

日夏耿之介

一　緒說

（七月號本誌上の拙文で約束した「明治煽情文藝概論」の結語を、前文の性質を受け繼いで史的と史論的との交錯した形式に於て簡約の間にまとめようと思ふ。）

輸入的儒教主義の男尊女卑と、傳來の祖先崇拜の宗教的習俗のもたらし來つた家長制度と、日本佛教の俗解絕念觀とその他の習慣の隨勢とが集合して作り上げた明治初期に於ける德川的傳承の家庭思想、家庭制度が、假令んば如何にまばゆきエキゾテイシズムに目醒め、汪然たる知識慾にそそられた明治人によつて突然の改造を試みられたとはいへ、傳來の慣習の底力はもとより一朝にして亡び去るものではなかつた。否、寧ろ一般的事實としては、慣習の勢力範圍內に蹲坐しながら（獄裡から窓外の春を想望する囚人にも似て）自由と解放とを焦心して希つてゐたに外ならなかつた。

政治的正義は結局、悠々たる雲杳かな理想であるが、政治的自由は目前現實の生々しき希望である。その自由さへ滿足に與へられぬと思惟した十年代の民權的青年者流にとつて、世間が不平不滿の掃溜であつたと同時に、家庭的に尙改造されてゐない彼等、性的に敎化せられてゐない彼等、國家人としての資格をそそぎ込まれるに忙がしくて人間的素質を顧る暇のなかつた彼等にとつて、家庭は慣習的禮儀の練習場ではあるが、本能的愛着愛心の自由な赤裸々な交換所ではない。快樂は外に求むべくして、內に於ては與へらるべくもない。町內の集會ではさばけた冗語を校書の徒と交す事さへ惜まない家長も、家內ではともすれば澁面を作つて嫁孫に忠孝仁義の御託をしたがる堅苦しい親爺である。青白い顏をした良妻賢母等は政岡のごとくに慇懃で戸浪のごとくに凛然としてゐるが、內實は不倫なる男の流眄

や又はその虐使を目途とする姑のお先祖さま主義や良人の不始末やらドラ息子の尻ぬぐひに月も之れ足らぬ貢ひ殺しの安價きはまる「焚きざはり」で、年を經て軈て此良妻此賢母が一家の權力を握るとなると、新しく飼はれに來た嫁いぢりにしば〳〵昔の復讐を算へ、去年小學に入つた孫娘にもとかく女今川のおさらへをする。これらの家庭から、「世界的」の物理學者や、所謂明治「文豪」や財界の「奇傑」なる者や「軍神」の卵の類や和製の「トロッキイ」や「スパルゴ」や「仕合せ極まる」政友總務の輩も出たのであるから、良くも考へられようし、惡くも考へられようが、畢竟この民族がこの變轉期に際會して這般良否の産兒をなしたといふにすぎぬ。問題はこの民族性、この轉回期の本來の性質如何にある。

原始的無教化といふ原則を除いても、大和民族の上代人等が性的に快活であり解放的であり自由であつた事、一家の和樂を素撲に直截に實行してゐた事は上代歌文の研究からも推測せられる特性であるが、家庭の文學として特に特徵夥しきものがあつたわけでは勿論ない。その點は日本のみでなく各國の上代文學も亦さうである。希臘叙事文學でヘシオドスの「神統記」は類稀ではないが、その「仕事と日々」は家常文學として異數のものに算へられてゐる。然るに、明治に於ける家庭

に於ける思想新舊の問題、階級觀念よりの紛糾、虚榮心に基く家庭團欒の破壞、家庭人としての男女の一代記、上流家庭への好奇心、軍國主義の謳歌等を題目として、筋の運び方にも、暗黒面描寫の程度にも、性的好奇心のそゝり方にも、宗教道德に對する見解にも、任俠義憤の高調にも、家庭の讀物として特殊の文學的教養を要しない一般人の興味を惹くに足る條件を備へてをれば存在が許されたので、この類の小説の最高級の作例を西洋に求めると、たとへば獨逸のパウル・ハイゼの如く、佛蘭西のアレキサンダー・デューマの如く、英吉利のマリー・コレリの如き作者の作品がそれにあたる。

上代に於て原始的乍らも家庭的なりし日本人が、中世以降家族主義を根本條件とする家長思想に立ち乍ら、實際は一向に家庭的でなかつたのは家庭の王者たるべき女人に家庭に於ける求心的權力と自らの教育とが賦與せられなかつたがためで、禮容はあるが親子兄妹の愛の交感はありありと表面には出ない、何らかの危機に際して初めて顯はれるといふに止まるのであるから、文筆ある女子は惠まれた特殊の産物にすぎないので、これらの女子によつて生れた文學も亦特殊の位置にあつて男性の領域に藝術的活動をなしたといふにとどまり、女性作者の家庭文學も明治迄には群落的には出てゐない。外國はその點に於て數

歩早く進歩してゐた事說く迄もない。近世文化の家庭教育に浸潤せる結果の一であるから。既に近代文明の副産物として、教育普及の間接結果として、家庭人の解放につれて此家庭文學が生れ出たとすれば、これが日本文學史中特に明治に於て初めて明らかに具體的に表れた現象である事が判明するわけだ。德川末期迄にあつても、僅かに其希望と企圖とは閃めいて居たけれども、それは極異例で文學史中の著しい現象と迄はなつてゐなかつたから。其明治家庭文學の最初のけはひは何であつたらうか。

二　基督教的家庭文學

明治人の家庭に泰西的形式をもたらしたものは政治家と外交官と貿易家と貴族富豪の徒とで、その泰西的內容の幾分をもたらしたものは正に基督教徒であつた。勿論此雙方には例外も夥しいが、全體から見て斯ういふことが、ある心持に於て許さるべきであらう。

その政治家と外交官と貿易家と富豪貴族との家庭から文學が生れるに至つたは輓近の事實であるが、基教徒の窓から家庭文學が芽生へたのは遙かに杳く四十年の昔であつた。

新島襄は二十三年に死沒してゐるが、その創設せる同志社中心の宗教運動の効果は、啻に組合教會以外他の教學界に類似のミッション、スクールの創設を促したのみでなく、文學界にも民友社の新興文學となつてあらはれた。同志社の開校された十二年はキリスト教の傳導時代で、翌年には邦譯新約書成り、Y.M.C.A 起り、十九年には邦譯舊約書完成をつげ、次いでユニテリアン傳へられ、日本基督教會の獨立が成功し、サムマースクールが開かれるといふ有樣で明治宗教の變遷を顧るとキリスト教流布のかくも目醒ましかつた時を外に見出せない。しかし、明治十二年の頃に總數三千人にも達せざりし信徒が十年の間に十萬人を超えるに至つた仔細は、單なる新宗教への好奇心とも、宣教者らの努力とも考へる事は出來ぬ。否、進化論の輸入は、功利說の提唱は、實證哲學の祖述は、かへつて反キリスト者の一團に仇敵の武器を逆にとつて對抗するが如き感と事實とを與へた。紅毛碧髯のもの凡てがキリスト教と同種同族のものでは必ずしも無かつたことといふ迄もないからである。

が、明治人の異國情調は、時として、此等相容れがたき顚逆相異する思想や敎化やに只莫たる憧憬の念を以て對したる事も事實である。「西洋人」に對する著しき好奇の心と何とはなき尊敬の心との混淆せる心狀である。功利的にいへば、かれ等は之れに由て時勢に必要なる語學をこの異邦人から學習する事が出來る。珍奇なる西洋的の風俗に接する事も出來る。「高等」な智

文學鑑賞の眼をあけられる事も出來る。輸入時代の青年が、これらに牽引せられるは非理ではない。しかも、一たびその家庭を見た者は、個人的自由の生活狀態を目のあたりにして、男尊女卑の「陋習感」が今さら首肯せられるのみか、一家の和樂團欒、家長の溫顏、主婦の權威、兄姉妹弟の親密はいふ迄もなく、昔から日本にあつた僕婢への溫情さへ、全く今迄の大黑柱黑く狐格子古い疊と障子と帳場と佛壇と客間との家庭（といはんよりは寧ろ御總さまを中心に祖先への崇拜の情をさゝげつゝ集合した家族的共棲）には靈氣ほども無かつた、そして此新渡の文明開化の權化たる神の愛の宣布者の民族のみが羨くも豐かに享有する美德であるかの如くに理解せられて、こゝに集り、こゝに學ぶことが、輕薄人には「高等」な開化趣味であり、功利家には此上なき便宜であり、求道者には目くるめく現實の刺戟であり、而して文學青年には鑑賞と研究との唯一の好機會であつた。

一方、キリスト者の側から見れば、流布の一法として盛んに人寄せをする必要から文學語學の教授はもとより厭ふべき筋でなく、研究、洋行、その外の方面にまで個人的内情に立入つて世話をしたものも少くはなく、又、それらの職業意識を全く離れて懇切に教導と世話とをつゞけた牧師らも相當に多かつたから、十八年伊藤內閣が成立して外交政策上歐化主義が堂々と行はれ初めてから一層にこの新宗教の傳播は著しくなつた。

然るに國會開設前後からしてキリスト教そのものは、歐化政策が浮薄の模倣と無差別の輸入とを敢てした事の反動原因と古日本の新らしき光に照らした評價の自らなる希望の發動と土產の愛に引寄せられる一種の回顧心とから國粹保存が强調せられ內部にあつても基教神學の宗派が解釋に於ての新舊見解の相異から各派の間に漸く一致を許さゞる事情が續出し、三宅雪嶺一派の「日本」出で、井上哲次郎對キリスト者の論爭起り、內村鑑三の御名御眞影事件、クリスチヤン政治家森有禮の慘死等の事件が起つてキリスト教は非愛國派の立場に强ひて立たせられる傾向が生じてから、（實際そのけはひもあつたのだが）、對外問題の紛糾と共に朝鮮事件、日淸戰爭となり、國粹家と神佛教徒と一團となつて宗派根性に反動思想が混淆してキリスト教徒の對國家態度を曲解異釋したところへ、キリスト教徒自らもこれに對抗するの根據ある思想家は少數で、多數は喧騷に驚愕するに過ぎない凡常の善男善女であつた上、牧師ら亦傳教の道を誤つて新信徒の不滿を買ひ、國粹熱に感じて脫宗の徒相つぎ、信徒次第にその數を減じて明治キリスト教史中最も不振の時代となつた。かの外山正一が「東京學藝雜誌」第七十二號に「耶蘇教擴張の

新法」を論じ、大學卒業生をクリスチャンにするを捷徑とすると云つたも、信徒の質を向上させる事の義務を説いたに外ならぬ。しかも、注意すべきは、明治十年代末期から此時代かけてキリスト教的家庭文學が芽生へて來た一事で、その代表人若松賤子の執筆期は二十二年末から二十九年に至る間で、この英語をあやつり、英文を物したキリスト教新婦人の新飜譯新創作が産出した期間は、あだかも、古き日本の最終最後の閨秀小説家、書に歌に文に秀でた一代の才媛樋口一葉の活動期間で、この二人の巾幗作家はいろ〳〵の點から對照の興味が深い。

徳富蘇峰は、二十年七月「國民の友」第六號に「基督教の文學」を談つて曰く、

「宗教の文學にて最も注意すべきは、(第一)何人も了解し易き、平易なる文章を作ると是れなり。彼の浄土宗の和讃及び眞宗蓮如上人の御傳記の如きは、爐邊に横臥して起つ能はざる田舍家の老婆と雖も、猶ほ之を讀むなり。(第二)讀む人をして樂ましむると是なり。如何に平易なればとて、讀んで樂まざるものは、誰れが好んで之を讀まんや。別けて宗教の思想は、動もすれば抽象的の理窟に陷り易きものなり。況んや自から好んで理窟を言ふに於てをや。吾人は敢て理窟を言ふ勿れと云はず。たゞ趣味なき理窟を言ふて、人を飽かしむる勿れと云ふなり。(第三)品格を高尚ならしめんと是れなり若し下品なる文章を作りて、人心を腐敗せしめば、如何に人を了解しめ、人を樂ましなるも、既に宗教の目的を失したるものなり。彼の野鄙の言葉を使ひ、鄙猥の形容を用ゆるが如きは、實に宗教文學の賊と云ふ可し。」云々と論じてゐる。

この政論家の文學論の注文によく應じて現れたのが若松賤子に外ならぬ。賤子はキリスト教雜誌「女學雜誌」に連載したバーネツト夫人作小説「小公子」の譯者として著聞してゐるが、一二の明治文學を叙した現行冊子にはその名さへ出てゐない程いはゆる文壇とは縁の遠いキリスト教家庭文學の作譯者であるが、當時この書出て一般の讀書界を動かしたは今日に到る迄その讀者つねに絶えず、その後大正作者佐々木某の新譯出でしも、その新版本つひに行はれずして依然として此舊譯本の讀者を牽引してやまぬものがある程に一般的興味を惹起したは、その當時、「國民の友」記者が兒情を寫した作品としては「チツケンスに『オリバー、トウヰスト』又『オールド、キユウーリオシチー、ショツプ』等諸篇、トルストイに『幼兒、少童、及び青年』ドストイエフスキーに『禍患と侮慢』あるが此書は「前書に比して格段なる遜色あるを見ないといひ、思軒居士は「世間の謂ゆる言文一致體に出る者にして余が心より服せるもの唯だ「浮雲」ありしのみ今日此書を獲て二となれり。」といひ、評家忍月が「見渡すに女學雜誌主筆巖本善治妻譯述(此所廣告の文字借用)小公子に關する諸家の評總て上評ならぬはなし女學雜

誌の面目若松女史の滿足如何ならん思へば羨望に堪へざる次第なり」といひしに徵して明白である。又その原作評は宮崎湖處子が此書は理想小說で天使の性質を小公子に擬人したものであるが、それには酒風症の老侯爵が惡役では物足らぬ、あの老人は貴族の傲慢と武人の酷薄を有する頑翁にすぎない。外に理想の大惡魔がなければならぬといひ、又、保姆のメレが淡泊すぎるはその欠點だ、「理想小說の短處は其筆力の或る一部に偏して全部に遍滿せざるにあり」といつた一文と坪內逍遙の「早稻田文學」第四號で「原書の精神は無邪氣なる小公子を主人公に利己にのみ傾ける老貴族を副主人公にして「無邪氣」の周圍に及ぼせる感化並に周圍の「無邪氣」に及ぼせる影響を寫さんと力めたるものゝ如し」と云つた外に忍月が人間には極端を喜ぶ情があるが、これは人間の弱點で、「本書小公子は人間の弱點に乘」じた作で、「之を評する者も亦自己の弱點を棚の上にあげて顧みざるものなり」と突き、老人と小兒、剛情と慈悲等年齡情性身分貧富悉く極端で、「極端を除去すれば本書の妙味なし」と斷じ、と云ふて譯者や作者を貶離するのではないが、「只『極端』は老功なる文人が手腕を振ふべきの舞臺にあらずして終に他の嗜好を犧牲にするの惡弊に陷ることを示すのみ」と結んだ一文があるのみで、忍月の評文は認識不足の嫌はあるが、他の評家にまさつて直ちに家庭文學、少年文學の欠陷を文學論的に突いた批文である。

又、譯文については「讀賣」紙上に紫山人が「自他混淆文體滅裂と云はれても蓋し辯疏の辭なきに苦むなるべし」と評し、逍遙は、流暢平易の中に長幼貴賤の別、文情の調和をはからんとして俗語を用ひ、特に「人にいひ／＼しました」など優しい女教師が幼童に教へる風に似てゆかしいといひ、思軒が「斯の一體より以外には復た文あるを知らざるが如く」と評し、「一點のヤマなし一點のケレンなし謂ゆる場當りキザ氣に至つては毫も之を見ることなきなり」といつたは美妙の口語體を諷したるもの。「原文を見て如何にも一目の下に瞭然と共意味の微細曲折の御分りになることは、丁度日本の平生の言葉を聞くやうに御分りになるものと見える。」とは賤子追悼會席上に於けるその追悼演舌の一節である。「小公子」原作は當時の評者在米の梅謦生の一文によると、少年雜誌「セント・ニコラス」誌上にかゝげて大評判をとつたのが千八百八十五年とあるから、原作發表後四五年ならずして譯者の採る處となつたもので、「小公子」は少年文學と冠せられたれども如何なる種類の人々も實に必讀の書にして云々と梅謦生も云つてゐるが、日本に新しく生れたキリスト教家庭文學として先驅第一に屬する作であり、譯文も

精緻を極め、明治翻譯史上必ず引證すべき第一流の翻譯文章である。ただ、純藝術の立場から之を見て忍月の所言に中るところ多いは否まれまい。以上の援用文を見て、讀者は、當年の文壇が家庭文學も純藝術も混淆して認め且つ論じてゐた事實に氣がつくであらう

賤子の文業は、「忘れがたみ」に收集せられた創作文と譯文と、外に「ジヤパン・エバンゼリスト」婦人欄小兒欄主筆として執筆せるを後ハーツホーン女史が編纂した英文集「巖本嘉志子」二十一篇がある。處女作「お向ふの離れ」が二十二年十月の「女學雜誌」に掲げられて後に、ミス・プロクターの詩を散文化した「忘れ形見」と、デイケンズが「デヴイツド・カパフイールド」の最初の部分譯「雛嫁」と、バーネツト夫人の「せーら、くるー物語」譯と、同じ作者の譯文斷篇「我宿の花」と、テニスンが「いなツく、あーでん物語」と、ストウ夫人がMy Wife and I の一節「入學前」と、インジエロウが「淋しき岩」との外に飜案らしい小品と創作小品とがあり、「太陽」の二十九年一月に掲げた「女房演說」のごとき會話體の小篇もある。以上の譯文の選擇を見ても賤子の興味の性質は判るが、蘇峰のいふ程度の注文は殆ど完全に若松賤子に於て實現具體化されてゐるので、此等の譯文の巧みと「女房演說」の會話體の出來榮えとを見ると、遺して行つた作業はこれ丈けだが、賤子の才分は決してこれ丈けに終る性質のものでなかつた事が首肯せられる。

新聞も邦字新聞よりは英紙の方が樂だと云つてゐたといふ賤子は祈禱にも寢言にも又心を籠めた眞面目な書翰などにも自然に英語を用ひてゐたほどに英語に堪能の婦人であつたから、譯文特に會話の呼吸に得もいはれぬ妙味を出し得たは當然だが、當時のキリスト教家庭文學が殆どこの人を最初の最後にして亡びてしまつたは心殘りである。尤も 河井道子、辻村靖子共譯の「家庭小家 ひとりぼつち」は明治三十年エミ・ライーバル女史の原作であり、松居松葉の翻譯「家庭小說 樂大小屋」は米國八十萬の家庭が悲哀の淵を救はれ、その脚色物上演、倫敦で三百日以上大入をつづけたなどと廣告をせられたがともに一般のセンセイシヨンは贏ち得なかつた。

若松賤子の家庭文學が、ただひとり太白のやうに輝いたのは上述の如く彼女の天分にもよるのだが、その語學才と藝術才とをかくまで發揮せしめた母胎はそのキリスト教的信仰に基く家庭觀、藝術觀の快活性光被性樂天性で、女史の藝術を第二義的家庭文學の埒内に跼蹐せしめたのもそれであれば、女史の人間を明治基督教徒中の最も好ましい型に仕上げたものもそれである。「小公子」はもとより米國家庭文學の翻譯にすぎず、その

原作も作者の書史中にあつては That lass o' Lowrie's (1877) Haworths (1879) Hauoruhs (1879) Affair Barbarian (1881) Through One Administration (1883) 等の「小公子」迄の前記の作と A lady of Quality (1896) Naking of a Narchioness. (1901)等後期の作と. Phyllis. The shoawman's Daughter, Esneralba 等の脚本との間に伍して逸作を歌はれるものではあるが、米國近代文學上史中の秀什といふ程の作稿ではない。シヂヰツク、ワーナ、フインリ等閨秀文學者の少年文學にしても、ホーソンの少年文學にしても、トロウブリツヂ、ケイラ、オルドリツチ、グドリツチ、アボツト等の少年文學にしても、ケロツグ、アダムズのそれにしても米國少年文學の乃至少年家庭文學史の重要頁たるを失はないが、前世紀世界文學の水準に於て英國リウヰズ・カロルの占めうる程の奇異なる位相は許さるべくもないのであるが、バーネツト夫人の作は、此等とは些か趣きを異にした家庭少年文學でもあり、泥濁米國が僅かに有する淸教徒的民性の通俗文學的展開でもある。此文學をキリスト教徒文學の一系列に位する作品として拾ひ上げた若松賤子が、淸新にして高雅、快活にして敬虔、無邪氣にして凛乎たる人生の夢想を托してこれを本邦讀書界（敢て文壇といはず）に寄せたのは意味ある事である。基督文學はホワイト師の『天路歷程』を初めとして過去に於てかなりの數の移植を経へてゐるが、それらは純文學としてよりも宣傳文學として役立たせられたものである。マリー・コレリの家庭キリスト文學も早く移されたが、其實際の効果は何れの點から見てもバーネツト夫人の「小公子」には及ばなかつた。蘇峰の數へた基督文學の綱目は常凡の見地を出ないが、傾向文學として結局これに落付くのがその常道であらう。忍月の算へた如き標目を持ち來らば、小公子文學の藝術價が消失しさうになるは止むをえないが、さういふ傾向文學の裡にあつて斷片的に存する文學興味——小公子でいふならば、母夫人の吾子に對する態度や老貴族と小公子との初對面や八百屋に於ける小公子の潑剌たる言動等の描寫の價値並びに作品を一貫して流れる淸潔雅淳の主觀のただよひは後世該系統の文學に若干の重要な遺產をもたらすものである。而も公子の性格は忍月のいふ如く極端に理想の成型を寫したといふ事は穴勝ち出來ない。梅磬生の文中、米國社會でフオントルロイに吾子を倣はしめるのは氣慨ある男兒を柔弱の女子に化する危惧があると論じた說の紹介もある通り、極端といへば則ち性格的極端には相違ないが、小公子は畢竟作者自らの理想の少年で、決して俗納野卑な世好に諂ひて投ぜんとした形迹は些かもないはら、明治三十年代の文壇に所謂「光明小說」型の家庭文學で

はあるが俗野を嫌はぬ通俗文學と同一視する事は出來ない。而も此極端性は光明小說、家庭文學の不斷の屬性である。

「大阪每日」懸賞小說一等當選の中村春雨作の「無花果」ごときも、これが紙上に現はれたのはそれより後遠く三十四年五月以降のことであるが、キリスト教的憧憬が中心觀念となりキリスト教的光明觀が主眼となつてゐたから、高山樗牛や杉村楚人冠がトルストイの「復活」に比したはよいが、後者が直ちにその模倣だと云つて酷評を下した如きは馬鹿の一つ覺の例で、作者もその回想中に「復活」を讀んだことはないと明言してゐる通りト翁の作品に追隨したと見たは、キリスト教的臭味のものと何もかも一括して有名作の名を擧げて粗笨にもこれの模倣だらう位な考で評したのが作文の際に筆がすべつて模倣也になつてしまつたので、この種の粗雜な一括評は當時ザラにあつたことである。

春雨の「無花果」は作者その回憶談に、

「光明小說とか、家庭小說とかいふわけのものでなく、勿論、作者の體驗をそのまゝ書いたのでもない、ロマンチツクな、理想主義的肌合の一靑年が、自由に想像力を働かせて、人生に對する疑義と、その疑義を解決するために、キリスト教的信仰とを交錯させて小說に纒め上げた丈のものである。今から見ると幼稚な方で、所謂舊惡全齋の一つに相異ないが、唯、理想主義的要求といふ事が作者たる自分の一性向として、或意味で先天的のものらしいといふ點には聊か思當る節がある。」云々

とある通り作者自らは理想主義的希求の發現として書いた迄であると云つて、家庭小說、光明小說の冠を辭してはゐるが、作中人物性格の描寫法や事件の運び方に當時漸く盛んになつた家庭小說程度の甘さと輕さとが明らかにあつて、よしんば作者のねらひ處は遙かに深刻の個所であつたにせよ、出來上つた現品の調子がその程度以上でも以下でもなかつたから、此等の一族視せられたのは當然のことで、春雨はその後の短篇たとへば「藻の花」などにこの有名な長篇よりもかへつて藝術小說的作品を書いて、それは作者自らもねらつた理想小說の新らしき型に向つて寫實的一歩を進めたものであることを證してゐるから「無花果」如きも家庭文學史中に置くは非ではないが、一般小說史中に論ずる方がより便宜であるべき筋の作でもある。二十年代から三十年代に及ぶキリスト教の雰圍氣が如何に一般讀者の間に感ぜられてゐたかを知るにはこの一篇を極めるがよい。西洋風で、「ハイカラ」で、新思想的である條件の一は正しくキリスト教的であるべき時代であつたのであるから。

春雨はその回憶中で又、この作の出た「三年程前に出て大に歡迎された蘆花の「不如歸」や一年ほど前の幽芳の「己が罪」

や、以後の一二年間に續出した田口掬汀の「伯爵夫人」や草村北星の「濱子」などと共に、善い加減に批評家達からこれに光明小說、家庭小說のレッテルを貼られ、つひに家庭小說家などといふ名詞まで無理押付けに頂戴させられたのは今から思ふと隨分迷惑な話であつた。尤も當時はこの所謂光明小說、家庭小說が文壇、乃至社會の人氣を獨占するといふすばらしい勢ひではあつた。しかしやがて反動期がやつて來て小杉天外の寫實主義全盛時代となり、更に自然主義運動が擡頭するといふ段取りになつてゐる。」と云つてゐるから、今は迷惑もしてゐるが當時はそれほどでもなかつたといふ意味にも受取れるが、何れにしても春雨の小說時代は家庭文學派中に隸屬すべき條件を多々有してゐたは衆目の見るところで樗牛は「明治三十四年の文藝界」(三十五年一月「太陽」)の「第三、紅葉、露伴を葬れよ」といふ一文の中で、

「無花果の如きは、結想に於てこそ多少の見るべきものありしが、描法措辭の幼稚なるは素より、其の全篇を貫通せる理想は倘ほ太だ淺薄なりと謂はざるを得ず。」

と云つてゐる。小說「無花果」が忽ち十余版を重ねたは當時の最大多數の小說讀者の興味を牽いたからで、當時の最大多數の小說讀者の程度は、家庭小說好きの上を出です、その憧憬の

對象、その理想は大體に於て「己が罪」や「濱子」の中に現るるものと大同小異の程度であり、而して「無花果」の讀者はそれ等よりは稍新しく稍高き處にあつたと見るを至當とする。

キリスト教の文學的影響はこゝにも明らかに現れてゐるのである。只、教會內、寺院裡に於ける文學鑑賞者の創作する基督教文學は、その光明觀や罪惡觀に影響せられ、光明に向つてそゝぐ觀照の瞳をそのまゝの強い度合に暗黑の方面にそそぎ得ず、暗黑は暗黑で上辷りに素通りして一圖に光明描寫に急なるため、その樂生觀、その光明觀はあつても、世界全體へ向つてそゝぐ觀照の眼は淺薄となり偏一となるを免れなかつた。これは木下尙江のキリスト教的社會主義小說にも現れてゐる缺陷である。

キリスト教的なる家庭文學には、創作に於ても翻譯に於ても尙乏しい數にかあつたが特に文壇的交渉の多い作品は尠かつた。「未だ見ぬ親」については次章に述べるが、松浦政泰の「歐米家庭美譚」の類書の外には、ウイダ(ルイズ・デ・ラ・レミイ)の「フランダースの犬」とか「三家庭」の類が皆讀せられた、但し、ウイダは歐米でもともすれば、不健康といはれてゐるのであるから、キリスト教的といふ範疇に入れるのは妥當でない樣にも思はれるが、日本人の見地から見れば歐米の悉皆る種類の

文學にキリスト教の殘照を見るのだから、その類を入れたら尙夥しい數にも昇るだらう。ウイダの文學をひろく家庭少年文學文獻の中に於てキリスト教的なるものの中に數へるのは、此意味に於て非理ではない。

三　家庭小說の光明派

二十年代三十年代に文壇は今日のいはゆる通俗物も藝術物も一まとめにして文壇所産として扱つてゐたのが、自然派前後を境として文壇の藝術小說と新聞や雜誌の通俗小說と判然と二通りに別れるに至つた。

これは文壇の質の進步であり、量の增大であり、讀者の質の進步、量の增大でもあるが、その自然派前期の硯友社末期時代にあつては通俗物も高級物も、家庭物も文壇物も尙一緒に論じて、たとへば樗牛は、前引の三十四年文藝界を論じた一文中、

「中村春雨の「無花果」、菊地幽芳の「己が罪」、德富芦花の「思出の記」等は、昨年の小說中に於て最も名高きものなりき。されど是等は從來の陳套腐爛なる群著作の間に出でて、稍新面目を現ぜしと云ふの外、特に多大の推奬を値せざるものなりき。」

と云つて各小說の短評に入り、轉じて、

「紅葉、露伴一輩の所謂る先進大家の如きは最早や度外視して可也。彼等は舊時の小成に安んじて既に新進の氣力を失へり。時勢の潮に後れて早や實力の競爭に勝へざるを見るに及びてや、高く自ら標持して偏に既得の虛名を失墜せざらむことを恐る。憐且つ陋と謂ふべし。今後の文壇は最早や彼等に求むる所無かるべし。彼等を大家と呼ぶは不可ならず、然れども其上に歷史的の三字を冠することを忘るべからず。後進作者は決して、彼等の門下に赴く勿れ。」

とまで云つてゐるは例の書生論の臭味を免れないが、既に時代がかれ等の頭上を一過してゐる事を談つてゐる點明快に首肯しうる。

しかも樗牛のごとき評家が國民詩人出でよと叫び、票寫實を斥け、文明批評家としての文學者を說いたは時勢に妥當の論議であるが、かゝる大體論、概括論は間接の教育論的敎化影響はあるけれども、直接作者や文學者に向つてその創作心を改造展開せしめ直ちに明日の指針となるやうな効果はないので、この點、樗牛は文學評論家であり、文學史論家ではあるが、無くて叶ふまじき、時代に緊要の批評家ではなかつた。その文學評論は、ジャーナリストの立場から文學史論、文學評論を切賣りしてゐたものにすぎない。しかも、この種の論評家も當時は樗牛抱月を外にして多くを數へる事は出來ない樣な批評の不況時代であつたはよく今日の文壇にも似てゐるやうだ。

三十五年春、「讀賣」に連載せられ初めた五來素川譯「未だ見

ぬ親」は「家庭小說」を標榜して立つた、その小引にいはゆる、「蓋しこの書に描れたる著者の精神を求むれば、全く是れ精神教育、人格の繼承を描くを以て其主眼としたるもの丶如し、」の「社會教育の一端に資」せんとしたエクトル・マローがサン・ファミーユの飜譯であるが、原作が數年ならずして百五十版を重ねた通俗本としての成功書であつたごとく、譯本も三十六年から今日に到る十數版を重ねた家庭文學で、當時の新聞雜誌紹介中純潔なる家庭小說に欠乏せる我讀書界に」(「報知新聞」)云云の語を冠して推賞したものが多かつたは、一面この種の讀物を衷心から要求するものの聲ともいふべく、「福音新報」ごときキリスト教誌が、蘆花の「時鳥(不如歸?)」や思出の記は家庭の讀物としても上乘のものであらうが、少年には不適當の點もある」といひ、この書を少年家庭文學としてすゝめ、家庭小說の要領を(1)「讀で面白き事、」(2)「面白い中に美的趣味を充分ならしむる事、」(3)「讀むものをして精神上の修養に資せしむる事、」(4)「野卑ならざる事、」(5)「殘酷の筆を省く事」等を列擧したは、期せずして當時の宗教的家庭方面の文學的要求をあらはしてをる。又、「家庭の友」が當時出たクレーク女史原作加藤眠柳抄譯「英國士道物語」(「ジョン・ハリファクス・ジエントルマン」)に似通つた所があるといつたも、この嗜好し玩賞する關所を自らよくあらはした言葉で、地名だけ巴里やテムズ河をそのまゝにして人名を太一や源十のごとく日本化したのは二十年代からの習慣で讀み易いを本位としたのであるが、二十年代初期にあつては國粹運動の余波からなるべく西洋臭を僻けて日本化する事がその要件の一ともなつてゐたのである。「未だ見ぬ親」に於ては後者の如き感情は勿論些かもない事はいふまでもない。

讀書界は既に硯友社小說に飽き果てゝをるのに、樗牛のごとき勇敢な評者の叱呼もあつて、誰手を染めずとも自ら舞臺は局面一轉をしなければならぬ情態に迫つてゐたのであるから、所謂「小說好き」が從來の惰勢で尙末流の硯友文學にこびりついてゐる間に、キリスト者の群は右の如き書や「ジョン・ハリファックス・ジエントルマン」全譯本の類や「三家庭」の類やに走つた。第二期「早稻田文學」の彙報でその記者も「水底の沒人」となつた第一期早稻田文學休刊後三十年代の文學界を回顧し、このいはゆる文壇の留守時代に逍遙が倫理に隱れ、鷗外西陲に下り、紅葉宿痾に苦しみ露伴漁翁となつて新進作者亦目星いものはなかつた頃、社會の一部よりモーラル・トーンといふ事、今少し高級な社會を描いてはどうかといふ要求があつて、三十二年全國高等女學校長會議で女學生の小說讀書を禁止する

の案が決議せられ、所謂新聞小説も講談の筆記に壓倒せられる有様であつたので、「材の上に道德を要求するの聲と、前述局面を擴張するといふの希望とは」合して蘆花、幽芳、春雨等の小説の歡迎となつたと誌してゐるは大體に於て是認しうべき觀察といふてよい。蘆花一派の特質を「何れも莫然たる意義に於ての道德的、家庭的、理想的、上中層的」とした記者の分類法も大體の傾向を捕促した見に立つたものと云ひえられる。

三十三年六月の「帝國文學」に「蕉窓漫言」の筆者は、

「現今讀者社會に於ける二個要求は、嚴肅純潔なる家庭に用ゐらるべき趣味ある讀物、及び兒童の心境智識を開發すべき無害の物語類なるべし。」

とて後者は小波の「お伽噺」があるが七八歳の幼兒の讀物で少年物とはいはれない。若し夫れ嚴肅な家庭に歡迎せられる資格あるは露伴の作で、「卑ならず俗ならず、悲慘度を越えず、比較的溫雅にして、比較的健全な」のがその所以であると云つてをり、更に之れに補足して、「文學者の本領は、時代精神を發展し、彼等が雙眸に映ずるがまゝに、人生を描寫するものなること、吾輩を待たずして明なり。ベンヂヨンソンの沙翁に譲ること、數歩にして止まらざる所以のものは、」云々と辯じてゐるから先づ相當の文學常識ある者からすら這般の要求があつたものと見てよい。

又、同年十月號同誌に、

「批評家の口頭にのぼること稀なれど、現今の讀書社會に隱然勢力を占むるものは、講談物と弦齋の小説となるべし。地方行の新聞の重に報知なると、居士の小説あるが爲めに報知讀者多きとを知らば、思半に過ぎん。決して、地方人士日常の話頭、「日の出島」に限らるるのみならず、都下に於てすら弦齋物といへば、評判惡き方にあらざるを聞かば、尚更一驚を喫するの外なかるべし。講談と弦齋物、共に趣味の高下を問ふの由なし。吾國民が如此の作を歡迎する間は明治文學も萬萬歳なる哉。」

とあるが、三十二年十一月中旬「國民」記者に向つて幸田露伴が當時の作者の眼界の狹小を難じた言葉に、

「今の小説の讀者は、お孃様にあらざれば、書生、書生に非ざれば親の脛かぢりのみ。作家の目當とする所の讀者是の如くにして已むべけむや。苟も作家として世に立たむもの、少くとも三十歳五十歳以上の所謂世間の人に感興を與ふるの作なくして可ならむや。」云々

とある。此等の事實を見ると、當年の一般小説の讀者が青書生、お孃様の類に局限せられてゐたは、その文學興味が中年及中年以上の者の興味を率きえない本質のものであるを證し、中年及び中年以上の讀者は他の讀物又は古き時代の小説類でその讀書慾をみたし、同時代人の作つた小説は彼等の耐へる所の食餌でない事を證してゐる。が海舟翁勝安房はその「氷川清話」

で當時の小說家を列評し、露伴を第一の人物とし、紅葉亦才人たるを失はずとして讃美してゐるから當時のすべての作者が穴勝ち老人組に顧みられなかつたわけではない。少くとも、青年男女の欲するところのものが、上等といはず劣等といはず等しく老人のそれと著しく異つて來て到底兩立すべきではなく、老人は老人、青年は青年ときつかりと兩分して來て、その青年の間にも甲乙上下の必然の差を漸く明瞭に示して來た事が明らかになり、數に於て優勢を占める青年組中のある讀者が講談筆記と弦齋物とにあきたらず、自ら家庭小說の勃興發達をうながした當然の事情の誘因が肯かれる。

この一般並の青年讀者中の進んだ趣味のものが、家庭文學に闖入し來つた間、文壇は此等の讀者を對象としてのみ經濟的に生活し存在しえたので、其更に進んだ一派が當代末流文學と此家庭文學とにもあき足らず、樗牛等の推奬するエヂエガレイやシエンキイウイツチやズーダーマンやヨーカイの新文學を嗜讀して當流文學の主潮の非世界文學主潮傾向的無知と劣等とを斥け、リヤリズムを說き、ニイツチエを論じ、ペイタアを宗としヘレニズムを祖述したが、それ等はやがて自然主義及其以後の文壇に實際活動した高級の文學青年であつた。然し、現實としての文壇はなるべく多數讀者を對象として漸進的運命の一路を辿つてゐたので、それ等の讀者が喜び繙いた愛讀書は、「己が罪」であり、「不如歸」であり、やがては寫實的なる「魔風戀風」であつた。

かつて女學校中學校及其れと同等以上との學歷ある然し讀者としては凡常の男女青年にとつて、新聞小說は趣味に於て下町的か舊趣味に偏し、思想に於て陳套を極めてゐたから、外に讀むものがない故を以て、古文學と共に併讀するか、講談と共に併讀してゐたのが、「日之出島」邊りに出た時代錯誤的男女の出現にも喜悅を感じたのは同小說が「報知」に出初めた三十九年六月前後である。忠實を以て鳴つた「早稻田文學」の「彙報」(三十九年四月號)がこれを說明して

「三十三年頃かに明に文壇の一勢力となつた家庭小說といふものは、其の精確の意義は未定であるが、要するに健全純潔なる家庭に用ひらるべき趣味ある讀みもの、即ち在來の家庭道德と調和した讀み物といふ程の意味で、それからして題材そのものがまた家庭の主なる關係すなはち舅姑、親子、夫妻といふやうなものゝ情を描くといふ事に移つたやうである。今日とても恐らくその意義に大差はあるまい。而して漸く道德と文學といふ點を目標して起つた者であるが故に、やゝもすれば、娛樂の傍ら修身齊家の上に直接何等かの利益を授くるもののやうにまで解せられ、從つて一部の評家は、家庭小說は畢竟夫婦相愛し姑嫁互に和すといふ程度を以て行き止まりとなすべき者と嘲るに至つた。是等は一つは家庭小說の流行に乘じて、一派の者が教訓を旨と

するもの抔の出で來つたが尠でもあらう。斯く家庭小說の流行に一面に文學の威嚴品位を損ずるに類する現象をも伴つたけれど、又一方にはこれに依つて小說壇に一新生面を開拓し得たとはいふ迄もない。又在來の小說讀者の領域外に立つてゐた人々の間にも小說の讀者を得て上下一般の社會に讀小說慾を誘起し、ともかくも一步を淸新なる文學に近づかしめ、一般社會の讀書眼、審美眼を多少とも啓發し得た事は事實である。更に又是等の家庭小說の多くが、脚色せられて舞臺に上るに至つた一事にも見免してはならぬ。これ一つには一般新時代の好尙を滿足せしむるに足るべき好脚本なきにも依るとはいへ、一つには、又如何に社會がこの種の家庭小說を歡迎しつゝあるかを知るに足る。」云々

と報じてゐるが、忠實の一面には老婆心切すぎるこの彙報の說明は大體首肯出來るが家庭小說の効德を讀者範圍の方面に迄延長してゐるは要するに蛇足にすぎない。

家庭小說は畢竟硯友全盛期と自然派文學とに介在する過渡期文學にすぎず、題材に於て硯友文學の低調を破り社會問題的關心にもわたり、基調に於て家庭問題の疑問を提出して狹斜小說の低級を破り家庭道德的關心にわたつてをり、會話と描寫とに寫實的新意を出さんとしてをる。人物は大學生や「海老茶式部」や學者や政治家や銀行家や牧師や女學生上りの新細君等で、會話の題目は宗教、藝術、政治社會の諸問題であり、前期文學の校書、蕩兒、若旦那、俠客の習慣的世間の些事と局面一轉してゐる等、新教育を受けた青年男女の興味をそそるものあるは、爭はれぬ魅力であり新味であつた。

只、描寫が表面的で主觀が淺薄にすぎたため、此知識世界の斬新描寫が、直ちにかの因習世界の陳套描寫よりも藝術的有價値ではありえなかつた事いふまでもない。即ち翔汀の家庭小說「伯爵夫人」は一葉の藝術小說「にごり江」に遠く及ばぬ劣作である所以である。

さて、蘆花の「不如歸」が三十一年十一月「國民」に、幽芳の「己が罪」が三十二年一月「大阪每日」に連載せられる頃から、家庭小說氣運一代の勃興を促したが、その時代の大勢となる直接誘因は何であるか。間接の所因に就ては上來述べて來たやうな文壇的並に社會的情勢があつたが、單に文學上の運動又は傾向といはず悉皆ゆる社會上の集團傾向又は運動が直接間接の誘因兩々相俟つて大勢を決するに到る事、たとへば、自然派運動は二十年代中寫實小說の勃興あり一時光明小說的傾向に催せられたが、三十五六年から泰西自然派文學の飜譯や紹介があり、尙早く一例をとれば、三十五年八月「帝國文學」誌上「自然主義的傾向」の一文に筆者維舟（深田康算？）のゾラ、ツルゲーネフ、ドストエフスキー、ストリンドベルヒ、イプセンをあげて文藝の自然主義的傾向を論じ、この傾向が「罪惡小說を

生み心理的解剖に偏せしめ、個人的特殊的の者の描寫を多くし作家の個性を發揮するを重んぜしめ、而して終に現實の社會にのみ同情を有せしむるに至れり。」云々の如きその語は尙たどたどしいが當時としては知識的先驅をあげたものが間接の誘動となり、尙外に夥しい泰西文學の主潮を論じ譯し祖述したものが間接因となつて、而して直接因としては抱月、天溪、花袋等の三十七年以後の創作や主張やがそれであるが如くである。

今でこそ家庭小說とて文壇作者等の輕視を買つてゐるものの、當時は文壇の一部の强大の勢力であつた事は、前引「自然主義的傾向」中に、

「先きに「恐ろしき一夜」を敍し今國民新聞紙上に「黑潮」を載せつつある蘆花氏が作「不如歸」の如きは慥に亦我社會の一問題を捕へて之を提供したるものと云ふべし。」

といひ、「早稻田文學」三十九年一月號に、「不如歸」は、

「之れを從來の諸作に比ぶるに、取材の範圍異なり、上流社會に於ける家庭の出來事を基礎として、純潔なる夫婦の愛情を描いたものである。」

といひ、「己が罪」も「不如歸」と

「同じ傾向に投合して遂に廣く讀まるゝに至つた。」

といひ「無花果」も

「罪惡と戀愛とを描く點は從來の作の如くであつたが、それを單に罪惡と戀愛としてのみ描かず、之れを意識して煩悶懊惱し、其の結果精神生活に一轉機を畫するといふ點が、從來の諸作とは異つてゐた。」

と論じてあるを見て明白だが、家庭小說のこの新味が「不如歸」や「己が罪」の作品により提出せられたのが正しく此傾向の直接に擡頭する所因であつた。

その兩人の中、特に蘆花の勃興は完全な素人小說の勝利である。たとへば、自然派文學衰へて享樂文學全盛を極めた頃、白樺の一團が不熟の語句に介意せず素人らしい拙劣小說を書き初めたのが、やがて彼等の内の一部分の他日の成功となつたと同じ趣きである。因習を破つて新大地を打開するは恒に維新當時の青年政治家の如き、ラファエル前派諸詩人の如き素人くさい靑年である。因習に泥んだ人は因習の臭味を知らない。局外に在つて局內を虎視耽々と瞰望する靑年者流のみがよく因習の醜と無氣力とを知り、是を糺彈し倒滅する。硯友文學全盛の砌鷗外の「舞姬」が出た時、文壇人には「いやに牛肉くさい小說だ」とか、「飜譯ものぢやないか」とか言はれた（田山花袋「東京の三十年」一三九頁）又、平田禿木の「文學界」所載の文章を紅葉は評して「西洋料理を食つてヘドを吐いたやうな文章だ」と評した。島崎藤村の處女小說「うたたね」が「新小說」に載つた時當時の新進泉鏡花は「なんだ、あれでも小說か」の

調氣を洩らした（花袋同上）。紅葉は「金色夜叉」續篇に苦吟してゐたが、その苦辛には技巧の上の苦心の外に明らかに後日を挽回する苦惱が加はつてゐた。而も、「抒情詩」の作者獨歩は「太陽」に「置土產」（同年十二月）や「郊外」（同十月）を翌年十一月の「小天地」に「牛肉と馬鈴薯」を書いて容れられぬ青年作者の野望と客氣とを僅かに洩らしてゐたし、蘆花は「最初の燕尾服」（十一月「國民」）や「灰燼」（三月「國民」）の如き素人文學を發表し、嵯峨の舍は「田舍美術家」（八月「太陽」）のごときあるひは飜案かとも思はれる、埋れたるかれの佳品を書いて而も文壇の默殺に逢つてゐた。天外の「揚弓場の一時間」（「新小說」七月）如きは標題のつけ方から見て當時としては異樣に感ぜられる新味があつた。魯庵が雜誌「太平洋」に連載した讀切短篇は後「社會百面相」にまとめられたが、（作者も今でいふコントの類だと云つてゐる）當時としては異極であつた。魯庵の唱道するロシヤ文學を紅葉がネチミヤク文學とけなし、魯庵が評家として一派を立てながら、その創作は賑せられなかつたのは、その藝術價の稀薄にもよるが時代がかれを異端として疏外してゐた點も見免してはならない。堀內新泉の「家庭讀本春の卷」や久保天隨の譯本ペスタロッチの教育小說「醉人の妻」（リーンハルドとゲルトルード）が出たのも此頃である。」文の雅拙はとにかく出づべくして出たものには相違ない。かくて、家庭文學は起つたのである。その歡迎は作者當人も意想外とする程盛んであつた。休載するとその翌日愛讀者の勞働者が新聞社に怒鳴り込んだり、大阪南北の茶屋では曉の三時に配達される新聞を待つて讀む女達があつたりした類の逸話は多く傳へられた。幽芳はその著「乳姉妹」の成功を、その序に於て

「（第一）房江といふ丁度「己が罪」の環のやうに大變に讀者の同情を惹く娘のある事（第二）家庭小說である事（第三）地の文に極めて平易な、また詞遣ひの丁寧な言文一致體を用ゐる事。」

の三に歸してゐるが、彼自らは新聞讀物として講談に替るべきものを選擇し、たま〳〵バーサ・クレイの短篇にヒントを得て之れを複雜化したのが本著だと述べてゐる如く、最初から新讀物のつもりで執筆したのであつて、當時一般好奇心の異常な對象となつた女學生、當年のいはゆる海老茶式部を女主人公とし、その女主人公なる房江の日本的淑やかさの美と適度の教養とが讀者の同情を牽く事多かつたは、其後本鄉座で河合木下藤澤一座らが上演して木下吉之助の房江に同情の淚をそそられた青年男女夥しかつたを私が實見して今尙記憶してゐるに徵しても明らかであるが、作者亦「房江の如き女は、また僅かにみなさん方の理想にあつた事は、明白であらうと考へるのでござ、

ます。」と云つてゐる。平易で上品を心掛けた點も在來の新聞小說に對する一般の要求に添ふたものに外ならぬ。同じ特質が「己が罪」にもあつて、温良の美少女環が境遇に支配せられて肉慾家塚口の毒手にかゝり出産後狂を發して靜養中櫻戸子爵の愛を斥けかねて夫人となり、再び塚口の迫害を受けて惱苦の末遂に篤志看護婦となりて台灣に赴き西貢に大患を發せる良人の看病に赴いて夫妻の愛こゝに蘇るといふ筋は何の奇もなく、文章も平凡であり（幽芳が生中の文壇作者に卓れて浪曼的小說の文章に甚だ巧みであつた事はライダー・ハツガードの二小說の譯文で十分覗ふ事が出來るが、家庭物では新聞物、といふ標準に照して常凡無味にわざと筆を落したのであるが、あだかも其程度でかへつて一般讀者の喝采を博したのである。）事件の進行や性格の境涯に伴ふ展開等に出鱈目の無理押しがあるのは勿論であるが、樗牛が評して、

「大體に於て承序の趣あるは嘉すべしと雖も、結構陳腐にして文章甚だ冗漫、加ふるに性格の研究は大に足らざる所あり、傑作を以て許すべからざるや論無し。」

と云つたは猿芝居にドラマツルギーを持ち出す類の頗陳漢語で、この作にしてこの評ありと云ひたいが、作者の方では舌を出して實は評家の迂愚を嗤つてゐたに相違ない。幽芳が作は、「あぐり」（三十四年「新小說」）にしても「假面」（三十四年「小天地」）にしても「若き妻」（三十三年十月「大阪每日」）にしても將た處女作の「人殺」（三十年「文藝倶樂部」）にしても、其後の「この花」、「白衣婦人」、「古鏡」、「胸一つ」、「その畫題」、「秘中の秘」、「黑影」、「七日間」、「みほつくし」、「春日野若子」、「新聞賣子」、「大探檢」、「二人娘」、「なさぬ仲」、「夏子」、「賣花娘」「妙な男」にしても三十九年の人氣作「筆子」（「大阪每日」）、四十年の評判物「月魄」（「每日電報」）にしても西洋通俗物の飜案も交つてはゐるが凡て幽芳式家庭物の境致を離れず、ドストエッフスキーを早く讀んでハツガアードを夙に譯してゐる彼は、不思議にも通俗家庭の文學に徹頭徹尾終始した典型的の家庭小說家として三十年來一貫し來つた作者で英露の文學の鑑賞、三十年代に於けるその文壇に於ける地位の自覺に對する自然主義文學以後の發奮と自覺、及びその後の洋行に於ける見聞等の樣々な條件は、彼の其の後の創作に何等の深さをも强さをも與へてゐない。その間此の矛盾も苦悶も無い樣な外態を呈してゐるところに寔は通俗文藝家としての菊地幽芳の興味がある。

彼のひととなりを考へ、飜譯ものの文章を見、外國文學の智識を根柢として考察すると、幽芳は當然斯くありしが如き文藝史上のその位置に落付くべからざりしが如くに考へられる、然も

幽芳小說は、阪地にあつては通俗ものとして當時殆んど完全に板についてゐたので、その愛讀者等の興味の輪廓も胸懷の對照も悉くその方寸の胸に收めて擒縱自在の巧致を見せ、牽引と魅惑の限りを盡した以外、藝術批評の顯微鏡にかけて見ても、あくまでも通俗的なる、興味中心の、筋の面白味としての家庭小說の大先達としての歷史價値以外に何物をも見出され得ないのである。

只一つ、廣く明治文學史に於ける女性描寫の變遷史の中で、三十年代の初期及び中期を擔當して、最初の所謂「海老茶式部」型をこしらへあげた一事は記錄して置かなければならぬ光彩であらう。

等しく家庭小說的の淺薄と甘さとをまぬがれないにもかゝはらず、又、男學生の描寫にも多く失敗してゐるにも係はらず、この女學生描寫は、先の硯友社文學に代る新開展であり、同時に後の自然主義文學への基礎の一つでもあつて、將に蘆花や天外と共にその功の一簣を頒つものである。

當時、女學生の墮落問題が云々せられたのは、社界教育上の新しい焦點であつた所爲もあるが、一般的に云へばやうやくその數を增し來つた新女性の一つの型としての女學生への一般的興味心がやうやく旺盛になつた一事が、その根本を形作つてゐる事は見のがせない。而して幽芳が漸くもその當時の興味を、作品の中心生命として扱つて來て、何よりも及び誰よりも熱心に之を取扱つた事が、その成功の所因となつたのであらう。すなはち、彼のこの新しさと甘さと輕さと一般性とは、その後の文壇高下の小說に善惡二樣の影響を與へたのである。

德富蘆花流行の事實は三十三年此方今日迄一貫して變らぬが、その讀者群の種類には多少の變遷があつた。遠く明治二十四年十二月「國民」に「夏の夜語」を掲げて以來、「不思議の家」、「恐ろしき一夜」、「漁夫の娘」、「河島大尉」等を公けにし、別に「世界古今名婦鑑」「歷史の片影」、の類を上梓したが、「不如歸」に於て現はれた上流描寫への好奇心は、「十二文豪」に「トルストイ」を物し、ゴルドン將軍の傳記を物した彼による道義感の滿足と共に容易に讀者の迎へるところとなり、武男の簡單極まる勇壯と非人間的の無邪氣と、浪子の紋切型乍ら實際感を離れぬ可憐と貞淑と河島後室の類型的なる無知の姑根性とその背景たる因習力とその他片岡大將の剛毅と成金某の卑陋とその娘の輕薄と等悉く當時習慣への征矢を離たんとして焦燥してゐた凡俗青年の單純な快心事とする處であり、當時人氣の戰爭場面とラブシーン、ハンケチの奇緣と墓地の哀情と皆之れ新派あつらへ向きの好道具立てにて青年の興味の奧に潜

まる軍國主義と武士道主義と潔癖主義と清廉主義と正義愛と拜金への蔑視とを共鳴させ、モデルの大山將軍一家に對する興味やら家兄蘇峰の政治上の立場に關する興味さへ加はつて、作の欠陥とする性格展開の非合理や事件の行進の矛盾又は飛躍や觀照の淺薄や主觀の輕率等は目にもとまらず、次々に出た「思出の記」、(三十三年三月及三十四年一月「國民」)「零落」(同十月「新聲」)、「黑潮」(三十六年)等を經て「寄生木」に移つてゐる。

今日、蘆花を論ふことは所謂文壇附月評家のよくしない所であるやうだが、かつて蘆花は「黑潮」に於て稀に見る大規模の小說を計畫し、第一卷のみで永代未完の作となつてしまつたものの、その一卷は決して單なる家庭小說をもて遇するものでなく、試みに三十六年中の所產を一見しても僅かに藤村の「爺」と獨步の「女難」や「惡魔」や「第三者」「正直者」等「獨步集」の諸篇が新藝術の芽生を感ぜしめ、荷風が「あめりか物語」中の諸篇を「文藝俱樂部」、「新小說」等に分載し、鏡花が「田毎かゝみ」と「白羽箭」(「文藝俱樂部」)とを出してゐるのみで、紅葉は「新續金色夜叉」に苦められ、風葉、松魚、葵山、春葉、水蔭、柳浪、眉山、春雨、掬汀、花袋等悉く駄作凡作拙作を續出してゐる上に、當時大評判となつた天外の「魔風戀風」が「讀賣」に掲げ初められた年ではあるが、此等をライヴルとして蘆花の位置は「不如歸」に喪失した藝術感を「思出の記」にとりかへし更に「黑潮」に於て、彼一流の描寫に描く兎もすれば說明に走り勝な惡癖は隨所に多く見えるけれど、規模宏大に抱負も高かつた此の作で政治的、社會的關心を中心とする大本格小說を夢想したのであるが、その續篇はついに出でず、「寄生木」に移つては更に讀物に近く小說には遠いものになつてしまつた。明治美文史の一頁を飾る「自然と人生」を初め「青蘆集」「青山白雲」等の作者として早くから作者の詩才は十分に認められてはゐるが、その詩才は淺薄に近い小才で、生來の大才が自らにして產出した自然の天稟ではない。小說に於ても九州人によく見る實際的の才智が邪魔をして悠々たる大成に到らしめない。が、とにかく「黑潮」で大轉機に立つべく運命づけられてゐた彼は小說の純粹なる精進の志を絕つて雜文學の本職に專一となつてしまつたから、その後の彼は小說家としてではなく雜文作者として奇異なる地步を明治文學史中に占めるに至つたが、小說家としては既に業に自殺してしまつてゐたのである。樗牛は、

「『思出の記』は平板に過ぎて無味に近かり。一種清新の理想の其の間に現はるゝもの無きに非ずと雖も、畢竟猶ほ稚氣あるを免れず。」

と評してゐるが、此評は當らずといはんよりは寧ろ拙劣の評で、平板の叙述を敢てしほうせたればこそ一味の藝術心の貫流に成功したので、蘆花流の小才であれを波瀾萬疊にしたらその卑俗は耐まつたものではない。否、あれでもヤマは多すぎる。新教主義肌を胸奥に秘めて、叙述に自然派的冷靜を維持しえたら尙より良い讀物になつたに相違ない。

「思ひ出の記」の價値がその一般を素人文學的素質にまつことは、先に云つたが、當時のあらゆる高下の文學小說を通覽して、この一篇の樣な清新の情緒と思索的反省とに富むものは、少なくとも明治三十二三四年に亘る小說界史の間に多くはない、卽ち「思ひ出の記」は今から見れば一人の通俗家庭文學者の、比較的高級なる作品と云ふに留るけれど、例へば三十三年の三月、「思ひ出の記」が初めて、國民新聞に掲載し始められたその月、紅葉は讀賣に「月下の決鬪」を掲げ蘆花は同じ「國民」に「灰燼」を掲げ天外は「新小說」に「頰かぶり」を掲げ、鏡花は「太陽」に「保用物語」を掲げ、春葉は「新小說」に「機關手」を掲げて居る、鏡花の「照葉狂言」は翌月の「讀賣」に出たが、以下その年の内に公表せられた秋庭の「靑理想」にしても、紅葉の「茶椀割」にしても鏡花の「湯女の魂」にしても抱月の「待間あはれ」にしても柳浪の「目黑小町」にしても、宙外の「腐肉團」にしても、露伴の「太郎坊」にしても、諾柿の「金忠輔」にしても、之等は比較的作の部類に屬するが「思ひ出の記」は純藝術批判の立場から考察して、之等の諸作と同等及同等以上に位する價値をもつてゐる。既成文壇の之等の諸作及びそれ以下の作品は展開せられたる思索的人生の廣表に於て、情緒の清新に於て、宗教的要求に於て、新時代男女の描寫に於て、よしんば、描寫が說明となり、冗漫となり遠心的となり、樗牛の所謂「平板に過ぎて無味に近かり」と云ふが如き硬氣はまぬがれずとするも文壇全般の作品價から考量して之等の欠點を認めて尙且つ「思ひ出の記」のオリヂナリテイ、ノヴエリテイは爭はれぬ。蘆花は畢竟藝術家の小才なるものに過ぎないが「思ひ出の記」の蘆花は其の一生の創作史に於ける最高潮に立つて、その潮先からこの一篇と「黑潮」のアムビシヤスなる未完小說とを產出してゐる。で、「思ひ出の記」を藝術小說の頁に入れると宛も通俗小說の頁に挿入したが如く、依然として嶄然として群を拔いて、その清新なる藝術香を文壇の隅々迄に向つて溢らしてゐる。

「思ひ出の記」は、故に、家庭文學中の最傑作の一つであり藝術小說中の有數の作篇の一つでもある。家庭小說の範疇の間からこの作品が出て、文壇小說の領域に侵蝕を試みてゐるのはま

さしく一の快事である、假令當時にあつては、「思ひ出の記」が今日の我々が評價するが如く、それ程餘りに家庭文學的なるものの如くに考へられて居なかつたにしても、蘆花は當時から何となく既に文壇の圏外に立ち、「不如歸」の後を繼いで矢張一種の光明小說型家庭小說文學の創作家として認められてゐたのであるからこの作品にこの價値があり、この豫言があり、このオリヂナリテイがあると云ふ事は期せずして一種の家庭文學の文壇本部に於ける勝利と云つて差支へあるまいと思ふ。

當時紹介せられた高級の泰西通俗物に長田秋濤譯デューマ作「椿姬」(三十六年五月)があり、登張竹風譯ズーダーマン作「寶國奴(カッツエンステッヒ)」があるがせめてこの境致を理想としたら當時一般の家庭ものは一段とその深みを增したらうけれど家庭小說は終ひに家庭小說で草村北星の「相思怨」、「澄子」、「濱子」、「露子夫人」も渡邊霞亭の「次郎島」も黑法師の「想夫憐」、「新妻君」も田口掬汀の「伯爵夫人」、「情の人」、「心の波」、「新生涯」、「女夫波」、「追恨」、大倉桃郎の「琵琶歌」、「舊山河」、佐野天聲の「露の曲」、春雨の「角笛」や「密航婦」や「雛燕」、楓村居士の「橘英男」德田秋聲の「結婚難」、「ゆく雲」、「小華族」、「燈」小笠原白也の「嫁ケ淵」堀內新泉の「人の兄」、「全力の人」、「釣鐘岩」、「川千鳥」等家庭小說の系統を曳いた俗文學には、光明小說の精神を追ふものと天外式寫實脈に勝つたものと二色あるが何れも駄作凡作墮力作で如何な點からも(風俗史料として以外には)見るに足る作は完くないが、北星のセンテイメンタリズムや掬汀の愛情主義が受けたのは單に、廣告法のみの所爲でもなく、前者は天外式寫實小說を陋として立つて痴鈍乍らも純情に近いものが多少あつたためで、後者は此二人のカラタリのためであるが、楓村や桃郎が戰爭背景で賣つてゐたのも束の間、家庭小說は更に推移して行つた。幽芳蘆花二家の光明小說的家庭小說が飽かれる頃とつて變つて文壇と通俗小說方面との双方に跨つて覇を稱したのが寫實的「魔風戀風」の小杉天外である。

天外小說に入るに先ち最後に、蘆花幽芳流行の事實の裏に蟠る女主人性格の魅力に就て云つておく。

かつて弦齋浪六等前代の流行作者が描いた女主人公には奴の小萬、鳩つかひの姫等當時の興味をひくに足る性格があつたが、三十年代に於ては更に知識的要素を加味して而も一脈昔乍らの淑やかさと可憐とを失はぬ女性らしい女性を求めてゐた。「己が罪」の環、「乳姉妹」の房江、「魔風戀風」の初野、草村北星が「相思怨」及び「露子夫人」の露子「澄子」の澄子、黑法師(霞亭)の「想夫戀」の雅子、小笠原白也の「嫁ケ淵」のお梨

蘆花の「不如歸」の浪子、「思出記」の敏子等はこれである。

時代思潮の汐先に乘つて「想夫戀」が人種的偏感を、「嫁ケ淵」が小作騷議を描いても、階級意識の批判や小作權是非の經濟史的考察に今日の讀者の社會思想上の常識すらない、只莫然と弱きを憫れみ强惡を憎む常識的正義觀から出發した單純の觀察で、加之、其等社會的鬪爭は色彩の一にすぎなかつた故、單に讀者の漫然たる同感を牽き得たにとどまる事、たとへば、「不如歸」に於ける新舊思想の衝突のごとく、其等のテマを中心として自由自在に讀者の心魂を左右するほどの力がなかつた。かへつて「思出の記」にあらはるゝ個人的宗教上煩悶の方が讀者衷心からの同感を獲得した。例へば、「火の柱」や「良人の告白」や「飢渇」に於ける木下尙江のクリスチヤン・ソウシヤリズムの思想の實行への同感、その主人公篠田蝶二への共鳴が莫として大風一過するごとき熾情を喚つた以外心肉に喰ひ入るごとき現實感的共鳴を作ひえなかつたのは、作者尙江の態度及び傾向の然らしむる點も確かにあつたが、然るべき情態があつたからで「見神の實驗」といひ「煩悶」といふ語に特殊のひびきがあり、藤村操の死、ニイチエ主義の横溢、黑岩周六の通俗哲學「天人論」の重版等明治レネイサンス黎明後に於ける自我の自覺史の重要期に於ける苦悩を幾分でも描寫せんとした「思出の記」の類の方が社會的關心以上當代青年焦眉の急問題であつたことといふ迄もないに基くものである。

かつて二十年代の自我は古日本の回顧や西洋文明への憧憬の間に悠々と遊び戯れ眠り横はつてをり、僅かに早く目醒めた者の悲痛を青年詩人北村透谷の慘死にうかがひ知るに止まる位であつたが、然し、維新からの三十年は歐米個人主義思想の輸入期に外ならぬので英佛の政治思想やマンチエスター學派の經濟學説やをとり入れた明治人の鼓舞は二十年代を尙且つめさめ且つ眠つてゐたのが一朝愕然と目醒めた三十年代が、かつて鵜呑みにしたスペンサーの進化論説やミル、ベンタムの功利説を反芻しつゝも英國哲學の實證學説を味ひ乍ら、同時に（といふよりは之れを抱擁しつゝ進んで）獨逸哲學の理想主義を玩味せんとしたが、今日から顧ると寔に單純な移植にすぎなかつたけれど、かつて政治と國家との中に發見し、若くは發見しようとした自我を、この時代が文化一般の中樞から見出さうとしたは確かに進歩には相違ない。明治全體を通じて流れる主潮が客觀的啓蒙思潮の反復で、この輸入事務の進行中に「日本的」なるアイデアリズムへの懸念があつて、要求懸念相錯交しつつ元祿文學の復活や西洋アイデアリズムへの流嚮があり乍ら結局は客觀的現實主義の行進に終つたのだが、美的生活の主唱が浪曼的個

人主義の絶頂を示した此期に主客觀の相剋の過程から生れる個人的苦悶が多かつたのは怪しむに足りない。社會思想は幼稚であり、個人思想も同様であつたが、當然の必然事から後者が餘計に顧られ、前者がしばらく低迷してゐたといふのである。

さて、家庭文學中の女主人公が一般讀者の同情を惹いた事實は、疑ひなく新思想への共鳴と古き「日本的なるもの」への本能的類感とを示してゐるので、就中、浪子には俗世間が上流階級へのあくがれの一面に犠牲者への強き哀憐を示し、房江には貞淑美の勝利の快感を味ひ、敏子には溫順の知識美への共鳴を表はしてゐる。初野への同情が不足であつたのは此溫淑が不足であつた爲だ。同時に「コブシ」の流行は他の一面なる資本主義的實利思想の根強いひろがりをよく表はしてゐる

鋭い新しき要求と根強い古い本能的傳習との中に介在して、一般人はいつも無邪氣に双方への愛着を示すことを恥としないものだ。浪子への同情は日本的貞淑美への共鳴だが同時に上流生活へのキユリオシテイを示し、又、天外小說の流行は淫蕩への好奇心とともに前にいふごとく功利主義の勝利を豫感してゐる者の多數を示してゐる。北星文の多少の流行は低級センチメンタリズムの横溢とともに日本的感情の快感をあらはしてゐるが。

此等の家庭小說が壯士芝居になつて高田實の片岡中將の武士氣質が本郷春木町で讃美の百雷を受けるとき、大正十五年風の米國風ハイカラ娘は當時にあつては觀衆老若男女のあたら嘲笑の的となつたのである。鷗外譯パウルハイゼ作「新學士」の一篇は既に數年以前に公にせられて後、「かげ草」中に收錄せられたがこの小說の女主人公（裁縫少女）の如きは、日本的貞淑美と知識的要素とを兼ね備へた極めて日本人向の明治青年に好愛せられる型の性格で、當時の家庭文學がこの程度の女主人公の性格の描寫に成功したならば、その家庭文學的の價値を一層增加せしめるばかりでなく、藝術小說としても優に中流以上の位置を占め得る重要の要素を握み得たものと云はねばならぬ。よしんば、ハイゼの原作がこの様な型の女主人公の性格を作らなかつたにしても、移植せられたる小說としての「新學士」の女主人公の性格は、確かに日本的であり、明治中期的である。その原作と飜譯との差が果してありとすれば、然も、その差異が餘りに大でありとすれば、それは自ら飜譯者の手腕の問題であるが、少なくとも「新學士」一篇は之を今日より見れば、家庭小說と藝術小說との中間に立ち、家庭文學としての最高の標準を示した、好乎の純藝術小說の一種でもある。

この稀異なる立場に立つたるものは、啻にこの一篇のみでない、パウル・ハイゼに類する一派の小說家はこの種の立場に立

つものが少なくないことは、獨佛英の各國文學史を見れば明瞭である。ハウプトマン、ズーダアマンと近代獨乙劇壇に於て並稱されてゐるものの、ズーダアマンの位置は自ら藝術的なるものと通俗的なるものとの中間に立つてゐる事は人よく之を知る。先に引いた小說「賣國奴」の如きは正しくその一例である。多くの近代歐洲文學史に於てこの種の型は特にロマンティックの作者に多い。詮ずるに、センセイショナルと云ふ特性を擴大せんが爲には自らその作風がロマンティックの文學傾向の特性と一味相通ずるに至るが爲で、然らずんば極端なる寫實主義の作風の間に、ロマンティックの要素を少なからず含有する流儀の作品がそれに屬する。スティヴンスンの「寶島」は當時數年前に宮井卯の花庵に依つて「世界文庫」の一篇として邦譯せられた事は七月號の拙文にも述べておいたが、當時之を譯した譯者の心持ち、及びそれを受取つた讀者の立場は、この小說を英國近代小說史に於ける、純藝術小說の最高作品としてよりも寧ろ一個のロマンティックなる冒險的讀物としてのその特徵を嗜愛する點にあつたに相違ない。この樣な傾向の文學作品の評價は輕々に附する事の出來ない文學批評上の一個の小さい難關である。興味中心と云ふ點と、その興味が作者の心內に於て如何なる必然的の重要性及價値を持つてゐるかといふ點と、之等二つのものの比較の點から考察して見ても「寶島」及それに類する傾向の作品に對する批評は、他の純藝術小說に對するそれよりも、纖細の鑑賞と確實なる文學史的知識と兩々相まつてロマンティック精神に對する、廣大にして精到なる研究の余に非んばともすれば、玉石相混ずる如き無標準の批評結果に終る事保し難いからだ。デューマの如きはロマンティック系統の舊寫實派であるが ハイゼ及びズーダアマンの如きは自然主義的手法を宗として多分なるロマンティックの香氣を所有する第二流作者であつた。之等の傾向を一段と低級にし、寫實を宗とし、之にセンセイショナルの要望を少なからず持たせたものが世紀末から現代へかけて英米邊にも少なからず時花つてゐる。所謂流行の通俗文學である。マリイ・コレリーの如きはその一人である。マクス・ペンバートンの如きもその一人である。ライダー・ハッガードの如きもその一人である。小說家としてのベーリンク・グールドもその一人であればミードもその一人である。ウイダもその一人である。英國文學史中の小說家を嚴峻に物色するとこの種の立場の作者が頗る多い。近代に於てその數は更におびたゞしく增加してゐる。否、却つて純藝術小說家としての作者を物色する方が甚だ難しい位に英國近代小說の價表は大であるが價値は高くない。佛獨に比べてその差は甚だしい

に數等である。米國は英國よりも更に一段と劣つてゐる。資本主義時代が通俗文學の旺盛に資した事はこの一事でも判明する。

四　家庭文學の寫實主義

小杉天外は二十年代初期の詳寫全能的寫實主義を三十年代に自然主義へ一步進めた過渡時代の藝術小說、家庭小說双方にわる有力作者の一人であつた。その「はやり唄」の序に、

「自然は自然である、善でも無い、惡でも無い、美でも無い、醜でも無い、たゞ或時代の或國の、或人が自然の一角を捉へて、勝手に善惡美醜の名を名づけるのだ。小說また想界の自然である。善惡美醜の孰れに對しても、叙すべし、或は叙す可からずと羈絆せらるゝ理窟は無い。たゞ讀者をして、讀者の官能が自然界の現象に、感觸するが如く、作中の現象を、明瞭に空想し得せしむれば、それで澤山なのだ。

と論じてゐる。かれの作は「改良若旦那」のむかしから「改良若殿」を出世作として「ひだり褄」「蛇いちご」「はつ姿」「戀と戀」「新學士」「女夫星」「新夫人」「魔風戀風」「にせ紫」「コプシ」「長者星」等に及んで文壇小說の重要な一頁をなしてゐるが、同時に、光明小說亡きあとの新聞小說を引受けてその系統は明らかに通俗新聞文學に這入つて了つてゐる。「魔風戀風」はその第一步と見てよい。二十年代初期の紅葉、美妙、水蔭、眉山、柳浪の舊寫實派が淺薄であつた如く、二十年代後期の眉山や鏡花の觀念小說の寫實傾向も亦膚淺を免れぬ。柳浪の深刻小說は心理描寫の精緻を期したものだが、當時としては出色であつたといふにとゞまる。家庭小說に新らしい道具立てはあつたが、それが精刻に彫出されてはゐない。天外の寫實主義は、「はつ姿」(三十三年)の右の序に見ゆる通り一見甚だ徹底したもので、誨淫の書といふ言葉は一に天外小說の形容の如くに感ぜられたものだが、只暗黑面へ大膽の一步二步を進めて世間態をも私語惡聲をも厭はぬ敢爲の態度はあつたが、寫實の實際の方法精神は、やはり淺薄で輕卒で焦點を外れてゐたから、寫實的効果が猥褻の描寫の個所だけ際立つて見えて、他の部分は少しも光らない。そこで誨淫といふ一點が特に道義的にデリケートセンスの人や反對に俗惡な人物に異樣に注意されて騷がれたのであるが、この寫實手法は主觀の緊密を欠く一事から云つても劣等のもので、人物の擧措の描寫の方法も皮相な外面的粗描で、その一一の外的行動の裏に潛む心理の動きが看取されえない程度に淺薄であつた。ゾラを眞似たる遺傳說の取り入れなどもその流儀にすぎなかつた。

「魔風戀風」は新聞物として百九十回にわたり連載せられた關係もあり、作者の素質の然らしむる所もあり寫實効果の膚淺と性格の分裂的ではある結構布置の上の無理と共に拭い難き缺陷

で、藝術小說の範圍を辷つて俗文學に墮するに至つた主因であるが、當年流行つた堅苦しい、實際を去る事遙かに遠い會話を斥けて生きた現實の對話とした點はどの範疇に置いてもよく尊重したければならぬ。天外の獨擅場で、「コブシ」、「長者星」と進んで愈よその妙味を增してゐる。にもかゝはらず、

「可いのよ、可いのよ。」と妹の手を握つたが、淚は雨の如く落ちた。

の如く、對話の後をいつも大ざつぱな粗笨の形容でそろつぼに追つ被せてしまふので切角の會話の妙も、かへつて時としては輕薄の多辯に受取られてしまふのである。

又

主婦は、「最う數日の御辛抱、」などと慰めて、行李から洗つてある白地の浴衣を取出し、さて初野の傍に突膝して、其の締めて居る紫根地らしい緞子の帶、米織の縞縮の綿入、下着は絹の櫻小紋、その下のネルの襦袢を分れば、何處からとも無く白薔薇の香ひ、肌は艶々と珠玉の如きに、乳房むつちりと高く、細腰より下は脹脛の色、脚長ければしつとりとして、紅の滴の落ちるとも言ふ可きである。

「あら、お主……。」と叫んで、何うしたのか初野は、燈火を背後に身を捩つた。

「ほゝゝゝ。宜しいぢやありませんか。」

「だつて。」

の如き描寫は當時　更に讀者を挑發するために作者が意識して書いたやうに評判せられた個所の内の一つであるが、意識するもせざるも、挑發するもせざるも描寫として甚だ拙劣な事が第一に目に付く。思ふに作者は寫實を宗として新開物の効果を高めるべく、その旗印のかげに匿れて特にその方面の描寫を好んで試みたことは事實であるらしく、「コブシ」の劈頭青年主人公入浴中をはしたなき女中等のひき間から覗き込んで品定めする所のごときは全體の結構を定める上に何の重要があつたかと云へば只美貌であることの證明と女中らの卑俗とを描いたといふに止まるのである。環境に從つて展開する初野の性格描寫の如きも作者自らの心理的是認を經てゐないオツポテユニズムである。東吾は濛朧として捕促しがたく殿井は暗中から隱見する電光下の人物にすぎない。

楞牛天外を酷評して曰く、

「今の小說家が文明の大勢に通ぜず、學術、政治、宗教等の事歷に對して馬牛相關せざるが如きは暫らく說くを要せざらむ。唯々今日著名の作家すら、其の自己の專業たる小說著作上の覺悟に於て極めて愚昧なる意見を有するに至りてけ一言の價値あるが如し。試に一事例を擧げむ小杉天外は小說著作上一種の意見を有すと稱するもの也。其の昨年中出だす所の作、必ず寫實小說の四字を標榜し、揭言して曰く、小說の要は有りの儘に事物を寫せば足る、作者の空想の赴くところ、讀者は須らく隨伴して不備なかるべしと。是の如き無意義なる主義の上に「戀と戀」を初めとして幾多の新作は公にせられたり。就て是を讀むに、其の所謂寫實なるものは、唯々當面の事物を無意義に描寫して

遺漏なからんと期するものの如し。其の當然の結果として、之を外にしては讀者の注意を散じ、是を内にしては事相の統一を失ひ、精緻は煩瑣となり、丁寧は冗漫となる。是の如くにして作者の所謂る空想に隨伴を命ぜられたる讀者こそは實に迷惑の限りと謂ふべし。(中略)而して吾人の所謂る經驗は念々刹那に於ける是等單純なる印象の連鎖に外ならざるを以て彼の具存的事物の精緻なる記述を以て寫實の本意に違せりとする說は、取りも直さず吾人の經驗に反對せる非寫實主義を取れるものと謂はざるべからず。(中略)吾人は今の文壇に流行する惡寫實の換本として、暫く天外を推し來りたるのみ。紅葉門下の諸作家及び柳浪の如きは特に吾人の言に耳を傾けて可也。

自然主義の論爭は花袋の論「露骨なる描寫」(三十七年二月)の頃から熾んになるが、その芽生はかれの「重右衞門の最後」(三十五年五月)にけはひしてゐる。天外の寫實論はその先驅となつた觀があり、天外の序言樗牛の評文共にリヤリズムの基本問題に明快な解釋を立てをらぬけれど、天外の提言が明治文學史上に歷史的重要を持つてゐる事はいふまでもない。寫實的氣運の奥底に現實への新觀照と暗黑への類感的凝視との二方面があつた事は新進大家天外や若き荷風の幼稚なゾライズムにもあらはれてゐる。天外が一見徹底したらしい是等の一家見を持し乍ら、而して文壇に一派を立て乍ら、抱月の樣な卓越の評家と友としよかつたに係はらず、つひに新聞家庭小說專門として文壇から姿を消したのは、その寫實論が彼自身の創作と一體にならなかつたのみでなくて、此立論そのものが文學的考察と思索的深化とを經てをらぬ、常識文藝論の程度にすぎなかつたために外ならぬ。

斯くて、通俗文藝の範圍にある寫實的家庭小說としての「魔風戀風」や「コブン」や「長者星」は、一面ゾライズムの新展望を立てゝ文壇と交涉し、他面通俗的香氣と道具立とを表飾りとして新聞物の生命を持する首鼠兩端の態度に出たのが、若し秋聲の如く全然後者に才能のない者ならば、それが偶然幸緣となつて第一義主義に終始しえやうし、非常に强大粗笄の有能者ならば後者の經驗的影響を自ら亡して前者の縷を辿るの策に出ようけれど、天外はその何れでもなかつたため終に後者によつて生きるの結果に終つたが、その寫實精神と對話の生動とは「コブシ」(三十九年三月「讀賣」)の頃を最盛期として可なり廣く可なり强く文壇全部に感化を與へた。天外文の藝術價はこの邊に最も明らかに認められる。

五　其他の家庭雜文學

柳川春葉は牛門を出て自然派に奔り「棒手振」(四十一年三月「中央公論」)のごとき作を出したが、つひに通俗家庭小說の專門家となり、「母の心」(三十八年「日々」)や「もつれ

糸」(三十九年「朝日」)から「誓」(四十二年「毎日」)、「操」(同年「毎日電報」)、「女一代」(四十五年「報知」)のごとく次第に人氣を增して改元後「生さぬ仲」以下該傾向として好評を博した二三の長編を殘して死んだ。家庭小說家として大正後に大成した人故こゝには論じる事を敢てしないが、文淵堂の主人が「賢實なる道念の上に立ちて我國固有の道德を高唱し、之を基調として人情の機微世事の萬態を如實に描破せられ」と全集の跋に述べた通り溫厚の資性であつたから最初は容易に讀者好きがしなかつたが、さりとて秋聲のじめじめもない春風の趣が取得で、取り立て、その藝術を論ふ程の問題はない。

生田葵山も三十一年から書き初めて少年物に浪遊し三十七年「和蘭皿」(七月「新小說」)如き好望を豫感せしむる佳篇を出し自然派の一人として「富美子姬」、「虛榮」、「都會」等の發賣禁止文學を物したが資性の輕卒詩才の薄弱は家庭小說家としても大成する處なく大正に入つた人である。三島霜川も葵山と同時に出て自然派に復活し遙かに葵山以上の期待を抱かれたまゝ家庭文學の範圍内になす處なくなつてしまつたのは愛惜に價する。

山田美妙は紅葉と並び出て言文一致の一派を建てたが、獨創に大成しえず、少年文學としては「義氣の戰三仁」(三十三年「少年世界」增刊)、新聞物としては「金忠輔」(三十六年「日出國新聞」)があり、ライヴル紅葉の花々しい死を白眼に見て硯友文學の末路を傍人のごとくに弔ひつゝ「文藝俱樂部」、「新小說」に間々筆を染めて自然派運動をよそに見て辭書の編纂により衣食しながら四十三年十月ひとり淋しく死んで行つたから家庭文學の領土に於ては勿論論すべきに足る何ものもなく明治文學史上の史價は沒すべからざるも俊才の末路は正しく斯人の感があつた。滑稽小說、探偵小說、脚本、歌劇と樣々にわが才を試みてその何れもに成功しえなかつたのは才人才に仆れたに外ならぬのだが、その才は決して藝術上の逸脫なるものでなく、創業的世才の一種に近かつた。史價あつて絕對價少なき人は明治文學史上ひとり彼のみではない。

廣津柳浪も深刻小說の昔に「變目傳」、「河內屋」、「今戶心中」の佳篇を生み、「雨」(三十五年十月「新小說」)に新轉開を感じさせたのみで、新聞物作者に入つたが、家庭文學に於ては固より舊稿もうがつ能はざる頽勢の末勢を見せたに終つた。

江見水蔭と石橋思案はともに硯友並び大名の一人であつたが、その社の衰勢とともに通俗文學に入つたがその方面で記錄する何ものもない作者である。

渡邊霞亭は即ち碧瑠璃園、綠園主人で二十一年の頃から書き

初めた年れ落ちるからの通俗文學者であるが、代作の噂も高く多く京阪新聞小說の中俗を受け持つた作者で、黑法師の名で「讀賣」に掲げた「想夫憐」「新細作」等に同程度の讀者を迎へ得、特に前者は部落民問題を扱つたが扱つたといふのみで聞よ り記すべき内容はなく、「大石内藏之助」（四〇年「大阪朝日」）といひ、「渡邊華山」（同「日々」）といふ史傳講談の再說以上のものではなかつた。

お茶坊主上りの滑稽家南新二や、江戸文學通の饗庭篁村、「天刺絲瓜の水」の作者幸堂得知の諷刺滑稽文學はむしろ黑人筋の樂屋落に近い滑稽で通俗物とは稍趣が違かつた。篁村は「朝日」に三十年代の末期の頃筆をふるつたが通俗味はなかつた。昔の讀者ならば之れを通俗物と解したであらうが、明治中期後の讀者にとつては時代の推移により、興味もなければ通俗ものとも感じられなかつたのである。その外骨皮道人の滑稽談もこの亞流であり、滑稽新誌に別途に出て凡常に終つた人である。

半井桃水の文業は二十年代初葉から一貫して東京大阪朝日に新聞物として現れたが人氣わくが程でもなかつた代り倦かずに長く讀まれたはその生來の通俗物のコツを得てゐたからで、十一年大阪朝日新聞に入りて小說を書き初めたが最初で爾、文一派や野與、採菊、學圃子と相伍したを皮切りに、二十一年東京朝日に移つて改元來以際迄新聞物を書き續けたが家庭物とも藝術小說とも交渉する所がなく、門下に一葉が出たは偶然にすぎない。

武田仰天子も南翠と共に大阪通俗文學の牛耳をとつたが「朝日」紙上の作品價は桃水と選ぶところはない。「大阪每日」によつたものに井上笠園がある。須藤南水も「都」により新聞物を多く物したが、紀行文の名のみ古りて文壇小說を遠のいてからその通俗文學は全く除せられなかつた。三十一年の頃に死んだ少後の中村花瘦や紅門を追出された北村三唖や譯文家の原抱一庵や「好色二人息子」で賣り出した松原二十三階堂や昔の任俠物を新聞物に來めかへて今も生きてゐる浪六や閨秀文學の名を弘めた前田曙山や、花柳といふよりは遊廓小說をよく書いた三宅青軒や、加藤眠柳、松居松葉、小林蹴月、黑田湖山、奴之助、山田旭南、黑田天外、岡本綺堂、伊原靑々園、今野愚公、中川霞城、栗島狹衣、瀬戸半眠、村山鳥逕、福田琴月、齋藤渓舟、谷活東、泉斜汀、齋藤紫軒、柴田流星、田中霜柳、小川煙村、齋藤弔花、伊藤銀月、本山荻舟、岩田鳥山、篠原嶺葉、物集梧水、小田萍南等の通俗文學は同時に家庭小說の境致に入つたもの少くなかつたが記錄すべき逸作はない。花柳小說の田村西男はその低級、喜劇の太郎冠者と相伍すべく、下町物の山岸荷葉が「紺暖簾」は「讀賣」（三十四年六月）に掲げて、紅葉露

件等も到底その純下町描寫の蕊腦に迫れるを及ぶべからずとなして讃嘆した立派な藝術物であつたが、偏向の作者は精進と環境とよろしきを得ずばその純一性を保持しがたく、のち「町女房」（三十八年九月「時事」）前後以降は通俗文學の堂にすらも入らなくなつたは惜しかつた。子規門を出でて俗文學に遊び、自然派勃興の氣運に乘じ一擧に中堅作者の一人となつて「行火」「鴨」「復讐」の暗黑描寫を大膽に試みた佐藤紅綠の當年は好望決してないではなかつたが、漸く新聞物に走り、家庭文學に囚れ「俠艷錄」に成功するに及んで文壇を離れて而も通俗文學の埒内にあつても時に人氣を得るにとどまり何れの點より見ても意義のない後生涯に入つた。弦齋の「報知」に連載した「釣道樂」「女道樂」「酒道樂」「食道樂」の道樂物は家庭小說といひ條、小說の基調及筋の興味が中心でなくて、筋にからまる實用的知識の小說化が實利的に受けたといふにとどまり、その道樂物に卒業して多能多才のかれは更に「子寶」の類の教訓的家庭小說にかへつて「婦人世界」的讀者を吸集したが、その影響は大正期の本質であるからこゝには說き及ぼさない。二十年代初葉以降弦齋の魅力は文壇の蔑視であり社會の驚歎であつたが、この道德思想とこの筋の面白味とは時勢につれて變遷はあるもよく大多數の婦人讀者の心魂をとらへて離さなかつた。初期「小弓御所」の部分的藝術價は中期以後には全然かげを潜め只全體の布置と異樣の興味を惹く挿話又は小事件を鏤めることによつて巧みに人氣をつないで來た。この點弦齋は稀有の通俗作者で衞生家事家政の方面にまで研究の手を延してそれが悉く人氣の中核になつてゐる處徹底した大俗文士の好典型である。

德田秋聲の家庭物は陰欝で齒切れが惡く血の氣が無さすぎるので、一般男女の人氣を決して得なかつた。「雲の行方」（三十三年「讀賣」）の頃から「結婚難」、「小華族」を初め全國の小新聞にまでその名散見したが、文壇のその名によつて留意せられるといふにとどまり一向に人氣もなかつた所へ、自然派運動の精神が風葉とともに一致を見出しうる本質であつたので、潮に乘じてその方での中堅作家の一人となり「黴」（四十四年八月「朝日」）の佳篇前後からは調子をあまり落さずに新聞的なる文壇小說をものして大正に入つたは幸運の作者であつた。

小栗風葉は「寢白粉」（二十九年「文藝俱樂部」）が禁止せられた當時から寫實的の暗黑描寫を得意としてゐたが寧ろその作風は平凡で位置も亦平凡であつた處へ、秋聲と等しく自然派運動に再會して性來の寫實手法の精神を梃にこれにいち早く參加し、その「青春」（三十八年「讀賣」）はルーヂンにヒントを

得たものと喧傳せられ泰西文學の感化を受ける品格のある作者の折紙をつけられ、「[illegible]風[illegible]風」と併稱せられてそれ以上の藝術價を認められてより一躍自然派の有力作家の一人となり「天才」、「未亡人」、「戀ざめ」、「ぐうたらな」でその自然主義時代を相當好中に經過し、讀者は尙かれを嚴視して新展開を恒に待んでゐたに係はらず、作者自ら頽廢してしまつて紅葉が「金色夜叉」後篇の續の服務作と平凡なる家庭通俗文學とに隱れ、その方面に於てすら多くの代作を續出して地方新聞にお茶をにごすにとどまり、藝術の生命は全く廢れて頗る平凡極る通俗小說作家の一人となつて大正期に入つた。紅葉門の四人中、鏡、秋の兩人が危い道を步き乍らよく自己の藝術型を完成しえたに反し春、風の二人は共に自然主義に加盟しつゝ一は早く見切りをつけ一は立派に研究し批判しその影響感化を數へて文學史の數頁を飾るに足る業績を殘し乍ら、明治末期の頃から漸く壇を下つてしまつた。

鏡花が登張竹風の第一譯稿によつてハウプトマンが「沈鐘」の合譯を試み、世間の期待に反してまんまと失敗したに比し、生田長江の第一譯稿により風葉がダヌンチョの「死の勝利」の一節を「新潮」に揭げた時は油氣の強い精確の筆致よくこの自然主義文學の粹を傳へてゐた。その後、かゝる名譯を絕えてダヌンチョ譯文學に見ない。もと原作の本質にもよるのであるが、風葉の[illegible]近の才並びに風葉の藝術の特質の何處にあるかを窺ふことは出來る。又、「金色夜叉」の後篇を綴いた風葉の[illegible]を見ても師紅葉に模した才能のあなどり難きものがあるのを見る。畢竟、風葉は感受性の強い模倣才の卓れた藝術家であつたか、家庭物作者としては少くとも明治末期にあつては何の特性をも發揮しなかつた。

風葉門下の眞山靑果、岡本靈華の二人は、一は自然派の新進作家として正宗白鳥と並び稱され「南小泉村」以後の逸作を殘し、イプセン風の社會劇の試作も注目するに足る佳篇といはれたが、明治の終り自然派の衰頽とともに師風葉に似て自ら頽廢して通俗文學に隱してその立場にあつても何等新見地を見せ得す、一は靑果と並稱せられ靜相せる創才の他日の開花を期待せられる事相當に強かつたに係はらず、いつとなく影を潛めて俗文學に出沒するに至つたが靑果と等しく共方面での業績の見るべきものはなかつた。

田村松魚も「三湖樓」(三十五年)前後のあと詩才暢びず、新聞續物の類も亦何の展開を示さなかつた。この種の延びずして終つた人々は尙他にも多いが凡て省略してをく。

堀内新泉の立志小說も村山鳥逕の宗敎小說も變つた舞台に立

つたといふ以外藝術物としては勿論通俗文學としても拙劣迂愚の駄作が大部分を占めてゐた。

少年小說、少年文學は開山巖谷小波が「我樂多文庫」の頃夙く少年文學に目をそそぎ、少年幼年物により、「黃金丸」(二十二年)、「當世少年氣質」(二十四年)を試みたが因となり、小說の迂拙に見切をつけてお伽噺少年少說の專門となり夥しい創作に明治少年文學の正統の型を作つたが、謂ふところの少年小說の範圍にはあまり出でず、寧ろ幼年文學の感があり、又、お伽脚本「春若丸」の試作などもあつた。武田櫻桃、木村小舟、黑田湖山、猪波曉花、福田琴月、谷活東、西村諸山、生田葵山、三津木春影、高橋太華、大橋乙羽、江見水蔭等夥しき數の少年小說の作者も川上眉山等と共に「少年文學」叢書や雜誌「少年世界」、「少年界」等に少年主人公の小說として興趣少からぬものを寄せた事もあつたが多く片手間の賃仕事でなければ、お伽噺專門に傾いてゐたので、古くは「少年文學」の叢書が逸作を割合に多く見せた外記するに足るシリーズなどは出なかつた。少年小說もその埒を出ない。

むかしの少年雜誌には、それでもお伽噺に交つて少年小說として可なり純に近いものであつた。少年雜誌には惜いほどの作も時としてはあつた。それが小波洋行後から急に程度が下つて全くの幼年向きとなり、昔の大人染みた少年雜誌の俤は「少年世界」を初め何處にも見られなくなつた。雜誌のみでなく學校が全く同じ變遷を辿つてゐるのである。(少年文學に就ては別に詳かに考察の機會もあらう。)

六　結　語

通俗文學は大衆文學となつた。そこには階級意識から來る內面上の多少の變化もある。しかし、內質は殆どと云つてよい程度に同一である。煽情の通俗文學は嚴峻にいふと衆愚文學の概念に近接してゐる。しかも、衆愚たるを恬然と自覺してこの事に從ふことによつて初めて大衆文學は成就せらるべきであるのに、表面上の言辭は何であれ、實質的には浮腰の者途中下車の者腰の立たぬ者が八分を占めて殘る二分がいつも何事かを企てさうなけはひを示して、吾々局外者の期待をつなかせ乍ら一向に纏つたものを つひに見せて與れないのが今迄の 恆例である。又、今日の例でもあるやうだ。

講談が衰へて而も一方創作が平板化したのが文學史的所因であり、同時に文壇が雜閙して席がないから溢れ出たのが人の問題上の所因であるとする論者がある。(菊池寬) この常識的說明は一應尤もであるが根本には觸れてゐない憾みがある。「文壇的群衆」よりも一般讀者の方がより健かな、より信頼すべき鑑賞眼があるといふ論者がある。(生田長江。)この理想主義的說明は一應尤もであるがこれにも民衆の實際には觸れてゐない憾みがある。期待するは今の「いはゆる」通俗物が廢れて藝術的長篇

が「通俗」となる頃であると望む論者がある。（千葉龜雄）こんなことを便々と待つてゐられる人は幸福である。ロマン・ロオランの甚だ聰明にして甚だ幸福なるかの民衆藝術論とても同範疇を出ることあまり遠くはない。

私のいひたいのはそんな事ではない。民衆は恒に羅馬帝政の昔からいや、オストラシズムの希臘の昔から本來藝術的には必ず低級なのが常道である。低級は精神條件的、準備行爲的必至の當然である。その民衆には首相も博士も知事もペンキ職工も三枚目も重役も農夫も入つてゐる。これが文學上の一般民衆である。大衆である。是等の大衆は日々の生活（生きるためのみの生存もあれば贅澤のための生存もある）に多忙で藝術なんぞ介意つてはゐられん人達である。尤もである。それ等の人が、どうかした拍子に何ぞ讀んで見たくなる、宰相の引見の間でも停留場の待合室でも媾引の一區劃でも工場の一隅でもよい。電車内でも小使室でも芋畑の眞中でもヨット船中でもよい。こんな時にこんな人の讀む者が多く大衆物である。デリケイトの極致のものなど原則的には判らんのは當然である。大ざつぱの物、大味の物、刺戟的のもの（その刺戟は道義的刺戟でも性慾的刺戟でもよい）が悦ばれるのはいふ迄もない。生田長江の「文壇的群集は」は今のブルジョア小説の對象を指すのだらうが、プロレタリア小説の對象だつて少しも違つてはゐない。何を名目に拘泥する必要があるか。勝てば官軍負くれば賊が今日では逆に考へられてゐるのか。その「文壇的群集」は文壇的楽屋落に興味を感じるのだといふ。そんな「小説家以前」の文學青年輩も「文壇的群集」中にをるだらうが、誰といふ小説作者が辷つたとか轉んだとかいふ事を喜んで書く此頃の文學雜誌の讀者のみが「文壇的群集」ではない。それは一部である。他の一部のその中には駈け出しの青ん僧作者の思ひも及ばぬ様な精到繊鋭の鑑賞者もをる。只、彼等は、職業でないから書かない。書かないから、默してゐるから、受取つて計りをるからその主觀は判らない。今の評家や作者等がかの甘い讀者を對象として書いてゐるなら飛んでもない間違ひだ。

第一種の藝術から第七種第八種の藝術は誰のユートピヤのいつの世にだつて存在する。好きなものを撰んだがいゝ。たゞ、問題は繪畫も小説も演劇も入手し易く、又は圖書館邊で讀み易くなる事だ。博物館を方々に建てる事だ。質を低下させるのでなく、民衆と藝術との道を自由にしてをく事だ。

今の「大衆文學」は昔の「通俗物」の延長には相違ないが、環境に從つて確かに性質と迄はゆかずとも氣込みだけは異つて來た。進歩といつてよからう。講談筆記にとつて代り、若しくは代らうとした點は昔も今も同一である。家庭小説の場合がそれであつた。大衆物の今がそれである。共に過渡期の現象だ。家庭小説の後に硯友文學が全く仆れて自然派が起つた如く、大衆物の後に文壇小説が何かに推移すれば幸福なる進歩である。

うら若い靑年作者の藝術小說の下宿屋的妄想の描寫よりも、その全部の價よりも、私は、及び一般民衆は「大菩薩峠」の部分品を嗜讀してゐる。靑春が惡いのでも告白が惡いのでもない、作者の靑春價、告白價が僅少だからつまらぬのだ。

藝術小說は特選品で大衆物はクズ物だといふのでは必ずしもない。大衆物は最初からその目的で書かれてあるのだ。文壇作者がホマチ取りに腰を下して書いたといふのなら、そんな大衆物は（一部のバカな讀者が食ひつきもしようが）火に焚いてしまつた方がよい。

大衆物は刺戟的素質の宏大な興味の事件を大味に味つけたものだ。それでいゝではないか。大衆物を書いてゐてゲーテにならうとする者があるなら、それは正しくドン、キホーテである。然し——ハイゼやコレリーやデューマになりたいのなら、それは一向に差閊へのない正道精進である。

若し所謂藝術小說の作者が、現代のリヤリズムの立場から考慮して、なるべくありうべき、狹小の、經驗範圍に屬する、心境又は事件を描寫するに對立し、こゝにある大衆作者が、一見ありうべからざる、廣大の、直接經驗とのみ跼蹐せず經驗の領域を擴大して而も自己の觀照生活の手綱の下にあると自覺せる、心境又は事件を大味と刺戟的との特長を失はずに描寫せんと試みたならば、大衆作物の立場にあつてその最高の位相に到達する事が不可能でなくはない。而も、細心の精密の全體と部分とをよく有機的に結ぶ藝術的反省が之れに偶然次第〳〵に加はつたならばその位相は單に通俗物に於ける最高にはとどまらぬだらう。又、藝術物作者がその藝術範圍を擴張して觀照の銳烈を企て殆ど大衆作家畑程度の領土を占めるならば時代史文明史氏族史王朝史民族史としての深みのみでない擴がりを持つてゐる作位に到達する事が出來る。そこで、もし作家の本質に異常の轉價と進步とが急激に行はれたならば、結局初めは藝術作者だつたか大衆作家だつたか判らない樣な事變が突發しないでもない。然らば、二つの平行線はついに平行線ではなくてこゝに合一してしまふわけである。

が、そんな空想はどうでもよい。今の場合吾等の冀望は人各その藝術に徹頭徹尾純であつてほしい事だ。かの御便利主義の功利的藝術論は、たとへば、かの輕卒にして迂遠なるローマ字論者のやうなもので、一番無價値なる文明の外道である。藝術の贅肉がはびこるか、その贅肉が如何の程度に文明全般にとつて必要なものか、贅肉中にも如何に美しい藝術が部分品として散在してゐるか、又、全文學史にとつて如何に重要の貢獻をなしたかといふ諸點についてわれ等の反省を覓めた。善人と惡人と半善半惡人とによつて倫理學的實世界が構成せられてゐるやうに、美と醜と半美半醜の藝術によつて審美的文學界が機構せられてゐる。どの部分が優勢を示すかは時勢の內質に待たねばならぬ。

愛書癖

辰野隆

○巴里に遊んだ人々は誰でもセエヌ左岸に列んでゐる古本店を決して忘れないだらう。店と云つても、家ではない。唯、セエヌ河岸の石崖の上に、無數の古本の箱が、石崖の續く限り――と云ふと少し話が大きくなるが――サンミシェル河岸からヴォルテエル河岸に至る七、八丁か八、九丁の間は、高さ一尺、方三尺ばかりの箱に、古本を詰め込んだのが數限りなく行列してゐる。二、三間隔きに箱の主がゐて、牀几に腰をかけたり、ぼんやり、セエヌ河畔の釣客を眺めたり、煙草の煙を輪に吐いたり、葡萄酒の喇叭飲みをしたり、居睡をしたりしてゐる。大抵は無愛想なやうた、人の好ささうな爺さん連で、若い顔は稀であるが、彼等は日が暮れると、各自の箱に錠を卸して歸つて了ふ。翌朝になると、彼等は再たのこ〳〵と、馬の糞のやうに集まつて來て、箱の前に呑氣な顔を列べて、愛書家の群を待つてゐる。

○此の河岸の古本屋で珍書を漁る人も鮮くないが、掘出物は滅多にないらしい。僕も屢、眼を皿のやうにして、片端から漁つて歩いたが、ニザアルの佛ヶ學史四卷を二十法で買つたのが關の山だつた。或日、「屁の術」と云ふ珍本を見付けて、一寸誘惑されたが、あまり馬鹿々々しいので、表題だけ拜見して御免蒙つた。が、今思ひ出すと、矢張り買つて置いてもよかつた。風來山人の「放屁論」など丶讀み較べたら、今頃は比較放屁學の學位論文位は提出してゐたかも知れない。

○然し斯んな卑近な珍本は買つても買はなくてもい丶が、どうかすると、河岸の箱にも、途方もない稀覯書が紛れ込んでゐる事がある。歷史家のガブリエル・アノトオが嘗て、河岸の箱を漁つてゐる中に、偶然、大奈翁の署名のあるシイザアの「ゴオル遠征記」を發見して有頂天になつたと云ふ有名な話がある。その署名がボナパルトとあつたか、それとも又ブオナパルテと伊太利亞流に書いてあつたか、其處迄は聞もらしたが、五年に一度でも、十年に一度でも、斯んな掘出物があるから、

愛書家が血眼になつたり、蚤取眼になつたり、鵜の目鷹の目になつたり、するのも無理ではない。

○愛書家の事を一般にビブリオフィルと呼んでゐるが、此の愛書家の癖が高じると、ビブリオマアヌ即愛書狂となる。其の愛書狂の中にも色々種類があつて、書籍であれば何でも有難がる奴がある。つまり書籍の偶像崇拜家で、書物さへ見れば矢鱈に御辭儀をしたり合掌したりする、ビブリオラアトルと云ふ連中である。此他にビブリオタアフと云ふのがあるが、タアフとは墓の義で、唯徒らに讀みもせぬ書物を買つて積んで置くのを樂む輩である。愛書狂の中でも、合掌派や墓守流は未だ〱無難であるが、之が更に一歩進むとビブリオクレプト即書盜となる。甚だ物騒な話で、此んな奴が飛び出すと、愛書家はお互に用心し度くなる。ところが、此の書盜に辵をかけたのが、書籍欲しさの人殺しで、斯んな奴に會つたら、それこそ百年目である。以下、愛書癖の穩健派から過激派に至る段階を、順を追ふて說く事にしよう。

○愛書家。ビブリオフィルと云ふ語は、十八世紀の終り頃から一般に行はれ出したので、其以前はフィルビブリオンと云ふ語が用ひられた。而して其の源は中世紀の文學者リシャアル・ド・ビユリイの著はすところ「フィルビブリオン」に迄溯るさうである。では、古代には愛書家といふ語はなかつたのかと聞かれると一寸困るが、語はなくとも愛書家が存在した事は確かである。それは舊記に、昔々埃及の或王様が宮廷の圖書室の戸口に『靈魂慰籍の寶庫』と誌した、と云ふ事が書いてあるからである。中世紀は、フィルビブリオンと云ふ言葉まで出來た時代であるから、愛書家が名實共に存した事は毫も疑ひを容れない。『書籍を好まず、書籍を信ぜざる輩の死こそ實に犬死なれ』といふのは確かに中世記の格言だと記憶してゐる。然るに時代の進むに從つて、書物の數は殖える一方で、殊に印刷術の發明以後の殖え方が著しく目立つて來た。そこで、如何に本好きでも、讀み切れなくなり、蒐め切れなくなる。だから諦めるかと思ふと、決して諦めない。一層讀まずに、蒐めるだけにして見ようかなどといふ斷然二兎を追はざる篤志家が出て來るのは自然の數である。然し斯る篤志家に無闇に書物を買占められると、讀む方の愛書家は往々迷惑する。で、つひ蒐集家の惡口も言つて見たくなる。『人の性』(カラクテエル)といふ名著を遺した十七世紀佛蘭西のラ・ブリュイエエルは或時、知名の藏書家の書庫を見て、金文字背皮の書册が何萬といふ程書架に陳べてあるのが一寸癪にさはつたらしい。『此の好書家の書庫と稱する鞣皮の物置』などと憎まれ口をたゝいてゐる。惡口では人に負けを取らぬヴォル

テエルも、次の世紀に於て、『書物も人間と同じで、群の中から選擇する他はあるまい』と「チエリオに與ふるの書」の中に記した。同じく十八世紀で、百科全書編纂者として名高いダランベエルも、ヴォルテエルに劣らぬ人の惡い男であるが、彼の百科全書第二卷、愛書狂の頁には斯んな事が書いてある。『……場所をとらぬ簡便な圖書室を造る最良の方法は、例へば、十二卷の全集中、六頁だけ有用と信じたら、六頁だけ切取つて、餘は火中す可し』

○然しながら、以上三人の佛蘭西の粗探しが、二世紀に渉つて、皮肉混じりの警告を發したつて、愛書家の病がそれで癒ほる筈もない。さう云はれゝば意地になつて蒐めたがる奴も飛び出して來る。然し、如何なる蒐集家でも、書物に對して多少の註文がないわけではない。で、先づ僕は此處で蒐集家の趣味、趣味と云つたやうなものを一言して置く必要があると思ふ。一體、蒐集家に通有な好みは、一般的にいへば、全集を求める事である。之は頗る當然で、別に說明を要せない。次には、書物の頁の緣の廣い事である。度々製本を仕直ほす中には、緣が段段に狹くなるものであるから、始めから緣にゆとりの無い書物を愛書家は特に忌むのである。現に、僕の持つてゐるモンエエニユの「論集(エッセエ)」(十七世紀ライデン版)などは、ロバアト・ラングと云ふ人のエキス・リブリスが貼つてあつて、少くも僕自身では、相當に佳い本だとは思ふが、何分、緣に餘白がなくなつてゐるので、手に把つて暫く眺めてゐると、どうも椽側が狹すぎて、稍窮屈な感じを與へるのが瑕である。その次に、蒐集家が紙質に注意する事は云ふ迄もないが、其上に尙ほ製本が丈夫に出來てゐなければならない。裝釘は住宅と同じく、寧ろ地味にすぎる位がいゝので、人目につくやうなものは直ぐに飽きが來る。

○愛書家が書籍を大切にする事は改めて斷はる必要もないだらう。書籍も生きものと同じで、餘り使ひ過ぎたり、遊ばせ過ぎたりするのは保健に宜しくない。時々は日光浴をさせたり、新鮮な空氣にあてゝやらないと箱入娘のやうに、病氣になつたり、蟲がついたりする。そこで書物にも醫療が必要になつて來る。書籍治療(ビブリアトリック)といふ語もある位で、本の手入れに就いては、昔から相當に研究されてゐるものと見えて、ボナルドオの「書畫保存法」(一八五年)と云ふ著書もある。然し此の本は、專門家用で、僕等の興味は左迄惹きさうにもないが、多少面白いと思ふのは、紐育のライブラリイ・ジャアナル第十一卷第四號に出た『書物に對して加ふる可らざる罪行』といふ頗る有益な教訓がある。書籍保存に關する法規を、a

モアを交へて書いたもので、――寢床の中で讀書すべからず、新刊書の頁を慌てゝ切る可らず、と云ふやうな甚だ穩やかな忠告から始まつて、頁の上に煙草の灰を墜落せしむる可らず、寧ろ喫煙せざるに如かず、煙を透して書を讀むは第一、眼に毒なればなり。額の上に書物を載せる可らず（これは午睡の場合）婦人の頭髮用のピンなどを借りて頁を切る可らず（女の頭の穢らしきは、古今東西を問はざればなり、といふ意味らしい）。それから、書物に嚔す可らず。小供や猫に書物を投げつける可らず（如何に騷々しくとも）などゝ云ふ事も書いてある。どうも僕などは悉く落第しさうな注意ばかりである。

○愛書家が珍重するのは、何と云つても稀覯書であるが、稀覯書にも種類がある。例へば、出版當時は三文の値打のない本でも、時代の御蔭で珍本面の出來るやうになる代物もある。此種の珍本で有名なのは、一六五五年アムステルダムのエルゼヴィエル版、「佛蘭西料理大全」で、本書は十七世紀、十八世紀の間に、佛蘭西の臺所で大部分は焚附の代りになつて了つた程の俗書だが、それが今では珍書中の珍書で、十九世紀末には二萬法といふ値が付いた。之は十七世紀の風俗、習慣を調べるにはなか〳〵貴重な文獻ださうである。

○で、稀覯書を大別して、絶對的稀覯書と相對的稀覯書となすと云つたら、吹きだす讀者があるかも知れないが、そんな馬鹿げた分類をした奴が居るのだから仕方がない。一七九〇年にカイヨオとデュタロ合著「稀覯書に關する書籍學的、歷史的、批評的字典」といふのが出てゐる。その本に書いてある分類に據ると、相對的稀覯書といふのは、前述の「佛蘭西料理大全」の類で、時代を經るに從つて漸次に稀になる書物である。が、絶對的稀覯書の方は、初から部數の限られたもので、一地方の歷史、土俗に關する書物や、好事家の手になる、主として趣味に關する書物である。此外に人巧的稀覯書と稱す可きものがあるが、それは、自分獨りが持つてゐると思つた書物が、未だ他にも在る事を知つた場合に、それを買取つて破壞して了うといふ方法で、實例もある。然しさうした癖は、既に愛書癖を一步踏み出して、狂の部類に屬するので、それは後に述べる事にする。大體に於ては、稀覯書たるの要件は、時代の古い事である。先づ今日、貴ばれるのは、印刷術發明後一四八〇年に至る幼年期の書籍で、之をインタナベラと呼んでゐる。インタナベラとは、襁褓、むつきの意味ださうで、つまり赤ん坊時代、たれ流し時代の書物を指すと思へば間違ひない、平たく云へば「おしめ本」とでも譯す可きだらう。あまり清潔な名ではないが、日本の淨瑠璃本にも、孤本なんていふのがあるから、おしめ本だつ

て、そんなに遠慮する事はない。インタナベラ以前の木版物は、タシログラフと呼ばれる書籍の一團であるが「おしめ本」と相俟つて稀覯書中の重鎭である。

○愛書狂（ビブリオマアヌ）。愛書癖が漸く深刻になると、愛書狂になる。此のビブリオマアヌと云ふ語は、十六世紀頃から用ひられたので、其の通性は、書物を讀まぬ事である。その代り、書物に對する所有欲は頗る旺盛で、此の癖は、古代に於ては、羅馬よりも希臘に著しかつたらしい。皮肉屋のリュシヤンが或愛書狂に自著の小冊子を贈つた時に、その卷頭に『書齋を所有せる無學文盲なる男に本書を獻ぐ』と書いたといふ話が傳はつてゐる。中世印刷術の發明が、希臘時代にもまして愛書狂の熱を高めた事は爭へないが、一方にまた、愛書狂を苦めた事も疑へない。折角獨占の愉樂を味ひ得た珍書が、印刷の力で珍書でも何でもなくなる運命になつたからである。これには、僕にも覺えがある。數年前僕は巴里の或書房で、詩人マラルメの「昔の神々」と題する珍本を求めて、ひどく得意になつた事があつた。――今は其の本は、マラルメ通の鈴木信太郎君に半永久的に貸してあるが、鈴木君の方では租借地の法理を曲解して、永久的に占領したつもりらしい――無論、初版で、久しく絶版になつてゐた書物だが、不幸にして其の書物が昨年巴里n・r・f社で再版せられたのである。その廣告を見た時僕は餘計なことをするn・r・f社だと思つて大いに憤慨したが、其後再版が手元に屆いて初めて安心する事が出來た。本の體裁と云ひ紙質と云ひ初版とは全で較べものにならず、殊に初版にある美しい挿繪が再版には全然缺けてゐるのが頗る氣に入つた。誠に埒もない話であるが、斯うした癖が高じると狂になるのだなと思つて、其時、僕は微の字の付かぬ苦笑を漏らした事を一寸告白して置く。

○愛書狂の熱は、印刷術發明後も益々激しくなるばかりだつた。從つて一方にはそれを冷笑する傾向も漸く辛辣になつて來た。一四九七年、獨乙人セバスチヤン・ブラントの「狂者の御堂」と云ふ本の挿繪には、ロイド眼鏡をかけた老人が――斷つて置くが、ロイド眼鏡は決して近代の創意ではない。中世以來引續いて行はれたもので、モリエエルの喜劇に出て來る醫者は、大抵ロイド眼鏡の愛用者である――で、ロイド眼鏡の老人が、圖書館のうす暗い一室で、巨大な書物に向つて、左手で頁を翻へし、右手には鵝ペンを持つて何か書きつけてゐる。如何にも奇特な老學者だと思つたら大違ひで、挿繪の説明には、『俺は山のやうに書物を所有してゐるが、披いて讀む事は殆どない。稀に讀んでも直ぐに忘れて了ふから、讀まぬ以前よりも賢くは

ならない』なんて書いてある。

〇斯んな愛書狂が更らに一歩進むと、變體になつて來る、一例を擧げれば、誤植を尊重する癖がそれである。十八世紀末の佛蘭西の文學者ポンス・ド・ヴェルダンの作と傳へられてゐる四行詩(カトラン)に

　實(げ)に本書こそ絕好の版なれ
　その故は十五、十六の頁に
　二箇所の誤植あればなり
　是は惡しき版にはなき事なり。

といふのがある。誤植尊重癖の中で、一寸變はつてゐるのは、聖書の誤植を有難がる連中で、彼等の最も愛好するのは、一五九〇年版と一六三一年版と一七一七年版である。

一五九〇年の聖書は、ブルガアタと呼ぶもので、これは法皇シキスト五世の監修にかゝるものであるが、法王自ら校正したにも不拘、非常に誤植が多かつた。法王は癇癪の持つて行きどころがなく、其の聖書の卷尾に『若し信徒にして本聖典の誤植を指摘する者は破門せらる可し』といふ威(おど)し文句を附け加へたが、却つて世間の物笑ひの種になつた。法王は後に此の版を廢棄したが、唯數冊が厄を逃れて、世の好事家を悅ばせる事になつた。後世此の聖書が目の玉の飛び出るやうな値で賣買されたさうである。

一六三一年版は世に「惡性の聖書(ウイッケッド・バイブル)」と稱せらるる甚だ有難からぬ寶典で、此の聖書印刷の責任者は倫敦のロバアト・バアカア及びジョン・ビルの二人であるが、此の二人がどうした間違か、モオゼの十誡第七條の文句の、否定にす可き所を肯定して了つたので『汝等須く姦淫を犯す可し』となつたのである。斯んな聖書は誰が見ても惡性に相違ない。責任者は三百磅の罰金を拂はせられた。

一七一七年の聖書は、牛津のクラレンドン版であるが、路哥傳第二十の葡萄畑の寓話の件りに、葡萄畑(ヴインヤアド)とあるべきところが酢(ヴイネガア)となつてゐる。後世之を酸性の聖書(ヴイネガアバイブル)と稱へて大に珍重してゐるが、さうした誤植のない通俗の聖書をアルカリ性の聖書と謂つてよからうと思ふ。

以上三種の聖書を揃へて持つてる奴は殆どないと云はれてゐる。全く、斯んな聖書を堀出して悅に入つたら、舊教からも新教からも破門されるかも知れぬから、寧ろハアトとクラブとダイヤのボインの三幅對で我慢した方が無難だらう。

〇愛書狂の別派に堆書狂(ビブリオタアフ)即ち書物の墓守と云ふのがあるのは前述の如くだが、百科學者ダランベエルの擧げてゐる例に依ると、十八世紀の佛蘭西に、天文學の本ばかり集めた男が居たさうである。而も其の男は天文學に關しては全然

無智で、集めた書物を一行も讀んだ事がなく、其上誰にも書物を借さなかつた。十七世紀のサン・シモン公の回想錄には、エストレエ伯爵といふ愛書狂が全く讀まぬ書物を五萬二千冊、それも釘づけの梱に入れて所有してゐたと書いてある。同じ本の種類を幾通りも持つてゐる點では、名は忘れたが英國人で、ホラシュスの版を三百六十五種蒐めた奴が横綱だと謂はれてゐる。

○堆書狂で名高かつたのは、十九世紀初葉の和蘭の貴族ウェストリイネン・ヴァン・ティエランドであるが、此男が珍しい藏書家で、且つ藏書を人に見せたがらない奇人だつた。彼は久しい間、彼の友である二人の愛書家に藏書を見せる約束があつた。彼は何とか口實を設けて期限を延ばしてゐたが、或日愈々書庫を見せる事に決心して、二人の友人に條件を提出した。その條件がなかなか厄介で『今は一年中で最も濕氣る季節だから、書庫にはいるには特別の注意を拂はねばならない。そこで、當方から、如何なる濕氣にも堪へ得る馬車と上衣と帽子と上靴とを送るから、必ずその上衣を着て、帽を蒙つて、上靴を穿いて、防濕裝置の馬車に乘つて來て呉れ』といふ。二人の友は快諾して、招待の日を待つてゐたがティエランドは遂に違約して了つた。又一說によると、二人の友は條件を具備した風體で藏書拜見と出掛けたところがティエランドはそれでは滿足出來ず、更に彼等二人に大きな袋を穿かせて、手足の自由を奪つて置いて、袋から首だけを出させたままで、書庫に案内したが、唯書架と書架との間をピョン／＼飛んで過させただけだつた、とも傳へられてゐる。

○堆書狂でティエランドを凌ぎ、英國のリチャアド・ヒイバアにも勝る程の豪傑は佛蘭西のブウラアルである。此のブウラアルはアントワンヌ・マリイ・アンリ・ブウラアルの方で、「書籍學啓蒙」を書いたシルヴェストル・ブウラアルではない、とモリヤンヴァアルと云ふ親切な男が特に注意を與へてゐる。堆書狂ブウラアルは護辯士だつた。彼も初めは尋常な愛書家で、主として中世紀の寫本を蒐めて樂しんでゐたが、佛蘭西革命の時、國土が荒され、各地の僧院の藏書が二束三文で賣り飛ばされるやうになつたので、彼は國法の散佚を慨し、翻然として悟つて、而して逆上して書狂となつたのである。彼は七十一年間の生涯に、六十萬卷の書を蒐める事が出來た。彼が書物を漁りに出掛ける時には、いつも長い杖を曳いて行つた。その杖の長さが一米突九四九で、近代なら、アルペンストック、陶庵和尚の杖、昔なら、モリエエルに嗤はれた馬鹿貴族等の杖を想像させるが、彼は毎日杖の長さだけ書物を買はなければ機嫌が惡かつ

た。彼は好んでインフォリオやインクワルトの大冊を求めた。彼は七階建の貸家を七棟持つてゐたが、書物が殖えるに從つて、店子に店だてを食はせ、晩年には店子が一人も居なくなつたさうである。詩人で小説家で愛書家であつたシャルル・ノヂエが或日、ブウラアルの書庫にはいつた時の感想に斯うある。

『六十萬卷に近い書物が堆積してゐるのだ。何もセメントで固めてあるわけではないから、ブウラアル君が、其本なら此處にある、其の本なら彼處にあると云ひながら、例の杖で書物の山を突くと、山の嶺がゆら〳〵と搖れる。自分はゴチックの大伽藍の指天塔が暴風の空の下で搖れるやうに感じて、莊嚴なる戰慄を覺えた。』

○ブウラアルが滅茶苦茶に書物を買ひ込むのが細君の氣に入る筈がない。或時、細君は亭主に一冊讀了してからでなければ他の一冊を買ふ事は今後相成らん、と嚴命を下した。之れは如何にも俗見で、ブウラアル夫人にしたところで、滅多に嵌めない寶石入の指輪を大事に藏つてゐた形跡があるのだから、此の小言は無理である。然し、ブウラアルは氣立のやさしい人だつたから、細君の警告に從つた。ところが間もなく、どつと床に就いて、わけのわからぬ熱が出て、仲々直ほらない。そこで細君は、亭主の親友で、同じく愛書家であるドクトル・デキュレエに相談せざるを得なくなつた。ドクトルは患者の脈をとり、胸をたゝき、舌を出させた後で、病輕からずと診斷した。彼の說に據ると、病人の發熱は戀の病と同系統の衰弱から來る發熱で、見捨てられた許嫁などにも此種の發熱が往々にしてある。ブウラアル氏の場合は書物に對するノスタルジイであると宣告した。細君も亭主の趣味を拒否して、後家になるのは厭やだつたと見えて、直ちに禁を解いた。ブウラアルの病は其日の中に癒えて、其後何年間、好きな本を買つて〳〵買ひぬいて、芽出く往生を遂げた。彼の死後、藏書の競賣が三年間も續いたさうであるが、彼が死んでから今年で丁度百年になる。佛蘭西の或物好きが、十八世紀の食通、「味覺の生理」の著者ブリヤ・サヴァランの百年祭を催しながら、我がブウラアル大人の百年祭を催さぬのは不合理であると慨歎してゐるのも、愛書家の身になつて見ればあながち理由のないことではない。

○書盜(ビブリオクレプト)。本盜人には平の泥棒と異つて、身分も卑しからず、人格も——書物以外の點では——高い人が尠くない。各國の刑法で之を普通の竊盜と一律に罰してゐるか否かは、僕は知らぬが、俗說としては、本盜人は花盜人の一種であるから、寛大に取扱つてやれと云ふ議論と、愛書家に取つて此位恐る可き敵はないから、出來得る限り嚴罰に處せと云ふ硬派

の主張とがある。僕は無論硬派に贊成だが、竊かに思ふに、全體、——職業的盜人は暫く論外として——身分あり、徳低からざる紳士にして往々本盜人となるのは、要するに社會の書籍に對する關心が足らぬからで、書物なんか盜まれても痛痒を感ぜぬ輩が多く、從つて社會の書籍に對する良心が、掠奪結婚を是認する時代、待合を議會と心得る時代の良心と相距る事遠くないからだと思ふ。つまり、社會的無關心が愛書家の良心の懈怠を促す事になるのだらう。

○十九世紀、佛蘭西、ルイ・フィリップ王の時に、巴里の有名な書肆の主人で書盜が居た。彼は相當に尊敬せられ、世間の信用もあつた男であつたが、書盜癖だけが彼の瑕だつた。書物の競賣があると、彼は屢顏を出したが、競賣係りで彼の癖を知らぬ者はないので、彼が姿を現はした競賣で、書物が紛失した場合には、係りの者は、直ちに彼の入札と極めて、勘定は後から貰ひに行く習慣になつて了つた。

○十八世紀の末頃の話だと思ふが、佛蘭西のランスの圖書館司書にエル・パリスと云ふ人がゐた。彼が永年の圖書館生活の經驗から次の如き言をなした。『書物に關しては如何なる人も信用してはいけない。有徳の君子にも心を許してはならぬ。私の知人に有名な本盜人があつた。其男は金をかけずに稀覯書を蒐めるのに妙を得てゐた。彼は好んで落丁のある珍書を安く買ひ集めてゐた。どうするのかと思ふと、彼は愛書家と親しくなつてその書齋を見せて貰ふ時などに、自分の本と同じ本があると、人の目を掠めて、落丁の部分に相當するだけを切取つて來る。また、書物の競賣の催されるやうな日には、彼は豫め下見をする際に欲しいと思ふ本があると、竊かに一頁だけ引き割いて置く。そして愈々競賣が始まると、係りの者に例の書物を示して、落丁があるから安くしろと云つて、うんと値を引かせてから買ひ取る。家に歸つてから、先に切取つた頁を貼り付けて置くのが彼の慣用手段である。私は此男が圖書館にやつて來ると、一刻も目を放せなかつた。私は或時彼に云つた。——私は君が大好きだ、年中君の傍にゐたい、どうぞ、今後は私と同じ机で、圖書館の本を讀んで貰ひ度いと。彼は自分の癖を勘付かれたので、其後は大いに愼しむやうになつた。或日、巴里から二人の檢査官、ベケエとクルトワと云ふのが、ランスの圖書館視察に來る事になつた。すると、例の男が、私に此度來るベケエと云ふ奴が、仲々の曲者だから用心しろと商賣敵が憎らしいと云ふやうな目付をしながら教へて呉れた。當日になつて、私は二人の檢査官を書庫に案内して歩いてゐる間も、ひたすら警戒を怠らなかつた。然るに不圖氣が付くと何時の間にか、一冊の稀覯書が、心覺え

をして置いた書架から無くなつてゐる。「やられたな」と思つて、私は二人を玄關のホオル迄送つて來た時「實は今、珍本が一冊紛失した。三人のうち、誰かがそれを持つてゐる。先づ私から調べて頂き度い」と私は云つた。私から始めて、次にクルトワを調べ更にペケエを調べようとすると、ペケエは苦笑しながら、ポケットから盜んだ珍本を取出して私に渡したが、彼は別のポケットから更に一冊を取出して、「何故此の本も、ついでに用心しないのだ」と云つて一度に二冊返してくれた。』

○十七世紀の佛蘭西の肖像畫家ダニエル・デュムウチエエにも盜癖があつた。彼は盜む事は好きであつたが、盜まれるのは嫌ひだつたと見えて、彼の書齋の入口には『書籍借用者は惡魔に食はれて了へ』と書いて置いた。彼は巴里ポン・ヌッフの一書肆で、永年探してゐた本を盜んだ事があると自白してゐる。法王インノセント十世が、未だパンフィリオ僧正と呼ばれてゐた頃、バルベリニ僧正と二人で、デュムウチエエを訪問した事があつた。パンフィリオは戯れに、デュムウチエエの秘藏してゐた「トラント宗教會議史」を盜む眞似をした。するとデュムウチエは火のやうに怒つて、パンフィリオを追歸へして了つた。パンフィリオが後に法王になつてから、デュムウチエエを揶揄して、汝の如き不逞の徒は破門して黑燒にすべきであると云つた時、デュムウチエエは直ちに『私の頭は黑燒にするには白すぎる』と答へた。當時彼は七十四才だつた。

○英國の貴族フィッツ・ジエラルドにも盜癖があつた。彼は巴里セエヌ河岸の古本屋で各國語對譯聖書をちよろまかしたのが露見して二年間の禁錮に服さねばならなかつた。斯うした例を探したら幾らもあるだらうが、盜癖で名高い學者にリブリ・カルッチ・デラ・ソンマイヤがある（十九世紀前半）。彼は伊太利の數學者で、後に佛蘭西に歸化した男であるが、佛蘭西の名の知れた圖書館で彼に惱まされぬものは殆どなかつた。殊に巴里の國立圖書館の被害が著しい。彼が盜んだ書物は大抵外國に賣り飛されたが、彼に關する被害は、國立圖書館だけでも、少くも百件を下らぬさうである。

○此の書物泥棒が更に發展すると、愈々殺人となるのであるが、その方面の實例はあまり多くないやうである。然しあることはある。最も著名な例を擧げれば、一八五〇年、バルセロナの本屋ドン・ヴィンセントが、當時世界中に一冊しかないと信ぜられてゐた西班牙の古書（一四八二年版）を同業者のアウグスチン・パトクソットと爭つて遂に相手を殺した事件がある。裁判の時に、たま〱該書は巴里にも一、二冊殘存してゐる事實が發表されて、ヴィンセントは之を知つてひどく殘念がつたが、

業者を殺した事は何とも思はなかつたさうである。裁判の結果、彼は他にも十二人殺してゐた事が明かになつた。若い坊主一名、獨乙の學生一名、西班牙の詩人一名、其他九名の愛書家を殺したのであるが、何れも一度賣つた書物を取戻す爲だつた。賣つては殺し、賣つては殺して、十三人片付けた時に、—數が悪かつた—此度は自分の方が死刑に處せられる事になつたのである。彼は死刑を受ける前に遺言して、自分の藏書を鄭重に取扱つて呉れるやうにと云ふ條件を附けて、バルセロナの圖書館に悉く寄附する事を申し出た。バルセロナの圖書館は盜泉の水を飲んだのである。尤も盜泉ものが幅を利かせてゐる博物館なら、歐羅巴には珍らしくない。最も甚しいのが大英博物館、それからルウヴル……

○此處迄書いて來て、一寸後を振返つて見ると愛書癖にも相當に種類のあるものだと、無くて七癖の感を深くする。その中で、最も物騒なのは、何と云つても、西班牙のドン・ヴィンセントであるが、最も平和的で——家庭の平和は別として——而も極端なのは佛蘭西のブウラアルだらう。彼が最後に書物を買つた時は、チョッキから、上衣から洋袴から、外套まで、小型の奴は悉くポケットに詰め込み、大冊は兩腋に抱えたので、何處の辻馬車の馭者も彼を乘せる事を拒んだ。彼は七階建、七棟の書庫に、未だ空いた場所があるか知ら、などと考へながら、而して玉の汗をかきながら、家に歸つて行つたが、其日の過勞が元で、肋膜炎を起し、遂に再び立たなかつた。彼こそ誠に斯道の殉教者と云つていゝだらう。

○僕は藏書家と云ひ得る程の藏書家でもないし、僕の愛書癖も亦云ふに足らぬけれども、世の藏書家、愛書家を少し輕蔑しながら深く尊敬する點に於ては、敢て人後に落ちぬつもりでゐる。熟ら惟る迄もないが、一八二五年ブウラアルが死んでから百年目「正確に云へば百一年目」に僕が此の雜文を書くやうになつたのも、——少々阿呆陀羅經めくが——やつぱり、一樹の陰、一河の流れで、之を要するに、他生の相對性原理とか何とか云ふのだらう。

原敬と天主教

法學博士　吉野作造

一

本年四月十三日附の東京日日新聞夕刊に、「原白頭宰相が洗禮を受けた教會」と題する興味ある記事が載つて居つた。其要點は、明治初年佛人宣教師エブラル師が新潟に來て會堂を創立したが、まだ一介の書生であつた原敬氏は仙台からわざ〳〵同師を訪ねでその書生となり、遂に同師から右の會堂で洗禮を受けたといふのである。原氏が青年時代天主教の信者であつたといふ話は曾て誰かから聞いた。又菊池悟郎溝口白羊共編の「原敬全傳」(大正十一年刊)の中でも讀んだことがある。原氏は生前あまり自分の受洗に付て語られたことはなかつたやうだが、先年誰やらから、芝公園内の原邸客間には聖母の像が懸けてあるぞと、不審がつて語るのを耳にした記憶もある。旁々原氏と天主教との關係には何等か面白い因緣があるやうに私には疾うから想はれて居た。又田村直臣先生の「我が見たる原首相の面影」の中でも、斯んなことを讀んだことがある。田村先生が明治十八年巴里に遊んだとき、或る佛教僧侶と一緒に代理公使たる原氏に招がれたが、其時主客互に交換した議論に付ての原氏の態度には、暗に耶蘇教に對する同情ある理解を示すものがあつたと云ふ(同書四頁參照)。田村先生は固より原氏と天主教との關係は知らない。知らずしてこの言を爲すのは、原氏の言動のうちに自ら之を感知せしむるものがあつたからであらう。何れにしても之は面白い題目だ。原氏と天主教との關係は手蔓があつたら詮索しておきたいとは、私のかね〳〵考へてゐた所であつた。

その中に私は斯道の學友松崎實君から斯う云ふ耳よりの報道に接した。原氏と一緒に洗禮を受けた舊友の一人が今猶ほ健在で傳道に從事して居られると。其人は誰かといふに細淵重敎といふ老先生で、今は宮城縣大河原町の天主堂に傳教士の職を勤めて居らるるといふ。

宮城縣といへば即ち私の郷里だ、調べるにもわけはない。そこで取り敢へず東北帝大在學の守谷猛雄君を煩して大河原町に細淵師を訪ねて貰つたら、正に其人に相違ないといふ返事が來た。それから之を緣に私も一二度師と書面を往復したが、その中に東京日日の記事が出る。いよ〳〵興味をそゝられて居る所へ、圖らず六月下旬丁度よい機會があつたので、乃ち私自ら大河原に出向いて親しく同師を往訪することにしたのである。それは麗かな土曜日の朝であつた。同師に迎へられて會堂側の教師館に入り、老夫人の懇切なもてなしを受けつゝ、半日膝を交へて細々と原氏當年の面影をきくことを得たのは、いろ〳〵の意味に於て今なほ忘れ難き喜びである。

さて斯の人から直接聞いて見ると、事實はだいぶ新聞の記載とは違ふ。尤も細淵師の記憶にも遠い昔の事とて多少はツきりせぬ所もあるらしい。そこで歸つてから手近にある二三の書物を參照して見た。すると話の筋は段々明瞭となつて來るやうに思はれる。勿論正確な記錄を作るとなれば、もつと詳細な調査を要するは言ふまでもないが、今私にその遑はない。兎も角も折角細淵師から聞いた話だけは、出來る丈け順序を整えて早く書き留めておくの必要がある。是れ玆に本稿を起すに至つた所以である。

二

原敬氏がエプラル師の書生として新潟に往つて居つたのは事實だ。併し同地で同師から洗禮を受けたのではない。洗禮を受けたのは東京で、之を授けたのはマリンといふ宣教師だ。この點を東京日日新聞は誤り傳へて居る。

細淵老師は語る。麴町一番町——丁度半藏門から英國大使館を左に見てお堀端を九段の方に向つての突き當りに、佛人宣教師マリン先生の開いてゐる私塾があつた。傳道師養成の目的で、二十人あまりの書生を寄宿さして居る。そこに自分も居つたのであるが、或年のたしか十一月頃、南部藩の原敬といふ一靑年が這入つて來た。年の頃十八九歲、馬鹿に元氣はいゝが、餘程難澁して居つたと見え、あの寒空に單衣を三枚重ね着して居つた。其時の姿は今でもはツきり思ひうかべることが出來る。非常に議論好きな所に意氣投合して自分は彼と直に無二の親友となつた。そして二三ケ月の後相前後してマリン師から洗禮を受けたのである。細淵師の記憶に依れば、同師の受洗の方が原氏のよりも少し早かつたやうだといふ。

却說この頃の事を「原敬全傳」の方には斯う書いてある。

此の明治五年は、原氏にとつて實に不幸な年で………所

時にして送金の道は絶えた。それ以來の健次郎氏（敬氏の幼名）の生活にはいつも慘澹たる悲風が吹き續けてゐたのであつた。

原氏の苦學時代は、實に其頃から第一頁を開いたのであつて……一日三食、部屋代共二錢五厘、之を一ケ月に積算して僅に七十五錢にしか當らない粗食に甘んじつゝ、異常の艱難と鬪つて……益々窮困に陷つて、今內大臣官舍がある麴町一番町の突當りに佛蘭西人の建てゝゐる天主教の公教會があつた――其處へ信者として入込んで、佛人宣教師の下に使はれることになつた……

然し原氏は、其苦しい學僕の境涯にゐても少しも勉學の念を止めないで、用務の暇には宣教師に就いて佛蘭西語を修習した……

宣教師はエブラルと云ふ人で、これが原氏の怜利にして溫和な性質と其上に又强烈な好學の風があることを愛して、自分が各地へ布教に廻る時には屹度缺かさず少年健次郎氏を伴れて廻つた。

……「原敬全傳」地之卷四三―四六頁

「原敬全傳」は同氏遭難後急いで作られたるものと見え、立派な出來の書物とは申しにくい。殊にその青年時代の記述が概して甚だ漠然として居る。東都遊學に志したのは明治四年といふが、その一兩年後マリン師の私塾に入るまでの狀態は、併し、右の記事でもよく分る。細淵師の談と對照すると頗る面白い。但し同書も亦マリン師とエブラル師とを混同して居る。加之その宣教師に就て佛語を學んだといふのも誤りだ。此事は後にも說くが、マリン師のところでは佛語は敎へなかつたのだ。原氏の佛語學習は實は新潟から始まるのである。この事は原氏とエブラル師との關係のことを述ぶると共に明になる。

原氏がマリン氏の私塾に投じたのは何時頃の事か。「原敬全傳」は之を明記してない。細淵師は月はたしかに十一月だが年の記憶はないと云はれる。私の考では明治七年即ち原氏十九歲の時だと思ふ。斯く斷ずる理由も後に別に之を說かう。

三

筆のついでに茲に少しく細淵師のことを語つておきたい。是れ當時の青年の一面を傳へると共に、併せてまた間接に原氏の俤を髣髴たらしむる一助ともなると思ふからである。

細淵師は原氏よりは三つばかり年上だつたと云ふ。父君は幕臣で、師の生れた頃は浦賀與力であつた。維新になつてから一旦靜岡へ往つたが、間もなく將來立身の方針をこゝに立つべく

決心して、友人二名を誘ひ、横須賀造船所の黌舍に這入つた。一寸ことわつて置くが、黌舍といふのは横須賀造船所附屬技術學校のことである。參考のために横須賀鎭守府の撰にかゝる「横須賀造船史」（明治二十六年刊）中の次の一節を引いておかう。之に依てまた細淵師のこゝに入つたのが明治三年頃だといふことも分る。

（明治三年）。三月二十九日、製鐵所ハ技術傳習生徒ノ假寄宿所ニ充ツルニ横須賀ノ一民家ヲ以テシ、管轄廳ノ允准ヲ經テ、其借料及生徒ノ食料寢具ハ官費ヲ以テ之ヲ支給シ、而シテ新設ノ技術學校ヲ黌舍ト稱シテ、其校則ノ原案ヲ民部省ニ提出セリ。

（黌舍規則大要以下之を略す）

さて這入つて見ると、學生の大多數はみな薩長の子弟だ。徳川方の出身は自分を合せてたつた三人に過ぎぬ。半日は佛語やら數學やらの學科の習得で、他の半日は勞働に從ふのだが、之がなか／＼つらかつたのに、全體の空氣がどうも面白くない。或日のこと、仲間の學生の一人が自分達を見て賊が來た／＼と叫ぶ。泥棒でも這入つたことかと振り歸へると、心外にも自分達を賊呼ばわりして居ることが分つた。之に憤慨して三人はとう／＼連袂退學したとの事である。當時の薩長側對徳川方の關係が偲ばれて、今となつては是亦面白い一揷話である。

横須賀を引き揚げて後一時途方にくれた。之から先きどうしたものだらうかと、三人打ち揃うて一日氷川下に勝海舟を訪うてみた。そんな不平を云つたつて仕樣がない、出入りの床屋で弟子を探してゐるが世話しやうかなどゝ揶揄され、結局三井の金札十圓券二枚宛を貰ひ、當分之で食ひつなぎ靜に勉強の方針を定めよと懇々諭されて歸つた。それから横濱へ行つて見たが思はしいこともない。その中にマリン師の私塾のことを耳にはさんだ。佛語は横須賀で少し習ひ覺えた所から、遂に自分だけ二人の友と分れて此處に身を寄せる氣になつたのだといふ。

細淵師が入塾したとき、マリン師のところには既に二十人餘りの書生が居つた。南部仙台方面の人が多かつた。その以前マリン師が函館に居つた緣故で東北の人が多く集まつたものらしい。仙台邊の人は竹內壽貞といふ人の世話で來たものが多かつた。塾生の氏名は今一々記憶せぬが、ただ敎師格の佐久間鐵園といふ人の偉かつたことを今以て忘れ得ない。南部の人では江刺先生といふが多數塾生の尊敬を博してゐた。原氏のこゝに流れて來たのも、多分之等南部出身の先輩を賴つて來たのであつたかと思はれる。

マリン師の塾は、固より傳道師養成を目的とするものだか

ら、佛蘭西語などは少しも教へなかつた。マリン師自身はたまに不完全な日本語で宗教講話をするだけで、話題はいつも諸々の「致命聖人」(殉教者)の事蹟で持ち切つて居た。之がなかなか大なる感激を書生達に與へたものらしい。之を外にして日常の課業は、天主教に關する支那渡來の無點本の講讀である。之を佐久間、江刺の諸先生が授けられたのだ。どんな本を讀まれたかと訊くと、細淵師は最も熱心に讀まされたものとして「聖教明徵」を擧げ、外に「天主實義」や「三山論學記」を記憶の中から喚び起される。この後二者は德川時代輸入禁制の書として有名なものであることは改めて說くまでもあるまい。

細淵師がこの學校へ這入つたのは、固より傳道師になる爲ではない。官立の學校に這入るのは、癪にも障るし金も掛る。西洋人に附いて居たら將來何等かの便宜にならうと、詰り變つた方面で修養して他日薩長の奴等の鼻をあかさうといふのが目的であつたのだ。だから毎日の課業はお義理に聞くだけで、銘々の部屋に歸ると直に議論の火花を散らしたものだ。その時の話題はどんなものでしたと質したら、政府に對する不平が第一で、次には如何にして德川の治政を恢復すべきやの方策であつたといふ。志は固より天下國家に在り、この方面の議論が熱すると、本當に寢食を忘れたものださうな。中にも原氏と細淵師とは斯うした論客のチャンピオンで、深更ひそかに見廻りに來るマリン師からよく宜い加減に寢ろと叱られたものだと云ふ。

ところが書生も熱心なら先生も熱心なので、二三ヶ月すると生徒達は大に宗教に興味を感ずる樣になつた。原氏も一時はマリン師の致命聖人の講話に感憤して、我もこの道の爲には命を捧げんと誓つたといふ。少くとも彼れの受洗は、斯うした決心の結果に出づるもので、決して不眞面目な一時の出來心に動いたものとは思はれぬ。併しそれでも、原氏には本來有つて生れた性分があり、始めから何處となく覇氣滿々たる所が露出して、靜に傳道の聖職に安んずるやうの柄ではないやうに思はれたと、細淵師は語つて居る。師は曾て原氏と散々議論をした揚句、君は到底疊の上では死ねないネと云つた事もあると、古い追憶に感慨禁じ得ざる面持ちであつた。

原氏がマリン師の塾に居たのは半年あまりに過ぎぬ。此處からマリン師の推擧で新潟のエブラル師の處へ送られたのである。

四

當時マリン師の教友エブラル師は、新潟地方に傳道をはじめた。ところが北陸地方は佛教の盛な處とて、邪教の先生に誰れ

ひとり寄り附くものがない。いろ〳〵苦心しても、身の廻りの世話する者を探しあぐんで大に困つた。窮餘師は遂にマリン師のところへ手紙を出し、君の處には澤山書生が居るが誰れか一人私の手傳に來て呉れるものはないか、來て呉れるなら代りに佛蘭西語を教へてもいゝがと頼んでやつた。マリン師がこの手紙を見せて塾生に相談を持ちかけると、雜役に從ふは即ち洋人の奴隷になることだ、日本人の面目としてこんな馬鹿な招ぎに應ぜられるものかと、誰一人往かうといふ者がない。所が突如原氏は起つて私が參りませうと志願した。貴樣奴隷になるのを恥と思はぬかと、皆で罵倒したが、彼は平然として之に耳傾けず、直に單身新潟に向つたのである。此處に居てはいつまで經つても佛語は覺へられぬ、何と云はれても言葉を覺へた方が得だ、と觀念したところが原氏の見識の非凡なる所以だと、後に至つて大に敬服したのである。斯くして彼は暫く新潟に足を停めてエブラル師の厄介になり、彼に就てまた大に佛語の修得に勉强したのである。

細淵師の記憶に依れば、原氏の新潟滯在は一ヶ年足らずであつたといふ。其頃師は傳道の爲に新潟にも往來したので、原氏には屢々遇ふ機會があつた。斯く時々遇つて聞いた話を綜合するに、エブラル師はもと永く支那に居り、爲に漢籍に相當の造詣ある所から、時の縣令楠本正隆氏より時々話相手に招かれる。原氏も其のお伴をして往く所からやがてまた自然と楠本氏の眼にとまつたものらしい。一日楠本氏は原氏に向ひ、君もいつまで外國人の奴隷をして居るでもあるまい、佛語も出來るといふなら、東京へ出て司法省法學校へでも入つたらどうかと云はれた。之に發憤して彼れは遂にエブラル師を辭して東京へ出たのだ。出るについてエブラル師の多大の厄介になつたことは云ふまでもないが、楠本師とはこの件につき其後どんな關係に在つたかは、殘念ながら聞き洩らしたといつて居られる。

明治九年九月原氏が入學試驗に合格して司法省法學校に入つたこと、やがて間もなく賄征伐のことに坐して退學し報知新聞記者となつたことは、世間周知の事實である。そこで何時頃新潟に行つて何時頃東京に出たかを吟味せねばならぬが、之を判斷する第一の基本となるものは、楠本正隆の新潟縣令在任期間である。彼の着任は明治五年七月二十四日で、八年七月十二日まで在任して居つた。細淵師の記憶を正しとすれば、原氏の新潟滯在は約一年で、夫から上京して司法省法學校に入つたのだから、その始めて新潟に往つたのは、どうしても明治八年の中ばとせなければならぬ。而して新潟で楠本氏に遇つて居るのだから、それは七月十二日より遲いわけはない。それで先づ八年

の晩春初夏の頃と觀てよからう。更に細淵師の言に依れば、原氏のマリン塾に來たのは十一月で約半年の後新潟に往つたといふから、マリン塾入舍を明治七年とすれば丁度辻褄が合ふ。即ち明治七年十一月マリン塾に入り、翌八年春洗禮を受け、四五月の頃新潟に赴き、更に九年夏東京に歸つたと觀てよからうと思ふ。果して然らば「原敬全傳」天の卷にある新潟時代の寫眞の說明に、「明治六年から七年にかけて」とあるのは、誤りだと斷ぜねばならぬ。

猶ほ細淵師は前にも述べた如く新潟の傳道に從事し、現にエブラル師とも事を共にした事があるのだが、同師の觀る所では、原氏は全然エブラル師のボーイで、傳道には從事されなかつたといふ。して見ると彼は洗禮は受けたが傳道の經驗はないわけである。

ついでに司法省法學校のことを一言しておかう。司法省內に始めて法學校を設けたのは、明治五年七月である。時の司法卿は江藤新平で、佛國御雇ジュブスケの建言に基づいたものだ。二十名の生徒を募り明法寮內で敎授したのである。明治七年にはボアソナードが來る。この兩人の敎授を受けて七年の七月全部めでたく卒業した。この時司法卿の地位には代つて大木喬任が据はつてゐた。大木は之れの結果のよかつたのを見て、九年の夏更に百名の募集をやつた。原氏は即ち之に應じたのである。

所で一寸問題になるのは、原氏が新潟で楠本正隆に遇つた頃は丁度司法省法學校なるものは實存してゐないといふ點である。第一期生は前年七月に卒業し、第二期生の募集は翌年になつてきまつたのである。そこで第二期募集の噂は實は前年既に薄々分つてゐたので、之を識つて楠本氏が原氏に應募をすゝめたと觀るべきか、又は今はないが去年卒業生を出した司法省法學校のやうなものがあつたら、君などは佛蘭西語が出來るのだから應募したらよからうと楠本氏の忠告されたのを、深く印象にとゞめ、翌年圖らず百名の公募を見て急に上京の決心をしたものと觀るべきか、そこに多少の疑があるのである。併し之はいづれになつても大した問題ではない。只司法省法學校入學の素地が新潟に於て作られたことを知れば足りる。楠本氏の一言が原氏の將來の運命に大關係のあつたことは認めねばならぬが、後日あれ程情誼に厚い原氏があまり楠本氏のことを口にされなかつたことを思へば、夫れ以上の深い關係には入られなかつたのかも知れない。

五

餘談だが、エブラル師は多能多才の人で、一時佛國大使館の

通譯官を勤めたこともあり、條約改正の頃には陰に陽に日本の爲に大に盡したといふ。日本に石版印刷をひろめたに付ても大きな功勞があり、之に關しては今泉雄作翁などが大變師の世話になつた筈だと語つて居られた。今泉翁にきいたら、また別の面白い話もあらうかと思ふ。

マリン師の私塾は永く續かなかつた。師も亦間もなく本國に還つた。その後へやがてラテン學校といふのが建つた。漫然と生徒を各方面から集めたのでは、傳道界に踏み留らぬ。然らざるも、親戚故舊の反對などがあつて傳道師養成の目的は容易に達せられぬ、といふので、今度は長崎から信者の子弟のみを八十人ばかり連れて來た。三人の宣教師が專らその教育に當つた。今御殿場の復生病院を經營して居られるドルワール・ドウレゼイ師もその一人であつた。不幸にしてこの學校も間もなく閉鎖した。そしてその生徒の中十人ばかりを印度彼南の神學校に送つて見たが、之もいろ／＼の事に不平を起して程なく歸つて來たと聞いて居る。

其時彼南へ往つた一人に、後で何が不平であつたかと聞いたら、二つの理由を擧げた。その學校には各地方から澤山の書生が來て居たが、中に飯を手づかみに喰ふ奴がある、斯んな禮儀を辨へぬ禽獸に等しき者と伍して教育を受くることは堪へられぬといふ子供らしい不平が一つ。も一つは一番數の多い支那人が毎日二食だから、日本人も二食にして呉れぬかと云はれたのを直に虐待と誤解したからだと。當時の武士氣質の脱けぬ青年としては、さもあつたらうと肯かれる。

以上エブラル師のこと、マリン師のこと、又マリン私塾やラテン學校等のことは、多分天主教會方面にも記錄があることだらう。いづれその中その方の記錄とも對照して、正確なる調査を遂げたいと考へて居る。

猶松崎實君校訂「鮮血遺書」の七—九頁には、ヴヰリヨン師と原氏との事が記述されて居るが、之に就いて細淵師は何等知る所がないと云はれて居た。わがミッシオン・エトランゼールは、長崎・大阪・東京・函館と四管區を分ち、各々其の管轄を侵さぬことにしてあり、而してヴィリヨン師は大坂區の人だから、師と原氏との交渉は、宗教に外にして其後に起つたものであらうと云はれて居た。之も別の機會によく調べて置きたいと思ふ。

最中集『災後句錄』

小澤碧童

大正十二年九月朔日、辛うじて震災の難を遁る

身に沁みていのちがあるといふばかり

予の生地なる魚河岸はすでに昨日のうち焦土に化したると覺しく、二日にその慘狀をまのあたりに見て、全く呆然自失す

ときに土地の者らしきが二三人、腰をかがめて居たるを何ぞと立ち寄り見れば

燒け土やほり出す海老も秋暑し

葛飾の平井の里に避難したる妻の里方を見舞ふて一泊

秋風や都から來て蛙釣り

藻の花や米汁流す里の溝

稻の香や泊りときめてしづごころ

病臥の折柄、成瀨日吉氏訪はる、たまもののさはなる小菊うれしく、卽座に山妻をして、水牛の角に挿し、枕上の柱に掲げしめ、氏との閑談夜に及ぶ

白菊に戸の隙間から夜明かな

當夜自警にあたる

犬の聲喧嘩として後の月

酒の燗するものにことをかき、日夕茶瓶にて用足しければ

德利に茶澁のついて行秋や

述懷

秋老いぬわれから酒に飽き乍ら

日本橋通り町にて、久しく打絶えてゐし中野三允氏に行き逢ひて

よろこぶや災後相逢ふ秋の風

今朝冬や格子から來る朝日影

初冬や燒け跡の三日四日月

小房の隣地は正洞院なり

霜月やあたりも燒けて御堂跡

この冬や燒けどまりなる庵の月

初霜や燒けどまりなる長屋住み

朝霜や小犬捨てある古席

門外一歩を出づれば

バラックの世帶火鉢や昨日今日

家根の漏り素人直す小春かな

指の股の垢をより出す小春かな

根岸の母許を訪へば

霜の來てびなんかつらもみのりかな

上野

落葉して塔すれずれに日の落つる

災後復興

冬乍ら夜も釿の音すなり

またしても冬暖う餘震かな

十二月廿三日至日晴

災厄當時の謝禮に、母の供して川崎在の緣邊兩三家を訪ふ

帆日影の八ツ時になる冬至かな
道に逢ふて久潤を叙す冬至かな
西吹いて朝富士臨む冬至かな
山見えて冬至の空や片曇り
慈姑掘手を泥にして冬至かな
麥伸びて冬至の日脚見られけり
肥汲んで夫婦のもどる冬至かな
山樝子の熟して庭の冬至かな
里子置く在所を訪へば冬至かな
山茶花の花の末なる冬至かな
繰り言や、押しつまりたる老の年
夜は夜で町に出て見る師走かな
庵に居れば辭の宵寢や年の暮
行年や老一徹に店の番

世を捨てかねて尚日常の徒勞を思ひ佗ぶ

遲くなる戾りは風の師走かな

根岸の御隱殿はさすが閑靜なり

行年や老が庭掃く朝機嫌

星霜十年親しみ馴れしこの入谷小房も近く根つぎになると聞けば

行年や酒飲みこぼす古疊

母に代りて

年惜む針の糸目も細き灯に

年惜む灯盞のありし昔かな

予が後厄の年もはや旬日のうちに果てなんとす

老初めてひとり酌みけり年忘

歲旦を言ひに來た子に起さるる

憐山妻

元日やとりつくろひし化粧顏

舊臘一硯を得て心醉へる如し

歲旦のわれは硯のあるしかな

永井荷風氏は、庭の山梔子を摘み手刷にせし罫紙を用

ゐられしとかや
書き初めむくちなしいろの野の紙

一夕鐵筆家村田蔚堂氏を迎へて
篆文にあそぶ二人や筆初め

身内の若者二人まで俳句に指を染め始めければ
老の春酒の相手は望めねど
寶引や外から見える酒の座に

年頃になる二人の娘を持つ身乍ら世の稼ぎにもうときを思ひ佗びて
羽子板は十年同じわが娘
わが庵や娘がすなる松納め
振袖の昔觸れけむ松納め
醉買はむ夕影のこる松の内

酒興
彼の君に七草爪を見られけり

身内の濉難さきなる荏原の大井の里は町ながら、なほ鄙びたるさまのありて、いと面白し
正月やここら井涸れの晴れつゞき

餅網や老い住む門によばれけり

二十年の心勞相憐む

女房のかことも古りて寢正月

正月や顔を見に來る里の親

片照りの廿日も過ぎて睦月かな

長屋住みの心安さは

朝戸出や聲かけて行く寒の入り

小寒や油いための蓮の味

命じられたるまま、この罪作る少年にも心鬼るる

捨てんとす犬の動かぬ寒さかな

訪病者

冬の日や靜さ保つ枕元

獨坐苦吟

寒く居れば茜こぼるる夕日かな

寒紅や袂から出す老の土産

北風や干竿光る朝日影

自嘲

埋火や捜しにかかる忘れん坊

冬籠飯櫃一つ磨かれて

冬の夜の加持者の咳や壁隣り

肉を煮て鍋よごしたる冬籠

近く此入谷の古巣より離るると思へはわりなくつらし

溥けれど寢る間ぞやすき布團かな

一遊亭の祖母君、この一月四日信州洗馬の隱宅にて
安樂往生遂けられしと聞きて悼む

やすらかに逝きしと知れど寒さかな

さきだつや佛の別れま一ト月

垣一重の外面は正洞院のやけあとなり

梵妻の聲高響く寒の內

一月廿一日入谷より根岸に移居

身を寄せて母の許なる冬籠

留守居して夕影になる冬日かな

埋火やありし故人の繼の文

家根屋來て瓦の音も寒の內

埋火や口癖諷ふ松盡し

埋火や戸閉させし後の風の音

一月廿六日初雪

晴るゝ日や高樹の雪のずり落つる

小町糸卷く手傳ひや冬籠

家捨てむ願ひも古りて冬籠

埋火や瓦當の拓も掛け古りて

二月三日降雪

飛石につもり初めしが朝の雪

垣越しに低き日の出や寒の内

埋火や木影ののぼる膝がしら

成瀨氏同行上野散策

殘雪や路は乾いて棚の内

淺草觀世音參詣、二月四日

寒行や仲店かけて納めの夜

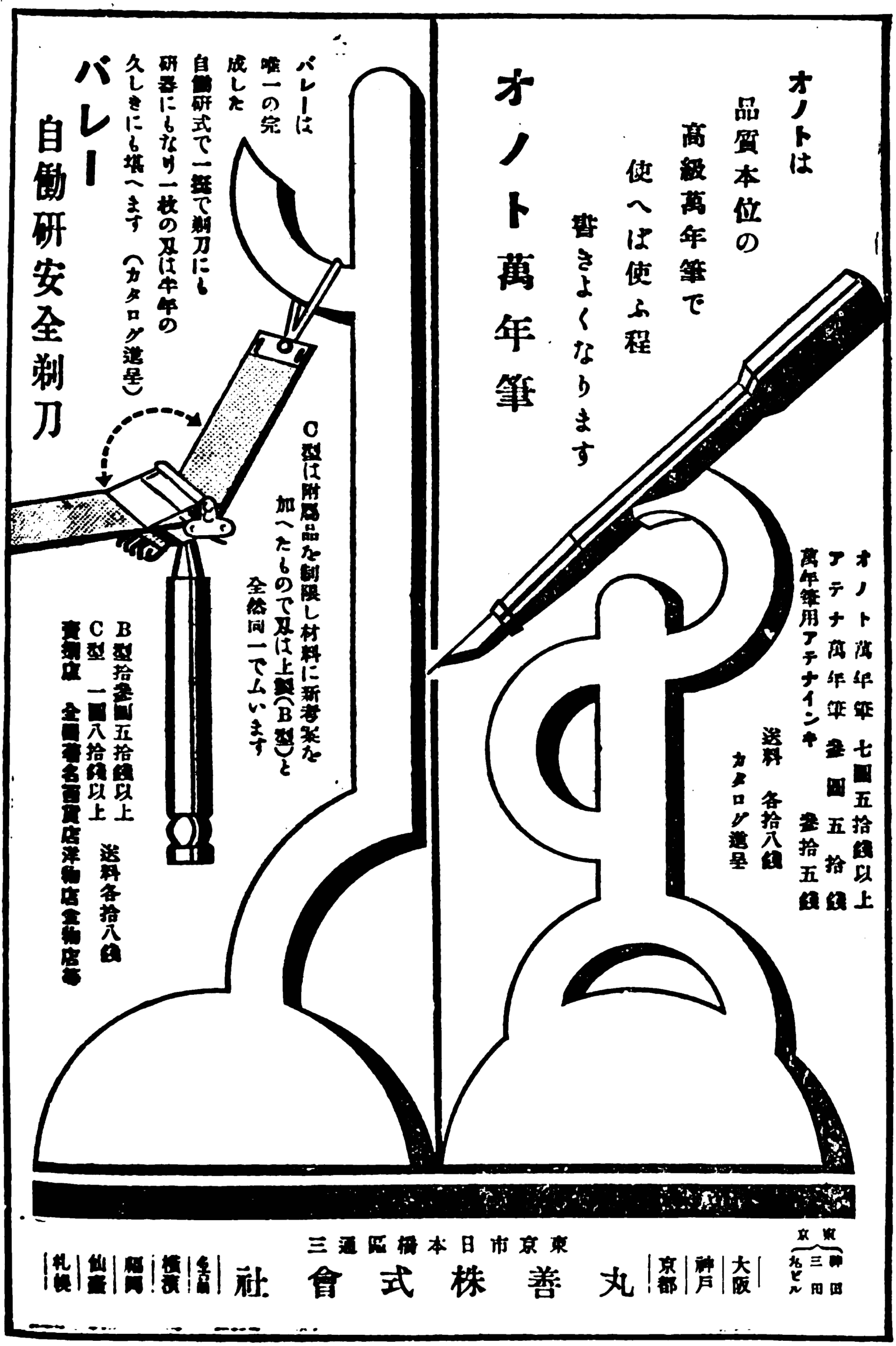
寒行やあとからついて女の子

闇深し豆拾ひ居る堂の側

春待つや紅染める靑木の實

立つ春や寢覺聞ゆる明けの鐘

大正甲子歲紀元節日於根岸眠[illegible]


オノトは
品質本位の
高級萬年筆で
使へば使ふ程
書きよくなります
オノト萬年筆
オノト萬年筆 七圓五拾錢以上
アテナ萬年筆 參圓五拾錢
萬年筆用アテナインキ 參拾五錢
送料 各拾八錢
カタログ進呈
バレーは
唯一の完
成した
自働研式で一挺で剃刀にも
研器にもなり一枚の刃は半年の
久しきにも堪へます （カタログ進呈）
バレー
自働研安全剃刀
C型は附屬品を制限し材料に新考案を
加へたもので刃は上製(B型)と
全然同一でムいます
B型 拾參圓五拾錢以上
C型 一圓八拾錢以上
送料各拾八錢
賣捌店 全國著名百貨店洋物店金物店等
東京市日本橋區通三
丸善株式會社
東京 神田 三田 丸ビル
大阪
神戸
京都
名古屋
横濱
福岡
仙臺
札幌

地震は豫知し得べきか

地球内部の構造と地震學輓近の進步

國富信一

緒言

私が曾て本誌へ地震に關する色々な學說を紹介したのは今から三年前で、其の間には我が地震學界に取つて晴天の霹靂たる關東の大震災があり其れと同時に我が國地震學界の開祖であり且又大恩人であつた大森房吉博士が逝去されて仕舞つた。全く大森博士は我が國の地震學を創設された方で、先生に依つて開發された統計及觀測方面の地震學は長岡、日下部兩先生の物理學的地震研究と共に、我國の地震學を開發した處多大であつた。

然し不幸にも關東大震と期を同じくして先生の死は報ぜられた。此二つの大なる出來事は全く我國の地震學界に大なる波紋を生ぜしむるに充分であつた。即ち關東大震以來頻々として起る大小數多の地震は我々此事業に携るものにとつては極めて貴重なる研究資料となつたのである。然も一方に於て地震觀測の機關は無線電信の急速なる進步に伴つて時刻の正確度を增進せしむると同時に全國各地に於る觀測設備も岡田中央氣象臺長の御盡力に依て益々完備の域に達し來つた事は玆に地震學の進步に一轉機を與へんとしつゝある機運を示すに至つたのである。

時恰も歐洲戰亂後に際して獨逸に於ける地震學者は從來彼等が續け來つた物理的研究に急激なる進步を與へて其の新地震學は關東大震後に起る頻々たる地震の材料に食傷せんとしつゝあつた我が地震學界に多大なる刺激を與へたのである。

此の如き地震の新研究法は少なくとも私の如き之れから地震の研究を企てんとする若輩にとつては旱天に雨雲を望んだ如きものである。

全く私共中央氣象臺にあつて每月全國に起る數百を下らぬ多

數の地震の調査に從事して居るものにとつて此の物理的地震研究方法は如何に肝要なもの、如何に我々の期待して居たものであるかは全く想像の外である。只此の方法が我が國に於てよりも獨逸に於て先づ開發された事は些か遺憾の點がないでは無いが、然し此の方法を更に進歩せしめ、且地震學最終の目的たる地震豫知の問題を解決せしめる事は我々地震國たる國民の義務であらねばならない。

又今後適當なる方法を以て着實なる觀測と研究を續けたならば地震豫知も必ずや他日成就し得る事と確信する次第である。

斯くの如く關東大震は種々な意味に於て我國の地震學界に大波紋を投じた結果として地震學は全く面目を一新して益々興味深くなつて來た事は事實である、從つて私が三年前に本誌に紹介した地震に關する記事も全く今では舊いものとなつて仕舞つた。そこで玆に再び筆を取つて所謂新らしい地震學を紹介して見やうと思ふ次第である。

勿論此の間にあつて我國地震學界の進歩も亦目覺しいものがあつた。さうして幾多少壯地震學者の努力に依つて多くの有益なる研究が遂げられて居る。然し私は之等我國にて爲された研究は暫く置いて、一般地震學の進歩を概說する事としやう。

尙地震學が最近に貢獻した事は地球內部の構造に關するものであつて、地震の原因を知らうと思ふものは先づ此の點に[illegible]せねばならない。故に私も地球內部の構造が何うなつて居るかを論じつゝ最近の地震學の進歩を紹介しやうと思ふ。

地球內部の構造に關する舊說

地球に關する智識は可なり以前から知られて居た事である。即ちピタゴラスが地球の形を球體であると論じて以來種々なる研究が其の形などを決定する爲めに企てられたが、地球內部に立入つて其の構造を論じたのは殆んど無いと云ふも差支なく、稀にあつたとしても其等は何れも科學的の基礎に立脚したものでは無かつた。

所で始めて地球の內部が灼熱した流體から成つて居る事を唱へたのはデカルト及ライプニッツ兩氏で、其の後にラプラスは之れを星雲說から說明しやうと企てた。ラプラスの星雲說は太陽系が現時宇宙間に存在してる星雲から發達して出來たものであると云ふ假說である。

此の說の根本となつて居る處は地球上で見受けられる次の如き四つの現像である。

一、鑛山の坑道を掘つてゆく際に見出される如く、地殼は三十米每に攝氏で溫度が一度宛上昇してゆく。之れから推せば地

球の半徑は六千三百七十粁であるから表面の溫度を零度として中心近くでは二十萬度と云ふ高溫に達する譯である。然し勿論三十米毎に一度と云ふ溫度傾度が中心點まで續いて居るとは考へられないが兎に角可なりの高溫にある事は疑ふ餘地も無い事で、此の高溫の下にあつては地球を構成して居る凡ての物質は溶解して液狀となつて居るであらう。

二、地球上には至る所に溫泉が湧出して居る。之等溫泉を見ても地球內部は可なり高溫にある可き筈である。

三、地球上所々に存在する火山からは噴火に際して溶岩を噴出せしめる。又現にハワイのキラウエア火山では常時溶岩の池がある。斯かる現像から見ても地球內部では岩石が溶融狀態にある事が肯定出來やう。

四、火山噴火の際の溶岩を分析して見ると其の組成は世界各地の火山から噴出したものが凡て同じである事から推定して、溶岩は地球內部で高溫の爲めに溶融した岩石が地上へ火山作用の爲め噴出したものであると云ふのである。

以上四種の現象を基として考へると何うしても地球內部では岩石が溶融狀態にあらねばならぬと云ふのが地球內部流體說の有力な證明である。そうして流體說を保持する人々は地球內部の溫度を二萬度乃至十萬度の程度であつて壓力は三百萬氣壓位であると推定して居る。

所が一方から考へると凡て物質には臨界溫度と云ふものが存在して、其の溫度を越えると壓力の爲めに物質は液體から瓦斯體に變化するものである。依つて此の現象に立脚してツェプリッツは地球內部が瓦斯體であるとの假說を唱へて居る。

斯くて地球內部の構造に關する研究は次第に發達して來て遂に溶融狀態にある地球內部を包む固體の岩石層の厚みを決定する迄に至つたのである。然し其れとても確實な値を得る事は出來なかつた爲めに多くの學者が測定した値は極めて區々たるものである。

例へば或る人は之れを十五粁乃至四十粁と云ひ又或る人は百二十粁乃至百五十粁と云つた如きである。此の時代に於ては地質學者が地殼構造の研究の第一線に立つて努力をしたが其の中でもデナ、ハイム、ジュウス等の諸氏の努力は著しいものがあつた。之等の人々の說に依れば地球は時と共に冷却、收縮を續け來つたもので、地殼は其の收縮の結果として表面に襞を生じ其れが今日の山脈を形成したのであると云ふのである。

所が玆に極めて重要な說がプラット氏に依つて唱へられて來た。測定の結果に依ると山の上と海底とでは重力の大さが異つて居る。即ち山上で測定した重力の値は海上で測定したもの、

りも小であつた。此の事實から推してプラット氏は山を構成して居る物質が海底を構成して居る物質よりも密度が小でなければならないと云つたのである。換言すれば山は輕い物質から成つて居て海は比較的重い物質から出來て居ると云ふ事になる。

元來山と海との高さの差は地球の半徑に比しては千分の一にも滿たぬ僅少なものではあるが、海底と山嶺との容積差に依つて、地下數粁のある水平面上に及ぼす壓力の差は可なり大でなければならない。然し海と山との容積の差に依つて生ずる壓力の差は地下或る深さ迄に止められて、其れより内部では等壓面を畫いて見れば其れは地球の球體に同心な球面とならねばならない。即ち或る深さ迄は海底となつて居る部分の物質は重く、山の下となつて居る部分を作る地殼の一部は輕い物質から出來て居て、此の兩者の密度の差が山嶺と海底との容積の差を補つて、或る深さに達すれば最早兩者に依る壓力の差は消失して仕舞ふ事となつて居る。

從つて斯かる面迄行けば壓力の差は無く、地殼は安定に釣合ふ事となる。此の考へが所謂アイソスタシー（地殼平衡論）である。故にアイソスタシーの考へに依れば極めて複雜な形を爲して居る地殼も山や海の如き凸凹のあるがまゝに平衡狀態にあるので、若し此の如き山を崩して海を埋めたとすれば、其れだけ海底下の壓力は増し、元、山の部分であつた所では壓力が減少する。從つて斯くして生じた壓力の差は地殼の其の部分に不均衡を生じ、終には釣合が破れて平衡狀態に移らうとする結果として地變が起る一因ともなるのである。實際の場合に山を削つて海底へ沈澱せしむる作事は風化作用によつて行はれる。

斯かるアイソスタシーの考へは極めて重要なものであるが、此の説の證明ともなる可き現象が其の後種々見出されて居る。其の一例としては地球内部に於ける等溫面の高低である。觀測の結果に依ると一般に山の内部は海底の部分よりも溫度は高くなつて居る事を擧げる事が出來る。例へばシムプソンの隧道を穿つた際に測定した所に依ると其の内部の溫度は攝氏の五十度を越えて居たのに對して、海底では零度近くであつた。

此の現象から推定すれば陸地を形成して居る岩石は尙溫度が高く膨脹せる狀態にあるが之れに反して海底を形成せる岩石は可なりの低溫迄も同化して居ると考へる事が出來る。然し斯かる山の下と海底との溫度差も可なり深い所迄進めば最早差が無くなつて來る結果として、等壓面も地表面に平行となつて仕舞ひ其處で地殼の平衡が成立する事となるのである。換言すれば地球内部の等溫面は地表近くでは、地形に從つて高低があるが、或る深さに到達すれば此の高低は失はれて等溫面は地球の

球體に同心な球面となつて仕舞ふ。斯かる所が地殼平衡の完成した所で、其の深さは略百二十粁であると云ふ事である。

アイソスタシーの考へは地球內部の構造の上に重大な意味を齎らした者であるが又一方に於て次の如き疑點が生じて來た。其れは地球內部が流體であるとすれば其れを包む地殼の皮層は地球の半徑に比して比較的小なるものであつて、例へば卵の殼の如きもので無ければならない。此如き固化した地殼表皮の下にある半流體の部分はマグマと稱せられるが、實際地球が卵の如き構造を爲せるものであれば、太陽や月の引力作用に依つて地球全體が潮汐作用をして其の形狀が絕えず歪を受けて居なければならなくなる。此の點に留意をして地球內部の流體說に先づ疑點を挿んだのは物理學者であつた。中にもロード・ケルビンは理論上から斯かる事のあり得べからざる事を論じて地球內部は固體でなければならぬと云ふ說を提出したのである。

其の後此の問題は多くの物理學者に依つて討議されたが中にもホレース・ダーウキン氏は若し地球全體が太陽や月の引力に依つて潮汐作用をするとせば、其の形が地球の回轉に伴つて變る結果として、地面に垂直な鉛直線の方向が又これに伴つて變らねばならぬと云ふ考へから、水平振子を用ひて鉛直線の方向の變化を測定して見たのである。不幸にして同氏の結果はあまり好結果を得るに至らなかつたが、其後同じ方法を用ひてレブール、パシュウキッチ、エーレルト、コルタッシー、ヘッカー、オルドッフ等の諸氏が硏究した所に依れば地球は全體として決して潮汐作用をするものでなく、其の全體としての堅さは略鐵と同程度のものであると云ふ結論に到達したのである。

尙最近に於ても米國のマイケルソン氏は極めて精密な光の干涉を利用した所謂マイケルソンの水準器を用ひて、地球の潮汐作用から其の剛性を定めて見た所矢張り前の諸氏と同樣地球は全體として極めて堅いものでなければならぬと云ふ結果に到達したのである。

然らば地球が全體として固體である事が果して可能であるかと云ふ事が先づ問題となるが、之れは、物質の溶解點が壓力の增加に從つて上昇すると云ふ事實から見れば可能であると論斷する事が出來る。卽ち物質は壓力を加へれば常壓の下で旣に溶解すべき溫度に達しても尙固體のまゝで殘留する。故に地球內部の如く、其れを包む厚い岩石層の與へる高壓力の下にあつては溶解點が著しく高められて居る結果として、內部は可なりの高溫にありながら猶固體のまゝで殘留して居ると考へるのは至當な事である。

扨地球內部が如何なる狀態にあるかと云ふ事に就ては以上述

べた如く液體であると云ふ說、瓦斯體であると云ふ說及び固體であると云ふ說の三通りがある。然も之等三論共に何れも相當な論據を以て對立して居るのであるから其の何れが眞であるかを判定する事は決して容易な事ではない。

加ふるに地球の內部は其れが極めて大である爲めに到底我々の親知する事を得ぬものである。然し玆に此の問題を解決すべき唯一の手段が殘されて居る事を忘れてはならないのである。それは地球の內部を通過して進む、地震に依つて生じた彈性波動を利用する事である。地震に依つて生ずる波即ち所謂地震波は大なる地震にあつては（例へば大正十二年九月一日の關東大震の如き）優に地球の內部を通過して地球の反對側へ迄も進むものである。從つて之れを利用する事は恰も人體の內臟諸機關を知る爲めにレンドゲン光線を用ふるが如くに、地球の內部を物理的に洞察する手段を與ふるものである。

故に今世紀に入つて多くの學者は主として此の方面の研究に全力を傾倒した結果として玆に地球內部の構造に關して實に驚く可き幾多の發見を完成する事を得たのである。故に玆に筆を改めて其の一班を記さうと思ふ。

地震波動の傳播

地震は地殼內部に生ずる斷層とか陷落とかの現象によつて生ずる波動が傳播することに依つて起るものである。元來地殼は一種の彈性體と見做し得るものであるから其の內部に斷層、陷落等の激動によつて生じた波動は通常の彈性體內に生ずる樣な縱波及橫波である。縱波は一般に熟知せられる樣に音の波の如き疎密波であつて、彈性體の一部分が歪んだ際に、其の方向に向つて進む彈性波の一種であり、橫波は水面に投じた石に依つて生ずる水波の如くに進行の方向に直角な、彈性體の一部分の歪に依つて生ずる他種の彈性波である。

では彈性體と稱する者は一體如何なる物體を指して云ふのであるかと云ふに、若し或る物體の容積とか形を無理に變化させ樣とする場合に相當な力を加へなければならぬ樣な物體であれば其れは彈性體である。從つて又彈性體を無理に引延すとか押し曲げるとかして其の形や容積を變へて置いて、其の狀態のまま何時までも置きたいならば引續いて力を加へて居なければならない。若し此の時加へて居る力を取除けば其の彈性體は元の有樣に復歸して仕舞ふものである。

然し一般には形を變へ樣とする場合の彈性と、容積を變へ樣とする場合の彈性とは物體に依つて違ふものである。例へば固體は形を變へやうとしても亦容積を變へ樣としても大きな抵抗

を持つて居るから固體は形の上にも容積の上にも立派な彈性體と稱する事が出來る。然し水の樣な液體は形を變へる場合には抵抗を受ける事はないが容積を變へ樣とすると反對に大なる抵抗を感じる。其れ故に液體は形の上の彈性は持つて居ないが容積の上では立派な彈性體であると云ふ事が出來る。所が瓦斯體となると形を變へる場合も容積を變へる場合も誠に容易であつて少しの抵抗も感じる事が無い。從つて瓦斯體は形の上でも容積の上でも全く彈性が無いと云ふ事になる。

扨物質が何の程度な彈性を持つて居るかを比較するには彈性率と云ふものを考へて其れの大小を以てする。此の彈性率には數種のものがあるが、通常はヤングの彈性率とポアソンの比と云ふ二種を用ひて居る。

今彈性體を壓しつければ縮み、引張れば延びるものであるが、此の場合の長さの變化した割合、つまり延び又は縮んだだけの長さを元の長さで割つたもので、之れだけの變化を起さしめた力を割つたものをヤングの彈性率と稱する。然し一方から考へると太い丸棒の樣な彈性體を引延ばせば、其れは延びると同時に多少細くなつて太さが變つて來る。今物體を延ばした時其れが延びた割合と太さが縮んだ割合との比をポアソンの比と名付けて居る。

斯う云ふ二種類の彈性率を考へると物體の彈性の程度を表はす事が出來る。又ヤングの彈性率もポアソンの比も共に物質に依つて其の値が變つて居る。然し地球の內部を構成して居る物質ではポアソンの比は表面から何の深さにあるものも殆んど一定で其の値は約〇・二五位なものである。只ヤングの彈性率は岩石の種類などに依つて大に變つて來る。

扨彈性體の中で前に述べた樣な縱波や橫波の樣な彈性波が起ると其れは或る速さで進んで行く。此の彈性波の速度は其れが傳つて居る物體の彈性に依つて違つて來る。即ち剛い物質の內程彈性波動は早く傳はるものである。例へば縱波にして見れば空氣中を其れが傳はる場合、つまり音の傳播速度は一秒間三百三十米であるが地球の內部を傳はる場合には一秒間六千米から一萬三千米位の大きな速度を有するものである。然し橫波となると餘程速度は小さくて一秒間に約四千米から八千米位迄である。

我國では長岡、日下部兩博士が內地で取れる種々な岩石に就て其の彈性率や密度を測定されたが此の材料は非常に貴重なものとして外國でも多大な注意を拂つて居る。左に掲げるのは其の多くの研究材料の中から例として二三の岩石に關する値を拔萃したものである。

岩石の名	產地	彈性率(單位は十の十乘)	密度	縱波の速度
綠泥片岩	秩父	一四六・八	三・〇	七・〇粁/秒
花崗岩	御影	一〇一・〇	二・五〇	三・八
雲母片岩	茨城	六二・一	二・五四	四・九
粘板岩	群馬	一〇六・〇	二・六四	六・三
石灰岩	秩父	三九・〇	二・六四	三・八
大理石	久慈	三三・八	二・六八	三・六
砂岩	秩父	三五・三	二・四七	三・八
凝灰岩	伊豆	一三・八	一・九〇	二・七
安山岩	群馬	四三・四	二・六三	四・一
蛇紋岩	秩父	七四・七	二・六二	五・二

斯樣にして密度は種々な岩石で大した差はないが彈性率には非常な大きな差が認められる。從つて縱波の速度にも可なり大きな差が現はれてゐる。勿論縱波や橫波の速度は勿論物質の密度にも關係するが地球內部では密度の變化は比較的小で、彈性の變化とは全く比較にならぬ程度のものである。從つて地震に際して地球の內部を彈性波が傳播する場合の速度の變化は主として、彈性の變化に依つて定められたものである。

扨光の波が傳はる途中で物理的性質の異なる媒體中へ侵入する際には屈折と云ふ現象をする上に其の表面では反射が起る。彈性波の場合にも全く同樣で速度が異なる他の媒體へ入射する際には反射と屈折の現象が現はれる。

若し地球の內部が全く同じ物質から出來て居る樣な等質なものであつたとすれば、其の中を傳はつてゆく彈性波動は直進すべき筈である。所が實際は地球の內部の構造が極めて複雜であるために決して直進をする事が無い。よし又地質上から生じて居る樣な細かい錯雜性を除いても、地球は表面から內部へゆくに從つて密度と共に彈性が著しく增してゆくから、彈性波動傳播の速度も內部にゆくに從つて增してゆく譯である。即ち極めて簡單に考へても地球內部を地震に際して縱波や橫波が傳はる場合には直線的徑路を傳はらずに弓狀の徑路を取つて進み、然も此の弓狀徑路は地表に向つて凹形をなす事が、其の彈性の變化から容易に決定され得るのである。

我々は尙進んで數學の力を借りて此の彈性波動の弓狀の徑路を決定する事が出來ると同時に地上の各所で觀測した地震波の到着時刻から推して地球內部の色々な深さに於ける縱波や橫波の速度の値を求める事が出來るのである。斯くして求めた色々な深さに於ける彈性波の速度は、又其の深さに於ける地層の彈性的性質を定める材料となるもので之れに依つて地球內部の構造を詳細に決定する事が出來るのである。

地震學上から求めた地球內部の構造

獨逸に於ける地震學界の權威者たるヴィーヘルト教授一派の地震學者は地震に際して地球內部を傳播する彈性波たる縱波、橫波の速度が中心に向ふに從つて次第に增加すると同時に、所所に於て全く不連續的な急激な增減を示す個所のある事を指摘して居る。

先づ地表から次第に內部にゆくに從つて彈性波が增して行くのは地下六十粁迄の事で六十粁に達すれば其處では急激な變化が起つて居る。地下六十粁迄の層中で縱波や橫波の速度が變化する事は既に多くの學者に依つて確定された事實であるが其の最も確らしい値を揭げて見れば次の如くである。

地表近くにて地震波の速度の變化を示す表

地表からの深さ	縱波の速度	橫波の速度
〇 粁	五・五五粁/秒	三・二粁/秒
二〇粁	五・六三同	三・二五同
四〇粁	五・七二同	三・三三同
五七粁迄	五・八 同	三・四 同
五七粁以下	八・〇 同	四・四 同

即ち深さ五十七粁迄は縱波も橫波も共に其の速度が極めて徐徐に增加するが然し五十七粁を越えると此の速度は全く突然急激な增加をして縱波に就て見れば其の速度が每秒五・八粁から八粁迄に增加するし橫波では三・四粁から四・四粁迄に增加する。斯樣に突然地震波の速度が變化する層即ち地球內部で彈性的不連續を示す層は未だ此の外にも二三見出されて居る。

今ヴィーヘルト教授一派の人々の研究に依つて地震內部に存在すると考へられた不連續層の深さと其處に於ける地震波動の速度とを最も正確な研究結果に從つて揭げて見ると次の如くである。但し此の中で最も著しい不連續を示す個所は前記五十七粁附近に存在するものと、次は二千九百粁の深所に存在するものの二個所で他は別に際立つたものでは無い。此の最后の不連續層は地球の心核へ入る境界で、之れから內部が地球の心核である。

地球內部に於ける地震波の速度

地表からの深さ	縱波速度	橫波速度
〇 粁(地表)	五・六粁/秒	三・二
五七粁以上	五・八	三・四
五七粁以下	八・〇	四・四
一二〇〇粁	一二・〇	六・八
一七〇〇粁	一二・八	七・三
二四五〇粁	一三・三	七・五
二九〇〇粁以上	一三・〇	七・三
二九〇〇粁以下	八・五	五・〇(?)
六三七一粁(中心)	一一・〇	六・三(?)

即ち二千九百粁の深さから中心迄は縱波及橫波の速度は徐々

に增してゆく事から考へても、此の內部は一樣な物質から形成されて居るらしく、之れを地球の心核と考へるのが適切な樣である。

又六十粁附近に存在する不連續層は其の上下でかなり銳い彈性の差を示して居るが、之れから地表迄は地殼の皮層で地震や火山の現象などは凡て此の皮層內に起る現象であると考へられて居る。之れから千二百粁迄は所謂マグマの層で、之れ迄をバリスフェアと名付けて居る。更に千二百粁から二千九百粁迄は中間層であつて其れから內部が心核である。

扨彈性波の中で縱波は固體中でも液體中でも亦瓦斯體中でも通過する事を得るものであるが、橫波は固體中のみしか通過する事が出來ない。只液體中では其の表面に限つて表面波と稱する一種の橫波が存在し得るのみである。斯樣な事實は地球の心核が固體であるか又液體であるかを知る唯一の手掛となるものである。即ち地球の心核が若し固體であるならば大地震例へば大正十二年の關東大震の如きに際して震源から出てゆく縱波、橫波の中には共に地球の心核を通過して對稱地點たる南米の方へ現はれる波も存在する筈である。既に縱波に於ては斯ゝる波が確かに存在する事は其の經路と傳播に要した時間即ち走時から判定するを得たのであるが橫波の場合には未だ判然と決定は出來ないが矢張り心核を通過して來るらしいと云はれて居る。

此の證明は地球の內部が固體であるか、液體であるかを定める重要なものであるから、丁度震源と對稱地點に當る觀測所で記さしめた地震計の記錄から充分愼重に地球內部を通過して來た橫波の相を見出さねばならない。然し斯樣にして二三の人々は橫波も地球の心核中を通過する事を證明して居る。故に其の事實と、前に述べた太陽や月の引力に依る潮汐作用の有無から推論すると地球內部は固體であつて其の彈性は略々鐵と同程度であると推斷する事を得るのである。

斯くして地震學は地球內部の構造に對して可なり迄詳細な說明を與へるに至つたが其れと同時に地震學自身も波の傳播の上に於て實に驚く可き、發達を遂げたのである。此の方面の硏究は全く專門的なものであつて一般の人々には興味の薄いものであるから玆には其の說述は略するが、遠地地震及び近地地震に於て地球內部に存在する不連續層の爲めに地震波の傳播が如何に複雜な模樣となるかは想像するに難くない。之れあるがために反射波、モホロビチッタ波、ピーダッシ波等が現はれる外、不連續面に入射した縱波は新たに橫波を其處から生ぜしめたり、或は逆に橫波が縱波を出したりする爲めに遠地地震にては地震計に依つて畫かしめた記象上に之等の極めて複雜な種々雜

多なる波が現はれて來るものである。只之等の波は理論上から判定したもので其れが果して實際のものと何の程度迄一致するかに就いては尙多少の疑點が存在する。

更に地下六千粁のあたりに存在する不連續層は所に依つて其の深さを異にするものである。例へば海底などでは不連續層が餘程淺くなつて居るかの感があるものである。故に我國の如き島國にては、六千粁の不連續面は可なり複雜な起伏を爲して居ると考へられる。從つて本邦附近に起つた地震では外國の如き、大陸性の比較的平坦な地方の其れとは可なり異つた現象を示すものと考へられる。

尙此の種の問題に關しては興味深い現象も少くないが其等は凡て省略して次に陸地と海底と何れが堅いかを論じて見やうと思ふ。

大陸と海底との比較と大陸浮動說

大陸と海底との比較と大陸浮動說

千九百十二年の頃であつたかヴェゲナア氏は地球上の大陸分布に關して極めて痛快なる議論を爲した。其の論は當時一般學者の注目の的となつて贊否兩樣の議論は學境を頗る賑はしめて居たのである。而して今では此の說は極めて有力なものとなつて一般に認容されつゝあるに至つた。

ヴェゲナア氏の說に依れば地球の表面を構成して居る地殼の皮層は之れを二種の物質から成るものと考へる。其の一はシリカやアルミニウムが主成分となつて居て、堅い代りに比較的密度の小な輕い「シアル」と稱する大塊であつて他は矢張りシリカとマグネシウムが主要成分となつて居る比較的重いが多少粘性を有する「シマ」と稱する地球の表面を一體に蔽ふて居る物質とである。

而してシアルは今日の大陸の部分でシマは海底となつて居る部分である。從つて輕いシアルは重いシマの上に浮いて居るものであると考へられる。此の考へから推すと地質時代に於てシアルは元一塊であつたものが歪の力の作用に依つて割目を生じ分裂して其の斷片は次第にシマの上を浮動して今日の如き大陸の分布を形成したものであると云ふ事になる。此の說は一見極めて奇拔極まる如くであるが實際入念に調査して見れば之れを肯定し得るものである。例へばヴェゲナア氏は南米大陸と亞弗利加大陸とを比較して元之等は一塊であつた事を說いて居るが其の論據となる點は亞弗利加の西海岸線と南大陸の東海岸線とが全く平行な形を示して居て、若し兩者を接合せしむれば、以て一塊とする事を得る事、及び兩者に於ける動植物の分布、森林

帶、鑛脈等が兩大陸を前述した樣に接合すれば全く一致する事等からである。尙此の兩大陸以外にもスカンヂナビヤ半島とグリーンランド、北米カナダとが接合せしめ得るし、其他凡て現在の大陸は悉く接合せしめて以て一塊とする事が出來るのである。

扨ヴェゲナア氏の說に於て其の根本となる可き點は大陸を構成して居る物質と海底を構成して居る物質即ちシアルとシマとが根本的に密度の差を有して、前者は輕く後者は重いと云ふのであるが果して斯ゝる事があり得るのであらうか。

地震に際して傳播する波は既に前にも述べた如くに縱波と橫波とであるが、此の外に地表に於ても一種の橫波が成立する。之れはレイリー卿が先づ理論上から見出したもので、實際地震の際にも最も振幅の大なる部分として現はれる所謂表面波と稱せられるものである。

表面波の速度は縱波又は橫波よりも小で、一秒間に平均四粁位を走るものである。然し表面波は大陸上を傳播する場合と海底を傳播する場合とで速度が異なるのが普通である。

タムス、アンゲンハイステル及びピッサア等の諸氏の研究に依れば、表面波が海底を通過する場合には陸上を通過する場合に比して其の速度が大であるとの事である。次に之等三氏の測定した表面波の速度を揭げて見れば次の如くである。

海底と大陸とに於ける表面波の速度の差

觀測者	大陸上を通過する表面波	海底を通過する表面波
タムス	三・八粁/秒	三・九
アンゲンハイステル	三・九乃至四・一	四・七乃至四・六
ピッサア	三・七〇	三・七八

斯くの如く表面波が海底を通過する場合には、陸地を通過する場合よりも多少速度が大である。此の事は大陸を構成して居る物質と海底を構成して居る物質とが根本的に物理的性質の差を有する事を示すもので、或は前述したヴェゲナー氏の大陸浮動說とも關係を有するのではあるまいか。

又表面波は遠くへ進むに從つて其の振幅を減ずるものである。即ち其の勢力が次第に衰へてゆくものであるから、其の衰へ方に依つて其の途中に當る地層が勢力を吸收する程度を知る事が出來る。之れは勿論軟弱な土地程餘計に他から傳り來る勢力を吸收して仕舞ふものであるが、堅牢な地盤程勢力を吸收する事が小で、他から來た波は其の儘他へ傳へて仕舞ふ。地震に際して軟弱な地盤が大なる被害を蒙るのは全く此爲めである。

關東大震の際に東海道平塚は殆んど全町倒壞家屋を以て埋められて居たが、其れより僅か一里を隔てた大磯にては倒壞した家が稀であつた。此の現象も全く表面波を吸收する程度の如

何、即ちその土地の硬軟の如何に依るものである。即ち平塚は相模川河口附近にあつて最も新らしき軟弱なる沖積層に建てられたものであるに比して、大磯は第三紀層なる硬き岩盤上に建てられた町であつて、全く土地の硬軟の差が斯かる結果を生むに至つた事は注意すべき事である。

扨然らば大陸と海底とを表面波が通過する場合に於て、其處に表面波を吸收する割合が如何に變つて居るかを調べる必要がある。此の爲めには表面波勢力の衰へ方を表はす減衰率なるものを用ふる。アンゲ：ハイステル氏は大陸を通過する表面波と海底を通るものとに就て、平均の減衰率を求めて見た所次の如き結果に到達した。

	大陸上を通るもの	海底を通るもの
水平動	○・○○○一七	○・○○○三二
	○・○○○一○	○・○○○三八
	○・○○○○九	○・○○○三七
上下動	○・○○○二七	○・○○○三○

即ちこれに依つても海底と大陸を構成した物質とでは根本的に何等かの差異を生じて居る事は確かに見逃す事の出來ぬ事實である。

尙此外にも地震學輓近の急速なる進步に伴ふて細かい部分の發達に實に目覺しいものが頗る多い。然し之等を一々記述する事も出來ないので今回は玆に筆を擱くとするが、最後に地震豫知の問題が果して可能であるや否やに就て一言しやうと思ふ。

元來地震豫知の問題に於て之れを可能ならしめんとする人々は次の如き三種の方法を用ひて居る。其の第一は週期說であつて、既往の歷史より見て或る地震帶には平均何年位の週期にて地震が起る事を推定するのであるが、之れが適確なもので無い事は既に人の知る所であつて更に喋々を要しない。

第二は氣壓又は潮の干滿に於ける變調からする方法であるが、氣壓とか潮とかの變調と云ふものは、既に不安定になつて居つて今にも地震の起らんとして居る所へ衝動を與へるに過ぎぬものである。私は之れを發現力と名付けたが此の言葉を假りて云へば氣壓の變調、潮の變調は單に地震の發現力として役立つものであるから、たとへ其れに依つて地震を一日前又は數時間前に豫報し得るとしても其の程度を知る事を得ない憾がある。又大地震は大抵低氣壓襲來後の氣壓上昇の際に起るものであるが、其の逆は確かに成立することを得ないのであるから此の方法も充分ではない。

第三は土地の傾斜である。即ち大震前には著く土地の傾斜が起り得る故、其れを豫め正確なる器械を以て測定するのである。此の方法は勿論善い方法であるが未だ充分なる觀測結果に

無い故如何とも云ふ事が出來ない。然し私は充分可能性を有する方法と思ふのである。

以上三方法の外に私は最も物理的な方法として波動の傳播速度の變化を利用する方法を擧げたいのである。此の方法は「彈性的に歪を受けた場合に於ては彈性波の速度が大となる」と云ふ事實に立脚したもので常に起る小地震を利用して或る二觀測地點間を走る彈性波の速度を測定し、其の速度に變化を生ずる事があれば、其れから歪を受けて不安定となれる場所を見出し得ると云ふ方法である。此の方法は如何なる程度迄土地の不安定を看破し得る可能性を有するかに就て目下調査中であるが、只時刻を充分正確に保つて置く必要があるのが困難な點である。

要するに之等の方法は何れも多少の論難はあるとしても、其の一つ〳〵は猶夫々長所を有するものである。從つて之等は何れも捨て難きもので、共に調査の步を進む可きである。而して私は今後尙觀測の正確と理論上の進步とに依つて何時かは地震豫知の難問も解決せらるゝ事を信ずるものである。



袖珍鸚鵡石

水木京太

舞臺の英語

故澤村宗之助は歌舞伎劇の若女形としての業績の外に、舞臺の上に特殊な二つの記錄を殘して死んだ。英語芝居を演じたこと即ちこれである。その一は明治四十年東京座での「ジュリアス・シイザー」、他は大正四年帝劇での「大風(タイフウン)」。

第一の者は、當時熱心な演劇研究家で確か農學博士だつた荒川重秀と共に洋劇研究會を創めて、シエイクスピヤ劇の原語演出を試みたものである。この折の舞臺成績に就いては、小山內薰氏著『演劇新潮』中の「田舍書生の芝居見物」と題する一文が委細を物語つてゐる。英語を口にし得る役者が足りない爲にかなりカツト澤山を餘儀なくされ、名代のフオラム・シインでは市民がちつとも物を云はなかつたことや、道具や衣裳身振臺詞の發音に對する一々の批評や、更に荒川博士のシイザアの最後の場面では、立廻り最中にトオガを振落して了つたので、それで顏を蔽つて喉彿で死んで見せるお約束の演伎が出來なかつたことまで傳へてゐる。宗之助のブルタスは、仕所たる演說の場で「中々巧い。殆んど間違はずにやつてゐる。宗之助がこれほどやるとは思はなかつた」との讃辭をかち得る出來映えだつた。——詮ずるところ「どうして英語の芝居をやるのだか趣旨が分らぬ。多分役者が英語を覺えたので、その英語を舞臺で遣つて見たい位の考から起たものと見える」だけだが、西洋劇といへば飜案が通り物だつた時代に、進んで原作に就きしかも原語で演じ迄したのは、無謀にして然かも善き野心的の試みだと云つてよからう。日本の沙翁劇史に珍奇な一頁を寄與したわけである。

後の「大風(タイフウン)」の場合は、もつと合理的な要求から行はれたものである。この作はもと千九百九年墺太利のメルヒオル・レンギエルの手に成つたものであるが、英吉利の俳優ロオレンス・ア

アァヰングが十二年に改作上演してからぐつと評判を増して、大陸に流行の逆輸入を來たしたといふ作品なので、その脚本に據る英語演出だつた。"Taifun"でなく"Typhoon"なのである。それを日本人の役は日本人の役者をまた外國人の役は外人役者を使ひ、更に日本人同志の對話を二宮行雄氏譯の日本語で行き、外人同志並びに外人と日本人との對話は台本通り英語で演ずるといふのが、十四年に於ける帝劇の企であつた。なほ少し許りの日本向き改竄も施された。

　アァヰングの台本には、特に台詞に關して「日本人同志對話の節は日本語を口にしてゐる心で、アクセントなしに彼國獨得の句調抑揚を用ひて話すべく、歐羅巴人と對話の場合には外國語を使つてゐるつもりで、勉めてアクセントを強く現はすべきこと」とむづかしい註文をつけてゐる。しかし帝劇演出ではこの困難がなくなり、日本の役者は日本語でも英語でもすべて地で行けばいゝので、それ丈は期せずして効果を擧げたわけである。

　さて宗之助は主役の日本人トケラモに扮した。法庭の場の燕尾服姿は地藏肩の内輪足、それに膝がかがみ勝でひどく醜かつたが、女形役者に附物のこの缺點を隱すために他の幕ではすべて和服に袴で通した。そして小股にちよこまか歩くのが外人役者の中に交ると一層目について、十分この作中の日本人になつてゐた。それから英語の台詞もいかにも外國語らしく際立つてそつくり指定通りになつてゐた。序幕の後半ラブ・シインで、薄暗がりに情婦の膝を枕に接吻を交へながらする睦言も、うる甘く流れる女の言葉にそぐはない吃るやうな口調に自ら異郷の戀の忙しい響があつた。——宗之助の日本的英語は自分にもよく聞き取れたし、も一人外人役者のヒユウズ氏が自分の學校の會話敎師なので發音に馴染があつたし、この芝居は私にとつてよく分つて見物の出來た唯一の英語芝居だつた。さういふ私事を除いても、東西兩洋の思想人情の對比を描いたこの作を外人と共演で英語で演じたのは有意義で且興味ある企であつた。

　宗之助の出演したこれらの二つは、いづれもまるごと英語で書かれた舶來の脚本だが、日本出來の芝居の中にも英語が出て來て活躍するものがある。新派の「噫旅行」と「ルイズの最期」を私はすぐ思ひ出す。前者は太郎冠者の喜劇で、筋は忘れたが、何んでも英語の出來ない田商が洋行して、赤毛布を發揮するのだつた。ピカデリイといふやうな盛り場で連にはぐれて、娼婦の群にとりまかれる。女共がぺちやくちや英語を喋るのだが、ちつとも通じない。さんざからかはれるので田商遂に悲鳴を上げるといふのだつた。大野といふ日本人の姓と、英語のOh, myをこんぐらからせるくすぐりで持つた狂言である。

これを洋行歸りが賣物になる時代に川上一座が得意の出し物にじ、貞奴連中のハイカラ振りであつと云はせると共に深澤恒造などの滑稽な態度で相當客に受けたものである。

「ルイズの最期」は河合武雄十八番の一つであらう。日本の外交官だかと云ひ交して子まで儲けたルイズは、遙々男の後を追つて日本へやつて來る。ところが男は心變りがして逢はうともしない。惡玉の友人が使ひに立つて手切れ話を持ち出す。女は恨み訴へる――これを英語でやつて、河合がサンマアス仕込みの彩なところで大芝居をするのであるが、とゞ男の薄情を恨んで氣が違つて、近所の鐘樓へ上つて自害する。母を慕つて子供が「ママ、ママ」と呼び乍ら探しに來るのでおしまひになる悲劇である。文献が手許にないのでわからないが、田口掬汀氏あたりの作ではなかつたらうか。

これらは新派劇の中期に屬して、英語の會話が出て來てもよさゝうに思はれる時代の產物だが、すでに明治廿四年五代目菊五郎が舞台で英語演説を試みた一事は少からず意外である。しかも日本人の役者としては、少くとも成文の英語の台詞を口にした最初だらうと思ふ。新物好みの彼は十九年にチャリネの曲馬を模した淨瑠璃で當りをとつたので、風船乘の英人スペンサアが來朝すると其評判のまつ最中に早速風船乘りを歌舞伎座で演じ、自らスペンサアになつて英語の挨拶をしたのである。

名題を「風船乘評判高閣（ふうせんのりうはさのたかどの）」と云ふ淸元常盤津を使つた一場の淨瑠璃物で、默阿彌の作に係る。前の場は上野公園博物館前で、飛行を待つ間に瓦斯を詰めると踊り出す紙人形の餘興、やがて風船の上昇、空中飛揚の様の遠見、パラシュートに依る下降、根岸へ着陸したので俥で上野へ歸つて諸見物に挨拶する。後の場は淺草公園凌雲閣で二の酉の賑ひに加へて今日の輕氣球見物の噂とりどり、圓朝まで出て來て愛嬌を賣り藝づくしの踊が始まる。――初春狂言の大切にふさはしいたわいもなく陽氣な狂言である。菊五郎は紙人形とスペンサア、圓朝の三役に扮したが前の場の最後にそのスペンサアが瓦斯樽の上にのつかつて問題の英語を述べたてる。

Ladies and Gentlemen, I have been up at least three thousand feet.

Looking down from that fearful height, my heart was filled with joy to see so many of my friends in this Kabukiza, who had come to witness my new act.

Thank you, Ladies and Gentlemen; with all my heart, I thank you.

Kikugoro Onoye

これを傍にゐる通辯役の尾上幸藏が、直ちに翻譯して口上を云ふ段取りなのである。――「御婦人方並に紳士方へ申上げます。私は唯今凡そ三千尺の高さまで昇りました。扨この恐ろしくも亦高き空中より、遥に大地を見おろしまして、當歌舞伎座へ御贔屓のお客様が描き新案の一藝御見物のため、賑々しく御入來の趣を打眺め、私の歡は胸に溢るゝばかり有難き仕合せに存じ奉ります。返す〲も滿場の御婦人樣方紳士方へ隅から隅まで、私が熱心に御禮申し上げ奉まります。尾上菊五郎。」といふのであつた。風船乘のスペンサアのやる英語の挨拶がそつくり尾上菊五郎の口上になつてゐるなんぞ、とぼけたと云はうか暢氣と云はうか誠に愉快至極である。

默阿彌の狂言淨瑠璃中に英語の演説――誰だつて作者の筆に成つたものとは思ふまい。その奇抜の書き手は今泉一瓢といふ人であつた。氏は當時時事新報の社員だつたが、スペンサアが最初横濱で飛揚した時、社用かた〲見物に出掛けた。社用といふのは時事新報の引札を風船の上から撒いてもらふ事だつた。ところで飛行場でスペンサアに逢つて用件を賴んだが頑として應じない。

「そんな邪魔物を持つちやア空へ昇ることが出來はしない。」

嚴しくはねつけたので據ろなく見物席に歸つて飛行を見ることにした。さてスペンサアは横濱瓦斯局に百何十圓といふ瓦斯代を拂ひ、日本の人夫を多勢使つて半日がゝりの準備をしてゐたが、お互ひに言葉が通じないので大閉口の様子だつた。今泉氏は見るに見かねて出て行つて通譯もし差圖もしてやつた。ここに於てスペンサアは大に之を徳として、さきの拒絶を謝して、返禮代りに廣告の引札を空中で撒いてくれるに到つたので、今泉氏は首尾よく社用を果すことが出來た。其時氏は見物席を見てゐると、何だか見覺えのある人間が懐から紙を出して頻りに風船を寫生してゐた。これは外ならぬ菊五郎であつた。

チヤリネで味を占めた菊五郎は、いまスペンサアの風船乘りを見るとどうしても舞臺で此眞似がしたくなつた。そこで日頃御贔屓になつてゐる三田の福澤先生をお訪ねして、各國の風船の出來等を伺ひ繪圖等も拜借した。そして風船の事なら彼がくはしいからとて紹介されたのは前記の今泉氏だつたのである。それから段々話が進んでいよ〲菊五郎が英語演説をするといふことにまでなつたので、今泉氏は草稿を書き與へ、讀み方や發音の工合などを一週間もかゝつて敎へ込んだのである。

ところが萬事器用な菊五郎も英語の暗記だけは不得手らしく、どうも最後までうろ覺だつたらしい。――歌舞伎座を背負つて立つ人氣者の菊五郎の事とて、下座の洋樂で綱引後押の人

力で揚幕から出て來ると、見物はわあつと歡聲を上げる。鼠洋の異人姿で瓦斯樽に上ればもう「音羽屋」の掛け聲が大變だ。まして〝Ladies and Gentlemen,——〟の一句で場内は一齊に拍手喝采の渦になつて了ふ。菊五郎はそこをつけこんで、今度は早口にむにや〳〵やつて、さつさと怪しい英語を終へあとを通辯に引渡して了つたものらしい。

だから、この記念すべき英語演説たるや、全文が文字で記錄されてはゐるものゝ、實際はどの邊までを舞臺で放送したか遂に斷定出來ない。私は不幸にもその三年後に生れた人間なので、親しく之を耳にし得なかつたから猶のことである。

L'Abri

「君、ラブリつてのがいまあるかね。何でもモンマルトルの——」私は巴里から歸つて來た岩田豐雄君に、訊ねたことがある。

「あゝあるよ。下等な寄席だ。」

「地下室になつてる小さい小屋だらう。君行つたことがあるかい。」

「狹苦しいきたないところさ。舞台は、さうさな、築地の半分位かね。——オデオンに居る知合の役者が、昔、あそこで俳優學校みたいな事をやつてるんで、一二度訪ねて行つた事がある。」

「さうかい。まだあるかねえ。」

私は何となしに感慨に堪えないものがあつた。大戰當時このラブリのことを興味深く雜誌で讀んだが、戰爭が終るともうこんな小屋に用がなくなつて、すつかり下等な寄席に落ぶれたのであらう。そして地元の巴里でも、もうこの座の持つてゐた曩日の存在理據は大方忘れられてゐるにちがひないと思はれる。

〝L'Abri〟とは、字引を見ると身を忍び身を寄せる場所、假りの宿などの意味があつて、座名としては一風變つて面白い。だがこれは通用の呼名なので、戸籍面の本名は少しばかり長たらしい。L'Abri Theatre de Guerre——即ち戰爭避難劇場、戰禍除け劇場なのである。de Guerre が人目につかず名實ともに無用となつた今日では、源氏節の定小屋になつたところで無理はない。實にこの二字だけで持つた劇場だからである。

さてこのラブリが蓋を明けたのは、大戰の酣な千九百十八年の五月六日である。場所はモンマルトル街百六十七番地、七階建てのビルデングの地下層でである。二軒の珈琲店に狹まれた地階の入口をはひると小さい控室で、そこの階段から見物席へ下りて行くのである。見物席と云つてもたゞの地下室に手を加

へた丈のもので、壁が暗青と土耳古赤との二色で簡素に彩られてゐるに過ぎない。座席も二百十人しか容れ得ないから、舞台ばかりでなく見物席の弘さも大抵築地小劇場の半分であらう。左右に上等席の設けはあるが、ボックスはたつた二つしかない。張出し桟敷のないのが特長の一つである。入場料は戰時特別税も籠めて、ボックス席が十五法、上等席十二法。土間の普通席が十法、後側の方なら七法どこで見せた。音樂室と喫煙室を兼ねた一部屋が別にあつて、幕間に退屈させないやうになつてゐる。ところで、そんなちつぽけな、そしてお粗末な地下室劇場が、何故立派に存在價値を持ち得たか。――答は誠に簡單、爆彈除けの裝置がしてあつた爲である。

當時の巴里は日夜獨軍の襲撃に惱まされてゐた。例のツエペリンや飛行機が突如として空の一角に姿を現はしては矢鱈に爆彈を投下する。市外僅か七十哩のところまで敵軍が迫つてゐて、三十分毎に呪ひの砲彈を送る。全市民は心身共に脅され通しであつた。その不安恐怖を忘れさせた上に慰樂を供給しようとするのがこのラブリの企圖だつたのである。そこで四壁を二重にコンクリイで固め更に天井には甲鐵板さへ張つた。しかもその上には層を重ねた建物がある。もし空の侵入軍の投下した爆彈が上部の五階を破壞し盡し、勢榴彈が飛び來つて地階まで冒されたとしても、この劇場は平氣である。觀客は爆彈を恐れて身震ひする代りに、爆彈をひやかす台詞を舞台で聞いて腹の皮をよぢらすのである。敵機襲來を告げる三發の號砲……ノオトルダムの塔上からけたゝましく響く號笛……やがて惡魔退散を報ずる合圖の喇叭。――そのどの音も聞こえて來ない地下室の奥で、戰爭からは完全に隔離された藝術の中立地帶で、彼等はよき唄と樂しい芝居に心地よく醉ふことが出來るのであつた。

かういふ場合、とにかく安全に一夕が過ごせる事が觀客の第一のよろこびだが、勿論もつと多くの愉快な物を用意してあるのは云ふまでもない。まづ開幕の趣向からしてなみ〳〵ならず面白い。――劇場へ足を踏み入れると宛もエヂプトの闇夜のごとくまつくらである。女案内の掲げてゐる螢火のやうな明りを見つけて、やつと席へ導いてもらふ。廊下もどこも燈火は全部消されてある。席に就いてじつとしてゐると、闇の中のあたり近所で、開幕を待つ見物同志の話聲だけが聞かれるのである。しばらくして幕が上ると舞台のフット・ライトで場内がはじめて明るくなる。と、福々しい顔に吉例の髯のある喜劇役者が出て來て、わざと鹿爪らしい口調で「クラング閣下の御出でゝございます」とやるので、滿場一時にどつと笑ひ崩れるのであ

る。——クラング氏と云ふのは市立科學研究所長で巴里を侵した獨軍の爆彈榴彈一切を點檢する役目にあつたからである。——この一笑ひで皆はすつかりいゝ機嫌になつて、續いて演ぜられる唄入喜劇に戰時らしい氣味惡い洒落が出ても、容易に笑ひ得る氣分になつて了ふのである。

その出し物には、時節柄云ふまでもなく輕くて氣の利いた愉快なものが選まれた。開場當初のものは「千九百十八年」と題する二幕物のレヰウだが、戰爭のことや其他多くの時事問題が盛つてあるので大受けだつた。中でも、其頃巴里では爆彈の爆發に依つて起る震動でよく硝子がこわれるので、それを防ぐため細紙を窓に貼りつけることが必要とされたが、このレヰウへ出る或人物が、途方もなく大きい眼鏡をかけてその硝子玉にぶつ交ひに細い紙切を貼つてゐるのを見た時は、誰もかれも我家の事は忘れて腹を抱へてしまつた。こゝの花形は上品で智的な喜劇役者のブウコオと、小柄で快活な女優のピエルリイである。作に適はしい輕い味を見せて觀客をよろこばせた。

英國のグランヰル・バアカアの有名な「眞夏の夜の夢」の演出に倣つて、巴里のフエルマン・ゼミエが前年同じく沙翁の「アントニイとクレオパトラ」の新奇演出を試みたのを、早速バレスクにしてこのレヰウに織りこんだ。ヰリアム・シエイクスピヤが出て來る、そしてブウコオの扮したフエルマン・シエイクスピヤといふのが出て來て大活躍をするので、觀客は可笑しさと共に十分諷刺の意を感得して大喝釆だつた。ことに面白いことには、開場の夜には諷刺されてゐる當の本人フエルマン・ゼミエがやつて來て、大變うれしがつて見てゐた由である。

——私がこゝにラブリ座のことを書いたのは、そこでやつた小唄喜劇の面白さを傳へるためではなかつた。窮すれば通ずとよく云ふもの、爆彈の恐怖の中に行はれた一つの珍らしい興行政策を記述したいからである。爆彈除け裝置を賣物にして客寄せに成功したもの、これまでにラブリ以外なかつたらう。其時其場合としては、寔に巧妙適切な興行上の名策だつたと考へるのである。

今一つ佛蘭西で行はれた珍らしい客呼び策を拾へば、これは古く千八百三十二年の事だが、巴里に虎列刺大猖獗を極めた時のオデオン座の宣傳法である。「虎列刺發生以來未だ一人の罹病者も出ださゞるは巴里劇場中當オデオン座あるのみ。」この引札がいかに利目があつたか想像するに難くない。四方八方虎列刺虎列刺虎列刺で、身邊病菌に圍まれてゐさうで呼吸するのも氣味惡いやうな時、「こゝに清淨な劇場がある」と知らされたら、芝居好きでなくたつて息拔きに出かけたくなるだらう。そこへ

行つて一つおやかつて來ようとも思ふだらう。況して好劇家に到つては、陰氣な顏をして家に閉ぢ籠つてゐられなくなるにちがひない。入場成績を確めて云ふのではないが、とにかく時宜を得た宣傳方法たる事は爭へない。これに虎列剌除けの丸藥でもおまじないに與れたら、人いきれで反吐が出る程の大入も占められたらうが、私の讀んだ丈ではそこ迄は書いてゐない。たゞ安政五年を頭に、虎列剌流行で興行禁止を喰らつた年を調べて見ても、疫病を逆手に使つて客寄せ策を講じた劇場が我國にはない樣子だから、後日の參考までに敢て持ち出して見たのである。

　戰爭も疫病も、劇場にとつては大なる脅威である。硝煙と病菌の裡に住む人々を誘ひ出して來るまでが既に著大抵の事では出來ない。「河豚は食ひたし命は惜しゝ」の連中に河豚を食はせるのだから、第二義的な方便も必要だと思はれる。しかしこれは非常時に於ける權道的興行法であつて、いつもこんな風にやつてくれと云ふのではない。現在の狀態では、たゞいゝ芝居を演じさへすれば相當の客が呼べるものと考へられるのである。

　昔江戶の三座が軒を並べて興行した時分は、金のない苦しまぎれか互に智慧を絞り出して、色々興味ある方略競べを見せてゐる。そこへ行くと今日の興行界は割合天下泰平で、少し變つた事をはじめてもそれは大抵先人出枯しの策略である。神樣やお宗旨の芝居をやつてお有り難講中を集めるとか、珍らしくもない役者の顏合せでひゐき客をあふらうとしたり、改名だ追善だでお義理の連中を狩り立てたり、さうかと思ふと「助六」を出せばゴム長靴の箱屋の御手を拜借して人氣を呼ばうとしたり、なにせ至極氣の拔けたものばかりである。あつと感服の余り賑でも劇場へ引つぱつて行かれる底の新手にはとんとぶつからない。これは觀客を總體として見ずに、その部分〳〵に割れば或人數が保證されて安全だとの考へから來てゐやうが、一般の觀客から見たら變哲もない迷惑なことになる。猿芝居をやれば犬が見物に來ないことを勘定に入れたら、あんまり利口な商略とも云へなくなるだらう。

　近來流行の景物で團體客を呼ぶ風潮なども、また褒めた仕儀ではあるまい。お好みの御食事に贈本や紀念寫眞まではづむ勉强振りは一應見上げるが、其費用の代りに僅かでも一般の入場料を下げる算盤を取つたら本當に結構であらう。上得意たる忘年台新年會懇親會さては御披露稽達落用の團體が、彼等の目的たる宴會に就いて食好みでもするやうになれば、今の趨勢では劇場がその要求に應ずる事になるだらう。さうなつたらいつそ名物の料理を看板に食物劇場といふのでも始め、お土産に一ま

く見せた方が双方の利益を増すこと請合ひである。——かういふ仕組でも機運に遭へばよく好劇家をさへよろこばせようが、食物を餌に客を釣るなどは非常時に利用せらるべき方法たるに過ぎまい。

平時に於ける興行の王道は、中味の問題を抜きにして云へば、一般に料金を可及的に安くし快適に見物させるといふことであらう。懇切に客を待遇するといふ點では、諸劇場も追々注意して來て大劇場ほどそれが行き屆いてゐる。たゞ料金遞減の件ではどこも大した改善を見せてゐない。内部組織から變へてかゝらないので冗費の節約が出來ず從つて興行費が依然として多いせゐだらうが、今日中流所の生活を規準にして云へば、現行の觀劇料は殆んど多くの好劇家が木戸を突かれてゐるに等しい。目下一番緊要な客寄せ策は、何としてゞもいゝから、まづ安値で見せるといふ事にある。

安値と親切を標榜して成功した好模範は、明治十八年春木座で鳥熊の始めた上方芝居であらう。鳥熊——その本名は審にしないが、元は江戸の生れで隨分苦勞を嘗めて來た老人だつた。はじめは香具師を業とし諸方にいろ／＼の見世物を賣りこんで、すでに長崎遠く上海へまで出かけ到るところで金を儲けて來た。大阪でこれまでにも度々芝居に關係してはいつも當りをとつてゐた。それがこの年は東京の芝居が一般に頗る振はず、新富座はじめ春木座も戸を閉ざしてゐるのを見て、大阪の中の芝居から腕利きで安給金の役者を抱へ入れて東京へ乘りこんで來たのである。彼の興行は多くの點で東京の觀客を引きつけた。まづ第一に當時にあつても思ひ切つた安値の六錢といふ木戸錢だつた。大入御禮興行の際は更に二錢にまで下げた。場代がこれと同じく破格に安いことは云ふまでもない。小屋の七分までも入れ込みに安い席を多くした。手辨當歡迎、茶湯無料接待で客の入費をなるべく少くしようとした。茶屋受けの客からも二錢宛の規定の手數料を取る丈だつた。賣店で物を賣らせて義理や見榮で食物などを買ふ必要がなかつた。下足は無料だが、その無料以上に、雨の日には下駄の泥を先ひ清め風呂敷に包んではね前に客の手許に渡すといふ懇切振り——これが大評判で一に「下駄洗ひ芝居」の名を得た——その爲に下足受取の雜沓を緩和することが出來た。

見物に安値に芝居を見せる爲には、劇場の方でも冗費を使はず仕込金を安くするに努めた。朝五時から開場午后四時半には必ず打出して焚捨などの失費を省いたし、手すきの座員は役者でもお囃しでも下足其他の手傳をさせてなるべく使用人を少くした。——場代が安い許りでなく失費はなし、扱ひは親切だ

し、その上土間桟敷の造りから舞台一切を純大阪風にしたので物珍らしく、勿論お客はわつわと詰めかけた。東京に馴染のない役者ばかりなのにかゝはらず、開場早々から滿員客止めの盛況を連日つゞけ、座席の繼ぎ足しを行はねばならない位だつた。

景氣が景氣を煽つて、道の遠近を問はずに東京中からお客がやつて來て、興行界に大センセエションを起した。外の小芝居が食はれるは云ふまでもない事、鳥熊芝居の安値は今更に大芝居の高價を思はせ、市村座は團菊左と頭を揃へた座組にもかゝはらず「この不景氣に場代の高松見物を水責め」などと狂言に因んだ惡評まで受けて日殘りで終演する始末だつた。そこで千歲座を明ける菊五郎さへ値安興行をうたはざるを得なくなつた。壽座とか桐座とかは鳥熊の向ふを張らなければならぬ立場から、木戸五錢三錢とまで落げやつと對抗する事が出來た。即ち鳥熊の贅六芝居が、すつかり東京芝居を壓したので「最初本鄕春木座の興行こそ府下各芝居の衰頽を招く一種の病根にして飛んだ鳥か（ヲツト譏誘〳〵愼しむべし）と晝夜痛歎せしが各劇場の座主必ずや是を防ぐべき策あらんと思ひの外誰あつて抗するものたく却つて直安追込の眞似をたし得意然たるは實に恥べきの極といふべし若し鳥熊に競爭せんと思はゞ世に目さましき興行をなし團十郎も菊五郎も芝翫も高助も左團次も一座とし衣裳道具をも比類なき張込みにて彼の三菱共同の如く損毛を承知で木戸錢たつた五錢で興行したら上阪の俳優や鳥熊如きに失敗は取るまじ當今の損毛は後日の利德にして此競爭果して利あらば東京俳優の價格をも下落せまじ棧敷一軒五圓の聲價も必ず高いといひながら買て見る見物あらん嗚呼情ない哉東京の芝居師鳥熊に壓されて遇の音を發せぬはお宿に居ぬのか將お留守かせめて守田勘彌氏が世に時めき居たらこんなに東京の芝居を安くされはせまい」と江戸つ子の『歌舞伎新報』記者をして浩歎せしめたのである。

鳥熊芝居の安價といふのも、無論元價を切つて安くしたのではなく、安い物を堀り出して來て冗費のかゝらぬやうに之を扱ひ、そして薄利多賣の精神で安く賣つたものである。その證據には鳥熊時代の後期に稍高給の役者を抱へて來て料金を高くしたら、前程の人氣がなかつたさうである。しかし安給金の役者だからとて、この間流行した劍劇の御連中などのやうに、まるで芝居の出來ない僞物ではない。相當の腕利きを集めて後年の門之助、傳九郎、松壽、宗三郎等を東京劇壇に殘した位である。

鳥熊芝居の勝利は安價と親切である。その安價は、とにかく

相當な芝居を多くの人が金錢上の障害なしで見られるのだから、一般の觀客に對する親切ともなる。某々役者の連中などといふ團體を特殊視することなく、最初にそして最後まで觀客といふものを總體的存在と考へて生れたことで、いかなる階級の觀客をも拒むまいと、劇場の大戸を明けたのは確に良計であつた。料金の事ばかりでない、劇場掲示に假名文字を使ふほど民衆的な用意を忘れなかつた。だからこそ府内の隅々から觀客を集め得たのである。かういふ興行法には不景氣がない。五十才以上の人ならこの芝居の事を記憶してゐて「あなんだ、あんな下等な下駄洗ひ芝居」と云ふだらうが、彼の取つた手段そのままでなくとも興行に就いての其態度やイキは、今日の營業とても大に學び倣ふべきだと思ふ。値下げの施設に努むべきは無論だが觀客に親切な取扱ひも、下駄は洗つてくれなくとも、一流劇場の椅子場の客に無理に靴を脱がせて風邪を引かせる底の、自分勝手な待遇などを廢すことが必要である。

劇場經營に新手を出して成功した烏熊は、劇界を隠退してから、芝居で儲けた金を資本に娼樓經營を始める目論見があつたさうである。上方から一粒選りの上玉を呼び寄せて吉原か根津へ大女郎屋を建立し、娼妓大安賣冗錢いらずでまた當てるつもりだつた。妓夫や若い衆を廢して女の仲居を置き、客からは定めの手數料を公然貰ふ代り祝儀をねだつたり藝者を強ひたりは一切させない。臺の物は市上の値段通り割りを取らずに賣るが、辨當酒肴御持參でも結構、更に飲食ひするとせぬとはすべてお客の自由で水茶火鉢をたゞで提供する馴染金だの花だのとお客の懐をいためる無駄遣ひは全然させない。——つまり娼妓の賣買を冗費一切省いて薄利多賣に處しようとしたわけであるが實行には到らなかつたらしく「下駄洗ひ芝居」の話は聞いても「下駄洗ひ女郎屋」の噂は未だ耳にしない。

劇場追放

人間に智情の機能が存する限り、批評といふ現象がいつの世にでも生れる。希臘の野天劇場の昔から連綿として劇評が口にされ筆に上つて來たのもこの所以に外ならない。さてかくの如く批評其自身は本能的發現だから、よせと云つたつてどうにもならないが、一方批評される對象から之を見たらどうだらう。果して有益にして且缺くべからざる必要品か、或はまた迷惑な無用の長物か。

演劇をはじめあらゆる藝術は、批評がなくとも藝術たることにかはりはない。それは丁度すべての窓を密閉し燈火まで消しても、ルウヴル美術館が依然としてルウヴル美術館たると同

ことである。ところで批評は實にその窓その燈火である。四壁の闇を斥けて、模糊として見分け難い藝術品をはつきり現出せしめるのである。オスカア・ワイルドが倫敦の霧がタアナアの筆に依つて初めて生れたと云つた如く、藝術とても認識されなければ存在しないに等しい。かくて批評は、藝術が自己の存在を自覺する手段として、尊重すべき必須品となるのである。

演劇に對する劇評もこの例に洩れず、俳優興行者其他一切の關與者にかゝる効果を及ぼして來たが近代になつて諸種の刊行物が盛んになつた爲その機會が一層多くなつた。そして主として効利的價値に依つて劇場側から非常に重要視されて讀まれるやうになつた。といふのは、あながち新聞劇評をおしなべて優秀卓拔な批評だと信じてゐるのではないが、その背景の勢力を無視する事が出來ないからである。

何十萬何百萬の發行部數を有する新聞の劇評が或狂言或役者を賞めたとなれば、その文章は直に何十萬何百萬の人に讀まれ新聞を信頼してゐる讀者はすべて之に感化されて其狂言其役者の賞讃者になる。それが大抵興行中の出來事だから、この信仰上の賞讃者の幾割かは、自然問題の劇場へ足を運ぶのである。即ちこの劇評は單に舞台其物の賞讃だけに終らず、背景をなす勢力の影響で多數の觀客を木戸口へ送りこむ副作用を伴ふ。劇場側から云へば、非常に有効な宣傳廣告を新聞の名の下に無代で行つて貰ふ事になる。この御利益のお蔭で「御社の先生」は正にお稻荷樣以上に有難がられるのである

ところがこれが逆に行つたら、勿論すべての事は反對になる。舞台に關する批評がいかに公平嚴正に行はれても、何しろ副作用の方があべこべの効果を來して、財布を明けかけた讀者をも外へそらして了ふのだから、その劇評家は怨惡の的になる。「芝居の解らない人間」にされる。そして相かはらず峻嚴な態度をつづけてゐれば、劇場側は商賣の邪魔だとばかり意氣ごんで挑戰するか、或は下から出る御機嫌取りの懷柔策を施して精々神樣になつて貰ふやうに努める。我國では理窟の通らない抗議文を鼻息荒く突きつける役者がある位で、表立つた挑戰は行はれない。たまにあれば裏からのこそこそで、現に私の畏敬する友人が某新聞で劇評を擔當してゐた時分、社長御ひいきの役者を非難し續けたといふので其役者が社長に泣きつき、友人は遂に囑托の任を解かれたといふ事實がある。が、大抵は「殺され」て至極平穩無事な妥協が收まる樣子であるし、其上もともと背筋立てゝ義憤の筆を揮ふやうな野暮な評家は余り多くないらしい。しかしこれから正直で强情な劇評家や所謂芝居者にならない劇場當事者が續々出て來れば、兩者が公然と對峙し

て、社會の面前で是非曲直を爭ふ場合がきつと起るにちがひないと豫測される。そこで外國での事例二三を語るのも、喧嘩の用意に何かの足しにもなるかも知れない。

千九百十五年のこと、紐育タイムスの記者アレキサンダア・ウウルコツトの劇評にひどく憤慨して、シユウベルト興行組合は彼に劇場追放を喰はせた。彼の劇評たるや實に偏頗不公平を極め、われわれの經營する諸興行物に對して明に敵意ある妨害を行ふものであるとなし、シユウベルト系の劇場の支配人達は一齊にウウルコツトの入場拒否を宣言した。その上かゝる批評家の劇評を掲げる紐育タイムスへの挑戰として同系の諸劇場が一切廣告を送らないことになつた。一方が市中の劇場の約半數を包擁する大興行組合、一方は紐育屈指の大新聞なのだから、この相撲は面白い取組になつた。

新聞側――ウウルコツトの方でも勿論默つて引込みはしない。演劇を見、而して之が批評を讀者に傳へるのが劇評記者の公の任務である。觀覽拒絕だなどと、それこそ社會の木鐸の職務執行を妨害する不合理な處置であるといきり立つて、遂に法廷に訴へる手段に出たのである。仲々むづかしい問題なので區裁判所や地方裁判所では鬼がつかない。たうとう紐育の控訴院まで行つて翌年になつて決定を見たが、その結果は劇場側の勝利だつた。即ち裁判官の意見に依ると、凡そ劇場の支配人たるものは、民族宗教人種の相違に起因するのでさへなければ、相當の理由があれば或物の入場を拒んでもいゝと云ふのである。劇場はホテルやレスタウラントとちがつて公共の場所ではないから、觀客選擇の絕對權を認めるといふのである。――ウウルコツトの劇評がシユウベルト側の云ひ立て通りに片手落ちな有害な批評だつたかどうか、その點の究明を俟つまでもなく、この判決に從へば劇場側はその自由意志の下に彼の入場を拒み見事に劇場追放を行ふことが出來るのである。

さあこれで兩者はどんなになつたらう。ウウルコツトは止むを得ざる結果として、シユウベルト系劇場の批評を一行も紐育タイムスに掲げなくなる。乃ち紐育劇壇の半分を占める劇場も、同紙上では全然存在しない事になる。褒貶に關せずとにかく劇評に依つて其等の劇場の活躍が告知されたのに、今度はその存在さへ讀者に忘れられ勝になる。これは劇場側の大きい損失と云はなければならない。それと同時に新聞側の受ける損失もさう少くない。これまで多額に得られた廣告の收入が全然なくなるし、更にシユウベルト系劇場の事業が依然として紐育劇壇の大半を成してゐるのにその活動を傳へないとすれば新聞としての責任を半分しか果さないわけである。讀者に對して不忠

實の罪を當然着なければならない。——かく兩成敗を來した喧嘩が、いつどういふ條件で結末がついたか之を審にしないが、とにかく紐育控訴院の下した判決だけは特に注目に値する。

この事あつて五年程後、やはり紐育のアアサア・ホオンブロウが興行者の挑戰に遭つた。彼は英國から來て長年「演劇雜誌(シアタア・マガヂン)」を主宰し、同誌をして今日の大を成さしめた人である。日頃決して過激な意見などは吐かず寧ろ健穩妥當な所説を以て知られて居、非難の筆を弄すよりは賞讃の辭を連ねる事を好む人である。然し彼も見識ある批評家の常として、美も新奇も興味もない見かけ計りのまやかし物を敵視すること、敢て人後に落ちないのは云ふまでもない。そこで「ジイグフエルド・フオリイス」といふ寄席的演藝の新狂言に對して、右の理由から非難を加へたのである。そして同時に同意向の劇評が他の新聞に出た。ところが興行者ジイグフエルドは日刊週刊と戰ふのが怖ろしいので比較的勢力の微弱な月刊雜誌に狙ひをつけ、彼一人を選り出して劇場追放の刑に處したのである。

「演劇雜誌社御中。——貴社の劇評家が筆にせる眞摯なる御批評讀んで拜承、警拔なる御注意悉く存上候之は正に一の寶典に御座候評家の御賞揚に預りし個所悉く觀客は排斥し御非難の部分すべて喝采を博し申候。ジイグフエルド」この電報が宣戰布告であつた。これを手にしたホオンブロウは、しかしかういふ嫌味を云ふことで興行者の氣が晴れたことゝ思つた。だがどうして、それだけでおしまひではなかつた。そこへ演藝通信社の代表がジイグフエルドの代理でやつて來て「ジイグフエルドの經營管理にかゝる諸劇場では、一切ホオンブロウ氏を招待しない」から左樣心得てよろしからうと云ふのだつた。さきのウウルコツトの時よりは手ぬるいが、劇評家に不信の意を表示して劇場追放を行つたにかはりはない。

招待を中止されたら切符を買つてはひればいゝ。——至極簡單などうでもいゝ事のやうに思はれるが、これは彼を劇評記者の任にある公人とは最早や認めないといふ事で、劇評家としての彼は明に劇場から追放された事になる。切符を買つてはひる彼はすでにPersona Grataではなく唯の人に過ぎないのである。劇場がこの方法で劇評家の批評に挑戰した例は各國に澤山あつて、英國のクレメント・スコツトがキンダムからお斷りを食つたにもかゝはらずそうつと初日に出かけて、土間の一番後席でこつそり見物し歸つてすぐまた手厳しい劇評を書いたといふ話も殘つてゐる。—買つた切符を持つてゐる敵役の批評家を劇場支配人が拒否し得るといふ事は、前述亞米利加で認められた丈らしい。白耳義のリエエチで一批評家が劇場で切

符を買つて入場したのに、彼を嫌ふ劇場はその觀覽を拒絕した。その訴訟に接して同地の裁判所はかういふ判決を下した。

「批評家の言論の自由といふ事は、演者筆者間に暗默の裡に認容された約束に基いて行はれるのである。また劇場支配人は座席料を拂つた觀客を逐ひ出す權利が與へられてゐない。依つて支配人には批評家に對する損害賠償として金三百フラン支拂ふべき事を命ずる。」

そこで新聞劇評家も自腹か社費かを使へば完全に職責を果すことが出來るので、招待中止の劇場追放をそれ程意に介しなくてもいゝわけである。たゞ難問題は、自分を拒否する程挑戰的態度に出る劇場は大抵自分の社へ一切廣告を送つて來ない一事である。もし彼が平の原記者であれば、彼の屬する新聞社に多額の收入を失はせ、それがために內外の壓迫も加はり非常に苦しい立場に置かれる事にならう。新聞社が彼を支持してくれない限り、彼の生活さへ間々危くされ勝である。これでは劇場の挑戰を誘起すやうな氣鋭の劇評も、滅多に書けなくなる始末である。

その弊を救つて言論の自由と批評の嚴正を保つために、巴里の新聞劇評記者は社主の後援を得て、團體精神の下に行動してゐる。即ち一人が劇場支配人から劇場追放を受けると、同業全部が一致結束して、彼がもとの待遇を回復するまでは各自の批評中に其劇場に對して些の好意も示さず、逆に劇評追放を行つて支配人の反省を促すのである。

倫敦では劇評家對劇場の紛擾を仲裁裁判に附す事が目論見られた。それは事が起る每に劇評家組合と劇場支配人組合が相寄つて、各々が代表者を指名選出し、一切をこの人達の審議解決に俟たうといふのである。劇評家組合が主としてこの組成に盡力してゐる由だが、或はすでにその實行を見てゐるかも知れない。

――總體入場謝絕權を法官がよく認めるかどうか知らないが、日本の劇場も筋の立つた不滿な理由のある時は、劇評家に向つて招待中止の劇場追放位を公然と行つて見たらどうだらう。いつも出し物は大事取りの洗濯芝居になり勝だから、そんな挑戰でもすれば自他の睡氣ざましになるにちがひない。喧嘩をするにも對手が溫和すぎてそのキッカケがないなどと、そんな心配はいらない。毒にも藥にもならない御座なり計り書く人も、やはり本當の劇評家として資格がないのだから、十分不信任を表明する理由があるではないか……。

殉教バテレンとその書簡（一）

文學博士　姉崎正治

德川三代將軍の時代になつてキリシタン禁制が嚴しくなつた。第二代の間には、禁教令を布き、又信徒でマルチリヨ（Martyrio）即ち殉教の死を遂げた者もあつたが、江戸でバテレンの血を流し骨を燒くのは、實に三代將軍の時から始まつた。禁教迫害の激しくなるにつれて、信徒の間には殉教の用意を激勵し、その覺悟を促した。その激勵文書の一節に曰く、『丸血留（マルチル）の位は、心も言（ことば）も絕へたる一事なるが故に、其位に置かれん爲には相應の下地（したぢ）を調ふる覺悟肝要なり。聖シプリアノ、丸血留數（マルチレス）に遺し玉ふ御文に宣（のたま）ふは、各を是程の高位にデウス（天主）召上げ玉ふ御事は、只一旦の善力にあらず、不斷常住、御心にかけ玉ひて、深く望み玉ふが故なりと書き玉ふ者也。』此の樣な覺悟を抱き、而して殉教者は天上に於て勝利の榮冠を得るといふ希望熱情に燃え立つて、喜び勇むで死に就いたもの、寛永から寛文にかけて、千を以て數へ、恐らく萬をも超える。それ等の事蹟については、殉血遺書など、近頃出版の書物も大分あるから、今茲には殉教の事蹟を重ねて傳へるのが目的でなく、その個々の殉教者マルチルが、その死に先つて如何なる事業をしたか、如何なる精神で一生を始終したかといふ事を、出來るだけ多く彼等自身の書簡によつて紹介せうといふにある。材料は主としてパゼスで、之を助けるにシャルルボアを參照し、而して書簡譯文の文體は大體近代語にした。但し場合によつては書簡文又は慶長文に似せても見た。用語も同樣で必ずしも一律にしない。後には殉教者以外にも及ぼす考であるが、先づ手始として代表的な殉教者七八人を紹介する。

＊　＊　＊　＊

聖神（スピリトサント）のルカス（Lucas del Espiritu Santo）

聖神（スピリトサント）のルカスはイスパニア生れで、ドミニコ會（即ち O.P. 說教團）の教師としてマニラに居た。そこへ、元和八年（1622）日本での迫害の爲に百數十人の殉教者が出たといふ報は深い感

激を惹起した。のみならずその爲に教職の欠乏を來たし之を補充する要もあり、マニラでドミニコ會、フランシスコ會、オグスティノ會三團體の人々が合議して、教師を日本へ送る事になつた。太守も大司教も、紛擾と困難を豫想して、中々許さなかつたが、到頭冒險を決行する事になり、三團體から出た十人のパテルは皆商人に扮裝し、一艘の船を傭つて、マニラを出發した。ルカスはその十人の一人であつて、此と同作の人々は、後に多く殉教の死を遂げたが、兎に角、海上暴風に遭ひ、支那沿岸では海賊の難をやつと免れて、薩摩に着いたのが元和九年五月十六日(1623陽六月十三日)。長崎に轉じて、人々は思ひ〳〵に隱れ忍むだが、ルカスは六七年、長崎附近で、日本語を練習しつつ布教をした。かくて準備が出來、寛永七年(1630)、アダミとボルロと二人ゼスス會の教師と共に、迫害の峻烈に起りつつある江戸に出た。然し江戸在留は長くはなかつたらしく、その頃、江戸のキリシタンは常に東北奥羽と聯絡してゐたので、ルカスも程なく東北に出かけた。東北も亦迫害の最中で、仙臺、秋田、米澤、會津等到る處に教徒の血を流しつつあつた。ルカスは、自ら日本の北端まで行つたと云つてるが、津輕か、事によつたら松前を指すのであらう。それから北陸道に戻つて、暫く金澤を中心として近傍に布教した。多分寛永九年(1632)頃、金澤から出したと思はれる手紙に曰く、

どこに行くにも、火の中を通ると同じで、到る處危險があり、これを逃れ得るのは不思議な位である。今居る處は、此州の城下で、こゝから出ては近國を巡回するが、一昨年來一年九ケ月の間に、海上陸路の數々、その中、今まで教師の行つた處もあるが、又一人も足蹟を印しない處もあつた。中にも北方の國々に向ひ、日本の北の端まで行つたが、海上には嵐にあひ、陸では雪中困難の旅行をし、異教徒の家に宿を求める外なかつた。

かくて、寛永十年(1633)京都に出、大坂へ向ふ途中、一時山中に隱れたのが、終に捕られた。大阪から長崎へ送られ、そこで入牢したが、その獄中からの書簡は、その間に於ける經驗を雄辯に物語る。曰く、

今年二月以來、遠國方々をかけ巡つた。日本の東なる關東から、出雲、因幡、美作、但馬、越中、能登、越後から奧州までも回つた。丁度收穫の季節で、又旅人の多い中ではあつたが、人に氣づかれなかつた。

八月十四日(陰暦七月十日)京都に近づき、翌日京都に入り、これからボソワ(不明、晉羽か)へ行つて、そこで九月六日(陰暦八月三日)まで居たが、そこへ召捕の手がまわつて來た。白黑二人の從

者と共に家を出、他の村へ行つた。それから間もなく、アントニヨ・デ・スサといふゼスス會のパテルも同じ家に忍び込むで來た。……二人は互に別れまいと約束し、小船を得て之に乘り、大阪に忍び込み、木曜、即ち聖母降誕日（九月八日 陰八月五日）の翼まで居たが、そこへ同心が我等と從者とを捕へに來た。從者をにがそうと思つたが、彼等は離れるを欲しない。即ち同胞が此くまで迫害に苦められてゐる時、又毎日聖徒等が身體を寸斷せられ、灰に燒き棄てられるを見つつ、悲慘に充ちた此世界に生きてゐるよりは、喜び勇むでゼススキリシトの爲に死ぬ方が結構であると、聖神の示しを受けて、覺悟を定めてゐる。その一人はドミンゴ角助といつて、前には組の使番をした者、他の一人はマテオ嘉兵衞といつて、年は十八歳、わしに從つてから一年に足りない者である。前に遠國に旅をした時にはつれて行かなかつたが、京都に歸つてから、わしを搜し出して常に隨行した。そこで兄弟ロザリヨのマテオ（Fr. Mateo de Rosario）といふ名を與へて、組の法服を着用させた。

召捕られてからは、前以て用意をしておいた綿服を着してゐる。途中は寛くながら縛られ、雨が降つて泥が多い。途途衞兵と話をし、又讃美歌を歌ふ。つれて行かれた家で、我等二人は縛を解かれたが、從者はそのまゝである。途中に一人キリシタンが會ひに來て、わしの從者の兄弟で、自分もキリシタンだと名乘つたので、それも縛られ、わしの從者だといふ事にして一緒に來た。教師の苦を見て、信者が殉教したいといふ熱心は此の如くである。

……衞兵のいふには、此人々は罪あるでもなく、將軍の禁制さへなくば、自分等もキリシタンにならうと。三人の奉行と下役で我等を召捕つた人々も、皆我等と夕の食事を共にした。

夜になつて再び我等に繩をかけ、小舟に乘せて牢屋につれて來た。我等は一二丁町をあるいて、足が泥によごれてゐたので、足を洗つてくれうとするから、その前に跪つて、自分で伴侶の足を洗ひ、又足に接吻した。奉行は、何故にその樣な事をするかと問ふたから、御主ゼススが弟子達の足を洗ひ、皆々共にその例に倣つて、他人の足を洗へと仰せられた事を物語つた。奉行等は、それは結構の事じやといつた。

……聖十字の日（陽九月十四日 陰八月十一日）他の人々と共に拷問水責せられた。パテルスサを初に、わしはその次であつたが、拷問の後、わしがふるへてゐるので、日當りの處へ出してくれ、熱湯に鹽を加へたのをくれて、吐かせてくれた。奉行達は涙を流してゐたが、一人の年とつた牢番は、奉行達が首肯いて

六左衛門(即ちトマス・デ・サン・ジャシント Thomas de S. Jacinthe)を拷問しないとて憤慨した。然し、わしは奉行達がその心を更へない樣に願つた。(ジャシントは非常に老人であつた)

……十月二日(此は後にある九月廿四日と入違らしい)將軍の命として大阪から長崎へ送られる事になり、兵庫を經、國々村々を通つて、小倉(豐前)に着いた。途中どこでも說法をし、又聖歌を歌つたが、二十年來、此の樣に公然信仰を宣布した事は、日本では絕へてゐたのである。それを聞いた者は、キリシタンの法に敬意を表し、我我は罪があるのでないといふ事を知り、此の人々が死ねばホトケ、即ち神靈又は聖者にならうと語り合つた。

小倉から豐前、筑前、肥前、諫早を經て、九月二十四日(此は前にある十月二日と入違らしい)長崎へ歸り着いた。

……長崎では新しい牢屋に入れられたが、そこにはゼスス會のパテル三人が先に居た。その人々はクリストワン・フエレイラ(Christovan Ferreira)ジョバンニ・マテオ(Giov. Matheo)と、日本人のジユリアンとであつた。他の敎師等は、それに先つて、殉教の死に向つて牢を出たあとであつた。(後に述べるフランシスコやカルバリヨ等)

……若しわしが、聖ルカの日(十月十八日陰曆九月十六日)まで生き延びるなら、生まれて三十九年になる。わしが宗門に入つたのは一六一〇年聖靈降臨祭の月曜日で、處はベナベントのサント・ドミンゴであつた。その次の年、キリシト聖體の日に誓を立て、トリアトノに行つて修學し、それからバラドリドに轉じ、一六一七年聖マルコの日に、ヒリピンに向つて國を出た。その年、アドベントの第一日曜日に、メキシコのサン・ジャシントでパテルになり、新セゴビアで敎職を務め、それからマニラに行き、一六二三年日本に來て、今日までこの國に居る。

一六三三年長崎の牢舍にて

スピリトサントのルカス

說敎團の賤しき僕

此書簡の終に自分の略歷を記したのは、死後の遺言として敎會の記錄に殘して貰はうといふ意味であるが、此手紙を書いた後三日、恰も希望通りの聖ルカの祭日に、共に牢舍に居た七人のバテレンは刑場に引かれて穴つるしにされた。拷問五時間でころむだのがフエレイラ、即ち後の澤野忠菴であるが、他は皆信仰を貫徹した。ルカスは穴に埋められても中々死なず(時々穴から引上げる)、他の人々は二日目、三日目、最後は七日に死んだ事を確めたが、ルカスは九日目に引上げられた時にも呼吸が通つてゐたといふ。その後そのまゝ埋めてしまつたのである。

ゼススのフランシスコ（Francisco de Jesus）とビセンテ、カルバリヨ（Vicente Carvalho）

先に精神のルカスについて記した如く、元和八年（1622）の大殉教は却て熱心な傳道者の日本渡來を促し、マニラの諸教團から決死の篤志家を集め、十人が一葉の舟に乘じ、商人に扮裝して、翌年日本に着した。こゝに述べる二人は共にオグスチノ會の改革派洗足教師で、フランシスコはイスパニア生れ、カルバリヨはポルトガル人であつて、二人は無二の心友として、爾來殆ど生死を共にした。此時は長崎奉行長谷川權六の下に背教者平藏が盛に迫害の毒手を振ひつゝある時で新着教師の困難は一通りでなかつた。カルバリヨは、種々變裝して、或は野菜賣や魚賣になつて市中に出、又木樵になつて出で働いた。フランシスコは二年半殆ど全く山中の洞穴に隱れて日本語を練習したが、その間或時イスパニア船が入港するのを見て、黑人の栗賣になつて、山を下つて船を訪問もした。又危く逮捕を免れた事もある。その手紙に曰く、

市中に起つた激しい雷雨（迫害）の爲に、山中に逃れることが出來ず、穴に隱れた。此穴はかういふ場合の用意に出來てゐて、極めて狹く、墓の樣なものであるが、その中で五日間過ごした。その間人々がわしにミサを誦して貰ふ爲に、時々その通路の穴をあけてくれるので、漸く時々日光を見たのみであつた。その後、暗夜に乘じ、女の着物を着て、多くの人に伴はれ、舟出の場處まで送られて、漸く逃げ出した。その隱れてゐる間に、その家へ三度まで搜索の手が入つて、捕卒等がパルレ、パルレと叫ぶ聲をきいた。若し隱場が穴でなくて厚壁の間（その樣なものが此町にはある）であつたら、見附けられてゐたに違ひなく、實際捕卒は壁を毀して搜したのである。……兎に角、デウスは、まだわしが召捕になる事を御容しにならぬので、わしの功德の足りない爲、又もつとデウスの爲に御勤めをせよとの御思召に違ひない。

かくする間にフランシスコの眼は布教開拓地たる東北地方に轉じ、その方面の研究をし、又計畫を立てて、終にそれを決行する事になつた。その事情を記した手紙に曰く、

その途には障礙が多く、新イスパニアの海（太平洋）に注ぐ無數の河を横ぎつて行く。色々躊躇の考も出たが、終に御主デウスの御爲に獻げる爲の苦勞と思つて、此の路を執る事にした。此の旅行は、デウスの御爲に定められたといふ確信を得、異樣の事でその確めを得たので、悅に滿ちて出發し

た。その異樣の事といふのは、榮ある教父聖フランシスの組に屬する一教師(ギユテエレス)と同伴するやうになつたので、此人は從來長い間、此旅路の案を立て、それは大に重要な事とはしてゐたが、まだそれが直に必要の事ともならぬので、敢行せずにゐた。然るに一日オラシヨを捧げてゐた時(從來自分の計畫を目當として種々科除(とがのぞき)の行を修し來つた)、ふとデウスに申上げた。「御主よ、二人の仲間がわたしと共に此の旅行をすると決心致しました(フランシス會の二人が行かうとしてゐた)。ついては尚ほ一人、わたしからその事を語らずとも、同行せうとする者があらば、此旅行は御思召に依つて致すといふ事が確になる次第と存じます。」かくデウスに申上げて數歩あるいた處へ、一人の日本人が來て、それはわしからの手紙を齎らしたものであつた。即ちこちらは全くその人の計畫を知らず、又互に示し合はせもしないで、只自分が旅行をせうとの考を述べて、その人の助言を求めた手紙を送つたのである。そこでこの高德は、神慮だといふ事を知り、天の心に充ちた和かな言葉で返事をくれ、わしの願ふ所を勵まし、同伴を許してくれた。此くして我等が落ち合つた時には、今まで準備してあつたものを總てわたしの爲にも分ち與へてくれた。

此の記述を見て、當時長崎に居る教師等の中に東北傳道の熱心が起りつつあつた狀態を想像するに足るが、愈々出發するに及むで、ギユテエレスは同伴し得ず、フランシスコは他の一ゼスイトと共に長崎を去り、奧州に入つたが、日本到着後三年、寬永三年(1626)の夏であつた。その翌年出した手紙に曰く

昨一六二六年(寬永三年)七月上旬、Fincari(東)と呼ぶ此の諸州に到着の後間もなく、尊臺に申上候如く、途中の困難試練と共に此の多難の時にデウスが下し賜ひし不思議の御合力と、萬艱難に堪ゆる樣助け賜はりし御恩の數々、盡きせず覺え候。試練の加はる每に、自分がデウスを敬ひ奉る爲に喜んで惱み申さんと思ひ、デウスを崇め申候。

此國に參り候爲に同伴たる兄弟ビセンテ(カルバリヨ)と相別れ申候も、畢竟は、此の土地に結ぶべき果實を收めん爲に有之、我等四人相伴つて此地方に參り候てより六千近くの人に洗禮を授け、自分のみにても千五百人をキリシタンに致し候。但し此も望む所の半に過ぎず、願ふ所は、此の地方に一人も我等の御主ゼススキリシトの誠のヒデスを知らぬ者なきに至らしむるにあり、御主が我等の爲に惱み賜ひし一分なりとも、心盡しに報ひ奉らばやと考へ候。

此地方は寒氣甚しく、御ミサを行ひ候間にも、カリスの中

も、瓶の中も凍る位に有之、高き峯には四季共に雪をいたゞき、風吹く時は氷の如くにて、又嵐も強く御座候。我等が疲勞と不便は中々に有之、又巡回には隱れ忍びて、常に警戒を怠らず、召捕にかゝらぬ樣に致す爲には、如何なる場處をも隱れがとして眠に就き申候。その上風雨にさらされ候次第なれば、我等が生き延び居候も、不思議と申す外なく存じ候。その間にありて身をかくし、みじめの中にも身を守り候は、御主が我等の爲に御悩みありし事を思ひ出す一事に有之候。此思ひを鎧として、何事にも打勝ち、心を慰めつつ、此の疲は世の歡樂に勝ると觀念仕候。

人々は心善良にて、洗禮を受け候者は熱心に救ひを求め候。今までにキリシタンに致し候者共の多くは、一ケ月打ち込みにオラショを捧げ申候。又此等の人々が自らの過を悔み候て、御宗旨を奉ずるに至る熱心を見候事は、一方ならぬ慰安に有之候。

最近、將軍より諸大名に更に嚴命有之、心の盜賊を捜り盡せよとの達し有之、此の危難の中、迫害の最中にもデウスが我等を護り賜はる樣に祈り奉るばかりに御座候。但し必要ありて、此のアニマと此身とを御用に立つる要もあらば、熱鐵にも堪え忍び、暴君が考へ出ださうするあらゆる拷問をも凌ぐべく存じ候。デウスを敬ひ奉る爲に、此の身の生命を捧げ奉るべき御恩命、御惠みを、我等の御主が下し賜はるべきや。此身の罪科はその御恩にはふさはしからずと恐縮仕候。

我等四人は、各々地方を受持ち、又各々いくつもの地方を受持つ要も有之候て、五十人の敎師ありとも、それにて足れりと思はれず候。我等が相會ふ事は極めて稀にて、折も少く、天候の妨も少からざる次第に御座候。

此中に伴侶四人とあるのは、一々の人名は不明であるが、ゼスス會の人も、フランシスス會の敎師もあつただけは確である。

フランシスコは、此くして二年餘奥州で働いた。その頃は丁度秋田の迫害と米澤の迫害との中間ではあつたが、その苦心努力は中々であつたに違ひない。右の手紙は一六二七年三月廿六日附で、米澤の北なる長井から出たものであるが、その長井は後に殉敎者を出してゐる事實に參照すれば、布敎の結果一面がそこに現はれたものと見るべきである。その後フランシスコが奥羽に於ける動靜は一々記錄がないが、不斷の活動、隱忍れの旅行に日を送つた事は想像される。

一方長崎に殘つたビセンテ・カルバリヨは、前に云つた樣に、木樵や八百屋をもしたが、それから段々に方法をかへ、或時はギータルをもつて歌を歌ひあるき（彼は生來音樂に長じて

ゐた）、或は街上でステテコおどりを演じて見物を笑はせ、或は劍舞をして見せるなどした。八百屋をするには日本服を着たといふから、容貌も多少は日本人に化け得たのであらう。又歌つたり跳つたりするにはポルトガルのマトロスになつたのであらう。彼は此の如く長崎や大村に在住して布教した。その後、迫害が益す峻烈になつた狀態は、左の手紙に現はれてゐる。

　奉行が行ひ候迫害の方法は他に類例なき位にて、長崎の信者を一人一人呼び出してキリシトの教を棄てよと迫り、段々に長談義を致し候て信仰を冷させ、且つ又種々の威嚇をも加へて背教せしむる樣致し候。然し喜ばしき事には、多くの信者は不動心を保ち候。迫害の始まり候頃、我等教師等相集まりて評議致候には、危難を顧みず、公に出でて教を傳へ、信者達に心を確にさせる方よかるべしとの事にて、此く實行する心算の處、信者等は、此事を聞き傳へて勇を鼓し力を得候につき、公の說法を實行する必要もなきに至り候。初回の迫害につゞいて、外國貿易に資本を卸したる者は、その資本を官に納めしむる事と致し、今まで數千兩の分限者も一文なしになりたる者も有之候。第三の手段としては、キリシタンたる者は、その生業に要する資材を與へざる事に致し候爲、今まで日々の仕事にて生活致し候者も、資源なく、饑を凌ぎ得ざる有樣と相成候。第四の手段は尙ほ苛酷にて、ポルトガル人やサングレー（Sangleyes 支那人でマニラ通商者）には家屋を貸さず、キリシタンが外商の店や庫へ參るを禁ぜられ、爲にポルトガル人は、キリシタンの家と交通出來ず、又召使をも得ざる事と相成候。かくてキリシタンたる者の名と年齡、その他を盡く奉行所の記錄に登錄致候。

　此等の禁壓方法は法令を參照すれば明になる事で、年月も分からうが、まだそれを確めない。但し大體奉行長谷川權六の時代だと推測する。それについで一層の酷法で直接迫害を加へたのが竹中采女であるが、カルバリヨは、その事を報じてゐる。

　今年、一六二九年八月の末頃、竹中采女といふ暴君が長崎の奉行職を承り、非常な暴威を以て、キリシタンを迫害し始め、何物も之を逃れるに由ない有樣である。殘忍な拷問、その他地獄の責苦を色々と工夫して、老若男女の數々をころばせた。迫害は全般に亙り、且つ異常の方法で行はれ、今此時此州では、有情非情、生者死人を問はず、又まだ生れない者でも、その影響を受けぬ者はなく、デウスの御教とその信徒に對する恐ろしい災厄の跡を留めぬ者はない。山にも迫害の手が充ち滿ちて、その叫聲で山々はふるへてゐる。岩石も、その中に避難者を隱さない樣にと割りくだかれる。林にも野

屋にも火をつけ、樹木の枝は、避難者をかくまはない樣にとて、焰に包まれる。水までも、キリシタンを助ける小船を浮ばせない樣にとて、見張がついてゐる。川水にも谷水にも血が流れて、暴威に惱まされる。野獸も、その穴を追ひ出され、森に歸り得ないで、同じ樣に壓迫を受けてゐる。男も女も小供も召捕られ、持物を取上げられ、或者は凌辱を受け、打擲せられ、又牢に入れられ、或者は生きながら燒かれ、又は竹の鋸で引きしごかれ、或は槍でつきさゝれ、或は首打になり、或は殘忍な拷問の數々を凌ぎ通して、永遠の榮えを得て死んで逝く。その外に特に嘆はしく痛はしい事は、生きてゐる者が迫害を受けるのみでなく、死んで長い年月を經た者をも、墓から掘出して、屍骸を燒き棄てる。此以上に申述べても、つまりは血の涙を流すのみである。百千の拷問で母に棄教させるのみならず、その胎内に宿る小供までも母の口で異教を奉じますと言はせる。此の如き猛獸の咆哮は近國をも震へさせ、近國の大名等もそれに似た殘忍のまねをするに至つた。此の如くにして、今年は下の諸國、即ち長崎、大村、五島、有馬、天草、肥後、肥前に亘つて迫害は行はれた。「有情非情、生者死者、皆迫害の害禍を受けてゐる」といふ一句は、實に當時の狀態を盡すと共に、又山林に隱れ、屢々露宿もして迫害裡に奮鬪した人の感想印象をよく表現してゐる。

此の如くにして事態急迫するに及むで、事をビセンテからフランシスコに通知してやつた。フランシスコにとつては東北の傳道もさる事ながら、兄弟の急をきいては、そのまゝに居られぬ。寛永五年(1628)フランシスコは長崎に歸つて來た。而して二人して、或は受難の人を援助し、殉教者の遺物を拾ひ集め、又信者を慰める爲に、聖オグステノの帶を分配し、又信仰弱い者を激勵し、落ちかゝる者を鞭韃した。かくして居る間に、右の手紙にある竹中采女の時代になつて、迫害は益す激しい、信心の慰安として祭式を行ふ事も出來ぬ。そこで二人は共に海を渡つて、五島の東北にある離島なる平島に落ち合ひ、そこで共にその年(寛永六年1629)の聖オグステノ祭(陽暦八月二十八日)を行ひ、それから又ビセンテは三重方面へ、フランシスコは雪の浦の山寄地方へ出かけて、信徒の慰安を勉めた。二人相別れる時、互に此が永別にならうも知れぬと告別したが、倘一度、二人とも平島に渡つた後、十一月、フランシスコは、雪の浦でその同宿ペドロ嘉兵衛と共に捕はれ、長崎へ送られた。奉行の前に出て堂々と討論したが、大村の牢舍に送られ、ギュテレスや石田ピントなどと一緒になつた。

一方、カルバリヨはそのまゝ平島に留まつたが、危難は勿論覺悟しなければならぬ。彼の兄弟フランシスコは既に捕はれ、平島での宿主も捕はれた。自分も名乘り出たいが、信者等の願で、出來るだけ身を全うする事にし、捕卒の來た時、十一月中旬山中に逃げ込むだ。その狀態は左の手紙に詳しい。

役人等が急いで此處に向つて來た。月曜の夕には二人の殿が大村から下つて來た。その到着の時の騷ぎで、來た意味は分かる。その事の知らせがあつたので、此島の面役（かほやく）たるペドロ吉右衛門 (Pedro Yochimon) を同行して山中に逃げた。その夜と次の夜、ペドロは山路の案內をしたが、次の土曜まで相分れ、その間山中で食物を搜し求めて來て又相會した。ペドロはその途中、男のペドロ嘉助 (Pedro Casuuki) に出逢つて、二人でわしの處へやつて來て、わしがまだ活きてゐるのを見、又自分等も死ぬ前のコンヒサンをする爲に來た。わしは月曜の晝に島で食事をしてから、次の土曜まで食も飮もなく過ごした。金曜にはホステア三片で滿足するのであるが、此は金曜ではなかつた。但し山中に持つて來た備品の中にその三片だけ貯へてあつた。こゝへ持つて來たのは、それと着てゐるキモン（着物）一つきりで、その外何もない、而して時は嚴寒の候であつた。只此くして苦む中にもその聖（たふと）き御名を唱へる事を御容し下さる御主デウスは、餓にも寒さにも又焰にもわしが倒れない樣にして下さつた。即ち（林を燒いた）焰は三度までわしの居る場處に近いたが、終に燒かれるまでには至らず、氣を慥にして待つてゐた。わしを搜す爲に、役人等は、面倒のかゝらぬ樣に、林や積草に火をつけたのである。此島は周圍二里に過ぎない小島であるのに、彼等は到頭わしを見附け得なかつた。それといふのも、わしの處在を知つてゐる村人が反間をしなかつた御蔭である。金曜の夜はひどく雨が降つて、わしはキモンをぬいでそれを乾したが、生命がなくなる樣に感じ、自分の罪を償ふ爲に淚を流して、御主に御恩の御禮を申上げた。わしを搜す爲に來た舟は、大村や長崎から來たのが、六人乘三十七艘であつた。終に捕はれたのは、同伴であつたフランシスコが捕はれて七日の後、聖カタリナの日（十一月二十五日）であつた。時候が冬の荒時であるので、三月まで舟が出得ないとの事である。即ち三月になれば、わしは召捕人として長崎へ入る事になる。

但し、實際大村の牢舍へ送られたのは、その年の中であつたらしく、そこにはフランシスコの外に石田ピントやギユテレスも居た。又此等の敎師をかくまつた者や、その他連累も多く捕はれて、大村と長崎との牢舍に分かたれた。

此から五十一人の牢中書簡は數多いが、一々年月を確め得ない。只在牢は二年足らずでその間に溫泉岳の拷問もあり、何れも皆殉敎の希望に燃え立つた意氣を示してゐる。多分入牢後、間もない時、十月廿五日附で、フランシスコがマニラの法侶へ送つた手紙を見るに、此の意氣込が特に熱烈に見える。それを抄略して出す。

……諸兄が小弟に對して表せらる愛情は、此身にとりての感激にて、又御主デウスの御惠の賜と信ず。此身は御惠をいたゞくにはふさはしからず、百のインヘルノに落つるとも贖ひ難き罪科（つみとが）の人間ながら、只罪科を懺悔する御許を得、その爲に血と命とを捧ぐるを得ば、誠に仕合なりと存ず。我等は共々、デウスと御主のグロリヤの爲に、又我等が信仰の家族の爲に心血を注ぐべく、現在あらゆる危難と試練に逢ふは、安全の港につきて、我々共々、又人々のアニマのよき仕合の爲に、番人として立ち得るに外ならず。……聖ベルナルドが宣ひし如く、「汝等は何の爲に敎に入りしや」との御言葉を繰返して心に銘すべきなり。……

今此身は牢舍の中にある身ながら、思へば初祖アダムよりうけ繼ぎたる血と肉との入牢者たる身、その鐵柵は此の牢舍の柵よりも堅固にて、人に救を垂れんとする如きは爲復の罪なる事を深く思ふ。……

かくてデウスの御惠によりて、その御手に入れられ、此の死し逝く肉體をすてて、不滅の生命に入るを得んには、此の祈りを、苦める同胞に回向しまつらん。此身を燒く火も近きにあり。その時の死を待ちつつ、徒に時を過ごすまじくのみ思ふ。

此は感想と意氣を主としてゐるが、カルバリヨの次の手紙は牢屋生活の狀態を物語る。

デウスを敬ひ奉る爲に、今我等が閉ちこめられてゐる牢舍は高山の麓にあり、その山の峯は二つの劍の如くになつてゐる（絹ヶ岳と五家原岳）。その山の下で、兩方に谷川が流れて、少しの雨でも牢舍の邊まで溢れて來る。室は極めて狹く、去年の牢舍は四疊に五人ゐたが、それよりも狹く、便所も一緒になつてゐる。然し去年マルチリヨに會ふために聖い仲間達が出て行かれた後、少し弘くはなつた。場所は濕氣多くどの風にもさらされ、四方柵を周らしてあるが、柵の木は手も通らぬ位に密接してゐる。身體の弱い者が、此の間にあつて、雪や霜柱にさらされて活きてゐられるのは、御主が惠みを垂れて此の試練に堪え得るやうにして下さる爲に外ならぬ。

その年、即ち寛永六年（一六二九）も過ぎて、次年の春は復活祭

の陽氣の時を暮らした。然し、牢中生活には、信心の喜の外は断腸の事のみ多い。フランシスコの左の手紙は涙の極である。

……パスコア（復活祭）の翌日、役人等が出て來て、祭の御祝ひを述べ、而して初に牢に入れてあつた小供等を連れ出した、それは此の小供等を町の家々に預けるのだといふ。その町の者といふのは、異教徒か背教者であるから、小供等を此の聖いキリシタンの者から遠けやうといふにある。それと同時に、平島で十歳から十三歳になる女の子等を捕へ、又三重で新婚後間もない若い婦人を捕へて、それを奴隷にした。此等の少女や婦人は、我等がその村へ行つた時には、聖歌を歌つてくれたアンジョの如き無垢の女人で、我等の心を慰め、我等の仕事や苦勞を助けてくれた淸淨の鳩である。彼等が二部のコーラスを歌ふのをきいて、心も淨まつたに、それ等の少女や若い婦人が暴君の奴隷となり、身も心も暴虐の餌食となると思へば、忍び得ない。特にその中で最も美はしい子等を、無耻暴虐の者に賣り渡し、婬樂の巷にさらさせるとは、思へば我が心はり割くばかりである。

世の波は荒い、然し同信の者が共に悲慘の獄中生活をする間には、又特殊なる法喜もある。日々のオラショは勿論、時々のミサ、「主の日每の祭式」何れも外形は整はないでも中心の信と喜とを以て共に行ふ。入獄の次年（1630）、右の手紙にあるパスコワの春去り、夏も過ぎた九月廿六日、フランシスコは、カルバリヨを立會人として、牢舍の中で、法弟等に授職の式を行つた。即ちカルバリヨの元同宿與右衛門は、聖秘蹟のペドロといふ名、八郎（Fukiro）はサンミゲルのルイスといふ名、吉郎はサンオグステノのルイスといふ名でイルマンの位を授けられ、他に二十三人は第三會員の資格を受け、四十六人は敎團の帶を授けられた。何れも皆在牢中のキリシタンである。その儀式も牢屋の中ながら嚴肅に行つたものらしく、その授職書はマニラへ送られて保存された。

三人イルマンの外に、此の六十九人（男女）の居村も名も皆明に傳はつてゐるが、此の儀式を受けたのは、彼等が此世で最後の喜びであつて、皆それと共に牢を出され、「此者共はキリシタンの法に隨ひて、御法度にもかゝはらず、その信心を棄てざる故に死刑に處せらるる者也」といふ張紙をして各々の居村へ送られた。第三會員になつた二十三人は、九月廿八日、各の村で火あぶりにされた（多くは三重村の者）。他の四十人も亦同様、或は火あぶり、或は斬罪になつた。續いて十月廿八日（陽曆）、入牢前にフランシスコからイルマンを與へられた者その他九人が、大村の寶扇原で殺された。フランシスコにとつては、

此亦斷腸の事であると共に、自分の身がそのまゝに生きて居るに堪えない思ひがある。先立つた法弟に對して、追弔追慕の意を表した祈りの文を草した。曰く、

聖き兄弟達、マルチレスの方々、我は御身達を羨しう存じ奉る。「眼未だ見ず、耳未だ聞かざる」報を百倍千倍にし賜はるデウスと御主の爲に惱み、苛責を受けて死に就き賜ふは、御身達にとりて、なんぼううれしかるべきぞ。我を扶け賜はれ、御身達を秀でたるグロリヤに案内申上げ、聖き衣を御身達に被せ參らせて、教職に入れ申せしは我が此身なるに、今御身達の死とその報とには與り得で、「我れ汝を識らず」の有樣にこ、又愚なる童女の如くなるは、我が科に相應はしかるべきも、此の哀れの我を憐み賜へ。聖きパウロ宣ふ如く、「我が喜ひ、我が冠なる我が子達、艱を共にする我友」、我は別の心を以て「我が子達、我が聖き兄弟、師父」と呼び申さん。我等のデウス、御主の御惠みを被りて、限なく御主を頼み奉りは致せど、自分と自分の過去を鏡に映して見れば、我が願[redacted]が達き得ぬ[redacted]譯を能く知り分くる事（罪の多いといふこと）を白狀して申上ぐ。されど、我等共々同じ生を享け、特には共に牢舍にありし幸をも得し事なれば、我は死に於ても御身達の跡を追ひまつらん望みを棄て申さず。「願ひは徐々に成長す」。此身、いつまで牢舍につながるゝやを知り申さず、又マニラにて長崎奉行所の人々を厚くもてなせし返禮として、我等を追放せんとの噂すらあり、若しさせる事にもならば、心苦しき限と存ずる。されど、御主は何事も最も善きを知ろしめし、惠みの御親樣は、常に我等の爲なるべき事を我等に下さるる故、何事もその思召に任せ奉るべきぞ。我が罪科の限なく數多き爲に、此度はデウスが御手を引き賜ふことありとも、尊君が我が此身を別に扱ひて、今まで屠場にひかるる爲に、此の牢舍を出て行き賜ひし先達の途を、我には踏ませざる樣の事なかるべしと信じ申す。

日本人の信徒はかくして殺したが、外國人その他主な人物については評定が區々であつたらしい。兎に角、何とか決定すべしとの議があつたものと見える。その十一月一日に、カルバリヨは、長崎在住の同國人全體にあてゝ自分の覺悟を告げた手紙を出してゐる。

今日、諸聖人の日の朝、此の町（大村）と近村とで薪を八十束集めよとの命が出たが、まだ秘密にしてあるとの事。尊君は我我に段々此の（火の）盃を呑ませるつもりと見える。而して現在、大村でも長崎でも、今まで牢舍にゐた者が、段々に、或は火で、或は血で、その仕事の結末を告げて行つた

後、牢舍も追追空になつて來たのだから、今火を燃す事を計畫してゐる理由は明白な事で、わしと同伴四人(即ちフランシスコとギユテレスト石田ピントと他の一人)が、命を御扶手(主救)の爲に捧げて最後の御勸めをする場面が始まる譯である。

此の莊嚴の行が、長崎で行はれて、諸兄が、少くとも遠方からでも御覽ある事を望むが、兎に角、此手紙を以て諸兄に御別れをする。……諸兄は今までも殉教の光景を見て、恐ろしくいたましい事と思はれたに違ひない。死の影は、それが花の臺の上であるにしても、人に恐れと痛みを感ぜしめるといふ事を否む人はなからう。それを見てふるひおのゝく人も幸であるが、おのゝいて而かも希望を失はぬ人は幸である。即ち見るだけでは足りない。見物に殉教を見る事はよすがよろしい。現にユダヤ人はゼススキリシトの死を見ても、恐れも抱かず、その人を十字架の上に眺めても、それに何等の希望を寄せなかつた。……之に反して、(共に殺された)盜賊は、御扶手の御名を崇めて、その報を受け、救の望みを得て天國に容れられた。幸なるは此の希望、デウスの御惠み、限なき忍受、量なき御思召、それに望を寄せない者があるべきや。デウスの御判を恐れず、自分の命をその御爲に捨てる故に從つて、デウスを敬はぬ者があらうか。兄弟達よ、此のわたしの如き罪人にすら天の賜を授けられるならば、何人かそれにはづれらうぞ。ゼススキリシトの御傷は、萬づの代價を拂ふて餘りある。それに望を寄せて、わたしも少々ながら火の中に入れば、御主のグロリヤに與り得ませう。此のグロリヤに與らしめ給へ。

然し、どうした事か、フランシスコ始め教師等は、そのまゝ大村の牢舍に閉ぢこめられて、尙ほ一年を過ごし、且つその間には尙一つ大きな試練を經べき運命になつてゐた。寛永八年(1631)の大部分については、何等の傳もないが、その年十一月廿五日(陽曆)フランシスコ、カルバリヨ、ギユテレス三人と石田ピントとは長崎の牢舍へ移された、そこには他の教師一人とポルトガル人の婦人母子が捕はれてゐた。奉行采女は種々の手段を用ひて彼等に棄教せしめうとしたが、總て無効に終つたので、殘酷な溫泉岳の水火責を思ひ立つた。十二月五日(陽曆)五人の教師と二人の婦人を長崎の牢舍から引き出し、日見から舟に乘せ、小濱から山に上らせた。溫泉の火口責は前にも一度あり、又その殘忍な苛責の様は弘く世に知れてゐるから、一々述べない。(但しモンタヌスなどの挿畫に出てゐる光景は誇張に過ぎてゐる。)此には、フランシスコがその火口熱湯噴出の様を記してゐるのを紹介する。

う、山頂に着いて見ると、火口と蒸氣の爐があり、其れは硫黄の氣が充ちて、其後經驗した熱湯の性質が、先づ以て感ぜられる。その日、金曜日の午後三時頃、五人の奉行は、從者衛卒をつれて、我等を拷問苛責の場につれ出し、地獄穴の側にある高みへ立たせた。廣さは畑の畝位であるが、水には硫黄氣が充ちて、三尺も高く吹き出し、又その熱湯が沸きながら流れる。此の水をキリシタンの身にふりかけるが、ふりかけられると、皮がむけて骨が露れ、尚ほ背の上にかけると背もとける樣である。此等の吹出し口には底がない樣で、それで下から沸き出すと海の浪の如く、それでも水かさは增さない。我々の此處に來たのは冬であるが、冬には沸き出が最も強く、他の部分は乾いてゐる。

その同じ山谷には又冷い水や、氷の樣な水があるが、その水に手をつけると、一回アベマリアを唱へる間に、腕がしびれる位になる。その外、熱湯もあれば溫浴に適した水もあり、又或る穴には火を吹き、泥を吹き、硫黄を出すもある。

此の如き浮山[illegible]の噴口の最中に我々は置かれたのである。山頂は中々高く、常に雪があり、寒さは酷しく、我々が三十一日そこに居た間に、薪を三千七百六十三束消費したといふ事である。長崎では溫和であつて、雪は少しもなかつたが、溫泉岳では聖ジュアンの日（陽暦十二月廿七日）には雪がふり出し、一夜で五寸近くも積もつた。而してそこを去るまで降雪は止み間なく、長崎に歸つて見れば、雪はなかつた。只十四里の距離でそれだけ違ふ。

此の記述には別に珍とすべき事はなく、溫泉岳に上つた事のある者には能く分かつてゐる事であるが、此の記述に於て特色として見るべき點は、フランシスコの客觀的態度にある。即ちその恐ろしい熱湯の中で苛責に逢ふた身であり、又前人がその經驗をしたのを知つてゐる身でありながら、その蒸氣熱湯の噴出を眼前に見て、殆ど傍觀者の如き冷靜の態度でその狀態を記述してゐる。此はフランシスコの精神が苛責の爲に煩悶し激昂せず、自分の身をも第三者の如くに觀察し得た餘裕の態度を示す者といふべく、即ち殉教の覺悟が進み、苛責にあつても心を他界に遊ばせた精神狀態の反映である。特に三十餘日間の苛責を經て長崎に歸り、山と海との氣候の差異を叙しても、別段の喜びをも表せず、單に事柄として記述してゐる如き、獨り苛責拷問の際のみでなく、長崎に歸つて後も、その冷靜な客觀的態度を保つてゐた事を示す。此だけの苛責を受けて、此だけ客觀的態度を維持したのは、恐らく他に類例がなからう。即ち此の一書は溫泉岳の記述として何の奇もないが、フランシスコの精

神狀態を傳へるものとして大に珍重すべきものである。

此の苛責の間には奇蹟をも傳へておるが、兎に角、七人何れも拷問に屈せず、役人も手を下し樣がなく、三十三日の後山を下り、長崎へ歸着したのは翌年（1632）一月五日であつた。フランシスコ等は又元の通り牢舍の身となつた。

長崎奉行は江戸へその顛末を報ずると共に指令を乞ふた。往復に手間取つたか、評定が長引いたか、寛永七年（1632）の半以上は空費して、處分として火刑を執行したのはその九月三日（略）。その處分の定まると共に、カルバリヨが皆に代つて執筆して、一書を長崎在留のポルトガル人に送つた。抄略して出す。

今日、九月二日、奉行の達しあり、火刑殉教の用意成り、明日執行との事、但し我等にして教を棄てさへすれば、赦免の上待遇を與へらるべしとの事。我等一同は、之に答へて、我等の命はデウスより賜はる所なれば、その思召によりてデウスへ返上し奉るのみにて、その御教を說く爲に命を棄つるは本懐至極なりと申遣したり。そのしもべ等の爲に不思議を現はし賜ふ御主に御榮あれ。

かくて、フランシスコとカルバリヨは一生を共にし、又死を共にした。運命を共にしたものギュテレスと石田と他に二人、その中一人は後に加へられた日本人イルマンであつた。屍骸の灰は例に依つて海へ投ぜられた

石田ピント（Pinto Ichida 又 Iscida）

慶長二十年（1615）夏、大阪の落城は幾多の悲劇を伴つて、キリシタンでその渦中に投ぜられた者も少くない。落城當時の狀態については、後にトルレス等の書簡を出さうが、此に記す石田ピントとその友木村レオナルドとはその餘波を受けた人々の中に屬する。

石田ピント、又の名はアントニヨ（Antonio）、島原の生れで、幼少から有馬と長崎のセミナリヨで修業し、一五八九年ゼスス會の教職に就き、木村と二人相並んで日本人パテル中の雄辯家、學德に秀でた人として仰がれた。二十年來九州と中國で傳道に從事してゐたが、慶長十九年の大追放には廣島に居て免れたが、福島正則が幕府の命に屈して、領內の教徒を追放するに及んで、他の教師等と共に、一度廣島を追はれた。然しその後又廣島に忍び込むで布教に從事してゐたが、大阪落城後、その敗將明石掃部の遺子內記を幕府が草を分けて捜し出さうとし、目をキリシタン仲間につけて厳しく捜索したので、石田も終に廣島で捕はれ、そこで入牢した。（木村は豐後で捕はれて長崎へ送られ、三年の後殺された）。それから暫くの時、ピントの

運命は不明で、一方には、中國筋で活動してゐたといふ記錄があると共に、又大村の牢に居たらしい形跡もある。然し大體確かな事は、その間にどうしてか牢舍を出て、又隱れ忍むで長崎邊で活動してゐた事で、最後再び召捕られる寛永六年（1629）まで約六年間はその潜伏傳道の時代である。此は獨り石田のみならず、總て他の教師も同樣で、家から家に、或は穴から穴に移り、その間に信徒のコンヒサンを聽く、ミサを行ふ外に、又未信者を感化して洗禮を施す、此の如きものがその生活であつた。その狀態が書簡の中に現れたのもあり、追々に之を示さうが、石田ピントは、終に此の如き傳道の中に、長崎で捕へられ、奉行采女に對して說法し、終に殉教した。その召捕の事情を報じた手紙に曰く、

長い間會はなかつたジョアン・ダ・コスタ（Joan da Costa）に會ふ爲に大村に着くと、間もなく管區長の手紙を受取つた。即ち即刻長崎に引返して、病人でコンヒサンを願ふ者に會つてやれとの事である。ベント・ヘルナンデスは、それは[redacted]る危[redacted]たといつてくれたが、アニマ（魂靈）の助けになる爲に召捕られる覺悟で心を決した。又同じパデレは、勸めて、大村の方が幾分迫害の危險が少いから、コンヒサンを濟ませたら、成るべく早く歸つて來る樣にと云つてくれた。

兎に角歸るつもりで、大村に向つたが、段々にコンヒサンを聽取る必要が生じて尙ほ六日滯留する事になつた。而して歸途に就かうとする時、役所から澤山の人が、大村の元の駐在所へ來て、教師は居ないかと搜索したとの報を得た。暫く待合す爲に滯在してゐる間にギュテレス靈父は召捕られた。そこでわしの宿をしてゐた者は、出てくれといふので、其の夜はデーゴ嘉兵衛の家で過ごした。即ち前の宿主がわしをとめておかないので、嘉兵衛が自分の家にかくまつてくれたのである。然し宿主に迷惑のかゝらぬ樣に、翌日同宿一人を他の家へ送つた。

四日目に聖きミサを唱へ、心をこめて我が生命をデウス樣に奉る事を申上げた。その朝、食事を終つて直に、騷がしく音がして、采女の士が兩刀を帶びて家に入つて來た。而してわしの何人であるかを問ふから、その意味を知り、直に「わたしはパデレで教師でござる」と答へた。士は「お前を召捕に來たのだ」と云ひ、つゞいて捕卒が澤山家中に入込むで來た。わしは腕を出して、思ふ通り縛つてくれと示した。その一人が懷から取繩を出してわしを縛つたが、その外では總て丁寧に扱つた。かくして、わしとデーゴとは共に奉行所に引立てられた。そこで暫の片島九郎右衞門は、キリシタンの信

仰を棄てる様にと熱心に勸告し、さすれば譯なく生命は助かると云つてくれた。それに答へて、自分は生命をも、又此世の何物をも惜まないと云ひ切つた。五郎右衞門は、わしを牢屋へ入れたが、そこにはバルトロメ・ギユテレス靈父と、その同宿ジユアンと、召使のミゲルとが先に入れられ、皆鐵の鎖で足を縛られてゐた。わしにはその外に尙鐵の首枷で首をしめさせた。幾人かの士がわしを見に來て、役人に問はれた時、即座に正直に敎師だと答へたのはよかつたと話してくれた。

その後、殿の六郎右門はわしを自分の室に召したので、そこで我等の聖き御法の眞理なる事を說きかせた。釆女（長崎奉行）も亦わしを自分の住所へ呼びよせて、宗門の敎師から取り上げた敎職の服裝を色々と見せ、特に上衣と金架の用法を問ふた。そこで、それ等は、說法をしたり祭式を行ふ時に用ふるのだと、答へたが、釆女はどういふ樣に使ふか見せてくれといふ。そこでわしは上衣を着、金架を頸にかけて見せた。釆女はそれを見つつ、坊主（佛僧）の裝束よりも此の方が遙かに好いといふ。それを脫がうとすると、それを着けたまゝに座敷の上座に坐つて見せよといふ。その云ふ通りにし、又此かあれかと考へて見て、キリシタン信仰の眞理について說法し初めた。その述べ方は自分にも莊重に感じ、迫害が嚴しくなつて以來未だ曾てなかつた程堂々と說法をした。釆女は好むでそれを聽き、二三の難問を出したが、その鋭い智力で、こちらの答を能く理會し、又それを尤もだとした。但しそれに加へて云ふには、「どうしてもその敎を棄ることは出來ないか」と。それに答へて云つた、「此の敎が無上の眞理で、その外に救はなしと說いて居ります事を棄てよと仰せられるは、慮外至極でござる」と。彼は云ふ、「誠にその通り、その答は賢者の言葉、又眞に勇ある人の言葉で、その樣な人こそ誠にお上にとつての眞の御家來である。それに比べると、我等は盜賊の樣なもので、祿を得る爲には君に對して誓を立て、君の爲に生命を捧げませうと云ひながら、まさかの時には、君に背き、君に刃を向ける者も少くない。」此の話しの後に、釆女は、裝飾一つだけを殘し、その他と澤山の書物とを一纏めにし、中庭に設けた爐で燒き、その灰を海に投げ入れさせた。而して人々が尊敬してゐた此等の物を無下に處置するのはよくないから、こうするのだと附け加へた。

次の午後再び召び出されたが、今度は澤山の人がその場に居て、わしを論破し、又論破した樣に見せる爲に集まつたのだから、一々その論難に答へる樣にといふ事で、茶を出した。此は頗る敬意を表した譯で、一應の挨拶が終つて、此等の學

者が難問を出し、わしはそれに答へた。色々應答の後、彼等が勸告として、爭論を止めて、釆女の言附に從ひ、日本の宗旨のどれかを奉じてはどうかといふ。わしの答へによつて、尚ほ問答してその樣な愚を勸めても無益だと思つたと見えて、皆立去り、跡には釆女のみ殘つた。彼等が出て行くと入違に、六右衞門殿が入つて來て、ポルトガル人からゼロニモ・マセドを放免してくれと申込むで來た書類を齎らし、わしにそれを讀むで譯してくれといふ。その時は夕に近く、釆女はわしを送らせた。次の朝、十二月十日、釆女は江戸へ向け出發し、四人の召捕教師を大村へ送れといふ命を殘して行つた。

奉行竹中釆女が江戸へ行つたのは、バテレン處分について尚ほ上意を伺ふ爲であつたが、處分は決し得なかつたと見え、石田はその後三年の間在牢の生活をつゞけた。その間に一度大村の牢舍に移されて、再び長崎に移り、再び宗論の樣な議論をもやつた。それは寛永八年（1631）の末であつたといふが、神道家（蓋し吉田流の）齋藤權内といふ者が、その主任で、議論と共に種々棄教を勸め、且つその決心をするまで一年間でも未決の狀態においてやるから、考へて見よといふ。石田は、自分の信心の動かすべからざる事、その樣な勸告の總て無効なる事を明快に云ひ切つた。その中には、神道でいふ太虚は即ちキリシタンのデウスと同じだといふ樣な議論もあれば、内心は兎に角表面だけお上の命に從へなどいふ甘言もあつたが、石田は總て之を拒絶し、その問答は一晝夜つゞいたといふ。尚ほ手をかへて他の佛僧に問答をさせたが、總て無効である。石田が牢中から友人に出した手紙は、殉教の決心を語り、此の前後のものかと思はれる。

釆女が歸れば、わしの火刑も定まると考へてゐたが、そうならぬらしく、つまりわしの罪が重いから、デウスの御心がそれを御きめ下さらぬのである。此の嘆を兄にお知らせするに言葉に餘る。但しデウスの御思召が定まると共に、わしは自分の願を棄てゝその命に服從すべきである。我が命（いのち）をデウスに捧げ奉つた以上、此の生命の殘りがどうならうと、總てその御思召に任せうと祈るのみである。此の牢の中に送る日數が重なるとも、又自分の躊躇が御思召に叶はずとも、その大きな御惠を蒙るべき望は失はずにゐる。

かゝる間に、奉行釆女は、石田とその徒の決心が言論では動かぬと見て、異常の拷問苛責で之を屈せうとした。即ち溫泉嶽（ウンゼン）の熱責で、寛永八年閏十月十日（陽曆十二月三日）ギュテレスや石田始め、五人の教師と二人の婦人とを溫泉の噴火口へ送つた。その間の苛責は、鮮血遺書に記してあり（但し同書前後の事には誤謬が多い）又前

にも少々記したから、之を略する。兎に角、熱地獄の苛責も彼等の信心を棄てさせるに力なく、役人等も根氣まけをして、彼等を長崎に連れ歸つたは、三十餘日の後であつた。彼等は又元の如く牢舍の人となつた。（その場處はクルス町即ち今の爐粕町であつたと云ふ）。

此等の轉末は總て江戶へ報ぜられ、處分についての評議は中中手間どつたと見え、最後の指命が來たのは翌九年七月で、皆を立山で火あぶりにする事になつた。その言渡しのあつたのが八月六日（陽曆九月二日）その前に、采女は尙一應、五人の中三人の日本人だけは、何とかして棄教させうとし、各を一時、背教者で今は奉行所の役を勤めてゐる者に預けた。石田が預けられたのは、元は同じくアントニヨといふ名を帶びてゐた作右衞門の家で、その家は曾て司教セルケイラの住むでゐた大厦である。石田は作右衞門に對して云つた『此家は、自分が靑年の時に學問を重ねた家で、此處に來るにつけても愈よデウスの御恩を思はざるを得ない。此處で御敎を知り、救の御乳をいたゞいて以來、幾十年、微力ながらその敎を傳へる一生を送つて今日に及び申した。此の場處で斷じて兄に云ふ、自分は血と命とを御敎の爲に捧げ奉る。兄も願くは一旦の過を改めて眞心に立歸られよ。』

最後の日は來た。八月七日（陽曆九月三日）立山で火あぶりの用意は調つてゐる。殉教者は聖歌を唱へて進む、見物の中には之に和して歌ふ者もある。火は燃え上り、中央で總大將ともいふべきヂユテレスは、部下を眺めて後呼吸たへ、他も段々之に續き、石田アントニヨは六十三年の一生を終つた。屍骸は灰にして海に投げすてられた。

天使のジロラモ（Girolamo de Angelis）

名はジモラモ、「天使の」といふ別名がついてゐるが、他にジロラモ又はゼロニモ（二つとも同じで、又エロニモともいふ）があり、紛はしいから、玆にはアンゼリスと呼ぶ。元和九年（1623）十月、江戶で五十人を火あぶりにし、殉教史としては、その花々しい最後が、鮮血遺書などで、世に知れてゐるが、その人は又大きな傳道者、計畫者、又旅行探檢家であつた。その才智と規模と熱情とに於て、切支丹傳道史中有數の人物である。

アンゼリスは一五六八年シシリア島で生まれ、十八歲にしてゼスス會に入つて誓を立てた。後に話すスピノラと同時で又常と同伴してゐた。一イルマンとして西印度傳道中、イギリス人に捕へられ、英國で捕虜生活をした後、ポルトガルに歸つてパテルとなり、スピノラと共に東印度に出かけ、天川に來て二十餘年。スピノラ一行と共に日本に着いたのは、迫害が段々起りつつあつた慶長七年（1602）。但しその頃は、一般にキリシタ

ンの繁昌期であつた。長崎から伏見に來て駐在所を管理し、又駿府へも出かけて傳道所を設け、江戸にも同じく傳道所を設けて、東海道で活動した。慶長十九年の大追放の時には駿府に居たが、うまくにげて長崎に隱れ忍むだ。翌年大阪に出て、夏の陣にはトルレス等と共に、落城敗殘の仲間に加はり、一旦山林に隱れたのを見附けられ、召捕られたが、或る武士に助けられて難を逃れた。

そこでアンゼリスが眼を轉じたのは、敎勢未開の東北地方で、恰もその前年京阪から、身分あるキリシタン七十三人が津輕に流民となつて、敎師の來訪を求めて來た。そこで直にその方に出かけた。途中の困難もあつたに違ひないから、奧州に足を入れたのは、その年の末と思はれ、左の手紙はこの初回旅行の中から出したので、或は會津の山を越したかと想像される。文に曰く、

こゝへ參るは二つ險しい山を越ゆる外なく、その路は險阻にてすべり易く、日本にては他に例なかるべしと思はれ、見るも恐ろしき程に候。幾度が松林の中を通り、雲かゝる峯をいくつか越えつつ、足下の危かりしも幾度かにて、時には下へころびて谷底に呑まれはせずやと思はれし程に御座候。雪は積もり固まりて城壁の如く、近き得ず、飛び越は尙更出來ず、此より先一步も踏み出し得ざるべしと考へしも度々に候。旅は總て步行にて、糧もなく、又山の頂には人の住家とてもなければ、食を求むる事も出來申さず候。……

尙ほ進みて、津輕に流され候キリシタンを慰問して、その力とならばやと、其方に參り、人々を國に分ち、國毎に仕事を果す爲に團の頭を定めおき候。

今居り候處は、危難多き處にて、(八甲田山の邊か)追剝の出る事も多く、見渡す限り住む人とてはなく、草木もなき野原のみに候。晝となく夜となく、時々うたゝねを致すのみに候が、デウスの御惠みの床の中に眠り候。思ひ立ちし事を捨つべきにあらず、此邊の人は田舍者にて、禮儀はなきも、溫和にて信仰の修行を受くるには適し候。……尙ほ書かまほしくは候へども、紙盡き、いづくに求めても一葉の紙も無之候。

此から以後、アンゼリスは東北の敎區長として、自ら傳道旅行をする外に、計畫を立て、人々を配置し、而して同時に、段段諸藩に起る迫害と鬪つた。その間、或年には一千人に新に洗禮を授けた事もある。又佐渡や越後にも巡回し、江戸との間を往復して、聯絡をとり、終には江戸で捕はれる事になるが、その東北布敎の間に段々出て來たのは蝦夷布敎の計畫である。蝦夷の松前では、丁度此頃に砂金採取が始まつて、その方に出かける者が多くなり、その中には信者もあり、且つ松前の殿が先に招いだ醫者がキリシタンであつた關係なぞで、多少の聯絡はついてゐたのである。アンゼリスは、どうしてか新潟を出發點にして舟で松前に行く途を便としてゐるが、兎に角、此も敎れ

が傳道計畫と共に探檢的精神をもつてゐたしるしで、その後ディゴ・カルバリヨやゼズスのフランシスコといふ敎師が蝦夷に出かけたのも、アンゼリスの指導に依つたものと考へられる。兎に角、アンゼリスは蝦夷開敎の中心人物で、その傳道旅行がどれだけ奧蝦夷に進むだかは不明であるが、それに關するアンゼリスの報告は、今から云はゞ誤はあるにしても、地理的頭腦の明な人であつた事を證する。報告の中地理に關して左の如く述べてゐる。

蝦夷（Yesso）が一つの島だといふのが、あながち間違ではなかつたと考へられる、而して此の考を支へる證據は下の通りである。第一此國は東と南とは海に濱してゐるが、他の一面、即ち天鹽（Tessoi）の方、即ち蝦夷の西の端には第三の海があつて、その邊は潮流が中々強く、その對岸は馬の通るのを見分ける程に近いに拘らず、蝦夷の住民は之を横ぎり得ないといふ。即ちその潮流の中程に大きな渦卷があつて、彼等の小舟では、それを犯して進むのが危險であるといふ。そこで、自分の決論としては、蝦夷には北方に第四の海があると、どう見ても考へられるといふ事で、韃靼（Tartaria）との間には海があるといふことになる。即ち東と西との海がその北方で連なつて、それが南の方に注ぐと見なければ、此だけの強い潮流があつて、土地の住民すらそれを横ぎり得ないといふことを說明し得ない。[illegible]

第二の理由は、蝦夷人の間には君主といふものが全くなく、一局部だけの王もないといふ事で、韃靼人の間にある汗（Khan）の如き王も帝もなく、家族毎に、又は大くとも小地方に長があるに過ぎないで、各々獨立してゐる。即ち大陸隣地と海で分れてゐる爲に、その政治組織も異なると見る外はない。

第一に擧げた理由に對して反對論は出し得る。即ちその強い潮流は、大河のはけ口から出るので、その河口は天鹽より數度北の方にあると見られる。事實、蝦夷には、その河口で鯨のとれる程深い河もあるので、蝦夷人はそれを松前へ賣りに來る。それ故、蝦夷と韃靼との間に、此の様な大きな河があつて、そのはけ水の爲に強い潮流が生ずるとも見られない事はない。それにしても、自分はその間に海の枝があると見る方が至當と考へる。シシリアで前に見た世界圖にも蝦夷を島としてあつた。但し住民の中で、東から來た者にも西から來た者にも、此間をかけたが、彼等は全く何も知らない。

自分の考では、天鹽と朝鮮とは互に對岸になつてゐると思ふが、その根據は下の通り。蝦夷人の語る所によれば、松前から天鹽に行くには六十日かゝり、その間西へ西へと行くといふ。そこで自分の決論は、天鹽と相對して、朝鮮、即ちオランカイ（Orancay）の國があり、それは通常いふ朝鮮の北にある。日本人の云ふ所によれば、下（九州）の港なる

護屋から朝鮮の端まで、海路八十里あり、而して名護屋から、越後の港なる新潟（Nigara）へ陸路を行けば、三十三四日かゝる。即ち名護屋から長門の港なる下ノ關（Ximon-osegui）まで五日、下ノ關から京（Meaco）まで十三日、京から加賀まで五日、而して加賀から新潟まで十日、但し一日に十里あるくとして。そこで朝鮮の端から新潟まで陸路程とすれば四十日で、此の新潟は松前と相對してゐる。而して前に述べた通り、新潟から陸路天鹽に行くとするれば、そこから舟出し得るまで六十日。此の二つの道程を考へて朝鮮と天鹽とは對岸だと斷定したい。朝鮮の海岸は大體直線に北から南に延びてゐるから、その北端は日本に近い端と南北直通と見るべく、從つて新潟と朝鮮の端（南）との距離は、松前と朝鮮の北端との距離と略々同じであるべく、新潟から松前に行く線と、朝鮮の南北貫通の線とは、何れも略直線で平行してゐると見るべきである。

此に對して異論を出し得る。即ち松前と朝鮮の北端を連ねる線と、新潟と朝鮮半島の南端とを連ねる線が同じ長さだとすれば、蝦夷人が松前から天鹽（天鹽が朝鮮の北に近いとして）へ行くには四十二日しかかゝらぬ筈で、然りとすれば、日本人が、朝鮮の南端に面して居る新潟から陸路を行くのは、松前から天鹽に行くと同じ位の日取であるべきだと。此の異議に對する答辯はかうである。蝦夷の道路が日本の様によくば、その通であるが、道路が惡い。その上、蝦夷人は一家族擧つて出かける上に、途々供給を得る方法がないから、何も彼も持つて出かけ、日沒近くには野宿する爲に準備を要するから、彼等の旅行は長くかゝるのである。

その他、アイヌの風俗、生活、宗教、言語についても種々の點を報告してゐる。例へば、女子の數が多いが、夫婦關係が正しく、姦通を嚴罰する事、能く飲むが、割合に泥醉せぬ事、一般に性質が溫和で正直な事など、外見以外の觀察をしてゐる。衣服の裝飾について、十字模樣の多いのに着目して、その理由をアイヌにきいても、幸福のしるしといふ外に何も知らない或はキリシタンの十字でないかといふ點をも述べてゐる。而して宗教については日と月とに大人がゐるといふ外、何か萬物の主を信じてゐるらしいが、儀式や司祭はないと記してゐる。熊祭は見なかつたらしい。

此は兎に角として、アンゼリスの傳道は、此の如く奥羽から越後、佐度、松前に及び、段々計劃を進めてゐたが、元和九年（1923）江戸に出てゐた間に、その宿主が召捕られて拷問に苦められるを見るに忍びず、自ら名乘出て捕はれた。十月十三日（陽暦十二月四日）アンゼリスは五十人の信徒と共に火あぶりになつて、六十五歳の一期を終つた。此の火刑の事は廣く知られてゐるから略する。

想華

西洋羈旅小品

齋藤茂吉

一 復活祭

耶蘇復活祭の休を利用して、墺太利の Badgastein(バアドガシユタイン) に行つたことがある。それは西暦一九二三年四月であつた。此處は遂にはドナウに灑ぐべき Ache(アツヘ)川の谿谷をば南へ南へと入つたところにある湯治場である。溫泉は旣に中世紀から世に知られて、神經の病にいゝといふ評判を立てゝゐる。

僕は夜になつて其處に著いた。小さな汽車が谿を見おろしながら南下したが、峽間には雪が未だ眞白に殘つてゐた。隧道がところどころにあり、對うがはの山腹からは糸のやうな瀧が懸かつてゐるのが見え、或るところでは小鴉が群をなして飛んで居りて、谿谷がいよいよ深くなつて行つたときに汽車に吠えかかる犬などもゐた。春寒い季節の太陽ははやくも沒して、遙か彼方の高原どそこに散點する家屋とのうへに靜かな殘光をとどめてゐた。

途中から月が登つて谿谷を照らした。停車場は高いところにあつたから、そこで降りて谿間の方へ下つて行き、さゝ

やかな旅舎を見當てた。そして、湧き出る溫泉に浴して一夜ねむつたのである。

朝目ざめてみると、あたりは一面の山であつて、その谿底のあたりは僕が今ゐるところである。けふは耶蘇復活の日で、男女相群つて古風な加特力の寺院の前に集まつてゐるが、男も女も盡く古い服裝で、現代の歐羅巴のいづれの都市でも見られないものである。女は媼も、媍婦も、娘も、皿のやうな帽子をかぶり黑いリボンが二房ながく後の方に垂れてゐた。黑く長い服は臀を膨ませて、幾たりも幾たりも群がつて來る。このあたり一帶の斯の如き服裝は傳來の Salzburger Trachtである。

さういふ群衆はかたまつて皆寺のなかに入つて行つたところ、僕はひとり谿間の瀧の落つる近くの巖の上に座して、水のとどろきしぶくのを見てゐた。それを別に不思議とも思はず、變に孤獨な氣分などは微塵もないのである。その時寺院から鳴り出した鐘は幾つもつづき、鐘聲は殷々として谿谷に滿ちた。愉悅にあふれて耶蘇復活をうたふ老若男女が歡喜踊躍のこゑを遠くに聞いてゐると、山上より銃聲がした。この音は谿にひびき、續る山々に反響（こだま）して、雷のやうな音をさせた。鋭く粉碎するやうなその反響（こだま）の消えかかつた頃に第二の銃聲がした。銃聲は二たび群山に反響（こだま）した。それが消えかかるとまた銃聲がした。銃聲はもう一遍反響（こだま）して、ゴゴゴゴウといふやうな音をさせながら奧谿の方へ消えて行つた。

銃聲は、殺戮畏怖の氣遣さへなければすなはち壯快の音である。この山間の獵師どもが、嘗て耶蘇復活の歡喜踊躍の日に當つて、山上に鐵砲を打つたといふことは、そこにちつとも無理がない。銃聲は十ぐらゐ續けばいいと思つて期待したが、つひに聞こえずにしまつた。ただ僕は今日この山間に來て、古代の服裝を見、古代からの風習の斷片を經驗してそれだけで滿足したのである。

大勢の男女が寺院から出て、銘々の家に歸りかけた中に交つて僕はしばらく歩いたが、若い娘のうちには頰の紅い、眼の清明な、健康な體力を持つてゐるのが幾らもゐる。僕は慇懃に願つてその三人ばかりの寫眞を撮つた。その一人は可哀い豐かな娘であつた。その娘とつれ立つてしばらく行つたところが、その娘は或る旅舍の中に這入つて行つた。僕は旅舍の門前で娘と分かれ、一人で奧谿へ入るのであるが、樅の林の下道はいまだ一面の雪で蔽はれてゐる。僕はその白雪を踏んで奧へ奧へと行つた。谿はいよいよ深く、峻嶺が眼前にのしかゝるやうに見え出して來て、或る處には瀧が懸り、山腹から流し出された土壤砂礫が存分の放恣を以て谿谷の一部を埋めてゐるところなどもある。人家も粗末になり、山間古風のおもかげをその儘とどめてゐた。とある小家の前に來ると、frische Gebirge-Forellen. gute Mittags-u. Jausenstation などといふ看板が懸かつてゐたりした。『山中の魚あり』といふ看板を見ると岩魚とか山女魚なんかを想像するのであつた。Forelle はドナウ河のを食べたが、山中のものは味は違ふに相違ない。

こんなこととして約三時間ばかり歩き、ひもじくなつて歸路に就いた。ゆふぐれに近く、先程娘とわかれた旅舍のところに來て、旅舍をあふぐと、さつきの娘はもうすつかり現代風の女中の服裝になつて、甲斐甲斐しく窓のところで働いてゐた。僕は窓の方に向いて手を振つた。娘はちよいと目を大きくして、まことに具合のいゝ素振をしたのであつたが、その夜僕は自分の旅舍に歸り、食堂に入つて粗末な料理を食ひ、ザルツブルグの麥酒に醉うて陶然としてゐると、食堂には村の者が入りかはり立ちかはり來ては麥酒を飲み、大ごゑ擧げて話をしてゐる。

僕のそばに一人の大男が來て、すでに少し醉うてゐるらしいのが、また麥酒の大杯を飲みはじめた。しばらくすると、僕の顏に彼の顏をおし付けるやうに近づけて、唄を歌ひはじめた。氣味わるいやうであるけれども、僕は麥酒の勢でそれを左程に感じない。また彼は繰返してその歌をうたふが、意味が能く分からぬから僕は反應をしない。僕は手帳と鉛

筆とを彼に渡した。おぼつかない、讀にくい獨逸文字で書かれたのを讀んでみると、『狩犬が多勢で、兎はとうとうやられて、しまつた。』といふ唄であつた。僕等は互に醉つて小一時間ばかり戰爭の話をした。僕も醉つてしまつて、『第一君等の墺太利軍が腑拔けだつたんだね。あの小ぽけなセルビアの首府を陷ることが出來なかつたんだからね』など〻いふと、『そんなことはない。あす僕の處へ來給へ。僕は君に見せるものがある。併し僕も命が助かつて好かつた。このへんの若者ども〻だいぶやられたからね』など〻云つた。

次の日、僕はその男の處をたづねて行つた。その男は此處の湯治場で雜貨店を開いて居り、年寄つた兩親と弟妹が居て僕を紹介して與れた。そこに、サアベルを持つて來てずらりと拔いたかとおもふと、床板の上にいきなりた〻きつける樣にした。サアベルはへなへなといふ光を投げて、その刃尖が床上に突刺さつて立つた。刃の搖らぎがいまだ靜まらずに居るときに、『どうだ君。これだぜ』と云つた。

その男は曹長ぐらゐの身分であることが分かつた。そして如何にも剽悍なやうな樣子をしたので弟妹どもも聲あげて笑つた。男はいまだ獨身であつた。書齋も寢室も一しよで、机のうへにはいろいろの物が、ごたごたと飾つてあつた。男は僕に繪葉書と木細工のやうなものを與れた。

僕は其日の午後にこの湯治場を立つて、Innsbruck(インスブルツク) の方へ向つた。そして維也納に歸つてからその男に禮の書面を書き、なかに日本郵便切手の數片を封じたのであつた。その時にも僕は思つた。一體墺太利軍の兵士はそんなに脆弱な筈はない。いくら泰平に馴れたと謂つても、山間深く生長した彼の曹長みたやうなものから組織されてゐる軍隊の弱い筈はない。墺太利軍の不甲斐なかつたのは、恐らく高級幹部の弱味に本づいてゐるのであらう。維也納を中心とした爛熟の生活は遂に高級幹部をして薄弱地獄に墮落せしめたのではあるまいか。これは今でも僕はさう思つてゐる。

二 水源地行

維也納の咖啡店では、必ず給仕は一杯の清水を持つて來ることは誰でも知つて居る。僕が夏の暑い日に教室から疲れて歸つて來ると、宿の年寄つた婢は必ず一杯の清水を持つて來て呉れるのを常としてゐた。それほど維也納の水道水は好く且つ冷いのである。また維也納の人々はそれを自慢にしてゐるのである。

或る時、日本の衞生學者M博士の肝煎で、大學の衞生學教室から市役所の方に交渉してもらひ、市役所の役人案内附で、日本留學生の同勢十五六人が維也納水道の源を見に行つたことがある。

汽車は墺太利國を南下して數時間行くと、或驛で降りた。それから材木などを運ぶやうな大きな自動車に同乘して山地の方へ這入つて行つた。そして、無菌の泉と、それを送り出す爲掛けとをいろいろ見た。靜かな林中に幾つかの泉があり、それを手入してあるから深い井になつてゐる。役人はその蓋を取除いて見せた。水面は深く鏡のやうに光つて僕等の顏をうつしてゐた。是等の泉の水は濾過せずに動力で鐵管に移すことが出來るのである。

水源地はさういふのが三ケ所も四ケ所もあつた。それから皆が徒歩で小一里も山中に入つて行き、そこにも水源地はあつた。水源地の門の扉には、フランツ・ヨゼフ第一世の名が鐫んである。

役人は鍵をあけて呉れて僕等を中へ導いた。中は巖石から成る非常に大きい洞窟であつて、そこには氷點に近い寒冷の水が洞窟内に溢れんばかりの量で轟(とゞろ)き落ちてゐる。寒いので皆が身ぶるひをし、眼鏡が曇つた。落ちた水が下の方で白泡を立て渦卷いてゐるのが見える。皆がそれを見おろしながら鐵欄につかまつて通つて行つた。洞窟の奥の方に行くとやはり同じやうな自然水を導いて來たところがあつて、約三間もあらうといふ幅の處は水が何の抵抗も無しに非常な

速さで流れてゐる。是等の山中洞窟にみなぎり流れてゐる自然水は全くの無菌で、その儘維也納の市におくつてゐるのであつた。僕等は恵まれた自然と、人爲的設備とに驚嘆しながら暫時その水流を見てゐた。

その時、ドクトルS君はひよいと身をかがめたかと思ふ途端に、いきほひ流れてゐる水に口をつけて飲みはじめた。驚いて、『おい。君よせ』といつた者もある。『しいつ』と注意したものもある。けれども導いて來た役人は氣附かなかつた様子である。胃の中に思ふ存分この寒冷な水を飲込んだS君は、身を起して、『あゝ旨い』といつた。『旨いぢやないよ君』などといふこゑもした。むすぶ手のしづくに濁る山の井のなどといふ歌句があるけれども、この深秘境の水をその儘飲んだものは、先づ無からうか。なにせ唇を接して吸込んだのであるから。

僕等が其處を出てしばらくあたりを散歩した。このあたりには今でも流離の族が住んでゐるので、五六の童幼の遊んでゐるのを見た。顔などは日に燒けて土の色をして、それでも嬉しさうに何か云ふのを聞くと、やはり彼等の生長力に氣を引かれた。これから維也納の教室で爲事をやつてしまはうといふ僕なども、雜草の延びるやうな是等の童幼を見て幾分の力便(ちからだより)になるのであつた。

歸りがけに、Sの奴は下等で無禮だといふ者もゐた。異境にゐるとみんなが氣が立つてゐて、それが思はぬところに鋒先のあらはれるのを常としてゐる。Sの行爲は下等でも、實は城塔に乘込んで美姫を犯したやうなものである。これも見様によつては、氣の立つてゐる者の行爲の一端に過ぎぬのである。僕の言方は此處でも厭味になつて來たが、維也納の空氣に浸つて居れば、それは毫も厭味ではない。維也納の空氣はもつともの柔かなだけである。

三 妻

妻は矢張り Sexus Sequior と見立てなければつまりは滿足は出來まい。さういふことを考へずに濟む亭主は、溫良で小さく美しくて京人形のやうな妻を有つてゐるものに相違ないとおもふ。

女を甘やかす今の歐羅巴の"Dame"社會狀態は、全亞細亞人からも、それから古代希臘、古代羅馬の人々からも嘲笑されるに極まつてゐるといつたショペンハウエルは、果してさういふ京人形のやうな妻をば有つてゐなかつた。それであるからショペンハウエルは、若くして戀慕の息吹をかけられなかつたと同時に、年老いても罪深い女人どもの懺悔を聞いてやらねばならぬ加特力の坊主の役をつとめなくとも好かつたのである。

そのショペンハウエルは、女といふものは足の短い肩の狹い臀ばかり大きいものだと云つた。これは歐羅巴の女を罵つた言葉なのである。

僕は西曆一九二四年の初秋から、鼻の低い足の短い妻を連れて歐羅巴の大都市を歩いてゐた。ショペンハウエルが、滿身の力をこめて罵倒した歐羅巴の女どもといへども、どうしても僕の妻よりも器量が好い。けれどもそれを逆にいへば、僕は黃顏細鼻の男に過ぎぬ。これを當年のショペンハウエルに較べるなら、所詮僕は不器量に相違ないゆゑに、諦念して二人は一しよに歩いてゐた。

佛蘭西から英吉利に渡り、英吉利から和蘭、獨逸、瑞西とまはつて伊太利のミラノに來た。ミラノに來たのは僕は二度目である、さうして歩いてゐるうちに妻はいつのまにか懷姙してゐた。僕はミラノでレオナルド・ダ・ヴインチ一派の繪畫をもう一遍見直さうとして、旅疲のしてゐる妻を引張りまはしながら丸三日を過ごした。妻は美術館などに入つても、繪畫などはどうでもいゝといふやうな顏付をして茫然としてゐることが多かつた。けれども僕はそんなことにはかまつてゐられないやうな氣がして精を出して見て歩いた。

十月二日にミラノを立つてヴエネチアに向つた。佛蘭西を出てからもはや二月ほどになつた。汽車は急行で、東方へ向つて砂地に走つてゐる。しばらくの間無言でゐた妻は、その時何の前置もなしに僕にむいた。そして二人はかういふ會話をした。

『日本の梅干わねえ。』

『何だ。』

『おいしいわねえ。』

會話はそのまゝ途切れてしまつたけれども、僕はその時、今までに經驗しなかつた一つの感情を經驗したのであつた。夫婦なんぞといふものは一生のうちに一度ぐらゐは誰でもかういふ感情を經驗するものかも知れぬ。或は頭のいい夫婦はしじゆう經驗してゐるのかも知れぬ。

僕等はヴエネチアに四日居た。けれどもその時は梅干のことなどは忘れたやうに話さなかつた。そしてヴエネチアでは唐辛子の酢漬を買つて見たり、小蝦のうでたのなどを買つて食つたりしたのであつた。

四　羅馬

羅馬をば慌しく七日ですました。西暦一九二三年の夏のことで、一人旅であつた。羅馬の空は連日透きとほるやうに晴れて、よく見るとその透明な虚空には細かい銀粉を振り撒いたやうにも見える。そこを燕が群をなして飛び、日本初秋の空に赤蜻蛉のむらがり飛んでゐるのと好く似て居る。

毎日ヴアチカンに通ひ、そこの窓からのぞくと庭園が見える。松樹が幾株も生へてゐるが、新黄の匂で、やはり透明

の感である。泰山木の花が大きく咲き、紅い椿のやうな花が咲き、竹林があり、棕梠がある。下の芝生には小花が一めんに咲匂うてゐる。維也納にゐたときに此の庭を羅馬法王が散歩してゐるところの寫眞を見たことがある。法王の居るところには芝居に出て來さうな服裝をした男が鎗を持つて番してゐるが、どうも僕等には滑稽だ。併し彼の太い柱の並んでゐる廻廊のところを、大勢の僧が列をなして歩くのを見てゐる時はいゝ氣持である。

法王もいゝ氣になつて墮落してしまひ、涅槃圖を寢間の壁に描かせたのを見ようと思つて、サン・ピエトロ寺院の奥の方に入り込んで見たが、言葉が通ぜぬので番人に遮られてつひに本望を遂げずにしまつた。

しかし僕は羅馬では總じて有難きものを見たのであつた。ヴアチカンに通つて、そこで繪畫を見、彫刻を見、歴史館の參考品を見、それから案内自動車でいろいろの廢墟を見た。ヴアチカンの宮殿で、ミケランジエロの天井壁畫を仰ぎ見てゐると頸が疲れて敵はぬので、瓦礫の牀上に新聞紙を敷き仰向になつて鑑賞してゐると、番人が來て僕を咎めた。僕は咎められながら少しく恥ぢて立ち上つた。併し番人の咎めたのは、鏡を貸す方便なのであつた。僕は幾錢かで鏡を借り、頸を疲れしめることなくて、天井の大壁畫をむさぼり賞することが出來た。そんなこともあつたが、さういふことは、いづれ氣が落付いてから細かく記入して置きたいとおもふ。

僕はサン・ピエトロ寺の入口で午食を濟まして、それから徒歩で歸りかけた。暑い日で汗は額からたらたらと流れ落ちる。僕は手巾で額の汗を拭き古くなつた扇子を使ひながら、橋を渡り、それから既に背後になつて謂ゆる城樓などを振返り見などして歩いて來た。町はやゝ靜かになり堀のそばに荷車二つ三つ置いてあるところに來かかると、非常に鋭い人聲が聞える。僕は、はてなと思つた。これは暴れてゐる狂人に相違ない。今までの伊太利の旅は繪畫彫刻を見てばかり歩いたやうなものである。併しそれも阿部次郎教授の厚意によつて、見免してはならぬ繪畫彫刻を教はつて來たた

めにどれぐらゐ得をしてゐるか分からない。それを感謝してゐたのであつた。併し伊太利の首都の羅馬に來て、精神病學教室のミンガチニ教授を訪問することが、時日が無くて叶はぬとせば、今ここで縛ばれてゐる狂人に邂逅したのはもつけの幸福である。病院内に居るのとは異つて未だありの儘の者とせば、伊太利人はどんなことをするだらうか。それを見ねばならぬ。

かういふ豫感を以て、塀のところから鋭い叩きつけるやうな人聲のする方に入つて行つて、ひよいと覗いた。すると狂人だと思つたのはさうではなくて、大きな男が拳をやつて居り、そこにまだ二三人の男が立つて見て居り、荷車を挽いた白い牛が側に靜かに立つて居る。彼等は何かの博奕をしてゐたのであつた。僕は暫くそれを見てゐたが失望して其處を去つた。

聞いてゐると伊太利語はなかなか粗暴である。これは昔から今に至るまで、發音の態度の推移の無いためであるだらう。無發音（サイレント）の尠いこと、獨逸語に類する爲ばかりではないだらう。そんなことを思つたのである。

五　ドナウ源流行附言

「ドナウ源流行」が雜誌中央公論に載つて發行になると間もなく入澤達吉先生から手紙を頂いた。僕は非常に感謝したのみでなく、非常に興味をおぼえた。

拜啓。愈御安泰奉賀候。小生土曜日葉山に參り、歸途車中にて高文ドナウ源流行面白く拜見仕り候。小生今より三十四五年前、ストラアスブルヒを出で瑞西に遊びコンスタンツに數日滯在し威大山に入り、彼の Riedlingen に友人、S. Landauer なるものを尋ね、兩三日其家に客となりしことを思ひ出だし候。其他の地名も皆小生曾遊の處にて有之、所

調、江山皆我題名地愧被先生問昔遊の感に堪へず候。

コンスタンツにては行違の爲め送金が到著せず、空しく數日を過ごし候、其節、枕頭剩得酒錢少。猶說底湖風色奇とロ吟せしことを記憶致し居候。前半は只今一寸思ひ出さず候。前記リードリンゲンの友人は只今はストツトガルトにて開業致居候。時々繪葉書がまゐり候。此ランダウエルと申すは Gustav Landauer の從弟にて候。グスターフは著述家として名あり、小生ストラアスブルヒにて同學に候。二十年目にて伯林にて再會致候節は既に名を成し居候。而して Hedwig Lachmann と云ふ女流文學者と結婚同棲致居候。然るに數年前ミユンヘンの大騷擾の際共產主義者として射殺せられ候事新聞にて見申候。

ウルムも小生宿泊せる處にて候。in Ulm um Ulm herum とか申す地口あり候處に候事思出で候。小生の宿泊せる頃はアインスタインはまだ中學生にて有之候筈、然し彼は中學はミユンヘンにてやり候も難計候。

百忙中一閑を得、往昔の思出を認め博淸覽候。（下略）

入澤侍醫頭はたまたま僕の小文章を讀まれて、三十餘年前のことを回顧されて居られる。僕はいろいろと空想した。三十四五年前といへば、あのあたりの汽車の聯絡も今ほどではなかつたに相違ない。それであるから、馬車によつて、黑林地方の素朴な、奈何にも保守を通さうとするやうな人間どもと一しよに、體をゆられながら或處から或處へ行かれたのではあるまいか。その馬車の中には翁もゐ、媼もゐて、日本といふことなどをたづねると、その傍に頰の豐かな娘もゐて、熱心に日本のことを聽いてゐたりしたのではないか。奉天の陸戰も、日本海の海戰もいまだなかつた時であり、小泉八雲のものもいまだ出來てゐず。東海の小さい帝國は、ただ如何にも朧ろに珍らしく物哀れにいろいろと空想で補充されて彼等の心の中に入つて行つただらう。さういふ中にあつて、當時の選拔き日本留學生の行爲は、その一擧

一動が獨逸人の注意をひいたのではあるまいか。それは興つてをる國の人民は、やはりよその興國の氣魄を感じ得るのだからである。

「ドナウ源流行」を書いた時に、月光のもとに握手してわかれ、山上の孤兒院に姉をたでねて行く若者のことを記した。いつか雜然とした荷物をいぢつてゐると、計らずその若者があの時僕に與れた名刺が出て來た。名刺には、Dr. Erich Lion. Gioletstr. 17 I. Frankfurt a. Main と書いてあり、手垢でよごれてゐた。このやうな名刺は遠の昔に棄て去つたものと思つてゐたのに、荷の偶の方から出て來るなどは、やはり因緣の一つであつた。

アンデルセンは西暦一八四〇年に三十五歳で故郷を立ち、伊太利から希臘に行き、土耳其の市都コンスタンチノプルに十一日間滯在してゐる間にモハメツトの誕生日に會して旅運が好いといつてひどく喜んでゐる。またそこで美しい燈火を見ては、アラビア夜話をまのあたり見るやうだといつてゐるのであるが、アンデルセンは、そこから黑海を渡りドナウの大河を溯らうと計畫したのであつた。然るに當時ドナウ地方に騷動がおこり數千の基督教徒が殺戮されたといふやうなことがあるので、同宿の者もさういふ旅は思ひ止る方がいゝと云ふし、若しさうとすれば二たび希臘に歸り伊太利を經過しなければならぬ。それは實に辛いことだ、そこで一夜いろいろと迷つたすゑに、當時の墺太利公使フオン・ステユルメル男爵に愬へると、男爵も熟考の上、旅行をやつて見ろといつた。『私は旅をすることに決した。一たび決心がつくと、その刹那から神の攝理に對し不動の信仰が生じて、私は自分を運命の手に委ねたのである』と書いてある。

いよいよ船に乘込むと、取り立てて危險にあふこともなく、たゞワラハイ國境で面倒な檢疫に會つただけで、廿四日目に墺太利の維也納に到着した。そこで一息ついて、故國出の人々に會ふと、不愉快な鄕里のことが頭の中に浮んでひどく陰鬱になるのであつた。併しアンデルセンは間もなく鄕里に歸つてゐる。アンデルセンは黑海からドナウを溯で

溯つて遂にその源流をも究め、その沿岸の國土人情に接觸する覺悟であつたのだが、維也納に著くまで廿四日かかり、そこで船を棄てて居る。

當時の旅行の有樣はどんなであつただらうか。歩みものろいが素朴で悠長なところがあつたのであらう。ドナウでも、ラインでも、船附場から乘込む在郷の人々の中には、古風な樂器を持ち、旗のやうなものを立て、唄を歌つて乘込む者がなかなかある。あれなぞも昔の風習の名殘ではあるまいか。さうすればアンデルセン當時の船旅も、慌しくない幾夜を船中に寢て、船中で女の友なども出來、染々(しみじみ)と話なんかも爲し得たのではあるまいか。併しアンデルセンもつひにドナウの源流までは行かずにしまつた。流離に馴れ、旅を樂まうとするものでも旅づかれがして來て、その時にはやはり生れ故郷のことを思ふものらしい。

六　湖畔

ドナウの源流を見て、心に滿足をおぼえながら Konstanz(コンスタンツ) に一夜眠つた。Konstanz(コンスタンツ) の旅舍は古びて穢かつた。そして南京蟲に喰はれて朝早くそこを出た。

そして Boden See(ボーデンゼー) の大湖のほとりの旗亭で朝食をすましたのである。ここから Rhein(ライン) 河になるあたりは、すでに大河の相を具足して、そこに懸つてゐる橋上には、昔の大公の像だの、大僧正の像などが据ゑ付けてある。白い水禽が啼きながら翻り飛び、大湖の面から日光が反射して凝視するのに難澁するほどであつた。

けふは耶蘇復活の祭日なので、寺院からは一齊に鐘が鳴り出してゐる。そこの本寺には黒衣の尼が三十人ばかり列をつくつて入つて行つた。そのなかには若くて端麗な女も居る。僕はそのあとについて行つた。本寺の中は町の人であふ

れてゐた。打振る香のけむりと、讀經の朗かなこゑと、雛僧の赤と白の衣と、音樂と唱歌と、祭壇の黄金の光と、僧正の金襴の衣と、相交錯してゐるところに尼の列は入つて行き、そして一齊に膝を折つた。それを僕は歌劇か何ぞの氣持で見てゐるのであつた。

それから三つ四つ寺院をたづね、古い家を見て廻つた。朱色の壁だの、湖を渡るところの壁畫だの、大公の紋章だの、さういふものは米國風の輕い趣味にはいまだ犯されずに居た。

汽船は午前十時に出た。汽船は太笛を鳴らしながら、ところどころ寄道して、一番向う岸の Lindau に行くのである。白い大きな水鳥が群れをなして船について來て客の投げる麵麭などを爭うて食べるのであつた。湖の風がなかなか寒いので僕は外套を著、襟卷で頸を卷きながら悚んでゐた。かうして見ると何だか大洋を行くやうでもある。けれども瑞西の國のアルプス連峰が目路の限り續いて、そのいただきに白雲の凝固してゐるのを見るとやはり湖水の情調であつた。小さな港々に近寄るときに、岬が長く突き出てゐて、そこに幾つかの急斜の畑があつたりした。これだけの大湖水の風光であるから、漢詩人であつたら、骨折つて大作をするであらう。寫生文家でもさうである。隨分細かい描寫も出來るのであつたが、歌人の僕には、ただ讃歎するのみでなかなか物にならない。ただアルプスの連峰には悠久に通ふ何かの寂しさがあつた。これが骨折るならば數首の歌になるのであつた。汽船は午後二時過ぎに Lindau に著いた。

その著いた湖畔に、椅子を澤山にならべて老若が麥酒を飲み食事をしてゐたが、僕はさういふところを避けて、靜かな食店に入つて食事した。ここの麥酒はもう民顯で釀造してゐるものであつた。湖畔の香柏樹の葉は、一寸ぐらゐは開いてゐた。ドナウの源流に行つた時には、まだ漸く苞を破つたくらゐであつたのに、數日のうちにかうなつてゐた。湖水のしづかなところでは何といふ魚の子か、群青の透明な奴が數千といふ數で泳いでゐた。

湖畔には銀行兩替店が軒を竝べてゐたが、町の方に入つて行くともつと質朴であつた。この停車場の立派なのは、瑞西に出入る旅客は此處で旅券を檢べられ、荷物を檢べられるからであつた。僕はこゝから、南獨逸の Garmisch(ガルミツシユ) の山中に行きたい豫定であつたが、さうすると汽車は一寸の間墺太利の國を通らねばならなかつた。墺太利國を通過せずに行くとせば、民顯(ミユンヘン)まで行つて、それから直行する方が便利であつた。僕は豫定を變へねばならぬ。そこで食店で地圖を見つめ、給仕の女に種々と質問をしたりした。併し數日の旅づかれと輕い船醉とで、僕は暫らくそこでまどろんだ。さういふ時には、娑婆界から全く絶緣したやうな孤獨の感じで、いゝ氣持であつた。

食店を出て町を歩いた序に、小さい博物館を見つけてそこへ入つて行つた。入口の壁に古い繪が剝げかかつてゐて、ora et labora などと題してあつた。なかの品物には目ぼしいものは無かつたが、太公でも持つてゐたらうと思はれるやうな品物と、古びた農民藝術とが竝んでゐた。薄紅いギヤマンの酒杯には、唐草模樣のやうなのが描いてあつて、それには狐に負はれた小鳥などが描いてある。狐は辨紅(べにがら)いろに塗つてあるが、小鳥は人間の著るやうな黃いろい衣裳を著て、その衣裳には黑い線が十文字に引いてあつた。かういふ圖柄はいかにも素朴で單純であつた。寢臺などにもさういふ大まかな單純な模樣が矢張りかいてある。埃及、希臘の泥と石の文化が、アルプス山中の木材の文化と相交錯してゐるところに面白味があつた。西洋の文化は石と泥とに征服されたやうであるが、その堅さのうちに、木材の香を欲する者もたまたまゐるのである。

七　アルゴイ山中

この湖畔の Lindau(リンダウ) から南獨逸のアルゴイアルプス山中の Obersdorf(オウベルスドルフ) まで行くには、けふの夕方此處を發して途中

で乘換へねばならなかつた。停車場の改札口のところに立つてゐる驛員が大きな煙管を銜へながら、訛の多い言葉で手眞似などをして教へてくれたのであつた。

汽車は午後五時五十分に發した。汽車は大湖を左手に見て走つた。これは四等を交へない一二等三等の急行列車で食堂車も附いてゐた。一氣に急いで民顯まで行くのであるから、僕は途中で乘換へねばならないのである。

太陽はもう地平に近づいてゐた。大湖の水は銀に光りその向うに重つた峻嶺が見える。しばらくすると青野のうへに疲れたやうにして一組の夫婦が休んでゐた。汽車が響を立てて通つたときに婦は汽車にむかつて手巾を振つた。或小驛の前に來ると汽車は少しく速力をゆるめただけで其處には停まらなかつた。その驛前では碁石を賣つてゐるところなどがあつた。四月の春寒だと思つてゐるのに野には黃白の花が見え、青味が增して來てゐる。香柏樹の葉が日一日と大きくなつて、やがて『金の五月』へ入るのである。

大湖の水が山や森林の間からところどころに見えてゐるが、それもつひに見えなくなつた。このごろ三等四等の客のうちには竹行李を以て旅してゐる者がなかなかある。この竹行李は日本から來るのではあるまいか。角のところに皮を縫付けてあれば相當に丈夫であり、輕くもあり、詰めやうによつては大分荷が這入るからやはり便利である。日本から來るのだとすると、どうか粗末でないやうに細工してもらひたいとおもふのであつた。

青野の處に來ても、僕は日本の景色を思つた。低山が幾つも重つて向うに見えなくなるまで目路の限り續いてゐる此青野には一種悠久の寂しさがあつた。それに較べると日本の原野は青味が足りず、くしやくしやしてゐる。一面は粗野であるが、決して寂しくはない。高原に行つても日本のは賑かであつた。そこにセガンチニの畫境とちがふ處がある。

太陽は西方に落ちて、汽車は高原にかかつた。すぐ目の下に雪の殘つてゐるのが見え、高峰が眼前に迫りつつあつ

た。汽車の歩がのろくなつて來たとき、向に乘つてゐた獨逸人はここが分水嶺であることを敎へてくれた。ここから西へながれる小川は皆合して、つまりは Rhein(ライン) 河へ灑ぐのである。ここから東へ流れる水はつひには Donau(ドナウ) へ行くのである。これまでぽつりぽつりと話して來て、兎もすれば話の途切れ勝であつたのが、ここからは稍饒舌になつて話かけるけれども、日本人の僕は稍ともすると沈默になり、話題もなかつた。僕の獨逸語の會話がいつまで經つても旨くならないのは、やはり沈默がちの性質に本づいてゐた。

汽車は分水嶺から下りになつた。雪を頂いたアルプスがつい其所まで來て居り、湖水が高原のうへに湛へてゐた。そのアルゴイアルプスの連峰が無限に續いてゐる、反對の側を見てもやはり山が累々として無限に重つてゐるやうに見える。山嶽地深く汽車の走つてゐるといふことが染々と旅人の身に感ずるのであつた。そのうちに日が暮れ、幾つかの驛をその儘通り越して、午後七時三十分に汽車は Immenstadt(イムメンシタツト) に著いた。

そこの停車場で夜食を取つた。それからその村を歩いて見たが、暗い村の道を人がちらりほらりと歩いてゐる、それでも茶店の前に來ると燈火が明るくつき手風琴が聞え、それにつれて山嶽風の唄のこゑがしてゐた。そこを過ぎると古い寺があつたが、もう戸が閉ぢてひつそりとしてゐた。川瀨の音のするのが、遠い氣持である。併し時には近いやうにも聞える。瀧のやうにも聞取れるし、流の瀨のやうでもある。西洋の村はこんな處でもやはり『堅い』感じがあつた。

二たび停車場に來たが、乘換までには未だ少し間があつた。そこで民顯(ミユンヘン)の Spatenbrau(シパーテンブロイ) 釀造の麥酒を飲んでゐた。傍にあつた繪入新聞を見ると、『亞米利加の廣告術』と題して、日本の大地震火災の寫眞が載つてゐる。それは恐らく日本橋あたりの通りらしい。數層の建物が燒おちずに殘つてゐる。そして、The great earthquake was the crucial

test between steel structures and the old type of Japanese buildings などといふ英文が矢張り寫眞版で載つてゐて、獨逸譯がしてあつた。僕は黯然として首を垂れたが、かかる山間で慘憺たる東京地震の寫眞を見ようとは思はなかつたので不思議な氣がした。

九時三十分發の汽車に乘換へて出發した。車内は暖めてあつて、麥酒に醉つた僕には少しく暖が過ぎるぐらゐであつた。十時頃とおぼしき頃、窓をあけて見ると月がもう二尺ほど山を離れてゐる。そしてドナウの源流に行つた夜の月は滿月であつたが、今夜は少しく虧けてゐるのである。谿間をゆく水の流が月光に照らされて瀬の光はほどばしり、流の周圍には粗々しい川原を作つてゐた。それは、ドナウ源流の、ゆるく湛へて籠つてゐるのとは非常に趣が違つてゐた。Oberstdorf（オウベルストドルフ）に着いたのは十一時を過ぎてゐただらう。汽車の中で、二三の旅舍を獨逸人から聞いてゐたのでそれをたずねて行つた。月の明い夜更ゆゑ、滿身が月光で濡れるやうである。また道ばたを流れてゐる山みずも隈なき月光に照らされて潺湲たる音を立ててゐた。

第一の旅舍がことわられた。第二の旅舍もことわられた。やはり獨逸人の夫婦もことわられて出て來るところであつた。村は段々寂しく暗くなつて行つた。人通りも稀である。僕は第三の旅舍をたづねようとして歩いてゐるのであるがそれが分らない。さうすると向うから男が一人歩いて來たので、僕は丁寧に脱帽した。そして第三の旅舍を未だたづねないうちに、その男は『今晩は』と云ふではないか。

それは獨逸語でなく、明快な日本語である。僕は驚愕と共に咄嗟の間に日本語で第三の旅舍の在所を訊ねた。然しその男はそれほど日本語は解せなかつた。男は二つ四つの簡單な日本語をおぼえてゐて、『今晩は』もその一つに過ぎなかつたのである。意識の過程は微妙迅速である。僕はその男の日本語を聞いた刹那に妖怪變化といふことが頭に浮ん

だ。次いで騙者(たぶらかし)、護摩(ごま)の灰(はい)といふことが頭に浮んだ。その時には僕の心に或る要心、構(かま)ひがあつた。併し會話が獨逸語に移つて行つたときに、僕の心の構(かま)ひはいつの間にか除(と)れて行つた。

その男はこの夜更に宿の無いことを氣の毒がり、ひとつ旅舍をさがしてやらうといつた。そして第三の旅舍に行つたが、もう戸締がしてあつてひつそりとしてゐた。男は戸を叩いて部屋の都合を聞いたがやはり駄目であつた。男は心當りの旅舍數軒たづねたが皆ことわられた。ここ數日は耶蘇復活祭の休に當つてゐる。町の人々が皆山嶽地に來るので旅舍が一ぱいだといふことを、獨語(ひとりごと)のやうに云つた。それでも男は困つたやうな顏などをちつともしない。また迷惑がるやうな顏もしない。極めて晴々(はれ〴〵)として居る。僕はおぼつかない心を抱きながら男について行くのであるが、男は道々日本のことをいふ。『東京』とか『娘さん』とか、さういふ日本語も使ふ。男はやはり俘虜としてしばらく日本にゐたのであつた。男はつひに村はずれの一軒家に入つて、少ししたかと思ふと、顏を出して『こちらへ御這入りなさい』といつた。そこは旅舍、食店、珈琲店を兼ねて、下にはまだ大勢の村人が麥酒の大杯を傾けて氣焰のこゑをあげてゐた。笑聲に混じつて濁つた大聲の交響樂はすなはち氣焰の聲であつた。

その家には部屋があつて僕は一夜を此處で眠ることが出來る。この家は Hotel zur Traube といふ名であつた。僕はその男に感謝し、名をきいた。男は僕の手帳に、Konrad(コンラアド) Haas(ハアス) と書いた。Haas(ハアス) 君は目下この村で寫眞屋をし、寫眞の機械、寫眞用の雜具をも賣つてゐるといふのであつた。僕は Haas(ハアス) 君と堅く手を握つてわかれた。

すでに夜半を過ぎてゐる。僕を部屋に導いた娘は赤い頬を持ち、小づくりで體がひきしまつてゐた。娘は素直で健康な性欲を持つてゐるだらう。部屋はまだ新らしく、天井の木の香がぷんぷんとしてゐた。そして小さい電氣爐が据付けてあつた。僕は電氣爐の電氣を止めて、仰向になつて一人ねむりに落ちた。

朝起きると、向うの山嶺にすでに日が當つてゐた。呼鈴を押したのに應じて來たのはゆうべの娘である。娘はどうも新鮮でいゝ顔をしてゐた。僕はこゝ丸一年全く不犯の生活をしてゐるが、この娘を少しく戀しく思つた。僕は娘に埀の水をとりかへることを頼んだときに娘は肌に染み徹るやうな寒冷な水を汲んで來て異れた。僕はその水で體を洗ひ、それから朝食を濟ました。食事の間も、Haas（ハアス）君のゆうべの親切を感謝し、ひよつとすると僕をたづねて來るかも知れんと思つたのであつたが、Haas（ハアス）君は訪ねて來なかつた。

僕は仕度をして外に出た。村の道にももう日が照つてゐた。路傍の流の水は實に清い。そしていろいろのさゞれの間に瀬戸片（かけ）などが沈んでゐる。瀬戸片（かけ）には紺の模樣などが見えてゐた。僕は日本の山上にある湯治場を聯想しながら、そこに突立つてゐたのである。

ここには大きな山と、深い谿と、寒冷な流とがある。そしてここに暫時籠つてゐるならば、人間同志の交渉も出來よう。つい向う側に見える記念碑は西暦一八七〇年九月一日セダンの役に陣歿した兵士のために立てたものである。このあたりの兵士はさぞ勇猛であつただらう。あの旅舍の娘なんかも勇猛の潜勢を持つてゐるのではないか。さうすれば益々あの娘がいゝ。

八　ブタペスト行の一

同行（どうかう）四人で維也納（ウイン）からブタペストに行くのに、船でドナウを下らうといふ相談をして、朝早く大きな鐵橋のそばから船に乘りこんだ。それは西暦一九二二年の七月廿七日である。

ドナウは雨後で水嵩が增し、赤褐色に濁つてゐる。朝は早いが、岸の草原にはすでに牛と羊が群れ、その間に小舍の

遊んでゐるのが見える。

船は中流に出でて走つた。水際に近く欄干によつて見てゐると、この大河は底の方に力を籠めてまんまんとして流れてゐる。その水面に擦るやうにして鴉が飛んでゐる。その鴉は形が小さくて嶽鴉といふのに似てゐる。一つ集まり二つ集まつて十ぐらゐになることがある。そして又散じて船から遠ざかつたりして飛んでゐる。船はこの大河の流に随順して下つた。河は平原の中を流れ、時には暗緑の樹林が兩岸に迫り、その森が遙か向うの方に霞んでしまふ。樹林と水面とは高さの差別が著しくないので、時には湖沼の感を起させるところもある。それから暗綠林の向うから支流が來て合するところなども見える。ある處では小さい島などもある。その島を水が浸さうとしてゐる氣配のところもある。白い水禽が船を取り卷いて飛び、乘客の投げる麺麭をば爭うて食つた。

天が美しく晴れて、眞夏の天候であるが、河風が絶間なく吹くので、時々寒さを感ずるくらゐである。僕は夏外套を著て、それから用意して來た冬の襟卷を頸に卷いた。兩岸の景色は單調のやうでもあるが、ある時は柳のやうな樹が一めんに水に浸つて見えたり、一面の青野が見え、それが時には黄の色調を帶びてゐたりする。向うの森林の上を飛行機が一つ飛んで行くのが見える。僕は何の國の軍隊に屬する飛行機かとおもつて好奇心を抱いたのであつたが、そばの老翁に聞くと、それは巴里から瑞西、墺太利を經てブダペストの方へ通ふ郵便飛行機であつた。『なあに維也納なんかでは、もうあんなものあ要りあしません。要つてもせいぜい遊び飛行機ぐらゐなもんです』こんなことを老翁はいつた。『維也納はもう駄目ですぜ』とかう老翁は云つて、右の手を妙な具合に振つたりもした。その老翁は日本に珈琲店があるかなどゝ訊ねた。それはある。維也納の第一流の珈琲店のやうなのが幾つもあるといふと、噓だ噓だと云つて承服しなかつた。牛の群は青野にもゐる。水際のところにもゐる。それから丘陵の半腹にかたまつて寢てゐたりする。さうい

ふのが見える。

この船の旅は退屈なやうでさう退屈ではない。河下の方に一つの山が霞んで見えてゐる。これはHundsheimberg（フンズハイムベルク）といふので、やはり獨逸語の山であつた。午前九時廿分ごろに、Hainburg（ハインブルク）に船が著いた、今までも乘客の乘降は幾らかあつたが此處ではもつと頻繁である。山が河に迫り、白い巖上には古城が見える。それは一種の立體感と哀愁の情調とを有つてゐる。ニイベルンゲンの哀歌の、ドナウの水が鮮血のために殷くれなゐになつたといふことなどがしばらく心をかすめることもある。それから間もなく、Theben（テーベン）に著いた。そこの山上には古い白色の城砦が建つてゐる。こゝは墺太利と匈牙利との關門になつてゐるので、旅券と荷物の檢査があつた。そこの岸に立つて僕等の船を見てゐる童幼は皆洗足である。それが如何にも自然で、困つたやうな顏をしてゐるものは一人もゐない。

午後に入つて、しばらく茶を飲んで話してゐた。その間に同行の一人が寫眞機を盜まれたが、乘降客がいろいろなのでつひに見つからずにしまつた。河の兩岸は漸々と二たび低くなり、叢が茂り、それが遙か向うまで續いて居り、支流が遠くから來て合するあたりの水は水銀の色に光つて見えてゐる。そのあたりに小船に乘つて網を垂れてゐる者がある。これは二組も三組もゐて、魚を取つてゐるのである。これは鯉、鱒のたぐひを取るのであるが、悠然として大きな煙管をくはへてゐるところがおもしろい。船が通ると波立つてその小さい漁舟が思切つて動くが、別に感動するやうな樣子も見えぬ。

匈牙利（ハンガリー）の國をすでに河は流れてゐる。岸の近くに屋形船が浮いてゐ、そこで水車が廻はつてゐる。屋形船が五つも六つも浮いてゐて、その一つ一つが水車を持つてゐるのはいゝ氣持である。歐羅巴の都市の機械學的な、堅固で直線樣式づくめに目馴れて來た僕は、たまたま如是の光景に接していゝ氣持になるのであつた。西方から流れて來てドナウに灌

ぐ支流のところには砂原が白くなつて見えてゐる。村落があり、そこには寺院の尖塔があり、自轉車が走り、馬車が走り、自動車も通る。柳に似た樹の群生が風にひるがへつて白い光を放つ。僕の傍の若者は、僕の手帳に Fa(ファ) Fák(ファク) といふ文字を書いて與れた。「木」といふ匈牙利(ハンガリー)語であるさうである。

ドナウの流れはだんだん廣くなつて、一面の青野には牛が群れ、藁を山のやうに積んだ車を牛に引かせて、赤い手拭をかぶつた女がそれを御し、このあたりは何となく熱帶の風光を見るやうな氣がする。

午後六時に Gran(グラン) といふ町に著いた。これなども匈牙利語では Esztergom(エステルゴム) といふから、今ではさう稱へてゐる。立派な寺院が聳えてゐる。かういふ本寺の建築なんかもなかなか骨折つたものであらうが、僕等には不用の費用を使ふやうに時々思へる。併しこのあたりの歐羅巴人はさうは思はぬ。併し大戰後はさう思ふものもゐるだらう。數珠にかうべをうづめて悲しく靜かなモツアルトなどの寺院樂を聽いてゐるものでも、一夜の時をば咖啡店(カフェ)がはりにつぶさうとしてゐる者が殖えたからであつた。

Gran(グラン) に著くまでにも幾つかの大小の町の埠頭に船は寄つたが、僕等は雜談に時を移してしまつた。そのうち暮色がおのづから至つて、對岸の人家から燈火が見え出して來た。或る埠頭に著いたとき、鋭く叫ぶ人ごゑがして人だかりがしたと思ふと、ひとりの男を巡査が來て拉し去り、その後を群衆がぞろぞろついて行つた。或ところの埠頭では、古風な樂器を鳴らして、『エレデンタ』といふ唄を歌つて錢を乞ふ者もゐた。

河面が暗くなつてからは、僕等は食卓について夕食をした。匈牙利の料理を交へて、すでに旅の心持を強めるのに充分であつた。僕等の食卓には一人の痩せたブダペスト市の女がゐて、四方山の話などをした。女の話す獨逸語は特有の發音をもつてゐて、時々聞取りにくく、繰返してもらふこともあつた。併しはじめて會つた僕等に對しても好感を見せ

て、笑談まじりに、たまには警句などをも吐いた。ブタペストに船の近づいたのは夜の九時過であつた。ドナウ河を挾んで兩岸には、燈火が螢火の群の如くにともつてゐる。女は忽ちそれを稱讃しはじめた。けれども香港を打出しに、いろいろの處を見て歩いた僕等にはそんなに驚くほどの光景ではなかつた。それからその女も船から上り、握手して分かれた。痩せた淋しいやうな女であるが妙に頭に殘つた。

僕等は二度ことわられて到々極めたのは、ドナウ沿岸の一流の旅舍であつた。僕等は今朝維也納（ウインナ）を船で立ち、十二時間かかつて今ブタペストに著いたのである。ドナウの沿岸に船の寄つた町だけでもいろいろの處があり、銘々皆相應の來歴と物語とを持つてゐるが、汽車が出來てからは、やはりおのづから盛衰の現象があらはれたに相違ない。併し汽船會社の滅びないうちは、在郷の人々も異國の旅人も、船によつてこの大河を上下することが出來る。

十二時間の船旅で僕の書いたことは是の如くに簡單であるが、この簡單な骨組の一つ一つから氣息（いき）が常にほのかに立つて、僕の心を慰めてくれるのであつた。

九　ブタペスト行の二

ブタペストの見物は奈何にも慌しかつた。七月廿八日は早曉に起きて對岸の山にのぼつた。あへぎあへぎ上つた山は Gellert hegy で公園にもなつてゐるが、兵營が未だ殘つてゐる。どう思つたか、番兵と談合して到々兵營を見せてもらふことにした。陸軍大尉の Joseph Ferenczy 君が案内してくれたが、大尉は同兵營の最高の將校であつた。現在兵士は其處に六十名ゐる。寢室も食堂も質素であつた。臺にのぼると、ブタペストの市街は一目で見ることが出來る。それのみでない。ドナウの流がところどころに島嶼のやうなものをつくりながら東南にながれて、遙か向うに沒してゐると

ころが見える。僕は兵營の高臺にのぼつて、ドナウの下流を想像したのであつた。そしてこの艦船に乘つて河下河下と下つたならどうだらうかと思つたのであつたけれども、僕等はただの旅人ではない。留學生の身の上であることを思つて、極度に望を縮小したのであつた。ブタペストをば一日で睥睨し得る此處には元來砲臺があり、勇敢な兵士が充滿してゐたのであつたが、その砲臺は取拂はれて、午砲用の大砲が殘つてゐるに過ぎない。僕等は大尉に感謝して兵營を出て山を下りた。

それから咖啡店で朝餐をすまし、兩替屋に行つて金を替へた。ブタペストの住民でももはや獨逸語を話さないものは幾たりもゐる。巡査でもさうである。一人の巡査は獨逸語が解せぬので他の一人の巡査を連れて來て呉れた。電車の車掌でも同樣であつた。これは大戰後の現象であるから、僕は心中ひそかに感動してゐた。

それから、王城を參觀し、その近くの戴冠寺を觀た。王城には端西に避暑中殺された故皇后エリサベツト陛下の遺物が保存されてあつた。その事も僕を感動せしめた。それはなぜであるか。本來から謂へばかかる御遺物は維也納で保存すべきであるのに、維也納ではそれをしない。又、大戰後墺太利のカアル皇帝が流されてゐた西班牙の孤島で流行感冒に罹つて崩じたとき、維也納では弔旗も立てず、音曲も廢せず、歌劇も芝居も平日の如くであつた。その時ブタペストでは一切の歌舞音曲を廢したといふ。ブタペストでは小賣雜貨店などをのぞくと、今にカアル皇帝と皇后の繪葉書を賣つてゐる。維也納ではさういふものはもう隱してしまつてゐる。旅を歩いてゐる僕はさういふことにも感動した。

それから藥湯の設備を觀た。そこを出ると、西瓜を輪切にして賣つてゐる。太い唐辛子があり、玉蜀黍があり、杏梅があり、李があり、甜瓜がある。玉蜀黍は赤い毛を持つてゐてそれが稍ちぢれてゐる。西瓜が中央から二つに切られ、紅色の肉が露はれてゐる傍に、Jeglehiitott FAJDINNYE kapható 1 kgr. 54 kor と書いてある。それを手帳に寫す

僕の氣持は往昔の日、長崎出島に出入する蘭人を寫生してその上の方に横文字を題した日本畫家に似てゐるであらうか。

それから、ドナウの流が二つに分れて、そこに島を形作つてゐるところに行つた。其處は遊園、支那流に謂へば愉園になつてゐる。食店があり、そのうしろには紫蘇が群がり生えて居り、音樂園があり、石竹が斑のと眞紅のととりどりに咲いてゐる。そこの食店で晝食をするのに匈牙利の料理を賴み、魚を食つた。食了つて茶になつたとき、僕の持つてゐた「墺太利・匈牙利案内記」に給仕の一人が目をつけて、『もうこの二つは離れて居ります』かう云つて、指で強く案内書の金文字のところを突いた。その時給仕の顏面はひどく潮紅してゐた。

『そんなことは當前だ。君もそんなに興奮するな。この本を好く見ろ。一九一三年の版ではないか。有名なこの案内書の著者の名ぐらゐは知つて置け』かう僕等の同行の一人が云つて笑つたが、給仕は暫時その緊張した心持から脫することが出來ぬやうに見えた。それが突如とした給仕の行爲であつたのだから、僕の注意を引いたのである。

そこを出て、ドナウの岸の寺院の處に來ると其處で活動寫眞を撮つてゐた。古代の服裝をした、騎士だの美姫だの殿元だのが來て、人情物であるから、人間の行爲を幾倍づつにも誇張して、それを繰返しながら二通りにも三通りにも影してゐた。それにたかつてゐる群集のなかにまじつて僕等もしばらくそれを見てゐた。それから橋を渡つて對岸に行つた。そこで寺 Stephanskirche を見、議事堂を見た。こゝの議會で、大戰後のことであるが、ある議員は、目下匈牙利國は共和政體であるが、行く行くは王國でなければならぬ。それならば、日本から宮家を迎奉つて王と仰いだならば奈何と論じたといふことを聞いた。それから大學圖書館を見た。すでに時間の後れてしまつてゐるのをば、土地の若物が無理に門番に賴んで呉れたので見ることが出來た。僕等はゆふべの薄くらがりにきつしりとつまつてゐる書物を見て歩いた。

そこを出るともう太陽が落ちて夕映だけが殘つてゐる。それから徒歩して幾つかの街道を通り、小一時間も歩いたかと思ふころ、二たびドナウ河の岸に出た。こゝを行けば旅舍へ行けるのである。だんだん旅舍に近い目貫の場處に近づいて行つた。街道の兩側には椅子が列をなして並んでゐる。そこには土地生れの人々も、異邦よりの旅人も、老いたるも幼きも、みんな腰をおろして並んでゐる。椅子は街道の兩側に並んでゐるから、ヴイサヴイの人間の顏容をも凝視し、評價することが出來る。街道をばいろいろの男女が通り、また引返しては通り、椅子に腰をおろして、美しい娘と話をするものもある。その儘わかれるものもあれば、一しよに連立つて行つてしまふものもある。娘は夕の粧を新たにすまして出て來てゐるから顏容はみづみづしい。明色の女も居り、それから漆黑の女も居る。瞳の綠なのも居り、褐色のも居る。西洋の旅人は、さういふ娘とは目と目とをくつつけるやうに接近して話してゐる。東洋人にそれの出來るのは帳の垂れた閨中に於てだけである。

そんなことを思ひながら同行四人は椅子に腰かけてゐた。それから二三の娘とも話をし、そこを離れてまた二三の娘とも話をした。娘等は細い透明なこゑを出していろいろのことをいふのである。邦語に譯すと、やはり『愉悦』とか『極樂』とかいふ語をも交へてものいふので、緊張した留學生の心持も平和にならうとしてゐる。

僕らの同胞は好く、伊太利の娘のことをいひ、そして匈牙利の娘のことをいふのは、東方の民族の接觸に何か知らいゝところがあるためであらうか。或はさういふ人は不意識のうちに、東海の國の鼻低く、のつぺりとした漆黑の娘を聯想し、想を懸けてゐるのでもあり、生れ故郷に殘して來た妻とか氣に入つた女のことなどを思つて、謂はば形代にして心の滿足を樂しむのであるのかも知れない。僕は、丸山作樂、福本日南等の和歌を讀んだとき、微笑を禁ずることを得なかつた。丸山作樂は四十八歲のとき、明治二十年五月一日に日本を出帆して居り、福本日南は明治三十一年三月に

日本を立つてゐる。

　匈牙利にて胡蝶名は蕃薇といへるにあひて　　丸山作樂

をり得たるいばらの花のなごりとや色なつかしき そでの香ぞする

くさまくらしばし結べるつゆのまの夢はあだなるものにぞありける

　逢二匈牙利美人一　　　　　　　　　　　　　　楠本日南

千歳ののち王昭君のおもかげを斯拉烏の君が上に見るかな

君とならば駱駝の上に鞍並めて沙漠拉行くとも我は厭はじ

率ていなば家に妻あり止まらば我が事やまむあはれうつせみ

　この二人の和歌を読むと、いかにも纏綿たる情緒を感受することが出來る。和歌は大和言葉で歌ひ、戀歌には粉本があると謂つても『君とならば駱駝の上に鞍並めて』といひ、または『くさまくらしばし結べるつゆのまのゆめ』とは、かりそめには歌はれないと僕は秘かに思つたのである。

　そこへ一人の碧眼の若者が近寄つて來て、丁寧に帽を取り、そして『今日は』と云つた。若者の呉れた名刺を見ると、Joseph Reitzer と書いてある。Reitzer 君は大戰の時、墺匈軍の一人として東部戰線で戰ひ、つひに俘虜になつた。シベリア俘虜生活をし、漸々東方に送られてゐる間に日本軍と接觸するやうになり、日本の將校と親しくなつて其等の將校から日本語を教はつたのである。時には洒落をも教はつた。時には古文なども教はつたのであるが、故郷に送屆けられてからは、その大切な日本語を使ふ機會がどうしてもない。そこで Reitzer 君は、ブタペストに旅する日本人に目を付けた。さうして案内してゐる間に日本語の練習が出來ると考へたのであつた。然るにそれを實行してみると、氣前の好い、金離れの好い日本の旅人からは旨い料理を振舞はれ、小使錢を貰ふので、Reitzer 君はたいへん好い事に思つたのであつたが、そのことで何時の間にか日本人を利用するやうになつて行つた。僕等が會つてから半年後には日

本人もそろそろ要心し初めた如くであつた。

Reitzer君は僕等を案內して呉れた。そして使ふ獨逸語の中に日本語を入れた。Reitzer君はこんな日本語をいふ。

『色目を秘密に使ひます。違ひない。
『踪跡をくらませます。
『蝶は噐寄ります。鍬は行燈のかげに來ます。
『みんな相惚のはじまりですから。
『わたしとあなたといつしよにねむりませう。
『あれは大きな心臟をもつて居ります。
『青帽の下にまた別な帽子を持つて居りませう。
『利目を寸法しました。
『つかまへることと高天原へ這入ることは一番簡單でせう。
『青い帽子は黑い處へ行きました。そしていろいろの企を勇みます。
『若しも大きな望みをいたしますならば。
『あなたは信ずりますか。
『私は自分の娘さんを好みますから呼びました。
『この赤帽子は買つて居ります。結婚について。

このやうに五つ六つ寫生して見ると、やはり妙な氣持がしてならない。アルノウ・ホルツあたりの直譯でなくとも、それから、あの儘ワイマアルあたりで老ゆるであらう、カンヂンスキあたりの物を聯想しなくとも、この儘で妙な氣が出て來て居る。岩野泡鳴は「表象主義文學の運動」と譯した時に、ひどく誇つて妙な直譯文を書いたのであつたが、あ

れは甚だしいのである。

僕は旅舍の大きな食堂で夕餐を共にした。維也納で貧寒なものばかり食つてゐた留學生どもは共に腹のふくるゝまで食つた。

『先生は酒たいへん飲みましたか。』

『僕たいへん酒好きです。だい好物です。酒袋ですよ。』

『どうぞ。』

『酒袋ですよ。酒客ともいひます。大酒のみです。Grosser Potator です。Potator 通じませんか。Trinker ですよ。これから酒袋といふのは支那の言葉だから、一寸むづかしいね。酒顚も酒悲も一寸むづかしいな。』

『分かりました。分かりました。それは美しい習慣です。』

『君は日本の酒飲みましたか。』

『飲みました。たいへん立派です。』

『それではもうなかなかの通人だ。』

『どうぞ。』

『たいへん開けてゐるといふんです。開化人だ、文明開化の開化ですよ。Zivilisation で、君はつまりそれです。』

Reizer（ライツェル）君はもういゝ加減顔を紅くしながら、妙な表情をして僕を凝視した。それから暫くして僕等は部屋に歸つて寝たのである。

十　ブダペスト行の三

翌廿九日も空が好く晴れた。僕等同行の銘々は醫者であるから、おのおの專門の方面の病院を觀ることにして朝早

くから出掛けた。僕は精神病院を二つ觀た。參觀と謂つても病院の名と場處とを訊ねたうへで、地圖を調べ、電車の番號を訊ねて、それから行くのであるから一つの病院に行著くまでになかなか手間どるのである。併し此處の病院の院長も醫員も非常に丁寧親切であるから、僕は心を落付けて視察することが出來た。クレペリンの精神病學が近世の學界を風靡したと謂つても、このへんに來ると必ずしもその分類法には從つてゐない。ただ歐羅巴の邊土ともいふべきこの地にかくの如く完備した堂々たる精神病院のあるのは意外な程である。西曆一九〇九年にこの地で萬國醫學會の開かれたことがあつた。その時偶々齋藤紀一先生が第二回目の洋行中であつたので其の學會に出席して居り、日本の同胞が一しよになつて寫眞を撮つて居るのを見せられた。

二つの精神病院を視て歸路に就いた頃は日は既に沒してゐた。四人が旅舍に落合つた時には、Reitzer(ライツェル)君も來てゐた。そこで夕餐を共にした。それから、遊廓を觀に行かうといふのであるが、これは社會醫學上非常に大切なことであるから、特に案內者に報酬して觀ようといふのであつた。或ところでは、蒼く燿く電氣燈のもとで、男女が手を組んで踊つてゐる。煙草の煙がもう〳〵と立ちのぼつてゐる。女は薄い羅を纏うてゐるのもあり、殆ど裸形(らぎやう)のもある。ひとり踠くやうな女が突如として同行の一人に近寄つて來たかとおもふと、突如として親嘴をした。そのとき同行の一人はどう反應したか。同行の一人は、『こいつ穢(きたな)いことをしやがるね』といつて、しきりに口をぬぐつたのである。そのとき女は、火をつけてくはへてゐた煙草を男の口へ無理に入れ込んだ。同行の一人は『こいつあいけねえ』といつて、また手巾で口を拭つた。かくの如くである。

僕等は三四軒の遊廓を參觀し、そのまゝいそいで歸路に著いた。それゆゑ、丸山作樂の如き、或は福本日南の如き感慨を漏らすことを得ずにしまつたのであるが、これは儉約の旅をしてゐるためであつた。夜半を過ぎて同行四人は旅舍に著いてしづかに眠ることを約した。僕は用意してゐた眠藥を一服呑んだ。精神が少しくおぼろになつた時に、公娼は公共廁の如きものであるから能く手入をして、加護すべきものだと思つたのであるが、赤いジャケツを著てゐる救世軍

の徒は、精神のおぼろになつたときの、神明に近き僕のこの說には贊同は出來ないのであつた。

曉天の光のさし込む部屋で、同行四人は淸明な眼を開いた。今日午後一時二十分發の汽車で維也納に歸る豫定である。それまでに僕はまだいろいろ見るものがあるが、差向き醫科大學の精神病學教室を觀ることにし、きのふ帳場に賴んで置いた出國許可證を受取つて、十四番の電車に乘り、車中で車掌に教室の場所を訊くのであるが、その車掌はもう獨逸語を解せなかつた。互に分からぬ問答をしてゐると其處に乘客の一人が來ていろいろ親切に教へてくれた。

教室は Moravcsik 教授が主任である。こゝは大學の附屬醫院であるから、きのふ觀た二つの精神病院よりも建物も古く不潔であつて甚く見せてくれた。あだかも今日は日曜に當つてゐたので、助手が三人ゐて、三人が一しよになつて甚く見せてくれた。たゞ教授は日曜と雖午後には出勤して勉强して歸るとのことで、助手は切りに午後まで滯ることを僕にすゝめた。僕は時間の無きことを告げ深く助手に謝して辭しようとしたとき、助手は、『あなたと私どもは同じ民族で、同じ祖先だといふことを好く御存知でせうね』といひながら固く僕の手を握つた。その素振には微塵も笑談と輕薄とを交へてゐなかつた。僕は告白すれば奇妙な氣持がし、稍滑稽を感じたのであつたが、對者は精神病學教室の助手だけに、たゞ笑つてしまふことも出來ずに門を出たのであつた。

僕は病室を觀、事務室を觀、研究室を觀、特徴のある病者のひとりひとりを觀たかへりに、ブダペストにはどういふ文學者がゐるかを問うて見た。その時助手は、Berzviczy, Babito, Szinyei, Mers などといふ名を書いて與れた。初のは小說家でもはや古稀を過ぎた老翁ださうである。中のは抒情詩人で、終のは畫家ださうである。助手は藝術家に對してどれだけ理解があるか不明であつたが、助手が毫も躊らふことなく、直ぐ書いて與れた名に僕は興味を感じたのであつた。

それから汽車の出發時間まで見ようと思つて、ひとりで先づ歷史館を觀た。そこを急いで通り過ぎ、それから[illegible]番の電車に乘つて美術館に行つた。美術館は古代の部と近代の部に分かれてゐたが、急ぐので鑑賞に不自然なところがあつた。それゆゑ、感動するに足る目ぼしいものは尠いと思ひながら見てまはつたのであつたが、このやうな都市に、

これほどの建物をもつてゐるのを羨みながらだんだん入口の方に近づいて來た。そこには西班牙畫家のものがあり、グレコ、ゴヤのものがあつた。ゴヤの娘が土甕を捧げてゐる圖を濟まして、勞働者が研石にかけて刃物を研いでゐる圖を見てゐたときであつた。ひとりの肥つた素朴な男が僕のそばに來て丁寧に辭儀をし、それから名刺を呉れた。名刺には、Kólyomi K. Vilmos といふ名が書いてあり、ブタペストの新聞記者であつた。記者はかういふことをいつた。

『あなたも私も同じ民族であることは御存知だとおもひますが、一九一四年から敵味方になりましたね。今後はあれではいけませんね。よろしく願ひますよ』こんなことを云つた。

そして、『この方を一つ紹介しませう。いかがですか。あなたのお國の方々と似てゐるとはお思になりませんか。』かういつて紹介して呉れた男は、Dienes Károly といふ男である。背は低く鼻も低く、全體としての感じはやはり東洋人であつた。この男はブタペストの郊外に住んでゐるものであつた。幾代の混血のために相は變つてゐるが、なるほど蒙古族の末の流かも知れぬ。僕も一瞬さう思つたのであつた。拔都の軍がこのあたりを征服して美女を犯したと思ふと愉快である。異境にあつてさういふ思にふけるといふのは旅の寂寥から來るのであつた。

四人は停車場に落合つてそこで午食をした。靑く太い唐辛子のなかに肉をつめた料理などを食べて、四日の慌しい旅心を幾分休めた。それから旅券の檢査に手間どつて、午後三時十分に漸く發車した。暫くすると汽車は響を立ててドナウの鐵橋を渡つたが、それからは汽車は一息に西に向つて走つた。窓外の畑はゆるい勾配を作りみなよく耕されてゐる。ゆうべ食べた西瓜はかういふ畑で出來るのであるとおもふと、維也納あたりでさう簡單には食べられないといふことが分かつた。畑のまはりに玉蜀黍が列をなして植ゑてあり、その間に向日葵が大輪の花をつけて立つてゐるのが見える。藁ぶき屋根の側にはね釣瓶の井戸があつたりした。Komárom といふ驛で十分停車したとき、ひとりの娘が水を賣り歩いてゐた。三等客はその水を買つて飲むが、價は二クロオネしてゐた。夜に入つて同行四人は維也納に着いた。維也納の街は依然として暗いけれども女にはやはり都雅のにほひがあつた。

虎子

文學博士　濱田青陵

一

虎子と此處で云ふのは虎の子では無い。西京雜記に漢朝玉を以て虎の形を爲り、便器となし、侍中をして之を執らしめ、行幸の時に從はしめたとある便器の虎子である。何故便器を虎の子と謂ふかと云ふに、漢の李廣が虎を射殺し、其の髑髏を以て枕と爲し、又銅を以て其の形を鑄て、之を便器と爲したといふ故實から起つたと「文昌雜錄」に書いてある。兎に角之を見ても支那では漢代には已に此の便器が用ゐられて居つたことが證明せられる。勿論人間が生れ落つると、直に便通をするのは當然であるが、野蠻未開の時代では、野外にやり放題、特別に便所を造つたり、便器を使用するに至つたのは、餘程人文の進んだ後のことである。此の點から見ると、希臘クリート島のクノッスの宮殿に、紀元前千八百年も古くから、今日の西洋流の水洗便所（ヲータークロセット）の設備があつたのは、我々現在の日本人が聊か恐縮する次第である。それは扨て便所なるものは便器が固定して出來たもので、先づ第一に游動的便所たる便器が、上流社會や病人老幼の社會に行はれ始めたものに違ひない。支那の如く高度の文明が早く開けた處では、虎子の名の起つた漢代以前に三代の昔から便器が出來て居つたと想像せられるのであつて、「周禮」に玉府が王の褻衣その他褻器を掌るとある褻器は即ちそれである。「戰國策」に趙襄子が智伯を殺し、其の頭を以て飲器と爲したとある飲器は、實は溺器であると云ふ珍しい說さへもある。

二

扨て漢代の虎子なるものが一つでも今日遺存して居つたら、それこそ虎の子の如く大事にせらるる骨董品であるが、不幸にして未だそれらしいものを見たことが無い。併しかの漢代の陶器を研究したラウツエル氏の書物には、虎の形はしてゐないが、緑釉のかゝつた壺で、提手と短い口の附いたものを擧げ、恐らくは漢代の便器であらうと云つてゐるし、又た鳥居博士が曾て滿洲で發掘せられた土器の中には、豚形をした壺で、矢張大きな口と提手のあるものがあり、是れまた其の形の上から、豚子と呼ぶ可きであるが、其の用途は同じく虎子の類と見ることが出來る。して見れば支那のものでは無いが、小亞細亞のトラヤの遺跡でシユリーマンの發掘した同様の動物形土器と、略ぼ其の用途を推察することが出來ると思ふ。

漢代以後の古い虎子に就いては、却つて一向調べたことは無いが、現今の支那では勿論男女とも之を使用するのであつて、口の狹いのは男、平たい器は女子のものとして、中には美しい彩色模様を附けた陶器製のものがあることは、前のラウツエル氏の本に漢代の古器と比較して擧げてある。一體虎子の様な不潔な用途を有するものは、却つて綺麗に造る可きであつて、さうすれば床の間に飾つても差支は無いのである。從つて文字の上にも淸器などと反對の文字を使つてゐることは「倭名類聚抄」などに見えてゐる。

日本では現在一般社會に於いて病人や老幼の外は、殆ど此の虎子の類を使用しないが、昔は「シノハコ」、「オホツボ」など、云つて、少なくも王朝時代には用ゐたもので、「延喜式」には「虎子一合料漆一升四合」などゝあり、當時は主として朱漆の器であつたらしいが、彼の古墳墓から出る横口壺と稱する祝部土器は、其の形から考へると、或は此の虎子

の類であつたかも知れない。近頃は小兒の便器を「オマル」と云ふが、此の「マル」は日本紀たどにも見える「尿マル」「尿マル」の「マル」であると云ふ。朝鮮では現今も一般に白い陶器或は眞鍮製の圓い器を用ゐ、これを「ニョーチヤング」と云つてゐる。西洋には希臘羅馬の古物は知らないが、中世には便器の汚物を二階の窓から往來へ投げかけてゐる木版の戯畫などがあるから、隨分古くからあつたものと思はれる。

三

併し虎子の話を斯う云ふ風に鹿爪らしく書くのは、必しも私の本意で無い。たゞ何分にも少々尾籠な品物であるから、臭器止めの代りに一寸書き出したので、實は本文は之からである。

私は子供の時に所謂「マル」を使用された以來、久しく大病にも罹つたことが無いので、此の不便な器を使用した記憶が無かつた。處が十五年前一朝にして倫敦の下宿住ひの身となつたのである。然るに此の下宿では生憎便所が私の部屋の附近に無いので、別の階(フロアー)まで夜中に出かけなくてはならない。勿論西洋の家は、日本の様に吹きさらしの廊下へ出る必要はないが、それでも可成面倒なので、或る日私の宿へ訪問せられた先輩――日本に於いても先輩であり、西洋生活に於ても先輩たる――に、此の面倒を訴へた處が、「君ベツトの枕元にある箱を見給へ」と言はれて、開けて見ると手の附いた平たい壺がある。これが夜分に使用する「チヤツグ」で、即ち「ナイト・ポツト」(夜壺)であることを始めて知つた私は、西洋人の賢明を感服する外はなかつた。而して之に關する注意が、西洋人の作つた儀式作法の書物に書いてないことを、殘念に思つたのである。

併し次に起つた心配は此の夜壺を使用した後の始末である。何となれば私の部屋を掃除に來るのは、下宿の下女である。下女でも西洋では尊敬す可き婦人であるから、之に件の壺の始末を托することは甚だ無禮であると私は考へた。そ

こで毎朝早く人の起き出でない時分に、自分で之を始末したのであつた。其後前の先輩が又たやつて來られて、「どうだ近頃は便利になつたらう」と云はれて、實に其の後始末に弱つてゐることを話すと、「世話のかゝる人間だな、それは女中がチャンと始末する事になつてゐるのだ、何も遠慮をすることは無いよ」と言はれて、始めて西洋にも貴婦人でない女もゐることに安心したが、扨て其後ち女中が部屋を掃除する時に居合はして見てゐると件の「ナイト・ポット」を拭く其の雜巾を以て、洗面器を拭いてゐるのである。これにはスッカリ驚いてしまつたが、これ亦た西洋では一向平氣なものであると云ふことを、又た先輩から聞かされて最初は呆れてしまひ、次には觀念してしまつたことである。

四

三年の西洋留學は私に色々な學問をさせたが、其のうち重要なる事柄の一は夜分に此の虎子を使用する習慣であつた。冬の夜半夢破れて、眠をなさない時、一寸後架へ行つて來れば、定めし後の眠が安らかであらうと思ひながらも、日本の寒い厠と、そこまでの道中を考へれば、忽ち勇氣は沮喪してしまふ。況んや二階住ひの場合に於いてをやである。而して曉に至るまで褥中に煩悶する經驗は、我々日本人が萬人とも等しく有する所であると私は信ずる。之を救濟する道は俳し簡單である。たゞ一箇の虎子を用意すれば、凡ての問題は解決するのである。

私は西洋から歸つて來て、間も無く朝鮮を旅行した。而して朝鮮婦人が、毎日川邊で洗濯をする際に、楊柳の陰に之をも掃除してゐる景色を見ては、朝鮮の家庭に萬遍なく行はれてゐる虎子の使用を羨むの外なかつた。何故に日本人は此の至便の器物を用ゐないか。若しこれが所謂日本人の潔癖から來るとすれば、實にこれ程愚直なことは無い。何故に少くとも朝鮮に於ける日本の旅館は、先づ此の至便の器を採用しないか、それでは朝鮮の同胞は到底日本の宿に落付くことは出來ない。其の結果は日鮮融和の道にも背くことゝなると云ふ樣な議論を友人と戰はすことゝなつたが、或時終

に慶州に滯在してゐる間に、私は朝鮮の友人に案内して貰つて、市日に眞鍮製の虎子を買ひに行かうと決心したが、その友人は「朝鮮人間にも近頃は段々之を使用したい樣になつて來たのに、君は何故そんな野蠻なものを買はれるか」と忠告して呉れたが、私はこれ程文明の利器は無い。その證據には君等が崇拜する西洋人が常用してゐると云ふ事實を力說した處、漸く安神して私の依賴に應ずることゝなつた。

然るに市日には不幸にして丁度私が欲しいと思ふ小形の品がなかつたので、手を空しくして宿に歸ると、或る人の曰くにはそれは五陵附近に銅器を製作してゐる處があるから、其處へ行つて探すが宜いと敎へて呉れた。そこで私は南山へ水晶取りに出掛けた日の歸りがけに、此の疲れた揚句虎子買ひでもあるまいと云ふ、嫌な顏を見せたM君には聊か氣の毒であつたが、銅器製造所のある田舍へ廻り道をした。

成る程其處では村人が黑くなつてあらゆる銅器を作つてゐた。黑い砂型から取り出した粗造のものを轆轤にかけてゐる間に美しい金色の器物が金屑の間から段々現はれて來る。併し此處にも亦た私の希望通りの小さい虎子が見つからない。私は頗る失望の體であつたが、せめて銅器製作の實況を見た丈けが獲物であると思つてゐると、折節此處へ來合せた一人の老人が自分が丁度私の欲しいと思つてゐる虎子を持つてゐる。而かもそれは此の間買つたばかりで一度も使用してゐない。自分の家はこれから慶州へ歸る道の皇南里にあるから一緒に來れば讓つてやると云ふ。それは幸ひと私は不精々々に同行して來たM君と共に老翁の家に出掛ることにした。

五

私達は皇南里の一軒の田舍家へ辿り着き、大切さうに白布に包んだ眞鍮の虎子を老翁から受取つて、それが丁度私の欲しいと思ふ大きさのものであるのを喜んだ。而して要求する丈の價を取らせたが、老人頗る自慢の體で、其の眞鍮の

色が少し白味を帶びてゐるのは、金質の一番上等な所以であるといふ樣なことまで詳に講釋をして吳れたが、さて庭上に立つてゐる老媼は不時に起つた不思議な賣物と買手とに聊か呆然たる氣味であつた。

私は遂に重大なる目的を達して、件の虎子を大事に抱へ込んで、慶州の宿へ歸へらうとしたが、ふと庭先きを見ると、大きな新羅燒の壺が一つ置いてある。なほ熟く見ると其の上には無數に鳥獸や人物を原始的な筆描きにしてあつて、私共が今迄見たことのない珍らしい新羅の陶器である。老のに是は何處から出たものだと聞くと、丁度家の後ろを堀つて、積石の間から他の陶器と一緒に獲たものであると云ふ。之を一つ讓つて貰へまいかと、單刀直入に切り出すと、お安いことであるが、口の緣が少し壞れてゐるので、一圓五十錢位では高くないでせうかと云ふ。それで結構々々と早速一圓五十錢を支拂ひ、老媼には別に駄賃をやり、頭の上へ載せて宿まで運んで貰ふことにした。眞鍮の虎子のことは最早、スッカリ忘れてしまひ、――持つて歸へることと丈けは幸ひ忘れなかつた。――、M君の不平顏もいつしか笑顏に變つて、私達は老媼の後先きになつて宿へ急いだ。

此の一圓五十錢の壺は、現在××大學の陳列室に飾られて、古い新羅時代の陶器中最も豐富に繪模樣のある逸品として、朝鮮本土にも、日本の何處にも之に比敵するものを見ないと云ふ貴重なる標本となつた。慶州の考古家は、それこそ大分以前から噂を聞いて自分等が探して居つた壺であると殘念がつたが、それ丈け私達の誇りと喜びとは大であつた。而して件の眞鍮の虎子は、爾來私の寢室に飾られて、如何に私の睡眠を安かにして吳れるか知れない大切の品物となつたのである。

虎子を探し廻らなければ、此の虎の子にも比す可き貴重な壺は獲られなかつたのである。或る人は其大事な壺も、昔は小便壺あつたかも知れないと、ケチをつけるかも知れないが、それは私達の敢て關しない所である。たゞ此の天下品の新羅の古壺を手に入れた因緣を書き留めて置き度いばかりが此のキタない虎子の話を持ち出した理由である。

芭蕉のけらし

小宮豊隆

芭蕉の『おくのほそ道』の中に、芭蕉が市振の關で一人の若い遊女と同じ宿に泊り合せる一節がある――

「一間隔て面の方に若き女の聲二人計ときこゆ年老たるおのこの聲も交て物語するをきけは越後の國新潟と云所の遊女成し伊勢參宮するとて此關までおのこの送りてあすは古郷にかへす文したためてはかなき言傳なと云やる也白浪のよする汀に身をはふらかしあまのこの世をあさましう下りて定めなき契日々の業因いかにつたなしと物云をきゝく寢入てあした旅立に我々にむかひて行衞しらぬ旅路のうさあまり覺束なう悲しく侍れは見えかくれにも御跡をしたひ侍ん衣の上の御情に大慈のめぐみをたれて結縁せさせ給へと泪を落す不便の事には侍れとも我々は所々にてとゝまる方おほし只人の行にまかせて行へし神明の加護かならす恙なかるへしと云捨て出つゝ哀さしはらくやまさりけらし

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれは書とゞめ侍る」

――この一節は、芭蕉の「人」を認めたげる上に、いろんな點で、可也な貴重な示唆を提供するものの様に、私には思はれる。然し私が今此所で觸れようとするのは、さしあたりそれらの點ではなく、その終に近い部分の一句、「哀さし

はらくやまさりけらし」の中の、けらしといふ言葉の持つてゐる、心持の內容である。

芭蕉のみには限らないけれども、芭蕉は、特にその文章の中で、けらし若くはならしといふ言葉を、目立つて澤山に使用する。芭蕉はこれらの言葉に對して、特別な愛情を持つてゐたのではないかとさへ、憶測したくなる位である。

我我の今日の語感からいへば、けらしはけるとらしとの結合であり、ならしはなるとらしとの結合なるが故に、けらしにもならしにも共通に、或程度の疑ひを殘して、若くは或程度の距離を保つて、或事を肯定する心持がある樣に思はれる。是を「哀さしはらくやまさりけらし」の場合に適用すれば、此所のけらしには、よしその中に詠嘆があり肯定があるにしても、所詮その詠嘆もその肯定も、詠嘆し肯定してゐる當人から或距離を置いて眺められ、いはば他人事(ひとごと)らしく取扱はれてゐるのだといふ事を――換言すれば、「哀さ」を感じてゐる詩人と、その詩人を離れて眺めてゐる批評家とが此處には同時に存在して同時に動いてゐるのだといふ事を意識させるものが、可也はつきり含まれてゐる樣に感じられる。

もつとも是は我我の今日の語感がさう感じるのであつて、芭蕉がそれを覘つてこのけらしを此所に使つたものであるかどうかは、おのづから別箇の問題である。殊に芭蕉以前にも、芭蕉以後にも、けらしをけりと同じ樣に、ならしをなりと同じ樣に感じる感じ方が存在してゐた事が確實である以上、直ちに我我の今日の語感を根據として芭蕉のけらしを解釋するといふ事は、充分危險な事でなければならない。――現に安政五年（西曆一八五八）十一月といふ序文を持つた其日庵錦江の「奥細道通解」(秋原蘿月校訂)の如きは、何に據つたものかは分らないけれども、此所の本文を、「哀さ增くやまさりけり」として揭げてさへもゐるのである。是は或は錦江の杜撰を說明するものであるかも知れない。然しこ

の杜撰も、けらし即けりの考へ方が此時分まで（少くとも俳諧道で）勢力を持つてゐたのだといふ事を背景に置いて見ない限り、何もこの種の通解でも書かうとする者にとつて、到底考へべからざる杜撰でなければならない。

けらし即けりの考へ方が凡そ何日ごろ芽を吹いてそれがどういふ風に發展して行つたか、その發生と展開との跡を跡づける事も慥に一つの興味ある問題であるには相違ない。然しそれは、今の私にとつて、到底手にをへない大きな問題でもあるし、又當面に大した必要のある問題でもなささうだから、私は唯、俳諧の歴史には可也關係の深い、さうして特に芭蕉が師の季吟によつてその『埋木』を通して充分親しみを持たされてゐる筈の、『八雲御抄』のけらしの解釋に觸れる丈に止めて、直ちに芭蕉に近い過去の考へ方を點検することにしやうと思ふ。

順徳院の『八雲御抄』は恐らく十三世紀の前半のうちに出來たものだらうと思はれる。（私の據つたものは凡そ寛文あたりの板本らしい）其所にはけらしの下に小さくけりと注がしてある。

是はけらし即けりといふ事を意味するものであるか、それともけらしの中には多分のけりが含まれてゐるといふ事を意味するものであるか、書き方が簡單で、はつきりした事は丸で分からない。然し、既にけらしの下にけりといふ注をわざわざ置いてゐる以上、それは少くとも當時に於て人々が、けらしの中に我々が感じるよりもより多くのけりを感じてゐたといふ事を示すものでなくてはならない。然もそれがどの位の程度のものであるかを推定する手懸りが、本文の中の外の何所にもないとすれば、我我は、『八雲御抄』と凡そ同時代の撰集、例へば『新古今』や『新勅撰』などに散見するけらしやならしの用例を拾ひ上げて來て、凡その見當をつけ、そこから『八雲御抄』の注の意味を想像して見なけ

り仕方がないといふ事になる。――

「新古今」(『國歌大觀』)の序の中には「かくの如き知らぬ昔の人の心をもあらはし行て見ぬ境の外の事をも知るは只この道ならし」といふ句がある。歌では「ほのぼのと春こそ空に來にけらし天のかぐ山霞たなびく」(卷一)「郭公鳴きつゝ出る足びきのやまと撫子咲にけらしも」(卷三)「このねぬる夜の間に秋は來にけらし朝けの風の昨日にも似ぬ」(卷四)「冬深くなりにけらしな難波江の青葉ましらぬ芦のむら立」(卷六)「住む人もあるかなきかの宿ならし芦間の月のもるに任せて」(卷十六)「白露はおきにけらしな宮城野の本あらのこ秋末撓むまで」(同上)などゝいふのがある。

『新勅撰』(『國歌大觀』)では、序の中の「又寛喜貞永のいま世治まり人安く樂しきことの葉をしらしめむために殊更に集め撰まるゝならし」といふ句を初めとして、「うちはへて世は春ならし吹く風も枝をならさぬ青柳の糸」(卷一)「この比の秋風さなみ萩の花ちらすしら露をきにけらしも」(卷四)「秋の風吹きにけらしな外山なる柴の下草いろかはるまで」(卷五)「秋深くなりにけらしな鈴鹿山紅葉は雨と降りまかひつゝ」(卷十九)などゝいふ歌がある。

――是等の用例に就いて見ると、無論それぞれに濃淡の相違はあるけれども、兎に角此所のけらしやならしに、多分のけりやなりが含まれてゐる事は爭はれない。殊にそれがなやもなどの感歎の助詞に結びつくと、多くの場合、我我は其所に最も多分のけりやなりやを感じる樣にも思ふ。然し、それにも拘らず、子細に味はつてゐると、此所のけらしやならしの中からは、直ちにけりと見られなりと見られて了ふ事に抗議するものが――或程度の顧慮や想像や、いはば、けらしの中のらしが最後まで自分の根城を捨てずにどうしても或事を一向きに肯定し主張し通させないとでも名状したい樣なものが――徐ろに動き出して來る樣に思はれる。

從つて私からいへば、「八雲御抄」のけりといふ注は、けらし即けりを意味するものではなくて、寧ろけらしの中には

多分のけりが含まれてゐるといふ事を、もつと適切にいへば、當時の人達がけらしの中に多分のけりを感じてゐたといふ事文を、はつきり指摘したものとして見るべきである樣に思はれる。けりがらしを喰ひ悉してけらし卽けりとなつて了つたといふ意味での記錄としては、この『八雲御抄』の注は、有力なる證據となる事が出來さうもないのである。それは少くとも、同時代の用例が許さない。

それから三百年の間にけらしやならしが、人人によつてどう感じられて來たか、私は知らない。然も、たとひその間に定家の門流が跋扈して『八雲御抄』など殆んど顧る者もなかつたといふ樣な時代が挾まつてゐたとしても、既に『八雲御抄』で指摘された以上、それでなくても多分にけりを感じられてゐた筈のけらしが、（少くとも一部の社會では）その後ますますけりの方へ牽きつけられて行つたに違ひないと想像する事は、それほど不合理な想像でもなささうに思はれる。然しそれは私の知らない事であるから、さういふ想像を持ち出す事も私は愼まなくてはならない。但私には、慶長二年（一五九七）の初に出來上つたらしい紹巴—興山の『無言抄』の說や慶長三年の『耳底記』の幽齋の說は（專門家から見れば或は突飛に見えるかも知れないけれども）三百年以前の『八雲御抄』の注の、當然な展開であり又その當然な歸結である樣に、思はれてならないのである。

『無言抄』は紹巴を後見として興山上人によつて編まれた連歌の新式目である。貞德は是に依據してその『誹諧御傘』を書いたといはれる。さうして是は、『御傘』と相並んで、後の俳諧者（蕉門の人達をも籠めて）から屢リファーされた本である。その『無言抄』のけらしの下には「らん」に不叶霧けさけきなとの詞に嫌ふらしはらんに嫌ふけらしはけりかに

も二句嫌へきか」とあり、らしとらんの下には「同詞なり二句嫌けらし同前といふ說有不謂一向是を嫌へからす」とある。『無言抄』に從へば、らしとらんとは同じ言葉であるが、然しけらしとらしとは違ふ、けらしは寧ろけりに同じだといふのである。もつとも連歌（俳諧も同樣である）の去嫌は、言葉の意味を根據とするかと思へば言葉の音を根據とする事もあり、或は字數や音の性質若くは位置などを問題にする事もあつて、そこに一貫した主義を發見する事が困難であるから、たとひこの著者が「けりにも二句嫌へきか」と書いてゐるとしても、その事が直ちに、この著者がけらしとけりとを同じものだと考へてゐるといふ事の證據にはなり得ないかも知れない。然しこの著者がけらしをらしやらんなどに類似した、疑ひや想像やを含んだ言葉ではないと考へてゐる事は、らしとらんの條に「けらし同前といふ說有不謂一向」と書いてゐるので明白だから、その方面からこの著者は、けらしの中にらしを感じないで、寧ろけりを感じてゐたのだといふ事を、消極的に證明する事が出來さうに思はれる。唯此際問題になるのは、「けりにも」といひ「嫌へきか」といつて、或程度著者が斷定を躊躇してゐる事である。是は著者がまだ充分にけらし即けり說になり切つてゐなかつた爲だともとれる、なり切つてはゐたが然し外にけらし即けり說に反對する有力な考へ方が存在してゐた爲だともとれる、又是は單にけらしは三字でありけりは二字である所から出て來た顧慮だともとれる。

　けらし即けりの問題を解決する上に、この『無言抄』の記述は、消極的には充分明白な態度を示してゐるとはいへても、積極的には充分精確な意見を表示してゐるとはいへない。それに比べると『耳底記』（寛文元年板本）の中の幽齋の言葉は、最も積極的に、又最も明瞭に、けらし即けり說を確肯する。慶長三年（一五九八）八月四日の條に、「ならしといふてには。「うたがひ歟」と光廣が訊くと、「うたかひにあらす。あるならしといふも、あるといふ心なり」と幽齋が

符へる。即ち兩者に從へば、けらしにもならしにも疑ひの心持が含まれてゐないのであり、けらし即けり說なのである。

唯此所で注意を要する事は「うたがひ歟」と訊いてゐる、光廣の問そのものである。疑ひの心持があるのだといふ說が一方にあればこそ、光廣の頭の中で、ならしは「うたがひ歟」どうかが問題になつた筈である。『無言抄』のらしとらんの條下には『けらし同前といふ說有』といふ一句がある。

既に『八雲御抄』の注からが、當時の語感の混亂を示唆するものの樣に私には思はれるのであるが、それは暫く措くとして、この慶長時分丈に就いていへば、『耳底記』の中のこの問と『無言抄』の中のこの記述とは、當時、一方にはけらし即けり說があり、一方にはけらし即らし說とでもいふ樣なものがあつて、それが猶に入り亂れ、人人歸一する所を知らない狀態に陷つてゐたのだといふ事を、想像させるに充分な材料を提供するものではないか。さうして『無言抄』の著者の樣なものは、その混亂の中に立つて、少くとも連歌道の中丈にでも、正しい規矩を與へようとして、その『無言抄』(の中のけらしに關する解釋)を書いたものではないか。——事實その、けらしをさし挾んで、相反する二つの說が、當時活潑に動いてゐたと想像するのでなければ、慶安四年(一六五一)の刻になるといはれる貞德の『御傘』の中の、けらしに對する解釋が、到底不可解な現象になつて了ふのである。

立圃が寛永二十年(一六四三)に出板したといふ『はなひ草』は、檀林からも蕉門からも屢引用される本ではあるが、それには「けりに　さなけき　しつけき　のけり同樣也　けらし同前」とか「らし　らん　らめ　此間同樣也　けらし

はすこしもきらはす」とか書いてあつて、『無言抄』の著者や幽齋と全然同じ解釋（立圃は元來貞徳直系の門下ではあるけれども、同門の重頼と評論して貞徳の許を去り、烏丸光廣の門に學んだといはれる、『はなひ草』にはその光廣の奥書なるものがある）を奉じてゐるのだから、此所では問題にしない事にしたい。

然るに貞徳の『御傘』では、そのけらしはの條に、「らしにもらんにも不嫌と連歌にいへりそのゆへをとふにけりといふ詞のかはりと申されし也丸つく〴〵分別するに古歌に櫻花さきにけらしなとあるを見てさきにけりと義理を付られたる說おほしその註のあやまりをしられさる故なりその註は皆連歌師の註なり歌讀の註にはけりにあらす咲にけんと云を優長に何をのへてけらしとつかひたる也けるらしといふ事をいやしけれはるもしをのそきてけらしとつゝけたるはかりなりけりと落著したる詞にはあらすけらしもうたかひのらしなり」とある。『御傘』で貞徳は、『無言抄』に依據して置きながら、自分を偉く見せる爲か何か、その『無言抄』を目の敵にして斷えず攻擊してゐるから、是もその一つの現はれと見る事も出來なくはない。が、然し、連歌師の注と歌讀の注との區別はとにかく、けらしに對するこの解釋は大體に於て我我の今日の語感と異る所のない語感を表白してゐるといふ意味で、其所に個人的の感情が交つてゐる事は否定出來ないまでも、それ丈ではなく、對待以上に貞徳は、少くとも自分の正しいと信ずる所を道破しようとしたものに違ひないと思はれる。又それなればこそ貞徳も、その解釋に續いて、「これ正理なり向後らしらんにきらはぬといふ說は信用せらるへからすこれ數十年來の誤只今たゝし侍かやうのあやまり近代の說におほく是あり二三百年以前の人達の說をやふるやうなれ共五百年千年さきの古人のこゝろにさへあはは速に惡說をはすつるよきなり人くらへをはし給ふへからすたゝ理のおす所を歌道の正義と思はるへし」などと、恐ろしく威勢の可い（間違つた事を威勢よく言つてゐる例もあるにはあるが）事も言つてゐられるのである。

然も「師承」を重んじ、「傳授」をうけられたし、常に誰かの權威を後ろ盾にして威張らして生きてゐた樣な貞德だ、たとひ自分には慾の強い男であつたには違ひないとしても、手近な所に有力な後ろ盾を持つ事なしに、自力で、かういふ解釋を斷々乎として主張する事が出來ようとは、到底考へられない事である。又事實湧き上がる內面から促かされて「理のをす所が歌道の正義」と信じ「たゞ百年千年さきの古人のことにさへあはば」一二三百年來の說傳は踏みつけても構はないと考へる程の者ならば、唯けらしといふ樣な言葉の解釋一つに自分の鋒鋩を現はすのみでなく、もつと外の大きな問題で、充分その見識を示し得た筈でなければならない。

然も此所に一つの不思議な事實がある。それは、貞德の文章などでこの種の言葉の用法を點檢して見ると、貞德は「御傘」であれほどはつきりした事を言つてゐるにも拘はらず、實際では少しも言つた通りの事をしてゐない。――少くとも徹底的に自分の言說を實行してゐない事である。「あふらかす」の後語の末には「それも私にはあらず先達の被用し分を思ひ出て十首の歌につらね侍物たらし」とある。『御傘』の序の終には「されは文字すくなにてきゝもよければ御傘をこゑによみて御さんと名付侍るものならし」とある。又同じ本の下日の條の終にも「先達の法をもときさりきらひを當代改られし事不便の事也餘のあさましさになか〳〵しく書侍ものならし」とある。かういふならしは、いかにその氣になつて見ようとしても、そこには疑ひも躊躇も想像も距離も這入り込んで來る餘地がなく、唯「優長に何をのべて」品やかさを與へる爲に、なりをならしとしたものとしか思はれない。

もつとも貞德は、けらしとならしとは語の構成が違ひ從つてその作用にも共通する所がない、と考へてゐたのかとも推測される。その爲め貞德は特にならしといふ項目を設けずに、「なれやならしたらん　こゝつかたなれば連に両て嫌講には

七句去也」などといふ様な事で、ならしを輕く飛び越して行つたものかも知れない。然しけらしの中のらしに注意してけらし即けり說に反對したものが、ならしの中のらしに注意せずにならし即なり說に左袒するのは、所詮は明白な矛盾である。よし又さうでなく、貞德はならし即なり說に反對であつて、ならしの項を『御傘』の中に別に設けなかつたのは、けらしの解釋に準じさせる積だつたからだといふのなら、今度は貞德は、理論と實行とに於いて、著しい矛盾を示してゐる事にならなければならない。

私はこの事實を、當時それほどけらし即けり說（若くはならし即なり說）が、底深く人人の心の中に根を張つてゐたのではないかといふ想像によつて、解釋して見たい氣がする。即ち是を、理のある所は知つてゐたにも拘はらず、實際に於いては貞德は、不知不識のうちに、いはば本能的に、理のない所を行はなければならなかつたのだとしようとするのである。この事は例へば、重頼の『犬子集』に現はれた、貞德直系の重頼や德元や未得などの、けらしやならしの用例によつて、充分裏書され得さうに思はれる。これらの人人は、恐らく貞德自身から、そのけらしに對する解釋を聽いてゐる筈である。然もこれらの人人のけらしやならしの用例には、理論としての貞德の影響と實際としてのけらし即けり說の勢力とが入り亂れて、或時はけらし即けるらしに傾き或時はけらし即けりに傾き、寛永八年（一六三一）から寛永十年（一六三三）までの三年間の制作を集めたといふものが、同じ人の間で些しも統一が見出され得ないのである。――もつとも此時分にはまだ貞德の頭の中で、けらしに對する解釋がはつきりした形をとつてゐなかつたものかも知れない。もしさうだと假定しても、その事はけらし即けるらし說とけらし即けり說との並存を證明するに役立つのみで、貞德の不徹底を辯護する所以にはならない。

貞徳の『御傘』は、いふまでもなく、連歌の式を學んで、初めて俳諧に式を與へたものである。殊に宗因が現はれ芭蕉が現はれるまでは、貞徳の俳諧は、天下の俳諧道に一時期を劃した。芭蕉といへども、貞徳直系の季吟（けらしに關する季吟の意見を探して見たが不幸にして見當らなかつた、然し少くとも俳諧では、季吟は貞徳の道を戰々兢々と護つて行つた人の樣に見える、從つて若し季吟に說があつたとしても恐らく、貞徳と同說であるに違ひない、もつともならじといふ言葉を季吟はその『埋木』の跋の終に用ひてゐる、然も是は貞徳のならしの用法と同一である）を通じて、「貞徳の涎をねぶ」つてゐたのであつた。從つて芭蕉が『御傘』を讀み或は『御傘』に依據して俳諧道をあるいてゐた時期が、たとひ短い期間であるとしても、兎に角存在してゐたに違ひない事は、恐らく何人も疑を容れない。同時に一方では、芭蕉の前には、たとへば西鶴からリファーされ、又後芭蕉自身からも屢リファーされた『はなひ草』が置かれてゐのたである。——といふ事は、芭蕉の語感がどつちに傾くかは別問題として、換言すれば、芭蕉が貞徳のけらし即けるらし說を信奉してゐたか、それともけらし即けり說を信奉してゐたかは別問題として、とにもかくにも芭蕉はその祖先から、けらしに對する、はつきりと違つた二樣の解釋を讓られて生れて來たのだといふ事を意味する。

もつとも元祿十一年（一六九八）に出板され、後の連歌師の金科玉條になつたと言はれる『うぶきぬ』には、「けらしは只けりと云詞にして少しうたがふ心を下にふくめと又けらしと留る句の上に疑ひの字有ては惡し」とか、「只けりにして少し心にうたがふ方有之」とかあり、同じ年に出板された、立圃直系の鷺水の『俳諧新式』にも、けらしを「らんとめの句に二句去へし」として取り扱つてゐる事を根據にして、けらし即けるらしといふ貞徳流の考へ方が、芭蕉の時代には既に可也優勢になつて來てゐたのではないかとも、想像されない事はない。然しこれも結局は想像に過ぎないのだから、芭蕉がけらしやならしをどう考へてゐたかそ、それ丈の事では、到底定める譯には行かない。これを定

める爲には我我は、所詮は、芭蕉以前にけらしの解釋が二た通り存在してゐたといふ事を承知した上で、直接芭蕉門時の用例を點檢して見るより外に仕方がないのである。

芭蕉がけらしを使つたのは、貞享四年（一六八七）の『續虚栗』に載つた發句から始まる樣である。その冬の部の「月雪とのさばりけらしとしの昏」といふのがそれである。次で凡そその『續虚栗』と同年の作と推定される『蓑蟲跋』の中には「其無能を感る事はふたたび南華の心を見よとや終に玉蟲のたはれは色をいさめむとならし」（『一葉集』）といふ句がある。同じ年の『鹿島紀行』の中には「すべて此山は。日本武尊の言葉をつたへて。連歌する人の。はじめにも名つけたり。和歌なくはあるへからず。句なくは過べからず。誠に愛すべき山の姿なりけらし」（『風俗文選』）といふ句がある。元祿元年（一六八八）の『笈の小文』の中には「漸雲門に入こそ心もとなき導師のちからなりけらし」といふのがある。同じ年の作だと言はれる『十八樓記』の中には「入日の影も月にかはりて。波にむすぼるゝかゞり火の影もやゝちかく。高欄のもとに鵜飼するなど。誠にめざましき見ものなりけらし」（『風俗文選』）といふのがある。元祿二年（一六八九）の『おくのほそ道』の中には、冒頭に引用した一節の外に、「左右山覆ひ茂みの中に船を下す是に稻つみたるをやいな船といふならし」といふのもある。又同じ年の作と言はれる『紙衾記』の中には「錦床の夜のしとねの上には鴛鴦をぬひ物にしてふたつのつはさに後の世をかこつ彼はその腐にちかく共にほひ残りとゝまれらんをや慈の一物とせんむへなりけらし」（『和漢文操』）といふのがある。最後に元祿七年（一六九四）に出た『句兄弟』の中の『東順傳』の初めには、「老人東順は榎氏にしてその祖父江州堅田の農士竹氏と稱ス榎氏といふものは晋子か母かたによるものならし」と書いてある。

一川例は、冒頭の分を除いて、以上八つある譯である。

第一の「のさばりけらし」のけらしは、いふまでもなく、けりを意味せずしてけるらしを意味する。のさばるといふ横た倒しい言葉は、けりといふ言葉で結けられては、たとひそれがけらしといふより品やかな響きに言ひ換へられるとしても、それが依然としてけりといふ意味を持つてゐる限り、餘りに露骨で、所謂「姿」をなさない。此所に芭蕉の「批評が可也露骨に表現されてゐる事は無論であるが、然もその露骨が幾分かでも柔らげられ、その感情が多少でも客觀的なものにひろげられるのは、此所のけらしがけるらしの意味のけらしであり、從つてのさばりあるいたと言つて批難する自分を自分自身から突き放して或程度に他人として取り扱つてゐる、その餘裕の作用である。

第二の「色をいさめむとならし」のならしもなるらしのならしである。此所には推量の意味が多分に含まれてゐる。元來この「蓑蟲跋」なるものは素堂の「蓑蟲說」に倣擬して書かれたものであつて、それには「みのむし／＼、玉蟲ゆへに袖ぬらしけむ。川蓑の島の名にかくれずや。いけるもの誰か此まとひなからん。鳥は見て高くあがり。魚は見て深く入。遍照が蓑をしぼりしも、ふるつまを猶わすれざる也」（「風俗文選」）といふ一節がある。芭蕉の「終に玉蟲のためには……」の句が、この一節を眼中に置いてゐるものである以上、「……色をいさめむとならし」のならしは、當然、素堂が玉蟲の事を書いた意中を芭蕉が忖度する事を現はすものであつて、外の何ものをも意味するものではあり得ない。即ち此所でも芭蕉はならしを、なりではなく、なるらしとして用ゐてゐるのである。

第三の「殊に愛すべき山の姿なりけらし」のけらしは然し、前の二つの場合とは違つて、可也多くのけりを含んでゐる樣である。此所のけらしをけりに變へ、「殊に愛すべき山の姿なりけり」として全體を味つて見ても、前後の味に大した

變化も生じないやうに思はれる。然も私には此所のけらしを、けらし即けり說の意味で使つたものだとは、どうしても見て了へない。「殊に愛すべき山の姿」だと私は思ふ、といふ樣な意味で、自分の判斷を他に强ひない、その意味で節度のある愼ましやかな心持が、けらしといふ言葉を自然に呼び出して來たものであつて、芭蕉はやつぱりその中のらしを感じて此所にけらしを使つたものではないかといふ氣がする。けりといふ言葉の上に淡くらしのぼかしをかけるのである。

第四の「心もとなき導師のちからなりけらし」のけらしも、ちよつと見ると「導師のちからなりけり」として了つても、全體の上に大した變化はなささうに思はれる。然し私は、此所のけらしは、けりでなく、けるらしの意味でなくてはならないと思ふ。なぜなら此所のけらしをけるらしと解釋しなければ、この山登りの記述に含まれたフモールが、充分に生きて來ないからである。――芭蕉が十六になる子供を案內に賴んで鐵拐が嶽に登つて行く「導きする子のくるしかりてとかくいひまきらはすをさま／＼にすかして麓の茶店にて物くらはすへきなと云てわりなき體に見えたり」とある。此所で既に芭蕉は自分を或フモールを持つて眺めてゐる事が分かる。芭蕉は自分の事を他人の樣に「わりなき體に見えたり」とも言つてゐるのである。「かれは十六と云けん里の童子よりは四ツはかりもをと／＼なるべきを數百丈の先達として」と芭蕉は續ける。此所でも芭蕉は、里の子の事にすれば十二三位の聽き分けしかない樣な子供を「數百丈の先達」として、それをなだめつすかしつ嶮岨を攀ぢて行く自分を、微笑とも苦笑ともつかない樣な心持で眺めてゐるのである。それが「羊腸嶮岨の岩根をはひのほれはすへり落ぬへき事あまたたひなりけるをつゝし根さゝにとりつき息をきらし汗をひたして漸雲門に入てこそ心もとなき導師のちからなりけらし」に至つて一段落を告げる。從つて此所のけらしは當然その中に、けりといふ樣な割に單純な心持しか盛れない言葉では到底表現する事の出來ない、色んな複雜な心持を含んでゐなければならない。それを細かに手繰り出して見ると、其所には、やつと目的地に辿りついてほつとした

様な心持も這入つてゐなければならない、又、どうも大變な案内を雇つたものだ是非やどうもしやうがないといふ様な心持も這入つてゐなければならない、然しこれも子供だから無理もないといふ様な心持も這入つてゐなければならない、最後に、元來さういふ者を雇つて從つて來るからが間違つてゐる餘計な酔興だといふ様な心持も這入つてゐなければならない。――然もさういふ複雑な心持を渾然と包んで、さういふ複雑な心持が奥にある事を渾然と人に感じさせるものは、けりを意味するけらしではなくて、自分の斷定を、向きには主張させない、けるらしの意味でのけらしの力である。

第五の「誠にめざましき見ものたりけらし」のけらしに就いては、第三例のけらしに就いて言つたと、丁度同じ事が言へる。元來この「十八樓記」は「みのの國ながら川にのぞみて水樓あり」といふ岐阜の賀島なにがしの水樓を、芭蕉が「かの瀟湘の八のながめ。西湖の十の境も。涼風一味のうちにおもひためたり」と言つて、十八樓と命名してやつた、その記文であつて「誠にめざましき見ものなりけらし」はその眺望の絶佳なる事を賞美する爲に用ひた言葉であるから、此所のけらしは、何の遅疑も逡巡もなく、全然けりと同じものとして使はれたと見る事が、場合に甚だ適切である様に思はれる。顧慮も躊躇もなしに「誠にめざましき見もの であります」と斷定して了ふ事が、いはば主人に對する禮儀でもあるからである。然し此所でも私は、私は思ふといふ意味で、けりにぼかしを掛けたものとして、このけらしを感じる事を認め得ない。なぜなら、私からいへば、「風景」の詩人めかして、けりなどと思ひ切つた斷定を下して了ふ事を、芭蕉は何となく氣恥しい事に感じてゐるのである。さうしてこの心は、須磨明石のあたりを叙して「かゝる所の秋なりけりとかや此浦の實は秋をむねとするなるべし」と言ひ、「かなしささびしさいはむかたなく秋なりせばいさゝか心のはしをもいひ出へき物をと思ふぞ我心匠の拙なきをしらぬに似たり」と「笈の小文」に續ける、その心と相脈絡するもの

を持つてゐる樣に思はれる。

第六の「是に稲つみたるをやいな船といふたらし」のならしが想像のならしである事には、恐らく何人も論がない。

第七の「戀の一物とせんむへなりけらし」のけらしには或程度けりがある。然し直ぐその前に「彼はその府にちかく共にほひ殘りとゝまれらんをや」といふ句があつて、この「とゞまれらん」には、（妙にねぢれた言ひ廻し方ではあるが）必然に想像が這入つて居り、從つて或事をまともに斷定するのでなく、或條件の下に斷定する事を意味するものである以上、その句の響きを受けて然もその句と共に纏まつた一つのものになる筈の「戀の一物とせんむへなりけらし」のけらしが、それと同樣に、その斷定には或距離が置かれ或條件が附けられてゐる筈だと見るのは、最も自然で又最も合理的な見方である樣に思はれる。約言すれば、此所のけらしの中には、普通以上にけりが含まれてゐるとも見られない事はないが、然し前後の關係から我々は自然に、そのけりよりもより多くけるらしを感じさせられるといふのである。

第八の「榎氏といふものは晉子か母かたによるものならし」のならしは當然なるらしのならしである。是は前後の關係からなるらしでなければならない事を證明するのは六づかしい。然しそれと同樣に本文の前後には、このならしをなりと見なければならない理由も存在してゐない。——もつとも芭蕉は其角を子供の時分から手にかけてゐる。從つて其角の姓の榎氏が母方の姓であるといふ事は、とつくの昔から知つてゐたかのも知れない。若しさうだとすれば、此所のならしがなりの意味に用ひられてゐると考へても、大した不思議はない筈である。然し、よろづ愼ましやかな芭蕉が、本筋に大した關係もない事で、弟子とはいへ他人のうちの事を知つたか振に、あれはかうだと斷定的に公けに物言ふ事を欲しなかつたのだと想像すれば、たとひ芭蕉がその事をとつくの昔から知つてゐたとしても、このならしは當然なる

らしとして使はれたものに違ひないといふ事にもなり得る。又事實芭蕉は、榎氏が母方の姓であるといふ事を、斷定的に言ひ得る程、はつきりとはしつてゐなかつたものかも知れない。それもあり得る事だとすれば、その方面からも、此所のならしは單純になるらしとして使はれてゐるのだ、と言へない譯もない樣である。

用例點檢の結果を纏めて見ると、芭蕉は八つの用例のうちで、六つまではけらし（ならし）をけるらし（なるらし）の意味に用ひて、あとの二つだけにより多くけり（なり）の味を持たせてゐる事が分かる。然もその二つの場合にあつても、芭蕉は、けらし即けり說をも奉じてゐたとするには、餘りにはつきりとらしの味を意識してゐると見做す事が出來るのだから、芭蕉は、主義として、けらし即けるらし論者だつたと考へて、少しも差支ない樣である。殊に芭蕉の親友素堂が『續虛栗』の序の終に用ひたならし以後、そのけらし（ならし）の五つの用例の內で四つ（貞享四年『續虛栗』序、元祿二年『寄芭蕉』發句前書、元祿三年『松と梅』序、寶永五年『梅の時』序）までが明白にけるらし（なるらし）として用ひられ、一つ（元祿十一年茸狩三句前書）丈が比較的に多分のけり（なり）を含んでゐるといふ事實を參照すると、芭蕉の時代一般は兎も角もとして、少くとも芭蕉と素堂とは、『御傘』で提唱された、けらしの解釋に關する正しい理論を、貞德自身若くは季吟などに比べて、遙に完全に又遙に充分に、實行してゐたのだと言ふ事が出來る。

即ち芭蕉は、その祖先から、けらしに對する二た通りの解釋を受ついだにも拘はらず、はつきりとその內の一つを——途中で歪められ濁らされ鈍らされたものでなく、正しく純粹に原本的な解釋の方を、意識して把握してゐたのである。

此所で冒頭に引用した『おくのほそ道』の一節を振り返る事にする。すると、あの「哀さしはらくやまさりけらし」のけらしは、芭蕉の主義から言つて、當然けるらしと解釋せられべきだといふ事になる。換言すれば、さう解釋しなければならない特別な根據が存在しない限り、あれをけりと解釋してはいけないといふ事になる。然も本文の中からは到底さういふ特別な根據を探し出して來る事は出來ないのである。

そんなら此所のけらしをけるらしと解釋して、外に何かの不都合でもあり得るか。若し其所に何等かの意味で不都合があり得るとすれば、それは、さう解釋すれば、芭蕉の心持が餘りに複雜なものになる――換言すれば、三百年以前の人間の心持を餘りに近代的に複雜なものにして見すぎるといふ事になる、といふ事ぐらゐでありさうに思はれる。古人が感じもしないものを我我が我我の今日の心理で塗り立てて、その古人のあられもない「顏」をかいて喜ぶといふ事は、元より不都合であるに違ひない。然し是を芭蕉の場合に適用して芭蕉が三百年前の古人だから、その心理は必ず單純でなければならない、即その心持を決して複雜なものに見てはいけないと、どうしていふ事が出來るか。

私からいへば、芭蕉ほど心持の複雜に動いた人は、日本の詩人としては珍らしい。又芭蕉ほど心持のその複雜な動きを潑剌に表現し得た人は、日本の詩人としては珍らしい。それは芭蕉の書いた文章からでも發句からでも附句からでも、任意に材料を持つて來て證明の出來る事である。我我はもつともつと「近代的」に芭蕉を解釋しても、それでもまだ芭蕉の心の動きを捕捉するのに、充分であるとは言へない樣に思はれる。

芭蕉は「月雪とのさばりけらしとしの暮」といふ句をよんでゐる。「月花の愚に鍼立ん寒の入」といふ句もよんでゐる。「能なしの眠たし我をぎやう〳〵し」といふ句もよんでゐる。また「てらにねてまこと顏なる月見哉」といふ句もよ

んでゐる。『鹿島紀行』には「すこふる人をして。深省（シンセイ）を發せしむと吟じけむ。しばらく淸淨の心を得るに似たり」（『風俗文選』）といふ一節がある。『笈の小文』には「夷狄を出鳥獸を離れて造化にしたがひ造化にかへれとなり」といふ句や「かなしさひしさいはむかたなく秋なり「猿の茶店にて物くらはすべきなと云てわりなき龍に見えたり」といふ句や「かなしさひしさいはむかたなく秋なりせはいさゝか心のはしをもいひ出へき物をと思ふぞ我心匠の拙なきをしらぬに似たり」といふ句がある『更科紀行』には「歩行より行ものさへ眼くるめきたましゐしほみて足さだまらさりけるにかのつれたる奴僕いともおそるゝけしき見えす馬のうへにて只ねふりにねふりて落ぬへき事あまたたひなりけるをあとより見あけてあやうき事かきりなし佛の御心に衆生のうき世を見給ふもかゝる事にやと無常迅速のいそかはしきも我身にかへり見られてあはの鳴戸は波風もなかりけり」（『笈の小文』附錄）といふ句がある。

芭蕉の生活並に藝術を貫ぬく著しい相の一つは、その自己批評である。芭蕉は自分を、自分の心のあらゆる動きを、高い廣い自由な立場から、如實に認識しようとする。如實に認識して無私に批評しようとする。然し、一面に於て芭蕉はそれ自身が悲劇的（トラーギッシュ）だとも言はれべき劇しい情熱（パッション）の所有者であつた。從つて芭蕉には、自分を他人の樣に眺めてゐながら、**尚且つ充分に他人と眺め切つて了へない樣な所がある。其所から芭蕉の、尤も高い意味でのフモールが生れる。**

「哀さしはらくやまさりけらし」のけらしにも私は、さういふ意味でのフモールを感じるのである。さうして、そのフモールを感じる事は、芭蕉にないものを此方から無理に投入する事ではなくて、芭蕉が意識して封じ込んだものを、正しく理會して引つぱり出して來る事だと考へる。

芭蕉が遊女の身の上に同情してゐるといふ事は、芭蕉が寢込んで了ふまでの間迄で知れる。その遊女が「行衞しらぬ

旅路のうさあまり覺束なう悲しく侍れは見えかくれにも御跡をしたひ侍に衣の上の御情に大慈のめくみをたれて結緣せさせ給へと泪を落」して嘆願するのである。芭蕉は出來る事なら一緒に連れて行つてやりたいと考へたに違ひない。「不便には侍れとも」の一句が、それを充分に指示する。然し芭蕉は、連れて行く譯には行かないと考へた。芭蕉は「我々は所々にてとゝまる方おほし」と言つて、それを拒絶する。さうして「只人の行にまかせて行へし神明の加護かならす恙なかるへし」と言ひ添へる。

「神明の加護……」といふ堂堂とした保證の裏に既に或哀れが感じられる樣に思ふ。それが「と云捨て出つゝ」と曲折するに至つて、もつとはつきりしたものになり「哀さしはらく」と連接して、一種悲痛とでも形容したい樣な濃厚なものに高潮する。その時芭蕉は、その「哀さ」を感じてゐる自分を突き放し、その立場よりは一段高い立場に立つて「哀さ」を感じてゐる自分を眺める事によつて、その高潮を柔らげ靜め冷ます。さうして芭蕉は、やつと失はれかけた「心の自由」を再び我ものにする　その心の活らきの機微を表現してゐるものがこのけらしである。けらしによつて、文章の上に段落が出來る事は無論であるが、それと共に、一度激しい動を與へられた感情も、微妙な曲線を描いて段落させられるのである。

この事は次に來る發句と文章とからも確肯出來る樣に思ふ。けらしによつて或程度心持の餘裕が準備されてゐるのでなければ「一家に遊女もねたり萩と月」といふ句から感じられる心持の餘裕が、多少前文とそぐはない心持を起させるに違ひない。又この發句でその餘裕が可也多量にされてゐると感じなければ、それに續く「曾良にかたれは書とゝめ侍る」といふ一句が、妙に他所他所しく、或意味では芭蕉の衒氣とでもいふ樣なものを感じさせるに違ひない。然し既にけらしの中に或他所他所しさが含まれてゐるとすれば、それが「一家に」の發句の持つてゐる他所他所しさに橋渡しさ

れて「付良にかたれは」の持つてゐる他所他所しさに來るのだから、うつりは極めて自然なものになつて、さういふ行氣などといふ様たものを感じる隙がなくなつてしまふ。

かうして芭蕉の此所のけらしも、けるらしと解釋して惡い理由は、何所にも見出されない様である。從つて潁原を初め、この「やまさのけらし」を「やまざりけり」として解釋してゐる諸抄（是は殊に今日の抄に多い）は、謂れなき杜撰を踏襲してゐるものだと言つて可いと思ふ。

最後に附記して置きたい事は、芭蕉のけらしが貞享三年（一六八六）（普通の制作年代推定法に從へば、此集で發表された作品は多くその年度か若くは前年度の制作にかゝるものとせられる、從つて「貞享丁卯歲富月仲三日」の奧書ある「續虛栗」に載つた「としの丹」の句は、當然その前年即ち貞享三年の年の暮の制作にかゝるものと見做される）から用ひられ始め、それ以前の集には、何所にも所見がない様に見うけられる事である。——この事と芭蕉がけらしに對して持つてゐた語感とを結びつけ、それを芭蕉の生涯の上の貞享三年の年の暮といふ時期の上に置いて見ると、芭蕉の用語の中にけらしといふ言葉がこの時初めて現はれ、さうしてそれ以後は殆ど絶えず [illegible] で絶えずちらちらと現はれて行つてゐるといふ事が、可也に象徴的な意義（この事は同じ『續虛栗』に載つてゐる「[illegible]かわりなき菊のつほみ哉」のかはりなきといふ言葉に就いても言へさうに思ふ、もつともこの内容は少し違ふけれども）を持つて來る様にも思はれる。

元來前集の句には、最後まで、突きつめた心持とでもいふ様なものが、[illegible]てゐる様である。是が我我を動か

す大きな力の一つの源になつてゐるに違ひないが、然もそれが最も露はに出てゐるのは、芭蕉の天和の句と貞享初年の句とである樣に思はれる。「月をわび拙きをわびてわふと答へむとすれと問ふ人もなしなほわび〳〵て」といふ樣な前書を持つてゐるのも天和の句である。『芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉』といふのも天和の句である。「櫓の聲波ヲ打て腸氷る夜やなみだ」といふのも天和の句である。貞享元年から二年へかけての『野さらし紀行』の旅には、「野さらしを心に風のしむ身哉」といふ句がある、「猿を聞人捨子に秋の風いかに」といふ句がある、「みそか月なし千とせの杉を抱あらし」といふ句がある、「砧打て我にきかせよや坊か妻」といふ句がある。その他「死にもせぬ旅寢の果よ秋の暮」や「木枯の身は竹齋に似たる哉」「草枕犬も時雨るゝかよるの聲」や「年暮ぬ笠きて草鞋はきなから」や「命二つの中に生たる櫻かな」や「白けしにはねもぐ蝶の形見哉」や「夏衣いまたしらみをとりつくさす」や——どれを見ても、天和から貞享へかけての發句の多くは、せつぱ詰つて鋭く人の胸元に迫つて來る樣な、或場合には苛苛した樣な尖尖した樣なものを、可也多分に包んでゐるのである。それが然し例へば貞享四年から元祿元年へかけての『笈の小文』の旅の發句になると、「旅人と我名よばれん初しぐれ」を初めとして、「春立てまだ九日の野山哉」とか「何の木の花とはしらず匂哉」とか「草臥て宿かる比や藤の花」とか「日は花に暮てさびしやあすならふ」とか「行春にわかの浦にて追付たり」とか、閑雅する感じを持つた句もなくはないにしても、それは奥に籠められ、概しては、安らぎある和やかな靜かな沁沁した空氣が、ふはりと全體を包む、今迄とは可也の對照をなす心境の開展が、著しく目立つて來るのである。

かういふ心境の開展は、一朝一夕の事でなく、可也に長い間の準備や醗酵を必要とするものである事には論がない。然も私には、それが貞享三年（「古池や」の句も貞享三年の句とされてゐる）の頃に可也著しい貌に於いて現はれ、さうしてその過渡期（全體として言へば寧ろ元祿の味の方が勝つてはゐるが）を示してゐるものが、貞享四年の『續虛栗』の

中の句だといふ氣がしてならないのである。然もその『續虚栗』の句の中で最も多く天和貞享（初）の味を待つてゐるものが「月雪とのさばりけらしとしの昏」の句（天和と貞享初年との句には自分のからだ全體を他人に投げつける樣な感じの句が多いけれども、顧みて自己を批評する樣な心持のはつきり出てゐる句は丸で見當らない樣である。然し自己を劇しく唾棄する樣な心持を含んで――その意味で自分のからだ全體を投げつける尖尖しい自己批評の句は、元祿の句には見當らない）であり、その「としの昏」の句がのさばるとい言葉にけらしといふ言葉を添へる事によつて全然天和貞享（初）の句になり切つて了ふ事から免かれ得てゐるとすれば、恰もこの句――といふよりもこの言葉は、芭蕉の内面生活の重大な轉機と、隨分密接な關係に於いて結びついてゐるといふ風に見たくなる誘惑を、私一人でなく、誰でも感じはしないだらうか。然もこの言葉は、その後、可也目立つて屢、芭蕉によつて用ひられてゐるのである。

文藝時評

正宗白鳥

一葉と樗牛

樗牛全集中の「文藝評論」と「想華と小品」との二卷、一葉全集、獨歩全集、二葉亭全集中の創作集と雜纂との二卷を、私は輕井澤の高原に持つて來てゐる。

若い夢を見てゐる最中に、突如として、慘い運命の斧に打たれて、生存を破壞された人間の生涯は哀れである。私は、若かつた一葉と樗牛との遺著を讀んで、わが青春を回顧して多少の感慨を催した。彼等の若々しい感傷的な浮世物語や感想文が、今なほ青年讀者の心を動してゐる所以を推察し、文壇の風潮が數十年間に激しい變遷を經てゐるに關はらず、彼等の文章にその激しい變遷のために埋沒しきれない一般的のものを有つてゐることを思つた。彼等の遺著は青春の書である。はじめて新文學の起つた明治二十年代の若い作家の誰れのものよりも、一葉の小說、樗牛の感想、藤村氏の詩が、青春の情趣を一層多く含んでゐる。

樗牛と云へば、「吾人は須らく現代を超越せざるべからず」といふ、彼れの墓石にまで刻まれてゐる文句が連想される。作家は文明の批評家たらざるべからずと立論して、全く批評的精神を缺いでゐた當時の日本の文學を罵倒し、また、「時代精神」論を主題として、盛んに文壇を相手に論戰してゐたことが、私には直ちに思出される。一ころは、多くの批評家はみんな樗牛に向つてぶつつかつて行つてゐたので、彼れは五人拔き十人拔きの角力を取つて屈しなかつたの

である。明治以來の批評家のうち、所說の內容は兎に角、外形上最も華やかな活動をしたものは、彼れ樗牛であつたと云つていい。

全體「時代精神」とは何であるか。今、樗牛全集を開いて見ると　彼れ曰く、「古今東西の文學史上動かすべからざる一個の事實は、大なる文學は大いなる人物と等しく最もよく時代の精神を代表せるものなりと云ふこと是也。……よく當代國民の感情及び欲求に最も明瞭なる發聲を與へ、其の愉悅する所の前途に最も具象の體形を附し、見よ爾等の理想玆に在りと告ぐるものあらば如何、目見る能はず、耳聽く能はず、口はた言ふ能はず、唯其の胸中の悶々を擁して、空しく闇中に摸捉せる一代民衆の胸は、猶ほ一糸響きて萬管是れに和するが如く、翕然として是に趨かむ。是の如きは所謂時代の聲たり」と。つまり、彼れは當時の寫實的小說に厭足りないで、理想主義を鼓吹したのであらう。彼れはまた。「今の文學者は社會の觀察者を以て任ず、しかも彼等の觀察する所は彼等の社會のみ」と云つて、作家の觀察範圍の狹隘なのを非難し、「所謂時代精神は、待合料理屋の席上に現はれず、又粹人社會の通語によりて說明し得べからず。一國人文の根據を洞察して、內外古今の歷史的趨勢を達觀するの明あるに非ざるよりは、得て解すべからざる也。是を以て古より大文學者の多くは、同時に識見一世を拔ける大思想家也。彼等は常に天下の人を傾聽せしむるに足るべき人生觀と社會觀をその胸裡に蓄へし也」と說破してゐる。

作家の觀察範圍の狹隘、識見の淺薄、人生觀社會觀の幼稚など、樗牛が數へ上げたいろ〳〵な非難は、數十年を隔てた今日の文壇に對しても下し得られるものである。しかしそれは、彼れの批評眼の鋭さが古今を貫いてゐるためではないので、さういふ抽象的論法は、何時の世にも何人によつても、用ひやうと思へば、容易に用ひられるのである。今日は小雜誌の雜文家でも、そのくらゐなことは云つてゐる。

そこで、樗牛自身は、どういふ卓越した人生觀社會觀を有つてゐたかといふに、全集の彼力此力を捜しても、范乎として捕捉し難いのであるが、强いて一例を擧げると、「所謂社會小說を論ず」の條下に、

「若し道德を以て責むべきものを云はゞ、富强者須らく先にして、貧弱者須らく後なるべし。吾等は素より富强者に向つて道德上十分の反省を要む。しかも、强力即ち權利なるの社會にありて、是の如き反省は貧弱者の服從によりてはじめて得らるべきものにはあらざるか。吾等は社會進化の過程に於て、其の勢力の不平均な分配を受けたるものが、彼の强力に對して幾分の服從を示すを以つて、彼等の幸福を享受せんがための當然の要務なりと思料す。之れはた社會の秩序を維持し、人生の幸福を進むるに於て缺くべからざるなり」と云つてゐる。

見よ。識見一世を拔ける大思想家たれと作家に强要して、自から高しとしてゐた樗牛の社會觀も、今日では、政治家や資本家にこそ同感されようが、文壇に於ては、小雜誌の雜文家にさへ、鼻であしらはれるやうな流行遲れの古くさい意見なのである。「現代を超越せざるべからず」と云つても、彼れ樗牛も決して時代を飛越へてはゐなかつた。

要するに、文學者としての彼の價値は、頭腦の聰明な、識見の傑れた批評家としてゞはなくつて、無遠慮に青年の氣焰を吐き、また青春の惱みを唄つた點にあるのだ。彼れは客觀主義よりも主觀主義を取り、シェークスピアよりもバイロンを好み、あるひはハイネを抱いて泣いた。(ハイネを讀んでの啜り泣きは、當時の文學青年の間に流行してゐた現象であつたが、鷗外はこれを揶揄して、彼等はハイネでも、英譯になつた甘い小詩だけを讀んでゐるのであらうが、ハイネにはもつと毒氣の强い肉慾的の詩があるのだと云つてゐたやうに私は覺えてゐる)

樗牛は、いろ／＼な文學論に於ては、稀薄な內容を、外國の文豪の名前などを臚列して重味をつけ、當時の標準では名文視せられた文章で色をつけて、深い意味のあるらしくしたのであつたが、彼の本心は「時代精神」よりも、「文明

の批評」よりも、感傷的な青年の夢を、文學の上に見たかつたのであつた。その證據には、彼れはニーチエなどを振翳しながら、力に徹した鷲の如きニーチエの勢ひは影をだに見せないで、ハイネに泣きサツホーに泣いた。硯友社の所謂似而非寫實を罵つて壯としながら、一方では、田山花袋氏の「わすれ水」の如き——互ひの胸の思ひを打明けずして別れて、他日ふと再會して、儘ならぬ浮世を歎いて涙に暮れる若い男女の幼い夢のやうな戀物語——に萬幅の同情を表はし、同窓の土井晩翠氏の作風に味方をして、島崎藤村氏の詩を朦朧體として非難しながら、その「一葉舟」を讀むと、作者とゝもに、哀傷の涙にむせばなければならなかつたのである。馬場孤蝶氏の「蝶を葬むるの辭」についても、あまりに哀れ過ぎるとして上べは非難しながら、「そもや孤蝶、秋風も吹き初めぬ野邊に愛づべき花は澤なるに、運命拙く幼兒の手に捕はれ、今は翼破れて路泥にさすらふ哀れの孤蝶……」云々の感傷的美文に衷心から共鳴してゐたことは充分にその評語のうちに現はれてゐる。彼れは決して「現代を超越して」はゐなかつた。彼れは、戀愛神聖の俗説を打破し「戀愛すなはち肉慾なり」と説いた綠雨の「色道論」に憤慨し、羞恥の念なきものと罵り、廣津柳浪氏の「今戸心中」を讀んで、情死の美に打れ、情死に向つて滿幅の同情を寄せながらも、「青樓遊女の汚れたる愛情に於て」のみ情死の題目を求めたのを、大なる遺憾としてゐる。彼れが硯友社一派の小説を罵倒するにも、屢々社會の風教を亂すことを以てしてゐる。……樗牛の論評感想にこの二方面を見たことを私は甚だ面白く思つてゐる。

同じく明治二十年代から三十年代の初頭にかけて文筆を執つてゐた若き文壇人でありながら、硯友社系統の人々その他綠雨などは、徳川期の軟派文士の氣風を受繼いでゐて、樗牛が屢々非難した如く、「粹人社會の通語」などを喜び、遊蕩的氣分を樂み洒落つ氣があつたが、一方では藤村氏などの文學界一派その他田山花袋氏などは、センチメンタルで純情的であつた。そして、後者の系統に屬する人々は、明末の新文學、たとへば、ダンテやバイロンや、ゲーテやハイネや、

ロセツチなどを讀んでも、それ等の詩歌小說を、みんな自家の哀傷を刺戟する材料としてゐたのであつた。涙を誘はんがために讀んでゐたのであつた。樗牛の如きも、ニーチエを振翳しなどして、傲然たる批評家面を曝しながら、バイロンを讀んで泣きハイネを讀誦して泣いてゐた。そして、その泣きの涙に映じてゐるものは、空想的乙女の影であつた。當時の島崎藤村氏は好んで乙女を詠じ、田山花袋氏は好んで乙女の小說を作つた。彼等の乙女はそれぐ\の姿を有つたヴイアトリチエであつた。浮世の塵に汚すのも惜しいやうな純潔な乙女に對して、はかなき戀の憧憬を寄せて、青春期の惱みを惱んでゐた。樗牛が硯友社一派の女性に對する不眞面目を憤り、その小說を攻擊した所以である。「わがそでの記」「濟見潟日記」の如き小說體の美文は元より、「傷心錄」などの多くの短い感想文は、藤村の詩や花袋の小說と、その基調を同うし、色彩を同うしてゐるのだ。……「一葉册」を唄つた藤村氏は、世路の艱難人生の波瀾を經驗するにつれて、「春」を書き「家」を書き、ついに「新生」を著すほどの境地に達した。「わすれ水」に於て、幼い哀切な戀に泣いてゐた花袋氏は、後日一躍して、「蒲團」や「生」を書くやうになつた。しかし、短命であつた樗牛は、「わがそでの記」から遠く脫出することが出來なかつた。「われやまさなき人に物の哀れを知りそめき、思へば葉末の露のいとはかなき戀りなりし。……もゝ夜のひじのはしがきに、君やいのちとかこちしも、思へばあだなる夢なりき。かくて、吾がこころはとこしへに癒えざるべく傷づけられき。わが思ひを誰にか語るべき。月の夕、雨のあした、われ「はいね」を抱きて共に泣きしこと幾たびか」と、涙に濡れてゐた彼れ、詩人樗牛は、茫漠たる文明の批評よりも、茫漠たる時代精神の追求よりも、自己の涙に映る乙女の正體や、自己の心に潜む惱みの正體を突留める方が、彼れに取つて有意義であつたのだが、不幸にして彼れは長生をしなかつた。永久の青年として死んだ。しかし、そこに彼れの遺著の、今なほ多感多情の青年の心を惹く一つの理由が存在してゐるのであらう。……青年期には硯友社氣質よりも、藤村花袋樗牛の如

き、處女崇拜の純情を持つてゐる方が、文學者の表徵として、好ましいのであらうと思はれる。

樗牛の文章には、よく消化されない漢語を驅使して、文意模糊として正解しがたいものが多いが、そのうちでは「嘲風に與ふる書」が名文である。「嗚呼悟らんがためには吾が情、強きに過ぎ、迷はんがためには吾が知、明かなるに過ぐ。予は是の中間に彷徨して、遂に其の適歸する所を知らざる也。足下よ、惡夢に襲はれたる夜は眠らざるに等し、予は既に是の十數年の歳月をかゝる煩悶の間に過ごし、人生の幾何寧ろ其の重きに堪へざるを覺えたり」と云つてゐるが、彼れは、不治の病患に罹つて以來、生死の煩悶に直接し、その苦しみから脫却せんがために、日蓮の研究を志したのであらう。そして、宗教に心を向けるに當つても、念佛宗や基督教よりも、威勢のいゝ日蓮の方が、强がりの青年には相應しかつたのであらう。

樗牛の文章は、印象不明晰で、杜撰な文字を濫用してゐる漢文調であるが、熱情が籠つてゐるので、讀流してゐるうちに、ある種の快感が覺えられることがある。私など、日本外史國史略の類の素讀によつて文字を覺えはじめた者には、日本化された一種の漢文調によつて、藝術的感興を惹起されるやうに習慣がつけられてゐる。言文一致體の文章では感ぜられない情趣をそこに感じるのである。現代の思潮とは隔たりの多い、內容の稀薄な、樗牛の論文集が、今尙流布してゐるのは、現代の青年にもまだ、漢文調に自己の藝術本能を滿足させる傾向が多少存在してゐる證據とされないであらうか。

樋口一葉の文章は、二十を過ぎたばかりの若い女の筆に成つてゐるに關はらず、却つて「滿見渴日記」や「わが袖の記」ほどに哀傷的でないのを、私は今度感じた。樗牛が、たゞ浮世悲しと消え入るばかりに泣いてゐる時に、一葉は觀察し批判することを忘れなかつた。彼女の「日記」は、今の世なら「私小說」として發表せられるべきもので、擴張的

頌國記錄の連續である國木田獨歩の「欺かざるの記」よりも、遙かに藝術味に富んだものである。

私がはじめて讀んだ一葉の小說は「文學界」に掲げられた「雪の日」であつた。上京前の少年期には、「國民之友」や「文學界」を夢心地で耽讀してゐたので、「國民之友」の附錄號にあつた北村透谷の「宿魂鏡」を、「花よ／＼と浮かれぞめきし人の心も稍々靜まりて、一輪早咲きの薔薇花の上を、羽弱の蝶の行きもどりする四月の末の春景色」の書き出しめから、殆んど暗誦してゐたやうに、「雪の日」をも、繰返し／＼讀み通したのであつた。しかし、「宿魂鏡」に含まれた眞意が解らなかつたやうに「雪の日」にも、何處に小說的價値があるのやら、雲を摑むやうで分らなかつた。(今、彼女の日記と照合すと、この小說は、師匠のN氏に對する彼女の心境を寫したものである)

彼女の歿したのは、私の上京した年の冬であつて、その頃の彼女の名聲は非常なものであつたらしく、私の耳へもをりをり入つてゐたが、當時神信心に凝つてゐた私は、小說書類には殆んど手を觸れなかつた。ただ「國民之友」だけは引續いて讀んでゐたので、その新年附錄に掲げられてゐた「わかれ道」だけは讀んだ。そしてひそかに感心してゐた。

私が一葉全集を通讀したのは、餘程經つてからであつた。「經机」「十三夜」「うつせみ」「わかれ道」などはよく解つて、可成りに面白かつたが、「たけくらべ」や「われから」などは、作意がよく解らなかつたし、和文調がもどかしく、隔靴搔痒の感じがして、左程面白く思はれなかつた。

私の在學中、一二年早稻田に教鞭を執つてゐた高山樗牛を、一度訪問した時、いろ／＼な話の間に、「坪內先生は、紅葉の作風は客觀的だから、將來どう伸びて行くか分らないが、一葉は主觀的だから、もつと生きてゐても、書くものかさう發展しないであらうと批評されたが、果してさうでせうか」と、いふ意味の話をして、樗牛は暗に坪內博士の說に同意しかねる自說をほのめかした。客觀的の紅葉が伸びたか、主觀的の一葉の方が伸びたかは、疑問であるが、彼女は

「わかれ道」「たけくらべ」あたりから、小說の本舞臺へ出かゝつたので、それまでの幾つかの短篇や小品は、習作として見るべきものである。「たけくらべ」は、明治文學中に異彩を放つてゐるもので、この一篇を殘し得ないで死んでゐたなら、彼女の名聲に大關係を及したのである。危いところであつた。

「雪の日」が一葉の初期の心境小說である如く、「たけくらべ」は、彼女の後期の心境小說である。美登利が無邪氣な少女時代から急變して、新しい計り知れない人生へ出掛つた如く、一葉も習作時代を經て、これから文學の大海へ出掛つてゐたのだ。文學愛好者に惜まれる所以である。

主觀的作家であるとしても、一卷の一葉集を通讀して、作者の日常懷抱してゐるある人生觀、ある理想が讀者の胸に映つて來る譯ではない。貧窮の境涯にゐて苦鬪してゐた彼女は、日記のうちに、屢々衣食の缺乏について歎息を洩らしてゐるし、「さるにても意地惡の世や〱」などと小說のうちでも罵してゐるが、しかし、作家としての心眼に映る人生に對して決して悲觀的でも絕望的でもなかつた。むしろ健全性を具へて常識的であつた。「うつせみ」は、失戀の狂女を描いたもので稍々筆の馴れた後期の作物であるが、かういふ題材は面白からうと思ひついて書いたゞけで、すべて型の如く、常套を脫したところはない。「われから」にも、多くの獨創性が認められない。いくら聰明で批評の目を備へてゐた才女であつたにしても、二十を過ぎたばかりで、異性に對する體驗もなかつたらしい彼女に、人生の深いところの分らう筈はなかつた。「いつその腐れ縮緬着物で世を過ごさう」と思つた「わかれ道」のお京には、作者の實感から出た共鳴があつたであらうし、美登利の心理は、作者自身の實驗した心理によつて裏附けられてゐるのであらうが、他は多く云ふに足りないのである。怜悧な少女の小說たるに過ぎない感じがする。

藤村が詩に於て、樗牛が美文と評論に於て、明治二十年代の青春の惱みを唄つた如く、一葉は小說の形を借りて、そ

の頃の女子としての青春の惱みを唄つたものとして、永へに後人の情緒をそゝるので、今日の文壇があの時分に比して、人生描寫社會觀察に於て遙かに進んでゐることは否定出來ないのだ。

私は、久振りに樗牛一葉の遺書を讀んで、作品の内容には、左程重い價値を置かないのに拘はらず、久振りに青春の書を讀んだ感じがした。

次手に、長谷川二葉亭の「浮雲」を通讀した。第一編を讀進むと、これが明治二十年頃に現はれたのかと驚かされた。これは單なる青春詠歎の書ではない。悠々たる人生がそこに現はれてゐる。當時の社會相が、多少の稚氣があつても、そこに活寫されてゐる。第二編も引續いて面白かつた。しかし、第三編になると、前とは打つて變つて氣拔けがしてゐるのに驚かされた。クド〳〵とだらしのないこと甚しい。この間の消息は、内田魯庵氏が「思出す人々」のうちに詳しく書いてゐたやうに思ふが、兎に角「浮雲」は明治文學中の不思議な産物である。第二作「其面影」は凡庸である。その書出しが、「浮雲」の第一回とソックリ同じいのが、何か深い意味があつてわざとさうしたらしくもないので、呆れた。二十年目に創作の筆を執つたのに、第二作は第一作の燒直しのやうである。「平凡」だつて左程取立てゝ云ふべき作品ではない。二葉亭は人物として明治の文學者中最も尊敬すべき人で、その一生の行動には學ぶべきところが少くないが、創作家としての才能は甚だ乏しかつたのではないかと、私は以前から疑つてゐたが、今度ます〳〵その疑ひを深くした。

獨歩全集をも今度ところ〳〵讀返したが、獨歩の小説は、今なほ見褪めがしない。無器用なところや生硬なところは目につくが、決して陳腐な感じはしない。「牛肉とジャガ芋」や「惡魔」のやうな、獨歩式人生觀から割出した理窟つ

ないものは、今の私には興味がないが、「酒中日記」「女難」などは相變らず面白いし、「竹の木戸」「二老人」「疲勞」など晩年のものはことにいい。一案は天與の才能を伸ばしかけた頃に死んだのだが、獨歩はその作品にますく深みを加へかけて、惜しくも逝去した。

明治文壇の秀才の多くは、それぐに持つてゐた藝術的天分を充分に發揮しないで死んだのである。彼等の早世の重なる原因は貧乏であつたことだと思ふ。

島崎藤村氏は、幸ひに、貧乏といふ恐ろしい重石のためにも押潰されないで、進み得られる限り自分の道を進んで來た。一葉や樗牛などと調子を合せて青春の惱みを唄つた時代から歩を進めて、いろくな作家や思潮と道連れになつたり離れたりして、ついに「新生」にまで達した。

私は「若菜集」以來氏の著作の愛讀者であつた。現在の日本の文學者のうち、藤村氏に對してはつねに仰見るやうな感じをもつて見てゐる。明治以來のすべての文學者について云つても、藤村氏には最も頭の上がらないやうな感じがしてゐる。これは私の有つてゐる迷妄の一つであらう。私は氏とは反對の道を歩いてゐる人間であらうし、氏の作品に必しも一々感心してゐる譯ではないのだから。………私は、この「時評」の筆を執つてゐる間に、藤村全集中の重なるものだけでも、年代を追うて讀返してよく考へて見よう。

私は、先日、小諸へ遊びに行つた。新聞に噂の出てゐた藤村氏の「詩碑」を見ようと思つて、古城趾の懷古園へ上つたが、「詩碑」はまだ立つてゐなかつた。それで、千曲のために細々と流れてゐる千曲川を俯瞰したり、淺間山を眺めたりして、輕井澤の別宅へ歸つたが、不在中に、山崎斌氏の著書「藤村の歩める道」が屆いてゐた。これが一日早く手

に入つてゐたなら、小諸の田舍町が詩趣を帶びて、もつと面白く見られたであらうと思ひながら、寄贈の書物を一讀した。これは藤村全集十二卷の忠實なる解說である。作者自身が小說の形を取つて、自傳を書き續けてゐるのだから、「藤村傳」は、他の作家の傳記よりも書易いに違ひないのだが、山崎氏は私心を挿まず、要點をよく取入れて、なだらかに書流してゐる。著者の筆使ひも藤村氏に甚だ似通つてゐる。しかし、原作者の著書を根據とした忠實な解說ではあるが、あまりに平面的で、底が淺い。原作を浮上らせる影がついてゐない。この「藤村傳」は著者の目的がそこにないのであらうから、この新作はこれでいいとして、もつと時代の背景を濃厚に描いて、かういふ作家かういふ作品の現はれた所以を討究し、個々の作品についても、もつと進んだ批判を加へたものをも私は讀みたい。

靑野氏・岸田氏・谷崎氏

ある一部の批評家の藝術觀を代表してゐるらしい靑野季吉氏の「解放の藝術」を讀んだ。詩もなく警句もなく、自己の體驗の滲出たところもないが、文章はキビ〱してゐて、一通りの條理は立つてゐる。しかし、所論が單調で、骨と皮ばかりで、豐富な肉がついてゐないから、いくつもに分れてゐる題目を讀續けるのが困難であつた。同じく文藝批評家といふ部分けに屬するにしても、高山樗牛などとはまるで柄が違ふ。

私は、樗牛の評論を靑野氏のに比較して、時代思潮の著しい變遷を感じた。樗牛は明治三十年前後の文學者に對して「時代精神」捕捉の必要を强調し、靑野氏は我々現今の作家に對し「時代の苦悶」着目の必要を指示してゐる。用語の上から見ると、明治大正兩期の二人の批評家の立論が符節を合せた如くであるが、內容は餘程相違してゐるらしく思はれる。「時代精神」と云ひ、「時代の苦悶」と云ひ、批評家自身は何を意味してゐるのか、甚だ茫漠としてゐるのであるが、

私が努めて討究したところによると、樗牛の狙つてゐるところはかういふことであるらしい。

彼れ曰く「吾人は敢て今の小説家の多くを目して時代の精神を解せずと言ふ。吾れ時代を解せずして、却つて時代の吾れに背けるを誣る。抑々何等の陋翁ぞ。沙翁ゲーテにして是を言はば、吾人尚ほ是を恕せん。誰れか今の紛々たる小説家の口より是の如き大言を聞くに忍びんや。試みに今の時代を見よ、吾人が活動の氣勢は日に騰り、國民思想を擧げて方に一回轉の機運に迫れるの事實を見る。所謂元老は政治界に於ても、學藝界に於ても、漸く凋落し去らんとする也。政治教育の社會に於ける日本主義と國家主義との爭ひは、國民道徳の變遷に伴ふて將に一生面を開かんとしつゝある也。社會道徳にありては、法治機關の充實によつて促されたる權利思想の發達が、從來の倫理と漸く乖離の實を表はし來れるを見る也。宗教と國家との關係は、改正條約の實施と共に將に新面目を見むとする也。哲學界には、純理哲學的傾向漸く退滅して、社會學的教育學的研究漸く增進し來らんとする也。凡そ是等の事實は、將來の國家的人文に向つて、如何の革新を豫約せんとする。明治の歴史は改革の歴史なり。而して今や三十年にして再び大飛躍の時機に際會せるの觀あるを見る。知らず我が小説家は這般の事實に對して如何の考察を遂げたる乎。是の社會風潮の急轉過渡に際して、何ぞ獨り文學界の冷々淡々として相關せざるの甚しきや。文壇衰頽の原因實に茲に存す」

樗牛のこの所論には、當時の時代相の一斑が概括されてあるが、それによつて見ると、彼れは、日本主義と國家主義の爭ひを描けと云ふのであらうか。權利思想の發達を描けと云ふのであらうか。青野氏などは、「日本主義と國家主義の爭ひ」のかはりに、「資本主義と社會主義の爭ひ」を取扱へよと云ふのであらう。時代の思潮は大に變遷してゐる。しかし、樗牛は評論に於てかういふ要求を持出して、作者に迫りながら、彼自身小説の形に於て筆を執つた時には、年少の頃の「瀧口入道」の如き、稍々長じてからの「わがそでの記」「清見潟日記」などの如き、今なほ青年讀者の胸に觸れるやう

な感傷的純情的心境を露出してゐるのである。彼れの高唱した「時代精神」は、それ等の作品には少しも現はれてゐないのだが、しかしそこには詩があるのである。彼れの持つて生れた藝術的天分が自由に現はれてゐる。

ところが、青野氏には、全く詩を缺いでゐる。樗牛ほどでなくても、人類發生以來、男女とも青年時代には必ず多少は有つてゐる筈の詩を缺いでゐるやうである。私は青野氏の文章は、今座右に置いてゐる「解放の藝術」以外には、一二の論文を讀んだのに過ぎないので、他に氏の名を帶びたどんな作品があるか知らないが、この一卷を讀んで、氏には、私が數十年の間に觸目し翫味した古今東西の藝術家が、それ〴〵に有つてゐたやうな詩魂を少しも持つてゐないことを推察した。氏がかういふ論文以外に、傑れた藝術品を產出してゐないことは、讀まずとも推して知られるのである。

私は必しも氏の人間的眞價を低下せんためにかう云つたのではない。傑れた藝術品を作り得ないと云はれても、氏は決して憤慨しないで、却つてそこに誇りを感じるであらう。萬一私の斷定に憤慨するやうであつたなら、氏はまだ不徹底なのである。傳統的の腐つた殼がついてゐる譯なのである。

私が「解放の藝術」について、多少の感想を述べようと思立つたのは、この最近賣出した評論家の持つてゐる眞面目な意氣込みに心を惹かれたのと、私が多年ひそかに持つてゐたある淋しい思想に何處となくに觸れる氣持がしたからであつた。「詩を作るより田を作れ、」といふ諺があるが、それも一面の眞理である。由來、宗教慾と藝術慾とは、古來人類の心に深く萌してゐる迷妄とも云ふべく、宇宙人生の眞相をありのままに見ることを妨げてゐるやうに思はれる。私は、かういふ迷妄から脫却して、美しい霞を拂拭して、森羅萬象を見たいと思ふことがある。……藝術虛無觀、文學無用論がたび〴〵萌して來て、わが過去の文學生活は愚かなる努力であつたと、心淋しく感ぜられることがある。青野氏の如きは、私ほどにも宗教と文學との迷妄に捉はれてゐないらしいので、その所論を押進めると、どうしても、文學無用

論に走らねばならないのだ。私の如く長い間迷妄に彷徨してゐたのでもなく、また天性藝術慾の薄いらしい氏は、無用の長物である筈の文學などには唾を引掛けて、自己の天性に適した他の方面へ向つたらいいやうに思はれる。自己批判の目のあるらしい氏が、さう痛感しないのは、不思議である。實際運動家が、「藝術運動なんて騒いで見たところで何になる。要するに紙上の革命の類ではないか。そんなものが階級鬪爭の實際戰場で何の役に立つものか云々」と云ふのを氣にして、藝術評論の仕事を棄つるに躊躇する申譯をしてゐるが、私はこの未練くさい不徹底さを不思議に思つてゐる。氏もまた文學青年らしい夢から脱しないのであるか。諸種の生産事業を起すに當つて、資本家が頭を使つていろ〱劃策して、勞働者を驅使して激勞させ、利益の大部分を自己の懷中に收めるのは陋劣であると憤つてゐる氏等が、藝術運動の易きにつくのはどういふ譯であるか。

氏は、「藝術は、少くとも起るべき「藝術」は、「享樂階級の所産」でなく、「階級的麻睡の役に立つもの」ではない。「享樂と麻睡の籠つた」何とかでないと未練らしい言譯をしてゐるが、由來藝術は有閑時の所産であつて、假りに氏等の抱ける空想的新時代が現出したら、樂しく唄ひ樂しく踊り、原稿料を目當てに油汗を出して文を作つたりしないで樂んで筆を執り、樂と共に藝術を享樂すべき筈のものではないか。今日にしても藝術に享樂分子の添つてゐるのは當然である。そして、古來の傑れたる藝術には多少麻睡的文字の含まれてゐないものは絶無である。原始時代にでもいい聲で唄を唄はれると、聽者は恍惚としたに違ひない。野蠻人にいい唄を聞かせるとそれに聞惚れて、首を刎ねられても恐れないと、マコーレーがミルトン論に書いてゐるのを、學生時代に早稻田の講堂で學んだことがある。美しい詩歌、巧な文章、あるひは名畫名音樂に接した時には、現代の人間でも麻藥にかかつたやうに、心醉し恍惚とし夢心地になることが多い。青野氏がこれを否定するのは、藝術的迷妄を持つてゐない證據ともなすべきもので、その點で私は、氏に對して興味を

惑するのだが、しかし怪しくも、藝術評論の作業に執着を持つてゐるらしい氏は、「それは自分などが時々刻々忘れる暇もなく待設けてゐる新時代が出現した時には、藝術も享樂であるべきであらうが、目下奮闘混亂の時世だから、それどころでない」と云つて、「時代の苦悶」「人間の苦悶」を藝術に結びつけるであらうが、いろ〳〵な苦悶も、藝術で取扱ふ時には、麻醉的魅力があるのだ。ストリンドベリーの男女暗鬪の悲劇を見ても、チエホフの絶望の淋しい芝居を見ても、あるひは、トルラーやカイゼルの傑作を見ても、自己の影周圍の姿をそこに見て暗然として溜息を吐いても、觀客の心は、棘々した階級闘爭の感を起させられイラ〳〵させられるのではなくつて、藝術的感激——麻醉的力を感ぜしめられるのである。

二葉亭四迷は、輕卒に時代の流行に雷同せず人の煽てに乘らず、絶えず自分から省み自から思ひを凝らす人であつた。そして、「文學は男子一代の事業とするに足らず」と云つた。彼れは深く古來の文學に通じてゐた人であるに關らずさう云つた。彼れの談話に曰はく、「私はまあ懷疑派だ。第一論理といふことが馬鹿々々しい。思想の法則は人間の頭に上る思想を整理するだけで、それが人間の眞生活とどれだけの關係があるか。心理學上人間は思想だけぢやない。精神活動力の現はれ方には情もあれば知もある。それを思想だけ整理しても駄目ぢやないか。……だから識覺の上にのぼつて來る思想だけぢや、到底人間全體の型は付けられない。……たゞ手探りにやつて見るんだ。……人生々々といふが、人生とは一體何だ。一個の想念ぢやないか。今の文學者連中に聞きたいのは、よく人生に觸れなきやいけないといふその人生だ。作物を讀んでこりや何となく身に浸みるとか、こりや何となく急所に當らぬとかの區別はある。しかしそれが直ちに人生に觸れる觸れぬの標準となるんなら、大變輕卒なわけぢやないか……」

その頃批評家仲間に流行してゐた「人生に觸れる」とか「觸れぬ」とかの藝術的迷妄に、彼れは捉はれないで、おのれの途を進まうとした。青野氏の如きも、男子一代の事業を文學以外に求める氣になれないのであらうか。

二葉亭も今日に生きてゐたら社會運動に左袒してゐたかも知れないが、しかし、彼れは藝術上の虚名に物欲しげな目を向けてアクセクしなかつたであらう。

私が青野氏の所説と一味相通じてゐるのは、文學無用論であつて、それについては共に語りたいと思ふ。

私は、岸田國士氏の飜譯は、ルナアルの「葡萄畑の葡萄作り」など二三を讀んで、現代佛蘭西文學の一端を味つた。氏の飜譯は巧妙である。「命を弄ぶ二人の男」その他二三の脚本をも讀んで、氏獨得の輕快味を面白く感じた。氏の作品は、ある一部の若い讀者に喜ばれてゐるらしい。私は、今回「解放の藝術」を讀んであとで、岸田氏の「言葉、言葉、言葉」を讀んで、同じ時代に生まれて、年齢も似通つてゐるらしいのに、二氏の心のあらはれが、かうも違ふものかと、二つの書物を机上に並べて興味を感じた。永井荷風氏の佛蘭西物語などに見られるやうな情熱が通つてゐなくつて、濃厚なる描寫もないが、輕快で淡白な詩趣はある。思はせ振りの氣取りが鼻につくところもあるが、一部の青年にはかういふところが悦しがられるのかも知れない。私は「役者の妻」などの佛蘭西役者物語、巴里劇壇の話、「傳説より」などを喜んで讀んだ。

谷崎潤一郎氏の「赤塚氏の話」(改造所載)を讀んだ。未完ではあるが、前編だけででも作者の本領はよく解る。女子の肉體の研究とその描寫とは、氏の作品に於ては珍らしいことではないが、今度のはことに丹念である。頭のてつぺんから足の裏まで、全身を殘る隈なく索つた上に、甜めずり廻つたやうな感じがする。人生に關する諸般の研究のうち、異性の研究は最も面白いものの一つであらう。餘計な精神的迷妄に累はされないで、肉體をのみ翫味して足れりとして

ゐれば、人間はそれでいい譯であるが、谷崎氏のこの作品などには、以前のものに比して、暗い影が切實に差しかかつてゐる。後篇では一層それが濃く現はれて來るのではあるまいか。……作者自身の肉體が衰へたためであらうか。年齢のせいであらうか。花鳥、風月、山川、草木の享樂は、年とともに趣味をまし風流の錆びの添はつたりするものだが、人間が人間を鑑賞するには、不變の興味をのみは許されない。ままならぬ浮世である。

「新潮」合評會も、八月號所載の分は、この頃になく出來榮えがいい。いくつかの戯曲についての諸氏の意見には聞くに足るものが多い。戯曲が小說よりも劣るとは、今なほ文壇の定論のやうになつてゐるが、この頃の有樣では、必しもさう斷言は出來ないと思ふ。

輕井澤所感

私は六年前、大正九年の夏季三月間を輕井澤で過した。六月一杯滯在してゐた伊香保から移つて來たのであつた。その前年の秋に東京を引揚げて歸省して、半年あまり內海に沿うた漁村に蟄居してゐたのだが、新綠の頃、故鄕の家の住みにくさに堪へかねて、またも東京へ出ることにした。借家拂底のために住居を東京に求むることが難かつたので、止むを得ず山上の生活を營み、輕井澤には、十月のはじめまで腰を据ゑてゐた。私はその時この土地で「毒婦のやうな女」を、一月半もかかつてコツ〳〵書いた。山上の燈火が一つ〳〵消えて、避暑客のすべてが高原を去つたあと、尾花に圍まれた小さな家の中で、弱り行く蟲の音を聞きながら、毛布などにくるまつて、茫然として過した夜が多かつた。

私は、何時までも野中の一軒家にゐる譯には行かなかつたので、東京へ下つて住家搜しに取掛つた。その時C社を訪

問すると、暫く耳にしなかつた文壇の雜事が自から話題となつた。

「この頃は、新作家が幅を利かせ出して、原稿料も大分せり上げるやうになつたんですね」と、私は云つた。

「しかし、この頃の若い方は、あなた方がはじめ文學をおやりになつた時分とは、意氣込みが違ひます」と、××氏は、新作家の全心的努力を推稱した。

果してさうであらうかと、私は疑つたが、兎に角、文壇は一變化したらしく、幾人かの新作家の名は雜誌の上に輝いてゐた。そして、一年足らずの私の不在中に、原稿料が少くも以前に倍加するやうになつてゐた。昔から貧乏文士の綽名をつけられて、緑雨の所謂「箸は二本筆は一本」の歎息を洩してゐた我々の仲間も、やうやく世間並の生活を營み得られるやうになつた。

爾來六年、雜誌の數はます／＼殖え、出版書類も、世の不景氣に關はらず、ます／＼數を增してゐるやうであるが、新たに頭を持上げて萬人の注意を惹くやうな作家は、殆んど現れなかつた。時代は徐々に變遷しつつあるのだが、文學藝術の方面では、紅葉の出た時の如く、一葉や樗牛の出た時の如く、谷崎潤一郎の出た時の如く、あるひは、六七年前に有島武郎その他の數氏の出た時の如く、新人が突如として華々しく舞臺に現はれて、觀客をアツと云はせるやうでなければ面白くないのである。古來文學藝術に傑れた人々の多くは、自己の華やかな名聲に歡喜した。志を立てて文藝の道を進む人間は、由來常人よりも名譽心に富んでゐる筈である。……しかし新代の日本の青年作家は、過去數千年間の東西の文學藝術の士とは天性を異にし、かかる名譽心を眞に空虛と觀じてゐるのであるか。「商業雜誌」などを眞心から尻目に掛けてゐるのであらうか。

私の高原獨居の感想は果てしがない。豫定の紙數が超過したから此處で筆を擱く（八月一日、輕井澤にて）

追加「自己辯護」

先日、寄贈された國民新聞の切拔きを讀むと、これには近松秋江氏の「光秀と紹巴」評が出てゐた。史實の相違などを擧げて、私の作品を非難してゐた。私があれを書いた時には。近松氏の批評の如き批評の下されることは豫期してゐたので、小山內氏などから寄せられた好評はむしろ意外とするところであつた。

私は、これまで三種三樣の違つた態度で小史劇を試作したのに過ぎないので、どれに對しても不滿を抱いてゐた。「勝賴の最後」について、上司小劍氏は、今の史劇作家の空想の貧弱なことを冷笑し、昔の歌舞伎作者は、勝賴を水際立つた美男の花作りなどにしてゐると、その突飛な思付を激賞してゐた。私が見た團十郎晩年の演技中最も感心した一つである「愛宕の旅館」では、光秀はおど／＼してゐる松助の紹巴を一刀に切棄てた。

で、國民新聞の切拔きを讀んだ時には、當然現はれるべき批評として、たゞ見て過ぎたのであつたが、今日、大磯から廻送された中村吉藏氏主宰の「演劇硏究」八月號を見ると、秋江氏は先日と同樣の筆法で「光秀と紹巴」評を寄稿してゐる。私は二度續けて意見を聞かされたので、何とか返答をしなければならぬ破目になつた。

私は、小說であれ戲曲であれ、自己の作品について、隔靴搔痒の物足らぬ感じを、つねに有つてゐるので、大抵の非難は甘受するのだが、しかし、自己辯護を企てたなら、どんな愚作でも、徹頭徹尾辯護し得られないことはない。

私は秋江氏の據つて立つところの「野史」は讀んでゐないが、この歷史は、日本外史などの種本となつてゐるほどの比較的信賴すべき書物であるらしい。私は、「嬉游笑覽」に引用された、貞德の「歌林雜話」の一節を讀んで、紹巴に對する一面觀を知つた。それには、彼れを「剛情な男」として略々「野史」に似た人物評を下してあつたと、今記憶

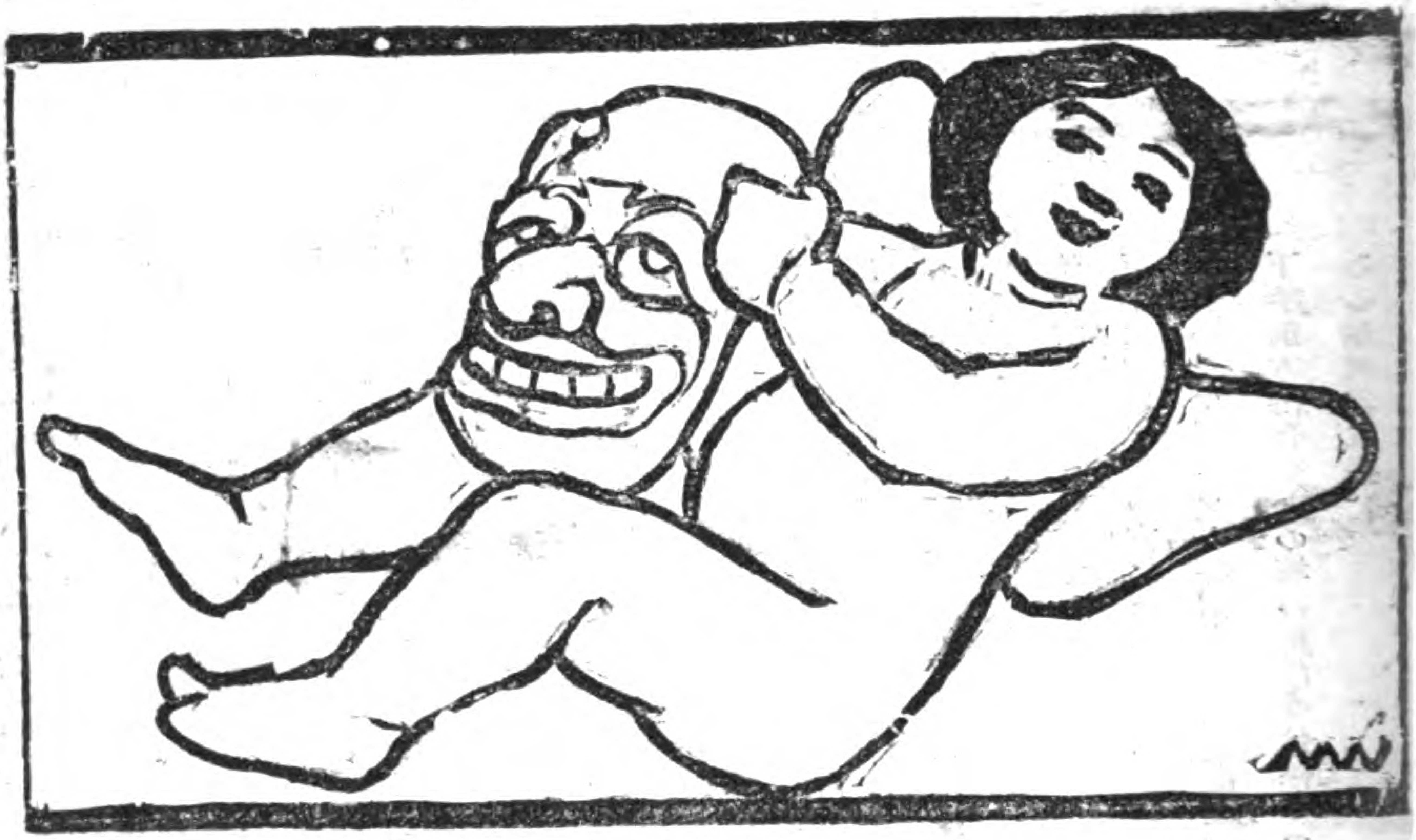
してゐる。私が歷史を書く氣であつたなら、「野史」や「歌林雜話」を根據として、紹巴を取扱つたであらう。それどころか、光秀は愛宕の連歌興行を終へると即日龜山へ歸城したのが、史實として確からしいので、その點から云つたなら、あの戲曲は最初から成立の可能性を有つてゐないのだ。しかし、「改正三河後風土記」にある、光秀と紹巴が愛宕に同宿したといふ一說に興味を感じて、そこに創作的空想を起すと、あとは作者のものである。作者は紹巴を提げてともに冒險的戲曲の途を進むのである。私は連歌師紹巴をある藝術家氣質の一人として、その眼光や態度を取扱つた。「野史」に概括的に記された紹巴の「資性勇猛」の說は、多分正しいので、彼れについては記錄に徵すべきものが甚だ乏しいやうだから、私の紹巴は、私の空想裡の紹巴に過ぎないかも知れない――創作としてはそれでいいといふ說は立派に立つのだが――しかし、「後風土記」の記事、あるひは「川角太閤記」の記事を、與へられた暗示として、連想を還らうすると、「野史」などの表面的人物評とは違つた生きた紹巴が、私の戲曲によつて髣髴として描かれてゐるのでないかと思はれる。

最も信賴すべき史料である「川角太閤記」によると、紹巴は光秀滅亡のあと、秀吉の怒りを買ひ、それを恐れて、三井寺の山林へ逃げて蟄居してゐた。資性潤達な秀吉のことだから、あとで怒りを解いて、紹巴を召寄せた。それは紹巴が曾呂利式幇間として遊び相手とするに面白かつたためであらう。甫庵の「太閤記」によると、法眼の肩書を貰つてゐる紹巴は、秀吉の吉野の花見に扈從して、衆とともに和歌をつくつたりして主君の御機嫌を取つてゐる。秀吉を恐れて三井寺の山林へ逃げた紹巴を捉へて、光秀を恐れて丹波の山林へ逃げさせるのは、創作上の取扱ひとして、彼れの人間性を無視した譯にはなろまい。紹巴が本能寺の變事の際に、二條城の側を通つてゐたとか、あるひは、小栗栖で紹巴が顏を出すの實だといふやうなことは（これは秋江氏が云つてゐるのではないが、飽くまで史實に拘泥すれば、これは最も[illegible]行つた

ら、日本の舊劇は云ふまでもなく、皮相で、しかもその皮相の點でさへ極めて不確實な團十郎の活歴でも、ショウなどによつて時代無視の作品として蔑視されゐる沙翁の史劇でも、そればかりでなく、ショウ自身の史劇、最近の「聖ジュアン」でも、史に托して自己の胸臆を描いたストリンドベリーの傑作史劇「グスタブワサ」でも、古今の史劇といふ史劇はすべて罵倒されるべきである。秋江氏の讃美してゐる岡本綺堂氏の作品の中では、「小栗栖の長兵衛」には、私も猿之助の所演を見て興味を感じたのであるが、あれだつて、嚴正なる史實の上から批判したら、私の戲曲以上の出鱈目であらう。「描き足りない」とか「光秀の懊惱に力が足りない」とか云ふやうな、戲曲の出來榮えに關する秋江氏の非難に對しては、私は一言の申開きも出來ない。作者自身、決して描き足りたとしてはゐないのである。

私は試みにあの三樣の史劇を書いたので、史劇について、いくらか自得するところがあつた。他日、改めて新たな史劇に着手することがあるであらう。なほ、私は、この「時評欄」を受持つてゐる間に、わが戲曲觀を書きたいと思つてゐるので、秋江氏などの所說についても、その時に論及することにしよう。旅中參證すべき書物が一冊もないので、ここでは單に紹巴に關連した斷片的辯護を試みるに留めて置く。(八月六日、輕井澤にて)

(中央公論第四十一年秋季大附錄號創作)



戯曲

白日夢

—一幕四場—

谷崎潤一郎

人物

歯科ドクトル

看護婦A

看護婦B

六七歳の男の兒

その祖母らしい婦人

老紳士

會社員風の男

丁稚

令嬢

青年

（以上）歯の療治を受けに來る人々

患者甲
患者乙
患者丙
その他納涼客（此の中にドクトルの夫人と子供、令嬢の兩親が交る。）、通行人、刑事等

時
所
夏の大都會らしい感じ

第一場

或るビルディングの六階にある齒科醫院。上手三分の二が治療室、下手三分の一が待合室。ドーアA、B。Aドーアは上手側面の前方、即ち治療室の壁に、Bドーアは待合室の下手側面にある。Aは普通の板のドーアで、締まつてゐるが、Bの方は、細かい鐵の子の彈ね戸にしてある。彈ね戸の向うに外の部屋が薄暗く見える。二室の境目には全然戸がなく、待合室から治療室の樣子がすつかり窺はれる。後方に窓三つ。その二つは治療室に一つは待合室にあつて、そこから眞夏の灼けつくやうな都會の展望——無數の煙突、瓦屋根、ラデイオのアンテナ、突兀たるコンクリートの建物などが炎天の下にキラキラしてゐる。

治療室の設備は極めてハイカラで、アップ・トウー・デートである。中央程よき所に手術臺A、B。Aはやや上手に、Bはやや下手に、觀客席の方に面して据ゑられてゐる。その他エンヂン、コントローラー、消毒裝置、ウオッシング・スタンド、大小さまざまのキャビネット等、ガラスや金屬性の器物が白壁に映じてピカピカと光る。上手Aドーアに近く、倚り靠りのない長椅子一脚。下手前方待合室との境の所に受付係りのデスクと椅子。長椅子の前と、後方の壁と、受付係りの席のあたりに、間斷なく廻轉してゐる扇風器三臺。

【創作 3】

白日夢

待合室は中央にテーブル。その兩側に椅子三四脚、正面と下手側面に長椅子。下手の壁に帽子掛けの臺。それにパナマ帽一個麥藁帽三個ステツキ一本、地味なパラソル一本。テーブルには新聞や週刊雜誌が載つてゐる。此處にも扇風器が一臺、下手後方の隅に置かれた小卓の上で廻轉を續ける。

A手術室に六七歳の男の兒、その後ろに附き添ひの祖母らしい婦人が立つてゐる。

B手術室に和服の老紳士、――紗の羽織に白上布、白足袋、――ドクトルの手術を受けてゐる。

ドクトルは三十五六歳、色の白い、せいの高い、髮の毛の濃い、面長の男。仕事着の下にスツキリとしたリンネルのパンツを見せ、白の靴下に黒の短靴。エンヂンを廻して、ドリルで老紳士の下顎の臼齒を掘つてゐる。ドクトルの顏は無表情で、終始醫者的冷靜の態度を保つ。

A手術室の男の兒は自分の番を待つてゐる間、神經質な、怯えたやうな眼つきをしてゐる。時々訴へるやうに祖母の顏を覗き込み、B手術室の治療の樣子を恐ろしさうに偸み視る。

看護婦A、B。Aは上手後方に立ち、乳鉢でアマルガムを擂る。Bは受付のデスクの傍に腰かける。二人とも美人ではないが、二十歳前後の、クリクリとした圓顏の女。趣味や感じがよく似てゐるので、一見した時、此のドクトルは斯う云ふタイプが好きなのか知らん、と、そんな氣持ちを起させる。顏にはお白粉氣が微塵もなく、看護服は着てゐるが帽子は被つてゐない。赭ツちやけた髮を引つ詰めに結ひ、袖を肘までたくし上げて肉感的な腕を露はし、短かい裾の下に逞ましい脛と、太い素足を出し、スリツパアを穿いてゐる。その粘土色の皮膚が純白の服と對照されて蠱惑的に見え、黒人の奴隸女を連想させる。此の二人もドクトルと同じく無愛想で、顏面筋肉は少しも動かない。全く機械的に、人形のやうに立ち働く。

待合室には會社員風の男と丁稚が待つてゐる。會社員風の男は三十四五、アルパカの上衣に白セルのパンツ、向つて左側の椅子に腰かけ、卓上の新聞を讀む。丁稚は十五六のニキビだらけの少年、右の頰ぺたが夥しく脹れ、顏が醜く歪んでゐる。正面窓際の椅子に凭れて、脹れた所を氣にしながら、そうツと手をあてておさへてゐる。

暫くの間無聲無言。扇風器の音とエンヂンの響きのみジイジイと聞える。……

ドクトル、コントローラーを蹴り、エンヂンを止める。

ドクトル　一つ含嗽（うがひ）をして。

老紳士起き上つて含嗽をする。

ドクトル、最初にアルコールを含ませた脱脂綿を、その後から乾いた脱脂綿を、二つ三つ老紳士の口に咬へさせる。手を洗つてからA手術室の方に來る。

祖母らしい婦人、丁寧に會釋する。

老紳士は綿を咬へたまま、仰向けに口をあんぐり開いて、じつとしてゐる。

ドクトル（男の兒に近づき）何處がお惡いですか。

祖母らしい婦人　あのう、此處の（と、自分の左の顎をさす。）奥歯でございますが、もう長いこと齲歯になつてをりまして、それが時々痛みますのでございます。

ドクトル　はあ、…………今もお痛みになりますか。

祖母らしい婦人　はい、よい鹽梅に暫く起りませんのでしたが、今朝程から又、…………

ドクトル　はあ、はあ、………

手術臺のペダルを踏んで仰向けにする。歯鏡を男の兒の口腔へ挿し込む。

ドクトル　もつと口をあーんと、………あーんと開いて、……

エキスプロアラーで奥歯を探る。男の兒體をモヂモヂさせる。

ドクトル　此處ですか、痛いのは？

男の兒、突然飛び上るやうな恰好をする。ドクトル慌てて手を引つ込める。男の兒バタバタ暴れながら泣き出す。

男の兒　痛い！……痛いよう！

祖母らしい婦人　これ、これ、そんなことを云ふのではありません。見て頂けば直ぐに痛いのが止まるんです。

男の兒　いやだアー　いやだアー

祖母らしい婦人　まあ、ほんたうに、何と云ふ分らず屋でせう。先生はちつとも痛くないやうに、上手に直して下さるんですから、………ほんのちよつとの間だから、我慢をしなければいけません。ね、ほら御覽、まアあの兒は意氣地なしだつて、皆さんが笑つていらつしやるよ。いいえ、此の兒は決して意氣地なしではございません、唯今直ぐに御診察をして頂きます。——

ドクトル　さあ、もう一度あーんと開いて。——痛い所へは觸らんです。

男の兒火のつくやうに泣く。ドクトル迷惑さうに顔をしかめる。

祖母らしい婦人　これ、そんな大きな聲を出して、皆さんに御迷惑ぢやありませんか！——さ、いい兒だからじツとしておいで。ね、ほんのちよつとの間ですよ、お前が「痛いッ」と思ふうちには、いつの間にか濟んでしまふんですよ。さ、おばあさんは眼を潰つてゐます。——もう直ぐ大人しくなりますよ。——ほんたうにお利口さんなんですもの。—

ドクトル强ひて手術をしようとする、男の兒いよいよ頑强に喚き立てる。

男の兒　いやア！　いやア！………

祖母らしい婦人　ではどうすると云ふんです！　おばあさんが困るぢやありませんか。

男の兒　いやだア！　歸るんだア！

祖母らしい婦人　いいえ、いけません、ちやんと療治をして頂いてから歸るんです。

男の兒　いや、いや、いやア！　歸るウ！………

祖母らしい婦人　そんなことを云つたら、いつ迄立つてもその歯が直りやしませんよ。家へ歸つてから又「痛い痛い」ッて泣いたつて、もうおばあさんは知りませんよ。いつそ一と思ひに直して頂いたら、いくら樂だか知れないぢやないか。――（ドクトルに）どうも何とも、……療治を受けますのが誠に嫌ひでございまして、いつも此の通りなのでございます。いかがでございませう、泣きましても構ひませんのですが、無理にでもやつて頂きます譯には？――

ドクトル　さあ、斯うお動きになられてはしにくいですな。――（男の兒に）どうですか、ちよつと靜かにしてゐて御覽。あーんと、あーんと開いて。さう、さう、賢いですな。何も痛いことはないです。

ドクトル辛うじてエキスプロアラーを口腔へ入れる。とたんに男の兒再び飛び上るやうな恰好をして、悲鳴を擧げる。ドクトル、看護婦ＡＢにそれと眼くばせする。二人の看護婦、兵卒の如くツカツカと左右より進み、Ａはシツカリ男の兒の頭を押さへ、Ｂは左の腕を摑む。男の兒の泣き聲いよいよ昂じて、死に物狂ひに兩足をもがき、首を動かし、一生懸命に抵抗する。

ドクトル（ほつと溜息をして手を引つ込める。）お氣の毒ですが、此れでは奈何とも仕樣がないです。

看護婦ＡＢ、ドクトルが止めると同時に自分達も手を放し、又ツカツカと元の席へ歩み去る。男の兒は以下退場するまで一刻も休まず泣き續ける。

男の兒　歸るウ！　歸るんだよう！……

祖母らしい婦人　ぢやあ何とでも勝手におし、その代りもう痛いと云つても知りませんよ。いいかね、それでもいいと云ふのかね。

男の兒　歸るんだア、……

祖母らしい婦人　歸ると云ふなら歸りますから、もう泣かないでもよござんす。ほんとにまあ、手も付けられない、何と云ふ意氣地なしなんだらう。御覽、お前の弱蟲には先生も呆れていらつしやるから。おばあさんももう懲り懲りしま

した。（ドクトルに）ではあの、誠に勝手でございますが、いづれ又出直しまして、……お忙しいところを何とも申訳もございません。

ドクトル　いいや。

手術臺を縦に直し、患者に被せた白い布を取り除ける。

男の兒臺から下りる。

ドクトルはさつさと手を洗つて、B手術臺の老紳士の方へ取りかかる。

祖母らしい婦人　（男の兒を連れて待合室の方へ行く。）どうも皆さん、おやかましうございました。ほんたうに飛んだ失禮を。……これ、もう泣くんぢやありません！　泣くんぢやないッたら！

叱言を云ひ云ひ、帽子掛けの臺からパラソルと帽子を取り、男の兒の手を引いてBドーアより退場。

看護婦B　（診察券の名前を呼ぶ。）中村さん、中村さん。

會社員風の男　はあ。

看護婦B　（上手を指す。）あちらへおいで下さい。

會社員風の男、診察室に入り、B手術臺の後ろを通つて上手へ行き、A手術臺に就く。

看護婦A、彼に白い布を被せる。

會社員風の男は馴れてゐるらしく、含漱をし、仰向きになつて、自分の番を待つてゐる。

ドクトル、老紳士の口より脱脂綿を去り、ブローチで齒の根を掃除する。

長い間舞臺沈默。

青年、Bドーアより待合室に入り來る。二十六七歳、貧乏な洋畫家らしい服装。陰鬱な表情。痩せて、青白い血色をしてゐる。受付のデスクへ行つて看護婦Bに診察券を渡し、待合室の下手の長椅子に腰かけ、帽子を膝の上に載せる。彼の視線は、自然テーブ

ルの斜め向ひ側にゐる丁稚の顔、――その氣味惡く脹れた頬ッペタに注がれる。青年、惱ましげな瞳を擧げて、時々ヂロヂロとそれを見守る。

ドクトル　オキシパーラ。

看護婦A、オキシパーラの壜を持つて來る。

ドクトル、オキシパーラで老紳士の齒を消毒する。

ドクトル　アマルガム。

看護婦A、アマルガムを入れた乳鉢を持つて來る。

ドクトル、アマルガムを老紳士の齒に塡充する。

ドクトル（塡充を終つて、）今日一日だけ、此の齒をお使ひにならんやうに。

老紳士　はーあ。

ドクトル　では明日――

老紳士　いや、お世話様でした。

B手術臺を下り、受付のデスクで書付と診察券を貰ひ、待合室の帽子掛けからパナマの中折とステツキを取り、Bドーアより退場。

ドクトル手を洗ひ始める。

看護婦B（診察券を讀む。）小池さん、小池さん。

丁稚　はあ。

頬ッぺたをおさへながらのつそり立ち上り、診察室へ這入つてぼんやりと彳む。

看護婦B（B手術臺を指す。）それへお掛け下さい。

丁嬢、B手術室に掛ける。

待合室の青年、丁嬢の頬ッぺたを眼で追つてゐる。

ドクトルはA手術室に來て、齒鏡を會社員風の男の口腔に挿し込む。

短かき沈默。

會社員風の男　（口に物が這入つてゐるので、聞き取りにくい聲を出す。）いかがでせう、矢張り拔いた方がよろしいでせうか。

ドクトル　ええ、此の二本だけ犠牲にした方が、………

會社員風の男　あー、二本だけ、………

ドクトル　此の齒と此の齒と、………

會社員風の男　あー。

ドクトル　（齒鏡を取り除ける。）どうですか、拔齒してもよろしいですか。

會社員風の男　（今度はハッキリした聲で。）構ひません、やつて頂きたいですが、今直ぐ拔いて頂けませうか。

ドクトル　承知しました。

會社員風の男　二本一度に拔いて頂きたいですが、………忙しい體だもんですから、時間を省きたいんですが、………少し痛くても構ひません。

ドクトル　承知しました。

短かき間。傳達麻醉の準備。

ドクトル　ノボカイン。

看護婦A、ノボカインの罎を持つて來る。

ドクトル、ノボカインを患者の局部に注射する。手を洗つてB手術台の丁稚の方へ行く。

会社員風の男はじつとしてゐる。

ドクトル　含漱をして。

丁稚含漱をする。それから仰向けにさせられる。

ドクトル、メスを丁稚の口腔へ入れ、腫れた頬ツぺたを内側より切る。

ドクトル　もう一つ含漱をして。

丁稚起き上つて含漱をする。血膿がだくだくと口から流れる。

待合室の青年、はつとしたやうに右の手で顔を掩ふ。手先が微かにふるへてゐる。

ドクトル、脱脂綿を丁稚に咬へさせる、手を洗つてA手術台に行き、エキスプロアラーで会社員風の男の臭歯を押す。

ドクトル　いかがです、まだ幾らか感じますか。

会社員風の男　感じません。

ドクトル、鉗子を以て患部にテキパキと二本の歯を抜く。ガリ、ガリ、と云ふ音がする。会社員風の男、やや青褪めた顔色になる。

跡から紅い血のすぢが、線を曳いて頤へ伝はる。

待合室の青年、再び手を以て顔を掩ふ。

ドクトル　どうか含漱を。

会社員風の男含漱をする。カチカチと歯を噛んで見る。

ドクトル　今日は一日アルコール分をお取りにならんやうに。

会社員風の男　はあ。それからあの、ついでに少し歯石を取つて頂きたいですが。

ドクトル　（ちよつと待合室の方を見て）ああ、さう、では暫くお待ちを。

手を洗つてB手術臺に來、瓦斯パイプに火を點じ、プラスティック・インストルメントで丁稚の左の奥齒のゴムを抉り取る。

此の間極めて長き沈默。

Bドーアより令孃が這入つて來る。十八九歳。端正な鼻。涼しい瞳。柔和で氣品のある圓顏。つつましやかな内氣な態度。派手なパラソルと銀鎖製の手提げを持つてゐる。色が非常に白いのでその口紅が燃えるやうに際立つ。髪はつやつやしい漆黒であるが、やや薄い方で、濡れた絹のやうに頭の鉢へ密着してゐる。黒つぽい明石の單衣の上から、胸部と臀部の肉づきが窺はれる。帽子掛けの臺にパラソルを置き、受付のデスクへ青い色をした特別診察券を出し、待合室の正面窓際の長椅子にかけ、ハンケチを出して輕やかに汗をたたきながら、香水の匂を嗅ぐ。小さな白金のダイヤの指環が光つてゐる。

青年の眼は此の時から令孃に注がれる。

令孃は俯向いてゐるけれども、青年の凝視を感じてゐるらしく、時々着物の裾を直し、襟を氣にする。

ドクトル、ゴムを除き、ハンドピースにドリルを附け、コントローラーをキックする。エンヂンが鳴り出す。

舞臺全く靜肅。エンヂンと扇風器の響きが午睡を誘ふやうな感じ。

看護婦Aは上手に直立し、ドクトルの仕事を視詰めてゐる。

看護婦Bは受付のデスクに倚り、何か日誌へ書き入れをしてゐる。

青年は頻りに令孃を見る。

エンヂンの音止む。

ドクトル　含漱をして。

丁稚含漱をする。

ドクトル、エイヤ・シリンヂを取る。……以下、細かい手順を踏んで丁稚の奥齒に新しいゴムを詰め換へる。その間沈默

ドクトル　今日は此れで。——明日（あす）もう一度來られるかね。

丁稚　はあ。

B手術臺を下り、受付から番付と診察券を取り、帽子掛けの麥藁帽子を持つて退場。

ドクトル手を洗ひ、A手術臺に行く。

看護婦B　（診察券を讀む。）葉室さん。

令孃、口の内で返辭をし、青年に遠慮する心持ちでちよつと腰をかがめながら、一と足先に診察室へ入る。

看護婦B　どうぞ彼方へ。

令孃　はあ。

B手術臺にかける。

青年の眼は令孃の跡を追ふ。

ドクトル、會社員風の男の齒石を除く。

短かき間。

ドクトル　今日は此れだけにして置きませう。

會社員風の男　有り難うございました。お蔭様でさつぱりしました。（齒をカチカチやらせ、すツ、すツ、と空氣を吸つて見る。）では明日（みやうにち）は？

ドクトル　明日（あす）はおいでになつた方がいいです。

會社員風の男　（臺から下りながら、）明後日（あさつて）ではいけませんか。

ドクトル　成るべくは明日（あす）。

會社員風の男　承知しました。伺ひます。

ドクトル　ちよつと彼方でお待ち下さい。含嗽劑を上げますから、拔齒した後を時々含嗽なさるやうに。

會社員風の男　はあ。

待合室に行き、下手の椅子に就く。時々指を口中へ入れ、拔いた歯の痕をいぢつてゐる。

看護婦B　（診察券を讀む）倉橋さん、倉橋さん。

青年　はあ。

看護婦B　（A手術室を指す。）どうぞ彼方へ。

青年、診察室に入り、通りすがりにチラリと令孃に一瞥を投げ、A手術臺にかける。不安な表情。瞳は眞つ直ぐに正面の虚空を視詰め、脣はやや開いてゐる。

ドクトル、上手の方で看護婦Aに含漱劑の處方を與へる。

看護婦A、處方を持つてAドーアの中に消える。

ドクトル、B手術臺に來、令孃の上顎前齒の裏側へ金を詰める。時々エンヂンで局部を削る。

やや長き沈默。

看護婦A、Aドーアより含漱劑の罎を持つて現はれる。含漱劑は乳白色をしてゐる。下手に行き、それを受付のデスクに置いて、上手へ戻る。

看護婦B　中村さん。

會社員風の男、受付へ來る。

看護婦B　含漱は一時間置きぐらゐになすつて下さい。

罎と、診察券と、書付を渡す。

會社員風の男　はあ。

帽子掛けから帽子を取り、Bドーアより退場。

ドクトル、合釘の金を詰め終り、エンヂンをかけて別な歯を削る。眼で看護婦Aを招く。
看護婦A、B手術臺に來る。
ドクトル、何か小聲で看護婦Aに命令する。
看護婦A、ドクトルに代つて合釘の歯を削る。
ドクトル手を洗ひ、A手術臺に來る。
青年、ドクトルに挨拶をし、含嗽をする。

ドクトル（齒鏡を入れる。）どうですか、痛みは？
青年　はあ、まだ少し、……
ドクトル（エキスプロアラーを入れる。）斯うすると痛いですか。
青年　はあ。
ドクトル　澤山痛いですか。
青年　いえ、そんなでは、……ほんの少し、……
ドクトル　ふん、では今日拔いてしまひませう。
青年　あの、………拔かなければいけないでせうか。
ドクトル　此の齒はどうしても時々痛みますな、拔かないで置くと。……
青年　何か、斯う、セメンでも詰めて頂く譯には？………
ドクトル　それには時期が遲いですな、すつかり根の方が腐つてゐますから。………此處から斯う、始終一種の瓦斯が發生してゐるので、フィリングが完全に出來ないのです。拔いてしまつた方がいいです。

青年　しかし、……あのう……大丈夫でせうか、………拔いても差支へないでせうか。……

ドクトル　胃腸がお悪いですか、あなたは？

青年　胃腸は悪くはありませんが、……

ドクトル　では差支へないでせう。——どうしますか。

青年　はあ。………

ドクトル　氣が進まなければ止めて置きます。

青年　いや、そんなことは、……それでは何卒、………

ドクトル　拔いてもよろしいですか。

青年　はあ。……

ドクトル　承知しました。

注射の準備。

ドクトルノボカインを注射する。

青年は眼を閉ぢ、白い布の下から兩手を出し、空に浮かして、物を探るやうな恰好をする。指先がワナワナする。

ドクトル注射を終り、手を洗ひ、B手術臺に行き、看護婦Aに代つて令孃の齒を拔る。

看護婦A、上手に來て立つ。

青年は靜かに眼を閉ぢた儘である。指先の戰慄止む。

短かき沈默。エンヂンの音。……

ドクトル（ふと手を休める。）どうかなさいましたか、御氣分がお悪いですか。……

令孃答へなし。意識を失つてゐる。眞つ靑な顏色。冷汗。

ドクトル　もし、……もし、もし、……

答へなし。

ドクトル　アンモニア！

云ひながら急いでペダルを踏み、手術臺を全く倒まにする。

看護婦A　アンモニアの壜を持つて來る。

令孃は臺の上で倒まにされてゐるので、觀客席からは姿が見えない。ドクトルと看護婦Aとがアンモニアの壜を嗅がせ、介抱してゐる樣子だけ分る。

A手術臺の靑年、眼を見開いてそうッと令孃の方を窺ひ、又正面を向いて眼を潰る。

看護婦A　もし、………御氣分はいかがですか、………もし、………お氣がお付きになりましたか。

令孃　（微かな聲）はあ。………

ドクトル　何でもないです。極く輕い腦貧血です。暫く彼處でお休みになつた方がよろしい。

看護婦ＡＢに眼で云ひつける。

二人の看護婦、令孃をそつと臺から下ろし、頭と脚を持つて上手へ抱いて行き、Aドーアの近くにある倚り懸りのない長椅子の上へ仰向けに橫たへ、首をだらりと椅子の外へ垂らす。

ドクトル　帶を少し緩めてお上げ。

看護婦AB、令孃の帶を緩め、褄をひろげ足袋のコハゼを外す。

令孃はまだ充分に恢復し切らない。半ば死んだやうに、される通りになつてゐる。

ドクトル　それでよろしい。暫くさうしておいでになれば直きによくなります。

看護婦AB、各もとの席に戻る。

ドクトル、A手術臺に來る。鉗子を取つて青年の齒を拔きにかかる。

青年、憐れみを乞ふが如くドクトルを仰ぎ、足を蹈ん張り、兩手でシツカと臺の端を摑む。「あツ」と云ふ間に拔き取られる。激しき息使ひ。顏色蒼白。次第に氣が遠くなる。

ドクトル　含嗽をして。

青年、人事不省、瞑目したまま身動きもしない。

ドクトル、じつと青年を凝視し、瞳孔を檢べ、襟頸を捉へて荒々しく搖す振る。

青年は昏々と睡り續ける。

ドクトルの面上に怪しき一抹の暗影が浮かぶ。看護婦Bに眼くばせをし、Bドーアを指し、「その邊を見て來い」と身振りで命ずる。

看護婦B、立つてツカツカと待合室に行き、Bドーアから外を覗き、首を振つて「誰も居ない」と云ふ合圖をする。

ドクトル　クロロホルム。

看護婦A、クロロホルムとマスクを取り出す。

ドクトル、令孃の鼻孔と口にマスクをかけ、上よりクロロホルムを二三滴たらす。令孃の昏睡したのを見すまし、立つて上手のAドーアを開け、看護婦ABにそれと促す。

看護婦AB、令孃を抱いてAドーアの奥に連れ込む。

舞臺暗くなる。

第　二　場

大百貨店の屋上庭園らしき所。納涼展覽會があつて、夜間開場をしてゐる。中央に四角な噴泉があり、水が噴き出でる。噴泉の縁に高さ四五尺の植木鉢が列び、ところどころにベンチが据えてある。電燈はわざと少くしてあり、植ゑ込みの蔭に螢籠や蟲籠を忍ばせてある。

背景の空は無數のイルミネーションで彩められる。上手にエッフェル塔のやうな際立つて高い廣告塔がある。その傍に水車の如くクルクル廻る光の環がある。下手に「仁丹」の看板の文字が、赤、青、黄と、數秒毎に色を變ずる。白煉瓦の劇場風の建物が、反射燈に照らされて幽靈のやうに浮かんでゐる。折々何處からかサーチライトの光芒が向けられ、一瞬間、舞臺をさつと明るくして外れる。噴泉のささやき。蟲の音。……

納涼客多々伍々。ベンチに憩ふ者。欄に凭れる者。上手より下手へ、下手より上手へ過ぎ去る者。——但し、餘り目まぐるしくない程度、場面が進むに從つてだんだん數が少くなる。

青年、第一場と同じ服裝、上手植木鉢の蔭にあるベンチにかけ、何かを待つてゐるやうに息を凝らし、身をすくめてゐる。下手より令孃が兩親に連れられて來る。涼しい浴衣がけ。しかしオドオドした態度で、それとなくあたりを見廻す。

青年は一層身をすくめる。

令孃親子は後方に行き、欄に倚つて空を眺める。向つて右端に父、まん中に令孃、左端に母、といふ順序に並ぶ。

令孃の母　まあ、ほんたうに凉しいこと。此處へ來ると風が違ふね。

令孃の父　（空を指す。）あれは何處かね、あのサーチライトは？——

令孃の母　さあ、何處でせう。——千枝子、あれは何處？

令孃　何處でせうかしら。……

父と母とまだ何かしら語り合ふ。彼等の話聲はよく聞えない。令孃は多く沈默してゐる。父と母の隙を窺ひ、ときどき後ろを振り返つて見たりあたりに氣を配る。

ドクトル、上手より夫人と子供を連れて現はる。白地の絣の單衣。紺の兵兒帶。麥藁帽子。羽織を着ず。細いステッキを衝いてゐる。夫人は二十七八ぐらゐ、子供は十ぐらゐの男の兒。

令孃、振り返つた拍子にドクトルを見つけ、嬉しげに頷く。青年以外には誰もそれに氣が付かない。

ドクトルの一族、令孃の一族よりも少し上手の欄に倚つて同じく空を眺める。一番右の端にドクトル、中央に子供、左端に夫人そして何か話し合つてゐる。「ヤア、綺麗だなあ」と云ふ子供の聲が聞き取れるだけ。

ドクトルと令孃、互ひに眼を見合はせ、合圖を交す。令孃、次第に父と母の間を拔け出で、下手に消える。ドクトル　夫人と子供を置き去りにし、そつと令孃の跡を追ふ。

青年、又その跡を追ふ。

短かき間。

ドクトルの子供　おや、お父さんが見えませんよ、お母さん。

ドクトルの夫人　あら、さうだねえ、何處へいらしつたんだらう？

ドクトルの子供　お父さーん！

令孃の母　千枝子、千枝子や、……あなた、千枝子はその邊に居りませんか。

令孃の父　はてね、たつた今此處にゐたぢやないか。

ドクトルの夫人　おかしいね、今此處にいらしつたんだのに。

令孃の母　千枝子！　千枝子！

ドクトルの子供　お父さーん！

四人、前方へ來てキヨロキヨロ見廻す。

令嬢の父　何か、忘れ物でも取りに行きはしないのか。

令嬢の母　いいえ、そんな筈は、……默つて居なくなる筈はありませんもの。千枝子や、千枝子や！

ドクトルの子供　お父さーん！（下手を指しながら）彼方ぢやないかしら。彼方ですよきつと。ねえ、お母さん、彼方へ行つて見ませうよ。

令嬢の父　千枝子、千枝子は居ないか、變なことがあるもんだな。

ドクトルの夫人　お父さんは足が早いから、先へいらしつたのかも知れない。

令嬢の母　千枝子！　千枝子や！

ドクトルの子供　お父さーん！

四人、搜しながら下手へ去る。「千枝子！　千枝子！」「お父さーん」と云ふ聲が暫く聞える。

短かき間。

上手よりドクトルと令嬢、睦しく手を執りながら出て來る。噴泉を後ろにして、中央に近いベンチへ並んでかける。

青年、直ぐその後から現はれ、再び前の場所に隱れる。

ドクトル　とうとう巧く行きましたね。ぢや、此處で待つていらつしやい。

令嬢　何處へいらつしやるの？

ドクトル　電話をかけに。

令嬢　電話を？――

ドクトル　ええ、いつもの所へ。――支度をさせて置かないと、時間がありませんからね。

令嬢　あたし、今夜は行かれませんの。

ドクトル　ちやあ何のためにわざわざ此處で落ち合つたんです。馬鹿なことを云ふもんぢやない。

令孃　今夜はただ、お目に懸つてお話がしたかつたんですの。あたし、それだけで滿足ですの。

ドクトル　あなたは滿足かも知れないが、僕はちつとも滿足しませんよ。ただ顏を見たつて詰まらんぢやないですか。

令孃　（溜息をつき、恨むが如くドクトルを見る）ね、あなた、後生だから今夜は勘忍して。……兩親が心配してゐますから、……それにあなたの奥さんだつて、……

ドクトル　餘計な世話を燒かんでもいいです。此れから直ぐに出かければ一時間以内に歸れますよ。何も心配はありやしません。

令孃　ああ。……（溜息）

ドクトル　ね、いいでせう、いいと仰つしやい。兎に角電話を懸けて來ますよ。

令孃、袂で顏を掩ひ、咽び泣く。

ドクトル　はは、弱蟲だなあ、あなたは。……あなたと云ふものはもう完全に僕のものですよ、それを忘れてはいけません。

令孃なほ泣き續ける。

ドクトル　いいですか、千枝子さん、直ぐに來ますから待ていらつしやい。

急ぎ足で上手に退場。

青年、木蔭より現はれ、令孃のベンチに來る。

納凉客は一人も居なくなつてゐる。

青年　千枝子さん、――桑宮千枝子さん、――

所作　令孃顏を上げる。青年を見て驚く。

令孃　あ、あなたは、…………

青年　僕はあなたを救ひに來ました。さ、早くお逃げなさい、早く！

令孃　いいえ、あたしはあの人を待つてゐるのです。どうか傍へ寄らないで、……

青年　何を仰つしやるのです！　あんな惡い奴にかかつたら、あなたは墮落するばかりですぞ。

令孃　だつて、………だつて、…………もう墮落してゐるんですもの。………

青年　そんなことはありません。彼奴があなたを誘惑したんだ。あなたは係蹄にかかつたんだ。僕は彼奴を殺してやります、あのドクトルを、あの惡魔を。…………

ドクトル、いつの間かに上手に現はれ、青年の言葉を聞いてゐる。その眼に氣味の惡い嘲笑が浮かぶ。

青年はベンチの前に跪き、掻き口說きながら令孃の手を取る。

舞臺暗くなる。

第三場

日中の往來。

大阪の心齋橋筋のやうな、静かで人通りの賑かな街路。上手より下手へ、呉服屋、書籍店、西洋雜貨店、食料品店が櫛比してゐる。關西風の華やかな店飾り。軒に日蔽ひを渡してあるが、午後の日光が强烈にその上へ照りつけてゐる、アスファルトの路面がガラスの箱へでも這入つたやうに、カツキリと明るい。ところどころ、太陽が日蔽ひの隙間を洩れて、地上と家とに金色の斑紋を作る。

街路の中央に令嬢の屍骸が仰向けに臥てゐる。屍骸は第一場と同じ服装をし髪を振り亂し、裾をはだけ片膝を立て足袋が半分脱かかり、兩手は握り拳を作つて、左右に伸びてゐる。襟元と手頸に血痕があるが、顔には苦痛のあとかたもなく、安らかに眠つてゐるかのやう。皮膚は光澤を失つた純白、豚の白味を連想させる。

半襟屋で、店先に吊るされた半襟をいぢつてゐる女がある。書店で雜誌の立ち讀みをしてゐる學生がある。ハイカラな紳士が西洋雜貨店の飾り窓を覗き、中へ這入る。食料品店から小僧が自轉車へ乘つて出て行く。が、通行人は誰も令嬢の屍骸を顧みない。彼等にはそれが眼に入らないのか、或は屍骸のあることを當然と思つてゐるかのやう。そして何人も何人も平氣で街路を通り過ぎたり、商店から出たり這入つたりする。

やや長き間通行人の往來頻繁。

上手より刑事逐電、青年の腕を捉へて引き摺つて來る。青年の服裝前と同じ。髪の毛が掻きむしられ、カラやワイシャツが滅茶滅茶になり、袖やズボンが綻び、手に血の附いた短刀を持つてゐる。殆んど歩行に堪へぬやうに刑事に寄りかかる。

刑事、屍骸の前で青年を突き放す。

青年、大地へ臀餅をつき、短刀を捨て、はつはつと喘ぎながら兩手で激しく髪の毛を掴む。

刑事　貴樣、なぜ此の女を殺したんだ。

青年　此の女は僕を欺したんです！

刑事　欺した？

青年　さうです、欺したんですとも！　女房や子供のある男と不義のいたづらをしてゐたんです！　此の女は淫婦です！　淫婦！　淫婦！　淫婦！

刑事　馬鹿め、静かにしろ！（[illegible]殴る）。

通行人々、此の時一度に令嬢の死骸と青年を取り巻き、口々に罵る。

通行人の一　人殺し！

通行人の二　人殺し！

通行人の三　人殺し！

通行人の四　人殺し！

通行人の五　人殺し！

青年　淫婦！　淫婦！　淫婦！

通行人大勢　人殺し！　人殺し！　人殺し！

舞臺暗くなる。

第四場

第一場と同じ場面。同じ時。

令嬢は既に身支度を整へ、以前の長椅子に起きて腰かけてゐる。

青年はA手術臺の上で倒まにされ、ドクトルと看護婦Aの介抱を受け、アンモニアを嗅がされてゐる。

待合室には新しい患者甲、乙、丙、が詰めかけてゐる。

看護婦A　もし、しつかりなさいまし、もし、もし、………

ドクトル　どうしました、氣が付いたですか。……

青年　ああ、……有り難う、……もう大丈夫です。……

ドクトル　何でもないですよ、しつかりなさい、しつかり、……

青年　ええ、もうほんたうに、……

ドクトル　ブランデーを持つておいで。

看護婦A、ブランデーと匙を持つて來る。青年に飲ませる。

青年　有り難う。……ああ、もうはつきりしました。起して頂けないでせうか、斯うしてゐると却つて氣持ちが惡いですが、……

ドクトル　ああ、さう。

靜かに手術臺を起す。

令孃、立つてドクトルに挨拶する。

令孃　あの、……もう歩けさうでございますから、……どうも大變御厄介になりまして、……

ドクトル　お歸りになりますか、それではお氣を付けなすつて。

令孃　有り難う存じます。御免下さいまし。——

受付で診察券を受け取り、手提げとパラソルを持ち、そろそろとBドーアより退場。

ドク（青年に、）彼處で少し休んでいらつしやい、安靜にして。

青年、A手術臺を下り、令孃の去つた跡の長椅子の方へよろよろと進む。

看護婦B（診察券を讀む。）鈴木さん、鈴木さん。――遠藤さん、遠藤さん。――

患者甲乙、續いて診察室に入り、それぞれ手術臺の方へ行く。

ドクトル手を洗ひ始める。

――幕――



大石良雄

野上彌生子

元祿十五年二月上旬のことであつた。一つの史的事實に基いて説明すれば、播州赤穗の城主淺野内匠頭長矩が、殿中に於て高家の筆頭吉良上野介義央に刄傷に及んだ咎に依つて、内匠頭は即日切腹、五萬石の封地は沒收せられ、後嗣に擬せられてゐた弟の大學は閉門仰せ付けられると云ふ出來事があつてから丁度十一箇月目のことであつた。

淺野家の城代家老を勤めてゐた大石内藏之助良雄は、當時池田何某と名乘つて住んでゐた京都在山科の邸宅の茶室で、その日大阪から原總右衛門の手紙を持つて訪ねて來た大高源五を迎へた。芦屋風の釜のかかつた爐を前にして、内藏之助は主人の席に着き、美濃の大判に認めた總右衛門の長文の手紙を一枚々々熱心に讀んでゐた。彼は小柄で、身體に釣合つた小さい長目な頭をして、綺麗に結つた髮は稍縮れてゐた。顏は青白かつた。而してやつと四十を出たばかりにしては老けて病人じみてゐた。以前から餘り健康でなかつたのに、昨年の心配事でひどく頭を使つたのと、

引續き惡症の疔を煩つたりしたのが影響してゐるのであつた。

『總右衞門殿の意見は、此間の會合で一と通り分つたつもりであつたが、』最後の一枚に目を通してしまふと、内藏之助は初めて口を開き、すべての紙を丁寧に纏めた。『書いたもので見ると、多人數の席上では知られなかつた周密な心遣ひが分つていろ／＼參考になる。貴殿にもわざ／＼御苦勞であつた。』

綿の着物に綿の羽織で、三十の若い商人らしく装つた源五は、この挨拶に對して砕けた身裝とは不釣合な、正しく元の二十石五人扶持の小身者が、城代家老に向つた時の堅苦しいお辭儀を一つした。

『總右衞門殿もこの間はちと意氣込みすぎて、條理を盡さぬ恨みがあつたと殘念がつてをりました。』

源五は態度の割に臆しないはき／＼した話し方をした。整つた顏立で、眼に人の注意を引く賢さがあつた。彼は以前から内藏之助の氣に入りであつた。

『中々大議論だつたからな。』

『あゝなりますと、言ふ方でも聞く方でも夢中でございますから。』

これは先月の十四日、故内匠頭の命日に當つて、京阪地方に散在してゐる舊藩士たちが京都で落ち合つた時の話である。會合の度にいつも議論を沸騰させる彼等の重大な計畫――復讐の問題は、決行期として豫定されてあつた三月が過つたのと、當日は時が時で、主君の不幸な切腹に對して、それから引き起こされた自分達の運命の轉落に對して追懷を新たにされたし、且つ大學はまだ閉門さへ許されないのに、遺恨の相手の上野介は無事に隱居が叶ひ、息子の左兵衞佐が家督を嗣いだことが知れ渡つた後であつたから、一層人々を興奮させ、口々に激しい意見が吐露された。これまで彼等の間に秘密にきしみ合つてゐたものが、明日に二つに分立しただけでも、近頃での興味ある會合であつた。それは復

讐に對する自重派と急進派の拮抗で、內藏之助は同じく山科に住んでゐる從弟の進藤源四郎や、伏見にゐる叔父の小山源五左衛門と共に前者であり、後者は原總右衛門が代表してゐた。この氣魄の強い五十五の老人は、初めは山科組に近かつたのであるが、昨年、大高源五と二人で出府して、江戸の過激な復讐論者である堀部安兵衛の一派に接近して以來、彼等の妥協のない行動に共鳴したのである。この間の席上でも彼は盛んに反對派に挑戰した。併し個人としては總右衛門は內藏之助に同情してゐた。彼の煮え切らぬ態度は、天性もあるが、一つは叔父の影響だと想像してゐた。それ故總右衛門は今一度內藏之助に自分の所信を傳へ、純理論の見地から彼の反省を促さうと考へた。大高源五は總右衛門の熱心な味方であつたが、今までの關係と、生來の圓滿な氣質から山科の家にもこだわりなく出入してゐたので、總右衛門は手紙を書き、彼に托して內藏之助に屆けて貰つたのである。

『實はあの場で申上げるのが本統であり、その決心をして參つたのではございましたが、あの通り、話が妙な方へ逸れ出したので、わざと遠慮をいたした、と申すことで。』

源五が何の氣なしにさう附け加へた時、內藏之助の薄い頰の上に不意に女のやうな羞かみの色が浮んだ。その言葉は、近頃內藏之助が京都や伏見邊で大分遊ぶことに就いて、會衆の或る者が激しく攻撃したことを思ひ出させたのであつた。

『いや、この間は手嚴しくやられて大いに弱つた。』

內藏之助は隱さず打ち出して、鷹揚に笑つた。

『併しそれはそれ、これはこれで。』源五は自分の不用意な言葉の結果にまごつきながら、急いで話題を引き戻さうとした。『大事な目的を控へて、下らない感情論をいたす者の氣が知れません。總右衛門殿も自分等が大石殿に反對するのは、

議論として反對するのであつて、それ以外の意味は微塵もない。申すまでもないことではあるが、その點は誤解下さらぬやうにと、堅く申しつかつて參りましたやうな次第でございます。』

『そんな心配は要らない。總右衞門殿の氣持は、總右衞門殿が考へてゐるよりわしには分つてゐる積りだから。ただ併し折角の忠告ではあるが、この急進説だけは、この間も云つた通り、この儘ではどうも――』

終にその問題に觸れかゝると、內藏之助は手を拱き、首を傾けた。而してちらと膝の前の手紙に投げた眼を爐の上に轉じて、程よい火加減でさわやかに鳴り出した釜の音に聞き入るやうに默つた。庭に面した二枚の障子には、早春の午後の日が明るくさしてゐた。鶯が山家らしく軒近くで、二人の沈默の中で、頻りに鳴いた。併し源五は、斯んな場合の內藏之助には此方でぶつ突かつて行かなければ埒の明かないのを知つてゐたから、長くは默つてゐなかつた。

『總右衞門殿にしても、また手前共に致しましても、徒らに事を急ぐ譯では御座いません。定めて書中で十分御了解のことゝ存じまするが、あなた樣方は大學樣の御一身が何とかお極まりになるまで手出しは出來ないと主張なさる。總右衞門殿や手前共はそれを待つては却つて拙いと考へる。ただそれだけの相違で――』

『左樣。意見の分かれ目は其處だけだ。』

『若し一萬石にしろ、二萬石にしろ、大學樣に新規お取立の御沙汰が下り、先君のお跡も立派に立つやうになつた上で事を擧げたのでは、お上を無視した振舞とも見られ、折角開けた大學樣の御運にもさし響く譯かと、手前共はそれを怖れるのでございます。』

『總右衞門殿が一番氣遣つてゐられるのもその事のやうだが。』內藏之助は拱いた手を解き、讀めた手紙を今一度取り上げて、二三枚目の紙を讀み返した。『併し、我々の計畫はお上を相手にする仕事ではない。目的は上野介にあるのだから、大

學様の御落着を見屆けた後で事を起したところで、やり方一つでは大學様にお咎めのかからう筈はない。だから諸君もどうか焦慮らないで貰ひ度い。而して大學様に依つて幾分でも先君の御面目の立つやう、出來るだけの手段を講ずるのが、寧ろこの際の急務だ、と斯うわしには思はれるのだが、この考へ方が間違つてゐるだらうか。』

源五は返事の代りに凝と彼を見詰めた。高祿の家で太平の安樂な生活に馴れ、昨年の事變に遭遇するまでは、恐らく人生の苦味を少しも知らなかつた中年の男の、細かい優しい眼、覇氣のない圓い鼻、柔和なだけに何處か締りのない口許、その容貌から身體のすべてに漲つてゐる消極的な、併し悪の分子だけは少しもない吞氣さと氣弱さの交り合つたゆつたりした樣子を見ると、源五は聲帯の後に突つかかつてゐる激しい抗辯を——そんな夢をいつまで御覽になつてゐるお積りでございます、大學樣と吉良父子に對するお上のお仕打を比べて見れば、今後のことも大概推量いたされるではございませんか——を、持ち出す勇氣はなかつた。

『それも一理ある御意見として、』源五は努めて平靜な調子を取らうと試みながら云つた。『總右衛門や手前共が假に自說を翻へしたといたしましても、江戸の連中は決して聞き入れますまいかと思はれます。彼等はこの御一周忌までにはやると仰しやつたあなた樣のお約束を、守つて頂き度いと主張いたしてをります。而して手前共の態度をさへ手緩いと攻撃いたしてゐる位でございます。』

『約束を輕んずる譯ではない。併し斯う云ふ問題は、時の情勢で計畫通り行かないこともある。』内藏之助は云ひかけて、先刻の羞恥と同程度の心配をその蒼白な面の上に現はしながら聞いた。『最近に何か便りがあつたかな。』

『はい。』

源五はちよつと云ひ淀んだ。堀部一派の消息が、當然本部であるべき山科よりも自分達の方へ知られてゐることは、

内藏之助に對する彼等の不信と背離を餘りに明瞭にする譯で氣の毒に感じたのであつた。併し相手は何等の蟠りもない鷹揚な尋ね方であつたので、源五は堀部安兵衛から二三日前に受け取つた手紙に就いて話した。――

『上方の連中が何かと理窟をつけて事を長引かせるのは、百五十里も離れてゐるからだ。現在敵の家を目の前に見て暮らす自分達の氣持を思つて吳れと書いてございました。』

『――』

『金を持つて呑氣に遊んでゐられる人や、醫者をしたり、商人になつたりして手まめに仕事にありついてゐるものは、いつまでも待たれようが、我々は初めから仇討專門だ。それを目的に去年赤穗で切る腹も切らずに生きてゐるのだから、これ以上ぐづ／＼してはゐられない。』

『――』

『これまで云つても尙ほ上方で腰が極まらなければ、もう當にしないでこちらだけでやつて見せる。決死の者が四五人も揃へばさうむづかしい事ではないと、斯う云ふ意氣込でございます。』

『そんな輕はづみな事をさせてはならぬ。』其處まで何等の抗議も意見も挾まないで聞いてゐた內藏之助が、その時明らかに周章てて遮つた。『先方でもあらゆる警戒を加へてゐる中に、四五人で目的が達せられるなどと思ふのは亂暴な話だ。』

『元より亂暴な話で。』源五はその言葉をすぐ取つて續けた。『併し、堀部は御存じの氣象で、場合に依つてはどんな亂暴もやり兼ねない男でございます。手前共がこの際事を急ぐのを得策といたしますのも、一つは彼等の亂暴を未然に防ぐために外ならないので、でなくしてその儘傍觀いたすならば、さうして萬一彼等の企が失敗に終るならば、二度と取り

返しのつかない結果に陥るかと考へられます。」

源五の言葉は、不斷の愼しみと謙遜を珍らしく忘れる程强く激して行つた。彼は總右衛門が手紙で說いてある筈の他のあらゆる急進說の論據に就いても、熱心に繰り返した。内藏之助はそれ等の意見に對して最後まで賛否を洩らさなかつた。而かも冷淡ではなかつた。却つて忠實に相手の言葉に耳傾けながら、再び手を拱き、力のない弱々しげな眼で、當惑さうに爐緣の尖つた角を見詰めてゐるのを見ると、源五は同志の間に近頃恐ろしい勢で燃え上つてゐる一つの疑惑を思ひ出した。この人を我々の統領に選んだことが果して賢かつたか。――意見の相違は相違として、源五は人格的には内藏之助の支持者であり、仲間の者ほど失望してはゐなかつたに拘はらず、この時だけは同じ疑に打たれないではゐられなかつた。而して同時に知つた。自分の今日の使命が全然失敗に終つたことを。

源五はやがて歸り支度をした。いつもは用事がすんでも茶の相伴をしたり、俳談を戰はしたりして長座になつた。田舍に引つ込んで話相手に飢えてゐる内藏之助は、源五がその方面に嗜みの深いのを悅んでもとの地位以上に歡待もしたし、源五もそれに甘へて時には遊の取り捲までしてゐたのであるが、今日だけは留めても依固地に辭退した。

客が去つて暫くすると、内藏之助は庭に下りた。

この邸宅はもと伏見の或る商人の別莊で、内藏之助が昨年赤穗を引拂ふやうになつた時買取つたものである。長い間荒れてゐたのを、すつかり手入して立派な邸宅になつたが、殊に庭には惜しまず金をかけてあつた。内藏之助が自分から樹木や石の布置を差圖したのである。梅の花がいつの間にか淸明な趣を失つて、わざと等閑に伸ばした垣根の連翹に盛(さかり)を讓つてゐた。古い松の間に交つてゐる櫻は、次の順番を待ちながら、小指の先ほどふくらんだ蕾を薄赤く枝の表に

群がらしてゐた。併しそれ等の花の樹木にも增して内藏之助が愛してゐるのは牡丹と菊であつた。赤穗の邸宅でも此の二つは毎年丹精してゐたから、移轉の時持つて來られるだけは持つて來た。而して、その秋すでにすこやかな花を見せた菊に對して、この春を樂しみにしてゐた牡丹が、數日前漸くはづした霜除の下に、鮮明な茜色の芽を吹いてゐるのを見つけた時には、内藏之助は子供の如く悦んだ。今も庭に下りると、彼は一番に其庭へ行つた。芽は最初の紅から青ずんだ蘇芳に變らうとして、瑞々した圓い突起に膨らみ、その中からやがて燃え上る豪華な花瓣を約束するかの如く、麗らかな春光の下に輝いてゐた。内藏之助は庭下駄で、ゆつたりした足どりで、數列に足らぬ花圃を一巡した。彼の顏には先刻茶室で源五と對坐してゐた間の憂色はもうなかつた。内藏之助はそんな事は考へようともしなかつた。源五がいつになく素氣なく歸つたことに對するむつとした氣持さへ忘れてしまつてゐた。この牡丹が故郷の庭にあつた日と變らぬ花をつけるかどうか、それ以外のことは念頭になかつた。平和な滿足と明るい外光が、一時間前の物憂げな彼とは別人のやうに見えさせた。

その時であつた。裏門の方から線の太い、がつちりした一人の老人が、簡單な外出の身裝で、何か氣がかりらしく、急ぎ足で入つて來たと思ふと、自分の家のやうな無遠慮さで、聲もかけないで、つかつかと庭の方へ廻つて行つた。

『や、これはようこそ。』

内藏之助は直ぐ氣がついて花圃を離れ、母方の叔父の小山源五左衞門の方へ歩み寄つた。

『今日は源四郎のところに用事があつて出掛けて來たのだが。』

源五左衞門はこれだけ云ふと、大きなぎよろとした眼であたりを見廻はすやうにして、源五が訪ねて來たかと聞いた。

『お逢ひでしたか。』

『うむ。元慶寺の手前で見かけたのが確かにそれらしいと思つたが、向は氣がつかないやうだつた。』

內藏之助は先刻源五を送り出した茶室に再び叔父を案內して、手を高く打つた。細面の權高な顏をした妻のくり子が唐紙（からかみ）を開けて三指をついた。彼女はいつでも、亦何處からでも、のつそりと入つて來るその叔父の流儀には馴れてゐたから、知らぬ間に其處に坐つてゐるのを見ても驚きはしなかつた。それと共にこの叔父が抹茶の嫌ひなのをも心得てゐたので、すぐ引返して普通の茶道具を運んで來た。併し長居はしなかつた。この茶室で話される話は決して聞いてはならなかつた。聞いても聞かぬ振をしてゐなければならなかつた。

『源五は何しに來たのだ。』渴いた咽喉に一と口がぶりと茶を通すと、源五左衞門は飛び着くやうな聞き方で聞いた。『この間おれ達にあれ程楯を突いておきながら、どんな顏があればやつて來られたのだ。』

內藏之助は彼が總右衞門の使で手紙を屆けて來たことと、その內容を手短かに話した。が、手紙そのものは、すぐ傍の袋戶の手文庫に仕舞はれてあるに拘はらず、見せようとはしなかつた。

『屹度、そんな事だと思つた。』源五左衞門は想像が當つた人の自己滿足で厚い角ばつた頰をうなづかせ、煙草入を取出して、頑丈な銀煙管に一服吸ひつけた。『それで、どう返事をした。』

『どうと云つて、まだ返事は書かないでをります。』

『下手をすると後が面倒だぞ。』

『兎に角、今のところ私は自分の考を變へる積りはしてないのですから。』

『さうだとも、大きにさうだ。』源五左衞門は甥の言葉を聞いて安心したしるしに、また一つ頰を動かし、それでも表

現が足りないかの如く、煙草盆の灰吹にぽんとよい音をさせて吸殻をはたき出した。『讀物の本を見ても分かる通り、そんな一大事がさう一朝一夕に仕遂げられるものではない。時機の當來するまでは何年でも隱忍して待たねばならぬ。所謂臥薪嘗膽だ。いや、それまでにしてさへ運が惡ければ失敗しないとも限らぬ。それにあの連中と來たら、たゞ事をあげさへすればよいもののやうに心得てゐる。成功を急ぎ過ぎる。敵を侮つてゐる。吉良上野介は單に一高家ではなく、上杉家十五萬石の錘（おもり）がついてゐるのだと云ふ事を忘れてゐる。』

これは羽前米澤の藩主である上杉彈正大弼綱憲が上野介と父子の關係になつてゐることを指したのである。委しく云へば、もう十數年の昔話になるが、上杉家の先代綱勝は、妹の緣づいてゐる吉良家の饗宴で韮を食べたのが原因で急死した。その時綱勝には子供がなかつたので、上杉家では上野介の長男でやつと二つになつたばかりの息子を貰ひ受けて家督を相續させたのである。

『噂によれば、上杉家では高祿を出して頻りに武藝の者を召抱へて居ると云ふことだが。』源五左衛門は新しい煙草と共に話をついだ。『この泰平の時勢に、何の目的でそんな事をするか、誰が考へても大抵見當はつく。若い者たちがその點を深くも考へず、がむしやらに功を急ぐのは已むを得ぬとして、總右衛門までが先棒になつて騷ぎ立てるのは氣が知れない。年寄の分別を忘れた苦々しい話だとおれは思ふ。尤も總右衛門も江戸に行くまではあゝではなかつたのだが。――何しろ向の連中と來ては、無鐵砲の揃だからな。何か事がなくちゃゐられないのだから始末が惡い。一つは自暴自棄になつてゐるのだ。これまでの廣言の手前、今更どこかに奉公する譯にも行かねば、抱へ手もあるまいし、生活には困つて來る。金はなし。どうにかしなければ動きがつかぬ。で、あの連中を見殺しにする代りに[illegible]のだ。』

源五左衞門は自分のこの警句がひどく氣に入つたやうに、[illegible]等はそれでよいとして、こつちまで夜通の相伴をさせられては堪らぬと云つた。內藏之助にもまた決して輕擧に乘つてはならぬと繰り返し戒めた末に、煙管を筒に收めた。

『その內源四郞とでもやつて來ないか。泉水がよくなつたぞ。』

甥に送られて庭口で別れる時、源五左衞門は云つた。

『旨く參りましたか。』

內藏之助は尋ねた。叔父は庭に新しく池を掘つて、後の山から水を引かうとしてゐた。非常に豐富な水が筧から落ちるやうになつた、山水の淸らかさは格別だと云ふやうな話をした序に、源五左衞門は山林のよい出物があるが、內藏之助に買つてはどうかと勸めた。持つてゐて損は行かぬ山だと云つた。而して斯んなことに拔け目のない彼は、立ち木の委しい見積りまで話して、

『丁度あの見當だ。』

と持つてゐる扇子をあげて、庭の向の空の下に、淡い藍色の孤を描いて橫たはつてゐる山の裾を示して歸つた。それは音羽山であつた。內藏之助は、叔父の勸めに乘る氣は元よりなかつたが、その山の眺は奧に續く逢坂山一帶の遠望と共に、またそれ等の山々に附隨してゐる樣々な懷古的な情趣と共に、深く氣に入つてゐた。「蟬丸」の道行や「融」の名所敎で親んでゐる自然を、朝夕、目の前に見て暮らすと云ふことは、謠や能の好きな內藏之助には人一倍樂しかつたのである。

けれども叔父を見送つて居間に引き返した時の內藏之助の氣持には、そんな寬ぎはなかつた。先刻牡丹の芽を見廻つ

てゐた間の晴々した様子も失せて仕舞つた。叔父が殘して行つたすべての言葉は、今日源五の訪問に依つて彼の心に投げられた暗い翳を新たに思ひ起させ、それに一層の憂苦と困惑の酵母を加へた。本統を云へば、源五左衛門は内藏之助の好きな叔父ではなかつた。その太い頸や、厚い顎が表はしてゐる通りの確つかり者で、世事にたけ、理財にも明るいやり手であつたが、彼の考へ方や行動には、正しいとか正しくないとか云ふ意味とは別に、一種我慢のならないものが交つてゐた。にも拘はらず、割に早く父を失つてこの年寄を親代りに見なれた内藏之助は、彼の不快な壓力に對して奇妙に無力であつた。叔父の何かの意見、若しくば何かの批評が、力強い暗示となつて知らず〳〵自分の上に働きかけるのを彼は感じた。例へば去年の兇變の際、殉死説から籠城説に、籠城説から開城説に、而して終に復讐説にまで轉々として變つた内藏之助の意見は、要するに源五左衛門の意見でなかつたとは云へなかつた。またその復讐説に就いて内藏之助が急進派に與し得ない現在の氣持は、彼自身の心的經過の裡に有力な原因があるにしても、總右衛門が想像した通り、この叔父の影響なしではなかつた。

『あの刺のある調子には閉口だが、叔父が江戸の連中を評した言葉は全然間違とは云へないかも知れぬ。』

窓の下に据えた小机の前に靜かに坐つて、總右衛門の來書から二人の客の言葉を順々に反芻して見た時、内藏之助は矢張りさう考へずにゐられなかつた。彼等はたしかにあせり過ぎてゐる氣がした。その焦燥が彼等の云ふ通り見す〳〵敵の家を眼前に見てゐることや、敵と同じ土地に住み、敵が踏んだ土を踏むことの憤懣から生じてゐるならば別であるが、萬一にも叔父の皮肉な批評が當つてゐるとすれば、彼等の急進説の動機は純粋とは云へない。――併し嚴正に鑑別した時、眞に純粋な感情で復讐を急いでゐるものが果して何人あるだらう。内藏之助は今日連判状に名前を連ねてゐる人々を唯三つの仲間に分類することが出來ると信じた。第一は飽くまでも義のためにかたまつた人々、第二には何もかも復讐

の決心はないのであるが、その實行までには多分大事の一身が有利に解決するであらうから、その時除け者にされまいとして加はつた人々。第三は單なる忠義心と云ふよりは復讐そのものに傳統的な美と憧憬を感じ、この機會に自分達の手でそれを實行することに依つて、無爲安逸な泰平の惰眠を驚かしてやらうと云ふ、冒險的な熱情から出發した人々。

この三種類であつた。

『では、お前自身はどの組に屬してゐるのか。』

どうかするとこの自問が不意に彼の意識を脅すことがあつた。その度に内藏之助は他人から質問されたが如くひとり胸を躍らした。

『第一の組か。』

さうだ。斯う言下に呼ぶことが出來たら。併し、内藏之助の良心は、少くとも現在の氣持では、それを許さなかつた。

『では第二の組か。』

いや、今の自分はさまざまの迷を持ち、勇氣をも缺いでゐるとは云へ、彼等のやうな卑賤な心のないことだけは、誰の前にでも誓つてよい。

『殘つてゐるのは第三の組だけだ。』

これは江戸の同志が代表者で、自分にも同じ憧憬がないことはないにしても、純粋にそれのみだと云ふことは出來ない。斯う擧げて見ると彼の入る場所は何處にもなかつた。自分は正しく仲間はずれにならうとしてゐる。──内藏之助は時々さう考へることがあつた。正直な告白が許されるならば、彼は忠義とか、復讐とか、家臣の義務とか、責任と

か、これ等の激しい慾を持つて迫つて來る一切の情慾を、當分忘られるものなら忘れて仕舞ひたかつた。空虚な、何んにも介意はされない氣持で、あの向の山でものんきに眺めてゐたかつた また、あの山の後から昇つて來る玉のやうな朗らかな春日が樂しみたかつた。好きな庭いぢりに身を委ねて仕舞ひたかつた 丁度それをやりながらよく口ずさむ採菊東籬下、悠然看南山の氣持で、ひたすらに安易な束縛のない生活が送りたかつた

斯んな心が何時からこれ程強く自分の中に成長して來たか、内藏之助自身でも分らなかつた。たゞ去年の不幸な事件と持病の長煩ひに痛めつけられてから、精根の消耗したやうな疲勞を感じた。時に依ると彼はまだ衰弱から恢復してゐないと思ふことがあつた。少し無理をしても眩暈がしたり、動悸が激しくなつたりする。また同志の感情の不和や、意見の衝突や、取り分け目下鎬を削つてゐる自重派と急進派の拮抗の如き心配事はすぐと身體に響いた。彼は絶えず藥を飲んでゐたので、居間にも、着物にも、持物にも、山芙萸と高麗人參とを一緒に煎じた持藥の特殊の匂が浸みついてゐた。

「身體具合がよくないと仰しやりながら、お酒を過したり、遊興をなすつたりしてゐらつしやれば、世話はございませんわ。病氣の方で幾らよくなり度くても、それではよくなりやうがない」

妻のくり子は時々そんな皮肉を云つた。これも三分の一位は事實であつた。而かも現在の内藏之助に取つては茶屋の灯や、美しい女たちの顏や、彼等の若い陽氣な笑ひ聲は、庭の向の山々や、朗らかな春日や、庭いぢりや、瑞々しい牡丹の芽や、これ等のものと反撥しなかつたのみならず、彼の心を、自由な拘束のない樂しみの中に容易に誘ひ込んで呉れる點で、同一の價値であり、何等矛盾のない魅力であつた。生理的にだけ云つても、彼は女色に對して、青年期の熱情よりは却つて危險な、而して更に抵抗力の弱い年齡に達してゐた。現在の事情が遊ぶのに都合よく出來てゐたのも、

一つの原因でないことはなかつた。內藏之助には浪人の閑散と金があつた。且つ同志の人々は、この間の席上で非難をあげた一部の者は別として、彼の遊は吉良方の隱密に對する巧妙な韜晦だと見なして呉れた。この是認は十五を頭に五人の子持で、利かぬ氣の八釜しい妻の嫉妬さへ容易に封ずることが出來た。內藏之助は何人にも辯解することも要らなければ、憚る必要もなかつた。呑氣に大つぴらに遊べば遊ぶだけ、彼の僞瞞は成功と見られた。この餘りに都合のよい結果は、生來の善良な內藏之助を、最初はまごつかせ、後めたがらせた。彼は恥なしにこれ等の默諾を利用することは出來なかつた。とは云へ、斯う云ふ場合に取つて、これほど調法な隱れ蓑はなかつたから、結句それを使つた。

併し斯んな胡魔化しがいつまでもほぐれないで續く筈はなかつた。この間の非難はすでにその徴候の現はれであつたことを彼は知つてゐた。同時にその破綻から遁けるためには、生活を整理し、萎微した心を今一度引き締めて、最初の目的に急がなければならないこと、それが彼に取つて唯一の正しい生き方であり、また彼の分類に依る第一組の誠實な同志たちは、それを待ち切つてゐることをも知つてゐた。おれの立場は變だ。おれに反對してゐる連中が寧ろ好きで味方が嫌ひなのだから。――內藏之助はさう思つて腹の中で苦笑することがある。同じ意味で彼が眞に信賴してゐるのは自重派ではなくして、急進派であつた。何故なれば、前者の大部分は卑怯な日和見の第二組が占めてゐたから。今日の客に就いて云つても、彼は源五を信ずるほど叔父を信じてはゐなかつた。叔父は今では復讐の問題を彼の新しい泉水や、若しくば內藏之助に買はせようとしてゐる山林以上に本氣に考へてはゐないことを內藏之助は察してゐる。彼が內藏之助の輕擧を戒める忠告や、急進派に對する苛辣な皮肉は、言葉だけの意味は間違つてゐないにしても、すべて其處から發したのだと見拔いてゐた。にも拘はらず、その叔父と行動を共にしようとするほど、それ程、彼の影響は根深い

つかつ、さう計らうではなかつた。同時にまた、源左等の急進派に同じ得ない理由として、大事の問題を挙げたのは、嘘ではなかつたにもせよ、本統でもなかつた。原因は他にあつた。復讐の如き大事を決行するには彼は餘りに疲れ過ぎ、氣力を失ひ、退嬰的になつてゐた。考へるだけでも臆劫で、非常な重荷に感ぜられた。先に述べた如く、出來ることならば、そんな事は當分忘れてゐたかつたのである。

その間にもたゞ一つ氣懸りな事は江戸の連中の行動であつた。安兵衛が源左に書いたと云ふやうに、この上の遲延に耐へきれないで彼等だけで事を擧げねばよいがと云ふ事であつた。さうなれば上方の急進派もそれと呼應して立つかも知れなかつた。最も確實性のありさうな十人ばかりを内藏之助は數へて見ることも出來た。でもそれ位の人數で、またその人々の手で成し得られる程度の準備で、果して目的が達せられるであらうか。その點では矢張叔父の暗示が働いた。當の上野介よりも上杉家の勢力が氣になつた。彼は容易に成功を信ずることは出來なかつた。この憂慮にはまた彼自身が彼等の計謀から除外される怖れが交つてゐなくはなかつた。その心理を露骨に解剖すれば、自分ではまだやる氣がないにしても、彼等だけにやらせるには忍びなかつた。殊に想像の如く失敗しないで見事に成功したとするならば。――

復讐者の輝やかしい名譽が彼等の手に占められ、その忠義や功積や勇氣が世上に喧傳せられる場合が生じたとするならば。――それでも羨望や後悔なしに彼等の勝利に對し得るであらうか。呑氣な無關心で超然と現在の安逸に浸つてゐられるであらうか。――一番よいのは、この際誰かを江戸にやつてあの仲間を說得させることであつた。而して今少し氣長に待たせることであつた。江戸の火の手が靜まれば、此方も落ちつくに相違なかつた。そのうちには自分の健康だつて恢復するであらう。――良雄はさう考へた。問題は誰をやるべきかであつた。人選を誤まればわざ〳〵遣つた者が江戸の火の手を消す代りに、自分の方が却つて焚きつけられて居るやうな結果となるであらう。[illegible]

場合もさうでなかつつたとは云はれないやうに。併し内藏之助は一人の最も適當な人物を思ひ浮べることが出來た。

永い春の日が暮れかけるまで内藏之助は居間から出なかつた。妻が夕飯の知らせを持つて入つて見ると、彼は手紙を書いてゐた。而して急な用事で赤穗までやるのだから、今宵の伏見の夜船に間に合ふやうに若黨の左六に支度をさせろと云つた。左六が飯を掻込んだり、脚絆や草鞋を揃へたりしてゐる間に手紙は出來上つた。道中の細い注意と共に若黨に渡した書狀の表書には、達者なお家流で『吉田忠左衞門殿』と認めてあつた。

もとの足輕頭郡奉行の吉田忠左衞門は、食祿も僅に二百石で、中以下の低い身分に過ぎなかつたが、明敏な頭腦の持主で文武兩道に達し、殊に兵法に精しい點で聞こえてゐた。去年の兇變の際には彼は既に六十一才であつたが、その智慧や經驗はさま〴〵な形で内藏之助を助けたので復讐の連盟が結ばれると、原總右衞門やその他の老人たちと共に一味中の長老として重んぜられた。

不幸な事件が一と先づ片づいて、同志の者がそれ〴〵京阪地方に身を潜めることになつた時には、彼も大阪に住まつてゐた。それが數ケ月前再び赤穗に歸つたのは、計畫が容易に實行されないこと、それまでには面倒な内輪揉めの生ずることを見て取つて、その渦を避け、靜かに形勢を觀望しようとしたためであつた。若黨の左六が持つて來た内藏之助の招きの手紙も忠左衞門は豫期しないことではなかつた。で、彼は直ぐ旅行の用意をした。

大阪まで船で、それから淀河を伏見まで遡るだけの便利な道順も、灘が荒れたり、丁度な便船がなかつたりすると、割に日數を取るのであるが、今度はすべて好都合に行つた。赤穗を出てから三日目の朝には忠左衞門は既に伏見の船着場に下りた。伏見から山科までの距離は三里足らずである。その年になつてもまだ若者のやうに強健な忠左衞門は、こ

れまで内藏之助を訪ねる時でもこの間を馬にも駕籠にも乘つたことはなかつた。駕籠の方は素朴な氣性で嫌ふだけではなかつた。元來非常な大男であつたから、狹い乘物は窮屈で我慢出來なかつたのである。で、今日も忠左衛門は徒歩で、その長大な身體を質素な旅支度で固め、笠をかぶり、町から近所の村をさして行く物賣の商人や、早い荷を町の市場にかけてすでに歸り道にある百姓たちや、または京詣りの序に近くの三寶院まんだら寺から、有名な名所舊跡を餘さず見物して、故郷への土産話を一つでも多くしようと志してゐるやうな、無邪氣な旅人たちの群に交つて、而して、彼自身もそれ等の道連でもあるかのやうな愉快げな態度で、古い灰白色の街道を東に進んで行つた。實際忠左衛門のその樣子からは、去年の不祥事や、復讐の計畫や、若しくば何十里の彼方から彼をわざ／＼呼び寄せた同志間の紛擾などは想像されもしなかつた。一つは、どんな氣懸りな用事を控えたものでも陰氣な顏はしてゐられない位、その日が爽快な上天氣であつたせいもあるであらう。歩いてゐると、笠の下の額や、紐の當つた、既に半白の霜の見える鬢の際に汗がにじんだ。忠左衛門は時に笠を取り、懷中から畳んだ手拭を出して、身體に相應して眼も鼻も口も大きい、老人らしい威嚴のある顏を拭いた。

二時間あまりで目的の村に入ると、やがて忠左衛門は街道を西に折れた。どれも似たやうな小高い松山と、竹林と、百姓家と、石盤色のよく耕された田畝と、些かな水の流と。それ等の間を通つて大石家の――現在の姓で云へば池田家の――白い土塀の壁を向の木立の間に見出すまで。彼は今朝踏み出した時と變らぬ達者さで歩いてゐたが、その内に忠左衛門は急に何かに氣がついたやうに足を止めた。丁度幾つ目かの竹林に沿うて、一つの緩い傾斜面になつた原にさしかかつた時であつた。斜面の五六本奥に入つた裏道の藪垣に、二人の前髪立の少年が、道の方へ背中を向け、[illegible]こみ[illegible]

た。二人はすぐ前の枸杞に群がつてゐる小雀を覗はうとしてゐるらしかつた。終に大きい方の少年は、默で身を隱すやうにしながら筒を構へ、口を一方の端に當てた。ふッと低いうなりと共に円い矢が筒先から迸り出たのと、一羽の小雀が枸杞の枝から落ちたのとは殆ど同瞬間であつた。

『うまい。』

忠左衛門は劍道のかけ聲のやうに後から怒鳴つた。二人の少年は不意の人聲に驚いて振り返つた。而して其處ににこにこして立つてゐる旅姿の忠左衛門を認めた時、大きい方の少年の顔はまつ赤に燃え上つた。

『お久しぶりで。』

忠左衛門は子供の大きくなるには驚くと云つた風で二人に近づき、親しげに、而して改めて挨拶した。少年は内藏之助の長男の松之丞と次男の吉千代であつた。

松之丞は既に十五で、前髮がおかしいほど大柄であつた上に、色々な出來事で大人びさせられた心と敏活な推理力を有つてゐた。復讐の問題についても、彼は無心ではなかつたから、左六が赤穗にやられた事や、それ以來人待顔に見える父の樣子を、この年寄の訪問に結びつけて考へるのにむづかしくはなかつた。それだけ彼はそんな小さい者と一緒になつて、——三つ下の弟は、十五の兄から見れば本氣に相手にすべきではない幼稚なものであつた——吹矢などをいぢつてゐるところを忠左衛門に見られたのが心外でならなかつた。熱心に擊劍を勵んだり、一人前に槍が使へたりするところが何故見て貰へなかつたらう。彼はこの屈辱を取り返すために、而してもう決して子供ではない事を表示するために、一生懸命大人ぶつて、遠來の客を家の方へ案内しながら、半分の口惜しさ、半分の恥かしさでむつちりしてゐたに引き換へて、無口な十二の吉千代は、身體の遙かに二倍ある吹矢の長い筒をかついで、彼等の先に立つて驅け出した。

珍らしい客を悦ぶ子供らしい興奮から、早くそのことを家の人々に知らせようとして。――

『成る程、成る程。』

例の茶室で、内藏之助から彼等の計畫の推移に就いて一と通りの話を聞いてゐる間、忠左衛門はこの間投詞を單調に繰り返した。自重派と急進派の憂ふべき軋轢を話されても彼は成る程で受け、自重派がどう主張するか、急進化がそれにどう反對するかを聞いても成る程で受け、原總右衛門の意見書を大高源五が持つて來たことや、またその源五に江戸から堀部安兵衛がどんなことを書いて寄越したかを聞いても成る程で受けた。併し、最後に彼等の過激な行動を防ぐために出府して貰へまいかと云ふ、先に左六に托した手紙に既に十分に述べてあつた内藏之助の願望が、改めて懇ろな態度で持ち出された時、忠左衛門は初めて成る程を控え、その儘口を閉ぢた。

『遠方を誠に御苦勞千萬で。――本來なら老人に斯う云ふお願をされることではないのだが、申した通りの事情で、他の者ではどうにもならないと考へられるので。この際枉げて一と骨折つて貰へると非常に助かる譯なので。』

忠左衛門はこの信頼に對する答禮のしるしに半白の頭を輕く下げた。

『早晩誰も一度は行かねばならぬ土地ではあり、一と足お先に集つて何かお役に立つことがあれば、忠左衛門悦んで參りませう。これでも、二百里三百里の旅ではまだ若い者にひけは取らぬ積りですから、年が寄つてゐると云ふ御配慮は却つて心外千萬で。――』

態度の慇懃な割に、誰に對しても、きぱ/\と明快な話をする忠左衛門は、不斷もさうであるが、何か難問題の場合には殊に頼もしかつた。彼の口に上ると、どんなむづかしさうなことでも容易になり、明るく、希望ありげになつた。

で、内藏之助もこの返事で一と先づ安心すると共に、半分辯解の口調で云つた。

『いやどうも、自分で意氣地がないものだから、つい。』

『さう申せば、お身體の具合は近頃如何で。』

相變らずはつきりしない旨を内藏之助が答へると忠左衞門は無遠慮にきり込んだ。

『ちと傾城買が過ぎますかな。』

彼は云つて仕舞つて、廣い肩をゆすつてからからと笑つた。内藏之助は顏を赤くし、不意な初心らしいまごつきで苦笑したが、併し彼がその瞬間に眞に感じたものは羞恥ではなかつた。何が忠左衞門にその言葉を吐かせたか。單に彼の磊落か。でないとすれば、忠左衞門は自分の遊蕩の隱れ簑を見透してゐるに相違なかつた。と思ふと、まだにこにこしてゐる、而して長い顏からの聯想で何處か怜悧な馬の感じのする忠左衞門の茶色の眼が眩しかつた。その一瞥の前にはもつと大事な秘密が暴露されてゐる氣がした。忠左衞門は既に何もかも悟つてゐるかも知れなかつた。自分が何故急進派に與し得ないかの眞の理由までを。――それでゐて默つて命ずる儘に江戸へ下ることを承知したのだとすれば。――

内藏之助はこの推測をそのまゝ進めるに堪へられなかつた。で、彼は急いで話題を轉ずることに依つて、不安な後めたさから遁れようとした。

『忠左衞門殿、實は江戸の行動に就いて斯う云ふ觀察を下したものもあるのですが――』この前置をして内藏之助が話し出したのは、小山源五左衞門が彼等に對して浴びせたあの皮肉な批評であつた。『――つまり、彼等は非常に困つてゐる。どうにかしなければやりきれない狀態になつてゐる。で、無計算に事を急がうとするのだと、斯う云ふので。』

『その傾向が全然ないとは申されますまい。』忠左衞門は反對しなかつた。『併し彼等としてはさう見られるのは辛いと

ころで、またそれだけに、最後まで行き詰まらないうちにやつて仕舞はうと云ふ氣が强いかと想像されますな。――兎に角、理窟だけではこれは容易に解決されますまい。』

さう云ひながら、忠左衛門が初めて嚴肅な表情をその長い顔に浮べて默つたのを見て、内藏之助は彼を江戸に下すことを思ひついた時から用意してあつた或る提案に就いて、同時にそれはすべての場合、理論で解決されないことを解決し得る唯一のものである方法に就いて、話し出さうとした。

『都合に依つては、非常に困るものは幾らかづつでも補助してやると云ふ事にしてはどんなものかと考へてゐるのですが。――私自身の手でどうすると云ふ譯には勿論行かないが、他の事ではないし、例の口から支給するとすれば、何とかならないことはない筈ですから。』これは昨年の沒落に際して、藩庫の在貨がそれ〴〵の使途に於て處分された時、主家再興の名目で取り除かれ、以後良雄の保管の下に置かれてある、同志の者達は明らかに復讐の軍用金と信じてゐる金のことであつた。『これならば、幾ら貰はうと、誰に恩を着るでもなし、云はば先君から拜借すると同様だから、彼等としても氣持よく受け取れるだらうし、またそれに依つて過激な行動を防ぐことが出來れば、双方好都合と云ふもので。……』

内藏之助はひとりで其處まで續けたが、忠左衛門が直ぐには贊否を表さないで、口癖の成る程さへ控えて愼重に耳傾けてゐるのに氣がつくと、それ以上話すことが出來なかつた。何か云ふほど、結局自分の秘密の正體をさらけ出すに過ぎないやうな氣がした。忠左衛門は、機密費の提供の眞の目的が何處にあるかを看破してゐるのかも知れなかつた。――先刻の疲れが倍加されて後戻つた。

併し口を開いた忠左衛門は異議なく彼に同意した。さう出來れば自分の仕事も非常に樂になるだらうと云つたが

併し彼等を眞に落ち着かせるためには生活費の提供と共に復讐の期日を聲明することが必要だと説いた。

『御一周忌ももはや來月で、それまでに大學様の御一身がお極まりになれば結構ですが、でないとすれば、當分覺束ないと見なければなりますまい。』

『併し、幾らおくれても來年の三周忌までには何分の御沙汰があるだらうし、またそれだけは是非見屆けた上でと云ふのが、御承知の如く私の持論だから。――』内藏之助は話しながら一つの苦しい塊まりに咽喉を塞がれるのを感じた。彼は勇氣を以つてやつとそれを壓へつけた。『彼等にも無際限に待てと云ふのではない。ただそれまで辛抱して貰ひ度いと云ふのです。』

『御尤で。併し來年まで待つてそれでも御恩命に接しないとすれば大いに困りものですな。――その上彼等を喰ひ留めておくことは、忠左衛門もちとお受け合ひいたし兼ねます。』彼はその言葉と共に茶色の眼で凝と相手を見詰めて、きつぱり斷定的につけ加へた。『で、中間を取つて、來年の三周忌までに御沙汰が下れば結構、假令下らないとしてもそれ以上は待たせないと致しては如何かと存じますが。――是非さういふ事に決定して頂き度いもので。これを條件とすることをお許し下されば、忠左衛門責任を以つて彼等を納得いたさせませう。』

痛い針が終に打ち込まれた。内藏之助はこれに反對することはできなかつた。相談は極まつた。

明けの日忠左衛門は大阪に原總右衛門を訪ねた。

總右衛門はその頃天王寺に近い高津のごたごたした裏町の一つに住んでゐた。家族は初めから國に殘してあつたので、土地の遠縁に當る夫婦者をおいて朝夕の世話をさせてゐた。彼はまた近傍に集まつてゐる、あまり裕でない仲間の

者達が、當座の生活費を得るために、一つは世を忍ぶ便宜のために、醫者になつたり、手習師匠をしたり、小商人になつたりしてゐるのに倣つて、自分も風變りな商賣をはじめてゐた。總右衞門は傘屋になつてゐた。足輕頭で三百石の食祿を受けてゐた總右衞門は、假令浪人したと云つても一年二年で傘でも賣らなければならないほど窮してゐる譯ではなかつたが、遠緣の男がその職に覺えがあつたのと、何か並べておけば、必要に應じて仲間の者を店の商賣客として自由に迎へることも出來たからであつた。實際今忠左衞門が、張り立の傘を四五本軒下に擴げて、如何にも傘屋らしく構へた小さい店の中に入るのを誰か見てゐたとしても、年寄の田舍侍が傘の一本も買ひに寄つたとしか考へなかつたであらう。

『近頃店の景氣は如何で。』

『いや、存外儲かります。』

『初めからそれと分つてゐれば、一と口持たせて貰ふところだつた。』

『なんなら今からでも結構だが。』

傘屋の、油と澁の匂のむれ合つたりうす暗い二階で久しぶりの顏を合せた、二人の年寄は、先づ斯う云ふ挨拶で始めた。而してお互ひに自分達の言葉に興じて聲を立てて笑つたが、その快活な調子は、引き續いて生じた彼等の眞面目な對話にも悉くは消えてしまはなかつた。二人は同志の老人組の中では最も合ひ口であつた。而かも性格にはその年齡の七つの差と丁度比例する位の相違がなくはなかつたが、例へば忠左衞門が如何なる瞬間にも平靜を失はないのに對して、總右衞門はどうかすると靑年のやうな純眞な熱情に捕はれる傾向があつたが、これはお互ひの友情の楔になつたかして、總右衞門はどうかすると靑年のやうな純眞な熱情に捕はれる傾向があつたが、これはお互ひの友情の楔になつたかでも傷けはしなかつた。而して共通の鋭い洞察や感受性に依つて、どんな重大な問題でも二人で話し合ふ場合には、し

かつめらしく開き直る必要はないと云ふ種類の友達に屬してゐた。

『話のやうだと、幾らはたから責め立てたところで、池久には當分やる氣はないと見えるな。』

忠左衛門から、赤穗に内藏之助の使を受け取つた事から、山科での會見の顚末に就いて聞き取つた時、總右衛門の口に何より先に上つたのは此の推定であつた。池久は内藏之助の今の池田久右衛門から取つた略名である。老人達はこれを一種愛稱の形で用ひたが、そんな時に限つて彼等の調子は著しく客觀的になり、内藏之助はもとの城代家老若しくば復讐連盟の主腦者とよりは、單に一と廻りか二た廻り年の若い、それだけ人生の鹽つ氣の足りない、一人の仲間として取り扱はれるのが常であつた。

『併し、池久も今度の保證だけは反古にはしまいし。』忠左衛門は、相手の如何にも年配な商人らしく剃り擴げた月代の下から、斜に額にかけて一本高く靜脈の浮き出してゐるのを見て、内藏之助に對する不滿の存外根强いのを察しながら、わざと落ちつき拂つて續けた。『幾ら延びても來年の三週忌よりおくれる事はないのだから、まあ、それまで打つちやつておいて見ることだな。』

『そんな悠暢な話では、此方は兎に角として江戸が承知しまいぞ。』

『それで承知しなければ江戸の量見が間違つてゐる。』忠左衛門はずかりと云ひ切つた。『わづか十ケ月ばかしの辛抱だ。大學樣のことがその前に極まれば、半年待たないですむかも知れない。それもただ待つてゐるではなく、困れば暮らしの方まで持たうと云ふのだから、文句はない筈だ。——或は池久賴むに足らず、世話にもなるまい、彼がぐづ〳〵してゐる間に、此方は此方で東西の急進派を糾合してやつて見せると云ふのなら、それも一意見で面白からうが、肝腎の軍用金は何處から降つて來る積りか知らんて。——幾ら堀部が八百八町を朝から晩まで駈け廻つて見たところで、そんな

金が落ちてゐよう道理はなし、貴公にしろ、店の傘が日に百本賣れたつて、頭巾一着づつ揃へられるかどうか、先づ怪しいものだな。』

斯んな時の忠左衛門の舌鋒は、常よりも一層辛辣になつた。同時に、語尾には必ず彼一流の濶達な高笑がくつ附いて、ひどくやつけられた者ほど親しみを感じさせる魅力を持つてゐた。

『さうやられると一言もないが、』惣右衛門も虚を突かれて、一緒にかすかに笑ふ外はなかつた。『江戸にしろ、また此方の連中にしろ、池久の腰の坐り方さへ確かなら、半年やそこいら待つの待たないのと云ふ譯では勿論ない。何んとか騷ぐ者があつたつて、壓へはつくるのだが、この頃では御本尊の腰が危なかしいと云ふ評判だから、若い者がやきもきするのだ。それに就いて先達も大高をやつて、池久に手紙で色々と云つて見たのだが、返事も寄越さぬて。』

『そのことも聞いた。池久も心配はしてゐるが、あの性分で、貴公の意見を容れる氣はないにしても正面からはねつけられもせずと云ふ譯で返事がしにくかつたらしい。』

『さうかも知れぬ。併し池久の正直な腹はどうだらう。誓約の通り眞實今でもやる氣があるのか、ないのか。貴公は何と見る。』

『先づ四分六分と云ふ見當だな。』

『ない方が強いのだな。』

「さう思へば間違ひない。』

惣右衛門は低いうめき聲に似た吐息を洩らした。彼の顔の上には、今迄の陰鬱はなかつた。初めて非常な嚴しい表情がそれに代つた。

『併しこれは現在の話で。』斯んな場合に決して釣り込まれることのない忠左衞門は、相手の顏つきとは無關係に續けた。『今少し待つてゐるうちには、この割合は反對になるかも知れない。吃度なると思ふ。ならなければ無理にでもならせるやうに此方で仕向けて行くまでだ。』

『さあ。さう行けば結構だが。』

總右衞門は容易に疑惑を捨てなかつた。それは內藏之助を見限る意味ではなく、彼の周圍の附き者が信用出來ないからだと云つた。その言葉が誰を、また何を意味するかは二人の間には說明の必要はなかつた。が、內藏之助にどんな缺點があつたにもせよ、小山や進藤の徒を論ずる論じ方で彼を見ては誤謬が生ずると云ふ抗議を忠左衞門は挾んだ。

『勿論、決して、』總右衞門はそれを聞いて急いで自分の言葉の不足を補つた。『池久を彼等と同じ目で見る積りはない。たゞあの弱い性格には、叔父の言動が可なりに影響するのだから、その點を怖れるのだ。――云つて見れば、池久を危ぶむのはあの弱い性格を危ぶむのだ。』

『ところが手前は反對で、池久はあの弱い性格で最も安全だと云ひ度いのだ。』

忠左衞門はその逆說めいた前置で相手を驚かしながら、自分の意見を解釋した。それに依ると、若し內藏之助が强い男で、自分の決心や欲望は人に何んと云はれても平氣で押し通すやうな性格であれば、賴もしいと共に一面また危險でもある。例へば今のやうな動搖が彼に生じた場合、彼は勇敢に、仇討なぞはもう厭になつたと云ひ出さないとも限らない。さうなれば傍から騷いでもお仕舞である。併しあの內藏之助なら、腹の底では幾ら何と思つたにしろ、よしんば一年半年愚圖ついたにしろ、口に出して仇討は厭になつたと云ひ得る氣遣ひはない。――彼が叔父の影響から脫しきれないのも、要するにこの柔軟性に基くのであるが、考へ樣では、これも我々に利用されなくはないであらう。叔父に動か

されることは、他の者にもまた、云ひ換へれば我々にも動かされる可能のあることを示すのだから。——但しこれ等の他に今一つ最も有力に彼を捕へて、どんなに藻掻いても復讐の問題から足を拔くことの出來ないやうに縛りつけてゐるものがある。それはあの保管金だと忠左衞門は云つた。

『大學樣の運動費やその他で幾ら使つたところで、またこれから先江戸を補助するにしたところで、あれだけの金が容易に失くなるものではない。それに池久のいゝところは、自分でそれをどうすると云ふことは、しろと云はれても出來ない性質だから、金はいつまでも手に殘る。殘つてさへゐれば復讐の問題はいやでも應でも池久の念頭を離れる氣遣ひはないし、云つて見れば番人が耳許について居催促してゐるも同然で、これより有効な監視はなからう。當分打つちやつて樣子を見てはどうかと云ふのも此處を考へての話で、そのうちに池久の腰の据はりもどうにか直つて最初の計畫通り一緒にやるとなれば、世間體も惡くなし、我々も氣持がよい。——いや、そんなことが問題ではない。世間體が惡からうが、氣持がよくなからうが、よしんばこの上二年三年待つことにならうが、立派に目的を達しようとするには、是非池久を待たねばならぬ。打ち割つて云へば、あの金を自由にしなければならぬ。——と斯う手前は堅く信じてゐるのだ。』

總右衞門は、相手が得意な兵法を講ずる時のやうな論調で、これだけのことを整然と理路を追うて話し續けるのを聞きながら、何か事がある度に彼に就いて考へさせられる一つのことを新らしく感じてゐた。それは忠左衞門こそあらゆる意味に於て怖ろしい人間だと云ふことであつた。

月の末に、忠左衞門は他の一名の同志を連れて江戸に向つて出發した。內藏之助はこの師走の用事で一味の者を何處

へかやる場合には必ず支給することにしてゐる旅費の外に、可なり纏まつた金を彼に渡した。十日あまりの旅行の後、忠左衛門は無事に江戸に着いた。而して、彼に托された交渉が圓滿に終了したことを、到着の知らせと共に報告して來た。

『これで當分いゝ。』

この報告が内藏之助に與へた秘密の安堵は、モヒ中毒の患者が、一本の新たな注射針をその肉に打ち込んだ時の滿足に稍々近いものであつた。併し忠左衛門の方でも拔かりはなかつた。彼は出立前、同志の一般の意見をも聞き度いと云ふ理由で内藏之助に勸めて總會を開かせたが、それは結局、復讐に就いての今度の聲明を一同の前に改めて宣誓させ、二度と破棄することの出來ないやうにさせたものであつた。總右衛門を大阪に訪ねたのも一つはその下相談のためであつたから、彼の援助で目的は思ふまゝに達せられた。内藏之助にしてもそれは知つてゐた。同時に其處まで自分を持つて行つた忠左衛門が恨めしかつたのではあるが、兎に角危機は去つた。今後の數ケ月乃至一ケ年を、それに依つて彼は自由に殘すことが出來るであらう。内藏之助の現在の氣持から云へば、間もなく咲く筈の牡丹を、舒やかな心でゆつくり眺められるだけでも、それは何物にも代へ難き悅びであり、内藏之助はまたその悅の價値を眞に知る者の悅でそれを味はうとしてゐた。

彼は毎朝可なり寢坊をした。前から早起でもなかつたのが、病氣以後は殊で一層遲れがちになつたのである。眼を覺ます頃には日は高く昇り、一としきり朝の仕事のすんだ家の内がひつそりして、小さい子供たちの遊び聲一つ響かなかつた。併しこのしーんとした空氣は、斯んな場合に普通感じさせるやうな樂しい和らぎを内藏之助に齎しはしなかつた。却つて家が靜まり返つてゐればゐるだけ、彼はその中に不自然な或る冷たいものを感じた。綺麗に掃除の出來上つ

た茶の間が眼に浮ぶ。同じやうに、全くその四角な部屋と同じやうに、またすつかり同じ調子できちんと朝の身仕舞の出來上つた妻のくり子が、彼の起きるのを待つて坐つてゐる。勿論まだ朝飯前である。子供達は兎に角として、妻が頓て起きる筈の主人に先立つて食事をするなどと云ふ事は、隣藩の家老の家に生れて、當時の女大學式で訓練された彼女には考へられないことであつた。併し空腹は、他の種々な原因と一緒になつて、彼女を不機嫌にしてゐる。例へば内藏之助がいつまでも便々と寐ゐるのからして、彼女は氣に入らないに相違ない。つんと張つた髮の下で、青白い顳顬(こめかみ)が神經的に震えてゐるのが内藏之助にははつきり感じられる。――と、床から出て行くのが臆劫な氣がする。でもそれ以上寐てゐる譯にも行かないので起き上る。顏を洗ひ、身體を拭き、それから、一日置に男髮(をとこがみ)の上手な若黨の左六に結はせることにしてゐる髮に丁寧に櫛を入れた後、やつと茶の間に入つて行くと、床の中で想像したと寸分違はぬ有樣が、噓のやうに正確に彼を待ち受けてゐる。

『お早うございます。』

『お早う。』

夫と妻は習慣的な禮儀正しさで、これだけ冷淡に、寧ろその冷淡をお互ひに意識しない位素っ氣なく定例の挨拶を交換する。食事が始まつてもこの調子は變らない。二人は默つて箸を動かす。併し内藏之助が默つてゐるのは特別に不機嫌なためではない。彼は性來口數が少なかつたが、家では殊に無口なのであつた。何か聞いたり話したりすることがあれば、妻から切り出さなければならなかつたから、くり子はいつまでも意地張つて默つてゐる譯には行かなくなる。で、一二三の家事上の話がやつとこの沈默を中斷する。内藏之助はその方面に關しては何もかも妻に盲從した。反對すれば面倒臭くなるのを怖れるためばかりではなかつた。彼は妻の手腕を信じてゐた。同時にまた妻が武士の妻として、數

養に於ても覺悟に於ても申分のない婦人であることを彼は知つてゐた。にも拘はらず、内藏之助が彼女に慊りなかつたとすれば、それはくり子が申分がなさ過ぎたからであつた。云へ換へれば、二人はたつた二つしか違はなかつた。而して大抵の場合、年の多く違はない妻は夫に取つては姉であり、母親であると云ふことがいけなかつたのであるが、殊に昨年の事變は彼等の關係を一層妙なものにした。妻は今内藏之助の監視者でさへあつた。彼女は復讐を以つて神聖な義務と信じ込んでゐる點に於て、それと共に同盟の統領たる夫に對してあらゆる期待をかけてゐる點に於て、同志中の最も頑固な忠義者に劣らなかつた。これは内藏之助には堪らないことであつた。而かも彼の心の動搖が根深くなればなるほど、妻の無言の注文も一層嚴しく身に迫まつて來るのを感じた。——さうやつて食事をしてゐる間だつて、内藏之助は壓迫から自由ではなかつた。

箸を置いて、膳の横に朱塗の盆に載せて用意されてゐる、持藥の煎じ藥を藥椀で一杯飲むと、彼は庭に出る。妻はもうゐない。彼女のゐないことは、最も過激な復讐論者から、忠義から、責任から、同盟から、彼を縛つてゐる一切の羈絆から一時逃れたことに等しい。さうだ。此處には何んにもない、誰もゐない。たつた一人だ。ああーつ！彼は大手を擴げ、脊伸びをし、口を一杯に開いて、肺臟の底から思ふ樣叫び度い氣がする。實際やつて見る。ただ聲をあげる代りに長い〳〵吐息をする。樂しい。春風が吹いて花が靜かに散つて來る。これも樂しい。太陽の麗らかに照るのも、鳥の囀るのも、向の晋羽山がいつに變らず長閑に霞んでゐるのも、悉く樂しい。殊に丹精の牡丹が、既に膨らまれるだけ膨らんだ蕾で、五枚の用心深い苞を突き除け、機會さへあれば一齊にぱつと咲かうと身構へながら、切れ込みの多い緑葉の間に、紅白思ひ〳〵の珠を綴つてゐるのを見ると、彼の滿足は絶頂に達する。これで四五日のうち輕い夜雨でも來れば、翌けの朝こそは素破らしい光景を呈するであらう。想像しただけでも、内藏之助は快い陶醉に浸ることが出來

る。

併し一時間ばかりの散歩が終つて家に入ると、彼の甘美な夢は忽ち妻の甲高い聲に依つて破られる。彼女は長男を呼び立てる。

『松之丞、松之丞。』

これは息子が父親から受けることになつてゐる課業を始める時だと知らせる言葉であつた。松之丞は母親の命令に從ひ、一冊の書物を持つて父親の部屋に行く。書物は論語である。これは一家が赤穗から移つて來て以來、土地に適當な教師がなかつたために生じたことであるが、内藏之助に取つてはこの授業は今では段々と苦しくなつてゐた。論語の嚴正な實踐哲學は、彼の疲れた、ひたすらに安易を求めてゐる心を苛んだ。取り分け祇園あたりへ出掛けて、幾日か家を明けた後の講義は、弟子が他の者でなかつただけそれだけ辛かつた。で、丁度な來客でもあつて授業が妨げられると、彼は救はれた氣がした。少し位いやな人間でもその時は歡迎された。

午後も午前と同じ有樣で過ぎて行く。春の日が暮れる。酒の好きな彼は晩の食事が樂しみであつた。暇をかけてゆつくり飮む。而して食後の陶然たる心で謠の一番もうたつて眠れば、先づ無事な一日であつた。どうかすると、晩酌の醉はその儘ぢつと落ちついてゐることの出來ないやうな焦燥と、一種落莫とした、初老の男の胸だけが知つてゐる寂寥に彼を誘ひ込む。内藏之助は暗い穴の底に落ち込んだものが、助けを呼ぶやうな氣持であたりを見廻す。一つの無邪氣な、なんにも注文をつけない手だけが、それを救ふであらう。併し彼が食膳の向に見出したものは冷やかな、嚴然とした妻の顏であつた。

彼は立ち上る。様子を見て取つて妻が尋ねる。

『お出掛けでございますか。』

『うん。』

彼女は左六に駕籠の用意を命じてから着換に手傳ふ。行先に就いては聞かない。その代りに云ふ。

『どうか氣をおつけになつて下さいましよ。本統に、どんなことがないとも限りませんから。』

この言葉は、吉良方の隱密に對する單なる注意に過ぎなかつたやうで、その實は內藏之助の思ひ出し度くないもの、せめてその時だけも忘れてゐたいものを悉く意識に掘り起させ、何處までも行くところまで持つて行かせようとするに等しかつた。彼は恨めしさと忌々しさで鋭くした眼を妻に注ぐ。若し彼女が、自分の苦しい心を半分でも汲み取つて呉れさへしたら。——でなければ、寧ろ嫉妬して、喧嘩しても出掛けさせまいとするやうであつたら。——併し——駕籠が來た。內藏之助は乘る。

『行つていらつしやいまし。』

彼女は平然とさう云つて、尖つた細い顎を玄關の疊に下げる。

終に牡丹が咲いた。蕾で想像した以上に見事な出來であつた。內藏之助の滿足は云ふまでもなかつた。彼は傍にゐても自分からは滅多に訪ねたことのない従弟や叔父の家を吹聽のために廻つて、二人をわざ〳〵牡丹の客として招待した程であつた。併し十日あまり續いて有りつたけの蕾を花にし、擴げられるだけの花瓣を擴げて仕舞ふと、牡丹はやがて衰へかけ、先に咲いたものから順々に散つて行つた。まだ匂やかな二三枚の花瓣が、金絲のやうな蘂と共に俄かにくづれて、花托から根元の黑い土に落ち重なつたりするのを見ると、內藏之助は自分の胸の中からも同じやうな何物かがば

らりと離れて行くのを感じた。內藏之助はくづるる花を眺めて毎日庭に立つた。

『牡丹もこれでお仕舞ひだ。』

さうして多分この生活も。――內藏之助は理由なしに、突然とんな氣がした。今にも、江戸から早飛脚で何か報じて來る。事件が急轉する。人々が駈けつけて來て、厭でも自分を引つ張り出さうとする。さうなつてまで彼等を拒み得るであらうか。內藏之助には自信がなかつたから、さう云ふ形勢になるのが何より怖ろしかつた。

忠左衛門からはその後も便りは絕えなかつたが、內藏之助が心配したやうな事に就いては、當分は何んにも云つて來なかつた。彼は重に吉良の動靜や、それに應じてやつてゐる味方の偵察法などを書いてあつた。同志の或る者は、傳手を求めて旗本松平登之助に出入する大工の頭梁と懇意になつた。この旗本は吉良の本所の屋敷の先住者で、建築を引き受けたのはこの頭梁であるから、彼に依つて設計圖が手に入れば、現在の吉良邸の最も正確な地理を知ることが出來る譯である。多分旨く行きさうだと書いてあつた。また二人の若い同志は、吉良邸の直ぐ近所に雜貨と雜穀を兼ねた小店を開いた。屋敷の小者や女中達がちよい／＼買物に來るやうになつた。幾ら警戒されてゐるにしても、下司の輕い口は乾度と有利な情報を洩らすに相違ないと云ふことも知らせて來た。

併し六月にかゝつた頃から、忠左衛門の手紙には內藏之助の疑惧したものが少しづつ影を落し出した。彼は江戸が再び迫き立つて來たことを報じた。直接の原因は、吉良上野介が息子の上杉綱憲の封地である羽後の米澤に退隱するかも知れぬと云ふ噂が傳はつたからである。これは今までも彼を極力保護して來た上杉家が、最も安全な避難所に移さうとするに外ならなかつた。さうなつては一大事であるから、是非この前にやつつけなければならぬ。この上議論づいてゐたに、鳥は手の屆かぬ空に飛んで仕舞ふと彼等は云ふのである。忠左衛門も、それが事實とすれば今度こそは困たことには

出來まいから、内藏之助にもその積りで考慮して貰ひ度い、と書いて來た。

『米澤に。――ふむ、米澤に。――』

内藏之助は愼重に忠左衞門の手紙を繰り返した。而してその文字に逢着する度に、彼の胸はひそかに怪しく慄えた。若しこの遠隔の地に、誰も氣のつかないうちに、上野介が退隱して仕舞つたとするならば。――一歩進んで、それよりも遠い、無邊際に遠い別世界に、不圖自然に消滅したとするならば。――事情はどう變化するであらう。内藏之助は思ふべからざる事を思つた人の樣で、あはてゝ揉み消さうとしながら、その考は烙印の如く胸裏から去らなかつた。で、彼は當面の所置に就いては何等の意見も發せず、たゞ退隱の噂の眞僞を知り度いと云ふ返事を出した。すると行き違ひに忠左衞門からまた手紙が屆いて、堀部安兵衞が上洛した、江戸の目下の事情は彼が詳細に話すであらうと云つて來た。

六月二十九日に安兵衞は京都に到着した。併し直ぐ山科を訪ねようとはしなかつた。彼は一番に大高源五に逢つた。而して内藏之助が忠左衞門の手紙を受け取つて心待にしてゐた頃には、安兵衞は源五と共に大阪に在つて、原總右衞門の傘店の、蒸暑い二階に三人で坐つてゐた。

『米澤行が見合せになつたらしいと云ふのは、必らず間違ひないだらうな。』

總右衞門は、遠來の客の長い報告がとぎれるのを待ち受けて口を開き、その眞僞は何度念を押しても押しきれないよ云ふ風で、相手の日に燒けた精悍な顏を見詰めた。

『それだけは大丈夫です。』安兵衞はきつぱり斷言した。『最初この計畫は彈正大弼と上野介とで目論んだことで、それを家老の千阪が聞いて、そんな事をして上杉家を騷ぎの中に捲き込むやうなことがあつてはならぬと、異議を申立てたた

め、已むなく中止となつたらしいのです。』

『多分それは事實であらうと手前なぞにも考へられます。』源五も持前の、殊に安兵衞の傍では一層物柔らかに見える調子で言葉を挾んだ。『この前の例もあることですから。』

『左樣。反對したとすればそれは刑部だ。あの男だけは、假令上野介が主君の生みの親であらうとも、大事な場合に上杉家と吉良家を混同するやうなことをさせる氣遣ひはない。』

今三人の噂に上つた千阪刑部は、上杉家とは深い血緣のある重臣で、當主の綱憲も彼の言葉だけは無視することが出來なかつた。昨年の秋にも、綱憲は赤穗浪士の復讐から守る手段として、父を白金三光町にある上杉家の下屋敷に匿まつた。庭中に拔穴を作つて、若し浪士等が討入つても遁げ出せる仕掛であつた。併し頓て千阪が江戸詰になると共に、彼は今と同じ反對理由に依つて綱憲を說き、再び上野介を本所の邸に送り返した。源五が前の例もあると云つたのはこの事である。

『幾ら千阪が反對にしろ、二度まで斯う云ふ事があつて見れば、今後とても油斷は出來ません。いや、一刻も猶豫は出來ません。この上愚圖ついてゐるうちには、取り返しのつかぬ事件が突發するのは眼に見えてをります。』

安兵衞を驅り立てて夢中に火の玉のやうに江戸から飛び出させたのはこの一念であつたが、今一つ別に、總右衞門に話すのは憚かられたが、源五だけには同じ年配の心安さから打ち明けた秘密の原因があつた。それは內藏之助から出る補助金に就いてであつた。彼をはじめ江戸の同士の大部分はその金で確かに調法してゐた。それだけ、金さへ當てがつて置けばいつまでもおとなしく待つてゐると思はれるのが口惜しかつた。安兵衞の遮二無二事を急ぎたがる氣持は、一面、この恥辱から脫しようとする焦燥でもあつた。

『吉田はどう云ふ意見かの。』

總右衛門は相手の氣先を制するため、稍話頭を外らした。

『忠左衛門殿は、要するに兵法家です。』安兵衛は、この長老を大膽にもその一句で概括しようとした。『戰をしても理詰の戰で、陣を張り、翼を構へ、十分な兵糧と武器を揃へた上でなければ動くまいとする。併し目下の形勢に取つて必要なものは六韜三略よりは一振の劍だ。十人の孫子(そんし)よりは荊軻、秦舞陽だと、實は出發の前夜にも大に議論を戰はしたわけですが、いよ／＼我々が結束して立つとなれば、結局は反對しないに極まつてをります。』

『忠左衛門殿は、大石殿を除外してやると云ふことが、情に於て忍びないのではないだらうか。』斯う云ひ出したのは源五で、彼は重に安兵衛を相手にする調子で話した。『あの人だけは未だに大石殿に希望をかけてゐられるやうだし、少くとも今の我々ほど見限つてはゐないらしいから。』

『幾らかそんな點もないことはなからう。』

安兵衛も否定しなかつた。たゞ總右衛門だけは、若い二人が想像するやうな、そんな感傷的な理由から、忠左衛門が安兵衛の今度の即行說に同じないのだとは信じなかつた。江戶に立つ前、この二階に殘して行つた彼の言葉に就いて見ても、忠左衛門の希望が眞に何にかかつてゐるかは明瞭であつた。でも總左衛門はその話を其處で打ち明けようとは思はなかつた。それは話しやうでは誤解の起り易い問題であつた。所謂兵法家の苦肉の策であり、謀士の術數であつた。總左衛門にしても、相手が忠左衛門であればこそ、どんな策を弄しても反對しないし、安心して任せて置けるのであるが、自分でやらうとは思はなかつた。寧ろ嫌ひであつた。彼が安兵衛や源五等の若い者と容易に意氣が合ふのも、この公正な、明るい、一本氣に基くに外ならなかつた。

總右衞門が默つてゐるのを見て、安兵衞は何か他の心配と感違ひしたらしく、斯う快活に話し出した。

『なに、今になつてまで二の足を踏むやうな手合は、此方から御免蒙つた方がよい位です。手前は初めから云つてゐる通り、せめて十四五人、場合に依つては五六人でも立派に出來る仕事で、あとは幾らあつても足手纏ひに過ぎない。やつてよければ安兵衞一人斬り込んでも、上野介の白髮首一つ討ち漏しはせぬ積りです。』

『大きく出たな。』總右衞門は相手の廣言を面白がつて笑つた。『併し貴公だけは證明附だから、やつてやれなくもなからうが。——』

『いや、さう申されると、甚だ赤面の至りで。』

安兵衞は子供らしくまごついて黄びらの襟をかき合せながら、併し、證明附たと云はれた一言は大いに嬉しかつたらしく、逞ましい顏に並びのよいまつ白な齒を見せてにこ〳〵した。安兵衞がまだ舊姓の中山氏を名乘つてゐた二十代の頃、高田の馬場で伯父の決闘に助太刀をして、數人の敵を斬り倒したことは有名な挿話であつた。

『兎に角、我々だけが功を私する結果になつてはならない。』總右衞門は警戒を要するのはこの一事だと云ふことを最後に力說した。『いよ〳〵山科を見限れば見限るで、已むを得ない理由を明白にして改めて同志を募るのだ。賛成の意志ある者は、一人も漏らさず糾合するだけの手順を踏んだ上でやるならば、總右衞門と雖も諸君の驥尾に附することを敢えて辭さない。』

『御注意の點は申すまでもない事です。』安兵衞は總右衞門の承諾に對して誓言するやうに答へた。『我々が忍び難きを忍んで今日まで待つたのも、云はゞ拔け駈けの功名を避けるために外ならなかつたのです。——でなくして、ただ目的を達すればいゝのたら、どんな方法でも取れたのだ、と實は大高とも話したやうな次第です。』

源五も友の言葉についてそれを敷衍した。

『その時斯んな話も出たのです。山科と分離して事を擧げるとしても、我々で功を私するのではなく、功名の目的が一つに分たれるまでだ。詰まるところ、山科連は大學樣に依つて社稷を恢復しようとする。こちらは仇討専門でやつて行く。どちらが先に成就しようと功は同じで、恨みつこはない譯だと。』

『なにしろ、その大學樣が長い大學樣だからな。』

その時三人は三人だけにわかる滑稽感から顔を見合せて笑つた。

安兵衛の上京と彼の企は頓て反對派の方にも傳はつて來た。何か生ずる度に一番に甥の樣子を探りに來る小山源五左衛門は、この時も早速内藏之助を訪ねて例の茶室に坐り込んだ。

『堀部のことならば、吉田から知らせて來てゐます。』

その報告を内藏之助が別に驚かなかつたので、叔父ははづみ抜けの形で、幾らか不平で云つた。

『何だ。知つてゐたのか。――ぢや、あの男の目論んでゐることも勿論心得てゐるのだな。』

『えゝ。』

『それも忠左衛門から知らせてよこしたのか。』

『いや。一昨日でしたか、ちよつと他から聞き込んだのです。』

『幾らあの男が圖太くも、眞逆自分で此處へやつて來て、これ／＼だとも云へまいて。』

源五左衛門は、どんな話の間にでも必ず一滴落さなければ承知しない毒を舌の先からしたたらせた後、その餘滴を忠

左衛門に注いだ。

『それにしても吉田が委しい通知を寄越さないのはどうしたのだ。堀部が何の用事で飛び出して來たか分らない筈はなからうに。――本統に知らなかつたのなら迂濶千萬ぢやないか。そんな事をさせないためにこそあの男をわざ〳〵江戸にもやつてゐるのに、高い金を使つて何をしてゐるか譯が分らぬ。』

最初堀部の劃策が耳に入つた時は、内藏之助にも叔父の非難に類する感情が生じないではなかつた。にも拘はらず、彼の善良と大まかな氣持が、それ等の過程を極く素直に解釋させた。安兵衛は巧妙に目的を隱して來たのだ。でなければ、上京後何かの原因で俄かに硬化したのかも知れない。それ故、訪ね度くも訪ねて來られなくなり、多分忠左衛門から托されたであらう種々な傳言も通じることが出來ないのだと。――内藏之助はそれに就て怒つたり、今後の成行を心配したりするよりは、その問題を叔父とそんな調子で話すことの厭はしさに堪へられなかつた。彼は段々不機嫌になり、それをいつになく隱さうともしないで、素つ氣なくむつちりしてゐた。併し叔父はそれ位でひるみはしなかつた。

『おれに云はすれば、奴等がやるならやらせて見るがいゝと思ふ。』源五左衛門は所謂奴等がその座に居て聞いてゐるかの如く、挑戰的な口調で續けた。『決して待ての中止しろのと云つてはならぬ。氣振にもそんな樣子を見せれば、奴等は一層増長する。打つちやつて置くに限る。いつも話す通り、先方には上杉と云ふものがついてゐる以上、どんな場合だつて大事な親を五人十人の素浪人に暗々と打たせて置くものか。誰が考へても明白な勝負だ。――假令萬が一にも奴等の我無差羅が効を奏したところで、何もひけ目を感ずることはない。我々は大學樣を世にお出し申すと云ふ大役を控えてゐる。まだ閉門の御赦免さへないのに淺墓な企を起して、そのため御前途を誤つてはならぬから加はれないと云へばそれでよい。これは口實ではない、大義名分だ。のう、左樣ではないか。』

叔父がひとりで雄辯にまくし立ててゐる間、內藏之助は頑固に默り續けた。彼は俯向いて、爐を塞いだ後の小さい眞四角な疊を見詰めてゐた。叔父と話すのが厭であつたばかりでなく、內藏之助は叔父の顏が見度くなかつた。彼は知つてゐた。叔父がどんな眼の動かし方で、頸のしやくり方で話してゐるか。――お互ひの腹は分つてゐるのだから、まあ落ちついて旨くやることだ。――それは罪の仲間が共犯者に投げかける合圖に外ならなかつた。同時に、內藏之助がその激しい嫌惡にも拘はらず、いつとなしに叔父の暗示にかゝるのは斯んな場合であつた。

內藏之助は急に顏を擧げた。彼は危險を知つてゐた。而して今日だけは彼の術中に陷るまいとして口を開いた。

『兎に角今度のことに就いては今少し考へさして頂きませう。よく研究した上で徐ろに對策を講じても遲くはないのですから。』

『何も考へ込む程のことではないぢやないか。』叔父は追求した。『問題は極めて簡單だ。奴等は別行動を取らうとしてゐる。結構だからやらせて見ろ。決して手も口も出すなと云つてゐるまでのことだ。』

『併し、その噂がどの程度まで本統か、またどんな事情が彼等の態度を急に變化させたか、私としては眞相を確かめる必要があります。都合に依つては、堀部に逢つてもよいと考へてゐるのです。』

『何、堀部に逢ふ。』源五左衛門は愕然として叫ぶやうに云つた。而して一瞬間呆れて甥の顏を見詰めてゐるうちに、彼の驚は怒に、それから意地の惡い嘲に變つて行つた。『併しお前が逢はうとしても堀部の方で御免を蒙ると云ふだらうよ。乾度さう云ひ兼ねない。また奴等が今度のやうなことを目論んだ譯が本統に分らないのなら、おれが云つて聞かせるが、奴等はお前を、詰まり我々を見くびつて馬鹿にしてゐるのだ。もう相手にしない氣なのだ。これ程明白に踏みつけられても、まだお前は何か奴等に逢はねばならぬ用事があるのか。』

内藏之助は返事をしなかつた。併し、逢へばたつた一つの用事だと彼は思つた。叔父の云ふ如く彼等の方で避けたとしても、その用事だけはなくならないであらう。――内藏之助は何もかも打明けて仕舞ひたかつた。自分の正直な氣持を。その變化を。復讐の遲延の眞の理由を。――それが出來ないとしても、せめてこれだけは云ひたかつた。――如何なる輕蔑も甘んじて受けよう。見放されても仕方はない。ただ、自分をこの叔父と仲間扱にだけはして呉れるな。――と。

その晩のことであつた。既に蚊帳の中に入りながら、何か考へごとでもしてゐるやうに、いつまでも團扇の音をさせてゐた妻は、やがてその手を留め、靜かに起き直つて、隣の夫に呼びかけた。

『あなた。』

『何だ。』

内藏之助も眠つてゐなかつた。彼は溜塗の枕の上で、天井を向いたまゝ答へた。

『江戸から堀部さんが見えてゐるのださうでございますね。』

『うん。』

妻は半分間ほど默つて、それから聞いた。

『お逢ひになりまして。』

『いや、逢はない。』

妻は半分間ほどたつた後、再び聞いた。

『家へは入らつしやらないのでございますか。』

今度は内藏之助の方が默つた。

『本統ならば、一番に訪ねて參りさうなものなのに――』

妻が續けかけたので、内藏之助はそれを遮つて、同じく天井を向いたまゝ答へた。

『女はそんな話には口を入れない方がよい。』

『それは仰しやるまでもなく存じてをります。ですから、今日まで幾らお聞きして見度いと思ふことがあつても口に出したことはなかつたのですが、場合に依つては伺ふだけのことは伺つて置かなければ、私の務がすみませんから。』

『それは何のことを云つてゐるのだ。』

『例へば、お召物のやうなものだつて、さあと云つては手が廻り兼ねますもの。他のことを何んにも話して頂かうと申すのではございません。ただそれだけ、どう云ふものがいつ頃要ると云ふことだけ、前以つて仰しやつて頂き度うございます。』

内藏之助はくるりと向むきになつて妻に脊中を向けた。そのことでは賁間叔父から散々惱まされてゐるのに、夜、床の中でまで同じ論判を繰り返されるのは、我慢出來なかつたのである。併し、斯う切り出した以上、妻はいつも云ふだけの事は云はなければ止めなかつた。

『今ですから申しますが、昨年の暮あたりの噂では、多分御一週忌頃だと云ふお話でしたから、その積りで染めるものは染め、縫ふものは縫ふで、すつかり準備をいたしました。あなただつてそれは御承知の筈でございます。尤もあなたは、私が何を染めても縫つても默つて見てゐらつしやるだけで、さう急がないでもよいのだとも、もつと急ぐのだと

も、何んとも仰しやりはいたしませんでした。けれどもあの時もしそれが分つてゐらしたのなら、而して一言さうと仰しやつて頂けたのなら、餘計な小袖を何枚もさう拵へなくともよろしかつたのでございます。でも、今はそんな愚痴を申してゐる譯ではございません。私はどんな時でも愚痴は大嫌ひでございますから。――ただ、そんな譯で今までの支度では夏の役には立たないのですし、萬一暑いうちに江戸表へでもお立ちになるやうでしたらば、私の方でも新しく用意を致さなければ――』

『そんな必要はない。』

内藏之助はこれまで滅多に出したこともない鋭い聲を放つと共に、がばと反ね起きた。彼は妻を睨みつけた。

『でも――』

『いや、要らぬと言へば要らぬ。』

『――』

『――』

人の氣も知らないで。お前は殘酷な女だ。せめて眠る間だけでも、そんな話からおれを遠ざけては呉れられないのか。――日頃無言で、意久地なく溫順な男が、どうかしたはづみでまるで別人のやうにかあ――つと燃え上る、その一種の肝癖を内藏之助は持つてゐたが、丁度それが妻に對する鬱した憤や、堀部等の企に依つて引き起されてゐる心配や、叢間の叔父の不快な訪問や、その他この事件の發生以來彼の心を苦しめてゐる、殊に誰に打ち明けやうもない秘密の懊惱と一緒になつて、自制を失つた。滅茶苦茶な激しい發作に彼を陷れた。宛然生理的に病氣になつたやうに内藏之助は見えた。汗ばんだ顏がまつ青になり、小鼻の横には窪んだ黑い隈が現はれ、唇には色がなかつた。而して眼が坐で

動かなくなつたかの如くその中に凝と据つてゐるのが、枕許の行燈の薄暗い光と、蚊帳の青っぽい陰影のために異様に凄味を帶びて見えた。

　妻は肚胳を拔かれたやうな驚と、一種凄然とした怖を以つて夫を眺めた儘、直ぐには何んとも云ふことが出來なかつた。彼女はこれ程までに逆上した夫をまだ知らなかつた。普通の場合であつたならば、また普通の妻であつたならば、どんな爭論でもこれで終つた筈であつた。併し彼女は强かつた。而して今夜は決心してゐた。

『では、これだけたつた一つお聞かせ下さいまし。堀部さん方が、近いうちに事を起さうとしてゐらつしやると云ふのは本統でございますか。』

『噂が本統なら本統だ。』

　内藏之助はぶつきら棒に、熱湯が一時に水に返つたやうな不思議な落ちつきを取り返して答へた。

『あなた御自身のお見込は。』

『分らない。』

『——』

『寧ろ必要がない。』

『それはまたどう云ふ譯でございませう。』

　妻は厳しく、氣負ひ立つて突つ込んだ。夫の意外な返事が今度は彼女の方を逆上させた。

『彼等は彼等、おれはおれだ。』

　内藏之助は妻の釣り上つた眼を眺めて段々皮肉になつて云つた。

『そんな事をお仰つて、あんな人たちの手で見事仇討がすんだとすれば、あなたの御面目はどうしてお立てになる積りでございます。』

『立つとも。立派に面目は立つ。我々は最初から彼等とは目的が違つてゐるのだから。我々は大學樣を世にお立て申すことが主だ。まだ閉門の御赦免さへないうちに滅多な事をして、御前途を誤つてはならぬから仇討には加はらないのだと――』

自分は何を云つてゐるのだ。――內藏之助は不圖一つの激しい恐怖に口を塞がれた。それは今日叔父が頻りに說き立てゝ行つた、而して自分をあれほど厭嫌させた言葉ではなかつたか。――それがそつくりその儘の自分の言葉となつて無意識に流れ出たことを思ふと、內藏之助は忌々しさを通り越して氣味が惡くなつた。今一度口を開けば、聲まで叔父のしやがれ聲に變つて仕舞ひさうな氣がした。彼は絕望して默り込んだ。妻が何か云はうとするのを打つちやつて、床に打ち倒れ、麻の小布團を顏の上に引きかついだ。

その日から五六日とはたゝなかつた。而して同じく夜であつた。既に堅く鎖した池田家の門を忍びやかに叩くものがあつた。若黨が開けに行つて見ると、吉田忠左衞門の長男で、父の後を追うて江戶へ一緖に行つてゐた澤右衞門が、旅裝束で汗と埃まみれになつて飛び込んで來た。主人と客はその夜いつまでも寢なかつた。明けの日になると、澤右衞門はこれから赤穗へ廻つて江戶に引き返すのだと云つて暇乞をした。

澤右衞門が何か重大な報告を持つて來たことは、彼が立つた後の內藏之助の樣子で想像されたが、果してどんな用事であつたかは、斯んな場合いつもさうであつた通り、家の者にも容易に分らなかつた。併しそれから二三日すると今度

は意外にも今まで一度も姿を見せなかつた、そのために夫妻の論議を引き起した堀部安兵衛が、出し抜けに訪ねて來た。それればかりではなかつた。彼は二度目には急進說と自重說の分裂から足の遠くなつてゐた大高源五を伴つて來た。その時分には事件は關係者の間に明瞭になつてゐた。昨年の時變以來、江戸の下屋敷に蟄居してゐた大學の運命が決定したのである。彼は閉門を免され、知行を奪はれた上、淺野の宗家に當る松平安藝守に預けられることになつた。これは大學の前途を暗黑にしたと共に、彼に依つて主家の再興を圖ることを根據としてゐた自重說を根柢から覆すものであり、內藏之助自身から云へば、吉田忠左衛門を江戸に下す場合に與へた聲明の履行期が、今日まで辛くも避けて來たものが、終に到來したことであつた。安兵衛と源五の訪問は、この意味で彼には運命の正式な、素早い通告に外ならなかつた。

併しこのことが小山源五左衛門の耳に達した時、叔父は怒つて甥を訪ねた。

『何と云ふ圖太い奴等だ。』彼は行きなりさう云つて彼等を攻擊した。『我々を出し拔くやうなことを目論んで置きながか、斯うなつたからと云つて平氣で飛び込んで來られる義理か。おれなら門前拂ひを喰はしてやる。お前は寛大すぎるから、奴等が嘗めてかかつてゐるのだ。』

『併し、あの連中は正直な立派な態度でやつて來たのです。』內藏之助は明かに辯護しながら叔父に答へた。『此方に當分意志がないと見たから、違約の罪を犯して自分等だけで事を起さうとしたのだが、今となつてはその必要はない筈だ。今日までの事は水に流して一緒にやらして貰ひ度いと云ふのです。』

『蟲のいゝ話だ。家を建てかけたが材木が足りない。買はうにも金がないで、困つて思ひついてゐたところへ隣が火事で燒けた。丁度いゝ幸ひだから、一緒に建てゝ呉れと云ふやうなものだ。お前ならその時どうする。』

『進てゝやるのが本統です。約束がしてあつた以上は。』

『約束ならその前にも一度してあつた。御一周忌までにはどうにかすると云ふ約束が。――さうぢやなかつたか。併し我々はそれを取り消した。だから今度だつて事情に依つては取消されない筈はない。』

叔父の言葉は一本の釘のやうに内藏之助を貫いた。本統を云へば、既に觀念して、素直に運命に從はうとしてゐる彼の胸にも、同じ考が時折忍び込んで來ないことはなかつた。併しこの時の内藏之助には、誘惑そのものよりも、それが叔父の口を通して現はれることが危險であつた。

『一體どんなことになつたのだ。』

内藏之助が話をつがなかつたので、叔父は自分で續けた。

『明日圓山で一度集まつた上で　最後の方針を極めようと云ふのです。』

『勿論お前も出るのだな。』

『私は主催者です。』

内藏之助はわざときつぱり云ひ切つた。これは弱い心を見透かされまいとして、同時に決して出席しないであらう叔父への反撥心もあつた單なる誇張にすぎなかつたが、その不自然な調子が隱さうとした以上のものを露骨に出した。彼は自分の已むを得ない役割に對して、怒つて、肝癪を起してゐるかの如く聞こえた。内藏之助は自分で自分の聲にまごついた。

叔父は斯んな時白ばくれることの下手な甥を寧ろ滿足さうに眺めた。鳥は狩り出された。併し火蓋を切る前に十分覗ひを極めようとするやうに、容易に口を開かなかつた。内藏之助の方でも今度は用心して滅多なことは云ふまいとしてゐ

た。二人は何度も傍まで押しつけられながら、お互ひに今日まで危く避けて來たものに、とうとうぶつ突かつたことを感じてゐた。

『さう云ふ話だとすれば、一つ遠慮なしに聞いて見度いが、』終に叔父からきり出した。『内藏之助、お前は本統にやる氣があるのか。』

内藏之助は返事が出來なかつた。この最も簡單な質問ほど、彼に取つて複雜な答辯を要するものはなかつた。叔父も强ひて求めようとはしないで、自分の言葉を續けた。

『それならば何も云ふことはない、お前の勝手にするがいゝが、その積りでもなく奴等に舁ぎ上げられて仕舞つたのなら愚の極だとおれは思ふ。いつぞやも話した通り、幾ら口で立派な旗印をあげたところで、奴等の腹の底は見え透いてゐる。あれで金でもあるか、新しく主取でも出來て安穩に暮らせる見込がたてば、誰が何をするものか。世の中を渡るには如何なる場合にも他人は他人、おれはおれと云ふ決心を失つてはならぬ。他人が病氣になつたからと云つて、自分までなるには及ばないと同じた。お前は奴等のやうに貧乏ではない。また何處かへ御奉公でもする氣なら、立派な傳手は幾らでもある。それよりもこのまゝ此處に住みついた方が氣樂だと考へればそれも自由だ。思ふまゝに悠々と半生を樂しむことが出來るのに、何を好んで奴等の盲動に加はる必要があらう。おれなら、去年からこれまでに拵へ上げた庭一つを考へただけでも、到底そんな氣持にはなれない。』

叔父は陷穽の掛け場所をちやんと知つてゐた。斯う云つて甥の心を引きつけさうなものを見せびらかしてゐる間、彼のぎよろつとした灰がゝつた眼には、自信のある、奇棘な、何處か唆かしの籠つた、丁度催眠術師の凝視に似たものが現はれてゐた。

内藏之助は自然の警戒を以つて、叔父の視線に曝らされまいとした。而かも彼の反向けた顔の前には、叔父の指摘した庭が、わざと明けた障子の間を通して、低い土塀の向に、既に秋らしい風情を見せて奥深く續いてゐた。何故と云ふこととなく、寧ろ叔父の一言のために、その上から眼を轉ずることが出來なかつた。ちつと見てゐると、馴れ切つた珍らしくもない筈の自分の庭が、これまでにない別趣の魅力と價値を以つて横たはつてゐるやうな氣がした。

叔父は甥の様子で自分の力の反應を確かめて安心したかの如く、今度は問題を變へて、内藏之助の保管金がまだどの位殘つてゐるかを尋ねた。内藏之助は云ひ度くなかつた。どんな不快な話でも、叔父と金に就いて話すほど不快ではないのを彼は知つてゐた。にも拘らず、矢張り拒絶することが出來なかつた。で、心覺えの額だけを打ち明けると、冷淡につけ加へた。

『多分その位だと思ひます。案外に使つて、幾らもないのです。』

『いや、そんなどころぢやない。』叔父は却つて多かつたのに驚いたらしかつた。『それだけ殘つてゐれば大したものだ。奴等が何とか云ひながらお前を取り逼すまいとするのも無理はないつて。』

内藏之助はその時はじめて隱さず顔をしかめた。話が豫想通りになりかけた。殊に叔父は、彼等の眞の目的は内藏之助自身ではなく、その保管金にあるのだと云ふことを、これまで力説してゐたのである。

『覗つてゐるものがなくて、どうして今日まで持つてゐられるのか。』叔父はその時も斯う斷言しながら、『だから此方もその積りで、幾ら欲しがつたつて奴等の勝手にはさせない、と云ふ氣でゐなければ駄目だ。さうとも。その決心で握つてゐるものさへしつかり握つて放さなければ、今後のことはどうにでも出來る。大學樣の一件だつてさうだ。おれはもれで萬事終つたとは思つてゐない。これからの運動一つではまだどんな芽が吹かぬとも限らないし、それ[illegible]

つものはこれだからな。』叔父は親指と人差指で商人のするやうな符牒を拵へて見せた。『元來があの金と云ふものは、その目的で取り殘したのだから、他の事に一文だつて出す必要はなかつたのだ。これまで何とか云つては奴等に絞り取られたのが、おれに云はせれば馬鹿々々しい話で、——』

『いや、それは間違つてゐませう。』この時まで、胃弱性の胃液のやうに胸元にたまつてゐた厭惡を、内藏之助は我慢することが出來なかつた。『あの金は決して大學樣のためにのみ殘したのではございません。口實は兎に角として、重なる目的は正しく復讐の準備金であつたことは、あなただつて御存じの筈でございます。ですから本統を云へば、あの金が今まで私の手許に殘つてをるべきではなかつたので、それが殘つてゐるのは、私が意久地がなかつたからです。復讐問題の起る度に、いゝ加減な嘘をついて避けてゐたからでございます。』

叔父は切腹した内匠頭が、不意に生き返つたと聞いても斯うは驚くまいと思ふ驚愕をその顏に刻みつけたまゝ、甥を見据へた。彼は、何か生理的の變化でも頭の中に起つたのでなければ、甥が斯んなことを云ひ出す筈はないと思ふやうに、やつとものを云ふ餘裕を取り戻すと、その疑を口に上せた。

『内藏之助、お前は氣でも狂つたのか。』

『————』

内藏之助にしても、その時そんな事まで口走るつもりはなかつた。自分自身でも氣がつかない間に、言葉が不思議な彈條ではじき出されたに過ぎなかつた。と、その無意識な告白は、今日まで彼の心に瓦斯のやうに壓搾されて、あらゆる機會に彼を惱ましてゐた秘密の苦悶に對して、一つの瓣の作用をつとめた。彼は不意に、異常な決心を以つてすべてを打ち明けようとした。

「斯うなつた以上隠さず申し上げますが、私が今日まで復讐を延ばして參つたのは、口で標榜してゐた如く、大學樣の御前途を見屆けるためでは決してございませんでした。勿論よい御運の開けるやう、お互に出來るだけの手を盡したのは事實ですが、何かした程熱心ではなかつたので、と云つて臆病や卑怯からでもなく、云はば極く身勝手な、誰にも分らない我儘な氣持で愚圖々々してゐただけの事でございます。それを大學樣にかこつけて、都合よく胡魔化してゐたに過ぎません。大學樣御自身には元より、先君に對しても、同志の者にも、申譯のない仕儀でございます。で、今後も叔父さんは大學樣に希望を捨てないと仰しやるならばそれも一法で、またそのために復讐に加擔するのは御免だと仰しやつても、あなただけの條理は立つ譯ですから何とも批評はいたしますまい。併し、私としてはさうは參らないのです。――これまでのことを正直に申せば、私は自分と云ふものを立て通し得なかつた。何んとか思つても云つても、あなたに誘はれると知らず〳〵あなたの考へ通りに從はされてまいつたのですが、今度だけは決心を變へない積りでございます。叔父さんも、ですから、これ以上は何とも仰しやらないで頂き度い。それに依つて私は今日までの不信實を償ふと共に、武士としての、人間としての面目を取り戻すことが出來るのでございます。」

半分夢中で、言葉を驅使すると云ふよりは言葉に驅使されながら、内藏之助は曾てない晴々しさと滿足を以て云ひ續けた。併し彼の悅は、その告白に依つて所謂武士としての、人間としての面目が取り戻されるためではなかつた。彼はただ叔父と手を切つたこと、あの灰色の凝視を以後は決して浴びないですむこと、其處に發する恳はしい壓力から初めて自由になつたことが、この上なく嬉しかつたのである。

明けの日、重同頭の廣庭敷には約二十人の同志が集まつた。大部分は附近にゐた急進派で、目星派には[illegible]が

現はれたが、殊に山科組は內藏之助を除く外、小山も進藤も姿を見せなかつた。會衆はこれ等の裏切者に對して割に無關心を裝つた。一つは同志間には親子があり、叔父甥があり、從兄弟同士があると云ふ風で、血族一致して加はつてゐる者が多い中に、內藏之助の一族からは同姓の瀨左衛門と云ふ老人がたつた一人出席しただけで、有力な叔父や從弟が揃つて裏切仲間に入つたことに對する一同の愼ましい遠慮であつた。內藏之助にはこの同情が後めたかつた。それはその事實をそれ程に恥ぢてゐたためではなく、反對に、彼等の背離は當然すぎることとして、咎め立てをする氣にもならない位冷淡になつてゐたからであつた。同じ氣持は會合そのものに對しても働いてゐた。前日叔父にぶつつかつた時には、原因は何であつたにしても、強い、燃え立つものが復讐問題に就いても積極的な宣言をさせたのであるが、叔父と別れたと同時に火は消えた。少くとも今の內藏之助には、復讐は熱情ではなく、單に義務であり、責任であり、運命との約束であるに過ぎなかつた。さうだ。今日の會合も亦約束だ。で、それを破らないために忠實に出席したまでゞあつた。この冷淡は、以前から自分の位置を濫用しない、彼の愼ましい性情に裏づけられて不自然には見えなかつた。而して內藏之助はどんな相談になつても決して反對しまい、皆んなの好きなやうにさせればよいのだ、と思つてゐた。事實この仕事は彼等の仕事であり、自分は統領の名前を貸してゐるに過ぎない。而かも不都合な統領で、今になつて彼等に指圖がましいことをする權能はないと信じてゐた。で、議事は重に總右衛門、安兵衛、源五等の發言と提案で滑らかに進行した。

『結構です、結構です。』

その間上座に、床柱を控えて鷹揚に坐つた內藏之助は、柔和な微笑で、何を云はれてもこの一語を繰り返した。

お齋前から始まつた會合は夜に入つてまで續いた。復讐の最後の決議と共にそれに關する細目の打ち合せが悉く無事

に終了した時には、老人連はこれでやつと死なないうちに本望が達せられると云つて滿足し、若い者は若い者で、早くも敵の首を上げたかの如く勇み立つた。前祝の心と、今日の目出度い決定を報ずるために、夜の明けるのを待つて直ぐにも江戸表へ立たうとしてゐる安兵衛の行を壯んにする意味で、酒宴が開かれた。人々は深い悦と一緒に深い感慨を以つて杯を取交した。皆んなで内藏之助を取り圍んで斯んな氣持で酒でも飲むと云ふのは、幾月ぶりのことか知れなかつた。殊に急進派の連中に取つては、四五日前までは夢想だもし得なかつたことであつたから、彼等の歡喜は、頓て段々廻つて來た快い醉に連れて、ます／＼高まつた。淺野家の流儀の喜多流を長く嗜んで、謠にも拍子にも精通してゐた一人の老人は、その時「羅生門」の小謠をうたひ出した。頼光の四天王が春雨の夕に酒を汲んで頼みある友情を讃美すると云ふその一節は、武士達の酒宴によく謠はれる平凡な小謠であつたが、時に取つて相應はしかつたので、一座は強い感動を以つて耳傾けた。と、今度は原總右衛門が彼に地を頼んで立ち上り「小袖曾我」のキリを舞つた。一座は感動を新たにした。舞ひ終つた總右衛門が、扇子をたたんで、座に歸つたのを見ると、彼のすぐ傍に坐つてゐた大石瀬左衛門が突然内藏之助に向つて聲をかけた。

『内藏之助殿も久しぶりに一つ如何で。』

『いや、どういたして。』

内藏之助は周章てて辭現した。併し血緣の親しみで無邪氣に持ち出された老人の所望は、忽ち一座の願望となつた。彼等は内藏之助が謠でも仕舞でも前の二人に劣らず堪能であり、以前は斯んな場合には氣輕に謠つたり舞つたりしたのを知つてゐた。

『またとないことですから是非どうか。』

さう熱心に勸めた人々中には、織田信長が今川氏を討つ時、幸若の「敦盛」を舞つた話まで持ち出して、この席上で內藏之助に何か一とさし舞つて貰ふことは、今宵の酒宴を一層有意義にするものだと信じてゐるらしかつた。總右衞門達はまた總右衞門達で、二人で露拂ひをしたのだから、横綱が出てくれなければ納まりがつかないと云つた。併し內藏之助はどちらにも頑固に手を振つた。

『幾ら云つても無理だ。斯う醉つてゐては聲が出ない。』

『ではお立ち下さればなほ結構で。』總右衞門も久しぶりに快く醉つてゐるので、いつになくしつこかつた。『御不足でも手前共で地を勤めませう。』

『ます〳〵困るな。――どちらにしても今夜だけは御容赦を願ひたい。賴む。』

內藏之助は自分の拒絕で一座の興を殺ぐのを怖れながら、なんにもする氣にはなれなかつた。口で云ふほど醉つてゐるのでもなかつた。いつまで杯を重ねても、今夜の酒の味は徒らに舌を刺すのみであつた。內藏之助は朱塗の大燭台をともし連ねた廣間で、人々の笑聲と歡語に取り捲かれながら、ただ一人空山の洞に坐してゐるより淋しかつた。その寂寥と孤獨が何處から生じたかは、彼自身にも分らなかつた。仲間の者たちが最初の決心を搖がさず、今漸く目的に近づかうとして卒直な悅で夢中になつてゐるのが、自分の迷執の多い心に比べて羨ましかつたのかも知れなかつた。さうでないとは云へなかつた。而かも決してそれのみではなかつた。內藏之助は膳の周りに集まつた杯を返すのをも忘れ、茫然と悲しげな面持で、前の燭台の黃色く伸び上る焰を凝と見詰めてゐた。

內藏之助は朝になつて山科に歸つた。妻は相變らずきちんとして、でも、いつもよりはずつと愛想よく夫を迎へた。

半月前の苦しい一夜以來、氣むづかしく神經質になつてゐた彼女は、この頃の形勢で望を取り戻すと共に、夫に對しても、償の意味で出來るだけ優しく機嫌を取らうとしてゐたので、何分からまつ直ぐに家に歸らなかつた不平なぞは素振にも見せはしなかつた。

『昨日は如何でございました。』

『うむ。』

『皆さんお集まりでございましたか。』

『うむ。』

妻は着換に手傳ひながらそれのみを問かうとした。内藏之助が例の調子ではづみのない返事をしても、挑みはしなかつた。着換がすんで夫が居間に引き取ると、彼女は茶道具を用意してその後に從つた。

『それで、』彼女は程よい湯加減で一杯の香ばしい茶を拵へてから、再び同じ話題を持ち出した『あちらへお立ちになるのはいつ時分でございませうか。』

『まだはつきり分らない。』

内藏之助はそれよりも茶の味の方へ心を引かれる、と云ふ風な答へぶりをした。

『幾らなんでも十日や二十日の猶豫はございますのでせうね。』

『あるとも。』

『それまでには間に合せなければならないものが、色々とございますものですから。』夫の時の旅支度に就いてあれこれと女らしい思案に耽けるかのやうに、彼女は暫く默つてゐたが、その後で急に改まつた調子で言葉をついだ『實はこの

間から早く御相談申し上げたいと存じて居りましたのですが、松之亟のことでございます。』
『松之亟がどうした。』
『江戸へお連れになる前に、元服だけもすませて置いては如何でございませう。』
『――』
張板の上に載せた薄い絹の一端が急に引つ張られたかのやうに、内藏之助の胸はいびつになつた。復讐期の決定と共に乾度現はれるに相違ないと怖れたものが、口火を切つたのである。併し、その方が江戸に行つた後も萬事好都合だと云ふ意味を妻が續けてゐる間に、彼はやつと落ち着きを取り返し、何氣ない、呆けた口調で遮つた。
『お前は何を云ひ出したのだ。――松之亟が江戸へ何しに行く。』
『――』
妻は今自分の聽覺に感じた言葉を、夫の口が眞に發したかどうかを疑ふやうに、彼を見守つた。
『おれは松之亟を江戸へ連れて行かうなどとこれまで考へたこともなければ、云つた覺えもない。』
云はれて見れば、長男の進退に就いて夫婦は何も話し合つた譯ではなかつた。寧ろ彼女に取つては相談の餘地さへない極まり切つた事實であり、武士の子と生れついた身にこれほどの名譽はない筈であり、同時に彼の名譽は父の名譽を一倍するものであるとして確信してゐたのであるから、夫の否定の意味を解することが出來なかつた。
『でも、どうしてお連れにならないのでございます。私はいつでもお伴がさせられるやうに支度をいたしてをります。』
『幾らその積りでゐたところで、あんな子供がどうなるものか。』
『松之亟は子供ではございません。あれはもう十五でございます。』

『だから子供だ。』

『他の十五の子供とは違ひます。脊丈だけでも普通の大人よりは二三寸も高い位ですし、あれで元服でもさせれば立派な一人前の若者でございます。』

『姿ばかり大きくとも、子供は子供だ。』

内藏之助は何處までも此の論據で押し切つた。殊に同盟のうちには、二十年以下の者はたつた一人、十七になる矢頭石衛門七が加はつてゐるだけで、それも加盟してゐた父親が病死のため、身替として、例外を以つて入れられたのだから、十五の子供は問題にならない。却つて足手纏ひで同志の迷惑になる位なものだ。――内藏之助は斯う云つた。この云ひ譯はその場で思ひついたことで、而してその言葉を彼は誰よりも自分自身が信じ込まうとした。この確信のみが、十五の子供を死から救ふことが出來るのだと思つた。彼は、息子を殺したくなかつたのである。自分の運命は運命として、たつた十五年しか生きてゐない若い生命まで、一緒にむざ／＼滅ぼさなければならない筈はない。若しそれが武士の道でないならば、彼は百姓として生きてもよい。鍬や鋤は腰の大小が強ひるやうな辛い道徳は強ひはしない。一家の口を糊するに足る田畑と、一棟の茅屋と、その片隅の花畑と、幾らかの書物と、それで晴耕雨讀の生涯を樂しむことが出來るならば、千石二千石の武士は愚か、生中の國守大名も彼の幸福に及びはしない。――併しこの隠された氣持は、復讐問題に對する今日までの内藏之助の苦しい躊躇が分らなかつたと同樣に、彼の妻に分かる筈はなかつた。彼女の健全な、硬い武士道的情操からすれば、武士の子は蜂の子がどんなに小さくても蜂であると同じ意味に於て、假令一歳であつても立派に武士であつたし、また武士でなければならなかつた。それ故松之丞が十五であることが、決して加盟の妨にはならなかつた。他に十五の子供がゐなければゐないほど、息子の名譽は增す譯であつた。殊に十七の

他の若者のために作られた例外が、たつた二つ年下の、分けても城代家老の嫡男のために作られない筈はなかつた。

でもこの時の内藏之助の態度には、これ等の抗辯を正面から發することを許さないやうな、嚴しい決心が現はれてゐたので、妻は道を變へて云つた。

『さう仰しやればですが、松之亟は自分ではもう同盟に入つたものと極めて悅び切つてゐますのでから、お作が出來ないと分れば、どんなに落膽いたしますか知れません。』

『諦めさせるのだ。』

『さあ、おとなしく諦めて吳れればよろしうございますが。──あんな性分ですから。』容易には聞き入れまいと云ふ意味を語調に見せながら、急に思ひついたやうに、『丁度よい折ですから此處へ呼びませう。あなたからよく申聞かせて下さいまし。松之亟にしても、一應自分の心持だけは聞いて頂きたいだらうと思ひます。』

内藏之助は出來たら止めたかつた。が、云つた時には妻はもう立ちかけてゐた。而して廊下へ出て、

『松之亟、松之亟。』

と、いつもの肝持らしい調子で呼んだと思ふと、鍵の手になつた長男の部屋から、丁度聲變りの途中の少年が持つてゐる、大人でもなければ、子供でもない、ぼつとりとした聲がそれに應じた。母は自分よりたしかに一尺は高い息子を引き連れて部屋に戻つて來た。

『あの、江戸のお作のことだけれどもね、松之亟、』彼女は息子がその場の空氣を直ぐ感じて、きちんと改まつて下手に坐つたのを見て始めた。『お父樣のお話だと、中々むづかしいらしいのですよ。十五やそこいらでは却つて足手纏ひだ

と仰しやるのですから。――それでもどうにかしてお伴がし度いと思ふならば、今一度お前の決心のほどをお話して、よくお願ひ申して御覧なさい。』

『お父樣、私もお連れになつて下さい。皆樣のお邪魔になるやうなことは決していたさない積りです。』

松之亟は兩手をついて、綺麗に取り上げた前髮の頭を正面の父に向つて下げた。

内藏之助は妻の張つた網にうま／＼と引つかつた。彼女が息子を呼んで來たのは、決して夫に云ひ聞かせて貰はうとしたのではなく、却つて松之亟から今一度直接に訴へさせようとしたに外ならなかつたから。これは松之亟に取つても何よりの機會であつた。彼は今度の事が起ると共に、自分の熱心な願望を父に打ち明けたくてならなかつた。併しこの數日の父は急を聞いて集まつた同志や、あらゆる關係の訪問客のために、朝から晩まで暇がなかつた。さうでない時には外の用事で家にゐなかつた。正直に云へば客の合間や、外出の送り迎への時に、何か話したさうな樣子で近寄つた彼を、父の方で避けた點がないではなかつた。内藏之助はその度に無意識に忙しさうに、取つ付き場のない、むづかしい顏をした。松之亟が今は邪魔しては惡いのだと思ひ、一つは父の嚴しい態度に對する子供らしい氣おくれから、口に出せないで引つ込むのを見るとほつとした。彼は本統は息子を追つ拂つたのではなかつた。で、今さうやつて自分の前に兩手をついてかしこまつてゐる彼を見ると、あれほど追つ拂はう／＼とした怖ろしいものに、秘にぴつたり追ひ詰められたのを感じた。

『松之亟、』父はどうにかして今一度それを押し除けようとするかのやうに、重い說得の調子ではじめた。『お父さんがお前に止めた方がよいと云ふのは、皆んなの足手纏ひだと云ふそんな簡單な理由ばかりではない。勿論その心配もないことはないのだが、それよりも他にいろ／＼譯がある。――お前は何んでも仇討さへすればよい。それが一番の忠義

で、それより外にすることはないやうに思つてゐるのだらうが、必しもさうとは云へない。人間は一人々々の顔が變つてゐるやうに、ものの考へ方や行ひも一樣には行かないし、また同じ樣にし度くもめい〳〵の事情で許されない場合もある。仇討が一番の忠義だからと云つて誰も彼も仇討をしなければならない譯ではない。現に今度でも同盟を脫した人が少くないし、小山の叔父や進藤の叔父も實はその組だが、それにはそれ〳〵の理由があるのだと思ふから、お父さんは驚きもしなければ、別に非難もしない。――』內藏之助はちよつと行き詰まり、咽喉に本統に何かが引つかかつたやうに、苦しさうな空咳を二つした。非難されるなら、自分こそまつ先にされてよいのだ。――彼は眼の前の妻子(つまこ)に胸の底を覗き込まれてゐる氣がした。『そんな譯で、お父さんはこの問題は誰に對しても極く自由に取り扱ひ度いと考へて居るし、またそれが本統だと信じて居る。殊にお前はまだ子供だから、今度のことは大人に委せて置いた方がよい。それで不名譽でもなければ、不忠にもなりはしない。先刻お母さんに話したが、例外として入れた矢頭の悴でも十七にはなつてゐるので、お前のやうな子供を誰も當にしてゐるものはないのだから。――』

松之亟は母と共に默つて、でも母の解せない不滿らしい顔とは反對に、如何にも父を信じ込んで、自分を連れて行くまいとしてゐることだけは非道いけれども、その他は何を云つても父の意見であれば正しいと極めてゐるかのやうに、しほらしい眞面目さで耳傾けてゐたが、父の最後の言葉――お前のやうな子供を當にしてゐるものは一人もない、と云ふ一句を聞きつけると、突然口を開いた。――

『お父樣、それでも殿樣だけは私を當にしてゐらつしやると思ひます。』

內藏之助は不意に何かからどしんと突き倒された感じがした。而して倒れながら、自分を倒したものをおづ〳〵と見上げるやうな心持で、彼は息子を眺めた。松之亟は父の驚には大して注意も拂はないで、續けた。――

『お父樣も覺えてゐらつしやるでせう。私が八つで初めてお目見えをいたしました時、殿樣から御馬を頂戴したことを。——あの時殿樣は、松之丞は何が一番好きかとお聞きになりました。馬が一番好きでございますと申したら、それでは一つ馬をやらうかなと仰しやいました。でも、私は直ぐあんな立派な月毛を下さるのだとは思ひもよらなかつたのに、本統にお厩から屆けて來たので喫驚しました。何んといふいゝ殿樣だらうと思ひました。あれから私は殿樣が大好きになつたのです。この事は一生忘れまいと考へました。去年の御最期の後にお父樣方の復讐の噂を聞いた時でも、何より先にあの馬のことが頭に浮びました。私はまだ小さいけれども、あの馬の御恩返しに、屹度皆んなに負けないで仇を討つて見せます、と心で殿樣と堅くお約束をしてあるのでございます。』

斯んな無邪氣な動機から復讐に加はらうとするものが他に誰かあるだらうか。——併し彼自身はそんなことは夢にも思はなかつた。彼は一生懸命であつた。その淺黑い、が、肌理がまだ荒れてゐないので娘のやうに滑かな顏は、純な感動で生き〳〵と赤くなり、母親似の切れ上つた涼しい黑瞳には少年らしい決心と率直さが溢れてゐた。而して如何にも晴れ〳〵と樂しげに見えた。七年前に貰つた一匹の月毛のために、今潔く身を捨てると云ふことが。——內藏之助は凝とそれを眺めてゐると、熱い潮のやうなものが胸の底から突き上げて來るのを感じた。彼はこの瞬間ほど自分の十五の息子をいぢらしく、可愛く思つたことはなかつた。またこの瞬間ほど自分の今日までの不決斷と逡巡が淺ましく顧られたことはなかつた。どんな理由があつたにしても、此處では理由をなさなかつた。一切の口實と胡麻化しが、彼を救はうとしたことでさへ、この可憐な決意の前には醜惡に見えた。

父が何とも云つて吳れないので、松之丞は切つた言葉を心配さうに控えてゐたが、直ぐ何か非常にいゝことを考へついたやうに、今は嬉しさうににこ〳〵して再び父を呼びかけた。

『お父樣、どうしても十五でいけなければ、私を矢頭と同じに十七にして下さい、皆んなが皆んな私の本統の年齢を知つてをりはしないでせうから。私は矢頭よりはずつと大きいのです。國元で馬の稽古に行つてゐた時分でも、私が大人並の鐙に乘れた後まで、矢頭はまだ短く吊つて乘つてゐた位です。矢頭が十七なら私は十九だと云つても威張れます。ですから――』

併し松之亟はそれ以上自分が矢頭より脊の高い説明を續ける必要はなかつた。

『分つた、松之亟、連れて行く。』

父は潰れた重い聲でそれだけ云つた。もう少し何か云へば、鼻柱に添つて左右の瞼の下まで一杯に漲つてゐるものが、堰を切つて溢れ出すばかりであつた。内藏之助は脣の兩隅を強く引き締めた。併しこのやつと持ち耐へてゐる眼が、彼の承諾に安心して、勇んで部屋を出ようとする息子の姿を見送つて、同じやうにそれを見送つてゐる、而してまた息子に劣らず滿足して上機嫌になつてゐる妻の白々した顔にぶつつかつた時、彼の心は寂しく苦笑した。――この女はおれと息子が討死したと聞いても、今の通り涙一つ落さないでゐるだらう。

九月下旬、内藏之助は山科から京都に出て、四條の懇意な寺の境内に引き移つた。妻は後難を避けさせるため、離婚の形式で小さい子供達と共に實家に送り屆けられ、彼女の發議通り元服をすました松之亟は、數人の同志に伴はれて既に江戸をさして立つてゐた。内藏之助も準備が出來次第後に續く筈であつた。その爲に京都にも越して來たのであるが、支度が思ふやうに運ばなかつた。重に經濟的の原因であつた。彼の保管金はもう多く殘つてゐなかつたのに江戸では莫大な費用の要ることが分かつてゐた。内藏之助は山科の家屋敷を擔保にして金を借り入れ、道具類も金目な物は賣

り拂はうとした。斯んな用事でちよい〱山科に歸るのが、現在の氣苦勞の多い生活の中で一つの息抜であつたのも事實であつた。彼は鳥が馴れた枝をさして戻る氣持で故園の門をくゞつた。

家の處分もすみ、準備も一と先づ整つて、やがて江戸に立つばかりになつた時、彼は、暇を盜んで今一度山科に來た。十月に入つたばかりの晴れやかな午後であつた。彼はいつも京都から戻つた時するやうに、また此處に住まつてゐた間毎日してゐたやうに、兩手を後に組み、右の肩を心持上げて、小柄な身體の丸腰で、ゆつたりと庭を歩き廻つた。澄み透つた高い空の向には、音羽山が秋らしく强くなつた線で、くつきり聳えてゐる。この山にもこれでお別れだ。——明け暮れ其處に立つて眺めて來た一年間の思ひ出が頭の中を通り過ぎる。いつも默つた、いつも親切な、それで彼の惱と苦痛を誰よりもよく解して呉れた友達で此の山はあつたと彼は思ふ。同じ追懷は周圍の到るところに見出された。一本の幹、一枚の踏石、垣根に徒らにくねつて花を零した萩、いつの間にか廢屋らしく伸びてゐる屋根の草、その下にぴつたり閉まつた薄白い障子まで。故人の情なしには彼は見なかつた。而してその中に充ちてゐる、甘い親しみのある閑寂の味は、山茱萸と高麗人參が彼の病氣に於てさうであつた如く、惱の多い彼の心に於て持藥であつた。彼はくわつとした秋日の中に佇んで、しみ〲それを味はつた。奥深く、しんとして、透明だ。丁度頭の上の大空のやうに。世界ちうことりともしない。——いや、たつた一つ、土でも掘つてゐるらしい微かな物音が、裏庭の方から時々聞こえて來る。それとてもこの場の靜けさに相應はしい調子をつける分でも、亂しはしなかつた。彼は樂しげな恍惚した氣持でまた歩き出す。而してまた立ち留まる。一本のさし出た枝に早くも黄ばんだ木の葉を認めて。而してまた次の數分の後には彼は呑氣にしやがんで仕舞ふ。多分一二日前の野分に吹き倒された鷄頭のために、何か支へをつけてやらうとして。——彼はいつまでさうしてゐるのだか忘れてゐた。寧ろもつと多くのことを忘れてゐた。京都のことも、江戸のこ

ども、兩方で自分をあてにして待つてゐる仲間のことも。――その中に交つてゐる、初々しい元服をすましたばかりの若い顏を思ひ出さなかつたならば、彼は永久に其處から動かなかつたかも知れなかつた。

が、その時裏庭の方から重い足音がして、捨鉢卷の左六が鍬を持つて現れ、菊が掘れたから見て貰ひ度いと云つて來た。

『おゝ、掘れたか。』

主人はそれだけは忘れてゐなかつたやうに、直ぐ滿足さうにさう云つて、若黨と連れ立つて裏へ廻つた。青つぽい、突くやうな菊の薫が、掻き起された土のしめやかな匂に交つて其處にあつた。彼は、既に蕾になつた菊を、主のない庭に殘す代りに、京都の知友に形見の意味で贈らうとして、左六に掘らしてゐたのであつた。今一人の留守番の年取つた爺は、藁や荒繩を用意して、左六が掘り出す傍から、それを包んだ。圓く根を固められた蕾の菊が、もう幾株か出來上つてゐた。

『もつと掘りませうでございますか。』

『いや、それ位で結構だ。』

内藏之助はこれ等の贈物の屆け先とその方法に就いて若黨に命じながら、凝と菊畑の縁に立つてゐるうちに、不圖、菊ばかりでなく、牡丹をも分け度いと思ひついた。自分は二度と見られない花でも、せめて親しい友が見て呉れるだらう。――が、そのために今一度來る暇はなかつた。内藏之助は京都に歸つた後、再び彼を取り捲いた現實の多忙の中から、茶の友で、同時にまた元の遊び仲間であつた友達の一人に手紙を書いた。それは招待された茶會を、旅立の前の忙しさのため――彼は西國邊に引つ込むやうに云ひ觸らしてゐた――殘念ながら缺席すると云ふ斷わりの手紙であつた。

彼は追白に牡丹に就いて次のやうに書き添へた。――

『……不宜候得共ぼたん二三種其元へ御引取可被下候。御人可被遣候。』

(完)

カナリヤ

正宗白鳥

獨逸種のローラカナリヤは、銀盤に玉を轉がすやうな音を立てゝ鳴いてゐた。黄金の鈴を振るやうに囀ることもあつた。河鹿の聲に似てゐて、それよりも上品な貴族的な音色をもつて鳴くこともあつた。彼等雌と雄のつがひは、丸ビルのほとりの鳥屋から持出されて、信州の高原に連れて來られた。雌の羽は雀色をしてゐたが、雄の羽は軟い黄金色をしてゐた。

一つ籠に入れられてゐる間は、二羽の小鳥は默つて睦じく暮してゐた。飼主の入れてくれた細い枯草で丹念に巣を造た。雄は青菜を啄ばんでは雌に與へ、雌が巣に籠つてゐる時などには、夢見るやうな目を凝らして警戒して、人の顏でも映ると驚きの聲を舉げた。

カナリヤを可愛がつて、その世話を一人で引受けてゐるのは、二十歳を越したばかりの、四五人の家族のうちでは一番の年下で、容色のすぐれない、眼差しや唇に若いにほひもきらめきも持つてゐない少女であつた。彼女は、青物屋の御用聞の來

るたびに、家族の食料を撰ぶさきに、小鳥の好きな菜つ葉を注文した。餌や水の分量にも神經的に氣をつけた。夜は鳥籠へ蚊の入らないやうに、風呂敷で籠を包んだりした。そして、兄嫁のさだ子の出來心で、避暑地の慰みに買つたカナリヤも、次第にきよ子一人の秘藏の寵兒のやうになつて、外の家族が鳥籠を覗くことをすら、彼女は次第にいやがるやうになつた。

「今、卵を産んでるんだから覗いちやいけないの。雄が守つてるんだから、人が覗くと吃驚して騷ぎ立てるわ。あんな羸弱い鳥を脅かして興奮させると、死んぢまふかも知れない」と云つて、他の家族の粗野な取扱ひに、目に角立てゝ憤ることもあつた。

高原では、時鳥が鳴き鶯が鳴き郭公が鳴いた。そのほかのいろ〳〵な小鳥が、力のある生々とした聲をして、朝から夜まで家の周圍に鳴いてゐた。

「聞き飽きるほど鳥の聲がしてゐるところへ、わざ〳〵カナリヤなんかを高い金を出して買つて來て、面倒な思ひして育てる必要はないんだね」と、家族の一人が云ふと、

「でも、外の鳥は、こんなに洗錬されたお品のいゝ聲をしないぢやないの?」と、きよ子は辯護した。

雌と雄とを一しよに置いて、その平和を亂さないやうにソツと取扱つてゐると、小鳥は狹い籠に身を安んじて沈默してゐた。日本種とは比べものにならないほどに、鳴く音のいゝのを價値にしてゐる外國種のカナリヤは、時々はその特有の名調子を出さゝなければ、飼主の方で飼つて置く甲斐がなかつた。それで、きよ子も物足らぬ思ひをして、雄の方を別の鳥籠へ入れた。

別れ〳〵になると、雄は左右を顧視し羽を搖かしながら、ひた鳴きに鳴いた。玉を轉がすやうに、鈴を振動かすやう

に吼きつゞけた。……きよ子はそれに聞惚れた。

きよ子も、臺所の手傳ひをしたり、縫物の手傳ひをしたりしてゐる間に、何かしら小聲でよく唄つた。

「カナリヤはひとりでゐると淋しいのね」と、きよ子は新發見をしたやうに、ある日云つた。さう思つて見てゐると、雌の目付きや、留り木に留まつてゐる細つそりした姿が、いかにも淋しさうに見えたが、彼女はそれを可愛さうには思ひながらも、奇麗な聲の聞きたさに、たび／＼雌雄の別居を企てた。

あの奇麗な囀りは、雌戀しさの聲だと思ふと、彼女は恍惚として聞耳を立てながらも、をり／＼は哀れになつて涙をこぼした。そして、自分をその小鳥になぞらへて見ることもあつたが、これは他の家族には秘密であつた。

「カナリヤは最初此處へ連れて來た時よりは元氣がないぢやないか」

此處の主人は、ある日軒先へ釣るされてゐる鳥籠を見上げて云つた。

「あたし隨分氣をつけて、鳥屋に教はつた通りにするんだけど。氣候がカナリヤに適しないんでせうか」きよ子も不安に感じた。

「氣候の影響が人間とは違ふにしても、小鳥には東京の方がいゝつてことはないよ。餌のやり方に手落ちがあるのかも知れないね」

「だつて、餌は鳥屋から貰つて來たのがありますのよ。卵の黄味も食べさせてるし、何も勝手にやりやしませんの」

「あんな餌は罐詰の食料と同じことで、ヴイタミンが缺乏してるんぢやないか知ら。……カナリヤにはどんな食物がいゝつてことは、鳥屋にだつて、本當には分つてやしないんだらうから。野へ放して、自由に好きなものを食べさせるやうにしなければ丈夫にはならないんだらうね」

「この鳥をこの高原へ放したら面白いだらうね。獨逸種のカナリヤが繁殖して、鶯なんかと掛合ひで鳴くやうになつたら面白いだらう」と、家族の一人がその光景を空想して云つた。

「また呆けたことを云つてるのね。こんなところへ、あんな繊細い鳥を放さうものなら、雉にでも百舌にでも、直ぐに喰はれちまふわ。鶯にだつて喉笛をつかれてよ」と、家族の一人が云つて笑つた。

「怖い／＼」きよ子はさう聞いて、はじめて氣がついた。そして、自分がカナリヤになつたやうに、周圍の森の枝や薮木の中で鳴いてゐる勢ひのいゝいろ／＼な小鳥に對して恐怖を感じて、

「あたし達が庇つてやらなけや、カナリヤはとても生きてゐられないのね」

「お前が氣をつけてゐたつても、秋になつて此處を立つまで生きてゐるかどうだか」

「そんなことはないわ。この頃は雌が一生懸命卵を溫めてるから、今に可愛い子をいくつも生んで、秋までには籠の中が賑かになるかも知れないわ」

きよ子はそれを期待してゐた。しかし、雌は三つも四つも産んだ卵を一つ／＼大切に溫めてはゐたが、どれも孵化しなかつた。きよ子は、じれつたくなつて、その一つを取つて見たが、醜い小さな卵は惡臭を放つくらゐに腐敗してゐた。

「こんなぢや駄目だわね」と、きよ子は歎息したが、雌のカナリヤは、まだ諦めもしないで、毎日自分達のつくつた巣の中に蹲つてゐた。

「その卵は鳥屋の云つてた無生卵といふ奴だらう。鳥の奴何も知らないから無駄骨折をしてるんだね」と主人が云ふと、

「ぢや、人間で云ふと流産するやうなものだな」と、他の一人が云つた。

が、二羽の小鳥は、傍で何と云はれようとも、一つ籠に住んでゐると、互ひに簡單な平凡な聲を洩らし合つて、事もなげに暮した。二つの留り木のあちらへ留り、こちらへ留り、金網に飛びついたり、嘴を留り木でこすつたり、首を揺かしたり、羽を揺かしたりした。

身體の弱かつたきよ子も、高原へ來てからは、食慾が進んで、十日二十日と日が立つにつれて、蒼褪めてゐた顏も赭らんで、見たところは元氣がついたが、氣の弱い彼女は、夕餐後などに、人の氣のしない野道を散歩する時には、誰れかの袂に掴まつた。日が暮れてからは、外に据へられた風呂へ一人では入れなかつた。

「そんなに臆病ぢや、世の中へ出られないぜ。一家の主婦になつて世帶を切廻すには、もつときつくならなきや駄目だよ」と、主人は云つた。

「あたし臆病だつていゝのよ」

きよ子は反抗的にさう云つたが、誰れよりも臆病でない證據を人に見せたくなつて、いろ〳〵に考へてゐると、目の前に紫色をして聳えてゐる淺間へ登つて見ようかといふ氣になつた。家族の誰れもが屢々口へは出してゐながら實行し得ない登山を彼女だけは決行しようと思立つた。それで、ある日、ふと、

「××さんの叔父さんは、明日淺間へお登りになるんですつて。あたし一しよに連れて行つて頂くやうにお頼みしたのよ」と、皆んなの前で云つて、皆んなを驚かした。

「戯談ぢやないよ。お前のやうな弱い身體では、淺間はさて置き、離れ山へだつて登れはしないよ」と、家族の一人が云ふと、きよ子は意氣込んで、

「まあ、見ていらつしやるといゝわ。登れるか登れないか。……女にだつて隨分登る人があるんですつて。××の叔父

さんは、淺間くらゐ何でもない、一晩でツーつと登つて來られると云つていらしつてよ」

「××さんのやうな山登りの名人とお前は足並を揃へて登らうつていふ大野心を起したのかい。えらいな」と冷かす者もあつた。

それで、つまりは皆んなの不同意によつて、きよ子の計劃も中止となつたが、彼女は、ふとした無謀な思付きのために、臆病の汚名をいくらか拭はれたやうに感じて得意になつた。

皆んなが元氣で夏を忘れて暮してゐた。きよ子が口癖のやうに唄つてゐた感傷的な唄も、何となく晴やかになつたが、さうなるにつれて、彼女のカナリヤに對する興味も次第に薄らいで、以前ほど鳥籠の方へ細心な注意を拂はなくなつた。小鳥の世話を義務のやうに感じだした。

「きよちやんも飽きつぽいのね」と、兄嫁は云つて、時々は彼女の手で餌をやり水をやるやうになつた。

兄嫁はある日、無雜作に巣の方へ手を入れて、カナリヤの卵はどんな者であらうかと、取出して見たが、小鳥に騒がれたので、そのはずみに卵を籠の緣へ落した。壞れたのを見ると、そこには確かに生物の芽が宿つてゐた。

「無生卵ぢやないよ、これは」と云つて、きよ子を呼んで見せた。

「まあ、汚らしい」と、きよ子は目を背けた。

「こんな汚らしいところから、可愛らしい雛が出て來るぢやないの。惜しいことをしちやつたわね」

「それは惜しいことをした」と、家族の他の人々も調子を合せた。しかし、カナリヤに對する愛着は、誰れもはじめほどでなかつた。

ところが、あたりの草原の中に、木辷りと名づけられてゐる小さな蛇が住んでゐた。身長は小指ほどで、幅は伸縮自在の素質を有つてゐた。天井の隙間や戸の隙間を見つけて、人の家へ入らうとする時には、身體を紙のやうに薄くして忍込むのであつた。

音樂を好む彼れ、木辷りは、時々は、草刈男などの巧みな口笛に惹かれて、そちらへノタクリ出ることもあつたが、ある朝あたりの薄明るくなつた頃ふと、かつて聞き馴れない美妙な音樂を聞きつけた。それで、醉ひ心地で、いゝ音のしてゐる方へ匍ひ寄つた。壁を傳つて、窓の微かな隙間から忍込んだ。音樂はます／＼冴えて來た。

彼れは籠へ近づいて、金網の隙間から中へ入つて、不思議な音を出してゐるカナリヤの喉へまきついた。羸弱い小鳥には逆らう力はなかつた。

以前は、夜になると、きよ子が丹念に鳥籠を風呂敷で包んでゐたのに、この頃はそれが閑却されてゐたのであつた。



妹

小島政二郎

一

格子が無遠慮にガラ〱ッと明けられて

「今晩は。在宅(うち)かね。」

聞き馴れた彌一の聲が、筒抜けに茶の間の榮吉夫婦のところまで聞えて來た

「はい。」

奴(やつこ)が取次ぐ前に、お芳が電燈の下から、氣輕にスラリと立つた。

「入らつしやい。」

殆んど三日置き位に顔を合はす心安立(こゝろやす)てに、お芳は形ばかりに袷の膝を突いて、丸髷の頭(あたま)をちよいと下げたが、愛想笑ひを浮べたまま、

「あなた、三筋町の兄さん。」と、奥へ向いて稍聲を高めた。

男同志は互に頷き合つただけで、長火鉢を挾んで坐つた。彌一は青々とした角刈りに、藍微塵の松坂紬を素肌に着て、三尺をチヨキンと前で結んでゐた。歳は二十

九、いゝ男と云ふのではないが、いかにも職人らしい好みの似合ふ細面の、どつちかと云へば、苦み走つたと云ふに近い顔立ちだつた。鼻から口許へかけて、女好きのする引き締まつた凜々しい線を持つてゐた。彼は最近父親を失つて、かなり手廣くお出入先きを持つた屋根屋の跡目を繼いで、若親方から親方へ出世をしたばかりだつた。——彌一の酔つた顔が、電灯に赤く艶々と光つた。

榮吉も同じ歳頃の、これは父を三四年前に見送つてゐるだけに、女房もあり、いつか親方としての貫禄をも備へて來てゐた。彌一の小柄でキビ〱としてゐるのに反して、彼は上背があつて、ガツチリと、職人としては不意氣な體付であつた。好みも彌一とはガラリ變つて、左官に似合はず髪も當世風に分け、靴も穿き、着物その他の好みにも、三尺趣味を努めて避けてゐた。從つて、言葉も、彌一のやうに、ザツカケなくなかつた。煙草は吸ふが、酒は、職人の資格にはづれて、嗜まなかつた。

「どうしたい。」　榮吉が重い口を綻ばした。

「どうしたもかうしたもねえ。家の中が陰氣で仕様がねえ。」

「それでも仕事は始めたかい。」

「いゝや、何だかさびイしくつて、なんにも手に附かねえから、ずつとお引き籠りだ。在り難えことに、家にや吉や松がゐてくれるんで、まるごと任しといても心配はねえからね。」

「だけど、たまにや君が見廻らなけりや、いけないだらう。」

「うん、そのうち、ボツ〱始めようと思つてる。」

そこへ、お芳が

「兄さん、出がらしですよ。」と、お茶を汲んで出した。「急にお寂しいでせうね。それに、女手がなくつてお困りでせう。もう少し近いとね、家からお茶拵へ位には上れるんですけど。」

「なあに、今までどほり叔母が面倒を見てゐてくれるから、三度のことにや用は缺かねえが、なんとなく家の中が濕ツぽくつていけねえよ。だもんだから、つい一杯といふことになるんだ。ハハハ……。しかし、今夜はどうしたのかちつとも醉はねえで、妙に兄貴のとこが戀しくなつてね。一つ寄席へでも誘ひ出さうと思つてやつて來たんだ。兄貴、附き合つてくれるか。」

「いゝとも。だけど、浪花節は御免だぜ。」

「ハハハ…。大丈夫だ。今夜は、八丁堀に伯山獨演會があるんだ。——どうだい、お芳さんも附き合はねえか。」

「行きたいけど、講釋ちや。」

「嫌ひかい。」

「いゝえ、嫌ひちやありませんけど、私、娘の時分に一度お父さんに連れられて行つて、懲々しちまひましたわ。女なんか一人も來てゐないんでせう。みんながじろ／＼私の方ばツかり見て……。」

「ハハハ……。違えねえ。」

「ねえ兄さん、お梅ちやんもちき歸つて來ますから、今夜は私達も一緒に、色物席へ連れて行つて下さいよ。」

榮吉は、自分の女房が、彌一に甘えて我儘を云つてゐるのを快く聞いてゐた。甘えて、少しでも彼の氣持を引き立てようとしてゐる妻の意圖を感じたからであつた。そればかりでなしに、寂しがつて三日にあげず遊びに來る彌一の心の裏に、お梅の潜んでゐることを察して、彼女らしい粋を利かしてゐるのも快かつた。彌一の父が死ぬ前に、兩親同志の

約束通り、妹が向うへ貰はれてゐたら、彌一も、母の死に續く父の不幸に出逢つても、一人ぼつちにならずに濟み、從つて今ほど孤獨の寂寥に噛まれずに濟んだであらう。しかし、生前、彌一は父に非常な不信用だつた。彼は適齡前ながら「飲む打つ買ふ」の三拍子揃つた道樂者になり果てた。彌一の父と榮吉の父とは、誰彼から羨ましがられた程の仲よし、——兄弟分であつた。榮吉の父の方が先にこの世を去つた。母は早く身罷つてゐた。兄弟分の忘れ形身——言葉の上から云へば、自分の子とも云ふべきお梅の將來、彌一の女房として迎へた後のお梅の幸不幸を慮かつて、最後まで、彌一の身持ちの定まる見極めが附くまで、彼の父音松は、遠慮し通した。

それ程、音松は昔氣質だつた。息子とうらはらで、酒一滴飲まず、女出入りはなし、後生大事に商賣一途に勵んだ結果は、晩年は擧げられて組合の副頭取を務めた。ところが、榮吉の父はと云ふと、腕こそ優れてゐたが、大酒ツ喰ひだつた。それが、息子の代になつて、各々全く正反對な現れを取つた……。堅人の子に大酒飲みが出來、大酒飲みの子に堅人が出來た。たゞ仲よしの點だけは、寸分違はず正しく遺傳した。素はと云へば、ほゞ同じ出入先を持つてゐたことから、庄吉と音松との交際は始まつたのだつた。さうしてお互に出入先の世話の仕ッこをしつつ、双方とも次第に大をなして行つた。しかし、そればかりでなく、今でこそ住む區が違つてしまつたが親の代には一つ町内に軒を並べてゐた。榮吉と彌一とは、——いや、お梅も、同じ小學校へ通ひ、お揃ひの浴衣を着つつ、成長した。あとにも先きにも、彌一一人しか子種のない音松は、女房共々「お梅坊、お梅坊。」と云つて彼女を可愛がつた。お梅も、酒ツ喰ひのやかましい家から小言を云はれづめに云はれてゐるよりは、可愛がつてくれる小父さん小母さんのとこへ遊びに行つてゐる時の方が多かつた。歳頃になるにつれて、お梅は下膨れの、愛嬌のある、結綿などの似合ふ娘になつた。子供ッぽく、無邪氣にボウツリ綻びた口付が、濃情的な感じを見る人に與へた。しかし、圓な目の奥に、ハッキリ見開かれた時は、シッカリ

した氣性を物語つてゐた。晋松は、そこを愛した。仲よく談笑してゐる彌一とお梅との姿を、彼は心樂しく眺めてゐた。

「なあ、婆さん。」或日、晋松は永らく胸に仕舞つて置いた考へを口に出した。「お梅坊を彌一の嫁にどうだらう。」

「私もそれを考へてゐたのさ。あの娘なら、お互に氣心も知れてゐるし、なんてつたつてシツカリ者だしね。」

「さうよ。それに、まんざら二人とも氣が合はないこともなささうぢやねえか。」

「あの娘も歳頃だし、貰ふなら、早く話だけでも極めて置かないといけないよ。近頃は早いからね。」

「あいつも來年は檢査だからな。今頃から極めて置いて丁度いゝだらう。」

申し込むと、庄吉の方でも、貰つてもらふことに極めてゐたやうな返事だつた。その代り、榮吉の嫁を探してくれと云ふ頼みだつた。

「承知した。」

晋松は、兄弟分の情誼が一層高められたやうな感激を覺えながら、勢よく云つた。

ところが、彌一は、兵營生活の二年間に、すつかり身を持ち崩してしまつた。それから晋松が死ぬまで、素行が治まらなかつた。

「小父さん、お梅を貰つていたゞきませうか。」折を見ては、榮吉が晋松に申し出た。その度に、

「いや、もう少し野郎の性根の定まるまで待たして貰はう。」

晋松の返事はいつも同じだつた。

「小父さん、いゝ加減でいゝでせう。」

榮吉の考へでは、職人に少し位の道樂は仕方がなかつた。女房を持てば、幾らかは直るものと思つて差支なかつた。

また、お梅の口振では、矯め直す自信もありさうに思はれた。

しかし、晋松は強情に自分の意志を張り通した。彼の晩年の家庭生活は、亭主と死に別れた實の妹を相手に、索莫たるものであつた。彼はどんなに、お梅を伜の嫁として慈しみたく思つたか知れなかつた。お梅もまた、この昔馴染の篤實な老人に、舅として侍き得る日をどんなに待ち望んだことであらう。彼女は老人のセカンド・チャイルドフツド的な愛情の中へ、親切を貢物として、轉がり込みたい誘惑に屢々襲はれた。榮吉は、老人の心中を察して、最後の床の看護に妹を附きツきりに附き添はせた。

「榮吉や。大事な妹をいつまでも宙プラリンにさせといて濟まねえ。」晋松はかう云つて詫びた。詫びる心の裏には、やつぱりどこへも遣らずに、折を見て添はせてやつてくれと云ふ意味が籠められてゐることを榮吉は感じ取つた。

晋松は、自分の命數を悟つたらしかつた。或日、榮吉と彌一とを枕許に呼び寄せて

「彌一、お前の實印は榮吉に今日から預けとくから、親とも兄とも思つて萬事相談してやつて行つてくれ。――不服はあるめえな。」

膝へ兩手を突いてかしこまつてゐた彌一は、無言で頷いた。

「榮吉や、面倒見てやつてくれ。」

かう云ひながら、晋松は蒲團のそとへ手を伸ばして、榮吉の膝の前へ實印を置いた。彼は年長からの信頼に感激すると同時に、一人舞臺のヒケ目を彌一に對して感じずにはゐられなかつた。

まあ、かうした關係の二人だつた。――さうしたことがあつてから、まだ丸一月經つてゐなかつた。

「あら、彌一さんだつたの。」間もなく、お梅がお湯から歸つて來た。――「入らつしやい。」彼女はちよつと踏んで

片手を輕く疊に突いた。黒襟に、頸筋の白粉が艶々と匂つてゐた。

「まあ嬉しい。」

暫くしてから、——嫂に今夜の仕儀を聞かされたのであらう、お梅のはづんだ聲が聞えた。女達は、次の間でコソコソ着換へを始めた。

「明後日から、伊勢造さんの藏の手入れだつて云ふぢやないか。」

「うんそんな話だ。」

「あすこは、あんまり儲けさせちやくれまい。」

「いつも手入れ手入れだ。」

茶の間では、榮吉の商賣話に、彌一が氣のない返事をしてゐた。

二

「困つた奴だ。あんなことをしてゐちや、みんなお出入りを無くしちやふぜ。」

榮吉は箸を運びながら、誰に云ふともなく呟いた。

「相變らず怠けてゐるんですか。」

「ひどいらしい。テンデ見積りにも行かないらしい。松や吉をやるもんだから、旦那方がみんな危がつてゐるんだ。」

傍で、お梅は顏が上げられないやうな、せつない思ひで耳を澄ましてゐた。

三

暫く足踏みをしなかつた彌一が、十二月にはひつてからの或日、突然尋ねて來た。

「兄貴、濟まねえが、一つ俺の實印を出してくんねえか。」坐るか坐らぬに、口早に云ふのだつた。

「なんだ。」

「なあにね、押し詰まつてから大きな仕事を引き受けたんだが、何しろ、知つてのとほり遊び暮してゐたもんだから、ここのところ、ちよつと手詰まりになつてゐるんだ。荷を引く手附を、一時借りようと云ふ算段さ。」

榮吉は、彌一が慾を持ち出したのを知つて喜んだ。

「そりや結構だ。仕事先はどこだね。」

「麻布の龍土だ。」

彌一の顏を見たら云はう云はうと思つてゐた意見も、この場合、榮吉は云ふまいと思つた。

「捺さう。」榮吉は云つた。

彌一は、言下に懷から借金證書を出して擴げた。「一金三百圓也」と書かれてゐた。

「こりや安くない利子ぢやないか。」

「うん、だけど、ホンの五六日のことだから……。」

いやだぜ、こりや。」榮吉は聲を立てた。「こりや君が借りるんぢやなくつて、請判ぢやないか。」

いや、さうぢやないんだ。表向きはさうなつてゐるがね、本當はやつぱり俺が借りるんだよ。世間の手前、俺の名で

借りる譯にやいかねえから、さう云ふカラクリを仕組んだんだっ」

「一たい、この中西平助と云ふのは誰だい。」

「兄貴知らねえかな。ホラ、深川の叔父貴の弟だ。」

「だつて、深川の叔父さんなら古川ぢやないか。」

「弟で養子に行つた奴よ。」

「さうだつけかな。」

兎に角、榮吉は捺印して歸した。これをキッカケに、少し位の「飲む打つ買ふ」は仕方ないとして、家業にだけはいそしんでくれるだらうと思つた。榮吉だつて、兄貴面して人の實印なんか預つてゐるのは厭だつた。出來るものなら、明日にでも返すと同時に、妹も早く片附けたかつた。この二つのことを成し遂げないうちは、死んだ小父に對して始終負ひ目の意識があつた。小父の信頼に報いずにゐる肩身の狹さを感じた。何か不本意だつた。そればかりでなく、もう二十三にもなつてゐる妹に對して氣の毒でならなかつた。彌一に對するお梅の心の動きを見知つてゐるだけに、寧ろ可哀想だつた。そこまで考へて來ると、小父の一周忌が濟む頃までに、彌一にもその心組になつてゐて貰はなければならなかつた。物心附く頃から、殆んど兄弟のやうに育てられて來た榮吉にとつては、彌一の氣心は不可知のものではなかつた。

永い間、さんぐ＼彼の放縱無賴の生活を見せつけられてゐるにも拘はらず、榮吉には、それが彌一の本心から出てゐるものとは――不思議に思へなかつた。他人は知らず榮吉には、彌一のぐれ出した動機がほゞ想見されるやうな氣がした。榮吉の見るところでは、お梅が彌一の欲しい時に與へられなかつた反動としか思へなかつた。

酒は、榮吉の父の庄吉が、酒飲みの上機嫌で、面白半分に盃を嘗めさせ嘗めさせしたのが遠因をなしてゐるに違ひなかつた。

博奕は……?それは、直接には誰も責任はないかも知れなかつた。唯職人仲間の一般の氣風に感染させられたのだと云へばそれまでであらう。しかし、榮吉に云はせれば、彌一が職人氣質に無反省に嵌まり込んで行つたことが何より情なかつた。博奕好きなんと云ふのも、その一つの現れに過ぎなかつた。尤も、彌一の非常に強い好奇心――それも、彼を驅つて「一瞬のうちに、百年の恐怖と希望とを味ふ」陶醉に赴かした本質的な原因に違ひなかつたが、附隨的には、彼が好んで聞いた博奕打の講釋の感化も少くなかつた。

榮吉は、一緒に育つた自分達の過去を顧みて見ても、彌一がいかにいろんなことに同時に興味を持ち得る資性の所有主であるかと云ふことに、一驚を吃しずにはゐられなかつた。少年の頃一緒に淺草へ遊びに行つても、彌一はなんでも見たがり、聞きたがつた。松井源水の獨樂廻し、軍中膏の大道説明を聞いても、榮吉が唯面白く聞き惚れてゐる間に、彼は一字一句を、口寫しに憶え込んでしまふのだつた。さうして歸つて來てから、大勢の友達を前に面白をかしく眞似て見せた。

「……一枚が二枚、二枚が四枚……。」彼は源水氣取りで、大刀ギラリと引き拔いて、片手に持つた半紙を次第に細かく切りきざんで行つた。「四枚が八枚、八枚が十六枚、十六枚が三十二枚、三十二枚が六十四ン枚、六十四枚が百二十八枚、百二十八枚が二百と五十六枚……。」

彼は、そこでフツと切りこまさいた紙切れを吹く。

「吹けば、玉散る」氷の刃

ちよいとしても、この位のことは遣つてのけた――そんなことを思ひ出すと、榮吉は優しい氣心の青年彌一の姿を懐しく思ひ浮べずにはゐられなかつた。

彼は、どこへか行けば、素手で歸つたことはなかつた。冬の晩など、ちよつと用足しに出たついでにも、母の好物の壽司を買つて歸るとか、緣日で、新案特許だと云つて盛んに功用を說きつつ實演して見せてゐる絎け挾みを、お梅のために買つて來たりした。お梅が派手な春着の裁縫を擴げてゐる傍で、炬燵に當りながら、高座で聞くやうな口調で「鼠小僧」の講談を讀んでやつてゐる彌一の姿を、榮吉は幾度自分の家で見掛けたことであらう。

榮吉は、彌一の去つたあとの長火鉢に一人靠れながら、穩かな光りに包まれた過去の幾場景を心の目の前に描き續けた。彼の心は潤つて來た。何かしら期待の樂しさが醱酵して來た。

翌る朝、榮吉が仕事先で働いてゐると、

「兄さん。」と、お梅が近寄つて來た。

見ると、彼女の顏が强張つてゐた。

「……。」目顏で尋ねると、

「三筋町の小母さんが來て、恐れ入りますが、ちよつとお手隙の時お顏を拜借させて下さいつて。」

「何だ。」

「何だか彌一さんが警察へ連れて行かれたらしいの。」

お梅の圓な目が、榮吉の目へ縋り付いて來た。

「よし、今すぐ歸る。」

一足先きにお梅を返して置いて

「おい、たも、急用が出來た、ちよつと家へ歸つて來る。惡くすると、引つ返して來られないかも知れない。――二階の色變りのとこだけあのまま殘しといてくれ。――旦那がお聞きになつたら、ちよつと急用で家へ歸りましたとよく申し上げといてくれ。」

「へえ。」

榮吉は草履を靴に穿き替へると、大急ぎで、家へ歸つて來た。

「榮吉さん、濟みません。」三筋町の小母は、彼の姿を見ると、いきなり恐縮して謝つた。

「今、ちよつと聞きましたが、彌一さんが何か間違ひでも……。」

「えゝ、それがあなた、お羞しくつてお話にもなんにもなりませんの。ゆうべこちらへ伺つたでせう、あの足で、すぐまたこれへ廻つたらしいんです。」三筋町の小母は器用に片手で丁半の手付をして見せた。「そこへあなた手がはいつたんですツて　あれも縛げられて、今、象潟警察にゐるさうですが、今朝お友達の方が見えて實はこれ〳〵だと敎へて下さつたもんですからね、びつくりして取るものも取り敢へず伺つたやうな譯なんです。――なんだとか彼んだとか云つちや厭な御相談にばかり上つて……。」

堅儀へ緣付いた小母としては、慌てるのも無理はなかつた。しかし、彌一が手慰みのことで警察へ上げられたのはこれが初めてではなかつた。その度に、晋松が貰ひ下げに行つた。しかし榮吉はそんな經驗は一度もなかた。さうでなくつてさへ、警察へ行くのは億劫なのに、そんな恥づべき行爲の人間の許しを乞ひに行くのなどは厭だつた。厭といふ

よりも嶮しく、恐はかつた。
「仕様がないなあ。」その氣持が、榮吉の言葉にも様子にも現れずにはゐなかつた。「度重つてゐますからね、おとなしく下げてくれますか。」
「本當に御造作をお掛けして……。」三筋町の小母は、申譯なげに肩を窄めた。
その時、部屋の隅に、體を堅くして蒼白んだまゝ息を凝してゐるお梅の姿が、榮吉の目に映つた。彼はいぢらしさに堪へなかつた。
「よござんす、まあ、兎に角行つて見ませう。」
彼は着物を着換へて、表へ出た。しかし、ちかに一人で警察へ行く氣にはなれなかつた。同じ穴の貉に思はれるのは、彼の自尊心が許さなかつた。
「御免下さい。――旦那様は入らつしやいませうか。」
彼は、出入先の、一軒で、區の名譽職をしてゐる石井さんの裏口から訪つた。
石井さんは榮吉の願ひを聞くと、氣輕に一緒に警察へ出向いてくれた。
「なんだぜ、榮吉、賭博犯ぢやないぜ。署長が、喧嘩刃傷だと云つてゐたぜ。」
わたりだけ附けてくれて歸りしなに、石井さんはかう云つて榮吉の顔を見た。
成程、出て來た彌一を見ると、顔に白々と繃帶を卷いてゐた。
「兄貴、濟まねえ。」
「どうしたんだな。――まあ、いゝ。みんなが心配してゐるから、兎に角家へ歸らう。」

二人は伸を連ねて歸つて來た。しかし、十九や二十の子供ではなし、三筋町の小母を始め、お芳やお梅の手前もあること故、榮吉は彌一に意見めかしいことを云ふのは控えた。いつか二人きりの時云つても遲くはないと思つた。

「前祝ひをやつたのがいけなかつたんだ。」彌一は同じことを繰り返しては、面目無がつた。しかし、面目無がる傍から、喧嘩の話になると、面白さうに興奮して話した。

「何しろ、平の野郎は博奕打だからね、身嗜みがいゝや、しじゆう短刀を持つてやがるんだ。」

「意氣地がないのね、あなた短刀位に負けたの。」

お梅がこんなことを云つてからかつた。

話を聞きながら、榮吉は、借金證書にあつた名前が博奕打の名であることを知つた。「畜生、俺を瞞しやがつたな」と思ふと、いゝ顏ばかりもしてゐられなかつた。彼は言葉少に憂欝になつて行つた。

半月と經たないうちに、また彌一は借金證書に實印を貰ひに來た。形式も口上も、前の時と同じだつた。

「なぜ君は僕を瞞すんだ」榮吉は、以前の腹立ちが甦つて來て抑へ兼ねた。

「兄貴を瞞した覺えなんか俺はねえぜ。」

「ないことがあるものか。この前の中西平助と云ふのは、ありや博奕打だつて云ふぢやないか。」

「あゝあれか。ありや心にもねえ嘘を吐いて濟まなかつた。實を云やあ受取人なんか誰だつて構はねえ譯だからね、手ッ取り早いとこで濟ましたんだ。どつちへ轉んだつて、俺が借りるのに間違はねえからね。」

「そりやさうだが、兎に角首と吊り替への實印を捺すんだ。あとから、そんなことが分つたりすると、氣持が惡い。第一僕として盲判を捺したとなれば、君のお父さんに申譯がない。」

「分つた。――實は今度のも博奕打なんだけど……。」
「大丈夫かい――、そんな人間の名前を無闇に借りて……。あとで面倒なことが起りやしないかい。」
「なあに、不斷から目を掛けてやつてゐる奴だから、そんな心配なんかこれッぽつちだつてありやしねえ。安心して捺してくンねえ。」
「惡く念を押すやうだがこりや本當に商賣用の金だらうね。」
「さうだとも。」
榮吉は澁々ながら、捺印しない譯に行かなかつた。
ところが、翌る日になると、また彌一が喧嘩沙汰で警察にあげられたと云ふ噂が榮吉の耳に傳はつて來た。しかし、今度は三筋町の小母が頼みに見えなかつたのをいゝことにして、榮吉は打ち捨てて置いた。知らせると心配すると思つて、彼はお芳にもお梅にも默つてゐた。唯全く同じ型の事件が、全く同じ經路を取つて二度繰り返されたところに、彼は何か秘密が潜んでゐるに違ひないと思つた。
正月が來た。仕事始めの晩、風呂から歸つて長火鉢の前へドッカと坐つた榮吉に
「ねえ。」とお芳が話し掛けた。「今日お梅ちやんが三筋町へちよつと寄つて見たんですつて。さうしたら、小母さんはとうの昔に入らつしやらないんですッてね。」
「ツーン。」
「彌一さんは二日醉とかで寢てらしつたさうですがね。その傍に、人相の悪い、博奕打かなんかの下ッ端見たいな男が、御飯拵へや何かして働いてゐたさうですよ。」

「フーン。」

「氣のせゐか、昔と違つて、家の中がなんとなく貧相〳〵してゐたつて話ですよ。どうなすつたんでせうね。——お梅ちやんにね、もうそろ〳〵蛆が涌きさうだ。一月程手傳に來てくれないかつて、冗談とも眞面目とも附かず仰しやつてたさうですよ。」

榮吉は聞きながら、だん〳〵深みへ落ちて行く友達の黒い姿を思ひ描いた。自分の留守を狙つて歳暮に來たッきり、新年になつても顏出しをしない彌一の素振が考へられもした。新年を幸ひ、とッつかまへて一つ思ひきり忠告して見ようと彼は決心した。

その翌日が、仲間の新年宴會だつた。その席上で、彌一の噂が出た。

「彌一ッて云へば、伊勢甚の旦那が怒つてゐたぜ。——さう〳〵、こりや榮さん、お前さんの耳に入れちやいけないッて旦那から口留めされてゐたんだけど、まあ、いゝだらう。」

酒のまはるにつれて、屋根吉が舌を戰がせ始めた。

「いゝか、百枚しか使はねえ瓦を、百五十枚使つたとサバを讀みやがつたんだ。——彌一がよ。」

榮吉は酒を飲んでゐなかつた。しかし、彌一彌一と呼び捨てにされた上に、滿座の中で泥棒呼ばりをされたのでかつとなつた。

「何を云やがんでえ。」彼は不斷の身嗜を忘れて、緣ひな〳〵啖火を切つた。知らぬ間に、前にあつた皿を摑んで片膝立ててゐた。

忽ち仲裁がはいつて二人は引き放されてしまつたが、榮吉はプリ〳〵しながらそこを出た。考へて見れば、伊勢甚も

旦那の仕打ちも腹に据え兼ねた。屋根吉に話す暇があつたら、なぜ自分に耳打ちをしてくれぬのだらう。
「彌一がサバを讀んだ……？本當だらうか。」
榮吉は、すぐにも事の眞相が確めたくなつた。丁度いゝ機會だ、このことを聞き糺すと同時に、かねて云はう〳〵と思つてゐたことのすべてを、彌一に向つて云つてのけよう、妹のことも今夜こそは云つてしまはう。——彼は興奮に顫へながら、間違に來る正月の夜の電車を待つてゐた。
榮久町で電車を降りて、裏町へはひつて彌一の家の前へ立つた榮吉は、夜目にも白く斜めに「貸家」と貼られてゐるのに、茫然とした。ムシヤクシヤしながら家へ歸ると、留守に、彌一からハガキが屆いてゐた。儲仕事で北海道へ來た、歸りの程は分らない、とあつた。
「勝手にしやがれ。」

四

「お梅ちよつと。」
客を送り出すとすぐ榮吉が呼んだ。
「え。」
「まあ、お坐りよ。——ああやつて、お秋さんが二月に一度位の割合で、茲一年程飽きずに尋ねて來る譯が分るか。」
「……。」お梅はもぢ〳〵と俯向いた。
「今まではお前の耳にも入れずに、私の一存で斷り續けて來たがね、實は、豊さんがお前をお嫁に欲しいと云ふ話なん

だよ。」

豊さんと云ふのは、同じ町内に住む疊屋で、姉のお秋は、本郷で相當大きな下宿屋を經營してゐた。豊さんは芝居好きで、仕事に行く時にも、お召をゾロリと着て行つて、仕事場で半纏に着換へた。で、誰云ふとなく、「ニヨロ」「ニヨロ」と呼んでゐた。

「どうだね……。」暫く間を置いてから、榮吉が云つた。「お前、嫁く氣はないかね。」

「えゝ。——我儘を云つて濟みませんけど……。」

二人の胸には、一言の挨拶も無しに北海道へ行つた彌一の姿があつた。それは當に出來ない影であつた。しかし、同時に、二人の頭には、預けたまゝ彼が置いて行つた實印が映つてゐた。

五

上野の櫻がチラホラと咲いて、この大潮には、汐干狩に行くと云ふので、なんとなく町内の人の心が浮き立つてゐた。或宵

「御免下さい。」と、榮吉の家の玄關へ、白粉を眞白に塗つた、どこか自墮落な感じのする女が立つた。

奴(やっこ)が取次に出ると、御主人にお目にかかりたいと云ふ口上だつた。榮吉が出て逢ふと、

「お初にお目にかかります。私は家根屋の彌一の家内でございますが、實印をいただきに上りました。」

「あゝさうですか。しかし、實印と云へば、命の次に大事なもの、それを初めてお目にかかつたばかりの方に、いきなり渡してくれと云はれても、お渡しすることは出來ませんね。」

「ですけれど、彌一の云ひ附けで、彌一の家内がいただきに上つたのに相違ないのですが……。」

「いや、そりやそれに違ひないでせうが……。が、兎に角、彌一さんに自分で取りに來るやうにと仰しやつて下さいませんか。」

女は諦めて歸つていつた。

と、その夜遲く、彌一が酒の勢を借りて飛び込んで來た。

「かう人面白くもねえ。俺の實印ぢやねえか。四の五の云はずに返してくんねえな。」

「やかましい。」榮吉もつと立つて、玄關へ飛び出して行つた。「返せと云はなくつたつて、貴樣のやうな腸の腐つた奴の實印なんか、誰が預つてやるもんか。」

それは本當だつた。白首を見て以來、榮吉は、これ一筋と思つてゐた望みの花が凋んだような寂しさと腹立たしさとに襲はれた。實印なんか早く返してしまつて、厭はしい過去と手を切つて、サバ〳〵としたくなつた。

「さ、よく調べて受取れ。」

しかし、榮吉は、最後にお梅のために、一言怨みつらみが云ひたかつた。

「受け取つたら、トツトと白首でも連れて歸れ」

「歸らなくつてよ」

彌一のうしろ姿が格子の向ふに消えるのと同時に、榮吉は、父と自分と妹と三人の寂しさが、俄に一身に集まつて來るのを感じた。

その年の秋、お梅は、豐さんのとこへ嫁入りした。（をはり）

沼田頼輔先生著

日本紋章學

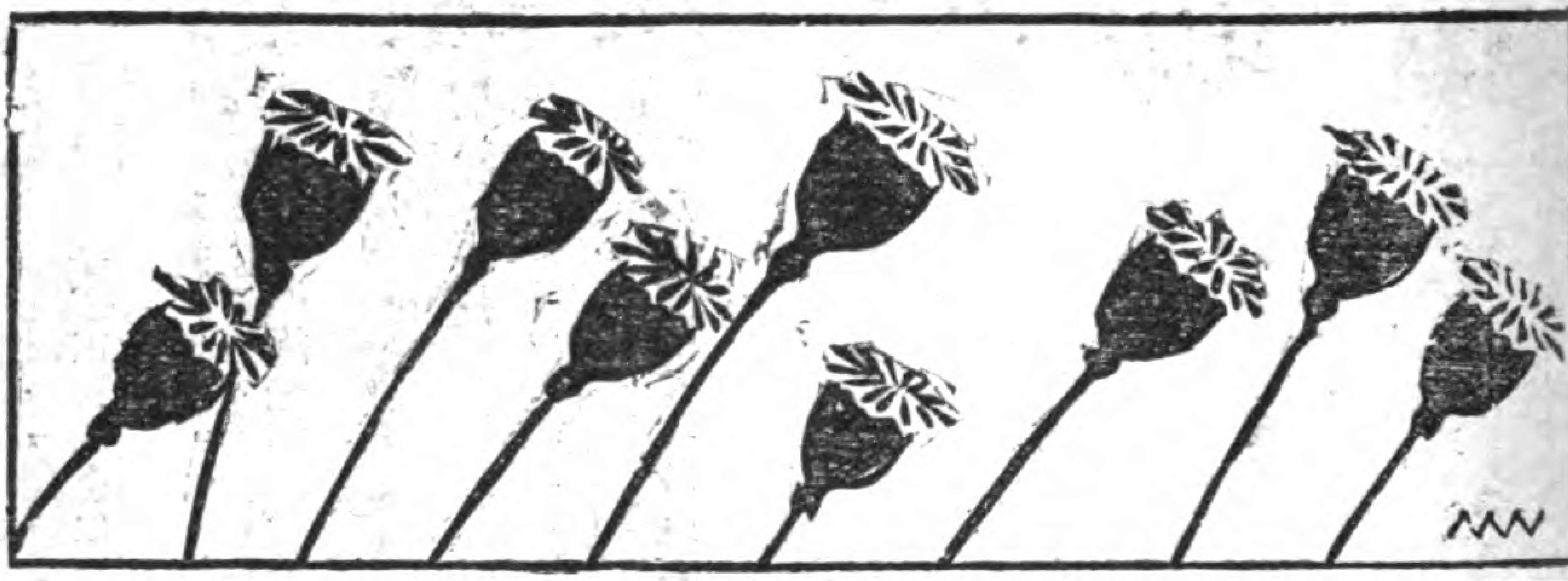
▲内容見本進呈▼

◉背皮製天金全一册（菊判約千六百頁 挿畫約千七百種）　定價金拾五圓　送本料　四拾五錢

恩賜賞

本書は著者が十有五年の苦心を重ね、我が國に行はるゝ紋章に關し有らゆる研究の結果を發表した空前の大著であつて、過般學界の最高權威たる帝國學士院より恩賜賞を授與せられた事は大方の知らるゝ所であらう。專門の學術的研究ではあるが、國民生活に極めて關係深き紋章の研究であるから、また一般趣味的の好讀物として各方面より大歡迎を蒙り、忽の内に二版三版四版を賣盡して今や第五版を重ぬるの盛況であります。苟も家紋を尊重し愛用せられる江湖諸彥は速に座右に備へて、各自に家紋の由來、その意義及び姓氏と紋章との關係等につきて的確なる知識を得られんことを希望す。

東京神田錦町一丁目十番地　株式會社　明治書院　振替東京四九九一番　電話神田一四一四番



オンネコタン

里見弴

第一場

時――現代。

人――前島。三十六七。
たみ。妻。二十五六。
正彦。長男。十二三。
敏彦。次男。六つ七つ。
富永。年齢さだかならず。
その他、女中、御用聞。

景——中央、八疊の茶の間。卓袱台、茶簞笥、柱時計等、中産の生活者に適はしき家具、調度。

下手、正面向きに玄關。低き竹垣にて庭先と境し、木戸をつける。

廻緣にて上手に一間。蚊帳が吊つてある。

八疊の緣先には、簀の子張りの涼臺あり、上に葭簾がさしかけてある。總て、相南の貸別莊と云つた感じの住居。

夏の午前十時半頃。花莫蓙を敷きつめた涼臺の上には、葭簾を洩れる陽の縞が落ちてゐる。

八疊間は、一枚殘らず障子を取りはづしてあるが、葭簾のさしかけがあるだけ陽に遠く、薄暗い。

上手の間は、雨戸が引き殘してある。

玄關はちかの陽ざしで暑さうに見える。

八疊の間の柱に倚りかゝつて、浴衣がけのおたみが、暑さにだらけたやうな座り方をして、子供の着物か何か縫つてゐる。敏彦はそばに寢そべつて、足をバタン〳〵させたり、出鱈目の唱歌を歌つたり、退屈しきつてゐる。

涼風が軒の風鈴を鳴し、蟬の聲が聞え、夏の午前の、ひとしきりの靜寂である。

敏彦。マヽ、マヽア。

たみ。（針の手を休めずに）なアに？

敏彦。マ、ア　なんか。

たみ。なんかつて、たつた今お煎餅をあげたばかりぢアありませんか。あんた、ちつとおもてへ出てお遊びなさいなね。子供のくせに、朝から、そんな、ゴロゴロしてばかりゐちア毒ですよ。

敏彦。だつて……。

たみ。お兄さんも、もうぢき學校から歸つて來る時分だから、それまで、たけにさう云つて一緒に遊んでお貰ひなさい。

敏彦。マ、ア、パ、をおこして來ようか。

たみ。さうねえ。（ト、時計を見あげながら、）でも、パ、は、昨夜はお仕事をなすつて、今朝お兄さんが學校へ出て行つてからおやすみなすつたんだから、もう少し寢かしといてあげませうよ、ね？　敏坊はよく解るわねえ。

敏彦。つまんないなア、マ、、お仕事なんぞもうよせよ。なんかしようよ。

たみ。どうしてかう、うちの子供たちは、一人で遊べないんだらう。困つちまうわねえ、……ぢアね。キアラメルを一つあげますからね。たけやと一緒に、おんもへ行つて遊んで來るんですよ。ね、よござんすね？

敏彦にしつかり頷かせて置いてから立つて戸棚からキアラメルを取り出し、捨臺詞にて、二つ三つ手に握らせてやる。

敏彦「たーけー」と、大聲に呼びながら、バタ〳〵と、廻緣を奥の方へはいる。

おたみ、また仕事を把りあげる。

子供、すぐまたバタバタと戻つて來る。

敏彦。マ、、たけゐないよ。

たみ。さう？　井戸ばたの方も見たかい？

敏彥。どこにもゐやアしないよ。

たみ。ぢア、お使に行つたのかも知れない。すぐ歸つて來るから、ベランダで、汽車でも走らせてお遊びなさいよ。

敏彥。だつて、機關車の車がひとつとれちやつてるんだもの。

たみ。あら、もう毀(こは)したの？　仕樣がない人だねえ。

このうち、下手より、富永、蓬髮、殆ど生色(せいしよく)のない顏色(かほいろ)にて、汚(よご)れ浴衣の下に、厚いスヱーターを着こみ、紺足袋、草履ばきにて、ステツキをたよりに、よろぼひ出る。病苦を忍ぶやうに眉間に皺をよせたり、何かの中毒らしく、痙攣(けいれん)的に、小刻(こきざみ)に首を振つたり、自然とふさがつて來る瞼を、口をあけ、顎を伸して、急にカツと睜(みは)いたり、氣味の惡い癖がいろ〳〵ある。誰の目にも、さきの知れた重病人と見える。片手に手巾(はんけち)包を持つてゐる。玄關さきへかゝり、表札を見て、ひとまづ安堵の思入。懷をさぐり、名刺の代りに、西洋紙の紙片に名を書いたのをとり出してから、格子をあける。顏面筋の痙攣のためか、ものを云ふのに、唇がうまく動かず、一々吃る。

富永。御免ください。ご、ご、ごめんください。

たみ。はい。

ト、玄關に出る。敏彥もくツついて行く。見知りのない上に、さういふ風態、容貌なので、不安さうに見詰めながら睦を突く。敏彥も、うしろから肩につかまつて、へんな顏をしてゐる。

富永。ご、御主人は、御在、御在宅でせうか。

たみ。はア、居りますが……。

富永。わたくしは、と、と、富永と申す者ですが、（ト、紙片を式臺の上に置いて、）是非、ちよつとでも……。（ト、云ふとき、敏彦に氣がつくと、慌しく格子のそとに出て、頻に手を振りながら、）お子さんは、ど、どうか、あつちへ……。わたくし、わ、惡い病氣をもつてますから……。どうか、お、お子さんは……。

たみ、低聲で、敏彦にあつちへ行つてろ、と云ひ聽かせ、手でも押しやるやうにするが、さうされるほど、敏彦は益しがみついて了ふ。とゞ富永の方へ、

たみ。それで、どういふ御用向きで御座いませうか。主人は、初てのお方には、紹介狀がないと、一切お目にかゝらないことに致して居りますし、それに昨晩は徹夜で仕事を致しましたもんですから、まだふせつて居りますし……。

富永。そ、そ、そ……。

この時、急に病苦が募つて來て、堪へ切れなくなり、手つきで、ちよつと待つてくれといふ風に合圖しながら、玄關の柱に凭れてしやがみ込んで了ふ。そして、地びたの上で手巾包をとくと、注射器を出し、手早く何やら藥を吸はせて、懷手をして、左の上膊に一筒うつ。

おたみ、尙もうしろ手に敏彦を押しやりながら、氣味わるさうに見入つてゐる。

注射をすますと、地の上に、背を丸くつくばつたまゝ、式臺の方を指さして、

富永。と、と、兎に角、……兎に角それを、お、お、お目にかけてください。わ、わたくし、決して、う、胡亂なもんぢア御座いません。

たみ。ちよつとお待ちくださいまし。

氣味わるげに紙片を摘みあげ、腿ツ丸にかじりついた敏彦の重みによろけながら、急いで上手の部屋へはい

り、幮ごしに聲をかける。

同右。ちよつと、ちよつと貴方……。

前島。（幮をすかして、寢返るのが見える。）う、な、なんだ？

たみ。今ね、へんな人が來て、是非貴方にお目にかゝりたいんですツて……。

前島。知らない奴には逢はないよ。

たみ。さう云つたんですけれど……。

前島。また金貰ひか、押賣ちアないのか。

たみ。かう云ふ人ですが、知つてらつしやる？

幮に手を入れ、紙片を渡す。

前島。なんだ、玉木速雄と^(たまき)^(はやを)しるしてあるな。あいつに、兄貴なんぞあつたかしら……。

たみ。玉木つて方なら知つてらつしやるの？

前島。三四年前に歸つて來た時、一度、四谷のうちに尋ねて來てくれたことがあるちアないか。

たみ。玉木つて……。

前島。もう永いこと英吉利に行つてゝ、彼方の言葉で芝居を書いて、日本より却つて彼方で有名になつてる……。

たみ。あゝ、ちア、去年の秋だつたかに亡つた……？

前島。さうさ。

前島。兎に角通せよ。

たみ。だつて、貴方、大へんな人よ。敏ちやんを見ると悪い病氣があるからあつちへつれてけ、つて云つて、さうしてるうちになんだか急に苦しさうになつて來て地びたにしやがんで注射を始めるのよ。あんな人、とてもうちイあげられやしないわ。何しろもう、今にも死にさうな顔つきをしてるんですもの。

前島。さうか！

たみ。それでもあげるの？

前島。然し、玉木の兄貴なら……。（ト、云ひながら寫を出て來て、）どうだ、似てゐるか。

たみ。あたし、お目にかゝつたことあるかしら。まるで覺えてないわ。

前島。まア、兎に角逢つてみようよ。

ト、顔を洗ひに行くところで、奥へはいる。

たみ。（うしろから聲をかけて、）ぢア、玄關で待たせて置きますよ。

前島の聲、陰で「そんなことを云はずに、あがつて貰へよ」と答へる。

たみ、玄關に出て來て、

同右。では、お目にかゝりますさうですから、おあがりくださいまし。

富永。（立ち上り、笑ひ顔とも泣き顔ともつかないやうな表情で、低く頭をさげてから、）あ、有難う御座いますが、何しろ、ひどく、こ、こ、こゝを、（ト、胸を指さしてみせて、）やられて居りますから、ど、どちらへ伺ひましても、決して、う、うへへはあがらないことに致して居りますんで……。

たみ。でも、そこはあんまり日向で……。

富永。な、な、なに、なんでも御座いません。

たみ。ぢア、そこの木戸から、庭の方へお廻りください。別に締りもして御座いませんから、お押しンなればすぐあきます。(尚遠慮するのを、)ほんとに、さうなすつてくださいまし。

富永。はア、では……。

ト、木戸から庭へ廻り、涼臺の柱に手をかけて佇んでゐる。

たみは、座布團を二枚持つて出て、「どうぞ……」と勸めてから、敏彦の手を引いて奥へはいる。入れ違ひに、寢間着を普段の浴衣に着換へた前島が出て來て、すぐ涼臺に來る。思つたよりひどい樣子に、ちよつと眉を暗くしながら、座につき挨拶する。

富永は、立つたまゝで、涼臺の上に手をつき頭をさげる。

前島。初めまして、わたくし、前島です。大へんお待たせしまして……。

富永。ど、どう致しまして。わたくしは、た、た、玉木の兄で、富永、せ、せ、清治と申します。と、突然出まして、お休みのところを、なんとも、きよ、恐縮ですが、是非、せ、先生にお目にかゝつてお願ひ申したいことが御座いまして……。

前島。まア、遠方、どうぞおかけくださいまし。

富永。いえ、もう、これでなんです……。道雄のやつが、せ、生前、いろ〳〵とお世話になりましたさうで、うーん、わたくしから、あ、厚く、お禮を申しあげます。

前島。どうも、なんとも申しあげやうが御座いません。これから、といふところで、實にお氣の毒なことでした。遺骨が着いて、東京で告別式のやうなことがありました時も、こんな田舍住居をしてゐるもんですから、承知しながら、つい失禮して了ひまして……。

富永。どう致しまして。二月の、ゆ、雪の降つた日で、て、寺は邊鄙(へんぴ)ですし、態々(わざ〳〵)來て頂いた方に、却つてお氣の毒で……。し、然し、あれも、皆さんの御厚情は、必ずや地下に、深く、か、か、感佩いたして居りますことでせう。……と、ところで、御承知かどうか存じませんが、わたくしどもの、せ、生家は、男ばかり、ろ、ろ、六人の兄弟でして、は、速雄の、玉木といふのも他姓を繼いで居りますんですし……。

前島。さうださうですね。……どうぞ、ほんとにおかけくださいまし。

富永。いや。有難う御座います。(ト、尚ほ立つたまゝ。)また、わ、わたくしの、名のつて居ります富永といふのも、や、矢張り養家の姓でして、生れました家は、あ、會津の、佐々木と申します、小祿ながら、し、士族の出で御座いまして、速雄などは、た、多分憶(おぼえ)がなからうと思ひますが、お、親爺(おやぢ)と云ふのが、い、い、いつぷ變つたやつでして、東京へ出ましてから、いろ〳〵やりましたなかに、今で申せば、つまり、は、俳優學校のやうなものですが、いづれ、と、當時のことで、寺小屋式の、ほんの、つ、つ、詰らんものだつたでせうけれど、い、一時は、そんなことも、し、し、して居りました……。(頻と息を喘ぎ、目を瞬(みは)くやうにする。)

前島。ほんとに、貴方、無理をして、さうして立つていらつしやることはないぢアありませんか。おかけなさるなり、どうです、こつちへおあがんなさいましたら。

富永。は、はい。そ、それよりも、恐れ入りますが、み、水をいつぱい……。(ト、手巾包をときかける。)

前島。あゝ、ほんとに、氣がつきませんで、まだお茶も差し上げませんで……。(奥へ、)おい〳〵。誰かア。

富永。いえ、な、何しろ、胸の病氣で、と、夙にもう、醫者にも見放されてるやうな、か、體ですから、どちらへ出ましても、け、決して、お茶も何も、い、頂きません。……恐れ入りますが、(ト、包からコップを把り出して、)こ、これに、水をいつぱい……。

そこへ、奥から女中が出る。

前島。さうですか、ぢア強いてお勸めしません。……おい、(ト、女中の方へ、)これに綺麗な水を汲んで來ておあげ。

女中コップをうけとり去る。

富永。で、わ、わたくしの身の上は、……速雄も、ご、御承知の通りの、あゝいふ男ですし、わたくしとも、は、夙くに大喧嘩を致しまして、別れましたきり、ま、まるで、行き來も致しませんでしたから、多分、わたくしのやうな、や、や、やくざものゝ兄貴があるなんてことは、み、皆さんに、お話してなからうと思ひますが……。

前島。えゝ、實は、わたしも、お名刺を見た時、ちよつと不思議に思ひましたんですが……。

女中が水を持つて出る。

富永、會釋をしてうけとり、うしろ向になつて、ゴク〳〵と飲みほす。

女中去る。

富永。(さうでせう、といふ風に頷いてから、)わたくしも、こ、これまで、いろんなことをして來ましたが、一々それを、お、お話し申しあげてるんではきりがありませんから、これを見て頂かうと思ひまして……。(ト、袂をさぐり、一通の手紙を出して、押しやり、)こ、そ、それに、先刻申しあげた、親爺の俳優學校にゐた人で、し、發火前

まで、横濱で可なりにやつて居られた小澤といふ方から、そこの出身者の方々に、わたくしの窮狀を愬へて、…

…お、お恥しい話ですが、寄附をよせてくだすつた、その、か、か、勸誘狀の殘りなんですが、大體のことは、そ、それに書いて置いてくれましたから……。

前島、手紙を展げて讀まうとするが、富永がなほ話し續けるので、膝の上に置き、聞く。

富永。その、小澤といふ方には、偶然横濱の街で出會ひましたのですが、いろ〳〵と、當時のわたくしの樣子を聞いてくださいまして、それぢア、君、君の、おと、阿父さんのお世話になつた人間で、今もう可なりになつてるのが澤山あるから、役者では、Sもさうだし、Kもさうだ、また、そ、その方面でなくても、心當りの人があるからつて、ご、御親切に云つてくださいまして、そのとき集りました金で、ち、ち、茅ヶ崎に、一軒、小さな家を建てゝ頂きまして、地震前までは、そこに居りましたんですが、い、一年たつかたゝないうちに、あの騷ぎで、…

…無論家はつぶれて了ひましたが、運よく、か、わ、わ、わるくか判りませんが、まア、わたくしは、今日までかうして、命だけは……恐れ入りますが、もう一杯、み、水を、どうぞ……。

前島。えゝ〳〵。

ト、女中を呼び、また前のコップを渡してやる。

富永。ど、どうも度々恐れ入ります。

前島。ぢや、ちよつとこれを拜見します。

ト、手紙を讀み始める。

女中、水を持つて出る。

富水、飲んで了ふと、庭の隅に行き、丸まつちくしやがんで、もう一度注射をする。

前島、讀みながら、その方へ、時々不安さうな眼差を向ける。讀み終る少し前に、富水はまたもとの位置に歸り、相變らず立つてゐる。

同右。（手紙を卷き納めながら、）ふーん、さうですか。……お見うけしたところ、貴方は、わたしなんぞとさう大して違ひはなささうですが、郡司大尉とは、隨分古い話ですな、失禮ですが、おいくつです。

富水。いや、そ、それア、郡司さんの、さ、さ、最初の探檢は、古いことで、無論わたくしも、まだほんの子供でしたが、その後、た、大ぶんたつてから、少年探檢隊といふのを、わたしが組織致しましたんで、む、無論、郡司さんには、いろ〳〵御指導をうけたり、お世話になつたりしてますが、じ、時代は全然違ふんです。

前島。その時貴方はおいくつでした？

富水。（殆ど同時に、）その後も、た、度々千島へは渡りまして、オンネコタンなんていふ無人島は、た、たゞあがつただけなら、まだほかにもありませうが、そこで何ケ月か住んでみたのは、に、日本人では、わたくしが最初です。

前島。ぢア、その時はお一人だつたんですか。

富水。いや、ア、ア、アイヌのやつ等を、十四五人つれてつてました。（そこで急に聲をひそめて、）あ、あ、あすこには、わたくし、ちよつと隱して來てあるものがありますんで、それでかうして、今日、せ、せ、先生のところへもお願ひに出たやうなわけなのですが、こ、こ、このくらゐの、（ト、親指と人さし指とで、間一寸ほどあく輪をつくつてみせて、）太さで、このくらゐの、（ト、兩手で一尺五寸ほどの長さを示し、）純金の棒ですが、は、は、八本、あすこに埋けて來てあるんです。わたくしが、これまでに、その話をしたのは、御承知ですかどうですか、

お、お、押川春浪、あの男と、それから日露戰爭當時、て、鐵橋の爆破を企てゝ、取ッ捕まつて、沖貞助と一緒に、こ、こ、殺された橫川つてやつがありますが、そ、そいつが、まだ朝日新聞の、き、記者をしてゐた時分です。二人とも、た、大へん、乘氣になつて、一緒に取りに行つてくれることになつてゐたんですが、そのうちに、ふ、二人とも、まア、あんなことになつて了ひまして、い、今、貴方にお話しするのが三度目です。

　また例の、泣くとも笑ふともつかないやうな表情。

　前島は、狐につまゝれたやうな顏つき。

同右。で、わたくしも、今までは、い、醫者がなんと云はふと、も、もう一遍よくなつて、自分で、オンネコタンまで出かけて行つて、と思つてましたが、この二三日、これアもう、いよ〱、だ、だ、駄目だと、はつき見極めがつきましたから、今朝、看護婦の隙を見て、じ、實は、こつそり病院をぬけ出して來ましたんです。そ、それで、わたくしは、汽車ぢアとても堪へられさうもありませんが、船なら、永年、ほ、殆ど、半生をその上で暮して來たと云つてもいゝほどで、り、陸にゐるより、よつぽど樂なくらゐですから、これから、よ、橫濱へ行つて、船で、小樽まで行つて、あすこに、ひ、ひ、一人、友達が居りますから、……こ、これも船乘りで、……一体、船乘りなんてものは、昔の博奕うちと同じことで、な、仲間の者が來て、賴む、と云へば、じ、自分は、く、く、食ふものを食はないでも、必ず世話をし通すもんですから、と、と、當分まア、そいつのうちにころげ込んでゐて、し、心底を見極めた上で、賴みになるやうでしたら、例の金塊の秘密をあかして、代りに行つて、と、と、取つて來て貰はう、と決心をつけたんですが、それについて、貴方へのお願ひといふのは、ほ、ほかでもありませんが、もしわたくしが、途中でなり、よしんば、お、小樽までたどりついたとしても、まだ、き、金塊

を手に入れないうちに、ヒヨツと、し、死にでもするやうなことになつた場合にです、誠に恐れ入りますが、て、手紙を一本、玉木の親爺に屆けて頂きたいのです。

前島。お安い御用ですが、矢つ張り今でも、大阪にお住居ですか。

富永。それが、……あ、あれも、わたくしどもの生家と同じ會津の人間でして、もう年をとりましたもんですから、時には、く、故里の方に歸つて居りましたり、また、大阪の店の方へも出かけてるといふ風で、ね、年中、あちこちして居るやうですから……。

前島。え〻、よござんす。そのくらゐのことを調べるのはなんでもありますまい。確にお引きうけ致します。

富永。あ、有難う御座います。さ、早速の御承引で、わたくしも、こ、これで、まつたく、ひ、ひ、ひと安心致しました。（ト、涼臺に額をすりつけんばかりにして喜ぶ。）

前島。どう致しまして。それくらゐのこと、なんでもないぢやありませんか。

富永。いえ、もう、初對面の先生に對して、いきなりこんな、ご、御無理を願ふなんて、失禮は重々承知して居りますのですけれど、速雄からの手紙の毎に、な、なんかの場合には、前島さんにお願ひしろ、つて、いつも必ずさう書いてよこしてありましたものですから、お目にか〻るのは初てですけれど、わ、わたくしの方では、さう申しては失禮ですけれど、い、いつの間にかもう永年御懇意に願つてゐる方のやうな氣も致しまして、ついどうも、とんだ御迷惑なお願ひを致すやうなことになつて了ひましたので……。

前島。四五年前に、玉木君が、……あれは、半年くらゐもゐたらうか、一週歸つて來てゐたことがありましたね、あの時には、貴方、お逢ひなすつたんですか。

富永。いや、あ、あの時には、たうとう逢ふ機會がありませんで、文通しだしたのも、その後のことです。

前島。わたしも、ずつと以前、まだこつちにゐたうちは、可なり親しくしましたが、彼方へ行つてからは、お互に筆不精で、殆ど文通したこともありません。中歸りに歸つてゐた時だつて、たつた一遍しか逢はなかつたくらゐで、決してさう親しい仲ぢアないんですが……。もつとずつと親しくしてる友達が、わたしの知つてるだけでも四五人はあります。……さうですかねえ、わたしのとこへ行つて頼めつて云つて來てありましたかねえ

富永。それはもう、手紙のたんびに、先生の、お、お名前の出てゐないことはありませんでした。じ、地震前でしたら、さういふ手紙だつて、お目にかけられたんですが、あ、あ、あの騷ぎで、何もかもなくして了ひましたから……。

前島。それで、わたしがことづかつて、速雄君の阿父さんに屆ける手紙といふのは、今そこに持つて來ていらつしやるんですか。

富永。いや、そ、そ、それは、實はまだ書いてはないのですが、先生さへ御承諾くだされば、こ、こ、今夜にでも書くつもりです。……な、な、何しろ、わたくしの性分が、多少この、と、と、突角的なものですから、生家の方にも、先刻も申しあげたやうに、六人も兄弟がありますし、よ、養家の方にも、いろ〳〵、し、親籍もあるんですけれど、ひ、一人のこらず、この、義絶の態になつて居りますんで、……速雄だけは、まア、わたくしの、こ、こ、心持も、幾分知つてくれたやうですけれど、こ、これも、あゝいふことになつて了ひまして、…………あれの養父、謙次郎とも、無論わたくしは、け、け、喧嘩別れになつて居りますのですが、これは、ほかのやつ等とは、ちよ、ちよつと、人間の出來が違ひまして、と、兎に角、人情は解する男です。無論、わたくしの生きてます限りは、の、のたれ死に死にかゝつてゐるそばを、と、通り合せたとしても、か、必ず、振り向きもしずに行き過

ざるやうな、いじ、意地ッ張りですけれど、そ、それだけ、死んだと聞いたら、せ、線香の一本くらゐは、こ、心から手向てくれる男です。わたくしなんぞ、もう、い、いつ、どこでくたばらうと、誰にも、さ、さ、些の影響もないことですが、たゞ、小樽にゐる友人のとこで、世話になりばなしで、し、死ぬことになつても氣の毒ですから、それだけ、た、た、玉木の親爺に、い、云ひ遺したいんで……。手紙の内容といつても、それだけのことで、ご、ごく、か、か、簡單なことです。

前島。お話によると、貴方は、なか／＼人並はずれた強情ッ張らしいから、云つたところで無駄だとは思ひますが、その御容態で、暑さに向つて、そんな無理な旅をなさるより、ちやんと茅ケ崎の病院に落ちついていらしつた方がよくはないんですか。さう云つちアなんですが素人目で見たつて、貴方の體で、そんな長旅に堪へられやうとは思へない。

富永。なればこそ、で、出かけなけれアならないんで……。途中で斃れりやアそれまでですが、小樽まで行けば、あ、あとはもう一息です。……最初、吾々が、オ、オ、オンネコタンに、上陸してみますと、阿米利加人の漂流者が、さよう、に、二三十人ばかりも、棲息してゐたらしい、け、け、穴居の跡がありまして、壁に、いろ／＼、彫りつけてあつた文字で、そ、そ、それ等の事情も判つたのですが、……無論、吾々もそこを住居にして、さよう、あれで、一月もたつてからでしたらうか、ぐ、偶然なことから、その穴のなかに、先刻御話したやうな、金の棒を發見したんですが、そ、それを、はたの者に話せば、いかにわたくしに、柔順に事へてゐたとは云へ、じ、人種が違ひます。た、忽ちわたしは、よつてたかつて、アイヌたちに、こ、殺されちまふ、さう思ひましたから、よ、夜、やつ等の寢鎮るのを待つて、い、一本づゝ、そうッと運び出して、……あ、あの、オンネコタンといふ島には、いづれあのへんの航海者がつけて、また、か、彼等だけにしか通用しない名前でせうが、さ、三角山つてのが

あります。その山の、ちゆ、中腹に、阿米利加の探險者の、ぼ、ぼ、墓地がある、——墓地と云つた、論、木ツ片を、十字にぶッつけたやつが、ひ、ひとつところに、から、か、か、かたまつて立つてるといふだけのことですが、そのなかの、あ、或る男の墓です、……貴方のやうな方を、お疑ひ申すわけぢアないが、必要もなからうから、まア、な、な、名前だけは云ひますまい。その、或る名前の彫りつけてある十字架から、ひ、左へ……、まア、だ、大體その近所です。そこへ、い、幾晩かゝつて、みんなひとまとめに、う、埋めて來たんです。……わたくしは、ど、どつちみち、な、永い命ぢアありませんから、今更、そんなもの、ど、どうでもいいわけですが、く、く、國のためにもなることです。と云つて、こればかりは、め、めつたな人間には、話されませんし、是非とも、い、息のあるうちに、自分で、自分で行つて……。ちよつと、し、失禮します。

もう一度垣根のそばへより、丸まつちくなつて注射をする。

前島、不安さうに見詰めてゐる。

下手から、正彦、學校歸りの打扮にて出で、すぐ玄關からあがつて來、茶の間にランドセルと帽子を投げ出す。

正彦。たゞ今。(富永には氣附かず。)パヽ、そんなとこでなにしてるの。

前島。お歸り。(嚴しく。)奥へ行つてらつしやい!

正彦。(富永を認めて。)だアれ?

前島。いゝから、マヽのとこへ行つて、お菓子でもお貰ひなさい。

正彦、不安と不平との顏色をして奥へはいる。

富永、戻つて來る。

富永。では、御多忙のところを大へんお邪魔致しました。わたくしは、こ、これで御免かうむります。

前島。まア、お待ちなさい。貴方、どうでもかうでもいらつしやるなら、甚だ失禮なことを云ふやうですが、旅費などの點で、もしお差支でもあるやうでしたら……。

富永。とんでもない！　わたくしは、さういふつもりで伺つたんぢアありません。け、決してもう……。

前島。ですけれど、船にお乘りなさるにしても、三等のところは二等、二等のところは一等といふ風になすつたら、それだけお體も樂でせうし、無論、さういふ御都合がついてゐるんなら……。

富永。いや、か、金なんぞありません。三等の賃金もどうかと思ふんですけれど、先生に、そ、そんな御心配を頂くなんて、それア斷然、こ、困ります。……ぢア、どうぞ、手紙のことは、くれぐ〵もよろしく御願ひ申します。

前島。それアもう、必ずどうにもしてお屆けしますから……。

富永。あ、あ、有難う御座います。それでもう、わたくしも、大安心致しました。ぢア、どうぞ、先生も、お體を、お、おひとひなすつて。……手紙は、明日にでも、郵便でお送り致しますから。

前島。承知しました。……ぢア、どうぞ、途中、お氣をおつけなさいまし。

富永。有難う御座います。お、お、奥様へも、どうぞくれぐ〵もよろしく仰有つてくださいまし。では、失禮いたします。

前島。さようなら。どうぞお大事に。

富永、よろぼひながら木戸を出る。
前島、立つて見送る。

――幕――

第一場終り、大詰へ續く。

暑さに喘ぐ

徳田秋聲

その日も泥沼のやうな重くるしい眠りから目がさめると、今日も暑さうな朝の瘟氣が、べとべと脂のにじんだ顔にむつと來るのであつた。

「今日もまた暑さうだな。」

彼はひとりでうんざりした氣持になつた。八疊釣りのごわ〳〵した蚊帳を、狹苦しい書齋の三分の一ほどの場所に釣るので、餘りが部屋の眞中におかれた卓のところに、半分ほどぐしや〳〵と垂らされてあつた。卓のうへには、吸殼の山ほどたまつた灰皿が二つ、コーヒー茶碗、昨夜おそくに食つた燒豚や漬けものゝ皿、レターペーパ、莨の罐、インキスタンド、花瓶の萎びた花、書簡、新刊書、朝から晩までのべつ幕なし開けたり閉ぢたりされてゐる空虚な蟇口、二三種の賣藥の壜、それから昨夜書きながら汗ばかり拭いてゐた濡れ手拭、そんなやうなものが、まるでこの頃の彼の生活を象徴するやうに、たゞ雜然と散らかつてゐるのであつた。その中に、好子が三年前の結婚生活の榮華の跡を語つてゐるやうな、フランスものらしい異樣な電氣

スタンドの、電球が二つ點くやうに出來てゐるので、彼のやうな仕事をするものには、ひどく重寶にできてゐるところから、すつかり氣に入つて、部屋との調和もおかまひなしに使ひなれてしまつたのが、夜寢るとき點けておく十燭の方の球だけが、四つの花瓣のやうなものから成立つた笠のなかに、夕榮えのやうな赤い光を例の明るさのなかに漾はせて、物憂さうに立つてゐた。

彼はまだ昨夜の感興――あんなに腕にまかせて書きなぐつても可いものだらうかといつた、悔ひと恥との入りまざつたやうな不安な氣持に蘇りながら、桃色メリンスに頁縮の入つた柔かい蒲團を、胸のあたりに被けながら、全身の快い慵さにうと〳〵してゐた。彼は昨夜のやうに澤山の枚數を一氣に書きとばしたことは、今までに殆んど經驗がなかつた。ペンが止めどもなく原稿紙のうへを辷つて、煙草を口にする遑もないくらゐ手が動いた。長い間の神經衰弱で彼の手はもう大分硬ばつてゐるので、いつもは慣れつたいほど、鉛でもへばりついてゐるやうに腕が重かつたのに、昨夜だけは不思議にそれが氣にならなかつた。

でも今朝はさすがに疲れてゐた。何時頃に寢たのか、それすら判らなかつたが、Sさんのところで、見晴らしの好いその書齋の廊椽に持出した椅子に腰かけて、三時間ばかり世間話に耽りながら、少し涼しくなつてから歸つて來て、家事の世話をやいたり、風呂に入つたり、食事をしたり、そんなことに可なりな時間を費やしてから、上半がひどく手に粘りついてしまつた作品の後半に、脈々取りかかりつたのであつた。多分三時過ぎでもあつたらうと思はれたが、それにしては今朝は割合ひに、いつもの睡眠不足の混濁が頭腦に感じられなかつた。

この六疊しかない書齋が、豚小屋のやうに散らかつて來たのも、もう大分前からのことであつた。しかし其れでも、この部分が彼の狹い借屋のなかでは、特別に綺麗な方であつた。茶の間、奧の四疊半、玄關脇の三疊、これから子供た

ちを置いてある、疊數の多い割りに使ひ道のない部屋の多い、これも古い陰氣な廢屋、どこへ行つて見ても氣持よく坐れるやうな場所は一つもなかつた。緣側や疊が砂でざら〳〵して、書物や雜誌や、着物や帶やシャツや洋服や、レコオドやそんなものが、無秩序にそこらに散ばり放題に散らかつてゐた。蓄音機のうへから脫ぎ棄が垂れてゐたり、緣側に蚊帳が投り出されたりしてゐた。彼は混雜と散漫その物のなかに、いくら稼いでも追つかない、才分の乏しい原稿生活者の慘めな影を、まざ〳〵見せつけられるやうな氣がした。そして其は矢張り彼自身產れついて來た運命であるところの、恒久の貧乏その物より外の何ものでもなかつた。それをいくらか貧乏くさくなく見せかけだけでも樂しげにしてゐたのは、何と言つても妻の產れつきもつてゐた、惡く言へばそれが見榮坊で、好くいへば彼女の色氣とかお手際とかいふやうなものではなかつたらうか。しかし彼はまた物質的な都會趣味をいくらか知つてゐた彼女のごたつき性から來る日常生活の煩雜さから、いつになつたら元の單純さに還元されるかを、長いあひだ時々考へてもゐたのであつた。其單純さを望む心は、やがてひどい貧乏のなかに人となつた幼少年時代の彼をはぐくんでくれた清純な家庭の空氣を懷しむ心に似通つたものであつた。それはやがてまた彼の頭腦と肉體とにかゝつてゐる複雜な生活の重荷からの逃避本能でもあつた。

「おい、おい、誰か來てくれ。」彼は蚊帳のなかから呼んだ。

次ぎの間には子供たちの聲がしてゐた。

「お父さんが……。」誰かゞ言つた。

「蝶子ちゃんでもいゝ。」

そこに末の子の蝶子が絞りの寢衣で現はれた。

「はい、はい、何ですか。」蝶子は今朝は機嫌が好かつた。

「蝶子ちやん今朝はいゝの。」

蝶子は甘へるやうに頷いた。

「ちよつと其の電氣消してちやうだい。」

「電氣ですか。」蝶子はさう言つて、笠の下へ手を入れて、小さい手に鎖を引いた。暑い感じの電氣がぱつと消えた。

「おばちやんの電氣お父さん此頃使つてゐるのね。何うして使ふの？」

「工合がいゝから。」

「おばちやん何時歸るの？」蝶子は又た思ひ出したやうに訊いた。

好子が田舍へ行つてから、もうづゐぶん長くなるので、蝶子は一と頃のやうに、さうヒステレカルには待たなくなつた。手紙が來ても直ぐ彼の傍へ寄つてくることもなくなつた。彼は安易な氣持になつてゐた。若し蝶子の氣分が一と頃のやうに、一刻も好子への思慕から離れなかつたら、彼もおち〳〵仕事なぞしてゐる空はないのであつた。

でも彼はこの圖書館箋を、時とすると原稿紙よりも餘計つかふほど、好子へ手紙を書いた。好子から來る長々しい手紙にも、二三日來の元氣と氣分の冴えが出て來てゐた。彼女は手術後づつと床に横はつてゐた。彼はさうして離れてゐることが今はさして悩ましくはなくなつた。手紙にもヒユモアが出て來て、遠くで笑み交はすやうな言葉の遣取りを享樂してゐた。淡い餘情が、むしろプラトニックな氣持で、仄かに胸に通ふのであつた。これなら是で、さう寂しくない氣分で、讀んだり書いたりすることができさうに思へた。

どうかそんな惡魔的なことをお考へにならないで、おちついてお仕事をなすつて下さいまし。病床の私をひどい言葉で、餘りいぢめないやうにね。あなたのお言葉一つで、凋んだり咲いたりする私なのですから……

好子の手紙には、そんな風の文句があつたりした。

「さあ、いつ歸るかね。もう歸らないでもいゝだらう。」

蝶子はにつと微笑んだ。そして緣側を駈出して行つた。

彼はそろ〳〵蚊帳を這出した。どこかの繁みのなかで、小蟬かじい——と啼いてゐるのが、耳にしみた。空が碧々と澄みわたつてゐた。彼はこの頃空なぞ餘り氣に止めたことはなかつた。彼は今漸く深い惱みから和められることが出來た。

　茶の間へ出てみると、相變らずごみ〳〵したものが散らかつたまゝで、まだ掃除もできないところで、餉臺のうへで粗末な朝飯がはじまつてゐた。次ぎの間も床をあげたまゝである。

「おい〳〵掃除くらゐして御飯にしたら何うだい。」彼は誰に言ふともなくさう言つて、顏を洗ひに出て行つた。誰に責任があるといふんでもない。女中一人で手廻はりかねるのである。女中は朝から晩まで、主人の彼は勿論、多勢の子供たちによつて、絶えずその名を呼ばれどほしである。彼女は何うかすると、何んにもしないで、子供たちとすつかり差別撤廢の自由さで遊んでゐることもあるし、子供たちと衝突して、まるきり働かなくなつてしまふこともある。疲れて物置きのところで、太い脛を出したまゝ大の字なりに寢てゐることや、子供たちの蚊帳の端へ入つて、寢込んでしまふこともあつた。

「私も惡いんですけれど、三郎さんが餘り無理を仰やるから、お暇いたゞきます。」しづやは目に涙を一杯ためて、よくさう言つては彼を手甲摺せる。

唯一の働き手のしづやに行かれては、全く飯を食ふこともできはしない。彼は言葉を優しくして宥めるより外なかつた。

「家の勝手を知つてゐるお前に今行かれたんぢや、全く遣切れないんだからね、まあそんなことを言はずに、家のものと思つて、もう少し居てくれ。」彼は哀願した。

しづやはその上強情は張らなかつた。

「お前たちはしづやに小言を言つては可けない。しづやもかうやつて一人で働いてくれてゐるんだから、感謝しなけあならない。お前たちと別に變つた人間ぢやないんだからね。」彼は子供にも言つて聞かせた。

勿論子供の可哀さうな場合もあつたし、しづやの可哀さうな場合もあつた。つまり母が亡く、主婦がないと云ふことが孰にも可哀さうな運命であつた。十七になる美代子は、今初まりかけたばかりの共同生活に對する自治精神の比較的乏しい子供たちのなかでも、女だけに一番自分の運命を知つてゐるやうに見えた。そしてしづやの力をかりて、弟達の單衣ものを買つて來て縫つたり、父の肌襦袢を仕立てたり、何かしら始終暑い四疊半の椽のところに坐りこんで、剪刀や針をもつてゐたが、何うかすると又小机に倚りかゝつて語學のお浚ひに熱中してゐた。

彼はそれらの子供を見ると、早く仕事を仕上げて、どこかへ遣つてやらなければならないと、氣が苛々してゐた。

「仕事があがると、どこかへやつて上げるよ。どこがいゝかね。」

「海がいゝの。」妹子が言ふのであつた。

「海もいゝね。けど海だと何處か家を搜して行かなけあならないし、皆んなで働ければいゝけれど、誰れも働きやしたいもの。溫泉だと旅館にゐられるけれど、やつぱりお父さんが行かなけあ駄目だからね。今年も來いと言つて來てゐる

から、信州にするかな。あすこならお前達だけやつておいても世話がしてもらへる。」彼の計畫は日が迫つてくるにつれて、段々縮少されて、落着くところへ落着くより外なかつた。

彼は久しぶりで、好きな伊香保へでも多勢で代りばんこに行つてみようかと、つひ一週間前まで思つてゐた。

「けれど彼處も阿母さんと行つたきりだつたからな。餘り好い氣持がしないな。」

「あすこは子供をつれて行くところぢやないですよ。洒落れた着ものを着た、ブルジョウア階級や、花柳氣分を見るなら、あすこなんか面白いでせうけれど。僕友達が行つてるから、ちよつと輕井澤へ行かうと思ふ。」市郎が決定してゐるやうに言ふのであつた。

「輕井澤は莫迦に高いつて言ふぢやないか。」

「そんなことはないさうですよ。安いさうですよ。」

「それあお前の友達は皆なブルジョウアだから。」

「同じブルジョウアでも輕井澤へ行く人は、ちよつと違ふやうだな。皆んな變な洋服を着たやうな奴ばかりで、ぞろりとした風をしてゐるものはゐないさうで。藝者だとみると、何んなに素人風をしてゐても追拂ふんだつて。だから子供なんかつれて行くにはいゝんです。御父さんなんかにや實に詰んないところださうだ。是非一度來てみろといふから……。」

「それなら皆んなで行つても可いけれど。まあ、もう一寸後にならなけあ。」

父子がそんな會話をしたのも、天氣がかつと暑くなつた頃であつた。

「あゝ。どこか山へでも行きたいな。」彼はそんな暑さが二三日つゞくと、身の置場がなささうに、側にそれに同情してくれる妻にでも訴へるやうに言ふのであつた。しかし彼女は墓場の土の下に、今年は涼しい骨となつてゐた。去年の今頃、

信州の親類の家にゐた彼女は、めつきり健康が衰えて、顔も姿もどこか寂しかつた。彼はその時もそれに氣がついてゐたが、でもそれが死の影であらうとは思ひもかけないことであつた。一年たゝない今の彼の心を占領してゐるものが、時々彼の書齋へ來ていつも愼ましげに隅の方にすわつて、そこへ茶や菓子を運んでくる妻が、手持無沙汰に引込んで行くよりほかないほど、すぐれて花やかな雰圍氣と、潤やかな情趣とをそこに漾はせてゐた、若い今の好子であらうことも、丸るきり想像のつけやうもない取つてつけたやうな珍奇な運命であつた。

「先生の御家庭は、長いあひだに築かれて、ちやんと出來てゐるんですから、それを崩さずに、お子さん方から一歩退つて、藝術家の先生に奉仕するやうな人でなくては駄目ですわ。」

それは妻を送つてから、まださう日もたゝないほどのことで彼は全く病み疲れてゐた。しかし彼はこの不幸な運命から、何うしても撥ねかへらなければならないと思つてゐた。彼は長いあひだ半分以上も妻の氣分によつて成長して來た、といふよりも總てが複雜から複雜へと、盲目的に擴がり重なつて、彼の本質までが、次第に重苦しい經驗の下積みとなつてしまひさうな、老境の悲哀を感じてゐた。妻の突然の死によつて、彼もやがて陷ちて行かなければならない、合體の知れない暗い死の蹊が、不斷にそこに横はつてゐることに氣づいた。彼はそれを怖れもしなかつたが、樂しむべきものとも思へなかつた。たゞ分擔の運命になつてゐた生活の責任をそこいらへ卸ろして、永久の苦勞から脱れ去つた彼女の姿が悲しかつた。しかし其とはまるで矛盾した想念で、彼自身には自由がまた還つて來たやうな喜悦を感じた。縛られてゐた絆が、ぽろ／＼と自然に朽ちおちたやうな身輕さを感じた。そして總ての生活を、思ふさまに自分に取戻すことに、私かに希望を寄せてゐた。二人で歩きつけたものが、獨りになつたやうな旅路の氣輕さが想像された。そこへ好子が飛びこんで來たのであつた。思ひもかけない別の運命と、新しい惱みの世界がそこに拓けて來た。然え

さる生命が好子によつて、湧き出しさうに思へて來た。さうした深い惱みを知ることのできなかつた今までの人生の總てが、影のやうに迹を消してしまつた。長いあひだの經驗がまるで無駄なものになつて、戀愛を中心とした深刻な人間苦が、彼を試さうと押しよせて來るのであつた。彼は時とすると、心臟がじり〳〵止まりさうになつた。また時とするとそれが高く昂揚された。

今彼は好子と離れて、子供たちと一緒にゐたが、彼を失つた子供たちは彼の生活の對象ではなかつた。二人で凝視めてゐたとき、彼等は彼の生命の連續であつたが、妻の死によつて今は全く二つの世界に切斷された感じであつた。子供は享樂ではなくて責任であつた。短かい生涯に果しえられない其の責任を感ずるとき、彼は子供たちを――殊に小さい子供たち、その中でも女の子を一入いとしく思つた。母のない女の子の心の貧しさを、彼は妻の死の瞬間から、痛いほど感じさせられた。

彼女は母によつて甘やかされ、總ての母がさうであるやうに、殆んど彼女の見榮と矜その物であつたとしか思へないほど、何かに細心の注意と愛をそゝいでゐたゝめ――勿論それは重もに物質の方面で――一層彼等が彼の自分流儀に作られたものではなくて、或ひはせい〴〵干渉主義を避けて、彼等の自由な性情を伸ばすことに力めながら、或る範疇を設けておいた彼としては、いくらか期待を裏切られた失望がないでもなかつた。多勢の子供の前列に立つものがさうであつた。それは其の子供としては、それが尤も好い行き方であるにしても、絶えざる不安が父としての彼をおびえさせ苛立たせるやうな、そして又他の子供たちの運命にも關するやうなことだつたら、彼にはたゞ淡い幻滅があるだけであつた。

でも好子が遠くに離れてゐる時は、市郎は父の孤獨を慰めることに、優しい心遣ひをしてくれるだけの、子供らしい

善良性をもつてゐながら彼は好子達がゐての父の性癖をよく知つてゐながら

「成行きに任かしておいたら可いでせう。あの人だつて自分でも解らないんでせう。」

「さう云ふ氣持にはなれないな。今はさうでもないけれど。かうやつて一人でゐれば、書けもするし、一途に藝術の方へ向いてもいけるんだが、でも何うせ離れるものなら、早く離れた方がいゝと思つてね。けどまた何うしても離れないといはれると、こつちから離れるのも何だかな。藝術家として、かう云ふ事件に職業心理が働かないでゐるといふ譯にはいかない。滅多に逢遭しがたいことだからね。それが自分の主觀が、ぐつと中へ喰込んで行くことだから、迚も有難い經驗なのさ。」

市郎は微笑んでゐた。

「或人は材料取りだと言つてますね。」

「そんなことはない。己はこれほど眞劍な生き方をしたことは嘗つてない。材料といふのは結果にすぎない。材料を自分で作るなんて、己にはそんな芝居氣はない。」

「女なんて好い加減通人趣味でやつてゐれあ可いぢやないですか。」

「さうすれば苦しくないことはわかつてゐるが、己にはさういふ要素は餘りない。柄でもない。」

「シユニツレルがあすこにあります。」

「あゝ、シユニツレルも少し讀んでみよう。」

「Oさんなんかは、初め家庭や子供さんのために、あの人を容れたのに、今では藝術品だなんて――こんなことも言つてゐます。」

「それあ仕方がないさ。こんなに小姑のやうな子供が澤山ゐて、その中へ入つてゐたところで、自分の家庭になる譯ではないし、初めはさう思つて來ても、現實にぶつかればさうも行かないんだから。」

「金のないところに止つてゐる女ぢやないつて、そんな事も言つてますよ。」

「それあ好子にだつて幾分打算もあるだらう。それに贅澤な方でもあるし、自分の子供の前途も考へるだらうからね。今はもう家の子供のことなんか、問題ではなくなつてゐるのさ。それで己とも續けたいんだから……それも疑へば際限はないけれど、そこまで疑ぐるのは惡いと思ふな。戀愛のテクニックなんて、通じてると言つたところで、それは知れたものさ。」

好子の讃美論がはじまりかけさうなので、市郎は口を噤んでしまつた。

「銀座の方へでも出てみようか。」

「えゝ可ござんす。」市郎は直きに賛成した。

二人は仕度して出た。

「好子さんて、しかし何だかわからんな。新しいんだか古いんだか。」

「さうね。」

「モダアンガールなんて、あんな艶美なもんぢやないからな。化粧なんか決してない、服装なんかもつとさつぱりしたもんで……。」

「化粧はするだらう。黄色い白粉なんかつかつて。このあひだもお茶の水で、好子とあるいてるとき、あれは女中を捜しに行つたとき、さう云ふ女に逢つた。やつぱり現代式の新しい化粧を、迚もやつてゐるんだつて。眉だつて目だつ

て。」

「いゝや、さう云ふのは下等な家の娘ですよ。ほんとのお上品な女は、しませんよ。」

「さうかな。」

正門前に立つてゐると、小型のタクシイの空車がやつて來た。

「これに乘らう。」

市郎はそれを呼びとめた。車は直きに動きだした。

「東京に殘つてゐるものには、餘り氣のきいた人間はゐないな。」市郎は白く乾ききつた道路に目をやりながら言つた。

「さうでもない。今年の夏は東京も人が多い。いつもはこの道路なんか、夏は寂寥としてゐるんだけれど。」

「でも大概行つてゐますね。」市郎は自分も早く行きたさうに言ふのであつた。

「まあ、しばらくお待ち。どうせ月末にはK—市へも點呼にも行かなけあならない。一人でさうぶい〳〵行かれても困る。少しは外の子供とも纏まつてゐなければ。己が何から何まで見なけあならんのだものな。」彼は思ひ出すとぞつとするほどであつた。子供の着ものだとか、夜具の洗濯だとか、それも毎日のことに追はれて考へてゐる暇もなかつた。彼は面倒なことには成るべく目をつぶつてゐるより外なかつた。食事なんかにも、何か注文をつけることは、迚も大變なことであつた。彼は仕方なし目をつぶつてゐた。辛いものは舌がひりつくほど辛かつたり、甘いものは砂糖漬のやうに甘かつた。

彼は台所へ出て、したじの使ひ方などを敎へたりしたが、そんな事も誰れか頼りかゝれるものがあつてのうへの興味や趣味で、それが餘裕のないほんたうの台所の仕事だとすると、悲哀が胸へ押し寄せて來るばかりであつた。

つひ三四日前まで、よく働いてくれる女中が一人ゐたのであつた。しかしそれも良人が寂しがつて、迎ひに出て來て、裏の家に一晩泊つて、一緒に歸つて行つた。

「とても亂暴な女だつたな。」

「何んにもわからない女ね。あの蓄音器を三十圓もするかなんて、があ〳〵掛けてやがつて、セロなんかも十圓ぐらゐのものだと思つてやがる。自分で亂暴にひいて、糸を切つてしまひあがつた。」

「レコードだつて割つて行つたよ。」

「急須やお茶碗のみえなくなつたものが、澤山あるの。好いものと惡いものとの區別が少しもわからないの。」姉娘の智惠子も言ふのであつた。

「人間はよくてよく働くんだけれど、あれでも困るな。荒仕事しけあ出來ないんだから。」

去つたあとの評判は散々であつた。それにこんな女中がゐると、しづやか少しも働かなくなることも、彼には手のつけようがなかつた。仕事の分擔で、二人はいつも小鬪合ひをしてゐた。結局働いては損だといふ觀念が、彼等をすつかり無責任にしてしまつた。

その女中が去つたとき、ちやうど詩など書く才分のある女給が一人やつて來て、來て働いてもいゝと言ふのであつた。彼はその苦惱の多い身のうへに同情した。そして小まめに働いてくれさうなので、頼まうかと思つたけれど、その良人の病氣が氣にかゝつた。彼は好子のところへも、ちよつとそんな事を言つてやつた。それに對して好子からは長たらしい手紙が來た。

「まあ何よりも何といふ先生でせう……。」

好子はさう云ふ風に書いて來た。彼は噴笑してしまつた。それに好子は一體自分の困り方を少しでもわかつてゐるんだらうか。歸つて來たところで、自身家のことを少しもやつてくれる氣はないではないか。彼もそれを彼女に要求はしなかつた。

でも何うにかかうにか、餓じい思ひもしないのであつた。

「有難いことには、これでも飯は食へるね。若ものも何うにかかうにか。これも今年一年だけれど。」

彼は泣面をかくにも掻かれなかつた。

「お父さんもかうやつて生きてゐるのが不思議だな。」自動車のなかで、彼は空虚な笑ひ方をした。

「餘り考へない方がいゝんですね。」市郎もいくらか棄鉢氣味で言つた。

「やつぱり貧乏といふことが、一番苦しいな。精神生活を保證するだけの物質がないといふことは、實に悲慘だね。それに普通金持階級なんてものは、一般に鈍感だからな。」

「鈍感がいゝんでせう。」市郎は笑つた。

「それだから問題がおこるんだ。」

「金持の方がいゝな。貧乏人は何だか妬み魂情があつて。しかし金持も安心はしてゐられませんね。この頃の金持は、家を建てるにも、成るべく門やなんか外觀は吝にしたり何んかして。金持が金を矜ることができないとなると、ちよつと……。」

「いや、やつぱり矜るよ。金持階級の顏には金が垂下つてゐるよ。銀座を歩いてる連中なんか。」

「金持は銀座なんか歩きませんよ。銀座を散歩するのは、みんな家にゐても詰らない奴ですよ。金持にはもつと面白い

ことがありさうだからな。」

「兎に角金持の鈍感と押しのつよいのは可けない。」

銀座をおりた。そしてぶら〳〵歩いた果てに、或る喫茶店へ入つて、少しばかり飲食ひをしながら、絶えず出たり入つたりする人を、ぼんやり眺めてゐた。彼に取つてはそれは寧ろ怠屈な時間であつた。恐らく彼はどこへ行つても、何を見ても怠屈でならなかつた。あの人達は何が面白くて、あゝやつて生きてゐられるんだらうと思はれた。

「つまらないね。」

しかし市郎などには、かういふ處をぶらつくことが、やつぱり活き〳〵した享樂の一つでもあるだらうと思へた。

「みんな幸福さうな顔をしてゐるな。」

「それで可いんですよ。」

やがて勘定をすませて二人はそこを出た。そして又ぶら〳〵歩いてゐるうちに、彼はふと一本のステツキに目をつけた。それは籐のステツキであつた。

「ちよつと可いな。高さうだな。」

「さあ。」市郎は定價附のペーパをのぞかうとしたけれど、裏になつてゐて見えなかつた。市郎はづか〳〵店へ入つて行つた。彼も續いて入つて見た。飾店にあつたのの外に、硝子戸棚のなかから籐のを幾本となく出させて見た。そして詮衡の結果、さう飛びはなれて高くもなく、さう安くもない一本を買つて、彼は得意さうにそこを出た。

「飛んだものを買つたたな。」彼は子供に遠慮するやうに言つた。

「いゝでせう。少し年取つた紳士はみんな其のステツキの様なのは持つてゐますよ。」[illegible]

彼の頭に載つてゐる帽子も、この前好子が田舍へ歸つてゐるあひだに、二人で銀座を散歩したとき、市郎の見立てゝ買つたものであつた。それは淡色の柔かい羅紗で、鍔が白く縁取られたものであつた。彼には氣の差すやうな代物であつたが、市郎の說では老人紳士の帽子だといふのであつた。兎に角輕くて冠り心持はよかつた。カン／＼を嫌ひな彼には、ちやうど好い見つけものであつた。

家へ歸ると、もう七時頃であつた。子供達はちやうど食後の時間を茶の室で過してゐた。智恵子は何か縫ひものをしてゐた。彼等の賴りない氣持を想像すると、彼はすぐ胸が痛むのであつた。姉妹の二人が殊にも哀れに見えた。でも彼等は相寄つて、兎に角その日その日を送つてゐた。

「みんなで寄り合つて、力づけて行かなければ。」彼はしみ／＼さう思ふのであつたが、それを考へ出すと、心がまた限りない暗さに引入れられるのであつた。

その晝頃になると、一層暑くなつた。彼は昨夜の仕事で疲れたせゐか、氣がいら／＼してゐた。家事を見るといふことが、藝術への自分の生活氣分をひどく濁してしまふやうに思へた。

「早く何うかしなければ。」彼は一個にさう思ふこともあつたが、時とすると又結局鈍感でゐられることもあつた。

「どうも妹子の蒲團は少し暑いがね。何か夏蒲團がないのかね。あつた筈ぢやないか。」

「探してみませう。」しづやが困つたやうに言ふのであつた。

「この間もそんな事を言つて、ちつとも出してくれないぢやないか。」

「一度探してみましたけれど。」

「去年唐草模様の麻のを作つたはずだがね。小さいのを。他にも色々あつたと思ふがな。誰れか着てゐるんぢやないか。」

「兄さんのがさうぢやないかしら。」智恵子がおづ〳〵言つた。

「あれさうでせう多分。」

「可けないな。麻の蒲團なんか、已だつて去年が初めてだ。」

「あつちにあつたものですから。しかし今は病氣で寢てゐるのなら。」

彼は裏の家へ行つてみた。この父と子は、ひどく親しくなることもあつたが、又ひどく不愉快な顔を爲合つてゐることもあつた。次ぎの子供は少しも父の傍へ寄つてこなかつた。兄弟の性格はまるで逆つてゐたが、兄弟なかはひどく好かつた。

「おい十次、一と撞きやつてこよう。」さう言つて兄は弟を引張出した。

弟の方が球の筋が好いのであつた。或る夜彼は一度球撞場へ行つてみて、それを知つた。兄もそれを宣傳してゐた。

「お前のは少し荒い。氣象のとほりだ。十次は落ちついてゐる。お前は少し粘ばりつよく、しつとりしなければいけない。天才でない限り、何をやつたつて錬れなくちや駄目だ。」

「今ちよつと進境にあるところなもんで。僕のは中りだすと莫迦に中るけれど。」

市郎はそんな事を言つてゐた。

球撞きなら兄が後輩であつた。そして大概二人で行つたが、外のことだと誘はれても、十次は應じないことが多かつ

た。劇場だとか、銀ブラだとか音樂會とかには、弟は餘り共鳴しなかつた。

「十次は何になるかな。やつぱり實際家かな。」

「さうでもないんですよ。己は文章の天才だなんて威張つてるから。」

「そいつは困つたな。」彼は大笑した。

そんなこともあつたが、しかし兄とは全然毛色がちがつてゐた。

この頃彼は髪毛を少し氣取つて、捲いてゐるやうに見えた。白いセルのヅボンなんかはいて、白粧で、脊廣姿の兄と二人でお揃ひで出かけるのを見たこともあつた。

「何だ、まるで紳士のおそろひみたいだ。」彼は忌々しさうに言つた。

「あんなトラウザア何時こしらへたの。」彼は後で兄にきいて見た。

「さあ。」兄もとぼけてゐた。

「お前のかい。」

「いゝや。」

詳しく訊くと彼は不機嫌であつた。でも彼はやつぱり氣にかゝつた。十次の方も、もう可けなくなりつゝあるのではないかと危ぶまれた。

「それなら何うしたんだ。小倉の袴がないのか。」

「友人にもらつたんでせう。」

「あんなもの貰つちや可けないぢやないか。金よりか、第一氣分がいけないんだ。」彼は兄に當てつけるやうに言つた。

「このあひだT君の家へ行つたら、母さんが言つたことに、お前が月六十圓から八十圓の小遣をもらつてゐたんだつて？」

「嘘ですよ。お母さんはあんなことを言ふから、僕憤慨したんだ。」

「己もをかしいと思つた。しかしお母さんはさういふことが見栄だつたんだな。」

「それあ偶には買ひものなんかあれば、餘計もらつたけれど。」

兎に角物質で壓迫するより外ないと、彼はこの頃思ひだして來た。

「己の收入はこの頃ぐつと減つてるんだからね。己ももうさう長くも働けなくなるだらうし、長く生きもしないだらうからな。お前たちには別に金がのこる譯ぢやなしね。大きい方から一人〳〵はづれて行つてくれないと、後にうんと扣へてゐるんだから、蝶子なんか何うせ早く己にも別れるだらうから、少しは何かのこしてやらないとね。あれさへゐなければ、己もいくらか助かるけれど。」

いつかも蝶子が出て行つた好子を慕つて、泣いてばかりゐたとき、彼はいつそ父子で死なうかと、そんなことを考へた。蝶子を遺して獨りで死ぬことは彼には堪へられないことであつた。彼は死を思ふごとに、後でまご〳〵する子供たちの姿を想像して見た

初めあんなに懷けた好子も、今は蝶子のことなぞ思ひ出しもしないであらうし、蝶子のおばちやん思慕も、表面だけでは薄らいで來たやうに思へた。しかし姉さんだけでは蝶子はやつぱり賴りがなかつた。

彼は飯をすますと、ちよつと市郎の病床へ行つてみた。

「もう痛みは止まつたのか。」

彼は面倒くささうな顔をしてゐた。

「もう痛みません。」

「やつぱり切つた方がいゝかもしれんな。彼はさう言つて病床を離れた。

「少し部屋を綺麗にしなけあ。疊がざら／＼してゐる。厭だな。」

「掃除したつて駄目なんだ。古天井を鼠があるくと、ばら／＼砂がおちるんで。」

「おれの方だつてさうだ。」

「こゝは殊にひどいんです。レコオドだつて本だつて、沙塗れなんだから。」

「本も整理しないと困るな。」

「本箱がないんで……。」

「それには家から何うかしなけあね。」

彼はまた頭が滅茶々々になりさうに思へた。何うして家がこんなに、何處もかしこも荒れて來たんだらうと思つた。

彼はまた長いあひだの貧乏生活を振返つて見た。生活の情味なんて藥にしたくもなかつた。

「人間は物質でごまかすより外ないな。精神生活は已たち凡俗に取つては少し悩みが多すぎる。」

好子へ手紙を書かうとしてゐると、女給詩人がやつて來た。

「あれから何うしました。」

「やつぱりカフエにゐますの。何だかだと言つて、面倒なことばかり多いものですから。」さう言つて彼女は病人の良人

を抑へてゐる苦しさを訴へた。それから其の前に同棲した男との關係など、身のうへ話がはじまつた。

「ちやづゐぶん貴女も戀愛には經驗があるんですね。」

彼女はちよつと[illegible]いだ色が見えた。

「え、でも私こんな樂天家ですから、別れようといへば、さうですかつて別れてしまひますの。泣きながら外を駆けあるいたりなんてしますけれど、そのうちには薄らぎますの。」

「貴女に來てもらふと可いと思ふけれど、好子が來た上のことにしませう。」

「え、いつでも。まだお歸りになりませんの。」

「まだ毎日繃帶の詰換へをしてゐるやうです。」

暫らく話してから、何か言ひのこしたことでもあるらしい風で、彼女は暇を告げた。

彼はTさんを訪問しようと思つて出かけた。今は彼に訪問者が殆んどなかつた。あつても記者のやうな人ばかりであつた。彼は話相手がほしくなると、よくTさんのところへ出かけた。仲間の人といつては、近くに一人もないのが寂しかつた。四五日別莊へ行つてゐたTさんは、もう歸つてゐた。

「どうもね、やつぱり飽きるんでね。家がやつぱり一番いゝと思ふね。昨夜歸つて、今日は大分本を讀んだ。その方が餘程凉しい。」Tさんは廊椽にある椅子にかけながら、いつものやうににこ〳〵してゐた。

彼も向ひ合つてすわつてゐた南の庭には築山の繁みが、深い陰影を作つて、裾の方に簇生した寒竹が風にそよいでゐた。西は塀ぎわに枝葉を繁らせた梧桐の隙間から、小石川の高臺が見えた。

「どうも遣りきれない。こゝへ來て書かうかと思つて。」

「あゝ可いだらう。その部屋でも、あすこでも。」Tさんは言つてくれた。

「しかし話をするから駄目かな。」

「なあに僕は本を讀んでゐる。」

しかし何だか落着けないやうな感じであつた。

「仕事は出來るかね。」

「仕方がないから遣つてゐる。一人でゐると出來るには出來る。これでよい女中が一人ゐてくれると、割合都合よく行くんだけれど。考へると際限がないから、まあ出來るだけ觸れないやうにしてゐるけれど……。」

「さうさ。そのうちには何うかなるよ。何と言つても、惡いときに死なれたね。」

「居ればやつぱりあんな生活の延長だらうがね。あれもちよつと飽き〳〵だ。」

「さう云ふのが好いんだよ。僕なんか煩はしいことは成るべく避けて、まあ靜かに老後を樂しむより外ないと思つてゐる。」

「僕はさうも行かない。氣分が淀んでしまつちや書けなくなるし、小さく萎んでしまふから。生活のない東洋趣味でも困ると思ふけれど。」

「けどさう云ふ境地もいゝぢやないか。」

「隱遁生活なんて瀟洒な眞似は、僕等には出來ないからな。この頃骨董なんかちつとも面白くなくなつた。石塊か盆栽のやうなものばかりで。」

「この頃僕もそんな氣もするね。繪も近頃滅多に買はない。物慾が淡くなつたんだね。」

そこへ番頭さんが來客のあることを知らしに來た。彼も時々そこで出逢つた骨董屋であつた。

「いつ歸りました。」

「昨日歸つてまゐりまして……。」

「實は君でなければ駄目だと思つてね。友人に賣り物があるんだ。」

そしてTさんは有名な東洋畫の寫眞を持出した。

骨董屋はそれを熟視してゐた。

「結構なものでございますな。大坂の方にこんなもの好きな方がゐられますさかえ、今度一つ見せまして。」

「世界的なものだらうけれど、已には少し不向きだし、K氏へちよつと話させたけれど、あの人も近頃少し非境で、書畫を買ふ氣分にもなれないやうだ。」

「何とか一つ考へさせていたゞきませう。實は今度えらい珍らしいものを見つけましたんで、お値段のところも、ちつとも判りませんのんですが、何しろ大したもので、お宅さんならお集めになつてをりますから。」さう言つて彼は次ぎの間から、長い軸ものゝ包みを持ちこんで來て、風呂敷を取つた。

「玉堂だね。」

「さようでございます。」

墨がまだ濡れてゐるやうな山水畫が、そこへ懸けられた。

「成るほど好いな。晩年の作だね。」

「さようでございます。こんなものは滅多に出ませんので、相場に致しまして、一萬やら二萬やらわからんもんですけ

れど、そんなことを言つたところで、この時節のことでござりますので。」

「値段はわからないのだな。」

「何ともまだ。」

「まあ、ちよつと田舍の普請や何かに金も入つたし、餘り賣はんことにしてゐるからね。ちよつと手扣への形だ。不景氣だからね。」

「お宅さんなんか、腐るほどござりますさかえ。」

二人で笑ひだした。

「僕をみんな金があると思つてゐる。變なもので、田舍の方からそんな噂が出たやうで。」Tさんは擽つたい笑みを漏してゐた。

「いや、今に何うにかなるよ。いつまでブルヂョウア階級の支配でもあるまいからね。田舍へ行つてみても。そんな思想は到るところに瀰蔓してゐる。僕なんかも、實感的にさう思ふやうになつて來たな。彼等の考へ方にも無理はないと。僕等だつて、いくら働いたつて、安定を得られないもの。」

「君なんかそんなことない。しかし世のなかは何うにか變るだらう。しかしさうしたところで巧く行かない。」

「結果は兎に角、進むところへ進むだらう。」

「骨董なんか何うなりませう。」

「なあに、ロシアなんかあんなになつても、農民は可けないけれど、商人なんかずゐぶん金が取れるので、革命後先づ例よりも高く買はれたものは、金や骨董だつたさうだから。いつの代になつたつて、價値のあるものは高く賣れるよ。」

「さいでせうかな。」

彼はその晩も夜更まで市郎と話した。市郎は午後から起きだしてゐた。

旅行の話から引いて、ふと死んだ人の話が出た。

「おかあさんも何處へも行きませんでしたね。」

「今年は伊勢から京阪へつれてつてやらうと言つたんだけれど、行きたがりもしなかつたな。」

「元氣がなかつたな。何しろ最近一二年のおかあさんは實に好くなつてゐたからな。」

「おばあさんが亡くなつてから、氣が弱くなつてしまつたんだ。己にすつかり頼りかゝるやうになつてゐた。健康も衰へてゐたんだな。あれだつてなか／＼あゝなるには……」

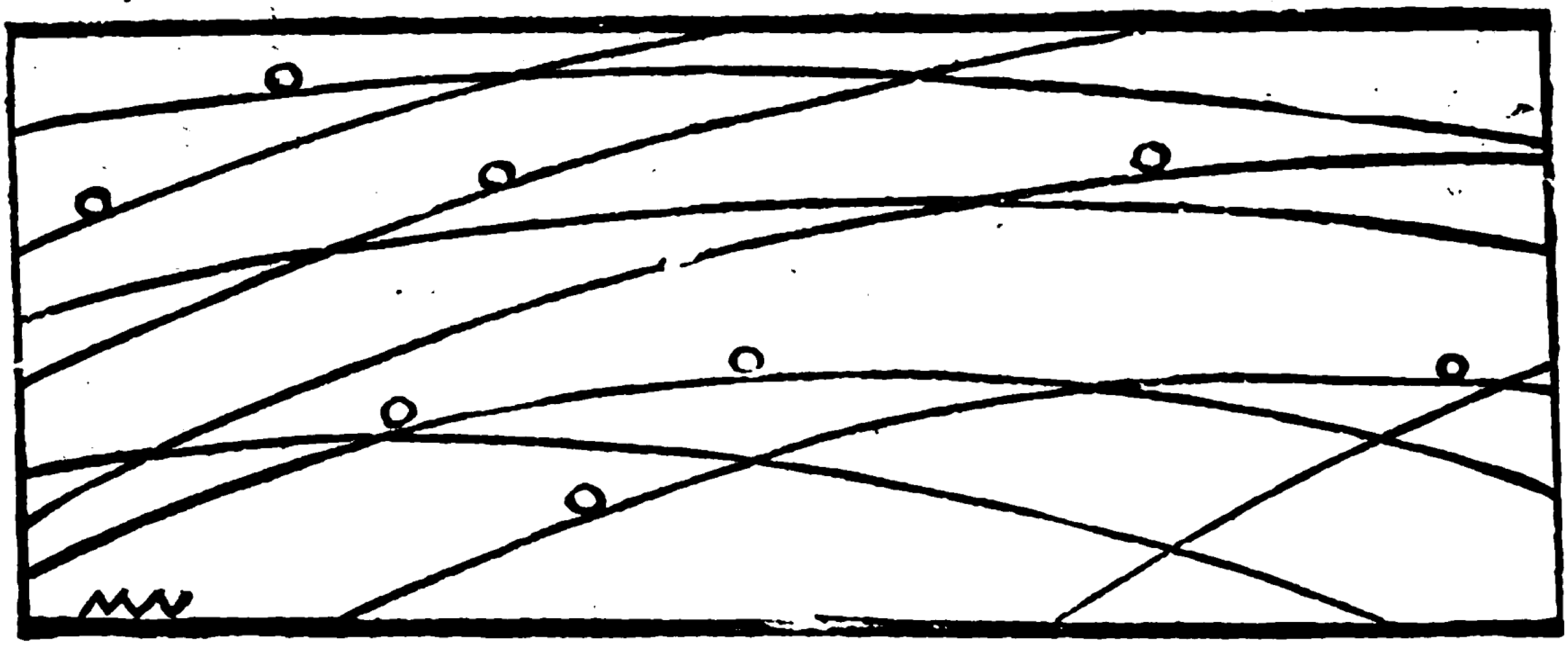
「年の若い親に死別れるなんて厭だな。」市郎は哀しげに言つた。

「若いたつてお前なんか、まあ可いさ、何といつても蝶子が一番不運だ。」

「あんな病氣は仕方がないな。」

「馴れつこになつて、づるくなつてしまつたからね。もう考へない方がいゝ。可哀さうだけれど、考へたつて、生きてるものが不幸になるだけだからな。土の下は涼しくつていゝよ。」

彼はつひ此の六月に、妻の骨を埋けるとき、十一年前に死んだ長女の骨壺をも掘出して埋めかへた。長女の骨はすつかり水になつてゐた。彼は今その水を思ひだしてゐた。



ありそうみ

久保田万太郎

登場人物

友造。　錺職（四十六七）

藤七。　同　（三十七八）

房吉。　同　（二十三四）

千吉。　同　（十八九）

お喜代。　死ん友造の女房の妹（もと藝妓）（二十四五）

その他。

□

大正八九年ごろ

□

友造の住居。

八月の末。夜。（八時すぎ）

……友造、夕飯をいま終つたところで食卓(ちやぶだい)のまへにすわつてゐる。千吉、あぐねた顔でそのまへにすわつてゐる。——お喜代如炭をかけた長火鉢のまへによつて蚊やり線香の束(たば)をほぐしてゐる。

友造。……いくら足を運んだつて拂はねえものは拂はねえ。——そんな理屈に外(はづ)れた金は一文だつて拂ふことは出來ねえんだ。——さういつてやれ。——はツきりさういつてやれ。

千吉。（口籠りながら）はツきり。いゝえ、さういつたんでございますけど………

友造。さういつたらいゝぢやアねえか？——分つてるぢやアねえか、それで？

千吉。へえ。

友造。文句をいふセキはなんにもないぢやアねえか？

千吉。へえ。――でも……

友造。…………？

千吉。……さういふお約束をするはずはないといふんでございます。

友造。ないたつてしたんだから仕方がねえ。――よろしうございます。それでは九十錢にいたして置きます。――いたして置きますからどうぞお取んなすつて。――さういふから――さういつてたのむから此方はとつてやつたんだ。――
――それをいまになつてそんな。――背めたことをいふなといつてやれ……

千吉。規則として、でも、どうしても九十錢には出來ないといふんでございます。――そんなことをしたら仲間で……

友造。だからはじめに來た奴を連れて來いつていふんだ。――はじめに來て賣込んで行つた奴を連れて來りやア分るんだ。――さうすりやアすぐ分るんだ。

千吉。それが……その男はもうゐないんださうでございます。

友造。それぢやアペテンぢやアねえか。――まるでそれぢやアペテンにかけるやうなもんぢやアねえか……

千吉。へえ……

友造。そんなことをしやアがるならよけい拂はねえ。――そんな奴にいゝ顏してあゝさうかといつてた日にはくせになる。――拂はねえといつたらどこまでも拂はねえ。――それで惡かつたらどうでもしろ……

千吉。それが、いゝえ、とれないと集金人の落度になるんださうでございます。――店ぢやア一切構はないんださうでございます。――しだいによると、そんな工合で、集金人が立替なければ……

友造。先方のそれは勝手だ。――此方の知つたこつちやアねえ……

千吉。（とりつくしまなく）へえ……

友造。手めえのはうで變替して置きながらぐづぐづいふ。――どだい風が惡い。――默つてたら切りがねえ……

千吉。…………

間

唐紙をあけて藤七入つて來る

藤七。あゝ御飯中でしたか？

友造。なアに、もう、濟んだんだ、構はねえ。――（お喜代に）片付けてくれ、こゝ……

お喜代。えゝ、いま……（蚊やり線香に火をつけて煙草盆に立て、友造のそばに持つて來る）

藤七。どうでした。お喜代さん、今日の熱さは？

お喜代。隨分酷うございましたわね。（いひながら食卓を自分のはうへひく）

藤七。酷いにもなんにも。――九十五度まで行きました、うちなんぞ。――ちツとしてゐてもだくだく汗が流れて來るんですから……

友造。（千吉に）さういつてやれ。――もう一度はツきりさういつてやれ。――九十錢のちやんと請取を持つて來れば拂つてやる。でなきやア金輪在拂はねえ。――拂はなくつて惡けりやア訴へるともどうともしろ……

千吉。へえ。――ちやアさういつて……

友造。おんなじことをいつまでも煩いつたらねえ。新聞なんてものは一トいろみてゐりやアいゝんだ。――二タいろも三いろもとることたアねえんだ……

千吉、しぶ〳〵立つて出て行く。――その前後に、お喜代、食卓を臺所のはうへ運ぶ。

藤七。(友造に) 何か……?

友造。新聞屋の奴がふざけたことをいやァがるんだ。

藤七。どうかしたんで?

友造。入らねえつてものを無理に、何でもとつてくれ、一ト月でいゝからとつてくれ。――その代り幾らでも勉強する。――あんまりいふから、ちやァ八十錢にしろ、それで好かつたらとつてやる。――いふと、それは可愛想だ、とにかく表値段一圓二十錢です。もう十錢出して下さい。――さういふんだ……

藤七。何新聞です?――大へんに高い……?

友造。(それにはこたへず) ちやァいゝ、とつてやる。――面倒だから、それから、その値段に決めて一ト月だけとつてやることにしたんだ。――と、昨日になつて金をとりに來た。――みると、お前、請取に一兩としてあるぢやァねえか……

藤七。どうしたんです?

友造。どうしたんだか知らねえ。――約束が違ふから此方は突ッ返した。――たとへ十錢でも理由のたいものを遣るこたァ出來ねえ……

藤七。（うなづく）さうですとも……

友造。と、今朝になつてまた來やァがつた。――何といふかと思ふと、そんなわけはない、一圓以下で入れるといふはずがない。――そも〳〵一圓といふのが特別だ。――いやに恩に着せるやうなことをいやァがる。――それだけならいゝ、此方が、何か、足もとをみて言ひがゝりでもするやうなことをいやァがる。――癪だから思ひきり毒づいてやるとぶん〳〵してかへつて行きやァがつた……

藤七。だつて、それは。――はじめにそれは賣込に來た奴を連れて來ればすぐ分ることつちやァありませんか？

友造。其奴がそれがもう店にゐないといふのだ。

藤七。そんな、あなた……

友造。だから、それぢやァまるで、ペテンにかけるやうなもんだ。――此方はさういふんだ。

藤七。で、また、遣つて來たんですか、今夜？（表のはうへこなし）

友造。人間が變つてまた遣つて來やァがつたんだ。――誰が素直に拂ふものか。……

藤七。そのはうがいゝんです。――このごろの新聞屋と來たらもうみんな押賣です。――とつてくれといつて來るはうは性のまだいゝはうで、うちの近所へなんか來る奴はだまつて毎日抛り込んで行きます。――面倒だからつて打捨て置くと月末に凄しい面で金をとりに來ます。――遣らなかろうもんならじちもくだいもく並べます……

友造。（新聞をもつて窓のそばに座をうつす。――藤七に）此方へ來ねえ。――いくらかまだこゝのはうがいい……

藤七。え〻……（いはれるま〻前へすゝむ。——言葉をつゞけて）取ツつかまいてなぜこんなものを入れる？——さういふとこれは見本です。——しやア／＼してゐます。——あんまり業腹だと、裏のうちで、毎日抛り込んで行く奴をそつくりそのまんま取つといたもんです。——で、月末に來たとき、この通りうちぢや手もつけない、邪魔だからこんなもの持つてつてくれ。——逆捩をくはすと、よつぽど其奴口惜しかつたとみえ、いきなりその一月分の新聞をまへの泥溝ん中へ叩ッ込んだものです……

友造。（うなづくやうに）さういふことをしやがるんだ……

藤七。だがしかし。——どういふもんでせう。このごろ？

友造。何が？

藤七。い〻え、あ〻いつた手合ひの、このごろ惡くのさばつて……

友造。だん／＼さうなるんだ。——だん／＼さうものゝつろくがつかなくなつて來たんだ。——さまアねえ……

お喜代、臺所からかへつて來る

友造。どうした、歸つたか？

お喜代。え？

友造。新聞屋よ。——かへつたか、音無しく……

お喜代。あ〻、歸つたやうです……

友造。さうか……

お斉代、長火鉢のまへにまたすわる。――茶を入れにかゝる。

友造。戯談ぢやアねえ、ちッとも風がねえ。（窓のそとへこなし）

藤七。いゝ加減に一トふりあつてくれるといゝんですが……

友造。（打捨るやうに）ふりさうにもしねえ。――いゝ月だ……

間。

藤七。ところで。――今夜は房の奴を引つ張つて來たわけなんですが……（友造の顔をみる）

友造。……………（無言）

お斉代、藤七のまへに茶をもつて來る

藤七。へえ、これは。――（友造に）どうぞ一つ。――昨日お願ひしたやうなことに……

友造。どこにゐる？

藤七。當人ですか？

友造。うむ。

藤七。えゝ、おもての緣臺に待たして……（外のはうへこなし）

友造。當人が惡いと氣がつきアいゝ。——氣がつきやアそれでいゝ。——だが、自分に當人が氣がつかないんぢやア。——周圍でいろ〳〵いふから、仕方がねえ　自分ぢやアさうは思はねえが……

藤七　いゝえ　それは。……それア大丈夫です。——それアもう請合ます。

友造。………………

藤七。いまも來際にもう一度よく、當人の料簡を聞いてみました。——とんだことをいつた、一時のつまらない氣迷ひから申譯のないことをいつた。——親方にも兩親にもいまさら合す顏がない。——當人はもうさうまでいつてゐるんで……

友造。…………

藤七。平常あゝいふ氣立の人間だけに。——どうも、此奴、この間のやうなことを肚からほんたうに……

友造。だが、俺のまへでたしかにいつたことだぞ。

藤七。いゝえ。ですから。——そんなことをあなたのまへでいひ出すつてことがそも〳〵。——そも〳〵それが可笑しい……

友造。（冷かに）いやア不貞腐れにもほどがある……

藤七。さうなんで。——それを思ひますから……

友造。…………

藤七。が、つまりは、ついした妄言にうつかり。――思案にあまつたあげくうつかりいひ出したことゝしか思へません。―ですから　これ……

友造。…………

藤七。（わらつて）可笑しいのは、當の親たちが、そんなことはない。房にかぎつてそんなことをいふわけがない。――ムキになつて言譯をするんですから……

友造。折角みんなの心配するものを、俺もさう頑固なことはいひたくねえ。――當人のそれが本心でねえつてことが分りやア――さうとさへ分りやアさし支へのねえ話だ。――これは、まア、こゝだけのこつたが……

藤七。えゝ……

友造。十一の春からだから、さつと、まア、十五年だ。――何一つ、その間、うちにゐるときでも出てからでもこれといふ失錯をしたことのねえ男だ。――それだけに可哀想も可哀想だ……

藤七。さういつて下さりやア。――實際、これ……

友造。（遮ぎるやうに）とにかく逢はう。――逢つてよく話をつけよう……

藤七。ちやア、まア、連れて來ますから……（煙草を煙草盆の灰にさす）

友造。（お喜代をふり返つて）おい、二階かたづいてゐるか？

お喜代。えゝ、片附いてゐます。

友造。ちやア二階へ行かう。――そのはうがすこしは風があるだらう……

お喜代。えゝ、まはりが空いてゐますから……

友造。茶や何かもたしてよこしてくれ。

友造、二階へ行く。――この間に、藤七、おもてのはうへ出て行く。

間。

藤七、房吉をつれてかへつて來る。

藤七。二階へ……？

お喜代。えゝ。

藤七そのまゝ二階へ行く。房吉、ぼんやり力なくそのあとに從ふ。

お喜代、千吉をよぶ。――茶道具だの煙草盆だの蚊やり線香だのを二階へもたしてやる。

間。――がちや〱の、遠く、夢のやうになきたてる聲……

千吉、二階から下りて來る。

お喜代。(千吉に)どうしたの?

千吉。えゝ?

お喜代。房さんさ。

千吉。えゝ、すつかり親方を怒らしてしまつたんです。

お喜代。それは分つてるけれど。――どうしてあの人が?

千吉。いゝえ、つまらないことをいつたんです。――房さんらしくない、へんな、つまらないことを親方に。――親方のまへでいつたものなんです。

お喜代。つまらないつてどういふこと?

千吉。親の世話をするのを嫌だといひ出したんです。

お喜代。親の世話をするのを?

千吉。えゝ。

お喜代。どうして?

千吉。どうしてゞすか。急にこの間、親方んところへ來てさういつたんです。

お喜代。だつて可笑しいぢやアないか。――房さんは、お前、いまゝで親孝行で……

千吉。(さきをくゞつて)えゝ、ですから。――ですからみんなビクツ!したんです。

お喜代。……………

千吉。それア、もう、店にゐる時分から、一銭のものでもお父つあんやおつ母さんのところへちやアんと送つてゐたんです。——そのくらゐにしてゐたんです。——ですから、死んだお内儀さんがよく、すこしは自分の身にもつけないぢやア、さう／＼お父つあんやおつ母さんのことばかり心配してゐたら切りがない。——房さんに、さういひました。

お喜代。年をとつてゐるの、お父つあんたち？

千吉。五十八か九。——おつ母さんのはうは若いんです、四十五か六……そのくらゐです。

お喜代。で稼業（しやうばい）は？

千吉。（わざとけゞんらしく）稼業（しやうばい）？——何にもありやアしません。

お喜代。ないの、別に？

千吉。ありやアしません。——房さんが稼いでゐるんですもの。——そのために房さんが……

お喜代。だつて、まだ、五十八や九なら老ひ朽ちた年ぢやアなし。——何でもしてうちを助け（す）たらよさゝうなものに……

千吉。以前（せん）にはおつ母さんが髪結さんをしてゐたんです。——けど、房さんがうちへ帰ると一しよに止めてしまひました。——その時分から、お父つさんのはうは、何にもしないで始終うちにごろ／＼してゐました。

お喜代。ぢやア房さんの年（ねん）の明けるのをもう待つてゐたんだね？

千吉。（高慢に）さうなんです。——そればかりあてにしてゐたんです。——だから、安さんでも倉さんでも、房公は可哀想だ、あれぢやア一生うだつは上らない。——それをみてさういひました。

お喜代。けど、年が明けて。——これはわたしたちには分らないけど、年が明けてすぐ——それは、まア、禮奉公はすまして——右から左へ技倆さへよければ、ちやんと世帶をもつたり、親同胞を立派に引取つたり……

千吉。（引取つて）……することが出來るといふんですか？

お喜代。あゝ。

千吉。そんなら誰でも錺屋になります。

お喜代。（わらつて）生意氣おいひでないよ。

千吉。生意氣ぢやアない。ほんたうです。——ほんたうですよ。——錺屋がそんないゝ稼業なら、安さんなんぞ、十年まへもいまも、おんなしあの床屋の路次なんかに引つ込んでやアしません。——それア親方になつて、大ぜい職人をつかふやうにでもなりやア別ですけど、さうでなかつた日にやア……

お喜代。…………

千吉。みて御覧なさい、お喜代さん、それア慘めです……

お喜代。（やゝ皮肉に）そんなにさきが分つてゝ、よく辛抱出來るね、お前……

千吉。仕方がありません。——うちがあたしア錺屋ですから……

お喜代。あゝさう、うちが？

千吉。えゝ。——ですから、あたしア、親方んところへほんたうの修行に來てゐるんで。——年が明けてうちへ歸つたつて、自分にすぐこれを役に立てなくつてもいゝんです。

お喜代。さういふ人もあるのね。

千吉。でも、やかましいんですからね、うちの親父は。――なか〳〵、あたしなんかに、歸つたつてすぐ仕事をさせやアしません。

お喜代。（話をもとへもどして）隨分、ぢやア。――さうとすると房さんは苦しいわけね。

千吉。そのわけですとも。――いくら技倆がよくつたつて年が明けてまだ一年にしかならないんです。――さう〳〵は出來ません。――それには月々、親方のはうへ入れて行くものはあるし……

お喜代。それは何を？

千吉。うちをもつのにみんなお金を借ります。――それを毎月、幾らづつでも稼いだなゝから……

お喜代。返して行かなくつちやアいけないの？

千吉。さういふことは、親方、ちやんと何でもキチン〳〵しないと……

お喜代。（間）それは、まア、新聞屋のこつても分つてるけど……

千吉。（急に頭を下げる）有難うございました、先刻は。――助りました、お蔭で……

お喜代。だつてみツともないぢやアないか、わずかなことで……

千吉。多寡が十錢のことなんですけど。――でも、あゝなると。――親方も强情ですけど、新聞屋のはうも今夜來た奴は惡く强情で……

お喜代。けど、默つてゝおくれね、義兄さんに。――わたしが、また、餘計なおせツかいをしたやうに……

千吉。いゝえ、いやアしません。――いやアまた大へんです。――外のものにもさういつて置きました。

お喜代。新聞屋も大丈夫だらうね？

千吉。大丈夫だと思ひます。——ちやんともういつたとほり拂つてやつたんだから……

お喜代。そんならいゝけれど……

千吉。けど、思ふとつまりませんね。

お喜代。なぜ？

千吉。あれだけあれば小川亭のアイスクリームが……

お喜代。ケチなことおいひでない……

　　二階から、藤七、土瓶をもつて下りて來る。

お喜代。あら、すみません。——呼んで下されば……

藤七。なアに……

お喜代。さして、いま、千吉にもたして上げます。

藤七。ちやアお願ひ……

お喜代。えゝ。

　　藤七、そのまゝ二階へかへる。

　　お喜代、土瓶に湯をさす。——千吉、二階へそれをもつて行く。

問。——がちやくの聲……

千吉、下りて來る。

千吉。二階でも今夜は風がありません…

お喜代（それにはこたへず）どんな……？（二階へこなし）

千吉。默つてます、みんな……

お喜代。默つて……？

千吉。あんまり機嫌のいゝ顔してゐません、親方…

お喜代。でも義兄さんは。——知つてるんだらう、義兄さんは？

千吉。房さんの苦しいつてことをですか？

お喜代。…………（うなづく）

千吉。それは知つてます。——誰よりよく知つてます。

お喜代。それなら房さんになにも腹を立てることはないぢやないか？——その手間でお父さんたちを呼んで、いくら親だからつて、さう〳〵子供にばかり……

千吉。いゝえ、さうぢやアないんです。——親方の惱つたのは房さんのいつたことがいけないつていふんです。

お喜代。いつたこと？

千吉。親の世話をするのを嫌だ。——さういつたのがいけないつていふんです。——假にも子として親の世話をするのを嫌だ。——そんなことをいふつて法はない。……

お喜代。法はないつて、お前、出來なければ仕方がないぢやアないか

千吉。でも。——出來なくつても、でも……

お喜代。出來なくつても、でも、しなくつちやアいけないといふの？

千吉。さうなんです。

お喜代。だつてそれは無理ぢやアないか？

千吉。無理でも……

お喜代。いまゝでやつてみて出來ないつてことが分つたんぢやアないか。——とても、いまの、自分の稼ぐだけぢやア親たちはみられない。——分つたからつまりさういつたんだらう？

千吉。え丶……

お喜代。いはなければ深みへ陷るばかり。——だから正直に……

千吉。そ、それがいけないんです

お喜代。正直にいつたのがいけないの？

千吉。え丶。

お喜代。ぢやア出來なくつてもいはなければい丶の？

千吉。——

お喜代。(打捨るやうに) わたし、房さんの、あやまつて來る筋はなんにもないと思ふわ。

千吉。でも惡いと思へば……

お喜代。(信じられないやうに) ほんたうに惡いと思つたかしら、房さん?

千吉。でも、さう思はなければ仕事がもらへません。

お喜代。仕事?

千吉。さういつたんですもの、親方は。――そんなもう不料簡なことをいふ奴に仕事はやらない……

お喜代。……………

千吉。さういはれちやア、もう……

お喜代。……………

千吉。だから藤さんなんか心配するんです。

お喜代。(間。――歎息するやうに) だから嫌ひさ、堅氣は……

千吉。へえ?

お喜代。(急に) あゝ、いや……(ふいと身近に飛んで來た蛾を拂ふ)

千吉。何です?

お喜代。何だか蟲……

うるさく眼さきへ來るのを二三度拂ふ。――とゞ團扇で押へる。

千吉。捨てませう……（手を出す）

お喜代。いゝよ（自分に立つ）

お喜代、窓のそとへ蟲を捨てる。——そのまゝ外をみて立つ。

お喜代。（しみ〴〵）明日もまたこれは熱いんだねえ。

千吉。さうですか？

お喜代。御覽、あの月を……

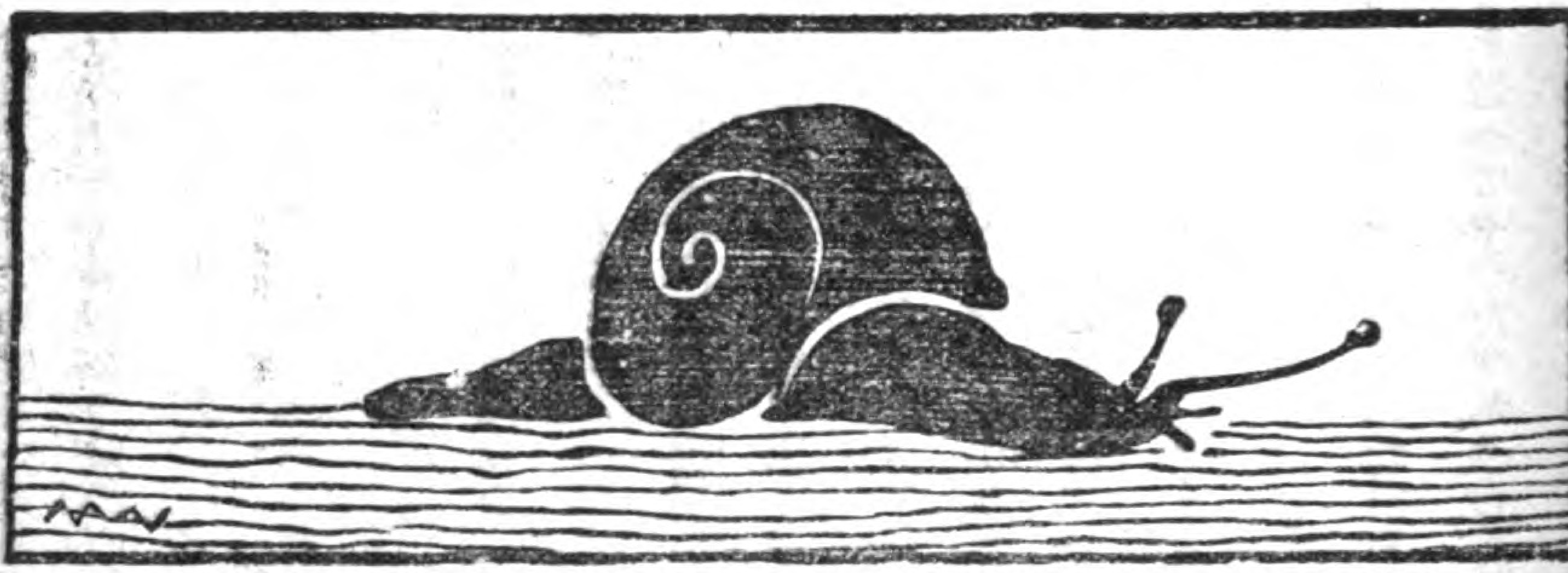
千吉。あゝ……

友造をさきに、藤七、房吉、二階から下りて來る。（房吉先刻よりまたぼんやりしてゐる）

……誰も無言

（幕）

（十五年・八月）



亡びる

佐佐木茂索

一

小池眞三が故鄕を見棄てたのは二十一才の夏だつた。徵兵檢査が濟んで、兵役の義務なしと知ると直ぐだつた。彼は妻になつたばかりの糸子を連れて北海道へ走つた。彼が北海道を撰んだのは、アメリカまでは行きかねるからといふ意味だつた。手近なところで彼の最も自由だと考へた土地を撰んだ譯だつた。彼の故鄕の京都とは凡そ反對な自由な土地、何をしてもよくて、おそらく何でも出きて、十分金も獲られさうなところ、それは彼の考へ及ぶ範圍では北海道よりほかなかつた。が一つはちやうど季節が夏で、暑過ぎる故鄕から反射的に北海道を思ひ附いたのでもあつた。涼しさと希望で一杯になつて、彼は新妻と北海道へ走つた。

十九才の糸子は、彼女の妻になるまでは或藝者屋の養女だつた。眞三は彼女と結婚する爲に、不可能なほどの無理をしてゐた。家を相續してゐる兄の金助には勿論、親類中何處へでも顏向けの出來ないやうな羽目に陷つてゐた。不義理ばかりが彼の

周圍だつた。町並さへ井然(せいぜん)と碁盤目に片づいてゐる彼の故鄕では、彼は何時も後ろ指さされる心持だつた。何を、今に見ろ、その氣が彼の最後の無理を企てさせ、そして故鄕を見棄てさせてしまつた。

北海道へ渡つた眞三は、初めて踏んだ土地、函館に一先落付いた。此處で彼は獨力でやれる仕事を物色にかかつた。しかし來て見ると函館も鬼の棲む異域ではなかつた。同時に勿論佛に充ちた涅槃土でもなかつた。所謂ぼろい儲けなどが轉つてはゐなかつた。轉がるどころか搜しても決して見付からなかつた。彼に茫然と暮す幾月かが續いた。彼は細(ほそ)くなる財布と妻の顔を見ながら、結局兄の金助へ援助を乞ふことに決心した。小池金助は代代の酒屋だつた。それで眞三も酒屋をやることになつた。

初め金助は眞三に酒屋がやれるものかと思つてゐた。

「こんなことというて來て、結局酒の只取りをしよるのだらう。荷(に)が着いたら直ぐ叩き賣つて、それで又のらくら暮すつもりだろ。」

金助はその氣でなかなか眞三の申出に應じなかつた。しかし年老いた彼等の母が金助を說伏して若干の酒荷を函館へ發送させることにした。

「知らん土地やし、よくよくやでから詫びて來るのやろ。腐つた性根かもしれんが、今度だけはもう一度欺されてやつておくれ。」

事實眞三は今は眞面目らしかつた。彼は暫くすると、商賣も順調だといつて元値だけを送つて來た。金助は代りの荷を送つてやつた。かうして兄弟の間に小さな商取引が成立した。

「とにかくやつとるとみえる。」

「さうですな。」

こんな會話が金助と母親との間にあつてから暫(しばら)く經つと、眞三から品代金がともすると滯りがちになつてきた。この頃から眞三に大酒の癖がつき出した。彼は酒びたりになつて商買をなほざりにし出した。變な飲友達と商品を飲みつぶすだけが彼の日課だつた。

「けちな酒屋なんかやつてたつて、どうなるもんかい　なあ君。お互ひにそんなつもりで函館三界まで來やせんわい。」

「さうともさ。」

追従の合槌に眞三は豪快らしく笑つてみせた。

彼の郷里では兄の金助が彼をぼろくそに罵倒してゐた。

「何處(どこ)まで性根の腐つた奴か分らん。もう何と泣きよつても取り上げんわい。」

さすがに年老つた母はうなだれるだけだつた。

「北海道は寒いやろなあ。」

冬の火鉢で老母は時折相手にしない金助につぶやきかけた。

函館では眞三は完全に無職徒食の狀態にあつた。彼は家を疊んで若干の金に代へると、函館から小樽の近くまで流れて行つた。彼は其處で漁夫相手の居酒屋を開業した。妻の糸子が愛嬌のある、いくらか美人に屬するせいで、商賣は相當に立ち行くやうに見えた。しかしそれが忽ち飲みつぶされてしまつたことはいふまでもなかつた。

「鳴看板(かんかんばん)の居酒屋しに、わざわざ北海道へ來たんやないわい。」

泥醉した眞三はさう怒鳴つた。だが元も子もなくなると怒鳴つてもゐられなくなつた。彼はたうとう彼自身漁夫の一

人に身を晒して行つた。元手のないものは漁夫になるよりほか、其處はどうにもならない漁場だつた。彼は凍りつくやうな海の中へ腰までもざぶざぶと入つて行つた。一仕事終つたあとの彼は、眞赤な殆んど感覺を失つた皮膚になつてゐた。

「こんな無茶なことして病氣になつたら――」

米子はさう心配した。しかしその米子さへ誘つて、彼は漁夫にしてしまつた。

「何にしても元手を拵へんとあかんわい。來年は網主にでもならうか。お前もええ經驗やて。」

白い皮膚の女漁夫は皆から劬られた。その爲めなるべく樂な方へ廻されてゐたが、それでも皺だらけに腫れ上つた赤い手の彼女だつた。

「まあお互ひにようやつたもんやで、おんな荒仕事――。」

後年眞三は悵然としてさういつた。

漁期が過ぎると彼等は小樽へ出た。其處で徒食の幾日かが過ぎた。彼等は稼ぎ溜めた賃銀をあらかた使ひ果してしまつた。彼は毎日小樽を中心になにかの遺利を搜し求めた。だが必死の努力も何の結果も齎さなかつた。

「開け過ぎてゝあかんわい。これぢや京都とちつとも違やせん。人の行かん所へ行つて人のせんことをやらんとあかん。」

彼等は小さな汽船に一晩搖られながら、北見の北端稚内へ渡つて行つた。だが稚内も小さな田舍町といふだけのことだつた。彼等は其處から又、向うに見える小島の利尻へ渡つた。

「此處より先は樺太だけやで、此處もいかなきや又は樺太や。お前、樺太へでも行けるか。」

「そら何處へでも行きますけど、何處へ行つても同じやおへんか。」

さすがに糸子は心細さうな顔をした。眞三を愛し、信頼しぬいてゐる彼女だつたが、それだからこそ順從に利尻までもついて來た彼女だつたが、浪當りの荒い島の上まで來てみると、漸く郷里の事々も氣になり出す樣子だつた。彼女はともかくも其處で何かに噛りつく臍を固めた。眞三も今度は一所懸命だつた。糸子は村の小さな社へお百度を踏み出した。そして彼女は其處で神主と知り合ひになつた。神主の齊田は糸子から身上話を聞くと、すつかり信用し、同情してくれた。

「さしあたりこんな仕事はどうですかい。」

さういつて齊田が持主である錢湯の番台に坐ることを彼女に勸めた。その小さな村にたつた一つの錢湯だが、至極みすぼらしいものだつた。今迄は齊田の妻女が番台にゐたのだが、神官の妻が番台にゐるのも滑稽な氣がしてゐたので、彼等にとつても丁度いい都合なのであつた。糸子はその日から番台にしよんぼりと坐りはじめた。

「そのうちに御亭主の仕事も何か見付けてあげませうて。」

齊田は毎日の上り錢を持つて來る糸子によくさういつた。

齊田の社は漁村にはつきものの辨天樣だつた。漁があれば勿論、なければないで供物が上つた。漁夫達は何かあると何でも直ぐ齊田のところへ持ちこんできた。子供が生れると名前をつけて貰ひに來た。手紙の代筆も頼みに來た。そんな時昆布だの鯣だの何かしら手土産を置いて行つた。冠婚葬祭一つとして齊田の與らないものはないといつていい位だつた。從つて内福であることは糸子にも直ぐ分つた。眞三は其處に目を附けた。彼は齊田を利用して何かをやり度いと工んでゐた。彼は齊田の信用を得る爲に故郷の家の寫眞を送らせたりした。

そのうちに齊田が神具を買ひ整へに幾年目かの上京をすることになつた。それを知ると眞三は拔目なく彼を説いた。

「何といつても神社佛閣は京都が本場ですからな。佛具神具、何を買ふといつたつて京都が第一ですよ。是非京都までお出かけなさい。京都なら宿賃も要りませんや。むろん兄貴の家へお泊り願ひますよ。私も久しぶりでちよつと歸つて來たいので、御案内にお供しますよ。」

齊田と眞三は京都へ出發した。京都へ着くと、宿をとるといふ齊田を無理に兄の金助の家へ引はつて行つた。金助もさすがに惡い顏は出來なかつた。老母は眞三の無事な顏に聲を擧げて哭いた。齊田は庭の向うに三戸前並んだ土藏を見て眞三が出鱈目をしやべつてゐたのでないことを知つた。酒倉に並んだ一石樽を見て、大きなものだなあと感心してゐた。眞三は齊田のすつかり彼を信用したらしいのを知つて安心した。所用の買物が濟むと、彼等は連れ立つて利尻へ歸つて行つた。

眞三は、今なら齊田を利用することが出來ると思つた。しかし相憎、彼はどんな仕事を見つけることも出來なかつた。狹い島の中では、眞三の仕事慾を滿すに足るやうな仕事を見つけることは、全く不可能にちかかつた。が、島外へ手を出すことは、齊田の方で贊成しさうもないことだつた。尤も、高が村の錢湯へ「投資」する程の齊田なのだから、眞三が兎角大きな仕事を考へるのが、反つて笑止なのでもあつた。そんな財力のありやう筈は、云ふまでもなく、ないのであつた。その事は、眞三も考へないではなかつたが、又しても都合よく忘れてしまふのであつた。

「小池さん。子供を中學校に入れんければならんと思つてゐるのだね。――」

或日眞三は齊田からさう話しかけられた。

「――それで、少し知り合ひもあるので函館まで出さうと思つてゐるのだが、何だか心許なうてな。家内なんかも函館へ一人やるのは心配し切つてゐるんで……どうしやうか思つてゐるな。」

「そいぢや、一層京都へやりなさつたら、どうでせうな。あちらなら、少し遠くはなるが、兄貴のところへ預けれや、心配はないし。――それに何と云つても大都會だから敎育には色いろ便宜ですでな。なあに、健一さんも喜んで行きなさるだろ。」

「それや結構だけど、何しろ遠路ぢやからね。」

「今どき三百里が五百里、何でもないことですよ。それに、知らん土地へ出せば、寄宿舎だの何だの費用も嵩みますけど、兄貴のところなら、一切そんな心配はいりませんからね。」

「さうも行かんけど。――」

それでも齊田は、その點で大ぶ心が動いた樣子だつた。そして結局、齊田の子供は、眞三に連れられて京都へ行くことになつた。眞三は段段齊田と親類づき合ひになつて行くのが、譯もなく成功の一歩のやうな氣で、嬉しくてならなかつた。

「まあそのうちに、一と仕事するわい。」

彼は妻の糸子によくさう云つて聞かせた。

二

眞三は利尻では、芽を吹かなかつた。彼は北海道を見捨てて朝鮮へ渡つた。その頃、朝鮮は、まだ韓國だつた。

「ヨボ相手に、大儲けしてやる。赤子の手を捻るやうに、ぼりぼり儲けてやる。」

糸子に彼はさう云ひ、事實そのつもりで渡鮮したのだつた。が、北海道もさうであつたやうに、朝鮮も別段變つた仕

事が都合よく落ちてゐる極楽ではなかつた。意氣込んで渡鮮する他の多くの日本人のやうに、彼も朝鮮人相手の仕事を急としたのであつたが、結局は日本人同志の小商ひにでも落つくより仕方がないのが分るのだつた。

「一にも元手、二にも元手。資本なしの裸一貫ぢや、何處でも駄目やわい。最初から出直しぢや。」

眞三も苦勞の御かげで、小さく固るより仕方のないのを知つた。彼は京城の町外れに、温突一間切りの家を借りて、骨董屋になつた。それも名ばかりで、實は才取りのやうな事をぼつぼつやつてゐた。口錢になることなら何にでも首を突込んだ。そのうち、彼は平林といふ、いい得意を一軒確り掴んだ。彼は平林に喰ひ下つて、殆ど其處一軒で細々ながら月々の生計を立てゝゐた。

眞三が一朝の大病に取りつかれたのは、それから暫くしてゞあつた。彼は飲酒の爲に、すつかり身體を毀してゐた。その頃の彼は、朝目が覺めるとから、酒の氣なしでは一瞬もゐられなかつた。少し大業に云ふと、先づ一杯飲んでからでないと、歯刷子さへ滿足に使へなかつた。當然、彼は大病に取りつかれなければならなかつた。

眞三が寢つくと、醫藥の料は勿論、その日にさへ忽ち窮して來た。金になるものを悉く金に代へると、到頭糸子は行商に出る決心をした。彼女は小間物屋になり、見榮もなく嵩だかな荷を背負ふと、毎日遊廓へ出張つた。そして藝娼妓を相手に氣の永い商ひを濟ませると、熱心に眞三の看病をした。

眞三は一時醫師にも見放されてゐたのだが、永い病床を離れる時が、奇蹟的に惠まれた。彼はもう酒の匂ひさへ嗅げなくなつてしまつた。

「小池さん。あんたのお上さんは偉いもんですぞ。全く貞女ぢや。今度は本當に感じ入つた。」

「いやどうも。」

「それにつけても、あんたも奮發せんとあかん。第一、酒を絶體によして——。」

「いや。酒はもう飲めません。飲もうとしても飲めません。」

平林と眞三は、さういふ會話をした。

それから後の眞三は利尻の彼と同じであつた。彼はおひおひ平林にとり入つて行つた。その後援で彼は溫泉一間の家から出て、表通りに店を張つた。次いで彼は平林と一緒に京都へ旅をした。そして平林に十分品物を仕入れて貰ひ、朝鮮へ歸つた。平林は金助の家を見てから眞三を一層信用しはじめたやうだつた。眞三は平林から融通を受けては度々北京の方へ骨董の堀出しに行つた。

平林には子供がなかつた。そして子供にはもう望みのない老齢だつた。それで眞三は彼に養子を勸めた。そして金助の四男をどうだらうといつた。平林は京都へ行つて金助を知つてゐるので此の話は成功した。

或年の冬、眞三は少し健康を害してゐたが、無理をして北京へ出發した。半月たつて歸つて來た時は彼は蒼黒い頰になり、咳をせいぜいはしてゐた。喉頭結核だと分ると彼は驚いて京都の病院へ飛んで行つた。喉頭は手術され、其處にパイプが突きとほされた。彼はパイプで呼吸し、滋養を攝つてゐた。口と舌とは無用の長物だつた。彼は喉をすうすういはせながらやがて死んでしまつた。

ちやうどその少し前に齊田の長男と金助の次女とが結婚した。齊田の長男は中學きりで學業を放棄し、利尻へ歸つて父の後を繼いでゐた。

三

小池金助が沒落に近づいた。近づいたかと思ふと直ぐ沒落してしまつた。貞三はちやうどいい時に死んだやうなものでもあつた。例へ彼が生きてゐて金助を利用しやうと思つても、もう不可能になつてしまつた。

金助の三女は行儀見習ひの名で川島といふ酒家へやられた。川島で彼女は其處の六男と戀に陷ちた。その結果川島六郎は亞米利加へやられ、小池みつ子は金助の家へ返された。亞米利加へやられた六郎は一年で歸つて來た。父が死んだからだつた。そして彼も若干の遺產を受取ると、彼は母を說いてみつ子と結婚することにした。沒落した金助は川島が金持過ぎるだけに最初はなか〳〵此の結婚に承諾を與へなかつたが、心では全く悅んでゐた。

結婚は成立し彼等は阪神沿線に家を建てて幸福に暮しはじめた。

「わしが代代の家をなくしたのだが、これで孫の代になつたら小池の家も何とかなるだろ。」

金助はさういつた。そして心私かにつぼまりきりでなく、どうやら又家運の開けさうなのにせめても心を慰めてゐた。

それから半年たつて六郎は猶豫になつてゐた兵役の義務を果す爲に入營した。入營して三日目に彼は流行性感冒にかかり、間もなく衞戍病院で死んでしまつた。その時は金助が誰よりも落膽したやうだつた。家倉をなくした時よりも彼は氣を落してゐた。彼の一生も小池の家ももうこれで根こそぎ洗ひ流されたやうに、彼はしよげてしまつた。

「御運の末ちや。」

金助は妻にさうこぼした。

金助の長男は市役所へ務めることになつた。そして其處で彼は平凡に年老つていつた。彼は二十で結婚したので、子供が二十近くなつてゐた。そしてその子供きりで、あとの子供は生れなかつた。一人子だから大事にされてゐたが、少し低腦だつた。ある夏彼女は海へ行つて溺死してしまつた。白ぶくれた死體を抱いて小池大吉は聲も出なかつた。二十年育ててきた子供をなくしたことの嘆きはもとよりひどいものだつたが――もう子供が出來さうもないといふこと、孤獨の後半生を考へて堪らないのだつた。

大吉の父の小池金助は昨年死んでゐた。來年あたりは孫娘にいい養子が出來るだらうと最後の小さな望みを持ちながら昨年死んでゐた。

五

小六は大吉の弟だつた。彼は小い時から手先が器用で細ごまとした細工物が好きだつたので、小池金助が沒落すると彼は綴織を習つた。そして妻を娶り、二人でこつこつと手のこんだ綴れを織つてゐた。自分で圖案も引けるので彼にはもつて來いの商賣であつた。それだけに彼は性根を盡して美術的な織物を造るのに努力してゐた。背中は傴僂のやうに曲つた。彼が近眼鏡をかけ、少し生活が樂になると子供が生れた。子供は生れて三月ほどで疫痢にかかつて死んだ。それから二年たつと妻のさわ子が結核で痩せ細つて、里へ歸り、其處で死んでしまつた。

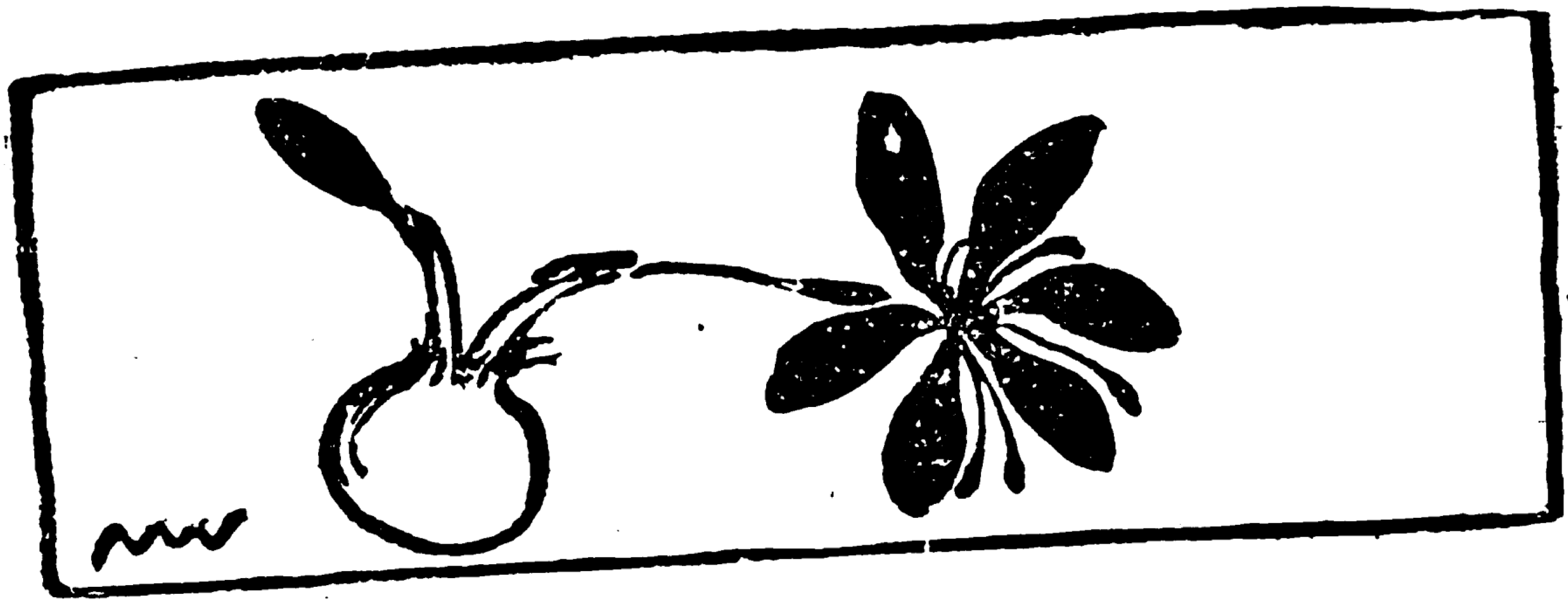
小六は再び妻を迎へやうとしなかつた。彼は背中を一層丸くしながら、こつこつと綴れを織り、年よりは老けこんで行つた。

六

詮助君はかういつた。――

「以上が私の近しいもののざつとした運命です。私は譯あつて朝鮮を飛び出して歸り、そして御覽の通りな始末です。今の妻とは五年前に結婚したのですが、まだ子供はありません。おそらく出來ないのだらうと思はれる節もあります。おそらく僕達の家はこれきりで跡形もなくなつてしまふのでせう。僕の直ぐ上の兄と姉とは赤ん坊の時に死にました。あとの兄妹は今いつた通りです。――たゞ、利尻の姉だけに三人の子があります。妙なところで寂しい血統が殘るのです。天氣がいいと樺太が見えるさうです。

「眞三叔父のことをわりに長くしやべつたのは此の唯一の殘された血統と、私とに、關係があるからです。――」



下女

宇野浩二

半年ばかりゐた女中が暇をとつて歸ることになつた。桐といふ名だつた。

もつとも、私は平生仕事をする爲に他所に部屋を借りて、家を空けてゐることが多いので、家に使つてゐる女中などとは殆ど交渉がなかつた。私は家にゐるとこま〴〵した用事が多くて、癇癪持だつたが、用事をいひつけるのも、癇癪を破裂させるのも、妻に向つて限つてゐた。だから、一日家にゐると、朝から晩まで絶え間なく妻を叱りつけ、小言をいつた。その點、手のつけられない、家の主人だつた。それでゐて、私はまだ曾て一度も女中を直接叱つたり怒つたりしたことはなかつた。

桐の來た時なども、私は仕事の爲に家を空けてゐた間のことで、二三日ぶりで夕方ふらりと家へ歸つて來た。自分の家のことだから、遠慮なく門を開けて、格子戸を開けて、つか〳〵と玄關の間に上つて行くと、迎へに出た小柄な女が、私に突き當りさうになつて、ひどく狼狽してゐた。私はふと家を出る前に近いうち女中が代るかも知れないといふことを聞いたのを思ひ出したので、

「いゝんだよ。いゝんだよ、俺にこゝのがあるんだよ、」と笑ひながらいつた。そこへ妻などが來て、新米の女中だといふので大笑したことがあつた。

そんな風だつたから、私は五間か六間の、女中一人しか使つてゐない小さな借家住居の主人でありながら、大邸宅の主人でもあるかのやうに、容易に女中の顔を覺えなかつた。大體私は馴れない人の顔、殊に向うが極り悪がるやうな女の顔はなるべく見ない質だし、家にゐても女中とは先にいつたやうに直接の交渉はなかつたので、桐の顔など覺えこむのに半月位かゝつた。

が、顔を覺えこむ前に、妻から、實に今度の女中はよく働く、前の花以上だ、だから表向きは十四圓となつてゐるが、妻が特に母に内所で一圓なり二圓なり増してやるつもりだといふこと、背の低いのが瑕だが随分上品な、いゝ顔をしてゐるでせう、家へ來た今までの女中の中で、花もなんでしたが、桐の方が又上ですね。好き好きですけど、本當に上品な顔をしてゐるでせう。二三日前桐の姉さんといふのが來ましたが、姉さんといふのはもつと綺麗なんですよ、背もすらりとしてゐて、大柄で、本當にいゝ女ですわ、――大體こんな話を聞いてゐた。

ところが、二ケ月程前、定めてある月に一度の公休日に、桐が宿入りして歸つて來た時、初めて暇をもらひたいといふことを洩らしたらしかつた。何でも彼女の父は役者とかだつたが、今は中風で、どうかすると頭腦の働きにも故障さへあるらしい、それに母といふのが後添ひで、桐等には繼母に當る人で、姉の外に男の兄弟が一人あるが、それがなまくらな質らしく、列車ボーイをしたり、芝居の稽古をしたり、魚屋になつたり、今又列車ボーイを志願してゐるのだが採用されないので、ぶらぶら遊んでゐるといつた風な人間らしかつた。それで、桐の姉は以前は三越の裁縫部とかに行つてたらしいのだが、繼母といふのが藝者上りか何かで、贅澤好きなものだから、息子か何かなら確實な收入があるかも

知れないのだが、ぢみな裁縫部などの收入では、彼女を滿足させるどころか、厄介者や食ひ潰しもの丶多い家の生活費にも不足勝らしかつた。それで同じ裁縫部の見習に行つてたらしい妹の桐も止めさせて、下女奉公に出したらしいのだが、今度近所にすゝめる人があつて、姉と一所に（姉も裁縫部を止めたらしかつた）活動の手引女になることになつたといふのである。

「活動へ行つたらいくら程とれるんだ？」と私は妻に聞いた。

「初めは二十五圓とかいふんださうです。」

「それぢやア家の月給に、五圓位なら俺が内所で足してやるから、さういふ所で二十五圓とつても、色んな費用がかゝつて、結局俺の家で二十五圓とる方が、丸々はいる譯だから、その譯をお前からよく聞かしてやつて、止めたらどうだ？」と私はいつた。

實際、桐は見たところ上品な顏立で、そして女中としても働き過ぎる程よく働くらしかつた。東京の生れだけに、氣もきいてゐたし、恰好でもあるやうだつた。

それでやつと納得さして、二ケ月ばかり延びたのであるが、今度盆の休に宿入りをして歸つて來てから數日後のことだつた。

「どうもやつぱり桐は歸ることになりさうですよ、」と或日妻が私にいつた。「お母さんといふ人が餘程惡い人で、自分のお腹を痛めない子供だから、どうかしてお金を儲けさしたいんですね、それを自分がつかひたいんですよ。この前の時も、お父さんは知らなかつたんださうです。お母さんといふ人が一存で、少しでもお金の多い活動なんかの方へやらうとしたらしいんです。いつかあゝいつて桐に家へ譯を話さしにやつたら、お父さんにそれが聞えて、お父さんのお陰で

堅氣の奉公がつゞけられることになつたんださうですが、何でも此頃姉さんといふのが、――姉さんはあの時から活動の方へ行つてたんださうですが、此頃病氣でやすんでゐるんださうです、それにこの暑さでお父さんの頭が惡くなつてゐるのを幸ひに、お母さんといふ人が桐に暇をとらして、活動か何かの方へ入れようとするらしいんです。桐も氣の弱い子ですからね。何でも、御徒町ださうですが、あの邊の裏町の、桐の家の近所などでは、どこでも娘の子は活動とか、女工とか、子供の爲を思はないで、少しでもお金になる所へやるんださうです、どこそこの娘は待合か何かに奉公してゐるが、甲斐性があるから月々家へ五十圓位送つて來る、なんてお母さんが桐に當てつけがましくいふんださうです。それや普通のことをしてゐるんぢやないでせうが、桐ももう少し縹緻がよかつたら、いつそのことお母さんの爲に何でもするなんていつてますから、私は心得違ひをしてはいけないといつてやつたんですよ。どうもお盆に歸つて來た時から、樣子が變だと思つたものですから、昨夜聞いて見たんですが、氣の弱い子で、もうその話を家でちやんと定めて來て、今月の末に歸してほしいらしいんです。それをいひ出せないでもぢ／＼してゐたんですね。どうも可哀さうですけど、駄目ですよ、あきらめなければ。それで、早速代りを探しませんでは……それ迄は桐にゐてくれるように賴んでおきましたけれど……」

こんな風にいふと、私が始終家の中の話や、女中の話などを妻から聞きとつてゐるやうに聞えるかも知れないが、大抵の場合、一寸でもそんな話をしかけられると、私が顏をしかめて「うるさい！」と叱りつけるのが例で、妻の方でも心得て滅多にそんな話もしなかつたし、私もそんなことに少しも興味を持たなかつた。よく／＼必要な話でもある時は、朝の出がけでなく、夜寢る時にするやうに常々いひつけてあつた位だ。が、私が夜歸つて來なかつたり、歸つて來ても遲くて、話しかけても例の「うるさい！」で退けるのが常だつたので、私がこんな必要でもない女中の話など聞い

たのは、珍しい出來事に違ひなかつた。もつともそれには一寸した理由があつた。といふのは、丁度その桐が暇をとるとかとらないとかいつてゐた頃、珍しく暑い夏に襲はれたので、大概の寒さでも、雨でも、日曜でも、餘りに几帳面に、缺かさず例の仕事部屋にしてゐる下宿の方へ毎日出かけて行くので、始終友人達から笑はれてゐる程の私なのだが、それがこの夏の暑さにだけは閉口して、出かけようとしてもどうしても出られないのだ、それで、珍しく一日出かけては二日三日位づゝ、朝起きたままで家の中に引きこもつてゐた。そして日の射す加減で家の中の涼しい部屋を選んで廻つては、寢ころんで暮してゐた間のことだつた。

女中もこの頃は一番動かない時と見えて、いつもならすぐ代りが見つかるのだが、桂庵に口をかけてから十日以上碌な候補者が來なかつた。桐も桂庵から來たのであるが、待つてゐる桐に氣の毒なので、十軒近くの桂庵に口をかけた位だつた。ところが、さうかうするうちに、桐が少し腰を落着けたやうに見えた。月を越してから、せめて八月一ぱいは若し代りの者が來ても、その者にいろ／＼後繼の用事を教へ旁たゐてもらひたいと妻がいふと、桐もそのつもりで腰を据えたらしく、相も變らずこせ／＼と働き過ぎる程働いてゐた。多分、八月といふやうな時期だから、活動の口といつても直にないのだらうと私たちは高をくゝつてゐた。

ところが、十日頃に初めてこちらの氣に入つた恰好の女中が桂庵から廻されて來た。千代といふ名だつた。よくある千葉縣の産だが、東京に兄の家があり、親の家もちやんとした家らしく、容貌も十人並だつた。持物なども桐と違つて中々しやれたものを持つてゐた。洋傘など桐は一本も持たないのに、この女は二本も持つて來た。降神術をやり損なつたと見えて、それの跡らしい變な痕が鼻柱の上にあるのが目についた。が、降神術をやるだけ、氣の勝つた、負けず嫌ひの女らしかつた。

桐はその女が來ると、初め二三日のうちは深切に、いろ／＼仕儀の用事や心得などを教へてゐた。新参の女中は一たび聞くと十を悟るといふ風て、きび／＼と桐に負けない利口ぶりを見せた。急に、家の中に誰か一人殖えたやうな感じだつた。

夏になると、私の妻はひどく氷を欲がつて、私がどんなに喧しくいつても、彼女は朝から晩まで幾度となく氷を飲む癖があつた。母もそれをたしなめて、氷は許すとしても、なるべく生のまゝの氷を買はせて、水にして飲むとか、鉋で削らせて飲むとか、かたまりを頬張らせるとかした。それでも、やれ、五百目、もう五百目といつた風に、一日に三度以上近くの氷屋に女中を走らせた。女といふものは餘程熱く渇くものと見えて、桐にしても、新参の千代にしても、彼等ばかりでなく、更ゐる女中といふ女中はいづれも妻に負けず氷好きだつた。だから、桐と千代とは、妻の命令の下に、代る代る喜んで氷屋へ使ひに走つた。

この氷屋は私たちの町内の草分けの家で、冬は汁粉屋の看板を出してゐたが、二三年前から汁粉などやらなくなつた。六十前後の老人夫婦が主人だつた。かみさんは何でも以前吉原の何とかをしてゐて、亭主も同じ土地で似たやうなことをしてゐたのが、一所になつたのだといふことだつた。亭主に今のかみさんのでない四十近くになる息子があつた。赤帽をしてゐるといふ話だつた。さういふと、父親の方も昔赤帽だつたことがあるといふ話だ。その外に八十近い白髪の、彼等夫婦に似もつかない上品な老婆がゐた。亭主の母親だといふことだが、その老婆は私の家のすぐ向ひの横町に、一二所借して別居してゐた。この亭主はお世辭屋で、電話の前でもお辭儀をするといふ程、無暗にお辭儀をするものだから「おじぎ屋」といふ綽名がある程だつた。しかし、そのお辭儀は輕蔑されるといふよりは恐れられてゐるらしかつた。が、誰よりもかみさんがやり手らしかつた。いや、かみさんはがら／＼してるばかりで、あれで矢張り亭主の

方が……」「いや、あのかみさんがなければ、……かみさんがたければあれだけの……」「いや、持ちつ持たれつで、掛け代へのない一對なんだよ。」などとい噂だつた。彼等は初めはこの澇の町の何軒かの家の差配をしてゐた。今でも差配をしてゐるが、今では何軒かの家の家主でもあつた。それに汁粉屋や氷屋はたゞ看板で、本業はあらゆるもの〻紹介だといふことだつた。電話とか、土地とか、家屋とかはいふ迄もなく、彼等の最も力をそゝいでゐるのは、男女の秘密の紹介だといふ噂が専らだつた。今はそれ程でもないが、元、私たちの町の主な住人は妾第一、藝人第二、相場師第三、畫家第四、といつた風な階級が多いといはれてゐた。（去年あたり迄長くゐた床屋が洲崎の方へ引越したのが、月に一度ぐらゐづゝ昔馴染の町へ頭を刈りに來た。つひ此間も「ちよつと次手がありましたので、」といつてやつて來たので、「どことどことへ廻るんだ？」と聞くと、「今は三軒です。お宅と……、」と床屋が數へながら答へるところに依ると、私のところと、柳家つばめ氏と、徳川文學研究家の朝倉夢聲氏との三人ださうである。）ところで、どこの家でも隣同志の附合はなくても、この氷屋とは何か彼か交渉があり、又交渉を持たねばならぬ上に、少し話の好きな女房たちは、暇さへあるとよくこの家へ油を賣りに行く習慣があつた。又、不思議にこの家のかみさんは人を、殊に女を引きつける魅力があると見えた。それに、恐らく主人たちがどんな潔癖家でも、その家の女中が皆この氷屋のおかみさんの手中に丸められた。だから、この家へ行くと、町の草分であるといふ重寶な用事と共に、町内のどんな私事でも、何日の何時にどんな夫婦喧嘩があつたか、何日の何時にどこの家へどんな訪問客があつたかといふことさへ悉く知られた。恐らく私たちの町内では、この家を手先にさへ使つたら、どんな犯罪も見つからずには濟まないだらう。

私の家では夏の氷の用事の外に、その家で電話の取次をして貰つたり、聞えて差支へない用事の電話をかける恩恵に預かつてゐた。しかし、餘り度々その家の前を通り過ぎて、自働電話を應用すると、忽ちかみさんに何か疑ひの目で見

られる覺悟をしなければならなかつた。また、私の女が電話を借りに行く度に、その度毎にいろんな見知らぬ人が來て居て、或時など六十歳位の老人が「もうかうなつたら後家でもいゝよ、相みたいね、」などといつてゐたといふやうな話はざらにあつた。私も時々その家の存在を考へると、私の女がもつと若いか、人並の縹緻をしてゐるかしたら、隨分口が求めることだらうと思はれた。

私がその新しく來た女中の千代が來た日、夕方散歩に出て、十一時近く家に歸つて來たところが、私が歸るのを隙明しなかつたと見えて、しばらく表の戸を叩かねばならなかつた。すると、最初に桐が起きて來た。桐が戸の音で起きて來たのは珍しいことだつた。後で考へて見ると、この晩彼女は何か眠れなかつたのだらう。つゞいて妻が起きて來た。しばらく私が茶を飲んだり、便所に行つたりして、ごた〳〵してゐたが、到頭桐と同じ蚊帳に寢てゐた新米の千代が起きて來なかつたことがあつた。翌朝妻は桐を傍に呼んで、どうも昨夜のやうな調子では、――あれが聞えない譯がないのだから、屹度抑鬱人りだつたに違ひない、あんな風では何だか先を考へて厭になつたから、事に依つたらもう一人探して見たいと思ふが、そしたらお前は折角だがもう少し歸る日を延ばしてくれるかと聞くと、桐はこの月中はかまはないと答へたさうだ。しかし、その後千代に別にその外目に餘るやうな不とゞきなところが見えないので、折角大體定めたことだからと、妻はやはりそのまゝ置いて置くことにした。

そして、桐と千代とは妻と一所に相變らず臺所の用をしたり、洗濯をしたりしながら、一日のうちに一度も二度も代り代り氷屋に走つてゐた。すると、三日目の夕方に、桐が突然ふさぎ出して、すぐにも家に歸りたいと妻にいつた。千代とでも喧嘩したのかと聞くと、彼女は駄々つ子のやうに頭を振つた。いろ〳〵なだめるやうに理由を聞いても、悉く頭を振つた。結局これといふ理由がないらしかつた。桐がこれ迄ゐた五ケ月の間に、一度でもそんなヒステリ的な面を

見せたのは初めてのことなので、妻は驚いた。が、いろ〳〵なだめると、やつと機嫌を直した顔で、では、明日歸らしてもらふといつた。そして、翌日になると、私の家の溜つてゐる洗濯物を片端から氣狂のやうに洗ひ出して、狹い物干場が間に合はない位だつた。

「そんなにしなくともいゝよ、」と妻や母がびつくりしてなだめた。「お前は前の女中がだらしがなかつたので、汚くして行つたものを、蒲團のやうなものまですつかり洗濯してくれたんだけど、こんな家のものなど、この暑いのにかまつて行かなくてもいゝよ、後は千代がゐるから、ね、」と妻はいつた。が、この突然桐に起つたヒステリ的な發作とも見るべき仕草は容易に改まらなかつた。そして洗濯物が一と片づきすると、桐は女中部屋に入つたまゝ何か思案に暮れてゐるらしいので、妻が聞いてやると、今度はいつ迄も置いてほしいといふのだつた。妻は笑つて、「まあ、何をいふの、私の方で出てくれといつたのではない、だからお前の方でゐてくれるといふのなら、こちらは元々お前にゐてほしかつたんだし、千代は今のうちならさういつて歸つて貰つたつていゝんだから、お前の好きなやうにおし」、といつた。すると、桐は「いや、それではお千代さんに氣の毒ですから、それぢやア矢張りこの月中、あと半月だけ置いていたゞきます、」といつた。結構だから、その間によく千代を仕込んでやつてほしいと妻はいつた。

ところが、その日の夕方近く、桐は又女中部屋に入つて、何かあわたゞしく自分の荷物を片附け始めた。千代は柳行李などを持つて來たのに、桐は何も持たずに來たのだが、今は四つの女中らしい大きな風呂敷が出來てゐた。妻が心配して、

「お前といふ人は變だね、又歸りたくなつたの？　今迄長い間あんなに機嫌よく、あんなによく働いてゐてくれたのに、今になつてそんな變な風にして歸つて行つたら、お互に氣持が惡いぢやないの？　歸るにしても、御飯でも食べ

て、――歸りたかつたら、いつでも歸つていゝんだから、あんたに足下から鳥が立つやうにしないで……

と、しばらく默つてゐた後で、

「私、ちよつと途中で寄るところがあるんですから……」と桐はいつた

「寄るところがあるつて、突然どうして……」と女は、ちよつとしたらしかつた。が、抑えて、「お前、さつきはこの日中ゐるといつた位だのに、急にそんなに逃げるやうに歸らなくとも、それおやゝもう時間だから御飯を食べて、風呂にでも入つて、涼しくなつてから、そんなに歸りたかつたら、ちやんとしてお歸り、ね。變な子ね、泣いたりして、どうしたの？」

この女中部屋での、妻のいら／＼した空氣が、耳の遠い母に傳染し、そして奥の間にゐる私にも傳はつて來た。私はそツと母のゐる茶の間へ行つて、彼女が立ちかけるのを止めた。

「騒いだですね、ヒステリイらしいですね。今までそんな氣はちつともなかつたんでせう？」と私は小さい聲で、母をなだめておいたが、私も變に氣になつて來た。が、私が出る幕でないと思つてひかえた。

私はふと、その前の晩だつたか、私があまり理のあることないこと無暗に妻を叱る癖があるので、彼女は腹立の餘りいつたのだらうが、「あなたが餘り怒りなさるものだから、桐は氣が小さい子だから、その度に、私もう歸らしてもらひます、旦那樣のお氣に入らないやうですから、といつて何べん歸るといつたか知れませんわ、」といつたのを思ひ出した。が、私は先にもいつたやうに女中に一度だつて荒い言葉をつかつたことがないので、「だつて、俺はお前の外に、一度だつて女中に怒つたことがあるか、」といひ放つた。無論、一二度そんな事を桐がいつたのを、妻が誇張していつたのだらうとは思つたが、氣の小さい女中なら、なる程私のやうに妻にがみ／＼いふのを聞いたら、そんな家にゐるのが厭にな

ゐだらうと思つて、厭な氣がした。

結局、その場は妻が桐をなだめて、飯だけは暑いから食べたくなければ食べなくともいゝから、折角家に歸るのだから、せめて風呂に入つて綺麗になつて、——誰でもさうするんだから、そして歸る方がいゝといふことで、風呂にやつた。その風呂の時間がいつもより少し遲かつたので、母と妻とがそんなこと迄一寸氣にしてゐた。私も落着かないので、散歩するやうな歩調で、狹い家の中を、奧の間や、茶の間や、臺所やを行つたり來たりしたり、次手に一寸女中部屋をのぞいて見たりした。桐の四つの風呂敷包がちよこなんと片寄せられてあつた。千代は二階の掃除をしてゐるらしかつた。

やがて、桐は風呂から歸つて來て、身仕度をして、奧の間にゐた私の所へ挨拶に來た。私は何となく相手の顏を正視しないで、——が、どうかした拍子にちらと見た瞬間、變に色つぽい女だといふ感じを得て驚いた。

「長い間いろ〳〵御苦勞様。又暇があつたら時々遊びにお出で。」といつた。

彼女はそれから茶の間の母のところへ別れを述べに行つた。が、母は老人の一徹で、折角何ヶ月かの間珍しい良い女中として失策なく、ぼろを見せないで働いてゐて、最後の一日か二日に思ひもよらないヒステリ的な、面を出して、家の中の空氣を闇くした彼女に、幾分機嫌を悪くしてゐたらしかつた。が、挨拶には私と同じやうな言葉を與へてゐた。

それから彼女は傍にゐた妻に挨拶した。妻は女らしい言葉をかけながら、裏口の方から出て行く彼女を臺所口まで送つて行つて、そこで又何かさゝやくやうな立話をしてゐるらしかつた。その間が可成り長かつた。私は先程から自分の用事で自働電話をかけに行かうとしてゐたのだが、（私はどんな用事にしても、役所から呼び出しの時の外、自分で米屋へ電話を借りに行つたことはなかつた、）何故か今出ると、桐より先に出ることになつて、丁度彼女が歸る途に當る自働電話

梢への往復の途で、彼女にもう一度會ひたくたい氣がした。が、妻と桐との立話が餘り長いので、五錢白銅をつかんだまゝ、ふと氣がついて私も見送つてやらうと思つて、臺所の方へ行つて見た。と、桐はもうそこの土間に下りて、隣の塀との間の狹い通路に、窮屈さうに此方を向いて立つてゐた。彼女はその場になつて、又歸りにくさうに、そこへ送りに出てゐる妻と千代とに向ひながら、何ともいへぬ悲しさうな表情の中に、どこかびつくりしたやうな顏をして立つてゐた。

「御徒町なら車をいつてやつたらどうだ？」と私はいつた。「荷物を幾度にも取りかたがた遊びに來るのはいゝが、來るのは別として、やつぱり荷物だけは一度に持つて歸つた方がいゝぢやないか。御徒町ならすぐだ。」

と、妻は女のけちさから「まあ、しかしおいといて、何度にも取りに遊びに來る方がいゝわね。」そして、私の方に向つて「いゝですよ」といつた。が、それよりも、桐は車で送るといふのを聞くと、びつくりしたやうに

「いえ、いえ」と身を捩ぢらしながらいつた。

その時、私は初めて――といつて少しも誇張ではなく、桐の顏をはつきり眞面に見た。何かに打たれたやうた感じだつた。小柄だが、改めて見る大體の面長の輪廓といひ、口つきといひ、鼻筋といひ、口元といひ、これ程整つた顏をしてゐるとは思はなかつた。否、整つた顏だとは前から知つてゐた。が、私の印象に殘つてゐるのは、彼女が私のところへ茶を持つて來るにしても、用を聞きにくるにしても、いつもその小さい身を兎のように丸くして、下向いてゐるところとか、横から見たところとか、向う へ立つて行くところとかを見たに過ぎなかつた。が、私が初めて發見して驚いたのは、その整つた顏が、先程私の前に挨拶をしに來た時ちよつとその片鱗を見せたやうな氣がしたが、何んともいへぬ色つぽさを湛えてゐることだつた。無論、それは普通にいふ意味での色つぽさではない。といつて、全く純粹の色つぽさ

でもない。處女？　といふのでもない、野の薔薇といふ程清新でもない、といつて決して卑しくない、それは彼女の顔立そのものが先にもいつた通り珍しく上品であつたとでも分る通りだ。彼女は去りがてに私たちの方を見ながら、悲しさうな顔の中に、無理とも見え、自然とも見える笑ひを浮べる拍子に、これも私が今まで氣がつかなかつたところの、驚くべき綺麗な歯をちらりと覗かした。これは若しかすると、彼女の上品な顔を裏切つた何物かであつたかも知れない、彼女は十九歳だつた、が、私が初めて見た驚くべき、嘗て私が見た如何なる種類の女にも見たことのない色つぽさだつた。その美しさは綿絣の貧しい着物や、綿物の名古屋帶を超越してゐた。といつて、私は女としての彼女に引かれた、つまり彼女に何か戀のやうなものを感じたとかいふ譯では毛頭ない。

私は彼女が歸つてから、わざと二三分おくれて、先からの用事の自働電話をかけに家を出た。と、私が家を出て向うの通に出る突當りに、例の氷屋があつた。（氷屋からいふと、丁度私たちの町の一筋の兩側を展望する位置にあつた譯だ。）その氷屋の、——氷屋にしては珍らしい奥の方に離家や、小ぢんまりした二階建の離家のある庭の入口に近いところに、夕方の光ではつきりとは見えないが、（又見ようともしなかつたのだが、）今私の家を出た桐の名古屋帶をした向う向きの姿か立つてゐるのを認めたと思つた。私はびつくりした。無論思ひがけなかつたが、たしかに間違ひではなかつた。私は目を伏せながら、家數にすると十軒ばかりの間の道を、やつとの思ひで顔をその方に擧げないやうにして、その氷屋の前のところで、曲り角の電信棒の内側を通つて、そこそこに自働電話の箱のある方へ曲つた。自働電話から歸りに、私は少し度胸を出したつもりで、氷屋の前へ今度は睨み加減で近づいて行くと、例の「おじき屋」の亭主か、先にも出てゐたか覺えないが、表に出した縁臺に一人腰かけて、片足をきりぎりすのやうに曲げながら、私の方から見ると向う向きに何かの番をしてゐるやうな恰好で、團扇をつかひながら涼んでゐた。私はふと青年の頃の友達に、一円分け若

し今世界中のどこかで、處女が汚されかゝつてゐるといふことを聞いたら　何をおいても救ひに行きたいね、」と口癖のやうにいつてゐた男があつたのを思ひ出した。が、私はどうすることも出來なかつた。

家に歸つてから、そつと妻を呼んで、

「おい、桐が今こゝから出て、あの氷屋に入つたやうな氣がするが、そんなことが考へられるか？」と聞くと、

「まさか、」と妻は言下に打消すやうにいつた。「さつきもあそこのおかみさんに道で會ひましたら、折角いゝ女中さんでしたのに、歸るんださうですが、惜しいですねといつてた位ですもの。しかし、今度の女中も實に姿がいゝといつて賞めてましたよ。何をいひ出すか知れない人たちですわね。」

「向うから桐のことをさういつたんだらう？　馬鹿！」と私は思はず息をはづまして叫んだ。「それが怪しい。」

私はいつか桐が近所の某といふ娘のやうに、自分も縹緻がよかつたら、いつそのこと母親の爲に金をもうけてやりたいといつた言葉や、最近の彼女の行動をいろ〳〵思ひ合はした。が、私はどうすることも出來なかつた。が、私は興奮した。

「お前、」と妻に呼びかけた。「お前、桐の所は分つてるんだらう、これからすぐ桐の家へ行つて見てやれ。」

「しかし、もうさうだとしても、桐のお母さんといふ人が、さういふことを望んでゐるやうな人らしいんですもの。駄目ですわ。それに、あの子だつて馬鹿ぢやありませんもの……。」

「ふーむ、」と私はうなつた。が、ふと思ひついて「それぢやアね、兎に角俺の家から歸りに間違ひがあつたりしたら、何にしても困る。所書があるんだらう。ぢやア、今すぐ、桐が午後七時にこの家を出て歸りました、と葉書でいゝ。速達でいつてやれ。」



義經

網野菊

「義經は私のベスト・フレンドです。人間の友達は皆私をすて、私にそむきました。義經だけです、永久に私を慰め、愛してくれるものは。」

それはミセス・モリアンの口癖であつた。それを幾度もくり返して云はれる時には、私はよく「勝手にするがいゝ」と思つたものである。

ミセス・モリアンは東京の郊外の或町に住んでゐた。丁度其隣りが私の親類の家で、私は最初從妹につれられてミセス・モリアンの所へ遊びに行つたのであるが、其時、ミセス・モリアンは私を見て、「ユーロピアン・ガールのやうな感じの顏をしてゐる」と云つた。其言葉は大變に私を喜ばせた。後で聞くと從妹もはじめ左う云はれたのださうであつたが、從妹は私を失望させるのが氣の毒だつたのであらう、ズツと後になるまで其事は私に云はなかつた。內氣な從妹は、ミセス・モリアンの性質、生活についても、餘り私に話さなかつたのであつた。私は、ミセス・モリアン

があの自由な藝術家達を直ぐ聯想させるB共和國の人であること、詩や音樂が好きで彼女自身繪をかくこと、それからまた、多くの國を旅して七八ヶ國の國語を話すこと、日本びいきで、飼つてゐる九官鳥に義經と名をつけ、表札も森庵と出してゐることなど、さういふことに興味を持ち、好意を感じてゐたのであつた。事實を云へば、ミセス・モリアンの容貌――それは普通我々が外國人について持つ概念上のそれとは遙かにへだたつてゐて、皮膚の色も白くなく黄味を帶びてゐたし、鼻もあまり高くなくて丸く、髮の毛も濃い方でなかつた――やゝ少しネトネトした、ハッキリしない物の云ひ方などは、私に芳ばしい印象を與へなかつたが、英國人や米國人に對する時とは違ひ、下手な英語でも遠慮なく話せ、それがまたどうにかかうにか相手に意味が通じるといふことが面白く、それにいろいろ面と向つてほめられて見ると、まんざら惡い氣もしなくて、私は從妹の家が間もなく引越してしまつた後も、ミセ・スモリアンの家に出入りしてゐたのであつた。

其處は郊外といつても、かなり前から住宅地として開かれてゐただけに、一體に落着いた家が建ちそろひ、靜かな感じのする、いゝ町だつた。そして、ミセス・モリアンの家は後に廣い原をひかへた純日本風の家で、離れ風の小部屋などもついてゐ、木組も中々上等でしつかりしてゐた。庭も割に廣く、山茶花、椿、薔薇、山吹、萩　其他殆んど四季折々の花の咲く木や草が、こんもりと配置よく植えこまれてあつた。其庭の中を、細い小砂利の道が、玄關から門まで長々とつゞいてゐるのである。家の後の原には、夏などは螢も飛び、原の向ふは杉の木の丘が幾つもつらなり並んでゐた。ミセス・モリアンは其家を「緑の家」と呼び、大變に氣に入つてゐた。そして、其處に一年半ばかり前から、一人の日本人の手傳ひの女の人と、これから九官鳥の義經と住んでゐたのであつた。だが、其手傳ひの人は、私が出入りするやうになつてから間もなく出て行つてしまつた。其手傳ひの人、櫻井といふ人の腕にはミセス・モリアンのつけた幾つもの爪のあとが

あつたと、これも後で從妹が私に話した。

ミセス・モリアンには友達といふものが餘りなかつた。B國人が日本に多く滯在してゐないといふこともあつたのであらうが、事實また、ミセス・モリアンの性質が、友達を永く保つことが出來なかつたのであらうと思ふ。日本人の友達も全然はじめからなかつたわけでなく、殊に、津守とかいふ、或大きな實業家の夫人などは、ミセス・モリアンが數年前にも曾て日本を訪ねた、其時からの友達であつたらしかつたが、ミセス・モリアンはそれらの人とも次々に絶交してしまつてゐた。女中も、松井さんが行つてしまつてから後には少しもゐつかなかつた。そんな工合で、ミセス・モリアンは其廣い家に義經とだけ住む日が多かつたのであつた。

「義經〳〵、あなたは私のベスト・フレンドです。ねえ、さうですねえ。」

ミセス・モリアンは私にきかすためにわざ〳〵それだけ日本語か英語で云つて、義經の籠に顏をおしあてた。

義經は、自分の名のヨシツネとオタケサンとモシ〳〵といふ言葉の外は一寸も日本語を覺えてゐなかつた。私は元來九官鳥は好きであつたが、義經には何故か初めから終りまで親しみが持てなかつた。義經が私にはわからないB國語ばかり話すといふことも其原因の一つであつたかもしれぬが、ミセス・モリアンがなんぞといふと二た言目には「人間の友達は皆」云々といふ、それに對する反感が、九官鳥の方にも移つてゐたのに違ひない。

「お前は私のベスト・フレンドです。ねえ、義經、お前だけですねえ、私に背かず、私を永久に慰めてくれるのは。」

日本語や英語で左う云ひ〳〵ミセス・モリアンは云ひきかすのであつたが、義經の方では、一向に自分の知らぬ言葉を云はれるので、小首をかしげ、チンとすましたまゝでゐる。其樣子は品よく美しかつたので、私は或時ミセス・モリアンに、

「彼は小さいプリンスのやうです。」と云つた。

「オー、イエス、プリンス。たしかにさうです。小さいプリンスです。お前は小さいプリンスいやうです。」

ミセス・モリアンは喜んで九官鳥に云つた。

「私はいつかはB國へ歸らねばなりません。其時義經をつれて行つたものかどうかといふことについて、今から私は思ひなやんでゐます。長い航海や旅行の間、どうして義經はそれにたえられませう。さうかといつて、私は彼と別れることは到底出來ません。そのことを考へると、私は本統に當惑してしまひます。」

ミセス・モリアンは、さういふ話をする時、悲しさうに片眼を細め、顏をしかめた。

ミセス・モリアンは其頃、二十五六で、ズツと以前から未亡人であつて、久しい許婚だつた人と結婚すると間もなく良人が死んでしまつたのであつた。私がミセス・モリアンと友達になつてから暫くした或春の日の夕方、私達二人は庭に椅子を持出していろいろの話をしてゐたが、その夕方の空氣にさそはれたものか、ミセス・モリアンは其人のことを云ひ出し、また自分の生ひたちなどを語つたのであつた。

ミセス・モリアンは小さい時に兩親を失ひ、兄夫婦の手で育てられた。其兄夫婦には子供がなかつたので、年のズツトへだたつてゐたミセス・モリアンは丁度其子供のやうに可愛がられた。兄さんはB國の大學教授で、其夫人はイギリスの人であつた。兄さんが英國留學から連れ歸つた人である。ミセス・モリアンが母國語の次には英語を最もよく話すといふのは、かうした關係からであつた。ミセス・モリアンは雜誌や新聞にスケッチなどを寄稿する傍ら、英語ものの翻譯などもしてゐたのであつた。

も嫌ひでしたし、コルセットをつけることも嫌ひでした。彼女は幾度私のために吐息をついたことでせう。けれども私は幸福でした。私は若く、自由でした。日曜日には、私は花のついた、鍔の廣い帽子をかぶつて、コルセットなしに寛かな服を着て、私のフイアンセと町を通り、野や山へ行きました。私達は教會へ行く代りにピクニツクへ行つたのです。私は今でも、さうして嬉々と歩いて行つた自分の姿をハツキリと思ひ浮べることが出來ます。」

さう話して、ミセス・モリアンは右手の人さし指を輕く口許にあて、片眼を細めてうつとりと宙を眺めた。と、やがて、其顔が悲しげにゆがみ、眼に涙が浮んだ。夕方の其うすやみの中に其涙を認めると、私の眼も覺えずうるんだ。私は、若いミセス・モリアンがB國のP市の町を愉快氣に笑ひながら、B國特有の細かい花模様の服を着て、鍔廣の帽子をかむり、少し身を前にのめらし氣味に飛ぶやうに小柄な體を運んでゐる其様子をマザ〳〵と眼の前に思ひ描き、「こんなミセス・モリアンのやうな人にも、そんな時代があつたのだ」と思つてセンティメンタルになつたのであつた。ミセス・モリアンは再び云つた。

「あゝ、其頃私はどんなに幸福であつたでせう。併しながら、其幸福、喜びは永く續きませんでした。結婚して一と月とたゝぬうちに、ミスター・モリアンは死にました。私は彼が死ぬと自分の部屋にとぢこもつて泣いてばかりゐました。朝から晩まで泣いてゐました。どんなに夫は私を愛してくれたでせう。そしてまた、私もどんなに彼を愛したことでせう。私はベツドにしがみつき、終日、泣き通しました。何日も〳〵。兄夫婦はいろいろといつて私を慰めましたが、私は少しも彼等には耳を傾けませんでした。私は私の幸福のすべてが彼と共に死んでしまつたことを知つたのです。オヽ、私は今でもあの當時の悲しみをハツキリと心に感じます。それはもう大たい六十年ばかり昔のことではありますが。其時でした、私が私の最初の日本への旅を思ひたつたのは。私は或本の中で日本のことを讀んでゐました。私は

自分の悲しみを慰めるために、遠い、サクラの國を訪ねてみようと考へました。其頃、B國では女一人の外國の旅、殊に日本はまだ我々にとつて知られてゐなかつたので、其日本へ行くといふことなどは私が最初で、B國中非常な評判でした。親戚や知人は私の旅行をあやぶみました。兄夫婦は私を一人で手放すことをいやがりとゞめようと試みました。が、私は全てを振切つて日本に來ました。兄達は仕方なく、日本の大學教授C博士への紹介狀をくれました。日本は私の豫期通り私を慰めてくれました。オヽ、其時分の日本はどんなに美しく、なつかしく私の眼にうつつたことでせう。そしてまた、其頃の日本の人達はどんなに私に親切であつたでせう。私は一年の間日本の諸所に旅行したり東京にゐたりして、心のまゝに日本を享樂しました。ミセス・ツモリとはC博士の紹介でお友達になつたのですが、彼女は其頃は私に非常に親切で、私をいろいろの所につれて行き、多くの珍しいものをみせてくれました。だが、今は彼女とも絶交してゐます。そして、今、日本は私にあの數年前の喜びを與へてくれません。多分あの時は私はホテル生活をしてゐて今の此家事の煩はしさなどに心をとらへられてゐなかつたせいもあるのでせう。が、何といつても日本そのものが惡くなり、日本人自身が以前よりも不親切に、利己主義になつたことは否めません。私が日本への二度の旅行を試みたのは私の失敗だつたかもしれません。私は前の美しい印象を此二度目の訪問によつてこはされつゝあることを悲しみます。」

ミセス・モリアンの女中難は相變らず續いた。時々何かの傳手（つて）で來るものがあつても、中々話がまとまらなかつた。來る人の方では、外人の家庭であるから、どんなに時間の自由もあり、物質的にもよく、また、英語の勉强が出來るかもしれないと考へるらしかつた。が、ミセス・モリアンには、先づ第一それが氣に入らなかつた。

[illegible]忠實に働く女中です。

よく、ミセス・モリアンは私に左う云つた。成程、ミセス・モリアンの云ふ事はチヤンと筋道が立つてゐる。ミセス・モリアンは折にふれ、中々うまい事を云ふのであつた。左ういふ、上手な皮肉を云ふ事にかけては、ミセス・モリアンは實に天才であつた

だが、ミセス・モリアンの女中難は延いては私にまで影響を及ぼした。ミセス・モリアンは何かにつけ手紙で私を呼び、用を頼んだ。何かの直し物、電話をかける用事、買物、其他。私は、はじめのうちは快く其用事を果しに出かけたが、其用事が頻繁になり、其上ミセス・モリアンは私に對して感謝する所か、私の行きやうが遲いと云つては例の皮肉を云ひ、まるで日本人は外國人の用事をするのが當然の義務であるかのやうな顔をして日本人の惡口をいふので、しまひには私は腹を立ててしまつた。私とても遊んでゐるからだではなく仕事があつたし、一々電車に乘つて出かけたあげく、常に「日本人は非常に誠意にかけてゐます。日本人は非常に不親切です。他の國、殊にB國では決してこんなことはありません。試みにB國へ來てごらんなさい。B國人がどんなにあなた方外國人を親切に扱ふか、直おわかりでせう。日本人が今世界各國で評判が惡いのは無理のないことです。」ときかされるのではたまらない。友達もなく、言葉も不自由なのだから、隨分氣をつけて親切にしてあげなければならぬのだと時々思ひ返しても、左う、あまりなきめつけに「日本人は不親切、日本人は不誠意」と云はれると、こちらでも、つひ、「ばかにしてゐる。そんなに日本人が不親切でいやだと思ふなら、サツサと自分の國へ歸つたらいゝぢやないか」と思ひたくなる。私はだん〳〵ミセス・モリアンが厄介になり、嫌ひになつた。其時のことである。急に一人、女中がみつかつた。私はそれまで知らなかつたが、ミセス・モリアンはI縣下の海岸に一人の日本人の友達を持つてゐた。其人は八年前のミセス・モリアンの最初の來朝時代からの友人らしかつたが其の世話で小さい女中が一人、其海岸からつれて來られることになつたのであつた。

其時分、ミセス・モリアンは大分女中難にこりてゐたので、女中を永くゐさせるためにいろ〳〵と工風をこらしてゐた。先づ第一に、言葉が通じぬ所から種々の誤解が生じるのであるからと云ひ、誰か一人、英語のわかる人に同居して貰ふことにしようと云つてゐた。私もそれには賛成だつた。こんなひつそりした家に、人間が、言葉の通じない同志の人間がたつた二人きりでゐるなんてことは何よりも悪いに違ひない。所で其仲に立つて貰ふべき同居人の人がみつからぬうちに、女中の方が先きにみつかつてしまつたのである。そこで、ミセス・モリアンは私に次のやうな手紙をよこした。

「我が親愛なるミス・コムラ。

私は近いうちに新しい女中を一人得ることになつてゐます。田舎にゐる日本人の友達が私のためにみつけてくれたのです。其女中は全く若い娘で、彼女のスクール・デイズを終へたばかりです。そして大變にいゝ性質で、おとなしく正直ださうです。所で私はあなたにお願ひがあります。其娘が私のブロークン・ヂヤパニーズに慣れるまで、ホンの二三日私の家に來て一緒に暮して下さいませんか。私の家からあなたの勤め先きの××社までは左う大した道のりではありません。電車の便もいゝと思ひます。ですから、このことは大してあなたに御迷惑にはなりますまい。あなたはあなたの御希望次第で、此訪問をもつと永くも又は短くなさつてもよろしい。

モリアン

二伸、どうか直ぐに御返事をしらせて下さい。」

文中の「大してあなたには御迷惑」云々の文句は如何にもいつものミセス・モリアンの言葉らしく、私は素直に行く氣がしなかつた。だが、はじめての奉公で、選りによつてミセス・モリアンの所に來る少女のことを考へると氣の毒だ

つた。それに、女中がうまくミセス・モリアンに慣れてくれゝば、私の手だつて省かれるわけである。そこで、私は承知の旨を答へた。それから二三日すると、ミセス・モリアンはまた次のやうな手紙をよこした。

「親愛なるミス・コムラ。

　女中は此土曜に來るといふことです。そして友人は其晩は一緒に此處にとまるといひます。ですからどうか其時私の家のお客様になつて下さいませんか。併しながら、私は其前にあなたにお目にかゝりたい。郵便局へ一緒に行つていただきたいのです。郵前局の人達はたしかに親切です。だが、あの人達が何を書くか私にはわからなくて、困ります。それに、お金の事柄については人は常に知らねばなりません。ですから、どうか此手紙お受取次第、二三分お立寄り下さい。」

　ミセス・モリアンの田舍の友達は約束通り土曜日に女中をつれて上京した。そして其晩をミセス・モリアンの家で過した。私は日曜日の午後、出かけて行つた。其時はもう森といふ其田舍の友達は歸つた後で、私に置手紙をして行つたと云つて、ミセス・モリアンは私に一通の手紙を渡した。

「まだお目にはかゝりませんが、御尊名はミセス・モリアンから承つてゐます。さて突然ながらお願ひしたいことがあります。それは餘の儀ではありません。私はミセス・モリアンの懇望により女中大石ムラなる者を斡旋昨日つれてまゐりましたが、御承知の如き田舍の人のことゝて外人の慣習其他の理解全くなく、双方意志の疎通をかき、互ひに不自由を來たすことを發見し、私も中間に立ち双方に對して申譯なき立場となつて閉口しました。ついては本日つれ歸らうと思ひましたが、ミセス・モリアンの望みにより、また一つには、上京早々再びつれ歸ることは高貴な少女の心をきづつけるのみならず、兩親に對しても申譯ないので、どうしたものかと途方にくれました。折柄貴女には當家に度々おいで

の出來り、私にとつては實に暗夜の燈の如く、大變に勝手ながら、おいでの節はムラを御指導の上一人前の女中として下さるやうお願申上げます。私は此頃は貧弱な地方自治團の犠牲となつて日夕東奔西走の公生活のため、はじめから不十分な語學も殆んど忘却の有様で、ミセスとの會話も自由でなく、ムラの身分等に關しても十分な説明出來かねますから、貴女からミセスに御傳言下さい。ムラの家は代代實直者のみで、兩親兄弟も皆正直勤勉で村内の評判も至つてよく、且、本人も正直で高等小學も優良の成績で今年卒業しました。さういふやうなわけですから、間もなく普通の女中となることゝ思ひます故、どうか左うミセスにおことづけて下さい。尚、本人は洋食は全く駄目ですから、日本食を下さるよう、私からもお願ひはしておきましたが、貴女からももう一度おつしやつて下さい。そして、それに要る汁鍋及びアタリ鉢等もお求め下さい。」

さういふことが正しい丁寧な候文で書かれてあつた。私はそれを讀んで、其ムラといふ娘がミセス・モリアンの家でどんな立場にあるかといふことが直ぐにわかつた。そして、困つたことになつたと思つた。

ミセス・モリアンは私の心を讀まうとするやうな眼附で、私が其手紙を讀終るのを待つてゐたが、

「何と書いてありますか。」と訊ねた。

私は手紙の意味を大體かいつまんで話した。

「フトン。」ミセス・モリアンはばかにしたやうに、また不滿さうな溜息をもらした。

「女中さんは何をしてゐます。」と私が訊くと、

「ねてゐます。」と答へて、ニヤリと笑つた。

「どうしてですか。」

「氣分がわるいといふのです。森さんが歸ると直ぐ床につきました。來てすぐ寢ます、あんな女中はB國にはありません。」

ミセス・モリアンは左う云つて眉をすぼめた。

女中部屋にあてられてある、臺所脇の三疊へ行つてみると、其娘は頭までスツポリ蒲團をかぶつてねてゐた。私が聲をかけても一向に返事をしない。ミセス・モリアンは私の後からついて來て、日本語で、

「あなた、氣持大變にわるい。困りましたね。お氣の毒です。」と云ひ、私の顏を見て、また、ニヤリと笑つた。

仕方がないので、私はお夕飯の仕度にかゝつた。ミセス・モリアンも臺所に出て來て手傳つた。私達のお茶は有合せの鑵詰の肉で間に合せたが、女中は肉を食べないと思ひ、ミセス・モリアンに相談すると、ミセス・モリアンは極めて尤もらしい顏をして、

「オー、病人は何も食べない方がよろしい。病人は食べるとよくありません。」と云つた。そして、其理由を私にいろいろと說明した。消化の點其他。併し、私はともかくも一應訊いてみませうと云ひ、女中部屋へ行つた。女中は私が行くまでは顏を出してねてゐたらしかつたが、私がはいつて行くと同時に再び蒲團をひきかついでしまつた。私が何か云つても決して答へなかつた。何といふ強情な娘だらう、さう思つて腹が立つて來ながら其處に暫く立つてゐると、後でミセス・モリアンの聲がした。

「起きません？　あなた、起きません？」

其日本語の調子は非常に優しかつたので、私は意外に思つて入口の方へ振返つてみると、其處に立つてゐるミセスモリアンの顏つきは何とも云へずすごかつた。ニヤ〳〵笑ふことは笑つてゐるのであつたが、其笑ひ顏そのものがさうそ

氣味わるく、恐かつた。私はこれまでにも隨分ミセス・モリアンの不快な表情は見て來たのであつたが、それ程徹底的に氣味のわるい顏つきはみたことがなかつた。私は從前から訊いた松井さんの腕の爪のあとを其度に思ひ出し、成程と思つた。

「あなた。氣持が惡い。何も食べない。」「いゝです。私でみて食べます。よくありません、消化をこはしますよ。」

それからミセス・モリアンは私に向ひ、ニヤ〳〵笑ひつゞけながら英語で云つた。

「此娘は決して良い性質ではありません。大變に強情です。あなたはさう思ひませんか。こんな強情な娘に會つたのは、はじめてです。松井さんも強情でした。併し、此娘は彼女よりも、もつと〳〵強情です。」

女中は到頭食事をしなかつた。

私達の夕食の後片づけがすむと、ミセス・モリアンは私に「どうぞピアノをひくなり何なり自由にしてくれ」といふので、私は客間へ行つてピアノの前に坐つた。私はピアノなぞひけなかつたが、併し彈きたい氣は十分以上にあつたので、其處にあつた譜を取上げ、片手でメロディだけをひいてみた。かういふことが此家での生活の餘德だなぞと考へながら。

ミセス・モリアンは其間に風呂の火をたきつけると云つて風呂場へ行つた。が、私がB國のうたのメロディをひいてゐるのをきゝつけると出て來て、B國の歌は半音が多くつて大變なだらかで優しく美しいと說明し、それらの曲をひいて、うたつてみせた。

ミセス・モリアンはやがて風呂場の方へ戻つて行つたが、お湯は一向に湧いてゐなかつた。第一、火が全然消えてしまつてゐたのであつた。

「オー、どうしませう。困りました。實に困りました。チエーツ。」

左う日本語で大きな聲をあげてゐるミセス・モリアンの言葉をきくと、私もだまつてゐるわけに行かず、ピアノの前を立つて風呂場へ行つた。さうして、私がやつてみませうと云つた。

　ミセス・モリアンは、

「さうですか。では、お願ひします私はさういふことには不慣れで中々出來ません。」と云ひ、立つて、私の代りにピアノをひきに客間へ行つた。私は一生懸命マツチをすり直し／＼新聞紙に火をつけた。コークスを投げこんだが駄目だつた。濛々と黒い煙が立つばかりで、一寸も効果がない。煙が客間の方へまで流れて行つた。

「どうです、駄目ですか。」ミセス・モリアンは立つて來て私に云つた。さうして今度は二人でやつてみたが、矢張り駄目だつた。私は、ミセス・モリアンがなんで、こんなお風呂なんかわかすことを思ひついたのだらうと思つて、恨めしくなつた。そのうちに時計が九時をうつた。ミセス・モリアンは、やつとお風呂をたてることを思ひあきらめた。

「駄目です。やめませう。松井さんはお風呂をわかすことも上手でした。私は今になつて彼女を大變にミスしますよ。」

　ミセス・モリアンは左う云つて顔をしかめて笑つた。

翌朝になつても女中は起きなかつた。食事をしようともしなかつた。ミセス・モリアンの家の食事は決してとるまいと決心してしまつたかのやうであつた。ミセス・モリアンはミセス・モリアンで、例の極めて自然らしい説明をくり返して、女中に食事をさせることをこばんだ。私は仕方なく日僑社へ出かけて行つた。そして其歸りがけパンと卵を買つて來て女中に與へた。私はとんだ役割だと思つた。女中はそれを素直に受取り、私に向つて訊ねた。

「あなたはズーツと此家にゐてくれるのですか？」

私は「あなたがミセス・モリアンに慣れるまで二三日ゐるきりであるが、併し、此家へは度々訊ねてくるから」と答へた。すると女中は、家に歸りたいから誰かに迎ひに來てくれるよう、森さんに手紙を出してくれと私に頼んだ。私は、森さんにはさう手紙を書いて上げようが、ともかくも其迎ひの人なり何なり來るまでの間でも起きてくれなければ困ると云つた。私は場合によつては私の滯在を一週間に延ばしてもいゝと思ひ、さう女中に話した。女中ははじめとは大變に違つて素直になり、私の言葉を一々うなづいてきいてゐた。私は、こんな風なら、ひよつとして明日は女中が起き、ミセス・モリアンとの間もうまく行くやうになるかもしれぬと考へ、森さんへの手紙は明日の樣子を見た上にしようと思つた。

臺所には、ミセス・モリアンがお晝に食べ荒した油だらけのお皿が何枚も其儘になつてゐた。私は行儀をつけてそれらを洗つた。私は、外國ではお皿洗ひがもつとも賤しい職業の一つになつてゐるといふこと、それからまた、其職業によつて苦學し、立派に米國の大學を卒業して來た或婦人のことなど思ひ出し、成程こんなに油だらけで、さうして何枚もよごされるやうなら、お皿洗ひは賤しい職業であり、そしてまた、それによつて大學を卒業するだけの費用も得られるわけかもしれぬと思つた。

例によつて、八百屋が晝間おいて行つた罐詰や野菜をつかつて、いゝかげんにお茶をつくつて、夕食の卓についた。私は、お料理には經驗がなく、自分のつくつたそれらのものに少しも食慾を感じなかつたが、ミセス・モリアンは、「大變においしいです。あなたはすぐれた料理人です。」などと云つた。そして、「ムラさんは今日一度だけ起きました。彼女の食事をしに。私は、彼女に、病氣の時食事をすることは毒だといひました。が、彼女は默つてさつさと彼女の食事をしました。そしてまた床に戻りました。彼女は、あなたの面前では極めておとなしく正直さうに振舞ひます。あなたに

は物も云ひます。併し、彼女は私が幾ら優しく、日本語で物を云つても、少しも答へない。そればかりでなく、非常に意地のわるい眼附で私をにらみます。」と告げた。

次の日、社への出がけ、女中は起きさうに云つたので、私は喜んで家を出た。案外に萬事が工合よく行くかもしれないと楽しみにして午後歸つて來てみると、女中は矢張り起きてゐなかつた。そればかりでない、私の顔をみると、待ちかねてゐたやうに、これから直ぐ此家を出て行きたいと云つた。私は困つて、今日こそはきつと森さんに手紙を出してあげるからと云つたが、きかなかつた。近所に親類の家がある筈だから其處へ訊ねて行つてみるといふ。私も、ろくろく食事もせずにゐて本統にねつかれでもされては大變だと思ひ、親類の家が幸ひ近所にあるといふなら、其處へ送り返しておいた方がいゝかもしれないと思つた。そこで、そのことをミセス・モリアンに話すと、ミセス・モリアンは、

「さうですか。彼女が歸りたいといふなら歸るがよろしい。森さんは彼女を非常にほめました。成程、彼女は森さんの言葉に價する立派な淑女です。」と云つた。そして私と一緒に女中部屋にはいつて來て、

「あなた、病氣で歸ります。大變にお氣の毒です。私は森さんにすべてのことを告げませう」と云つた。

娘はそれには何とも答へずに起直り、支度をはじめた。と、ミセス・モリアンは娘のまだ坐つてゐる夜具を引上げ、どんどん窓にかけてしまつた。そのやり方があまりに露骨なので、私は呆れ、ボンヤリして立つてみてゐた。すると、ミセス・モリアンは私の方を向き、大變に優しい表情をつくつて云つた。

「御覧なさい。太陽はすでに西に沈みかゝつてゐます。たそがれがやがて此地上をおほふでせう。私はかうして急いでしないと、今日のうちにこれらの蒲團をほしてしまふことが出來ません。私は、日光消毒は大層有効で大切だと思ひます。殊に、彼女は御存じの通り病氣でした。そして私はこれらの蒲團をすぐ誰か他の人のために使ふかもしれません。

ですから一日も早く日光にあてることが必要なのです。」

女中は其間に着物を着かへ、大きな合切袋に荷物をおしこんだ。あんなに食事をせずにゐたこと故、どうかと私はあやぶんでゐたのであつたが、荷ごしらへをする動作は極めて敏捷だつた。

ミセス・モリアンは、「彼女は一人で行くがよろしい。彼女は日本人で、よく日本語を解します。道がわからなかつたら、どの日本人にだつて訊いて教はることが出來ます。」と云ひ、娘も一人で行つてみるとは云つたが、私は送つて行くことを云ひはつた。だが、女中の荷物は法外に大きかつた。私には中々持ちきれない。食事をろくにしてゐない、そして私よりも年下な娘にそんな大きなものを持たして、のんべんと、あちこち、見知らぬ家を探して歩くことも出來まい、さう私は思つて、「其荷物はあとから誰かに取りに來て貰ふがいゝ、私が責任をもつてあづかつておくから」と云つてきかせたが駄目だつた。娘は、どうしても自分で持つて出るといふのだ。私はもう泣きたくなつた。ミセス・モリアンにも娘にも、みんなに腹が立つてくならなかつた。併し、到頭、私達は其大きな合切袋を持つて門を出た。

娘の親類の家はちき近所らしいといふので、其邊の地名や地理をよく知らない私は、其大きな合切袋を二人でさげながら、あつちこつち探して歩いた。あいにく、其邊はまた大層町名や番地の入りくんだ所で中々わからなかつた。或町まで來ると交番があつたので、其處で調べて貰ふと、其家はまだズツト遠い、そこはもう東京の市内になつてゐる所にあるといふことがわかつた。私はガツカリしてしまつたが、乘りかゝつた船で仕方なく、再び其大きな合切袋をひきづるやうに二人の間にさげながら其町の方へ歩いて行つた。汗もろく／＼ふけなかつた。

其町に着くと、そこは如何にも東京の場末らしく、小さな家がゴタ／＼と並んでゐた。そして、その多くが、附近の電車々庫をめあての小料理屋であつた。私は娘の親類はさういふ小料理屋の中にはみいたされまいと考へ、これらの店

はぬかして調べて歩いた。が、どうしても、それらしい家がないので、試みに、ふと眼にふれた一軒の料理屋の表札を仰ぐと、それが娘の親類の家だつた。其家からはおさだまりの三味線をさらふ音がポツン／＼と聞えてゐた。私は此家に此娘をおいて行くことはどうかと思ひ、一寸不安になつたが、親類ならば悪いやうにはしまいと考へ、思ひ切つて、のれんをくゞつた。土間の直ぐとつつきの狭い小部屋に、三十格好の女が柱に背をもたせて向う向きに坐り、それに向き合つて十六七の半玉風のつくりをした桃われの娘が坐つて、二人で三味線をひいてゐた。半玉風の娘は、私がはいつて行くのをみると手をやめ、うさんくささうな顔をして私達を眺めた。大石ムラ女は私の後から出て、自分の名をなのつた。

「あゝ、おムラさん。あいにく、おとつさんは今留守ですけどね、まあ、ともかくも、おあがんなさい。」半玉風の娘はハキハキした調子で云つて立つて來た。

ムラ女は大層元氣づき、私に禮を云ふと早々、家の中へはいつて行つた。私は間の悪い思ひで外へ出た。

「どうも御苦勞さま。」

後から、半玉風の娘が、大きな聲でどなつた。

其晩、私はミセス・モリアンといつものやうに茶の間の卓に向ひ合つて腰かけ、默々と食事をすませた。食事がすんだ後、二人は其儘、だまつたなりで腰をかけてゐた。電氣がへんに暗かつた。私は慣れない炊事仕事や女中のことでスツカリ疲れ切り、全てのことがものうく、いとはしかつた。ミセス・モリアンも大變に氣むづかしげな、不機嫌な顔をして考へ込んでゐた。そのミセス・モリアンの顔は暗い電氣の下で、疲れた私の頭に氣味わるく思へた。ぢつと向ひ合つて坐つてゐるうち、ミセス・モリアンの顔が人間離れして來て、恐くなつた。私は、ひよつとすると悪魔といふもの

は本統にあるのかもしれないと考へた。そして、ミセス・モリアンが今急に其本體を現し、長い爪をのばして私に飛びかゝつて來たらどうしようかと思つた。もし左うなつたら、私は到底逃げられない。此家には九官鳥の義經——それだつて惡魔のおつかひめかもわからない——がゐるだけだし、あたりは邸町で裏は原だから、私の叫び聲なんか人の耳には中々はいらない、また、はいつたにしても、人が駈けつけて來るまでには私は完全に殺されてゐるだらう。どうせ、そんな位なら、私ははじめから一と聲も立てず默つて殺されて、ミセス・モリアンをおどろかせてやらう。私は、そんなことを考へながら、ぢつと其薄氣味わるい沈默をもちこたへてゐた。

「お約束の二三日はもう過ぎます。あなたはもう少し此家にゐる氣はありませんか。」

ふと、ミセス・モリアンは口を開き、私に云つた。

私はミセス・モリアンの家に來る前、或家の離れを借りて其處に引移ることになつてゐた。ミセス・モリアンの家から直ぐ其處へ歸れるように、荷物もそちらへ移してあつた。私は其離れが氣に入り、そこで生活することを樂しみにしてゐた所だつた。それはミセス・モリアンも承知の筈だつた。私は、再びその事を話した。ミセス・モリアンは不機嫌な顏を更に不機嫌にして、

「あなたは、どこにゐやうと少しも差支ない筈です。それにあなたは此處に居れば英語の會話の練習が出來ます。」

と云つた。

「さうです。それはさうです。併し、私はあの私の新しく借りた部屋を愛してゐます。家主の人達も私の行くのを待つてゐます。私は一日も早く其部屋で暮してみたいのです。」

「部屋は逃げては行きません。」ミセス・モリアンは、例の如く、ニヤリと笑つた。

「それは、あなたが行くまで、いつまでゝもとゞまつてゐるでせう。さうして、あなたは此家に居れば居る程、食費が省けます。」

「食費のことは問題ではありません。」私はムツとして答へた。

「さうですか。併し、日本人は、どうしてさう經濟のことを考へないのでせう。日本人は經濟觀念に非常に乏しいと私は思ひます。さうです、日本人は貧弱なエコノミストです、利己主義で不親切であると同時に。今、日本人はA國其他、あらゆる世界中の國からにくまれてゐます。私はこれまで隨分、いろ〳〵の人に日本のことを辯護して來ました。併し、今や私は私自身、日本が嫌ひになりはしないかと恐れます。私は、御存じの通り、B國の新聞や雜誌によく日本のことを寄稿します。それは大變に歡迎されてゐます。そして目下日本に好意を持つてゐる唯一の國はB國だけです。だがB國もやがて日本を嫌ひ、にくむやうになるかもしれません。日本人が今の利己主義を、不親切な態度を改めなければ。」

「あなたは日本の惡口が書きたければ御隨意にお書きなさい。また、世界のあらゆる國が日本をにくまうとするなら、彼等は勝手に日本をにくむがよろしい。日本は外國のサーヴントではありません。」

私は激して云ひはなつた。私はそのために、いよ〳〵此處で此惡魔につかみかゝられて、かみ殺されてしまつても仕方がない、自分の國の日本をこんなにまで侮辱されて默つてゐるなんてことがあらうかと思つた。云ひ放つてしまつてからは、さすがに恐くなり、もつとやさしく云へばよかつたと思つたが仕方がない、ぢつと觀念し、ミセス・モリアンの飛びかゝつて來るのを待つた。所がミセス・モリアンは中々飛びかゝつて來なかつた。それればかりか、なんとも云はない。私達の間には底氣味わるい沈默が暫時つゞいた。と、ミセス・モリアンは急に顏をゆるめ、ほゝ笑みながら私に云つた。

「もう、こんな話はやめませう。私は云ひすぎました。私は、此頃いろ〳〵の心配で頭が變になつてゐます。もしも、あなたが私の言葉によつて氣持をわるくなさつたら、どうか、ゆるして下さい。あなたは、今では私のベスト・フレンドです――義經を除いては。私にはあなたの友情をよくアプリシエートしてゐます。人はこんな淋しい家に一人で暮してゐると、往々、過激なことを云ひがちなものです。」

私はミセス・モリアンから、そんなしほらしい言葉や態度は全然豫期してゐなかつたので大變に意外に思つた。それで、私も聲をやはらげて、笑つて云つた。

「私のこともゆるして下さい。私も云ひすぎました。併し、私は、あなたがB國を愛すやうに、日本を愛してゐます。私は日本がわるく云れることを好まないのです。あなたが此廣い家で一人で暮していらつしやるといふことについては、全くそれがあなたにとつてどんなに淋しくつらく……さうして、よくないことかわかり、私はあなたに、同情します。」

「さうです。實際、私は此家に一人でゐることにたへられないのです。勿論、義經は私を慰めてれくます。が、結局、彼は彼です。私の云ふ言葉はくり返して云ひます。併し、彼自らの言葉は決して云ひません。ひとは淋しい時、他の人の言葉によつてどんなにか慰められるものです。所が、私にはそれがないのです。私は幾度か、此家を出てホテル生活をしようかと思ひました。が、ホテル生活は大變不經濟です。それに、私には此家を見すてることが出來ないのです。此しづけさ、あの庭の緑、いろ〳〵の日本の花や草。私は此家の入口の小路の砂利の一つ〳〵にまで、深い愛情を持つてゐるのです。そして、義經は狹いホテルの部屋ではどんなに不幸なことでせう。今ならば時々私は庭の木と木の間に彼の綱をさげてやり、木の香りや草のにほひをかゞせてやることも出來ます。が、ホテルの狹い部屋では、どうしてそれが出來ませう。ホテルに行つたら、義經はきつと死んでしまふでせう。」

そんな話のあとで、私は結局其次の日曜までミセス・モリアンの家にゐることを承知した。

ミセス・モリアンの家にゐる間、私は隨分忙しく、疲れて困つたが、併し、決して不愉快なことばかりでもなかつたミセス・モリアンは晝はあちこち自分の用事をしに出かけたり、スケッチに出かけたりしてゐたが、私が歸るまでには大概歸つて來てゐて、夕食の時には、時々B國料理を一二種つくつて私に御馳走したりした。お風呂も、あの失敗以來斷念して、たてようは云はなかつた。

ミセス・モリアンは方々外國を歩いて來ただけに、いろ〳〵の珍しいものを持つてゐて、夜など、離れの書齋で私に見せた。ミイラのやうな形をした小さい人形の幾つもから成つてゐるエヂプトの腕輪、B國製やフランス製の耳かざり、支那のおもちや、スペインの何々、イタリーの何々、アメリカの何々、それらを見せて貰ふことは私にとつて樂しみだつた。私はそれらのものにより、それ〴〵の遠いその國の空氣を吸つた。

或晩は、客間にフランス製の石油ストーヴをたいてコーヒーのお湯を沸しながら、ロッキング・チエアに腰かけ、庭を眺めながら話した。石油ストーヴからは、赤い光が流れた。私がその光を珍しがると、ミセス・モリアンは立つて電氣の灯を消した。室の中はほの暗く赤い光だけにみたされた。

「B國では、夜、かうしてかういふストーヴのまはりに家族があつまつて、あかりを消し、ロッキング・チエアをかういふ風にゆりながら、古いお伽噺や傳說を語り合ひます。」

ミセス・モリアンはさう云ひ、ゆら〳〵と椅子をしづかにゆりながら、例の、片眼を一層細めた眼附きで私に笑つた。

またある時は、ミセス・モリアンは切りに私にB國行きをすすめた。B國の景色の美しいこと、音樂の盛んなことなど寫眞帖を出したりなにかして、いろ〳〵と説明し、自分の歸る時、一緒に來るようにとすゝめた。物價も日本の半分位で、大變に暮しよいとのことであつた。私が戯談に「千代紙を持つて行つて日本のあね樣人形をこしらへて賣りませうか」と云つたら、ミセス・モリアンは本氣になり、「さう、それがよろしい。二人で會社をたてませう。」と云つた。

「日本の國にはツワイライトがありません。日が沈む、と、直ぐ夜です。けれども、B國にはながいツワイライトの時間があります。すべてのものがやはらかくおだやかに見えるツワイライト！私は日本にゐてそのツワイライトのないことをどんなに淋しく思ふでせう。B國には其ツワイライトが或季節に於ては夜半中つゞきます。それからまた、B國には大層おいしい牛乳とパンがあります。日本にあるやうな、いくら、かみきらうとしてもかみ切れないやうな、あんなパンではありません。それは〳〵ふつくらした、軟かいパンがあるのです。それから牛乳だつて、もつと〳〵おいしい牛乳なのです。B國には廣い、ゆたかな牧場が諸所にありますから。ですから、あなたがB國にいらつしやつたら、一年とたゝぬうちに見違へるやうに丈夫になるでせう。そしてB國の人と結婚してB國に永久にお住みなさい。B國の男の人達は日本の男の人達のやうに婦人に對して威張りません。あなたはきつと青い眼の人を愛し、其人と結婚し、さうして幸福になるでせう。」

「どうしてですか。」私はミセス・モリアンの魔女めいた言葉に興をそゝられながら訊ねた。

「人は、必ず、自分の眼の色とは違つた色の眼の人を愛するものだからです。私の眼は灰色です。私の夫の眼は青色でした。それは〳〵きれいな青色でした。あなたの眼は茶色ですから、あなたもきつと青色の眼の人を愛すでせう。」

私は、前に、ミセス・モリアンの家族は義經きりであると云つた。が、それは私の思ひあやまりであつた。私は、ミセス・モリアンの家に暮してゐる數日の間に、ミセス・モリアンの家にはもう一人、いや、もう一匹家族のあることを發見したのであつた。それは小さな、年とつた黑犬であつた。雜種も雜種極めて雜種で、いゝ犬でないことは一と目見てわかつた。其上、其犬は片眼だつた。私は時たま、ミセス・モリアンの家で以前其犬をみかけることはあつても、其犬は首輪も何もつけてゐなかつたので、それがミセス・モリアンの家の飼犬であらうとは夢にも思はなかつた。私がミセス・モリアンの家にとまるやうになつてから、よく一人で庭や裏の原を歩いてゐると、其片眼の年とつた黑犬はチョコチョコと何處からか出て來て、私のあとについて步いた。しまひには朝停留場まで送つて來た。あまり私になついてゐるので、私も其犬が可哀想になり、時々は食物をやつたりした。それが、ミセス・モリアンの飼犬だつたのであつた。尤もその犬はまだ正式にとゞけられてなかつた。或日、ミセス・モリアンが私に犬のとゞけをしに警察へ行つてくれと賴んだ。それで其犬がミセス・モリアンの家の犬であることが私にわかつたのであつた。

「あの犬はいつとなく私の庭にゐるやうになつたのです。私は、あの犬を好きませんが、併し私の留守の時なぞ、義經だけでは淋しからうと思ひ、あの犬をおいておくことにしたのです。つまり、私は、あの犬を義經の友達のつもりで飼つてゐるのです。が、今は警察で野犬がりをしてゐるといふことを私は新聞で見ました。私はだまつてあの犬の殺されるのを見てゐることは出來ません。ねえ、ミス・コムラ、私は彼にもピテイの情を持つてゐるのですよ。」

ミセス・モリアンが私に警察へ行つてくれと云つた日は、前夜からの豪雨で、私は行くのはいやだつたが、まあ〳〵私にあんなになついてゐる犬のためだからと氣を取直し、傘をさして出かけて行つた。警察は電車で二た停留場行つて下りてから、まだかなり步かねばならなかつた。其新開地の中には小川が氾濫し、洪水で、淺い所でも水が足駄の上まで

つかつた。町の店家は土間から往來に板を渡して出入りしてゐた。やつとのことで警察までたどりつくと、前に代書屋があるから、そこで届書を書いて貰ふやうにと云はれた。足袋屋の裏座敷に代書人がゐることがわかつた。狭い路次を通つて其家へ行き、届を書いて貰ふだんになつて、私は、犬の名をきいて來ないことに氣がついた。私はミセス・モリアンがよく「來い〳〵」とB國語で呼ぶ、それが普通日本によくある犬の名に似てゐたので、そのB國語の「來い〳〵」を犬の名にして、年齡其他は代書人の見つくろひにまかせ、拇印をおして警察へとゞけた。

所が、其黑犬は因果なことにミセス・モリアンにはなつかず、たま〳〵ミセス・モリアンが「來い〳〵」とよんでも、ミセス・モリアンの方へは行かずに私の後にコソ〳〵とかくれた。私はこんなことでは先きへ行つて犬のため可哀想だと思つたが仕樣がなかつた。

「おかしいですね。この犬は主人の私を愛さず、お客のあなたを愛してゐます。併し、私は彼をにくまうとは思ひません。彼はともかく義經の友達ですから。」

ミセス・モリアンは左う私に云つた。

約束の一週間はすぎた。其最后の日曜日、ミセス・モリアンは私に一緒に下町へ買物に行つてくれといふので、私達は朝から出かけて行つた。私達は神田まで省線で出、そこから銀座まで歩いた。三越、白木、洋服屋、帽子屋、靴屋、日本の下駄屋、扇子屋、いろ〳〵の店で買物をした。白木ではミセス・モリアンは浴衣地を二枚買ひ、仕立方をたのんだ。日本の下駄屋では外國人向きに出來てゐる、大形の蒔繪つきの疊表の駒下駄をみつけ、大喜びだつた。お晝飯は白木ですませたのであつたが、夕方になつてもミセス・モリアンの買物はすまなかつた。私は兩手に一杯ミセス・モリアンの買物をさ

げ、ミセス・モリアンのそばについて歩いてゐたが、ミセス・モリアンの買物はいつまでたつても際限がないので、氣が氣でなくなつた。私は、其日それから歸つてからミセス・モリアンの家を出て、先日とりきめた離れの部屋へ行くつもりで、先方にも左うしらせてあつた。私は其家にはじめから夜歸ることはいやだつた。だが、この買物の仕方では、とても其日のうちにミセス・モリアンの家を出られさうにさへない。私は、夕方までには其家に行くことにしてあると云つておいた。それをチヤンときいて承知してゐながら、さういふことには少しも氣がつかぬやうな顏をしてゐるミセス・モリアンが癪にさはつて來た。私は、プリ／＼した顏をして歩いてゐた。と、ミセス・モリアンは私の其心持に氣がついたと見えて、私の顏をみながらニヤリと笑ひ、日本語で云つた。

「もう、駄目、駄目ですね。今日はもう駄目です。あなたは私を送つて私の家へ行きます。さうすると、もう夜です。あなたは今日は私の家を出られません。」

「いゝえ、出られないことはありません。私は今日はどうしても、あの家へ移らねばなりません。私はあなたの家に此荷物をおいたら、直ぐ、俥で歸ります。」

「さうですか。でも、私はまだこれからいろ／＼の買物をします。それに私はミスター・Mの展覽會をみたいのです。ミスター・Mの展覽會は此近くと思ひました。」

そして我々がミスター・Mの展覽會を見、更に銀座に引返して買物をして郊外の停車場で電車を降りた時には、實際、ミセス・モリアンの豫想通り、あたりは眞暗になつてゐた。私はスツカリ怒つてゐた。そこにゐる俥やにミセス・モリアンの家まで迎ひに來て貰ふことを頼むつもりで、俥溜りの方へ歩いて行くと、ミセス・モリアンもついて來て、私より先きに俥を二臺仕立てさせてしまつた。そして私の往復の分まで拂つてしまつた。それはミセス・モリアンの

やり方にしては意外だつた。

私はミセス・モリアンの家に買物の品を置くと、自分の席を持ち、直ぐに再び俥に乘つた。私は心の中では少しミセス・モリアンが氣の毒になつてゐたが、うはべはまだプリ〳〵怒つてゐた。ミセス・モリアンが何か云ふのをろく〳〵きかず、大急ぎで俥に乘つた。俥屋が梶棒をあげて門をはなれようとした時であつた。私は庭越しに椽先きから大聲に叫びかけるミセス・モリアンの言葉をきいた。

「どうぞ私のことを惡く思はないで下さい、ミス・コムラ。」

ミセス・モリアンは其後近所の人の世話で、通ひで留守番にだけ來てくれる女の人をみつけた。で、ミセス・モリアンは、先づ〳〵氣樂に音樂會や何かに出て歩けることになつたのであつた。今から考へると、私は實際、ミセス・モリアンに對して不忠實な友であつた。私はミセス・モリアンを自分から進んでどこかへ案内しようとはしなかつた。ミセス・モリアンは私によくいひ〳〵した。

「ミセス・ツモリは、今思ふと大變に親切な、いゝお友達でした。あの人はいろ〳〵の會やお祭に必ず私をさそつてくれました。私は、あの人のおかげで、日本の種々な相を見ることが出來ました。ミセス・ツモリを失つたことは私の過ちでした。私はミセス・ツモリと仲直りしたいと思ひます。あなたはミセス・ツモリが此頃どうしてゐるか知りませんか。」

留守番に來てくれる人にも、ミセス・モリアンは以前よりは大分折れてゐるらしかつたが、それでもチョイ〳〵お互ひに不快なことがあるらしかつた。私は、其留守番の人にはついぞ會はなかつたが、ミセス・モリアンの言葉を通して、

それをうかがふことが出來た。

或る時、私は音樂會へ行くためにミセス・モリアンを或る停留場で待ち合せた。ミセス・モリアンは元氣がなかつた。留守番の人と何か口爭ひしたらしかつた。電車はすいてゐたので二人は樂に隣合つて腰かけた。ミセス・モリアンは大變にしほしほし、留守番の人のぐちをこぼした。

「彼女は大變にセルフイッシュです。何も私のためにしてくれようとしません。私は朝から晩まで家の掃除をしたり炊事をしたりしなければなりません。私はこんなに家のことにばかりかかはつてゐたくありません。私は日本を出來るだけ見、日本の繪を出來るだけ澤山かいて歸りたいのです。私はもう二年の餘も日本にゐました。さうして其間に私のかいたものと云つては、ホンのスケッチ、それも極く少しです。私はホテルへは行きたくないし、もういよ／＼B國へ歸らねばならぬかと思ひます。それは私にとつてどんなに殘念なことでせう。私は日本を非常に／＼愛してゐます。私は其日本にゐてこんな不愉快な月日を送らねばならぬのかと考へると悲しくなります。」

ミセス・モリアンは左う云つてシク／＼泣き出した。手袋をはめた手を眼におしあてゝ、泣いた。さうしていつまでも泣きやまなかつた。しまひにはハンケチを出してそれで涙をぬぐひぬぐひ泣いてゐた。車內の人達は物珍しさうな顔をして私達の方を見てゐた。私も西洋人がそんな風にしほ／＼泣いてゐるのを見るのははじめてだつた。私は、留守番の人に對するミセス・モリアンの槪嘆振りを十分想像しながらも、ミセス・モリアンが氣の毒になつた。

音樂會場についてからも、ミセス・モリアンは一向に元氣を恢復しなかつた。其音樂會はアメリカから來た世界的な女流音樂家の會だつたが、ミセス・モリアンには少しも、舞臺の方は見ようとはせず、相變らずしほ／＼と考へ込み、時々涙を拭つた。私達のまはりには、きらびやかな服裝をした外國人が大勢ゐた。その外國人達はみな誰かか知合の人と來てゐたり出合つたりして、休憩の時廣い廊下のアチコチに集り、賑かに笑つたり目禮を交はしたり話したりしてゐた。

だが、ミセス・モリアンにはそれらの人の中に知合がなかつた。私はミセス・モリアンをさそつて廊下に出たが、ミセス・モリアンは少しも楽しげな様子もなく、私ともろくろく話さず、しよんぼりとしてゐた。

「親愛なるミス・コムラ。

私はあなたにお願ひがあります。松井さんをみつけて、あの人にもう一度私の所へ帰つて来て、今ゐるオバサンに家のことを教へて貰ふやうに頼んで下さいませんか。いつぞやお話ししたやうに、私は彼女が私を手助けに来た今までの人人の中で一番――勿論、本統に一番よかつたのはあなたでした――が私はさういふ助けはきつともう見出すことは出来ますまい。よい人であつたと思ひます。たゞ私は時として、これもあなたにお話した通り、種々のことで大層神経を煩はされ、いらいらしましたり、彼女は彼女で、さういふ時強情な返事で私を苦しめました。併し、其他の點では私は彼女が善良で親切な娘であつたことを認めます。私は、やつと今になつてそれがわかりました。私はホテルに越さうかと思ひますが、誰か私の手助をしてくれる人がみつかり、この家にとゞまつてゐることが出来るかどうかわかるまで待たうと思ひます。」

私はミセス・モリアンから、かういふ手紙を受取つた。が、私には松井さんの居所のわかりやうはなかつた。さうかうしてゐるうち、私に再び次のやうな手紙を貰つた。

「今月、私は本国の嫂から手紙を受取りました。彼女は此頃からだが弱く、心細いから、私に早速帰つて来てくれと云ひます。それで私は一二ケ月のうちに日本を去らねばなりません。もしも誰も部屋の掃除をしたり何かしてくれる人がどうしてもみつからぬなら、私は直ぐにも此家を出なければなりません。それは私にとつてつらいことですが。私は此様の庭や日本風の家を深く愛してゐます。そして私はもう此家を私の生涯に於て二度と再び見ないかもしれません。此頃は

「留守番のオバサンは來ません。あなたは松井さんにお會ひになることはないでせうか。」

此手紙を見た時、私は悪いことだが内心實はホットしたのであつた。もう、あと一二ヶ月の辛抱だと思つたのである。それ程ミセス・モリアンのことは私の心の重荷になつてゐた。

女中は遂にみつからなかつた。ミセス・モリアンは支度のために、其家を引拂ひ、B國領事館に一時寄寓した。私はそれと同時に三週間ばかり旅に出た。

八月の終りに旅から歸つて來ると、私の所にミセス・モリアンからのはがきが來てゐた。

「いつかお貸ししたB國美術史を返して下さい。物は其屬すべき所に屬さねばなりません。」

私は其文面を見て、何といふ勝手な人だらうと思つた。ミセス・モリアンの所には私の本が三四冊行つたまゝになつてゐた。私は其美術史を早速小包にして送り返した。

これから數日たつた日の朝だつた。私は村田といふ、友達の友達位にあたる人から電話をうけた。

「ミセス・モリアンが今日おたちになりますが、御存じでせうね。」

私はちつとも知らなかつた。後で聞くと、村田さんは私が旅行中ふとしたことからミセス・モリアンと友達になつて、ミセス・モリアンのためにいろ〳〵世話をし便宜を計つてゐたのださうであつた。

私は急いで支度をして橫濱に馳けつけた。ミセス・モリアンはもう船に乘りこんでゐた。日本人の畫家の人が一人、村田さん姉妹、それからもう一人の女の日本人の人が見送りに來てゐた。B國人の見送りは一人もなかつた。ミセス・モリアンは私を見ると喜び、まだ出帆に間があるから部屋に來てくれと云つて案内した。私は旅行先きで買つた、よせ木細工の小さいおもちやを出してミセス・モリアンにおくつた。

「あなた方が見送りに來て下さつたことは本統にうれしい。私が日本を去ることをどんなにつらく思つてゐるか、あなたはよく御存じの筈です。併し、かうしてお友達が私を見送つて下さることは私にとつて暖い慰めです。お天氣は少し曇つてゐます。が、船が出るまでにはきつと晴れるでせう。私はこれまでに私の出立の時、雨にあつたことは一度もありませんから。」

「義經はどうしました。日本においていらつしやるのですか。」

「いゝえ、私はつれて行きます。私は毎日毎晩そのことについて思ひ煩ひしました。が、結局、私は一緒につれて行くことにきめました。十數日の航海、それから數日の汽車、それからまた再び大洋。其旅行の間に義經は多分死ぬかもしれません。恐らく此船にゐる間のうちに死ぬかもしれません。けれども義經は私の手を離れたら、どうして幸福といへませう。私程彼を愛す人に彼は決してもう合はないでせう。私は義經が他の人の手にあつて苦しい不幸な日を送るより、寧ろ私の手にあつて死んだ方が彼のために幸福と考へました。B國領事館の小使さんが、他の小荷物と共に彼を此處へつれて來てくれることになつてゐます。」

　ミセス・モリアンはサロン其他に私をつれて行つて見せてくれた。

出帆の時刻がせまつた。甲板では音樂隊が音樂を奏しはじめた。

「義經はどうしましたか。義經が見えません。ボイさん、私の九官鳥、知りませんか？」

　ミセス・モリアンは義經が今だに手許につれて來られないのを見て、あはて出した。男の給仕さん、部屋づきの女の給仕さんにきいてみたりしたが、其人達は知らぬと答へた。

「義經が來ません。どうしませう。義經が來ません。どうしませう。」

ミセス・モリアンはあちこちと荷をしらべて歩いた。日本人の畫家の人も一緒になつて聞き合せて歩いたが、義絃は到頭とどけられてゐなかつた。

出帆のドラがなつた。ミセス・モリアンはサロンの前の廊下に悄然と立つたまゝ、涙をためた眼で、廊下の丸い小窓の方をみつめてゐた。その丸い小窓には青い〳〵海の色だけが見えてゐた。私達はミセス・モリアンを慰めかね、去りかねて困つた。船員の人にせき立てられて、草履をつまづくやうにぬぎながら船を下つた。

空は晴れず、雨がボツ〳〵降つて來た。その小雨の中を、船から陸へ、陸から船へ、五色の紙テープが投げ交され、入りみだれて、ぬれた。多くの旅客の間に、それでも笑ひ顔をして出て來てまぢり、手すりによつて私達の方を見てゐるミセス・モリアンの姿を見た時、私は先刻船の中でテープを賣りに來た時氣がついてゐながらミセス・モリアンのために買つてあげようとしなかつたことを悔いた。ミセス・モリアンは他の人のテープを横合から手を出して取り、それをまさぐりながら、私達の方へ、「さよなら〳〵」と云ひ、うなづいてゐた。

やがて船はそろ〳〵と岸を離れた。一回轉して其方向の工合で、ミセス・モリアンの姿が見えなくなると、私達は待ちかねてゐたやうに急いで棧橋を立去り、波止場に來てゐる東京行の汽車に乘りこんだ。雨が降つてゐたし、汽車の出るのは間もなくであつたので仕方ないとは思つたが、さすがに其あはたゞしさに氣がとがめ、私は汽車の階段に足をかけながら、船の方を見てみた。船は丁度其時再び方向を轉じた所で、もう一度ミセス・モリアンの白い洋服の姿が小さいながらもハツキリ見えた。ミセス・モリアンは棧橋の方に向ひ、しきりにハンケチを振つてゐた。棧橋には、誰か他の人の見送り人がまだ一とかたまり雨の中に殘つてゐて、船に向つて手やハンケチや傘を振つてゐるのであつた。

第二回豫約募集申込九月末日限

世界文學大綱

藝術は人生の光として靈性の糧として萬人のひとしく欣求し渇仰する處である。然し世界の文豪、古今の天才の大業は、量に於て浩汗、質に於て深遠、其全豹を窺ひ、其奥旨を探らんは容易の業でない。

本叢書は此大業を最簡明に最完全に傳へんとして奮起せる新進篤學二十餘名が努力の結晶で、生活の詳叙、藝術の觀照、思想の闡明、傑作の梗概、一として備はらざるはない。

苟も現代人としての修養を顧念せば、劇務に鞅掌する者も研學の途に在る者も、遍に世界の文藝及思潮に通曉するの要がある。何人にも本書を薦むる所以である。

◎各著者の執筆せる **解説付見本及規定書** 申越次第卽時進呈

書目及執筆者

書目:
(1) ミルトン
(2) カアライル
エマスン
(3) シエークスピヤ
(4) キーツ
(5) フロベール
(6) ボードレール
(7) スタンダール
(8) サント・ブーブ
(9) ヴエルレーヌ
(10) イプセン
(11) ゲエテ
(12) シルレル
(13) レツシング
(14) クライスト
(15) プーシキン
(16) トルストイ
(17) ドストエウスキ
(18) タゴール

執筆者:
高師教授 竹友藻風
早大教授 田中王堂
守田有秋
高原延雄
早大教授 日夏耿之介
早大教授 吉江喬松
帝大教授 辰野隆
帝大教授 山田珠樹
慶大教授 井汲清治
堀口大學
中村吉藏
帝大教授 青木昌吉
高校教授 高橋健二
陸大教授 篠田英
濱野修
外語教授 八杉貞利
陸大教授 米川正夫
外語助教 除村吉太郎
法大教授 森田草平
倉田潮
江部鴨村

略規

全十八冊 四六判總クロース製天金
一冊平均六百頁以上 毎冊コロタイプ版數葉挿入 恩地孝四郎氏裝幀
會費 毎月拂 金三圓八十錢也
申込金 金三圓八十錢也（但最終の會費に充つ）
一時拂 金六十五圓也（申込金不要）
送本料は別に申受く
刊行 大正十五年九月より毎月一冊宛刊行

第一回配本既成
申込卽時送本

東京市京橋區北槇町十八番地
東方出版株式會社
電話京橋 [illegible]
振替東京 [illegible]



新秋の記

佐藤春夫

一

このごろの季節――所謂、燈火可親といふこのごろの季節になると、わたしはいつも思ひ出すのですが、それはその上に一つの猿の骨格と一冊の本と、又その本の上に無數の稻蟲の集つて來る一つの机の事なのです。そのぐるりにゐる三人の人々のことなのです。

その三人の人々とは、わたし自身と父とAさんとです。

父はAさんのために醫學講義錄の初歩を講じはじめたのです。それが思ひ出せば二十五年ほどむかしのこのごろの季節でした。

わたしどもの町にやつと電氣燈が出來たころであつたらしいと思ひます。わたしたちがその下に集つてゐたのは、わたしの記憶にあるあの大きな吊ランプの影ではなかつたやうです。あのランプの下ならばわたしたちは　その熱のためにきつと暑さを感した筈なのです。しかし、さう暑かつたやうにも思ひ出さないところを見る

と、もう電氣燈が出來てゐたのだらうと思へるのです。玄關は凡學の玄關で、門の突きあたりにあつて、それが町より高かつたので、そこに座つてゐると町の通りがずつと見えたものです。さうして涼しい風がよくかよふところでした。

門から突きあたつた壁の長押の上には、父がその先生から書いて頂いた「××病院」といふ額がかかつてゐました。この先生といふのは海軍の軍醫總監であつた人です。その額を背にして父は座つてゐたのです。それからその向へにはAさんがゐました。わたしは別にどこか自分の場所といふこともなかつた。たゞそのふたりの傍にゐたのです。父はなるべくわたしにも、その傍にゐるやうにと言ひつけたのです。父はわたしをも、やはり行く行くは醫者に仕立てるつもりでゐたからでせう。――わたしの家はその地方でもう何代か醫者だつたのですから。

父は猿の骨格の標本をとり出したのです。（わたしは、今Sはどうしてゐるだらうかと思ひました）それはそのあたりの山で捕へた猿をわたしの祖父か曾祖父かがさういふものにこしらへたのださうです。アカの針金で纏めてかがつてゐました。それを取上げると、さまざまの骨がガラガラと音を立てて鳴りました。その頭の骨は鋸で斷ち開いてそのお皿のやうな骨の片をもとどほりに蓋をするやうにこしらへてありました。歯は大分部拔け落ちてしまつてゐて、四五本殘つてゐるのもグラグラして拔けたがつてゐるのでした。それでもいくらかは講義の參考になるのでせう。父はそれを取り上げて、そのところどころを指で示しながら、熱心に述べつづけてゐました、別の手の指で本の字のあたりを指し辿りながら。燈の光を慕つて、開け放された窓から無數の稻蟲が集つて、それが燈のぐるりに集り、また本の上へも寄るのでした。あの蟲はわたしたちの方では横這ひと呼ぶが、まつたくその通り斜にばつかり這ふものです。父はその横這ひが本の上へ來ると、煩さうにそれを拂ひのけ拂ひのけしながら、やつぱり述べつづけてゐるのです。――父の聲は太く少し鼻にかかつて、しかし干高なひびきを持つてゐます……

——これらのことを思ひ出すと、わたしはそれからそれへとAさんたちの兄弟のことを回想するのが恒です。さうして、それはやがていくらかは、わたし自身の二十五年間の生涯にも觸れるわけですが。

二

わたしの父にさういふ講義を聞いてゐたAさんは、Sといふ一族のうちのひとりでした。

Sといふ一族は、わたしの母方の遠い緣者に當つてゐて、半世紀以前には五十萬石の殿樣に仕へて勘定奉行をした家柄でした。そのS家の曾祖父といふのは病的に金を愛する人で、夜中に人が寢靜まつた頃に起き出て自分の部屋のなかでこつそり小判を數へながら、そのなかに埋まつて樂しんでゐた程だと言はれてゐます。それほどだから、澤山の金銀を殘して世を去つてしまつたが、その後の人は先代の遺した財を惜しげなく費して豪華な生活をつゞけ、何でも江戸から來た女役者に金を入れ上げた末にはその女に逃げられてしまつたりして、その人一代のうちに產が傾いたところへ、時世が變つて今までの家柄が役に立たなくなつてしまつたのです。その時代に生れ合したAさんのお父さんたちは、いろんな事業には失敗するしさんざ世の中の生業(なりはひ)の苦しい事を知つて、その揚句には五十里もある海の上を一家族を引きつれて、わたしの父のところに手賴(たよ)て來たのでした。わたしの家とは別にそれほど濃い親類といふわけではなかつたのだけれども、近しい人たちは殆んど皆亡んでしまつてゐたし、外に方法が無かつたのでせう、さうしてその人は父の病院で會計を司つてゐたのです。わたしもごくおぼろげには覺えてゐるけれども、無口な背の高い瘦せた小父さんでした。父はその人の正直な溫厚な人柄を好いてゐたらしく思へるのです。この人には子供があつて、一番上が娘で、二番目以下はみな男の子でしたが、Mさん、Aさん、S、Tといふ順序でした。

Sの一族がわたしの父のところへ來たのは多分、わたしが六つぐらゐな年ごろのことであつたらうと思ふ。

Sの一族は、わたしの父に言はせると、もうあまり古くなつて死に絶えようとしてゐる一家でゝもあるのか甚だ死にやすい血を持つてゐた。秋の木の葉か何かのやうで、病氣にかゝりさへすれば脆く死ぬ。さうして七人の家族のうちの大半がそののち十年間程のうちに順々に死んで行つたのです。

先づ第一に亡くなつたのはそこの小母さんでした。その人をわたしは全くごくかすかに覺えてゐる――記憶の地平線の一番遠くの方に點のやうに認めることが出來るのです。この人の死は全く唐突に來たのです。それは最も末の子供のTに小便をさせてゐる瞬間に卒中を起して、そのまま生き歸らなかつたのださうです。

それから二三年經つと今度は小父さんが脚氣にかかつて、これもほんの僅の間、病床にゐたきりで恢復する力がなかつたさうです――年はまださう老年ではなかつた筈です。

かういふ風に父母を失つたS家のあとには子供たちだけ五人が殘されたのです。さうしてその五人の子供をわたしの父はそのまま引取つたのです。詳しくはわからないけれど十五六を頭にして五つか六つぐらゐまでの子供たちであつたらうと思ひます。そのなかの最も小さな子供は適當な家庭があつてそこへ貰はれて行つたし、最も年長の子供は、女であつた上にわたしとは年があまり違つてゐたし、それにその人もやがて間もなく死んだので、その人のことに就いてはその面影ぐらゐより外にはわたしはあまり知らないのです。あとの三人は、いづれもわたしよりも年長ではあつたけれども、さう大しても違はなかつたしそれに男の子で、同じ一つの家に育つてゐる間には自づと遊び友達になり、またたとひ家にゐなくなつてしまつてからでも自然とその噂も注意して聞いたのです。それ故、わたしはMさん、Aさん、Sの三人に就ては、何か自分の兄弟でゝもあるやうな親しさを今も心の中に貯へてゐるのです。

死んだといふ姉娘はHといふ名で、看護婦の見習になつて、病院を手傳つてゐるうちに、チフスか何かにかかつて死んでしまつたのです。年は二十一であつたのでせう。

三

姉のHが死んだ時には、Mさんは多分もう日本にはゐなかつたやうにわたしは覺えてゐるのです。

Mさんは十六になつた年にアメリカへ渡航してしまつてゐました。當時、わたしたちの地方では、アメリカへ渡つて勞働することが所謂成功の近道だといふ考が人々の間に擴がつて、Mさんも亦、自分でさういふ志望を持つた。わたしはMさんが、極く小形のさうして異常に厚い書物を机の上に置いてゐて、よくそれを開けてゐるのを見たことがあるが、さうして自分もさういふ本を一册欲しいと思つたことがあつたのを忘れないでゐるのですが、それは後に思へば英語の字引だつたのです。

わたしの父や母が、まだ年も行いからと言つて止めたのに、Mさんは是非ともその希望を入れて貰ひたいと言ふし、それにそのころサン・フランシスコに、母の兄嫁の兄がゐたものだからその人をでも手賴つて行くならば、多少の緣故もあるといふのでわたしの父母もしまひにはそれを聞き入れたのださうです。

Mさんが家を出たのは、たしかわたしが八つか九つのころであつたらうかと思ひます。それはどの季節であつたかよく覺えてはゐませんけれど、春かさうでなかつたとしたら小春日で、ともかくもうららかな日ではありました。道ばたに蝶がゐたこともまた花が咲いてゐたことも思ひ出します。さうだ。わたしはその花を摘まうとしてゐて人々におくれた。その花はどつさり咲いてゐたのではなく珍らしく咲いてゐたところを見ると、どうやら春の初めか、それとも秋の

末であつたでせう。Mさんの出發をわたしたちの家族はみんな見送つた。彼がそこから神戸まで行く港は町から一里半もあつたから、港までは行かなかつたけれども、町の一ばんはづれの茶屋のところまで行つた。彼の弟たちは兄を港まで送らうとついて行つた。さうして兄弟はその茶屋の近くにある墓地に立寄つて父母の墓に詣でたさうです。その墓地の丘に上つて行く彼等の姿が茶屋からもよく見えました。その時、わたしの母は不意に顏色が蒼ざめて、呻り出して人々を驚かせたのですが、母は癪を起したのだと言ひます。さういふ病氣は、これ以前にはわたしの母には無かつたのです。さうしてそれ以後は、永い間、時々その病氣を煩ふ事がありました。

Hは、Mさんがかういふ風にして外國へ行つてゐる間に死んだのです。

四

わたしの父母の家に殘つて、わたしたちと一緒に育つたのは、AさんとSとのふたりきりになりました。Aさんはわたしよりも七つ八つ年上で、もう若者でまた藥局生の見習をして役立つてゐた上に溫和な性質であつたので家の人々は多少の敬意を持つてゐたのに、それとは反對にSに對しては皆、甚だ手こずつたやうに覺えてゐます。

Sはわたしよりも四つほど年上であつたが、S家のその他の兄弟が溫和な性格であるにも似合はずSひとりは變種であるやうに見えました。その智力には別に不足はなかつたけれども、年長者の言葉には一切從はないばかりではなく、もつと積極的に反抗心を示したし、またわれわれ年少者に對しては暴君のやうに振舞つたのです。猿のやうに小男でまた惡智惠があつて動作に機敏なところがあるといふので、人々は怒りにまかせては彼の事を猿と呶鳴りつけたりしたものです。（後に、私はあの猿の骨格を見てSは今どうしてゐるだらうと思ひ出したわけです）わたしは今、彼の容貌を

つ思ひ出すけれども、猿といふ呼び方は適切のやうであります。彼の耳は上の方でひどく尖つて立てゐたし、また彼の眉はひどくつり上り、小さな目はくり〳〵として、額の上にはまだ少年だのに深い横じわが三三本もきざまれてゐました。下顎骨が少し突き出してゐてそれがふだんでも相手を小馬鹿にしてゐるやうな表情を持つてゐました。見るから變質者の相貌を具へてゐたのです。さうして彼は芝居の眞似事を非常に好んで、人々が眞面目にもの事を言ひかける時にでも、ただ鼻のさきであしらつて、芝居のせりふめいた口調でしか返答をしなかつたものです。皆は彼をどうも愛することが出來なかつた。さうして彼の面前ではいづれも仕方なしに敬稱をつけたけれども、かげでは呼び捨にするか、でなかつたならばただニツクネームでだけ呼ぶのでした。だから、わたしも彼を思ひ出す時に、年長者でありながらただSと呼び捨てにしてしか思ひ出さないのです。

わたしの母の妹は、そのころ女ながらに氣の荒い人であつたが、殆んど毎日のやうにSと口喧嘩をしてゐたものです。そのうちにわたしもこの叔母と氣が合はなくなつたのです。さうしてわたしの性格の上にSの影響をうけさせてはならないと言つて皆心配し出したのです。

世話をする人があつてSは或る質屋の養子になつたけれども一週間とは置いてもらへなかつた。二度目には二十里も遠い或る町の寺へ小僧にやつたけれどもこれも一ケ月と經たないうちにかへされて來ました。わたしは忘れてしまつたがまだ外にもさまざまな事があつたのです。

「全くうちの猿之助も大閤さまのやうなものだ。小僧もつとまらない」

などと、初めのうちは苦笑をしてすませてゐたわたしの父が、最後に大へん叱つた。さうして

「お前のやうな奴は、勝手に何とでもするがいい。ひとりで世を渡つて見ろ。さうして何事でも、たとひ乞食になつ

てでも頭と呼ばれる身分になつたら、この家へ出入りさせてやる」と宣言をしたさうです。Sはしかしそんな事ぐらゐで悄氣はしなかつた。わたしの父の小言を好んでまともに受取つて自分から進んで家を迯出ようときめたらしのです。さうして兄のAさんに相談すると、當然その不心得を諭して、わたしの父には弟に代つて詫びを言ふべきAさんまでが、やはりわたしの父と同じやうに叱つて、出て行けと言つて金を五圓だけ持たせてやつたさうです。あまり度重なることではあり兄としてAさんは、わたしの家に對しても申しわけないと思つたのでせう。

「それにしても五圓の縁切金はやすすぎたね」

さう言つて、わたしの家の人々はAさんに對して多少の非難をせぬでもありませんでした。またSの身の上を不安に思はぬでもありませんでした。けれどもSの居なくなつたのを惜しむ人は別にひとりもゐませんでした。

かうしてSはわたしの家を、追はれたと言へば追はれたのだし、立去つたと言へば立去つたのです。多分、十五かそこらであつたでせう。

ひとりだけ家に殘つたAさんを、わたしの父は、晝は藥局の見習生にして、夜はあのカラ〱と鳴る猿の骨をとり出して醫學の講義を聞かせさうして醫學開業試驗を受けさせようと用意してゐるのでした。父のその講義は宵の七時から九時までだつたとおぼえてゐます。父はよく、Aさんをもの覺えが惡いと言つて叱つてゐました。（當時のわたしの父は、まだ四十かそこらの壯年で、怒つた時には激越な性格を現はす人であつたとわたしには思はれます）

Aさんはすぐれた學才は無かつたものと見えます。上京して二回ほど試驗を受けたけれども駄目でした。前期の試驗

ぐらゐすぐ及第しないやうでは仕方がないといふので、父は落膽してもう講義をしなくなり、同時にAさんもそれがもと〳〵自分で立てた志でもなかつたのだから、その目的を遂げようともしませんでした。しかしAさんはその人の父に似て實直な律氣な人でした。若かつたけれどもすつかり信用して託することが出來たので、彼の父のしたと同じやうに、やはり當分わたしの父の病院の會計を――といつてもいづれはせせつこましい雜務ではあるが――任されました。

Aさんはそのうちに、わたしの父の世話で或る銀行につとめる事になりました。さういふ仕事はその人に適してゐたのです。

「何しろAはお勘定奉行の家柄だからね。父祖の業を繼ぐやうなものだよ」

父のいふ常談をAさんはただ笑つて返事しました。一たいに無口で、羞ぢてゐるやうな笑ひ顏を持つたAさんは、もう一人前の青年になつてゐました。わたしももう自分とはかけ放れたおとなに對する感じをAさんに持つた。さうして彼もわたしも、ふたりとも無口だつたからふたりだけで直接に口を利くやうな機會は殆んどなくなつてしまつたのです。

五

アメリカへ渡つたMさんからは時をり手紙がありました。珍らしい繪ハガキ（繪ハガキそのものが珍らしかつたのです）や、また或る時には小包を贈つてくれました。そのなかには金や銀の紙にくるんだお菓子があつて、それは黑いお菓子なのだが噛むとそのなかは白かつた。また淡赤いのもありました。ただ甘つたるくまた妙なにほひがして、誰もおいしいといふ者はありませんでした。母などは直ぐ吐き出して腐つてゐると言つた程でした。そのお菓子といふのは、無論、チヨコレートだつたのですが、そのころ田舍では誰もそんな名も品物も知らなかつたのです。ただ、わたしは、

しかし、アメリカのお菓子をたべたといふ愉快を味つたものでした。

その同じ小包であつたか、或は別のものであつたかは忘れたけれども、Mさんはまた或る草の種を送つてくれました。それを裏の空地へ蒔いて置きましたが、それは夏になると二尺ばかりの草になつて朱のやうな色をした見事な實をどつさりつけたのです。熟柿を思ひ出させました。Mさんからの手紙には食べらる實がなるとあつたといふので、或る夕方、父とわたしとはそれをもぐとその場で試みに食べて見たのです。忘れもしませんが、わたしも父も一度に吐き出してその實を手から落すと、互に顔を見合せて、わたしは自分の舌を自分の指で掻きむしつたのです。

「澁い！」

「をかしなにほひのするものだね」

「ね！」

父とわたしとはそんなことを言ひ合ひました。一緒について來てゐたルボ（犬の名）は、わたしたちの投げたものを嗅いでみたけれども喰べようとはしませんでした。

「犬も喰はぬ。犬も喰はぬ。」

わたしの父はひとりをかしさうにそれを繰り返してその草のそばから歩き出しましたが、ふと氣がついたやうに、その赤い大きな實をもう一つもいで、もう鳥屋のなかに追ひ込んであつた雞に投げてやりました。皮はつぶれてなかから小さな種の出てゐるその實を、雞は集つて來て突つついてたべました。

「ほ！雞はたべる！雞はたべるわい」

父もわたしもこれを不思議なほどに思ひながら見てゐたものでした。

「雞は何でも食ふ鳥ぢや。アメリカは臭いものを好く國ぢや」

「父はさう言つて鳥屋から歩き出した。(わたしの父は機嫌のいい時にはいつもこんな常談ばかり言ふ人でした)

この實は到底たべられないものと皆は思つたけれども、手がやけずに見事に出來るので、わたしの家ではたゞ見るために裏庭の隅へその後も何年かつくるともなくつくつてゐました。

或る時、アメリカの出稼ぎから歸つて來た人が、その赤い實を見つけました。「や！トメトがある」その人はさう言ひながら、それをもいで食べたものです。(その人はたしかに、トマトとは言はず、トメトと言ひました)さうして彼は食べ慣れさへすればこれほどおいしいものは無いとも言ひました。

「そんなまづいものを、わざわざ慣れてまで食べなくつたつて」誰かが言つて大笑ひをしたものでした。

それにしてもMさんは、自分で食慣なれておいしいと思つて、それをわたしたちの家へ送つてくれたのであつたでせう。

六

Sの行動は、その後も皆目わかりませんでした。

(――大ていの家庭には何時かひとりぐらゐはそんな人物がゐるやうです)

それでも彼が無事に生きてゐることだけは、またその兄弟やそれからわたしたちの一家をも忘れないでゐるといふことだけは、どうやら判るのでした。といふのはSは、毎年ではなかつたかも知れませんが時折、年賀のハガキを或時は彼の兄や、或時はわたしの父や、或る時は彼の弟Tの養はれてゐるN家などへ寄こすのでした。それにはいつも住所は

書かれてゐなかつたのですが、スタンプで見ると、初めそれは大阪から來たのでした。みんなはSが大阪に住んでゐるものと思ひました。しかしその次の年には彼の年賀狀は朝鮮から來ました。或時にはまた岡山から、或時にはまた博多から出てゐるのでした。彼はどうやら日本の西の半分をうろついてゐるやうに思へます。

彼の住所の不定なことがみんなには多少の不安でした。

「一たい、何していすぎしてゐるのやらう」わたしの母はさう言ひました。

「スリか何ぞ」と叔母は七分どほりは常談で、でも三分は本氣で「そんなことをしてゐるのぢや無からうかの」

「まさか」と母は眞顏で受けました。「スリもしてはゐまいが、役者か何ぞでもあらうかい。あの子はあんな眞似ばかりしてゐた」

最後にAさんは複雜な笑ひ顏をして「何にせ、あまり立派なことはしてゐないのでせうねえ」

Sに引かへてAさんの氣質の篤實なことは銀行でも充分に認められたらしいのです。さうしてそこを見込んで世話をする人がありAさんは或る家へ養子に行くことになつたのです。そこは古い神主の家柄で、娘の婿にしようといふのでした。話はめでたくきまりました。Aさんは順序のよい調子で、一人前の人になりつつあるのでした。

AさんはSの徴兵檢査の事に就て大ぶん氣を揉んでゐました。もしそのために呼出されても行方は知れないのだが、それを豫め申し出て置くべきものかどうかといふやうな事を心配してゐるのでした。しかし別に心配するほどの事もなく、Sは自分ひとりの事は自分でちやんとやつてのけたらしいのです。その時期になつても、どこの役所からも何の苦狀も出て來ませんでした。多分は彼の本籍地で大阪から便利な彼等の故郷の地で、檢査をすませたのだらうとみんなは言ひました。小男だから徴兵にはとられなかつたらうとも言ひ、また自分でそれだけの事に氣がついて無事に濟せるや

うならば、まんざらさう後暗いやうな生活もしてゐるわけでもあるまいといふので、この事がみんなに大へんSの身の上に就て安心させました。それにSももう徴兵を受ける年になつたのだから、たとひひとりで放つて置いても今までのやうに心配をしないでもよかつたからでせう、Sの噂はその後だんだん、わたしたちの家族のなかでは少くなつて來たのです。

すると不意に今度はMさんの事に就てみんなは心を痛めなければならなくなつたのです。

七

やはり今ごろ、秋の初め、——いや、もう秋の深くなつてゐたころであつたやうです。或る朝、アメリカで醫者を、てゐるTの小父さん（これはわたしの母の嫂の兄だといつたあの人です）から長い手紙が來たのです。いつもは、そんな長い手紙などをやりとりする間柄でもなかつたのらしいのに。それがそんな長い手紙をよこして、その手紙はまだ封を切らないうちからMさんの事に關してゐるといふことを、みんな豫期したのです。でも、今までは時をりの通信を忘れなかつたMさんが、その頃、あまり長く消息がなかつたからです。

父はみんなにその手紙を讀んで聞かせた。母がわたしにそれをまた話して聞かせた。Aさんが來てまたみんなで話をしてゐた。わたしはそのころもう十三ぐらゐになつてゐたと思ひます。だから事情はすつかりわかつたのです。——それにさう大してわかりにくい話でもなかつたのです。Mさんはアメリカの土地で病氣に罹つて困つてゐたのでした。……

肺病で、それももうよほど惡くなつてゐて、Tの小父さんの診察したところでは一刻も早く國へ歸したい。もし今、歸さなかつたなら永久に歸れぬだらう。それだのにMさんは今、何の蓄へもないので旅費にも困つてゐる。一たいが貢

面目な人で、現場はカリフォルニアの葡萄畑などで働いて、そこで一年の學資をつくると勉強をしてゐた。ただの出稼の勞働者のやうに、酒を飲んで暮したりもしなかつたし、またただ金ばかり蓄へて喜んでもゐなかつた。Mさんの希望は學問をすることにあつたので、それも結構だけれども、この際、どうしても歸らなければならないのに旅費のないのは困つた事である。この土地の日本人同志の會でもいくらかは積立てて助けるけれども、達者な人とは違つて船も上等に乘せなければならない。ちやうどいい船の道件れがある時に、こちらで何もかもいいやうに計らつていいか。電報で差圖を返答して欲しいものだ……

手紙にはどうもそんなことが書かれてあるやうでした。

電報で返事をやつて、それから毎日は殆んど、みんなが集りさへすればMさんの噂ばかりしたものです。

わたしの母は、

「今まであのうちに肺病で死んだ人があつた話は聞かないけれど」

といふと、父は、

「それは血すぢには無くとも、どこでうつらないとは限らない。いづれ以前から惡かつたのに無理をしてゐたに違ひない。――いくら肺病だからと言つて一度にさう惡くもならないのだから」

また母が言ふには、

「あれも親があつたら、あんな遠いところなど出かけて行く氣にはならなかつたらうに。あれも双親に死なれて、兄弟が他人もよそで世話になるのも心苦しいと思つたればこそ、まだ子供心にも、自分が長男だけにどうにか自分だけの力でもし又、家を興さなければ、とあんなことを思ひ立つたのかや――けなげぢやありませんかと思ふと、また一しほ哀れ

が立つて行くうしろ姿を見ると急に氣分が惡くなつたのであつたが……」母は半分はわたしに言つて聞かせてゐるのでした。

「さうぢや」と父は答へた。「あれも出發の時から運が惡かつたねえ」

「どうして」とわたしが尋ねると、母は説明をしてくれました。それによると、Mさんは向ふへついた時に、直ぐに上陸させては貰へなかつたのださうです。何でもそのころ横濱でコレラが流行してゐて、横濱から乘つた客は何週間も船のなかに殘されたまま、なかなか上陸を許されなかつたのです。ところがMさんはその横濱から乘つた組であつたのだと言ひます。神戸の方が近いのだから、そこから乘るのが便利だらうと言つたけれども、Mさんはきつと東京でも見たかつたのであらう。横濱から乘つてさういふ目にも逢つたといふのでした。

「あれが行つたのは、いつであつたかね」と父が云ふと、

「五年前です」

今まで默つてゐたAさんに即座に答へました。

九

ここまで來るといつもわたしは、きまつて、この事に關聯して思ひ出すのですが、そのころ、母の一族が、一家の主人、即ち母の兄に死なれてやはりわたしの父のところへ手頼つて來てゐました。わたしたちの外祖母とそれから母の嫂――つまりMさんのことについてアメリカから手紙をよこしたT小父さんの妹で、わたしたちには伯母に當る人と、それにその人の子でわたしには從兄になるひとりの男の子、この三人でしたが、さうしてわたしがここで特に思ひ出すの

は、あの祖母さんのことなのです。

そのころもう六十五に近かつたらうと思ひます。その祖母さんは年のせゐではありましたけれども、大へん耳が遠くなつてゐました。それ故、非常に大聲で話をする必要があつたのです。みんなはそのためにこの祖母さんと話をすることを嫌ひました。それにみんなの言ふところによるとこの年寄はひどくねつこい人だといふ事でした。（ねつこいといふ言葉は通じるかどうかは知りませんが、謂はゞくどい、わかりの好くない、そのくせ熱心な、といふやうな意味を持つてゐる言葉です。）さうして誰もこの人をあまり話相手にしたがらなかつたものです。重要でもない事柄をくど〱と話つづけなければならぬとすれば、大人にとつては面倒な事であつたでせう。しかし、わたしは子供だつたし、それをこの祖母さんが誰にも話しかけられないのに多少同情してゐたものですから、いつもこの祖母さんの相手をしたのです。

祖母さんは或る日、わたしにMさんのことに就てT小父さんから來た手紙の内容から、Mさんの事情などを詳しく尋ねました。誰か一言教へた人があつて、その人はしかしそれ以上には面倒がつて言はなかつたものと思はれます。その話はわたしにもどうにか説明が出來ましたが、そのうち祖母さんは不意に實に困つたことをわたしに質問し始めました。全く思ひがけない質問でした——世界はまるいものだといふが本當か、と先づさういふのです。それから、そんなことを誰が見たかといふのです。それからアメリカはどの方角かと言つて四方を指さしながら問ふのです。それはわたしには頭のなかではよくわかつてゐるつもりでも、それをこの祖母さんに說き明す方法はどうしても見つからないのでした。そればかりか、そんなことを一たい誰が見たのかと言はれてみると、わたしまでが自分の覺えてゐることが不安になつて來るのでした。祖母さんはわたしの答への不確かなのと、また今までのやうにたくさん口を利かないのとを見て少しづつ不機嫌になりました。多分、わたしもみんなのやうに祖母さんの話をうるさがつてゐるのだと思つたので

せう。しかしわたしはさうではありません。わたしは心のうちでまるいこの上なく大きいものを考へてみて、その上と下とにある二つの國――日本とアメリカとを考へてみてゐたのです。わたしは突然、妙に息がつまるやうに苦しくなつて來てしまつたのです。どうしてだかわかりません。別にMさんのこととは關係なかつたのです。多分、世界があんまり大きすぎると感じたのではなかつたでせうか。

それにしても、あんな年寄りがそれも女が、世界のまるいといふことにあれ程の興味を持つてゐて、それに就てひとりでさまざまに考へてゐたのだと思ふと、今になつてわたしはその事を多少の奇異とするに足ると思ふのです。

十

Mさんから電報があつて、彼は無事に神戸へつき、そこから直ぐわたしたちの家へ來るといふ知らせでした。誰か神戸まで迎へに行かなければならないだらうかと相談をしてゐましたが、その電報ではそれにも及ばないらしかつたのです。（――神戸からでは、一たん大阪へ出てそれからまだその頃では、二十時間ばかり小さな汽船に搖られないことには、わたしたちの町へは來られませんでした。そこは今でも鐵道の便のない紀州半島の尖端なのですから）

町から一里半ほどへだてた港に、その小さな汽船は着くのでした。朝の八時ごろに着く船のフートルの音が、風の都合で町まで聞えます。その朝は聞えたかどうかは知りませんが、Mさんの歸りをわたしたちは待つてゐたものですたしか年の暮で學校が休みになつたばかりのころでした。冬だけれども暖い南國の、その日はわけて穩やかな日でありました。

わたしと母とは父の座敷の濡れ緣にゐました。（その頃のわたしは母とばかり遊んでゐました）

「ゆふべは波はちつともなかつた」

と母は言ひました。庭へ少しばかり日が射して來ました。山の崖のかげになつてゐる父の庭は十時近くにならなければ朝日は射さないのでした。

「もう、來さうなものぢやがな」

その庭の日ざしを見ながら、母はわたしに問ふやうにまたひとり言のやうに言ふのでした。

見知らない人が突然、わたくしの目に入つた。わたしは一瞬間怪しんだが小聲で叫んだ、

「來た、來た。お母さん」

土間から出て來たMさんは、ちよつと戸惑ひした樣子でした。そこは臺所の方へ、また井戸の方へ、それから座敷の方へ、三つ行くところがあつたからです。

わたしの聲を聞きつけた母は、臺所口の方へ行かうとしてゐるMさんを見つけて呼んだ――

「あ、ここぢや、ここぢや」

Mさんはわたしたち親子を見つけて、やつと座敷の方へ氣がついて石段を上つて來ました。格子縞の長い外套を着て、手にはころ合ひなカバンを一つさげてゐました。彼の顏には笑ひがこぼれてゐました。（わたしは今、その時にみた彼の顏を思ひ出すのですが、それは半分ヨーロッパ人化した、さうして美しい品のいゝ顏でした）彼は母にもわたしにもその笑顏を向けて、手のカバンを緣に置くと、再び門の方へ出て行かうとしました。

「何ぢや」

「ちよつと車屋に………」

「おかしいか」
「いや荷物を」
「よし、よし、お前（と母はわたしを見て）行つておいで」
わたしは驅け出しました。車屋はわたしのあとについて一つの大きな重さうな荒木の箱を運んできました。
「何ぢや。えらい重さうなもの？」
「罐詰です――お土産にハワイで買つた。荷物はたつたこれきりです。着の身着の儘で來た」
Mさんは申しわけをするやうに言つた。
「體だけでも歸つてくれば結構ぢや。無事に歸れるか知らと言つてみんなで心配してゐたのぢやが、思つたほどのこともない。お前、見たところなかなか元氣ぢや、血色もよし」
わたしは母の言ふとほりだと思ひました。Mさんは默つて笑つてゐました。それはAさんによく似てゐてMさんもやつぱり羞づかしさうな笑ひ顔です。急にMさんは眞顔になりました。
「ほんとうに小父さんにも小母さんにも、何から何まで御心配をかけます……」
「そんなことはどうでもええ。――でもお前せつかく歸つて來てもHさんは死んでしまつたし、Sはまた行つたさきがわからぬし」
Mさんそれには答へませんでした。さうして言つた「アメリカでもみんなに世話をかけました。Tの小父さんにもその外の人にも、……」
わたしは、Mさんと母とが早くそんな話をやめればいいと思ひました。

しばらく默つてゐてから母はMさんに言ひました「よく太つてゐるぢやないか。でもをかしいね、片方の頬より片方がこけてゐる――お前の顔はゆがんでゐるね。」

「ハ、ハ、ハ」とMさんは小さな聲を上げて笑ひました。さうして片方の頬をさして「歯が悪いので――こつちは奥歯がないのです」

「船の中は困りはしなかつたかい」

「アメリカの船より、大阪からの船の方が困つた」

「浪は無かつたらう」

「でも、小さいからね、船が」

母は思ひ出したやうに言ひました「小父さんのところへ行つておいで。さうして序に顔を見せておいで。心配して待つてゐる――病院の方で今、診察してゐるから」

Mさんは石段を下りて病院の方へ行きましたが直ぐまた引き返して來ました。「今、患者が澤山ゐる。も少しして行きます。ちよつとお辭儀だけして來ました」

わたしは母とMさんとがまた何か、聞いてゐて悲しくて困るやうになることを話し出しさうに思つたので、庭の遠くの方へ離れて行きました。しかし母は、御飯の用意でもするつもりか、臺所の方へ行つてしまつて、Mさんはひとりになるとわたしのゐた庭の葉の枯れた楓の下へ來ました。

「大きくなつたね――學校は、中學校?」

わたしは頷いて「今年入つたばかり。――Mさんもアメリカで學校にゐたのぢやつて。どんな學校?」

「ヘイスクウル――日本の中學校みたやうなものだね。こんな大きなからだをしてあなたより少し大きなぐらゐの子供たちと一緒にならつてゐた。ね、アメリカの子供は小さな子でもスピイチをするよ。上手だ」

「スピイチつて何？」

「演說。――學科のうちに演說があるんだからね」

その時、白い診察着の父が診察室の廊下へ現はれました。そこは庭からもよく見えるところでした。彼は大きな聲で「M、M」と叫びながら、Mさんを手招ぎしました。

十一

その日お晝の御飯の時に、父と母との問答をしてゐるのを聞いてわたしは、Mさんの病氣は見かけはあのとほり元氣がよくとも、餘程惡くなつてゐて今すぐどうといふことはないまでも、直る見込はまづ覺束ないらしいといふことを知りました。

「子供たちも用心をしてあまり近づけない方がよい」

父はさうも言ひました。それをまた母がわたしに言ひ聞かせました。

Mさんのくれたお土産の罐詰といふのは、パイナプルでした。

「これはアメリカ土産に似合はずおいしい」

父がさう言つて、みんなは笑ひました。いつぞやのチョコレートやトマトを、わたしたちは思ひ出したからです。

罐詰の大きな木箱は一ダース入のものでありました。その箱のなかからわたしは罐を一つ一つ取出してみてゐまし

た。するとそのなかに一つ、罐の上下がぽこんとふくれ上つたのがあつたのです。父はそれを見て、それは腐さつてゐるのだと教へました。わたしが何氣なくそれを振つて見ると、その中では何だかポコ〳〵と鳴つてゐるものがあるのです。これはどういふわけだらうと尋ねると、父もわからないと言ひます。一つ開けてみようといふことになつて、わたしがそれに罐切を立てた瞬間、みんなは一度に顔をそむけたのです――何とも言へないいやな臭ひでした。

「や、これは大變ぢや。どうしたのだらう」さう言つて父は顔をしかめながら、向ふへ持つて行け、といふしるしに手を振つてみせたのです。わたしは父の言ふとほりに遠くへそれを持つて行きました。そこへ置放して來たのです。

「やつぱり、これもアメリカ土産ぢやつた」

父はやつとしてから、さう言ひました。さうしてさつきの臭ひを忘れると一緒に、何がそんな臭氣を出したか、それをわたしも父も確めて見たくなりました。母はやめよと言つたけれども、わたしたちは思ひとまりませんでした。もう瓦斯もきつと大ぶん散つてしまつたらうからと父がいふので、わたしはもう一度あの罐を拾ひ上げて、まだ臭かつたけれども我慢をして開けてみました。わたしはやはりさつきの罐と同じやうに、中には一ぱい何かが這入つてゐるものと豫想したのに、この臭い罐のなかには臭氣の外には何も無いやうに見えたのです。

「何も無い」

「何も無い？」

父は鸚鵡返しにさう尋ねて、濡縁から下りて庭へ來たのです。父は覗いてみて何かあると云ひました。さうしてわたしにさつき使つた割箸を持つて來させたのです。父はそのなかから何かをつまみ上げたと思ふと、

「いや、これはいかん！」

さう言ひながら、箸と一緒にもとの罐のなかへ押し込んでしまひました。

「お父さん、何ぢや？」

「指ぢや、人間の指ぢや！」

さう言へばわたしもそんなもの丶やうには見た。

「誰がそんないたづらをしたのだらうか」

母がさう言ふと、父は

「馬鹿な。誰が自分の指を切つてそんないたづらをするものか」

さう言つて。わたしと母との爲めに機械工場の説明をしました。この腐つた罐詰をつくるために、誰か片輪になつた人があつたのだといふことは、直ぐわたしたちにのみ込めました。でも、父の病院へも時折、木場の機械で手や足を切られた人が擔ぎ込まれて來る事があつたからです。

父はわたしに命じてその腐つた指をどこか裏の方へ埋めて來いと言ひました。わたしは例のトマトや、雞の鳥屋(とや)などのある裏の空地へ埋めました。そのついでに、窓ごしにMさんと二言三言話しました。

Mさんは一時、この空地の片隅にある離れにゐることになつたのでした。前には祖母さんが住んでゐたところです。わたしは父母からはとめられてはゐましたけれど、Mさんと話をしたいと思つてゐました。アメリカの話を聞きたいと思つたのです。Mさんがいつかくれた繪ハガキにあつた怖ろしい程高い建物や…………その幹の眞中をくり拔かれてその間を馬車が通つてゐるのに枯れもせずにゐる巨きな樹や……

さう思ひ立つとわたしはMさんの部屋へ這入つて行つたのです。Mさんは笑顔でわたしを迎へました。しかし、あん

まりいろんな話はしてはくれませんでした。わたしも思ふとほりに尋ねることも出來ませんでした。そのうちにMさんは、朝來た時に手に提げてゐたカバンのなかから一つのおかしな胡弓をとり出したのです。Mさんはアメリカの歌を彈いて聞かせるといふのでした。全くおかしな胡弓でした。その胴は小さな罐詰の罐の蓋と底とをとつてしまつて、その上に油をひいた雜學紙を貼つてありました。さうしてそれに皮のついたまゝの木の枝をすげて、そこに絃を引つぱつてゐました。

「これ、僕が自分でこしらへたのだよ」

Mさんはさう言つて笑ひ顏で、それを彈き始めました。上手なのだか下手なのだかはわたしには一向わかりませんでした。それにわたしの知らない節ばかりでした。わたしは別に面白いとも思はないで、默つて聞きながらそれを熱心に彈く彼の顏をぢつと見てゐたのです。初め笑つてゐた彼の顏は、そのうちにだん〳〵笑はなくなりました。さうして時時、わたしの方に注意をしてゐた彼の目はだん〳〵わたしを忘れたらしく、疊の上の一ところばかり見つめてゐました。いつまでもひとりでそれを彈きつゞけるのでした。Mさんは、ふと氣がついたやうに彈く手をやめてわたしの方をふりかへつて、弓を持つてゐた二本の指を弓の上で動かしながら、

「この弓の竹はね、こんなつまらない竹だけれど手に入れるのに隨分骨を折つたのだよ。わざ〳〵日本から送つて貰つたのだよ。アメリカには竹がないのだから」

それはほんの竹箒の竹よりいくらか太いぐらゐなものです。

Mさんはわたしにさう言つておいて、未だその弓を置かうともせずにまた彈き初めるのでした。わたしはそれをしないに、そこから出て來たのです。わたしは三十分あまりもそこにゐたでせう。

「お前、Mさんのところにゐたね。さつき言つて聞かせたのに」

母は、わたしが歸つた時にさう言ひました。

「うん」わたしは正直に「少しぐらゐなら構はんと思つたもの」

「少しぐらゐなら構はぬ」案外にも父は叱りませんでした「――Mさんは何をしてゐた？」

「Mさんはね、胡弓を彈いてゐたよ」

「胡弓を？」

父と母とは一緒に尋ねました。そこでわたしはMさんの珍奇な胡弓の噂をしました。それからMさんは咳を吐き出さずに咳み込んでしまふことを思ひ出して、その事をも話しました。

「Mが彈いてゐたのかい。さう聞けばさつき何やらそんな音がしてゐた」

母はさう言ひました。

「まだ彈いてゐるらしいわい」

父がさう言つたのでみんな耳を澄せました。なるほど、その音が遠い裏の離れから、靜かな初冬の空氣をふるはせて漏れ聞えて來てゐるのでした。

十二

Mさんは、それから一時大へんよくなつてゐて、それで一番末の弟Tが養はれてるN家の近くに、雞を飼つて暮してゐましたが、二年（？）經つてやはり冬の初めに死んでしまひました。わたしが最後に彼に逢つたのは、何でもその年

の夏で、痩せて背の高い彼は道の眞中で杖をついて休んでゐました。わたしは散歩の途中で出會つたのです。病氣見舞を云ふと只ありがたうと答へた。さうして久しぶりだからわたしの家へ行つてみるつもりで家を出たと言つてゐました。死んだ時、Mさんは、さ、二十六ぐらゐであつたらうと思はれます。

――一たい今までの話で、今氣がつくと年齢に關することはみな不確です。だからその點きつとちぐがありませう。古い事ではあり、それに第一わたし自身が未だ本當には自分の年などを自覺しない頃のことばかりなのですから。でもこれから後の出來ごとは、づつと後の事だからはつきとします。

十三

年が經つてわたしは二十四になつてゐました。わたし自身の身の上を話すのが目的ではないし、また甚だ話し榮えのしない事ばかりなのですけれど、順序として手短かに言ひますが、わたしは十五六の時から年をとるとともに益々父母のいふことを聞かなくなりました。泣きながら父は屢々、竹や弓の折れなどをもつてわたしを折檻したものです。中學の三年ごろには、郷土出身の徳望ある先生が、わたしを學校の教員室へこつそり呼んで、わたしの家の歴史を説いてくれてから、

「君がもし今日のとほりで成長したとしたら、たゞ一身をあやまるばかりではなく、このとほりの地方の名聲ある舊家の裔か汚名を殘さなければならないのだから、君ひとりの心得違ひのために、名聲があるだけに、家の恥は一そう大きいわけなのだ。それを思ふとわたしはこの地方の人間として默つて見てゐるに忍びないから、今日は、たゞ學校の教師としてではなく……」

と言つて、本當に涙を流してわたしを叱つてくれたのでしたけれども、わたしはただ俺のうちは何かそんな面倒な家かな――まさか殿樣でもないのに、といふぐらゐな氣持でそれを聞くわたしになつてゐました。それが益々嵩じてしまつてわたしは二十ごろにはもう勝手放題を振舞ふ息子になつてゐたのです。わたしが藝術といふえたいの知れないものに耽るかはりに、もし賭博が好きであつたならそれこそもつと立派なならず者の見本であつたでせう。さうして人から物を掠めない代りには何かと理窟を考へ出しては父母の金をかすめてゐたものです。さうしてわたしは東京で食ひつめると、家へ歸つて行つたものです。これから話さうとするちよつとしたエピソードもやつぱり、さういふ機會でわたしが古郷にゐた時の事だと知つて貰へばいいのです。

その時、わたしは女をつれて歸つてゐました。父はもうすつかりあきらめて、わたしが何をしても見て見ぬふりでした。母はただもう家の人にも世間の人にも肩身をせまくしてゐるばかりでした。わたしはまたわたしで古郷でやけに茶屋酒を飲んで遊んだりしてゐたのです――東京からは女をつれて行つてゐながら。その時わたしは金に困つて、或る高利貸から金を借りるために連帶保證人の候補者にAさんを擇んだのです。Aさんはその間の十年をむかしながらに銀行に勤めてそこで重要な椅子を占めると一緒に、うちでは賣藥の商買を始めて、もう充分に社會の信用を持つてゐる人物になつてゐました。彼は銀行では金庫の鍵を司つて、また何十萬といふ紙幣を銀行の爲に持ち運びするやうな仕事さへ常に委されてゐたのださうです。金貸はAさんの裏書きを大へん喜んだ筈です。Aさんはまた理財の才があるし、堅實な質素な人だといふ噂でした。或る時かういふ事もありました。

或る料理屋で、わたしはやはり遊んでゐたのです。すると隣りの大きな座敷で十人ばかりの客が酒を飲んでゐました。何でも忘年會の二次會か何かで、それは銀行員たちであつたのです。その人たちがAさんの噂をしてゐました。

れをわたしは話の中ごろから注意をしたのだけれども、何でもひとりの人はAさんをけちな人だと言つてゐるし、別のひとりはそれを辯護してゐるのでした。しかし一座のみんなの口調ではみんな前者に贊成したらしいので、しかしみんな一樣に外の點ではAさんに敬服してゐるらしい口吻でした。「ケチの頭取、未來の支配人さ」誰かが濁聲でそんなことを大聲で言つてゐるのも聞えました。その翌日わたしは家で、母にその話を（無論、どこで聞いたともそれは言ひませんでしたけれども）すると母はわたしの方へむつかしげな顏をむけて、わたしをたしなめました。

「Aさんは、お前などとは違ふよ。子供の時分から他人の間で苦勞して來てゐる。金の有難味はしみ込んでゐる人ぢや」

わたしは浮つかりくだらないことを言つてしまつて母からきめつけられたわけなのです。それはそれとして、わたしはたうとう思ひ切つて、Aさんに借金の裏書きを頼まうと決心しました。さうして或る夕方、こつそりAさんの家へ訪れたのでした。わたしの用向きを聞くと、Aさんは困つたらしい顏をして言ひました。

「考へてみませう。――それにわたしは御承知のとほり養子の身分ぢやから、家内にも一應相談してみなけやなりません……」

わたしはほんの二百圓かそこらの金だのにと思はぬではありませんでした。それから、これは多分駄目だと考へました。けれどもAさんは結局は引受けてくれました。すると、それから間もなく、Aさんは私の家へ來たのです。――これは別に少しも珍らしい事ではなかつたのに、そんな内緒の事を頼んであるわたしは、Aさんが家へ來たのを見て、ひやりとしたのです。さうしてまさかとは思ひながらも、Aさんが母と話をするのを番をしてゐたのでした。

十四

Aさんは、母とわたくしとに輕く挨拶をすると、いつものやうな羞づかしさうな笑ひで、それに語尾の妙にもつ[illegible]調子の聲で言ひ出したのです——

「小母さん。Sが歸つて來た……」

「Sが？　どこへ？　あなたのところへか？　どうして？」

母が悸いて疊みかけて尋ねるのを、Aさんは首をふつてゐました。（この動作は何となく幼けないやうな擧動で[illegible]れは先夜、わたしが訪ねて行つた時のあのなつかしい顔をした人とは別人のやうでした。わたしはそれをAさんの[illegible]しの母に對する親愛だと思ひました。）

Aさんの言ふところに憑るとかうでした。

——Aさんの銀行に勤めてゐるM氏といふ人は、もとの支配人の息子ですが、その人はSの友達でした。それが昨日父の命日で墓詣をすると、ひよつくりSに出會した。Sもやつぱり墓參をしてゐたのださうです。さうして、いろ〳〵と話をして兄のAが銀行にゐるといふことをM氏から聞くと、SはM氏に言傳をして一度どこかでAに會ひたいと申し込んだといふのです。

それでAさんは會つてやつたものだらうか、どうか、それをわたしの母に相談に來たのでした。

「さ」母は答へました「一たい、何を商買にしてゐるちやらう？」

「それがをかしいので」Aさんは笑ひ顔になりました。いつもの何となく羞づかしげなのではなく、その上にははつき

りと苦笑の影を投げてゐました「――活動の辯士だつて……。今度、來た活動へついて來たのだつて……」

母は默つて一種わたしの母に特有な身振りで――それはちよつと言ふことが出來ないけれども、見なれたわたしたちには愛情を持つた叱責や、苦々しさうな許可や、さういふものを同時に表はした笑ひだといふことがわかるのです。しかし、母はわたしの方に目をくれながら言ひました。

「何でも構ふものかのう。自分で口すぎが出來てさへゐれば結構ぢやないか。自分で食べる事も出來んやうな子を持つてゐながら、そんなことを言つて笑へるものか。惡い事さへしなけや好してしよう――あんなに子供の時からひとりでうろついてゐたのだもの。ね」

Aさんは默つてゐました。また笑ひもしませんでした。一つには感慨があつたらうし、また一つには母の言葉に對してわたしに氣を兼ねてもゐたのでせう。

それから母とAさんとは次のやうなことを言ひ合つて相談するのを、わたしは默つて聞いてゐました。

「さういふのならば逢つてやるのがよいではないか」

「でも、小父さんがしかりはしないでせうかねえ」

「さ。でも、何もあんた、叱るやうなわけもないではないか。ぢや、一ぺん、どんな者になつてゐるか逢つてみるまでは、どこのうちへも入れない方が、――それはその方がええ」

「さう。さうしたらどこがいいか知ら。……池のそばの道かどこかで待たして置かうか知ら、明日歸りがけにでもそこで逢ふやうに――どうでせう」

「それがよささうぢや」母は贊成した「あそこなら人どほりもないわい」

どうもさういふことに決めたらしいのです。それから母がまた言ひました「それでもちかにどこへも來ぬところを見ると、やつぱり自分でも氣兼ねはしてゐるのぢやね」

「さ。それぐらゐなら一そ、もう初めから町へ來なけやよささうなもので……」

「でも、ひさしぶりぢや。來ても見たかつたのであらう――もう十五年にもなるかいな」

「それぐらゐになる」

Aさんは永話はせずに歸りました。

その日は一しきりみんなでまたSの噂をしました。尤も父のゐるところではみな默つてゐました。父が世間體が悪いといひさうだからです。みんなのうちで一番、この事に興味を持つたのは、むかしよく彼と口喧嘩をしたわたしの母でした。

翌日になるとAさんは笑ひながら、またわたしの家へ來ました。道順でもあつたし、今から逢つて來ると言つて知らせに來たのです。「池のそばの道」といふのは、城のお堀に沿うた山かげの道で、わたしたちの家の藥局の窓から見えるところでした。叔母は彼等が逢ふところを見ようといふので、先刻からその室へ行つてゐました。わたしも、それを見たいといふ好奇心がありました。藥局へわたしが這入つて行くと、叔母は云ひました。

「もう來てゐるらしい。さつきから木の影をあちこちしてゐる男がゐるよ。きつとあれに違ひない。――お前、遠目鏡をさがして來んか」

わたしにはこの叔母の無邪氣な樣子がまた面白かつたのものです。わたしは双眼鏡を搜し出して來て彼女に見せ、わたし自身も見ました。確に、ひとりの男がゐて、木の間がくれにチラ／＼と見えるのが、あちらに行きこちらに行きし

て人を待つてゐるに違ひありません。けれども顏までは充分見えませんでした。そんなことをしてゐるわたしたちを見上げながら、Aさんは笑つてわたしたちのゐる窓の下の低い道を辿りました。わたしは言ひました――

「Aさん。よろしく言つて下さい。――さつきから來て待つてゐるらしいですよ」

Aさんは頷づいて、もう一度笑ひ直しました。わたしたちから遠ざかるに從つてAさんは益々足を早めるのです。眼鏡で見てゐると、AさんとSとは別に、お辭儀らしいものは交しませんでした。AさんのあとからSがついて行つて、彼等は直ぐに道を曲つて見えなくなりました。

十五

その翌日、Aさんが來てSに逢つた樣子を母に報告した樣子でした。母がさう言つて一度、父のゐない時にSが尋ねて來ました。わたしも留守をしてゐたのでその時はSを見ませんでした。叔母は「何でも、そんなものになつてゐるに違いないと思つたよ」といつか役者にでもなつてゐる事だらうといつた彼女の說が、よほど當つてゐたのが自慢で、もの好きにも一度Sがどんな事を言ふか聞いてみたいと言ひ出したものです。

叔母はひとりではきまりが惡いからといふので、わたしの妻K子（?）とそれに小さい女中のひとをつれて或る晩、たうとう出かけて行きました。

歸つて來てから叔母はわたしに小言を云ふのでした――

「ほんとうに今夜のやうな思ひをしたことはないよ。それでなくてさへわたしは太つて（彼女は二十貫ありました）ゐるから人が見るのに、Sがまたやめてくれればよいことに、わたしが行つたことをどこでどう見つけたものか、きつと

ものだから、暗氣をつけてみるところへ、K子とUとが、また活動が初まると、品の惡いベチヤクチヤ〳〵、それあれがどうなるのかうなるのと、もう一分とは默つてゐないものだからもう、わたしは小屋中の人に顏を見られてゐるやうで、やれ〳〵こんなところへどうして來たらうと思つて……」

叔母の小言が盡きさうにないのを母が取りなすやうに笑ひながら、

「あんたが物好きにそんなものを見に行くからさ。――で、Sはどんなことはしてゐのだい」

「ふむ、あれがさ」と叔母はこの人の癖で今までの調子はけろりと忘れて「あれが、女型(をんながた)の聲を出すのぢやよ。ふた、上手ぢや。――わたしは顏が見えるのかと思つたら、顏も何も見えぬ。暗いところのかげで言ふのぢや。あれならたひこの町へ廻つて來ても自分さへ言はなけや誰も氣がつかんのう」

その後二三日して、わたしは町を歩いてゐました。そこは停車場（この町から港へ出る短い私設線の）へ行く道た。汽車の時間と見えて、人通りが多いやうでした。わたしはそれらの群集と反對に歩いてゐました。ふと擦れ違ひさまに何氣なく見上げたその男がSでした。先方でも、あの小さな丸く光つた目で、ぢろりとわたしを見たものです。さうしてわたしたちは行き過ぎてしまつたのです。行き過ぎた瞬間にわたしはSだと氣がついたのです。念のためにもう一度ふり返つてみると、その男の前の方には今まで氣がつきませんでしたが樂隊の喇叭や太鼓などを持つた男も行き過ぎて居るのでした。彼等はもう今この町を立去るところと見えて、手ん手んに何か荷を持つてゐました。Sは外に持物とてもないのか、赤いメリンスの座布團（それは叔母にすすめたものに相違ない）を二つに折つて、それだけを小脇にかかへてゐるのでした。そんなものを見てゐるうちに彼はもう十間ばかり行き過ぎてしまつたのです。わたしは聲をか

けようかと思つたがやめました。しかし、一旦はやめたけれども、先方もわたしをちろりと見た事を思ひ出すと、わたしは彼がわたしを認めたに違ひないと思ひました。もしさうだとすれば彼はわたしが聲をかけないのを不滿に思ふだらう——不滿ばかりではない、ひがんで解釋するかも知れないとも思つたのです。さう氣がついた時わたしは呼びました。

「Sさん！」

しかし彼には聞えぬらしいのです。わたしはもう一度聲をかけました。

「Sさん！」

やつぱり聞えないらしいのです。さう言へばもう一町以上もお互に遠ざかつてゐるのです。わたしは彼を追うて大聲を出しました。さうして三度叫びました。やつと彼の耳に入つたらしく彼は立ちとまつてふりかへりました。しかしわたしには氣がつかぬらしく怪訝さうにまた歩かうとしだしたのです。その間にわたしはもう一度呼んで彼に近づいてゐました。彼は立ち留つて、解らぬらしくわたしを見上げました。

「Sさん。わたしぢや——Hです、Sの」

「ひやあ！　Hさんか——ひやあ。變つたねえ。ひや、すつかり見違へたねえ」

わたしは兄弟のやうな幼友達の聲と口調とに全く驚かされたのです。彼は全く映畫のなかの人物のやうな口調でその聲と言つたらほんとうに男の聲とも女のものともつかない一種の鳴りものの音でした。それが彼の小さな、さうして一癖ある面魂と——さう、調和があると言つたものでせうか。無いと言つたものでせうか。わたしはその姿を見た時には少しも愕かなかつたのに、聲を聞いて始めて呆然としました。彼もわたしを始めて認め得たらしく、呆然としてゐました。

「ぢや、ごきげんよう」

しばらく顔を見合せてゐてから、わたしはやつとさう言ひました。

「いやあ！　ごきげんよう」

鳴り物の聲が答へました。

彼も行きすぎるわたしをも一度ふりかへつて頭を下げました。小脇の哀れな荷物を抱へなほして急ぎ足で行くその後姿を、わたしはしばらく見かへり見かへり歩きました。その赤い座布團のなかには、タオルの端が現はれ、またそのにシヤボン箱のニツケルが光つてゐるのを、わたしはさつき見たのでした。

「何デモイイ、早ク人ノ頭ト呼バレル者ニナツテ、小父サンニモ一度オ目ニカカリタイモノデス」

Sが港の町から、わたしの母に當てた禮狀のなかには、そんな事も書いてありました。その後、十年間、わたしは一向Sの消息を聞きません。

Aさんは、事實、今に銀行の支配人になるでせう。年とつてしまつたわたしの病父と母とは、いつも他郷にゐて世事には一向疎い息子ばかりを持つて、家政上の事ではいつでも何事にもAさんばかり力にしてゐます。安んじて後事を託すべき人と思つてゐるのです。



定價

毎月一回一日發行

定價	送料
一冊 八十錢	參錢
六冊 四圓八十錢	送料共
十二冊 九圓六十錢	同

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一册に付十六錢申受けます

△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい　郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

大正十五年八月二十日印刷
大正十五年九月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　高野敬錄
印刷人　高木島三
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社　秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區
中央公論社
電話牛込五〇八九番
振替東京三四番
同　長[illegible]三二〇五番


滋強飲料
カルピス
カルピスの一杯
萬斛の涼味

GHUO KORON (*The Central Review.*)

THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co, Published Monthly.

Terms of Subscription : Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.



秋が立初めました

……秋の御支度は品が良くて値段の廉い三越へ……

朝夕の涼風に、爽かな秋は立初めましたそろ〳〵秋の御支度遊ばす時節で御座います。三越では、其の御用意の爲め、今秋の新しい流行品と實用品又御子樣方の新學期用品等澤山に取揃へました、何卒御用命の程願上ます

◆巴里の婦人子供洋服裁縫師を招聘◆

この度當店でモルパン女史を迎へました女史は生粋のパリジヤンで、十數年間流行の中心巴里に於て技術を磨かれた斯界の權威で御座います其の冴えた腕前は必ずや皆樣の御期待に添ふことゝ信じます何卒御用命のほど御願ひ申し上げます。

東京市 三越呉服店 駿河町